岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（14）

中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査

8

1977・3

岡山県教育委員会

岡山県教育委員会文化課

序

岡山県教育委員会では，中国縦貫自動車道の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を，昭和44年以来実施してきましたが，昭和51年10月をもって終了しました。その間，約8年間に，75の遺跡を調査しました。それらの遺跡から出土した遺物は，膨大な量に達しております。しかし，そうした多くの遺物を出土した遺跡も，一つ一つを見ておりますと，同じものは一つとして無く，すべてがそれぞれに特色を持つものばかりであります。

中国縦貫自動車道に関係する現地での発掘調査は完了しましたが，その報告書の作成は，まだすべてが終了しておりません。現在までに7冊を上梓してきましたが，ここに第8分冊が上梓の運びとなりました。今後さらに数冊の刊行を予定しております。本報告書の作成にあたっても広く皆様方の期待に沿うべく努力したつもりでありますが十分には意を尽していない点も多々あるかと思います。その点は，関係各位の御高覧を願い，御叱正を賜わりたく思います。また，本書が岡山県北部地方の歴史究明にあたって幾分でも役立つことが出来ますれば，望外の喜びとするものであります。

末筆ながら，発掘調査の実施にあたりましては，日本道路公団，ならびに中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会をはじめ，関係市町教育委員会，その他関係各位よりいただいたひとかたならぬご協力とご指導に対し厚くお礼を申し上げます。

昭和52年3月

岡山県教育委員会

教育長　小野啓三

例　　言

1. 本調査報告書は，日本道路公団の委託により，岡山県教育委員会が実施した中国縦貫自動車道建設用地にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要である。
2. 岡山県内の発掘調査は，第一次整備区間と，第二次整備区間に分れ，第一次整備区間では，25遺跡あった。昭和44年３月久米郡久米町久米廃寺に着手して以来，昭和48年６月30日英田郡作東町高本遺跡の調査終了まで，４年３ヵ月を要した。この調査に係る報告書は５分冊に分け刊行した。
3. 第２次整備区間は50遺跡あった。発掘調査は，昭和51年10月に完了し，報告書も，逐次刊行の予定である。本報告書は，通巻第８分冊である。
4. 中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会は，昭和42年５月，岡山県考古学研究者の会からの申し入れに基づいて設置した。昭和51年３月現在，対策委員に下記の諸氏を委嘱している。

勝央中学校教諭	浅野克己	（昭和47年11月～）
岡山大学教授	近藤義郎	（昭和47年11月～）
津山みのり学園	植月壮介	（昭和44年４月～）
院庄小学校教諭	土居徹	（昭和44年４月～）
津山高等学校教諭	宗森英之	（昭和47年11月～）
津山市文化財保護委員	渡辺健治	（昭和44年４月～）

5. 調査は，岡山県教育委員会文化課（昭和44年度は社会教育課）が，埋蔵文化財保護対策委員会の助言をうけて実施した。

以下年次ごとに構成員と，調査遺跡名をあげる。なお，昭和44年度～昭和49年度の構成員，調査遺跡名については既刊第１～６分冊を参照されたい。

昭和50年度

中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は，本年度から新見市以西の各遺跡についても着手することになり，距離的に見ても行政上から見ても津山教育事務所が担当することは困難となった。文化課，津山，高梁両教育事務所が協議した結果，48年度からの継続調査中の遺跡については津山教育事務所で，岩倉遺跡以西については高梁教育事務所でそれぞれ担当することとなった。なお，旦原遺跡から青地遺跡までの報告書作成のための整理は津山収蔵庫で行なった。このため，調査員は文化課に配置換え（高梁教育事務所兼務）となり，48年度から継続調査中の遺跡担当調査員は終了するまで，および報告書作成担当調査員は一定期間（1.5～３ヵ月）津山教育事務所兼務となった。

文化課

文化課長	小林孝男	
参事	富岡敬之	
〃	西口秀俊	（課長補佐二係長事務取扱）
主任	光吉勝彦	

文化財保護主事	葛原克人	山磨康平	正岡睦夫
	下沢公明	岡田　博	高畑知功
	井上　弘		
主事	田仲満雄	二宮治夫	浅倉秀昭
	竹田　勝	福田正継	友成誠司

津山教育事務所

所長	菱川　豪	
次長	吉田賢吾	
主幹	田中篤周	（庶務係長事務取扱）
主任	大山行正	
主事	山本政昭	

高梁教育事務所

所長	田井治太郎		
次長	小林克己		
主幹	守屋　明		
庶務係長	小野茂正		
主事	丸尾洋幸	酒井恭二	藤井守雄

調査遺跡名

谷尻遺跡，桃山遺跡（共に48年度より継続），空古墳，下熊谷宮の奥古墳，岩倉遺跡，岩倉古墳群（共に前年度より継続）宗金遺跡，横見古墳群，横見墳墓群，新見庄関連遺跡（二日市庭址，祐清塚），谷内遺跡，迫三方塚古墳，新市谷遺跡，古坊遺跡，岩屋城址，安信古墳群，塚谷古墳，山根屋遺跡，中林遺跡，野田畝遺跡，西江遺跡，二野遺跡，光坊寺古墳群，土井遺跡，土井城址，塚の峰古墳群

昭和51年度

文化課

文化課長	小林孝男		
参事	西口秀俊	（課長補佐事務取扱）	
文化財二係長	光吉勝彦		
文化財保護主事	伊藤　晃	山磨康平	正岡睦夫
	下沢公明	井上　弘	岡田　博
	松本和男		
主事	田仲満雄	浅倉秀昭	竹田　勝
	福田正継	中野雅美	友成誠司
	岡本寛久	内藤善史	秀島貞康

高梁教育事務所

所長	田井治太郎	
次長	小林克己	

主　幹　守屋　　明　（庶務係長事務取扱）

主　事　丸尾洋幸　酒井恭二　藤井守雄

調査遺跡名

桑原遺跡，宗金遺跡，岩屋城址，門前中屋古墳，佐藤遺跡，山根屋遺跡，道上古墳，西江遺跡，横田東古墳群，横田遺跡，藤木城址，大倉遺跡，忠田山遺跡，御供川遺跡，四日市古墳，清水谷遺跡，塚の峯古墳群，二本松遺跡，岸本下遺跡，岸本城址

6. 本書に用いたレベル値は，海抜高である。

7. 本書に掲載した地形図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の50,000分の1の地形図を複製したものである。（承認番号）昭和52年中複，第70号。1/1000の地形図は，日本道路公団のExpressplan，をトレースしたものである。

8. 本報告書で用いる時代区分は一般的な政治的区分に準拠し，それを補うために文化史区分と世紀を併用する。

9. 各遺跡調査地周辺の地元の人々，また，新見市，神郷町，哲西町の各教育委員会には，有形無形の協力を得た。

石材については，岡山県教育センターの上野等氏の御指導と御教示を得た。

資料　中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実施遺跡一覧表

(1975.7～1976.10)

	遺跡名	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積	主な調査員	概要
33	空古墳	上房郡北房町大字下呰部空	1975. 7.14 1975. 8.20	1		田仲	横穴式石室，出土遺物，装身具（金環５・勾玉４・管玉２・錬り玉４），鉄器（鏃24・刀子６・ノミ５・その他４）須恵器（横瓶２・壺２・把手付碗１・平瓶４・提瓶８・腿３・高杯13・杯48・蓋４）土師器（壺３・杯１・高杯２）貝殻，石室下及び墳丘内の遺構，遺物（弥生時代中期のピット及び土器，押形文土器片）
37	下熊谷宮の鼻古墳	新見市下熊谷字宮の鼻461	1975.11. 6 1975.11.12		桑原遺跡に含む	伊藤	丘陵先端に存した箱式石棺，１基，工事中に発見されたため，墳丘，周溝等不明 石棺内より人骨頭部片のみが出土，石室は用地外へ移築
38	桑原遺跡	新見市桑原	1976. 7.19 1976. 8.24	1	50㎡	内藤	小石積の塚１ 寛永通宝等古銭多数，特殊壺片
39	岩倉遺跡 岩倉古墳群		1974.11.13 1975. 8. 5	9.5	700㎡	浅倉 岡田	遺構，横穴式石室墳３，竪穴式石室墳１，箱式石棺11，石蓋土壙２，土壙墓１，火葬墓１，竪穴式住居址６，窯状遺構４，溝状遺構，列石遺構，土壙，ピット，その他，縄文式土器（後期），弥生式土器（前期，中期，後期）土師器，須恵器，備前焼，黒曜石石鏃，サヌカイト石鏃，石庖丁，紡錘車，砥石，鉄鏃，鉇，釘，刀子，鉱滓，金環，玉類，人骨
40	宗金遺跡	新見市西方宗金	1976. 3 1976.10. 7	7	3,000㎡	井上 内藤 浅倉	古墳２，土壙，土壙墓，住居址４，中世の建物址，弥生式土器，須恵器，土師器，青磁，白磁，鉄滓，銀環
41	二日市場遺跡	新見市西方上市	1976. 1.19 1976. 2.10	1	祐清塚に含む	岡田 浅倉	平野部のグリッド調査，柱穴，土壙，陶磁器，古銭，須恵器，土師器，鉄滓
42	横見古墳群	新見市西方横見	1975. 8. 6 1975.12. 5	4	2,600㎡	岡田 浅倉 田仲	方墳１，（石列を外部施設としてもつ）円墳１，（玄室の１部のみ）須恵器，土師器，鉄器，人骨，玉類，石帯，古墳に伴わぬ遺物，縄文式土器片，弥生式土器，土師器ほか
43	横見墳墓群	新見市上市横見	1975. 4. 1 1975.12.16	9	2,600㎡	下沢 友成	弥生時代後期～古墳時代中期，13基の方墳石室墓９，箱式石棺墓17，木棺直葬墓109，石蓋土壙墓６，中世墓１，近世墓10，その他
44	谷内遺跡	新見市西方谷内	1975.10. 6 1976. 2.17	5	945㎡	岡田 田仲 浅倉	火葬墓３，土壙墓１，炭窯１，遺跡，須恵器，蔵骨器，土師器蔵骨器，土師器ほか
45	祐清塚遺跡	新見市西方谷内	1976. 1.19 1976. 2.10	1	50㎡	岡田 浅倉	１次調査は文献調査班による，グリッド調査を行ったが埋葬に関わる遺物，遺構は確認できなかった
46	迫三方塚古墳群	神郷町下神代	1975. 9. 3 1975.11.30	3	678㎡	竹田	横穴式石室１，須恵器，土師器，大刀，刀子，シスト１，住居址３，弥生式土器
47	新市谷遺跡	阿哲郡神郷町新市	1975. 7.16 1975.12.	5	800㎡	井上 竹田	住居址16，貯蔵穴３，土壙墓２，土壙３，建物２，弥生式土器，土師器，鉄製クワ先，鉇，鎌，鉄鋌２，鼓形器台，鉄鏃

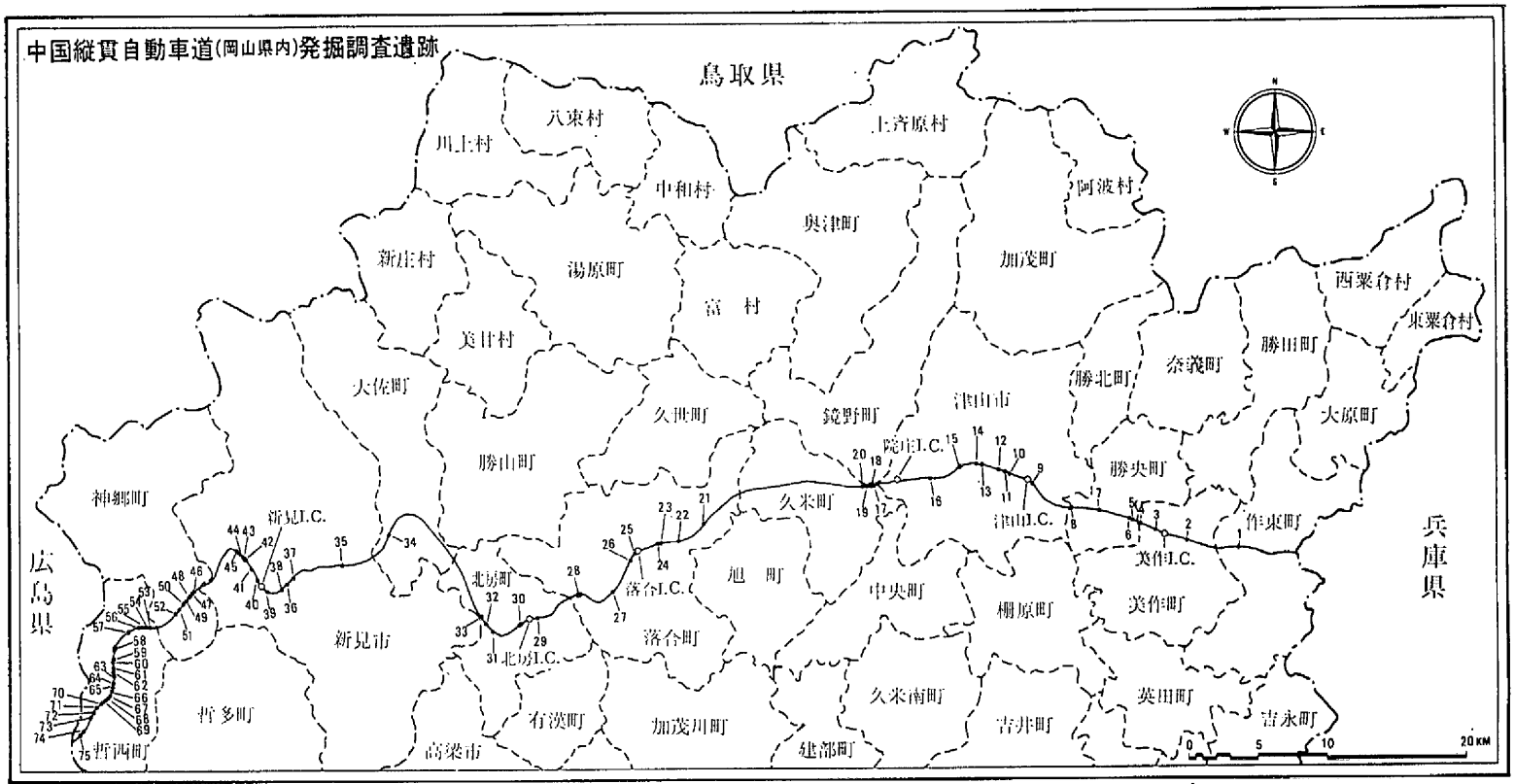
	遺跡名	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積	主な調査員	概要
48	古坊遺跡	阿哲郡神郷町新市	1975.12.10 1976. 1.28	1.5	新市谷遺跡に含む	井上 竹田	土壙墓24，住居址３，土壙３，弥生式土器（後期），特殊器台片，サヌカイト片
49	岩屋城址	阿哲郡神郷町下神代	1976. 2.24 1976. 5.20	3	2,000㎡	岡田 秀島	経塚，掘立柱建物（二面庇）・柱穴列・柱穴，経筒片，銭貨（宋銭・寛永通宝），湖州鏡・和鏡，青白磁合子・青白磁小壺・青磁片・須恵器片・鉄器片・土師器片・青銅錫丈残欠
50	門前中屋古墳	阿哲郡神郷町下神代	1次 1976. 4 1976. 6 2次 1976. 9.16 1976.10. 8	1.5	380㎡	葛原 竹田 岡本 井上 内藤	横穴式石室墳１，須恵器28，鉄鏃５，刀子１，環２，管玉３，切子玉
51	安信古墳群	阿哲郡神郷町下神代	1975. 4.22 1975. 7.16	3.5	500㎡	井上 竹田	横穴式石室４，石棺２，土壙墓２，須恵器（杯，甕，高杯），刀子，銀環，勾玉，ガラス小玉，土製小玉，切子玉，鉄鏃，鉇
52	塚谷古墳	阿哲郡神郷町三信字塚谷	1975. 5. 1 1976. 6.12	1.5	156㎡	正岡 二宮	円墳，横穴式石室，須恵器（杯身，杯蓋）壺片，銀環，ガラス玉
53	佐藤遺跡	阿哲郡哲西町上神代	1976. 4. 5 1976. 9.27	4	750㎡	竹田 岡本	縄文時代の土壙，住居址……縄文式土器 古墳時代の住居址７，土師器
54	山根屋遺跡	阿哲郡哲西町上神代	1976. 1.19 1976. 9. 5	9	1,350㎡	竹田 岡本	弥生時代住居址29，弥生式土器，石鏃，古墳時代の方形台状墓１，シスト20，刀子，鏃，鉄斧，鎌，剣，土壙１，円墳（内部体シスト）２，鉄鏃，横穴式石室３，須恵器，大刀，金環，奈良時代の火葬墓１
55	道上古墳	阿哲郡哲西町上神代	1976. 5.28 1976.10.18	6	山根屋遺跡に含む	岡本 竹田	横穴式石室，須恵器，馬具，太刀，鉄鏃，玉類，中世墳墓４，土師器小皿，五輪塔群 備前焼
56	中林遺跡	阿哲郡哲西町上神代	1975. 3. 1 1975. 3.30	1	400㎡	井上	発見時に確認されていたものは，谷川が，山道として利用されているものと考えられる
57	野田畝遺跡	阿哲郡哲西町上神代	1975.12. 1 1976. 2.29	3	800㎡	高畑 福田	弥生時代竪穴式住居址96以上，土壙墓１，溝１，大形ピット16，小形ピット多数，古墳時代，竪穴式住居址２，古墳３，歴史時代，窯跡１，土壙墓１，柵列１，近世土壙墓６
58	西江遺跡	阿哲郡哲西町上神代字西江	1975. 7. 1 1976.10.10	15.5	4,500㎡	田仲 正岡 二宮	縄文晩期，土器，黒曜石，弥生前期，中期住居址，方形土壙，後期，住居跡，弥生後期～古墳時代前半の土壙墓132（石蓋土壙，木棺直葬）特殊器台，ガラス玉，古墳時代住居跡，古墳５，（土壙，箱式石棺），須恵器，（提瓶，高杯，杯）刀子，ガラス製勾玉，同小玉，奈良，平安時代の建物，須恵器，土師器，円面硯，中近世，建物，鍛冶炉，墓壙，方形土壙，備前焼，亀山焼，青磁，瓦器，土錘，鉄鋤，鉄鎌，刀子
59	二野遺跡	阿哲郡哲西町矢田	1975. 7. 1 1975. 9.30	3	800㎡	高畑 福田	先土器時代，ナイフ形石器，（サヌカイト）１点，縄文時代土器片，前期，後期，晩期 弥生時代土器片，中期，後期，石器，中期，鏃１，磨製石庖丁１，スクレーパー２，古墳時代，横穴式石室（二野古墳），出土遺物，壺（須恵器１，土師器１）杯（須恵器，１）金環１，銀環１，平安時代，建物５，鍛冶の作業場１，柵列１，近世　近世墓……数基

	遺跡名	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積	主な調査員	概要
60	光坊寺古墳群	阿哲郡哲西町矢田	1975. 7. 1 1975. 9.30	3	241㎡	高畑 福田	古墳3，1号墳2列の石列（葺石）を有する円墳，竪穴式石室，組合せ式石棺2，木棺直葬土壙2，出土遺物，壺1，高杯1，鉄片1，鏡（珠文鏡1，ガラス製小玉4，低脚杯1，鉇1，2号墳，円墳，木棺直葬人形残影，出土遺物，直刀1，11号墳，方形台状墓石枕状の角礫2を有する木棺直葬土壙，出土遺物，周溝内より，小形丸底壺1
61	土井遺跡	阿哲郡哲西町矢田	1975.10. 1 1976.11.30	2	1,800㎡	高畑 福田	建物，21以上，溝4，出土遺物，古銭，弥生式土器片，土師器片，古備前焼片
62	土井城址	阿哲郡哲西町土井	1975.10. 1 1976. 2.20	5	1,800㎡	下沢 友成	鎌倉時代～室町時代の中世山城，建物3以上，土塁，柵，溝，土師質皿，釘，備前焼，弥生後期の住居址3，弥生式土器，古墳時代後期の住居址1，横穴式石室1（須恵器，土師器，馬具），横穴2（須恵器），石蓋土壙1
63	鳴山古墳群	阿哲郡哲西町土井字鳴山	1976. 2.20 1976. 3.30	1	200㎡	下沢 友成	当初古墳と考えられていたが，発掘調査の結果室町時代～鎌倉時代に至る古墓であった。土師質皿7
64	横田東古墳群	阿哲郡哲西町矢田	1976		300㎡	伊藤 山唇	古墳時代後期，円墳2（横穴式石室，竪穴式石室），石蓋土墳墓8，箱式石棺2，土壙墓4，須恵器，土師器，鉄器，玉類，金環
65	横田遺跡	阿哲郡哲西町	1976. 5.24 1976.10.29	5	2,400㎡	岡田 秀島	弥生時代遺構（土壙墓群，竪穴住居址，袋状ピットほか）古墳時代以降（古墳2基，溝状遺構，竪穴住居址群，掘立柱建物，柱穴群）磨製石斧，石槍（サヌカイト）弥生式土器，土師器，須恵器，鉄斧，鉄滓，刀，珠文鏡ほか
66	藤木城址	阿哲郡哲西町畑木	1976. 7.12 1976.10.20	4	600㎡	下沢 浅倉	遺構，頂上の平坦部に土塁，柱穴，石蓋土壙1，土壙墓2，土壙1，南側谷部に版築，北側谷部に貯蔵穴1，掘立柱建物2，土塁遺物，弥生式土器（後期），須恵器，瓦器，青磁，釘
67	大倉遺跡	阿哲郡哲西町青谷	1976. 4.16 1976. 7. 5	3	800㎡	松本 友成	弥生時代中期の溝・土壙，土器，弥生時代後期の土壙，ピット，土器，古墳時代後期の住居址1，土壙1，ピット，石組溝，須恵器，土師器，中世～近世の土器
68	忠田山遺跡	阿哲郡哲西町四日市	1976. 6.15 1976.10.20	5	500㎡	福田 中野	古墳時代前半，住居址4，貯蔵穴2，円形周溝2，土器，砥石，鉇 室町時代，掘立柱建物11軒以上，井戸2，鍛冶炉1，池状遺構2，古道1，溝3，備前焼，須恵器，亀山焼系土器，青磁，鉄器，かなくそ，ドーナツ状土壙，25前後
69	御供川遺跡	阿哲郡哲西町	1976. 5.11 1976. 8.26	3	880㎡	松本 友成	弥生時代後期～古墳時代前期の住居址1，溝，土壙，ピット，土器
70	四日市古墳	阿哲郡哲西町畑木	1976. 4.19 1976. 7. 9	2.5	78㎡	下沢 浅倉	遺構，横穴式石室，円墳1，柱穴数本，土壙1，遺物，弥生式土器（後期）数片，須恵器，甕形土器数片

	遺跡名	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積	主な調査員	概要
71	清水谷遺跡	阿哲郡哲西町畑木	1976. 3.10 1976. 7. 8	4	1,440㎡	下沢 友成 浅倉	弥生時代，柱建物1，土壙3，古墳時代，竪穴住居址1，中近世，建物3，墓10，遺物，縄文式土器（晩期），弥生式土器（前期，中期，後期）土師器，須恵器，青磁，銅鐸型土製品，分銅型土製品，紡錘車，寛永通宝200枚以上，棺釘，キセル，横櫛，人骨
72	塚の峯遺跡	阿哲郡哲西町大竹	1976. 3. 6 1976. 8.11	5.5	1,200㎡	高畑 福田 中野	縄文式土器片（前期） 弥生時代後期前半～古墳時代前半 住居址20，配石墓1，貯蔵穴5，土器，石庖丁，円墳2（木棺直葬2，シスト1，石蓋土壙1），土壙1，刀子1，須恵器，鍛冶炉1，ドーナツ状土壙3
73	二本松遺跡	阿哲郡哲西町	1976.		500㎡	伊藤 山磨	弥生時代未～古墳時代前期，竪穴住居址2，ピット，平安，鎌倉時代，掘立柱建物5，溝1，須恵器，土師器，備前焼，青磁
74	岸本下遺跡	阿哲郡哲西町	1976.		800㎡	伊藤 山磨	古墳時代前期，竪穴住居址1，溝状遺構2，土師器，時期不明，土壙墓4
75	岸本城址	阿哲郡哲西町岸本	1976. 8.10 1976.10.27	2	360㎡	田仲 正岡 松本 友成	鎌倉時代～室町時代の山城跡，本郭と二つの郭を調査，建物2，土壙，溝，柵，土師質皿，備前焼，弥生後期の住居址1，弥生式土器，古墳時代前期の土壙墓13，古墳時代後期の住居址1，土師器

一覧表の No.1～36 までの各遺跡については，「中国縦貫自道車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」1～6分冊を参照されたい。

本表は，昭和51年11月現在のものである。岡山県内における中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の調査は，昭和51年10月末で全て完了した。


中国縦貫自動車道(岡山県内)発掘調査遺跡
鳥取県
八束村
川上村
上斉原村
中和村
阿波村
奥津町
新庄村
湯原町
加茂町
富　村
西粟倉村
美甘村
東粟倉村
勝田町
奈義町
大佐町
勝北町
久世町
鏡野町
津山市
大原町
勝山町
院庄I.C.
勝央町
神郷町
新見I.C.
久米町
津山I.C.
作東町
兵庫県
広島県
美作I.C.
北房町
落合I.C.
旭　町
中央町
棚原町
美作町
新見市
落合町
北房I.C.
哲多町
有漢町
加茂川町
久米南町
吉井町
英田町
哲西町
高梁市
建部町
吉永町
0 5 10 20KM

総　　目　　次

序

例　　言

目　　次

Ⅰ　調査の経緯と問題点……(11)

Ⅱ　発掘調査の概要

1.　旦の原遺跡（26）……1

2.　岩倉遺跡・岩倉古墳群（39）……67

3.　谷内遺跡（44）……165

4.　下神代の古墳……181

下神代の歴史的，地理的景観……181

安信古墳群（51）……187

塚谷古墳（52）……231

5.　桃山遺跡（補稿）……245

桃山遺跡出土のメヒシバ等の発芽と生育……245

1. 調査の経緯と問題点（昭和50年度）

1. 事前の分布調査

道路建設予定地内における埋蔵文化財包蔵地の分布調査は，文化庁と日本道路公団の「覚書」により事前に文化財保護行政側において実施することになっており，岡山県においても，その例に従い調査を実施した。

特に，昭和44年度の落合町以西については，諸般の事由により調査体制の弱体化のそしりを，まぬがれない実状のもとに分布調査が実施された。以後この調査結果に基づき新見市以西のルートが決定され，道路建設用地内の埋蔵文化財包蔵地は山城1，墳墓群1，古墳5，祭祀遺跡1の8遺跡となった。このことについてはすでに前巻の「調査の経緯と問題点」に記したとおりである。昭和49年になって，発掘調査実施計画策定のため，上記8遺跡の現地踏査を行ったところ多数の疑問点が生じた。これらを種々検討した結果，遺跡の工事中発見の防止と調査期間，調査体制を早急に確保整備するためには，再度ルート内の確認調査を実施することが良策であるとの結論に達した。ルート内確認調査は，昭和49年8月27・28日にわたり実施され，ほぼ同時に，新見市においては，岡山県埋蔵文化財5カ年分布調査の実施時期にあたっていたため，その成果を加え，これらを総合して検討したところ，新たに26遺跡を数え，総計32遺跡となった。更には，昭和51年度における工事中発見の2遺跡を含めると，最終的には，新見市以西の遺跡数は，34遺跡（別表のとおり）となり，当初の4倍以上の遺跡となったのである。なお県下では数少ない例である哲西町の横穴群・御立山古墳群など特筆される遺跡は，あらかじめ協議段階でルート設定から避けたことを付記しておきたい。

以上，事前の分布調査の経緯を述べたが，ルート策定の資料としての分布調査の重要性を痛感するとともに，今後にあってはならない教訓としたい。

2, 調 査 体 制

新見市街地から広島県境までのルート30km内に34遺跡を確認し調査することになった経緯については前述のとおりであり問題点はいろいろと内包されていると思われるが，これら多数の貴重な遺跡の消滅が免れないこととなった以上，これへの対応策が最大の課題となった。

しかし，現状は非常にきびしい条件が重なっていた。まず第1に調査体制が，当初の8遺跡という見通しのもとに縮小されてしまっていたことである。第2に，道路公団の側でも同様に文化財調査は8遺跡という見通しのもとにすでに新見市・神郷町は50年9月，哲西町は50年12月の工事発注を決定していた。第3に，路線延長約30km内に34遺跡という極度な密集状況が再確認され，なかには総延長1kmという大規模な西江遺跡もふくまれていた。しかも建設路線に沿って国鉄芸備線が走っており，これをよぎる工事用道路の仮設が制限されたため，遺跡の所在しないところから工事に着工することも困難な状況にあった。

このような悪条件のなかで，道路公団と再三折衝を重ね，ようやくにして次の調査体制をもって実施することで合意をみた。

1）50年度は調査員を13名に増員し，1現場2調査員制とし，6班編成で調査を実施する。うち1名は，報告書作成に従事する。

2）遺跡の調査順序は工事工程にできるだけ支障をきたさないよう配慮し，双方で協議する。

3）現場での発掘調査は51年7月までに終了するよう努力する。（最終的には3ヵ月延長）

さらに，県教育委員会は，埋蔵文化財の調査は，事前に確定しがたい未知な要素が多いため，計画の追加，延長の変更は当然あり得ることを条件として付け加えて，50年度の調査を開始した。

今回の調査体制の確立にあたっては，次のような問題点を痛感した。すなわち発掘調査は，用地買収後でなければ実施が不可能な現状であるが，現社会状勢での開発事業で最も困難なことは，用地の取得交渉であり，それに要する期間は，長期にわたりまたその結着時期の見通しも不確実な要因が強い。したがって用地が取得されると，短期間のうちに工事着工となる場合が多い。開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の経費は原因者負担となっていることもあって，これらの状況のもとに事前に調査員を確保し，体制を整えておくことが非常に困難であるというところに調査体制が，立遅れとなる根本的な原因があると思われる。

3，調査の実態

発掘調査現地は，県北西端に位置し，岡山市から90～120kmの遠隔地にある。したがって，調査員の多くは，4ヵ所に設置されたプレハブの現地調査事務所に自炊宿泊という厳しい生活を続けながらの調査となった。調査は，県北特有の悪天候と限られた調査期間に追われつつ，加えて，県北の過疎化にともなう作業員不足など劣悪な条件が重なっていた。6班編成の調査では100名を超える作業員が当然必要となってくるが，人数の十分な確保ができない現状があり，また作業員の居住地と調査現場との距離が遠く，通勤の点にも問題を生じた。

調査対象の遺跡は，低丘陵地帯に所在し大部分は複数の時代にわたる，いわゆる複合遺跡であり，調査は複雑化し作業量が倍加された。このような状況の中で調査員の工夫・創意のもとに，徹底した調査を常に目標として，それなりに努力してきたことはいうまでもないが，次章以下の報告文の中からそのへんりんが，窺えるとすれば望外の幸せである。

対策委員会の開催についても，往復路程200kmを日帰り日程でこなし一日8～10遺跡の現地指導を仰ぐという強行日程がたび重なったことについて恐縮するとともに，委員の先生方には保存問題ならびに調査内容等について種々教示いただいたことに対し深く感謝する次第である。

4，むすび

中国縦貫自動車道建設にともなう発掘調査は，昭和43年度末に始まり，昭和50年度で8年目という長期間にわたり，いよいよ最終段階をむかえることになったが，その間，関係行政機関の間で徐々にではあるが埋蔵文化財の取り扱いに関する一定のルールが確立しつつあることは大きな収穫であり，この点先輩諸氏の努力の積み重ねに対し深く敬意を表したい。しかしながら，前述したように埋蔵文化財調査についてはなお幾多の問題点が山積しており，今後これらの解決に向って努力を続けてゆきたい。

なお，調査工程でかなりの比重を占める地形測量・グリット設定・杭打ち・図面作成等一般測量部門は，測量業者に委託し省力化した。各現場の発掘調査の技術面・突発的に起きる種々の問題等について，調査員会議等を定例的に開催して討議し，調査員相互の意志の疎通と理解を深め，また，通常，本庁において県下全域にわたる文化財保存行政にたずさわっている文化課デスク職員との意見交換をできるかぎりすすめ，さらにそのうえ現地での調査作業の応援をはかるなど，岡山県教育委員会埋蔵文化財関係職員全員の一致協力のもとに事業を実施した。

最も重要で困難を伴う調査遺跡の保存保護及び工事中発見遺跡の対応策については，昭和51年度の「調査の経緯と問題点」において検討し登載する予定である。（文責　光吉　勝彦）

なお対策委員会記録は次のとおりである。

中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会議事録

（昭和50年度）

月　日	場　所	審　議　事　項	指　摘（要望）・そ　の　他
50. 6.28	新見市・神郷町	昭和50年度調査計画について発掘調査現地指導 （岩倉・横見・安信・塚谷・各遺跡）	1）調査期間不十分 2）横見古墳群保存検討指示 3）岩倉・安信・塚谷調査終了
50. 8.28	新見市・神郷町 哲西町	発掘調査現地指導 （横見・新市谷・西江・光坊寺・二野・各遺跡） 谷尻遺跡(第三次)空古墳調査報告	1）横見古墳群公団提出保存資料検討 2）横見古墳群調査期間延長51.4～51.10 3）光坊寺・二野・谷尻(第三次)空調査終了
50.11. 8	新見市・神郷町 哲西町	発掘調査現地指導 （横見・谷内・迫三方塚・新市谷・西江・土井・土井城・各遺跡）	1）各遺跡調査期間の配慮要請 2）横見・土井調査終了
51. 1.17	新見市・神郷町 哲西町	発掘調査現地指導 （谷内・迫三方塚・新市谷・野田畝・西江・土井・土井城址・各遺跡） 工事中発見，熊谷古墳(新見市)及び新見庄(祐清塚・二日市)調査報告	1）野田畝遺跡調査期間延長50.12～51.2 2）谷内・祐清塚・迫三方塚・土井調査終了 3）調査期間の再検討要請
51. 3.26	新見市・神郷町 哲西町	昭和51年度調査計画について 昭和50年度発掘調査反省協議 発掘調査現地指導 （宗金・岩屋城・山根屋・野田畝・西江・土井城(鳴山)塚の峯)中林遺跡調査報告	1）昭和51年度調査の期間は十分配慮すること 2）新市谷・中林・野田畝・土井城（鳴山)調査終了

旦原遺跡(26)

旦原遺跡

目次

第1章 はじめに……5
第2章 調査の経過……6
第3章 歴史・地理的環境……11
第4章 調査の概要……12
第1節 遺跡の概要……12
第2節 遺構・遺物の概要……13
第5章 小結……64

図目次

第1図 旦原遺跡周辺分布図（S＝1/6000）（作成：高畑）……10
第2図 旦原遺跡路線トレンチ図（S＝1/2000）（作成：高畑）……8
第3図 旦原遺跡遺構分布地形図（S＝1/2000）（作成：二宮）……9
第4図 旦原遺跡遺構全体図（S＝1/500）（作成：二宮）……折込
第5図 1区第一次調査地区（S＝1/400）（実測・製図：高畑）……15
第6図 1区No.9遺構（S＝1/60）（実測・製図：高畑）……16
第7図 1区No.3遺構（S＝1/60）（実測・製図：高畑）……16
第8図 1区No.4遺構土層断面（S＝1/60）（実測・製図：高畑）……17
第9図 1区No.8遺構（S＝1/60）（実測・製図：高畑）……18
第10図 No.4遺構・遺物（S＝1/60・$\frac{1}{8}$）（実測・製図：高畑）……20
第11図 1区No.5火葬墓（S＝1/30）（実測・製図：高畑）……22
第12図 1区骨蔵器（S＝$\frac{1}{2}$）（実測・製図：高畑）……23
第13図 骨蔵器2（S＝$\frac{1}{2}$）（実測・製図：高畑）……25
第14図 No.6建物（S＝1/80）（実測・製図：高畑）……27
第15図 1区南部遺構分布図（S＝1/400）（作成：二宮）……30
第16図 1区No.1住居址（S＝1/60）（実測：山磨・製図：高畑）……31
第17図 1区No.30住居址（S＝1/40）（実測：山磨・製図：高畑）……33
第18図 1区袋状ピット平，断面図（S＝1/40）（実測：山磨・製図：高畑）……34
第19図 1区，2区袋状ピット平，断面図（S＝1/40）（実測：山磨・製図：高畑）…36
第20図 1区No.29古墳（S＝1/60・1/80）（実測：山磨・製図：高畑）……38
第21図 1区No.33遺構（S＝1/150）（実測：山磨・製図：高畑）……39
第22図 2区遺構分布図（S＝1/400）（作成：二宮）……40
第23図 2区No.11住居址（S＝1/80）（実測：山磨・製図：高畑）……41
第24図 2区No.14住居址（S＝$\frac{1}{4}$）（実測：山磨・製図：高畑）……43
第25図 2区No.16住居址（S＝1/60）（実測：山磨・製図：高畑）……44

第26図　２区№17住居址（S＝1/40）（実測：山磨・製図：高畑）……45
第27図　２区№19，20土壙（S＝1/40）（実測：山磨・製図：高畑）……47
第28図　２区№10古墳（S＝1/80）（実測：山磨・製図：高畑）……48
第29図　２区№12古墳（S＝1/60）（実測：山磨・製図：高畑）……51
第30図　２区№12古墳主体部（S＝1/8）（実測：山磨・製図：高畑）……52
第31図　２区№12古墳出土遺物（S＝1/3）（実測・製図：高畑）……52
第32図　２区№21古墳主体部（S＝1/30）出土遺物（S＝1/3）（実測：山磨：高畑・製図：高畑）…53
第33図　各地点出土石器（実測・製図：高畑）……55
第34図　№14，№10住居址出土石器（S＝1/2）（実測・製図：秀島）……56
第35図　№10住居址出土剝片（S＝1/2）（実測・製図：秀島）……57
第36図　住居址出土砥石（S＝1/2）（実測・製図：秀島）……58
第37図　住居址出土遺物（S＝1/3）（実測・製図：高畑）……59
第38図　袋状ピット，各地点出土遺物（S＝1/3）（実測・製図：高畑）……60
第39図　№６建物，16地点出土遺物（S＝1/3）（実測・製図：高畑）……61
第40図　２区28地点出土須恵器（S＝1/3）（実測・製図：高畑）……62
第41図　遺構に伴わない須恵器（S＝1/3）（実測・製図：高畑）……62
第42図　２区Ｈトレンチ出土遺物（S＝1/2）（実測・製図：高畑）……62
第43図　１区№28住居址（S＝1/40）（実測・製図：山磨）……29

図　版　目　次

図版1　　木山，西河内航空写真（撮影：落合町教育委員会提供）
図版2-1　旦原遺跡遠景（西より）（撮影：橋本）
図版2-2　旦原遺跡遠景（西より）（撮影：橋本）
図版3-1　１区調査全景（北北東より）（撮影：高畑）
図版3-2　２区調査全景（南南西より）（撮影：高畑）
図版4-1　１区東側谷部（南より）（撮影：高畑）
図版4-2　３区全景（南西より）（撮影：高畑）
図版5-1　３区グリッド（北北東より）（撮影：高畑）
図版5-2　３区トレンチ（南より）（撮影：高畑）
図版6　　第一次調査区全景（南東より）（撮影：高畑）
図版7-1　１区谷部全景（北北東より）（撮影：高畑）
図版7-2　１区谷部遺構全景（北北東より）（撮影：高畑）
図版8-1　１区谷部遺構全景（北北東より）（撮影：高畑）
図版8-2　１区谷部遺構（南より）（撮影：高畑）

図版9-1　1区No.4，5 周辺平坦部（東より）（撮影：高畑）
図版9-2　1区No.5周辺骨蔵器出土状況（北東より）（撮影：高畑）
図版10-1　1区No.5土層断面（北東より）（撮影：高畑）
図版10-2　1区No.5土層断面（南西より）（撮影：高畑）
図版11-1　1区No.5火葬土壙（東より）（撮影：高畑）
図版11-2　1区No.5火葬土壙断面（南より）（撮影：高畑）
図版12-1　1区骨蔵器出土状況（西より）（撮影：高畑）
図版12-2　1区骨蔵器出土状況（西より）（撮影：高畑）
図版13-1　1区No.6遺物出土状況（南西より）（撮影：高畑）
図版13-2　1区No.6土層断面（南より）（撮影：高畑）
図版14-1　1区No.6建物全景（南より）（撮影：高畑）
図版14-2　1区No.7溝状遺構（南西より）（撮影：高畑）
図版15-1　1区No.2古道（南より）（撮影：高畑）
図版15-2　1区No.8溝状遺構（南より）（撮影：高畑）
図版16-1　1区住居址，袋状ピット全景（北より）（撮影：高畑）
図版16-2　1区No.1住居址（東より）（撮影：高畑）
図版17-1　1区No.28住居址（東より）（撮影：高畑）
図版17-2　1区No.30住居址（南より）（撮影：高畑）
図版18-1　1区No.24袋状ピット遺物出土状況（南東より）（撮影：山磨）
図版18-2　1区No.25袋状ピット（南東より）（撮影：山磨）
図版19-1　1区No.29古墳周溝（南より）（撮影：山磨）
図版19-2　1区No.29古墳盛土状況（北より）（撮影：山磨）
図版20-1　1区No.33溝，土壙全景（南南西より）（撮影：山磨）
図版20-2　1区焼土壙（西より）（撮影：山磨）
図版21-1　2区No.11住居址（北より）（撮影：山磨）
図版21-2　2区No.11住居址土層断面（西より）（撮影：山磨）
図版22-1　2区No.11住居址内遺物出土状況（北より）（撮影：山磨）
図版22-2　2区No.11住居址内遺物出土状況（北より）（撮影：山磨）
図版23-1　2区完掘全景（南南西より）（撮影：山磨）
図版23-2　2区No.14住居址周辺全景（東より）（撮影：山磨）
図版24-1　2区No.14住居址（北西より）（撮影：山磨）
図版24-2　2区No.14住居址石斧出土状況（北西より）（撮影：山磨）
図版25-1　2区No.16住居址土層断面（北東より）（撮影：山磨）
図版25-2　2区No.16住居址遺物出土状況（北北西より）（撮影：山磨）
図版26-1　2区No.16，17住居址全景（西より）（撮影：山磨）
図版26-2　2区No.36柱穴列（東より）（撮影：山磨）

図版27　1区№13，2区№24，24A，32，26，31袋状ピット　（撮影：山磨）
図版28-1　2区№16住居址（西より）（撮影：山磨）
図版28-2　2区№17住居址（東より）（撮影：山磨）
図版29-1　2区№10古墳周溝検出状況（南西より）（撮影：山磨）
図版29-2　2区№10古墳完掘状況（南西より）（撮影：山磨）
図版30-1　2区№10古墳南西周溝断面（北西より）（撮影：山磨）
図版30-2　2区№10古墳南西周溝断面（北西より）（撮影：山磨）
図版31-1　2区№12古墳周溝完掘状況（西より）（撮影：山磨）
図版31-2　2区№12古墳完掘状況（南南西より）（撮影：山磨）
図版32-1　2区№12古墳主体部遺物出土状況（北西より）（撮影：山磨）
図版32-2　2区№12古墳周溝断面（北西より）（撮影：山磨）
図版33-1　2区№21土壙墓全景（北東より）（撮影：山磨）
図版33-2　2区№21遺物出土状況（南東より）（撮影：山磨）
図版34　1区，2区出土遺物（撮影：高畑）
図版35-1　2区№11住居址出土石器未製品及び剥片（撮影：高畑）
図版35-2　2区№11住居址出土石器未製品及び剥片（撮影：高畑）
図版36　住居址出土土器（撮影：高畑）
図版37-1　2区№21古墳出土遺物（撮影：高畑）
図版37-2　2区№12古墳出土遺物（撮影：高畑）
図版38　1区，2区遺構に伴う石器（撮影：高畑）
図版39-1　1区東谷出土骨蔵器（撮影：高畑）
図版39-2　1区東谷出土骨蔵器（撮影：高畑）
図版40　1区，2区出土須恵器（撮影：高畑）

Ⅱ　発掘調査の概要

第1章　はじめに

本報告書は中国縦貫自動車道路建設に伴い記録保存を目的として行った埋蔵文化財発掘調査である。

遺跡名	旦原遺跡（真庭郡落合町西河内）	合計	備考
発掘期間	◦第一次調査―昭和48年7月17～昭和48年9月30日まで。2½カ月（実働日数49日） ◦第二次調査―昭和48年10月1日～昭和48年12月31日まで。3カ月（実働日数62日）	5½カ月 （111日）	1. 12月初旬，遺跡南側半分工事用道路にあけ渡す。 2. 遺跡を横断する過疎対策道路進入の話あり。
発掘作業員	◦第一次調査―男　237人，女777人 計1,014人，1日平均20.7人 ◦第二次調査―男　170人，女751人 計　921人，1日平均14.8人	1,935人 1日平均 18人	1. 落合町西河内の農家の人達が主体となる。 （発掘作業の経験者が多い）
調査担当者	◦高畑知功（昭和48年7月17日～昭和48年9月30日まで） ◦山磨康平（昭和48年10月1日～昭和48年12月31日まで）	148人	1. この年より（S48年）1遺跡　調査員1名にて3カ月交代の発掘調査計画を実施する（報告書作成の便宜上による） 2. 12月後半より橋本惣司調査員の応援を得る。
実質発掘面積	1区（1区 2,729㎡／東谷　847㎡／西谷 174.5㎡） 2区　1,620㎡ 3区	5,370.5㎡	1. 9カ月間の予定で6カ月にて一応終了した。
遺構	1区　平坦部11遺構，1区東谷9遺構，1区西谷1遺構 2区　13遺構 3区　包含層	34	一覧表参照
遺物		30箱	1. 岡山市西古松文化課分室収蔵庫
写真　4×5 トヨヴィユー 小型ミノルタ	白黒　4×5判　446枚（12枚×38本） 白黒　35㎜　1,135枚（36枚×33本） スライド　802枚（36枚×28本）	2,383枚	1. 各遺構の担当者が行う。
報告書作成期間	作成期間中，作成担当者両名とも調査現場があり，十分に作成目的を達成することができなかった。		1. 作図，実測等には二宮，秀島両調査員の協力を得る。 2. 作図，計測，清書は日笠月子，瀬戸文子作業員による。

第2章　調査の経過

中国縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は，昭和44年２月より開始され昭和48年６月30日をもって第一次整備区間内（作東町～落合Ⅰ・Ｃ）25遺跡が終了した。そして，７月以降は第一次整備区間内の発掘調査報告書の作成と，第２次調査区間内（落合Ⅰ・Ｃ～広島県境）の発掘調査が並行して実施された。

これらは調査員が一人一遺跡の発掘調査及び報告書作成を行なわざるをえない状況を作り出した。そこで，一遺跡の発掘調査（報告書作成）を３ヵ月交代で行なうローテーションが組まれた。

旦原遺跡はその体制の中で昭和48年７月17日より49年３月30日までの９ヵ月間の予定で行なわれ，第一次調査（前半３ヵ月）を高畑が，第二次調査（後半３ヵ月）を山磨が担当して実質６ヵ月にて終了させた。

◎第一次調査　（昭和48年７月17日～９月30日まで）

本遺跡は，弥生式土器片の散布地として確認した。そこで集落址の存在を想定し，路線延長約240ｍ，幅40～45ｍの用地内（第２図）に幅２ｍの東西トレンチを20ｍ間隔に計10本を設定，実施した。南西部よりＡ，Ｂ，Ｃとアルファベット順に北東に向ってⅠまでを掘開し，Ｂトレンチ西端，Ｃトレンチ東端，Ｄトレンチ東端，Ｅトレンチ東端の谷部分地表より約30～40㎝にて黒色の堆積土を確認する。Ｄトレンチ西部，Ｆトレンチ中央部の平坦部分には住居址２軒を確認できたのみであった。なお，下草刈りの段階にて若干の平安期の須恵器片が表採された。

まず排土場所等の関係から，１区東側谷部分（第一次調査区）にみられる黒色堆積土の性格を知るため全面表土剝ぎを行なった。谷内の平坦部にあたる13，16地点を中心に須恵器片が多く検出された。さらに，平安時代を中心とする建物１棟，火葬土壙墓２基，道状遺構２，溝状遺構２，性格不明の土壙３，計９遺構を確認し，１区11地点の表土剝ぎに移動する。それらと並行して１区東谷の遺構検出，実測を行なった。

◎第二次調査　（昭和48年10月１日～12月31日まで）

10月１日より山磨調査員と交代し，調査を続行した。高畑は第一次調査の残務処理と谷尻遺跡の第一次調査を並行する。２区27，28地点にトレンチを増設し，遺構確認を行ない，第一次調査Ｇ，Ｈトレンチ間より古墳周溝を検出。古墳及び周辺遺構を調査しながら，作業主体を18，19地点表土剝ぎに移動する。遺構検出ならず，南西に向って表土剝ぎを続行。２区では弥生時代中期後半の住居址２軒，土器溜り土壙２，弥生時代後期後半の住居址２軒，古墳３基，その他土壙４，計13遺構を確認調査した。それらの調査と１区北西部の表土剝ぎを並行し，弥生時代後期後半の住居址２軒，それらに伴う袋状ピット６基，古墳１基，谷部より溝及び焼土壙１，時期不明の住居址１，計12遺構を確認調査した。

◎報告書作成について

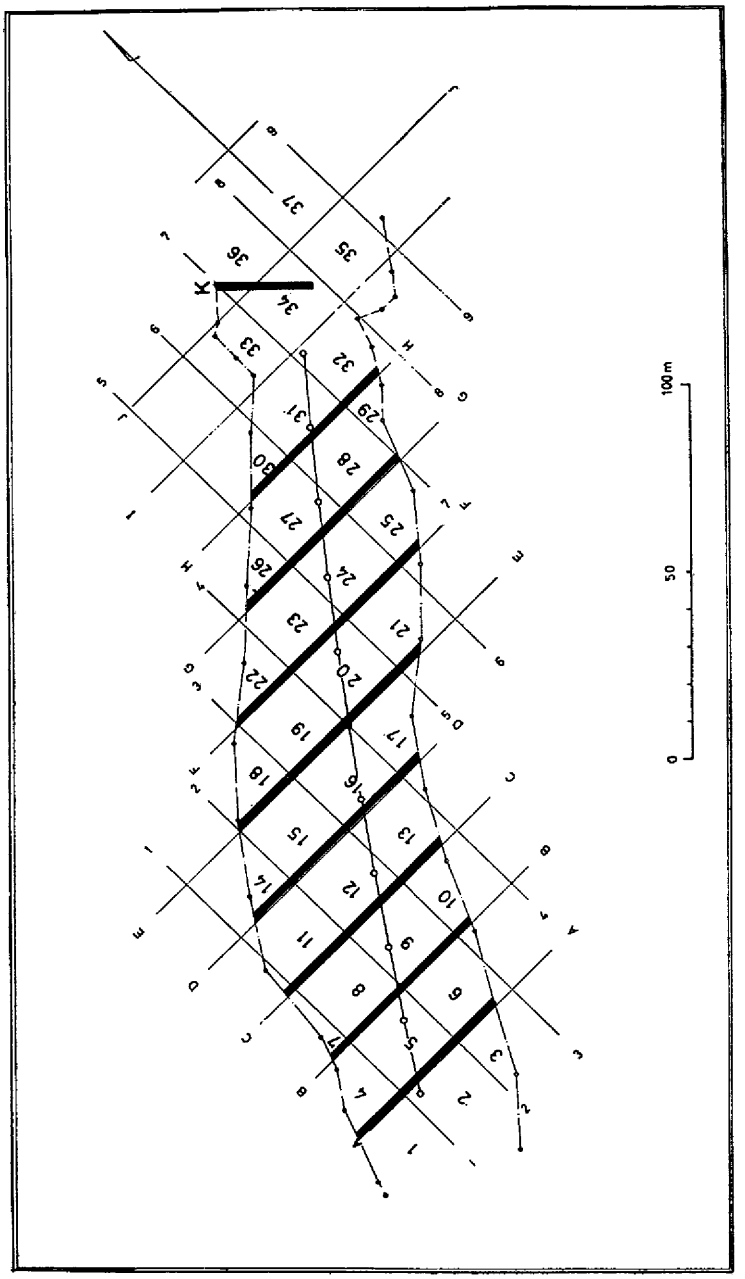
今回の報告書作成は，旦原の発掘調査が終了して，３カ年が経過している。本来は「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（12)」に掲載される予定のものであった。しかし調査員が可能にできうる仕事量というものには，現在進行している状況の中で各種の限界があり，又，担当遺跡の規模，出土遺物の量，整理期間の有無等に当然大きく左右されるものである。

旦原遺跡の場合は，それらの諸条件が集積しつつ，担当者に報告書作成期間があたえられない状態で，書けば報告書ということになりました。

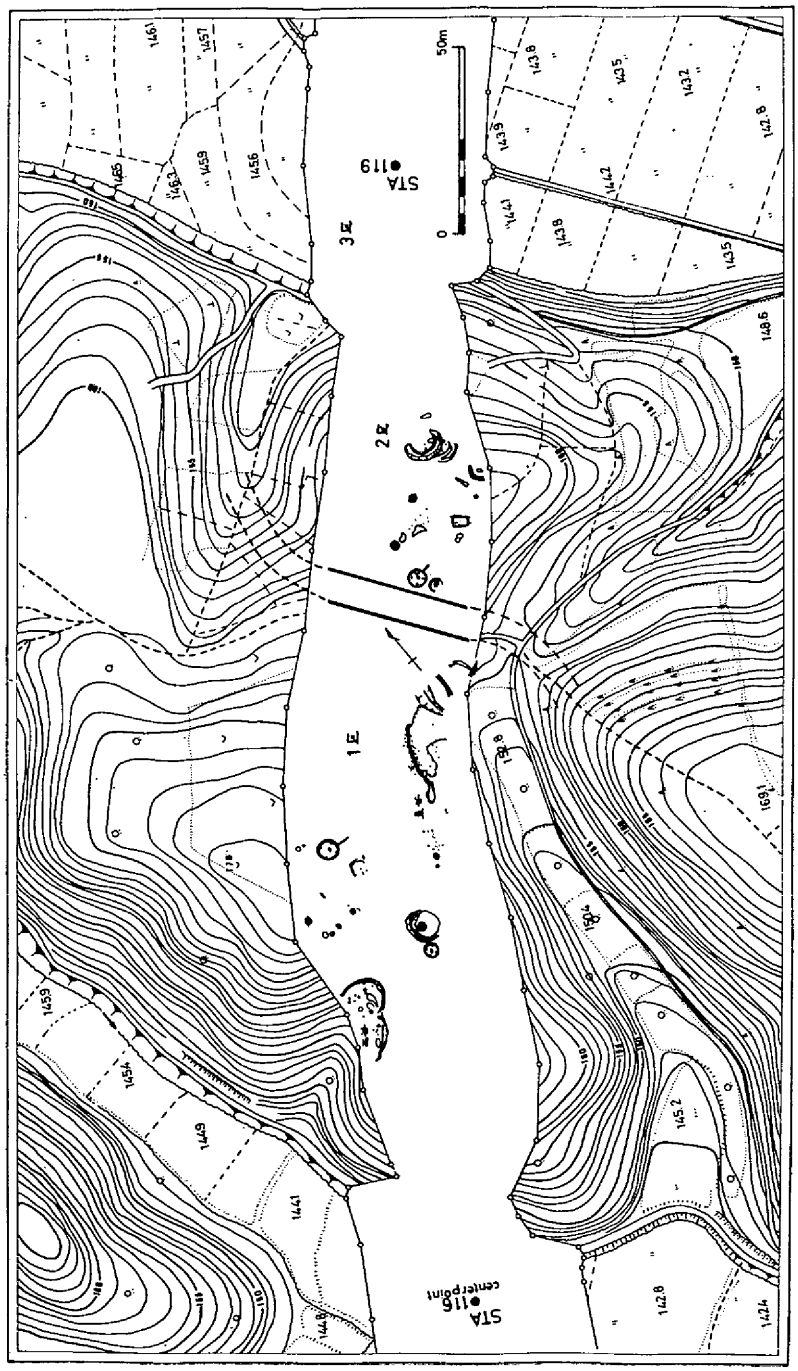
調査参加者（五十音順）

青木英雄，赤田全代（事務)，浅井美智子，有本房子（事務)，池本学，岡本喜代治，国年たにの，長尾竹野，長尾昭子，楢本八重子，林うめよ，林宗市，堂本京子，福岡登美子，福岡秀夫，福本房子，牧富市，松岡いよこ，松岡恭，森元志津乃，森元豊子，森元波真江，屋敷一四，屋敷光代，屋敷みよし，山村つね子，山本さち子，山本照子，山本とよ，山本富美子，若田喜美子

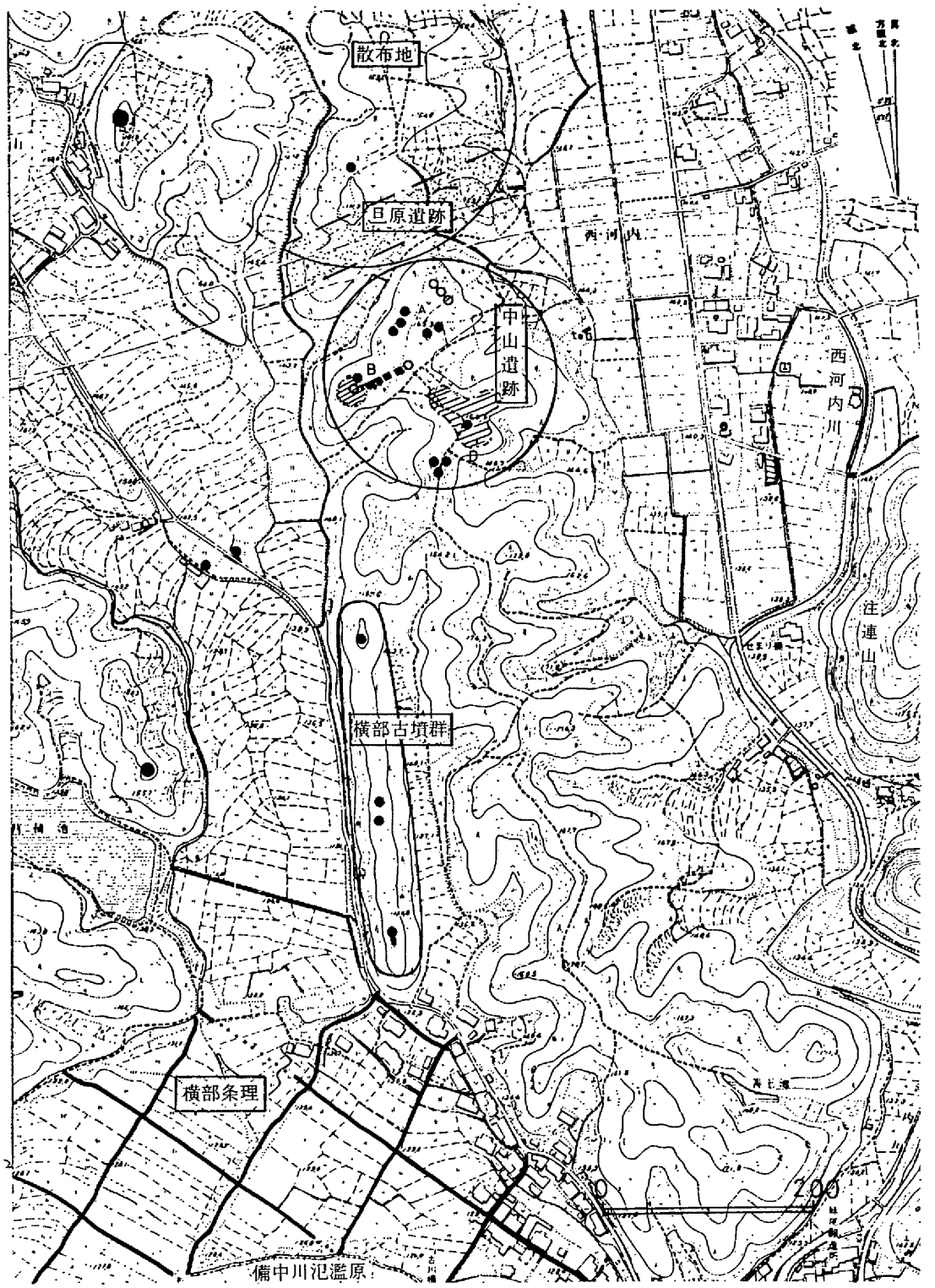
発掘調査にあたり，地元の方々を始め，落合町教育委員会，文化財専門委員会，縦貫道対策委員会の方々には，全期間にわたり御指導，御協力をいただいた。記して謝意を表したい。又，報告書に関するトレース，実測等は二宮治夫，秀島貞康の協力を得た。作図，計測，清書は日笠月子，瀬戸文子によるところが多大であったことを記して謝意を表わしたい。（山磨・高畑）



第２図　旦原遺跡・路線・トレンチ図（S＝1/2000）



第３図　旦原遺跡　遺構分布地形図（S＝1/2000）



第1図　旦原遺跡周辺分布図 (1/6000)

第3章　歴史，地理的環境

中国縦貫自動車道路建設に伴い，落合町内では下河内調査区，赤野遺跡，穴塚古墳，西原遺跡，下市瀬遺跡，旦原遺跡，須の内遺跡，宮の前遺跡の8遺跡の埋蔵文化財発掘調査が行われた。

ここで，全調査を通しての知見を簡単にのべると，現在ではどの遺跡も旧石器時代の遺構，遺物は発見されていない。縄文時代は，前期を除いた全時期の土器片，それに伴う石器，あるいは一部遺構が確認されるにいたった。なかでも後，晩期のものが多く出土している。

弥生時代においても全時期を通じての土器が確認されており，特に中期前半以後の遺構が確実に存在し，とりわけ中期後半にいたっては量的に増加している。後期には段丘，丘陵上に住居址数も多く見られたり，小型銅鐸を出土した後期後半の祭祀的性格をもつ井戸も存在していた。

弥生時代終末期といわれる時期のものには，縦貫道路線外ではあるが，最近調査を行った中山遺跡(註2) B，E区より方形台状墓，土壙墓群に特殊器台等の多くの土器を伴ったものがある。

他でそれらの時期の住居址も確認されている。古墳時代前半においては，県内で初めてといわれる9基からなる円，方形周溝墓群が多くの土器を伴って発見されたりしている。用地外には真庭郡最大の前方後円墳で全長約60mを測る，川東車塚，横部・槇の前・天王塚等の前方後円墳も存在する。

古墳時代後半では，住居址，墓（横穴式石室，土壙墓，木棺直葬？）等が多く，古式の須恵器より6C後半末までのそれらに伴う遺物がみられる。奈良時代，平安時代にかけての資料も各遺跡で多くみられ，瓦，蔵骨器，転用硯，円面硯，墨書土器，蓮弁付高杯，多首壺，隆平永宝等の遺物が出土している。鎌倉時代，室町時代には，遠隔地との交流を裏づける中国陶磁器を出土した館址，火葬墓，建物址，遺物には，宋，元の陶磁器，備前焼，銅印等があげられる。

近世では遺物が中心になり，古伊万里，唐津等の九州系陶磁器や，瀬戸物など美濃系のものが多量に出土しており旭川を中心に高瀬舟（隆平永宝を出土した井戸の周辺より木製の舟型模造品が5個出土している）という交通機関もふくめて落合という地名にふさわしい雑種の文化地帯を形成している。これらの遺跡は，垂水，西原地区にて旭川に合流する備中川，河内川の河岸段丘及び周辺の低丘陵上に立地している。とくに，旭川中流域でも最も広い沖積平野周辺，現在の落合市街を中心にして遺跡の分布範囲が濃厚である。便宜上，4地域に分けることができる。

A．旭川が東へ流れを変える左岸に西原遺跡(註1)の立地する段丘，丘陵地区。

B．注連山の北方山麓に下市瀬遺跡(註2)の立地する段丘及び周辺地区。

C．宮山の南方山麓に槇の前遺跡(註3)の立地する段丘及び周辺地区。

D．木山山頂より南東にのびて旦原遺跡（本報告）の立地する丘陵及び周辺地区。

D地域を例にとると，縄文時代，弥生時代中期後半集落，弥生時代後期後半集落，墓，古式の前方後円墳，後期の古墳群，奈良末～平安期建物・火葬土壙・骨壺という流れは，A地域においては特に類似し，B，C地域にも同様のことがいえる。　（高畑）

第4章　調査の概要

第1節　遺跡の概要

遺跡は，真庭郡落合町西河内旦原に存在する。旦原は，木山（海抜400ｍ）より樹枝状に高さを減じながら東にのび垂水地区まで及ぶ丘陵上の一角に占地（海抜170ｍ）する。

東流する備中川は本丘陵に激突をくりかえし，流れを南東にかえており，丘陵東側を南下してくる西河内川をまとめて旭川に合流する。

同丘陵上には，特殊器台，方形台状墓，土壙墓群等(註1)を出土した中山遺跡，古式の前方後円墳を中心とする横部古墳群，須恵器を副葬した土壙を主にする中山古墳群，奈良末～平安時代の須恵器片の散布地が存在する。

今回の調査対象地区は，落合育苗センターの南側に隣接して立地する。山頂に平坦部（海抜170ｍ）を有し，西側に急峻な斜面が開析されており，東側にも開析された小さな谷が入りこみ比高20～25ｍの同様な谷水田がみられる。丘陵北東部は南流する西河内川の氾濫原からなる狭長な沖積平野が形成されている。現在の集落はこの平野部にみられる。調査は，これらの地形を中心にして3調査地区にわけることに始まった。まず，山頂平坦部を横断する山道（垂水・西河内線）を境にそこより西側を1区平坦部，西谷，東谷とし，東側平坦部を2区，さらに東側西河内川の氾濫原を3区と便宜上呼称した。そして，1，2区山頂平坦部，1区東谷の全面調査，1区西谷3区をグリッド，トレンチ調査を実施し，総数34遺構を検出した。住居址7軒，袋状ピット7基，古墳時代墓4基，建物址1棟，火葬土壙2，その他溝状遺構等があげられる。計5,370.5㎡の掘開を行なった。

1区平坦部（第15図，図版16-1）

約2,700㎡の面積をもつ平坦面の全掘を行い，東谷方向の傾斜に向う平坦部分に東面する円形住居址1軒，さらに，それより西方山頂部に円形住居址に伴う袋状ピット6基，№30住居址の北側に隣接して円墳1基を検出したのみである。15，18，19地点においても遺構らしきものは検出されず，いわゆる不規則な柱穴痕も皆無であった。戦後の畑地の開墾，壁土用採土に伴う破壊とも考えられず，遺構の空白スペースそのものが遺構であるという可能性が考えられる。

1区東谷（第5図，図版6・8）

10，13，16，17の地点を中心に約850㎡の面積部分の全面を検出する。表土剝ぎの状態にて海抜150ｍの等高線を境に南緩斜面に火葬土壙を2基，それらの北側に火葬骨壺2を検出した。これらは，緩斜面を共有しており，火葬，納骨の連続する1コマであると考える。

海抜159ｍの等高線より下位の北東部，斜面に建物1，道状遺構1，溝状遺構3，性格不明の土壙？

2を検出した。両者とも奈良末，平安期の遺物を出土しており，谷内における一連の送葬儀礼の場としてとらえられるのではないかと考えられる。

1区西谷（第21図，図版20-1）

4，5，7，8の地点を中心に約175㎡を掘開する。表土・黒ボクを除去するとコンターに並行する形で溝状の遺構が検出された。そのほぼ中央部分に方形の焼土壁をもつ土壙がみられたが，この地区には遺物等が出土しておらず時期，性格のきめ手を欠く。

2区（第22図，図版3-2・23-1）

平坦部，北西谷部を約1,600㎡の掘開調査を行った。北西谷部においては遺構が検出できなかった。平坦部において，長方形住居址1軒，袋状ピット1，土器溜り土壙2，柱穴列1，円形住居址2軒，平坦部より北側緩斜面に向って，上部に溝をもつ不整形住居址1軒，古墳時代墓3基，その他土壙等の合計13遺構を検出した。検出した円形住居址は，1区の円形住居址，袋状ピット等と同時代と考えられるものであり集落構成の一端をのぞかせている。古墳の分布も比較的まとまったブロックを形成しているようである。

3区（第2図，図版4-2・図版5）

この地区は，1区山頂との比高24m～25mを有する水田及び畑地面である。Kトレンチでは，水田面より約1.8mの深さで岩盤が出土しており，その堆積土中に奈良末，平安期の須恵器小片が出土したのみで遺構は確認できなかった。さらに北東部畑地にもグリッド調査を試みたが，弥生時代後期小土器片が砂層中に若干出土したのみであり，その下位より拳大の河原円礫の堆積層を確認する。西河内川の氾濫原にあたる部分と考えられる。

第2節　遺構・遺物の概要

遺　構　2区に弥生時代中期後半の石器製作工房址と考えられる円形・長方形の住居址が2軒あらわれている。ついで1，2区を中心に後期後半の円形住居址4軒，それに伴う袋状ピット7基が平坦部を占地してしまう。古墳時代後半には，1区に1基，2区に3基と平野部方向に円墳が2つの個所にわかれて存在する。奈良末，平安期では平坦部の遺構は姿を消し，1区東西谷部のみに火葬土壙・骨蔵器・建物等が谷内平坦部を利用して営まれている。

遺　物　1，2区において縄文時代の所産と考えられるサヌカイト製の石匙1点，スクレーパー2点が表採されている。弥生時代中期後半では打製石斧1点，打製石斧，石庖丁の未製品，及び剝片等約90点，サヌカイト剝片2点それらに伴う甕形土器，高坏形土器が少量検出されている。

弥生時代後期後半では比較的多くの土器片が出土している。甕形土器，壺形土器，高坏形土器，坩形土器等である。鉄製品として，鉇1点，直刀1点，石製品に砥石3点が住居址，袋状ピット等より出土している。

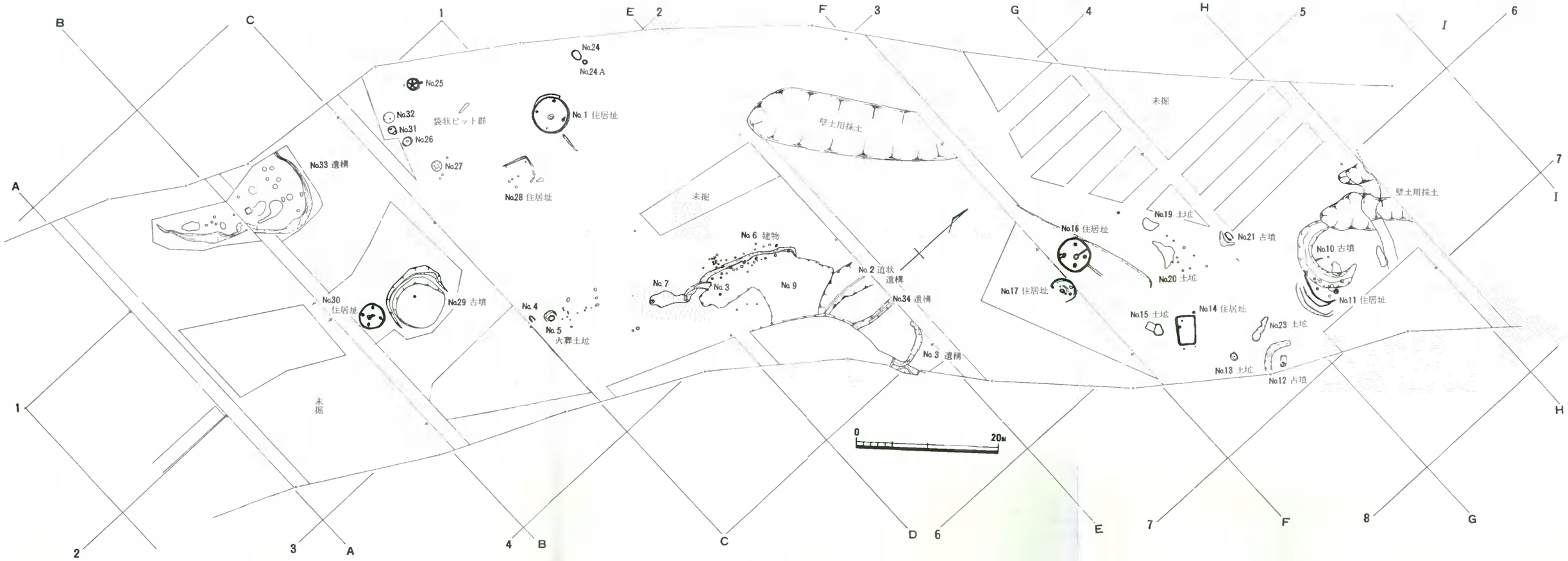
旦　原　遺　跡

古墳時代では6世紀後半の遺物が中心をしめており，古墳主体部内より完形品が出土している。須恵器坏身，坏蓋，提瓶，刀子，土製小玉等があげられる。

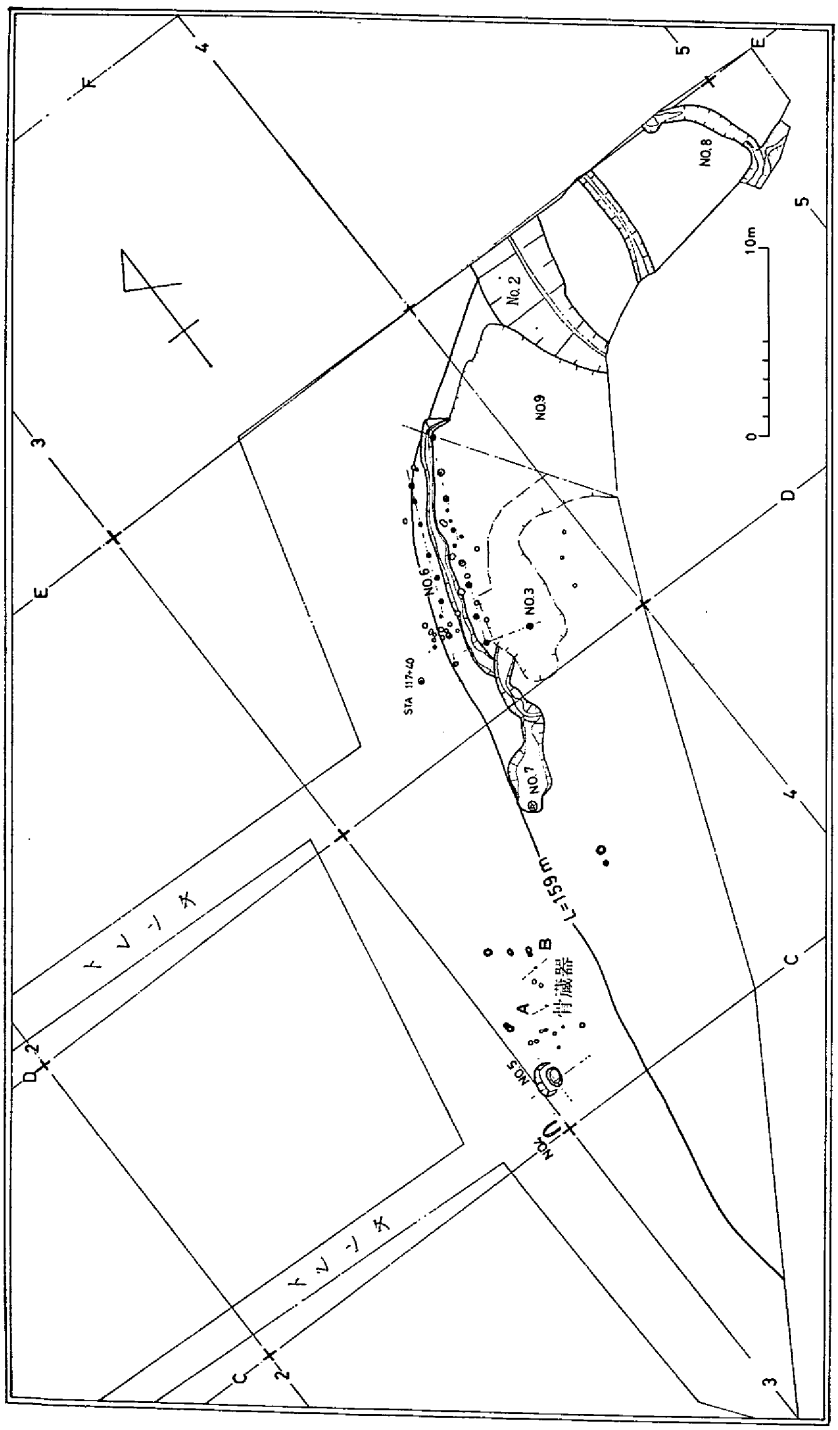
奈良末～平安期では遺物がほとんど谷内より出土したものであるが，平坦部からも須恵器小片が若干出土している。坏身，坏蓋，椀等の破片である。谷内では，骨蔵器に利用された坏身，広口壺等が3点，須恵器坏身，蓋破片，土師器甕片，手捏ね品等があげられる。　（高畑）

遺　構　一　覧　表　（表1）

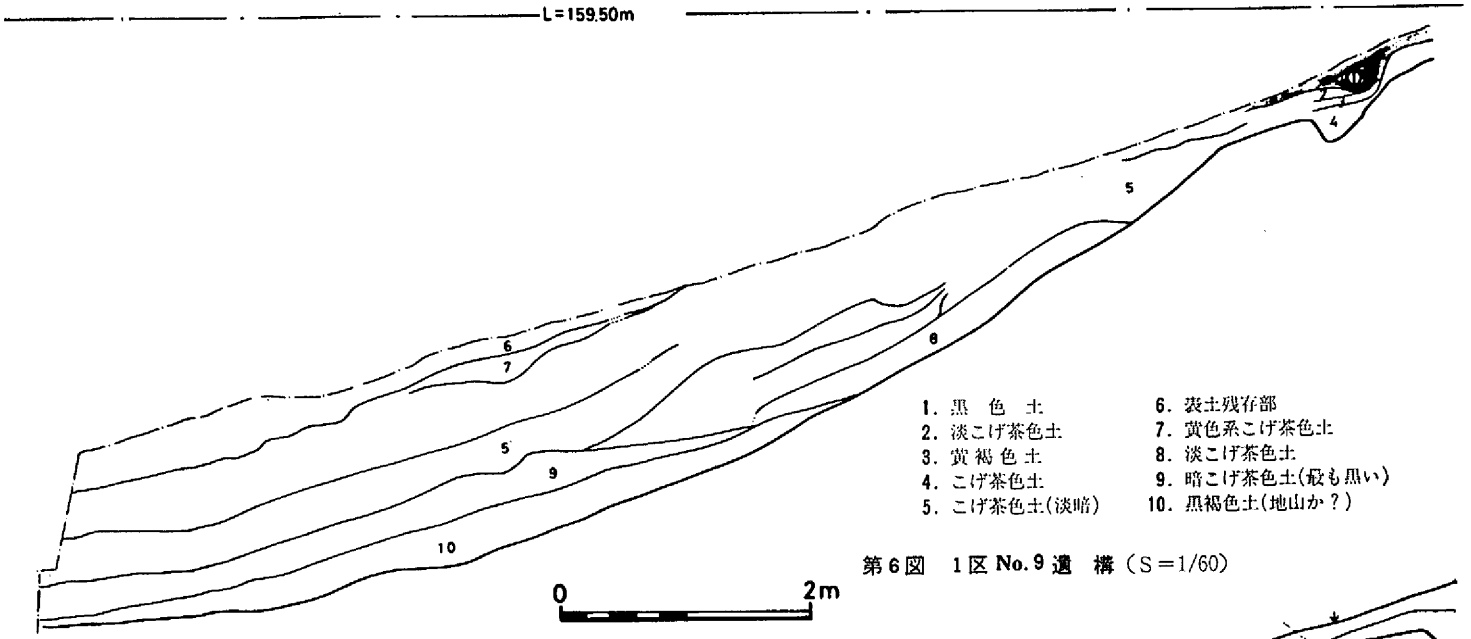
遺構番号	遺　構	地　区	担当者	図	図　版	備　考
1	住居址	1	山　磨	1	16-2	第一次調査にて一部検出
2	道状遺構	1	高　畑	—	15-1	
3	土　壙	1区東谷	高　畑	7	—	性格がつかめなかった。
4	火葬土壙	1区東谷	高　畑	10	—	斜面につくられている。
5	火葬土壙	1区東谷	高　畑	11	11-1	炭，焼土，土器片が混入している。
6	建　物	1区東谷	高　畑	14	14-1	
7	溝状遺構	1区東谷	高　畑	—	14-2	
8	溝状遺構	1区東谷	高　畑	9	15-2	
9	土　壙	1区東谷	高　畑	6	—	性格不明，自然堆積か？
10	古　墳	2	山　磨	28	29-1	主体部が確認できなかった。
11	住居址	2	山　磨	23	21-1	No.10古墳により¾位が破壊されている。
12	古　墳	2	山　磨	29	31-2	約½を調査し，他は用地外である。
13	袋状ピット	2	山　磨	19	27	
14	住居址	2	山　磨	24	24-1	長方形プランを有する。
15	土　壙	2	山　磨	—	—	
16	住居址	2	山　磨	25	26-2	床面より上部で直刀が出土している。
17	住居址	2	山　磨	26	26-2	No.16南に尾根あわせで出土
18	土　壙	1	山　磨	—	—	
19	土　壙	2	山　磨	27	26-2	土器溜り
20	土　壙	2	山　磨	27	26-2	土器溜り
21	古　墳	2	山　磨	32	33-1・2	三日月状の溝を有する。
22	土　壙	2	山　磨	—	—	
23	土　壙	2	山　磨	—	—	近世のものか？
24	袋状ピット	1区平坦部	山　磨	19	18-1	
25	袋状ピット	1区平坦部	山　磨	18	18-2	
26	袋状ピット	1区平坦部	山　磨	19	27	
27	袋状ピット	1区平坦部	山　磨	—	27	
28	住居址	1区平坦部	山　磨	38	17-1	
29	古　墳	1区平坦部	山　磨	20	19-1	主体部は確認できなかった。
30	住居址	1区平坦部	山　磨	17	17-2	鉈が出土している。
31	袋状ピット	1区平坦部	山　磨	18	27	
32	袋状ピット	1区平坦部	山　磨	18	27	
33	溝，土壙	1区西谷	山　磨	21	20-1	
34	溝	1区東谷	山　磨	—	—	



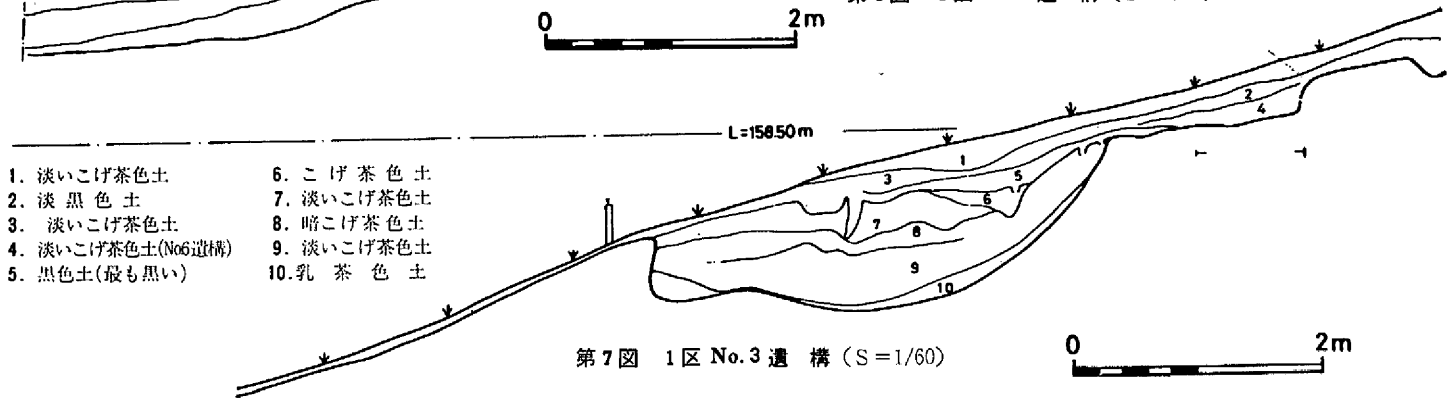
第4図　旦原遺跡遺構全体図（S：$\frac{1}{500}$）



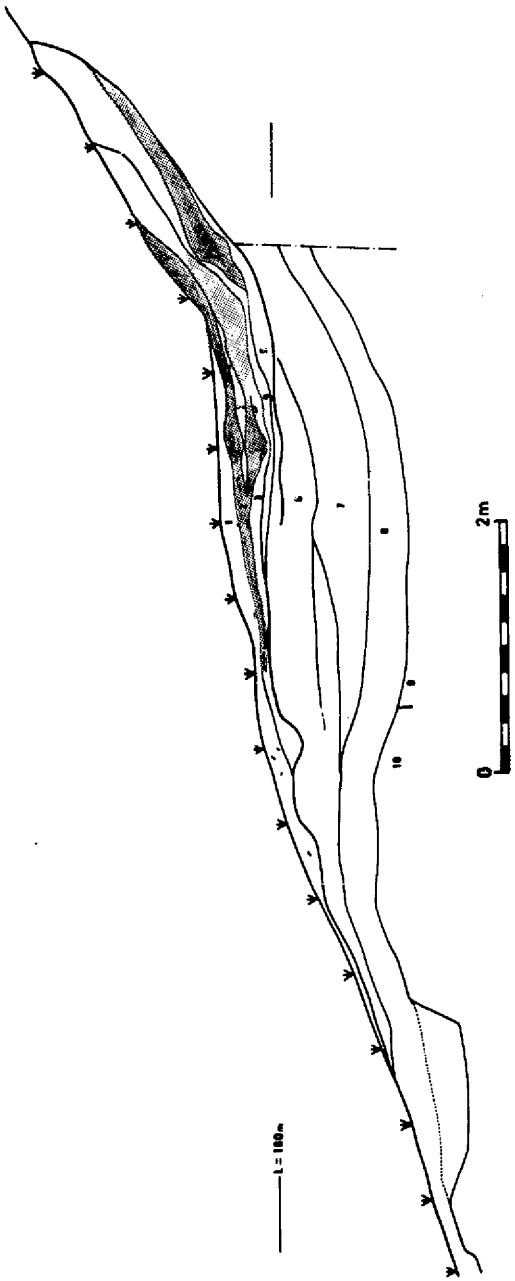
第5図　1区第一次調査地区（S＝1/400）



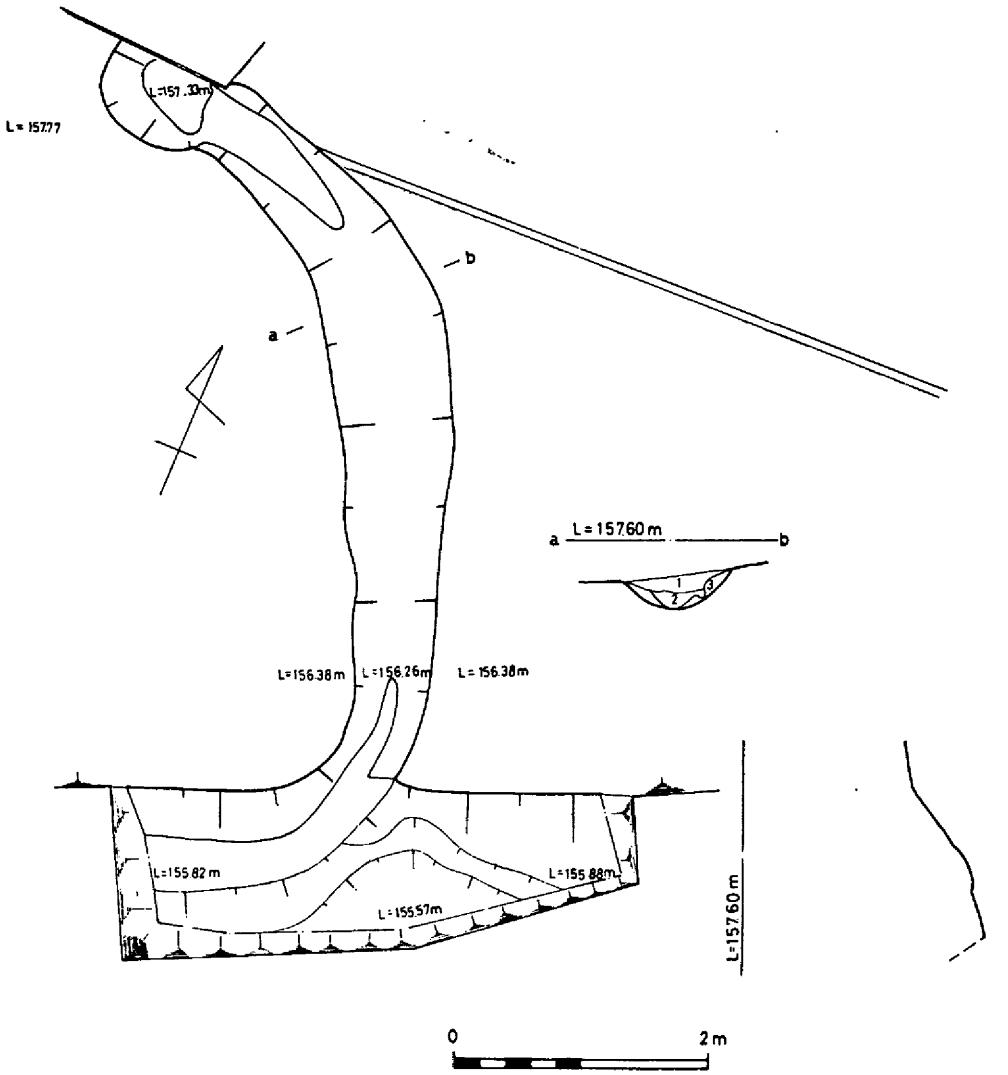
第6図　1区 No.9 遺　構（S＝1/60）



第7図　1区 No.3 遺　構（S＝1/60）



第8図　1区 No. 4 遺構土層断面（S＝1/60）



第9図　1区 No. 8 遺　構（S＝1/60）

1区東谷北東部

17地点ほぼ中央部に谷頭が存在しており，火葬土壙，骨蔵器等の存在したテラスより若干低い所にNo.2・3・6・7・8・9・34等の遺構が存在する。この部分は谷の東側を通る山道が谷頭付近にて東・北西方向に分岐し，西河内地区にぬける道が旦原遺跡の丘陵を横断している。縦貫道路を横断して現在の垂水・西河内線に拡幅されている。谷頭付近より北に向って約10mの長さで検出したNo.2・8及びNo.34は時期を決定するものは発見できなかったが，横部地区より西河内地区に抜ける古道の可能性が考えられる。No.2は規模等より最もその可能性が強いものである。（高畑）

No.3　遺　構（第7図）

当初，土壙としてとらえたが凹地に長年にわたる黄褐色地山土の自然堆積である可能性が出てきた。まず，人工的なNo.6遺構溝内に堆積した淡こげ茶色4土層は，奈良末～平安期の須恵器片を含むが他の土層では遺物を発見することができなかった。凹地に自然堆積した淡こげ茶色7土層にこげ茶色6土層を堆積せしめる溝状の掘り方がみられ，そこに平坦部を形成している。しかし，そこにも遺物はみられず，さらにその上面の黒色有機5土層中にも何ら検出することは出来なかった。ここでは，一応淡こげ茶色7土層上面までを文化層と考えておきたい。（高畑）

No.9　遺　構（第6図）

本遺構も当初土壙としてとらえたが，No.3遺構に類似しており同様のものと考えられる。約25°の傾斜をもつ谷部に長年にわたり自然堆積したものであると考えられる。こげ茶色4土層がNo.6遺構内に堆積しており，奈良末～平安期の遺物を含んでいる。こげ茶色5土層以下においては，やはり一片の土器片も検出できなかった。こげ茶色5土層が，No.6遺構使用当時にあっては比較的平坦，あるいは緩斜面を形成していたものと思われる。それ以前の時代に直接この場所が利用せられた痕跡は確認することができなかった。（高畑）

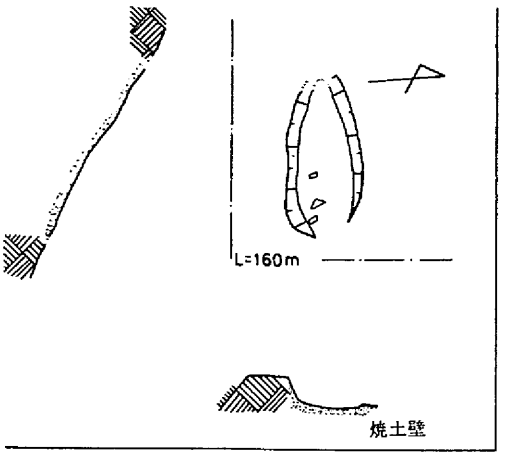
1区東谷南西部（第8図）

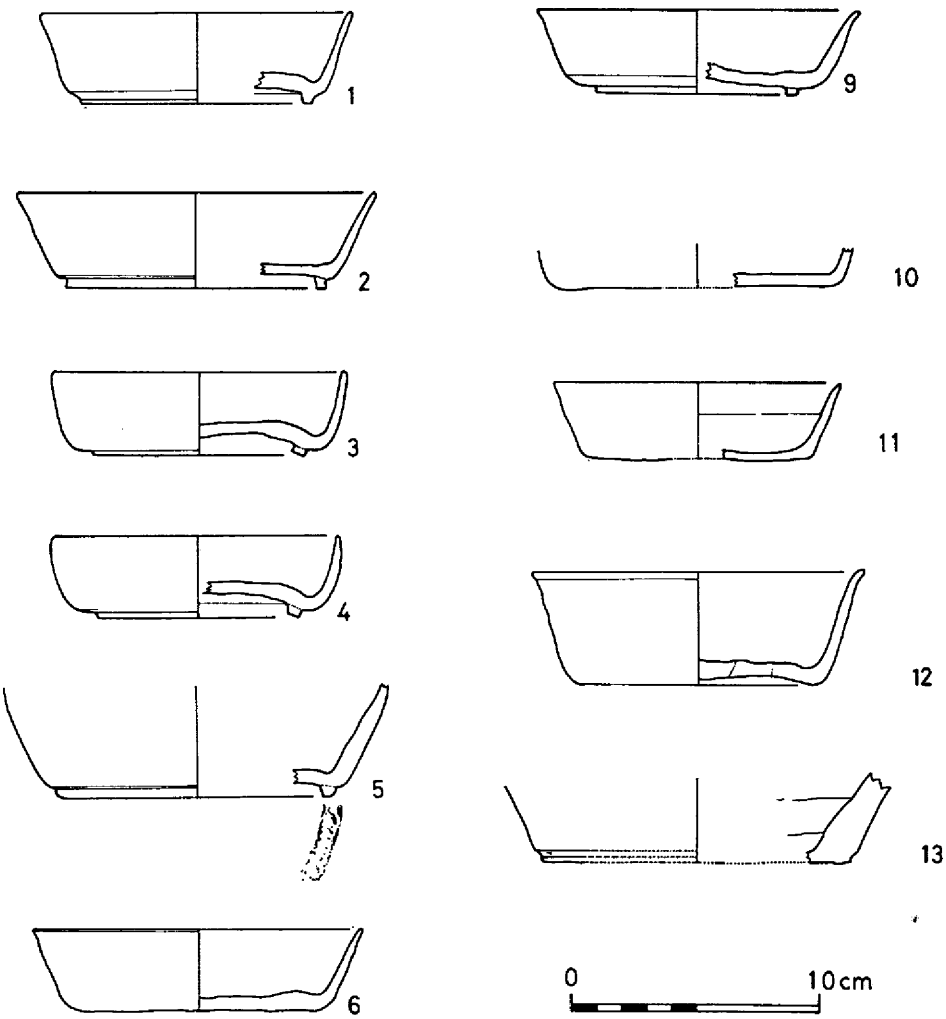
ここではNo.4遺構より続くテラスを含めた土層断面を中心に観察してゆく。

東谷南西部でも基本的に北東部の土層形成と同様の断面がみられる。ここでも，谷に向う傾斜にそって長年にわたる地山（粒子の細かいもの）の自然堆積がみられ，地表より約130cm掘開を行ったところで，幾分硬質の淡乳黄白色9土層にぶつかる。そこより上部には平均幅30cm位の3層の堆積土がみられ，その上層あたりより黒色系の土層に変化する。初めて遺物を包含する層がみられるのは，こげ茶色4土層からであり，これは地表下40～45cmのところである。この層下面が東谷内のテラスを形成している基盤となっていると考えられる。そこより上層にかけてはNo.4土壙の影響をうけて，焼土ブロック・炭・須恵器片等が混在して出土している。土器類は，淡こげ茶色3土層中より含まれはじめ，とくにテラスの範囲に多い。それらは，すべて破片であり奈良末～平安期の坏身が多くみられ，弥生後期後半・古墳時代後半のものがわずかに含まれており，No.4遺構に伴うものとは別に平坦部より，ころがり落ち累積したことをものがたっている。（高畑）

No.4　火葬土壙（第10図）

全長130cm，幅60cm，深さ25cmを測り，約30°の傾斜をもった舟形を呈する土壙である。土壙内面は薄い焼土壁がU字形にみられ，その底部より焼土ブロック，炭と共に須恵器の壺の胴部小破片が3点





第10図　No.4 遺構・遺物（S＝1/60・$\frac{1}{3}$）

出土している。その下方に広がる幅4～5m，長さ30～35mのテラス状の南部分（10，13地点）を中心に地表下40cm間に遺物が出土している。その淡黒色土層中に弥生時代後期終末壺形土器片2，古墳時代後半坏身小片2，カナクソ1を混在するが，おもに第10図に図示した須恵器片が中心に出土している。ここでは，No.4土壙内出土土器片13が10，13地点より出土した土器片と接合できることより一応の同時性を判断している。

遺　物（第10図，図版40）

大半が坏身のみにかぎられており坏蓋は小片が2点のみであった。しかも，ほとんどが破片であり完形品は7のみである。坏身は，付け高台のもの14点（破片であるので同一個体が重複したおそれもある），高台のないものが5点という3：1の割合である。まず高台付きのものから説明をすると，器形は**Aタイプ**（1，2，7，8，9）**Bタイプ**（3，4）の2タイプにわけることができる。

Aタイプは若干上げ底ぎみの底部より体部にかけて65°～75°の外傾をもって立上がり口縁部を少し外反させ，口縁端部を細くシャープにひき出している。体・口縁部は横ナデ調整がおこなわれている。高台は体部より底部に向う屈曲部直下に粘土紐を貼り付け，横ナデにより丁寧に仕上げている。高台底に5のように刻目のみられるものがある。2，7，8等の底部外面には約1cm幅の粘土紐左巻上げの痕跡が明瞭である。口径は11.5cm～14.2cmを測り，若干のバラツキがあるが器高は3.2cm～3.7cmとほぼ均一したものである。参考までに完形品の計測値をあげておくと口径12.64cm，高台外径8.87cm，器高3.8cm，体部傾斜66.5°，ロクロ回転右回りである。

BタイプはAタイプよりさらに上げ底ぎみの底部より体部にかけて丸みをもって内湾させてほぼ垂直に立ちあがり，口縁端部をも内湾ぎみに仕上げている体・口縁部は横ナデ調整がおこなわれている。高台は体部より底部に向う屈曲部よりヤヤ内側に粘土紐を貼り付けAタイプより鈍く扁平に仕上げている。底部内外面に仕上げナデがほどこされている。

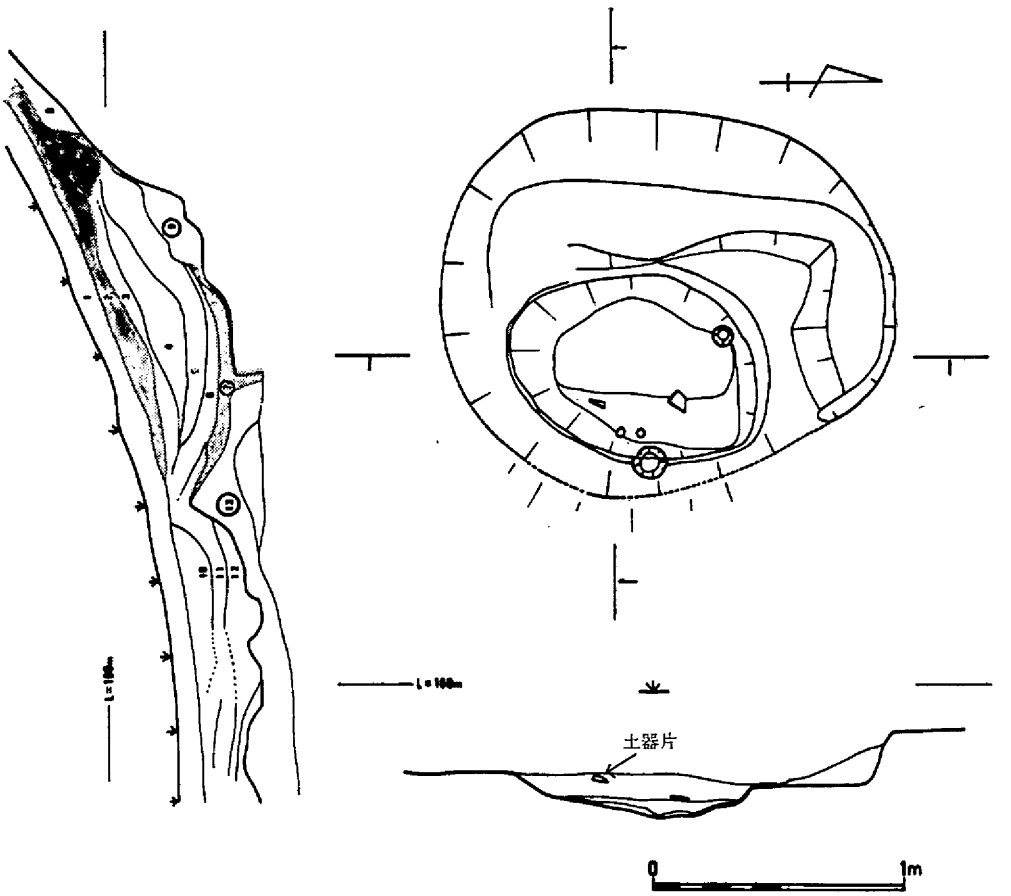
高台のつかないものは5点出土している。図示可能なものは3点のみである。器形は同じく**Cタイプ**（11），**Dタイプ**（12）の2タイプにわけることができる。

Cタイプは平底にて暗黄褐色を呈する土師器である。須恵質のものとくらべると器壁が多少厚いようである。口径11.5cm，器高3cmを測り，体部，口縁部は横ナデ調整がおこなわれている。底部屈曲部は2mm～3mm間隔に刻目がみられる。

Dタイプは若干上げ底ぎみの底部より体部にかけて74°の外傾をもって立ちあがり口縁部を少し外反させ，口縁端部を細くシャープにひき出している。体部・口縁部は横ナデ調整がおこなわれている。底部外面は粘土紐の接合痕跡が明瞭であり，丸みをもつ屈曲部分に3mm間に刻目がみられる。

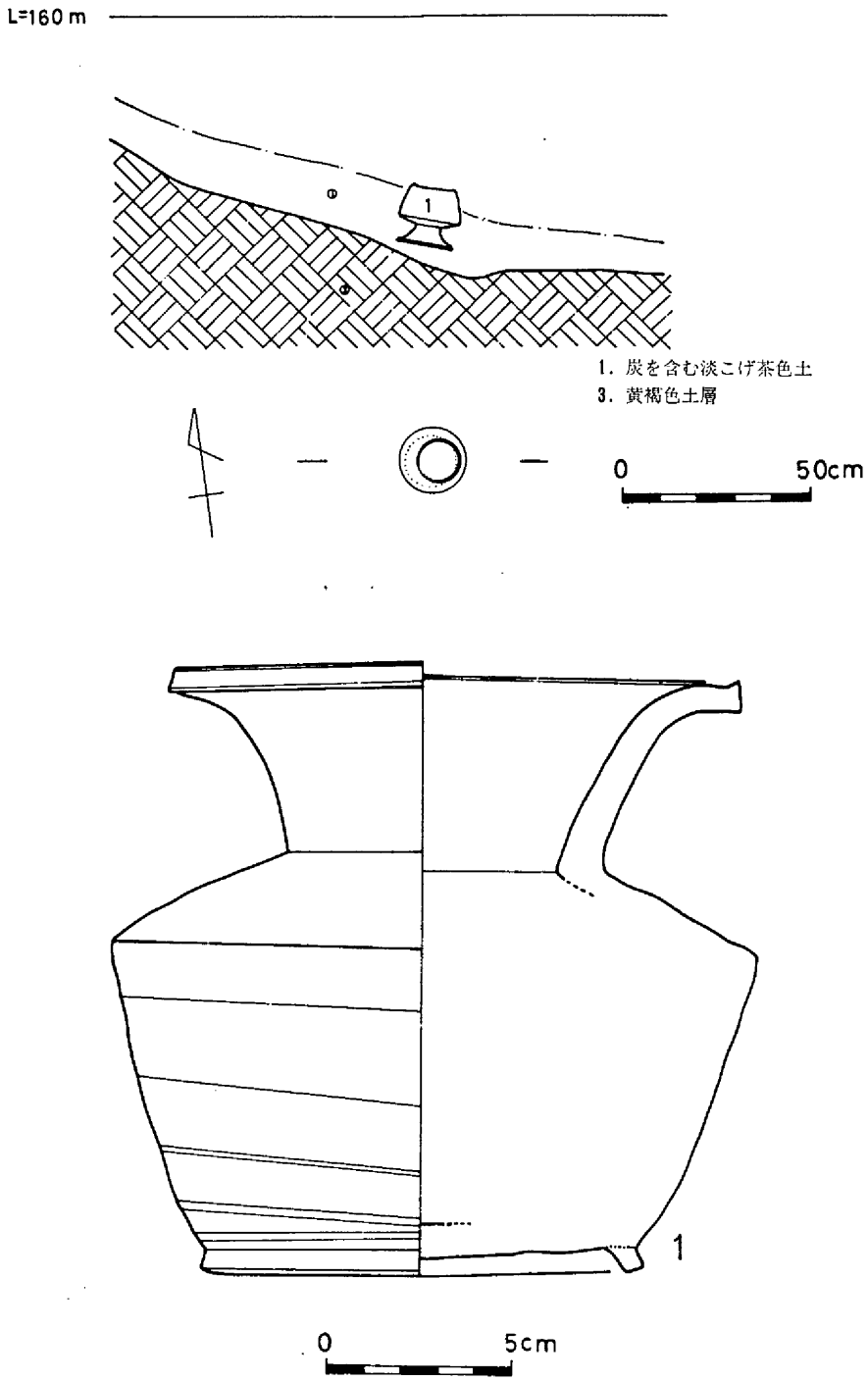
13は底径12.6cmを測る。壺形土器の底部片である。13はNo.4土壙内から出土した破片とテラス部分より検出した土器片の接合が可能であり，壺になることが判明した。胴部内外面とも横ナデ調整がおこなわれている。底部周縁に高台状の細いつくり出し部分がみられる。

出土須恵器は，色調青灰色を呈するものが多く，淡青色のものが若干存在する。焼成は非常によく硬質に焼きあがっており胎土中には石英，長石，雲母の小砂粒（ごま状）により白黒の点々がビッシリみられる。土器全体が薄手にて仕上げられており鋭さを感じさせるものが多い。土器の回転はすべて右回りである。（高畑）



1. 淡茶色土(表土、耕作土)
2. 黒色土(硬質にてカット面は黒光りがする)
3. 淡こげ茶色土(炭を含む)
4. こげ茶色土（炭を含む)
5. 淡こげ茶色土(炭を含む)
6. 暗こげ茶色土
7. 黒色（炭の堆積層)
8. 暗茶褐色土
9. 焼土(炭、土器片を含む硬質)
10. こげ茶色土
11. 淡黒色土(7と時間的に同様のもの)
12. 淡こげ茶色土
13. 黄褐色土(堀り方底)

第11図　1区 No. 5 火葬墓（S＝1/30)



第12図　1　区　骨　蔵　器（S＝$\frac{1}{2}$）

No. 5　火葬土壙（第11図，図版10・11）

1区平坦部よりの斜面が東谷部のテラスに移る屈曲部分を利用して，地表より35～40cm下に横幅180cm，縦157cmを測る楕円形の土壙を設けている。土壙下端部分に粘土9を配し，さらにその内側に横100cm，縦75cmの小土壙が掘りこまれている。二段からなる土壙底は非常によく焼けており，とくに小土壙内面は硬く焼土壁化していた。その中に約5cmの炭層7が堆積しており，炭，焼土ブロックに混在して器面が荒く胎土中に粗い砂粒を含む土師器の大型甕，壺の小破片（最大で3×2cm）39点が含まれていた。その中に小片のため器形が不明であるが，指紋を表面全体に残す棒状の手捏りがある。それらは二次的に火をうけて黒ずんだり器内外面の調整が剝離しているものが若干含まれる。

このNo.5火葬土壙より約4m北東部の同テラス上に**骨蔵器1**，そこより2m北東部に**骨蔵器2**が出土している。13土層上に存する。

骨蔵器1（第12図，図版39-1）

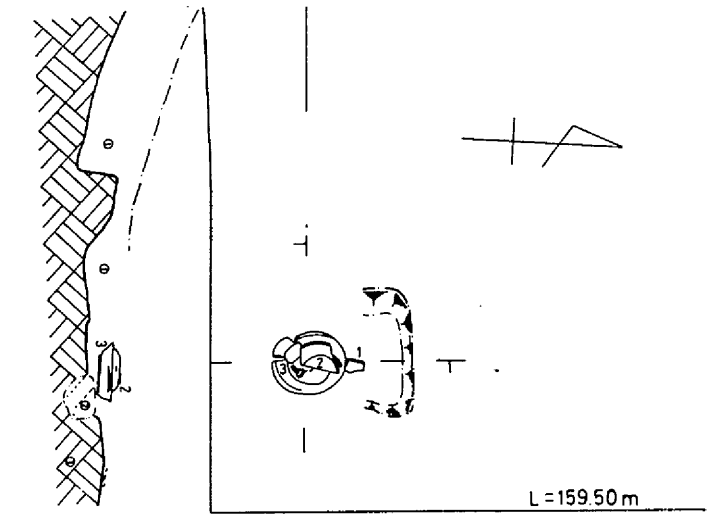
口縁部を地面につけた逆立の状態で検出され広口壺である。残存土層を入念に調べてはみたが，上部からの土壙掘り方を確認することができなかった。壺広口部分に土が充満しており，それを除去すると壺内$\frac{1}{3}$位のところまで焼けた骨片がみられた。

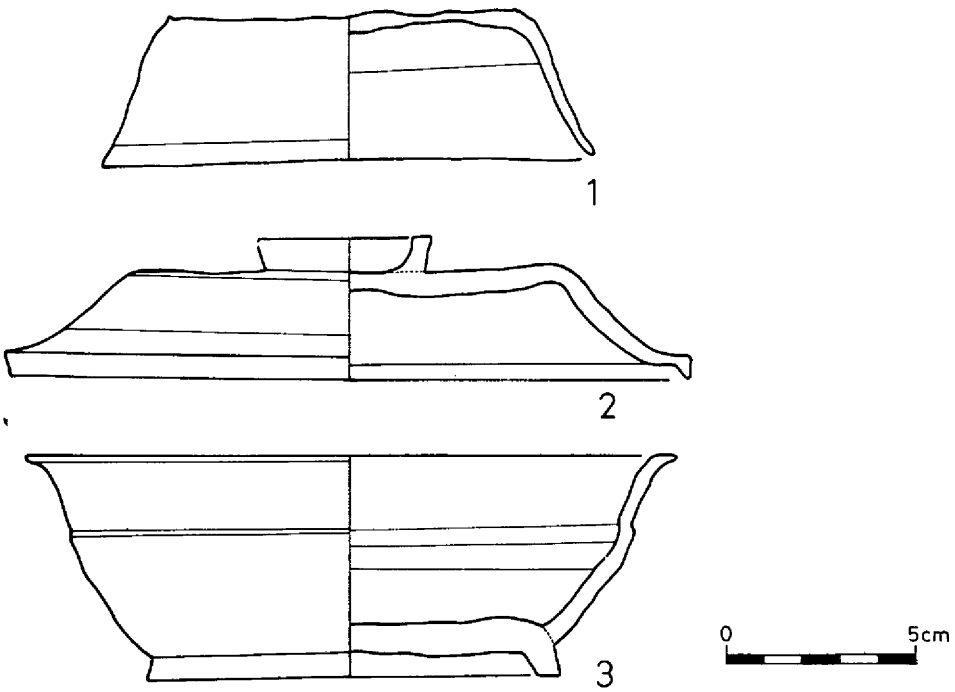
口径15.2cm，頸部くびれ部径8.5cm，肩稜線部分径17.4cm，底部高台径12cm，器高16.55cmを測り，青灰色を呈する広口壺である。口縁部，頸部は丁寧な横ナデ調整を行い口縁端部等は非常にシャープに仕上げられている。口縁外面部に粘土紐にて補修した部分がみられる。それにひきかえ胴部の調整には粗雑さがみられる。特に肩部稜線下位にそれが目立ち，体部にヘラによる縦方向の面とり状の削りをおこない，そして体部下位に斜行するカキ目調整，さらにその部分の凸凹を横ナデにより調整しているが完全に調整しきれず凸凹面を残している。そのことは，口縁からくびれ部，くびれ部から肩部稜線，肩部稜線から底部，と三段階に分けて接合製作されたことをものがたっている。そして最終的に付け高台を行っているようである。外面底部は中央部に指紋，外周に横ナデが施されている。頸部くびれ部内面には接合時の筋状の痕跡を残し，胴部稜線部内面では外面の稜線より鋭角な面が指頭により感じられた。

骨蔵器2（第13図，図版39-2）

骨蔵器1と同様の出土をしているが，出土状態をみると3個体が重なりあっていることなどから骨蔵器1とは異なり埋葬時の状態であろうと考えられる。3個体とも土圧により破損している。埋葬土壙を検出するため残存土層を入念に調べてはみたが上部からの土壙を確認することはできなかった。**13土層**において稜椀の底部が接着している面をみると約5cm掘りさげられた状態を呈している。容器内は土が充満しており骨を確認することはできなかった。

1は骨蔵器の上位の蓋としてもちいられていたものであり，体部には自然釉が観察できる，口径13.15cm，器底9.4cmを測り，色調青灰色を呈する須恵器坏身である。坏身は底部より体部に向って66.5°の外傾をもって立ちあがり体部全体を外反させ，口縁端部を若干外反させて細くシャープに仕上げている。体，口縁部は横ナデ調整がおこなわれており，外面底部は左巻きの粘土紐痕跡が外周に向って紐幅の間隔が広くなっているのがみられる。底部外縁に高台状の細い凸部が一巡している。土器の回転方向は右回りである。





第13図　骨　蔵　器　2（S＝$\frac{1}{2}$）

2は1と3の中間にあり納骨そのものの蓋であろう。口径18.2cm，天井部11.6cm，環状ツマミ径4.6cm，器高3.8cmを測り，色調暗赤褐色を呈する土師器坏蓋である。器高約$\frac{1}{3}$の高さに稜線をもち11.6cmの平坦部を有し，その中央部分に外傾しながら内湾しておさめる環状ツマミが貼り付けられている。そのツマミと稜線間に粘土紐の接合筋線が一巡して残り凹部をつくっている。平坦部外周の稜線は1の坏身底外周にみられた凸部と同手法により生じたものである。体，天井，口縁部は横ナデ調整がおこなわれており，内面底には仕上げナデが行われている。土器の回転方向は右回りである。

3は重ねられた最下位より出土した納骨そのものの容器である。口径17.35cm，器高6cmを測り，色調赤褐色を呈する土師器稜椀である。平坦な底部より体部にかけて52°の外傾をもって立ちあがり，器高約$\frac{1}{3}$の高さにてワンクッションをおき稜線を設け，そこより口縁部にかけて著しい外反がみられ，口縁端部に0.6cmの平坦面をつくり出している。体，口縁部は横ナデ調整が行われている。高台はツケ高台というより底部と共に作り出された感じがつよく，破損の状態も底部，高台の接着のままにて体部のみが細く破損している。2とセット関係をなすものと考えられ，焼成，胎土ともに良好であり，特に胎土は精製された粘土をつかっている。（高畑）

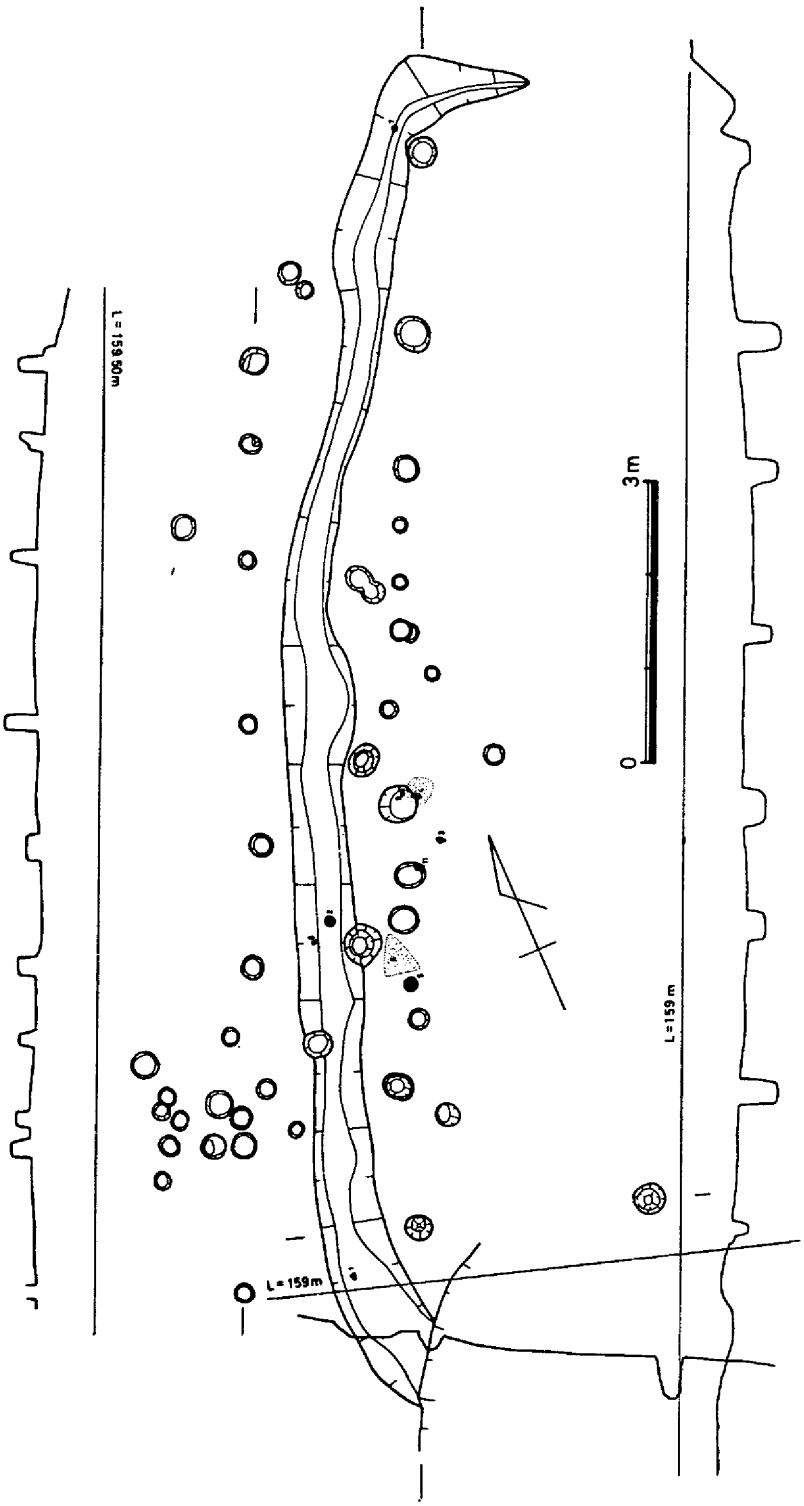
No. 6　遺　構（第14図，図版13-1・14-1）

1区東谷緩斜面にコンターに平行し，コ字状の溝を有する建物状の遺構である。No.7遺構により南端部に削平をうけ，東側部分は流失の観を呈す。溝全長145m，幅は均一ではないが約50cm，深さ25～30cmを測りその溝をはさむ柱穴列をもつ。それらの柱穴は溝上端よりほぼ均一した距離に存在するが，向い合う柱穴の主軸方向が異なり，向きあうものもあるが溝内柱穴の間にくるものもある。あるいは，溝内側のみの柱穴によって建物状のものがつくられた可能性も考えられる。柱間距離は150cm～200cmとバラツキがみられるが，柱穴内含土は同質のものであり南端部柱穴には東側約250cmに梁間を構成する可能性もある柱穴が検出されている。

遺物は，溝内（1，2，7，8）・溝内側柱穴周辺（3，4，5，9）より比較的まとまって出土している。

遺　物（第39図，図版40-2・3）

溝内より須恵器坏身片2点・土師器坏身片2点の4点，柱穴周辺より須恵器坏蓋3点・坏身片1点土師器甕形土器1点の4点が出土している。1は，口径13cm，器高3.8cmを測り，色調青灰色を呈する坏身である。若干，突出する底部より体部にかけて70°の外傾をもって立ちあがり，口縁部を少し外反させて端部に及んでいる。8も同様のものであるが器壁が薄くつくられている。2・4は，底部にツケ高台をもつ坏身である。4は体部に横ナデ調整がおこなわれており，底部内外面に仕上げナデがみられる。2・7は器面の剝落により整形が不明瞭である。3は，口径18cm，器高3.15cmを測り，色調淡青灰色を呈する坏蓋である。器高$\frac{1}{3}$位のところに稜線がみられ，天井部に環状のツマミが接合されている。5は，本遺構にあっての完形品である。口径12.85cm，器高2.3cmを測り，色調青灰色を呈する坏蓋である。器高の約$\frac{1}{2}$のところに径8.8cmの平坦部を形成する天井部稜線をもち，ほぼその中央部分に7mm高のツマミを接合している。口・体部に横ナデ調整がおこなわれている。それにより引き出された口縁端部の鋭さは，骨蔵器1等の広口壺口縁端部に酷似するものである。土器の回転は右回りであり，天井部裏面には鋭い粘土の回転稜線を残す。6は，口径28.6cm，残存高12.5cm・胴部



第14図　No.6 建 物（S=1/80）

最大径27cmを測り，色調暗茶褐色を呈する土師器甕である。胴部より「く」の字状に外反する口縁を有し，器最大径をそこにもつ比較的丁寧につくられた土器である。胎土中に粗い砂粒を含むが，器壁は均一して薄手につくりあげられており，焼成も良好である。胴部外面には，くびれ部より右下に斜行する櫛状のナデが施され，くびれ部より約2cm下位から同一工具による整然とした横ナデを行い，斜行のナデが消されている。口縁部内外面は横ナデにより仕上げられ，若干垂れぎみの口縁端部が造り出されている。

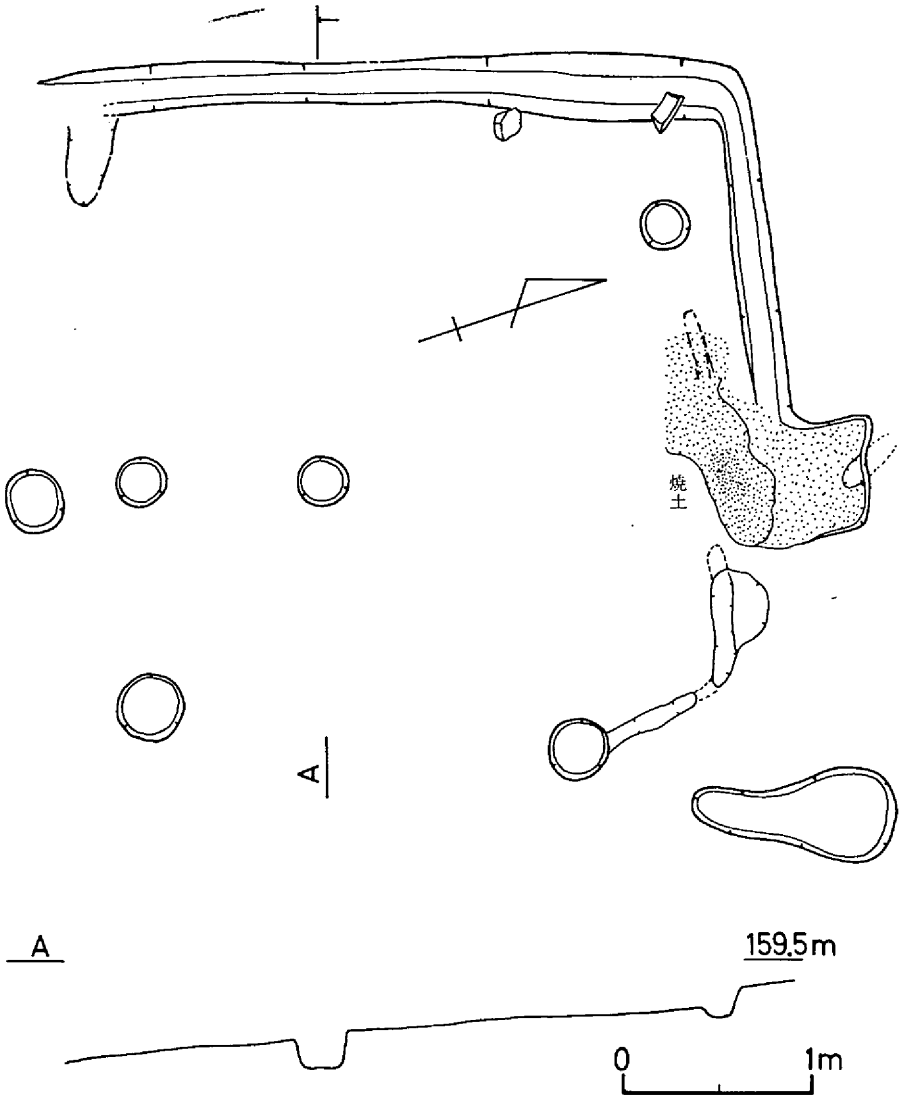
16地点出土遺物（第14図，図版40-3）

No.6遺構付近の表土剝ぎの段階で出土したものである。No.6の遺物と同一に扱えるものとして掲載した。10は環状ツマミ部分である。ツマミ外径6cmを測り，坏蓋の大形のものと考えられる。11，12，14も同じく須恵器の坏蓋である。12は完形品であり，口径12.7cm，器高2.2cmを測り，色調青灰色を呈する。体部に丸みをもち，ほぼ均一した器壁で仕上げられており天井部中心に幅2.3cm，高さ0.5cmのツマミがつけられている。14等は重ね焼きの痕跡をとどめている。土器の回転は右回りである。（高畑）

参考・引用文献

（註1）岡山県教育委員会「西原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（6）』1973年
（註2）岡山県教育委員会「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』1973年
（註3）落合町史

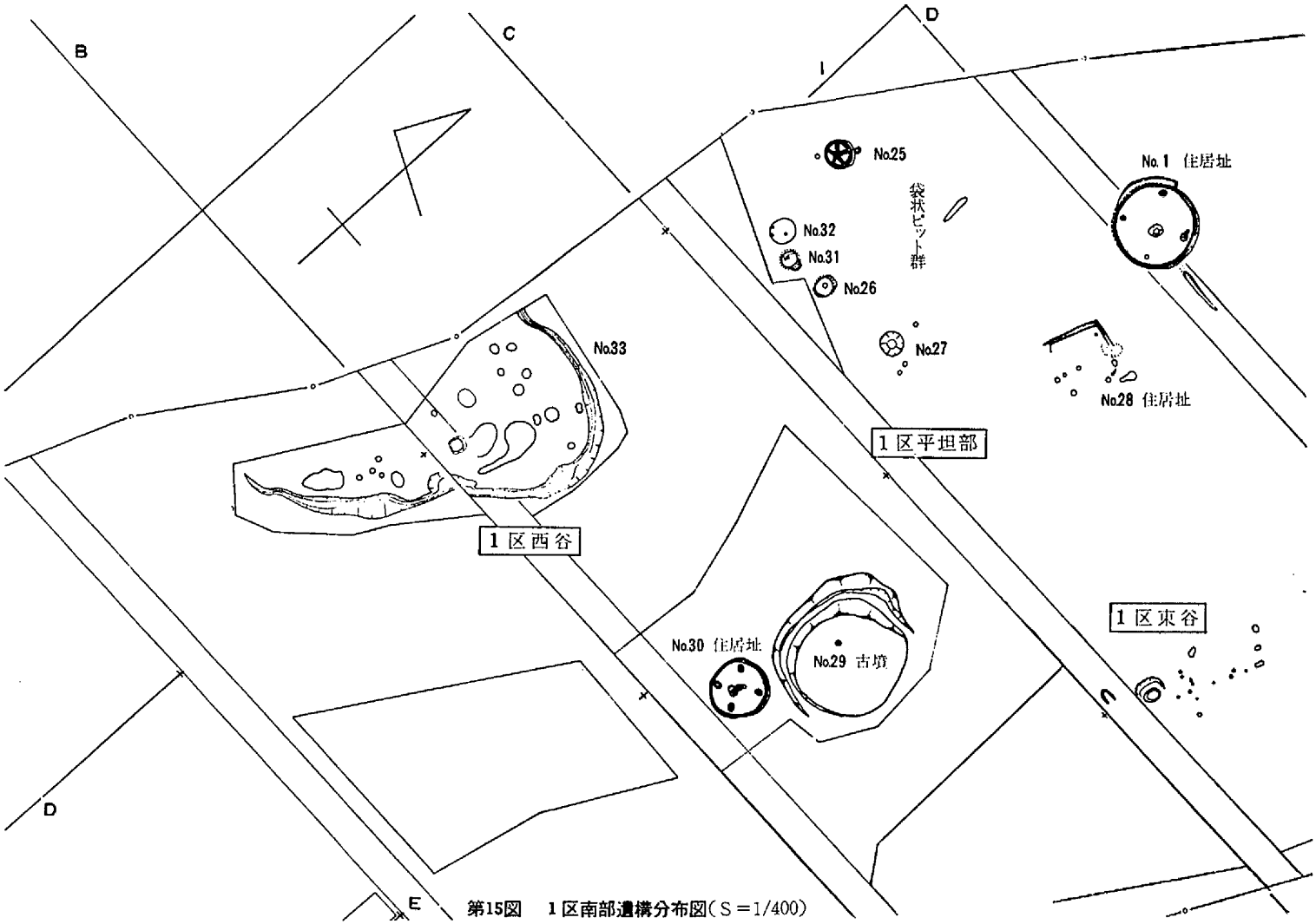
岡山県教育委員会「下河内調査区」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（5）』1975年
岡山県教育委員会「赤野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』1973年
岡山県教育委員会「穴塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（5）』1973年
岡山県教育委員会「西原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（6）』1975年
岡山県教育委員会「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』1973年
岡山県教育委員会「須の内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（11）』1976年
岡山県教育委員会「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（12）』1976年
落合町埋蔵文化財調査委員会「西河内中山遺跡」『落合町木材流通センター地区発掘調査略報』



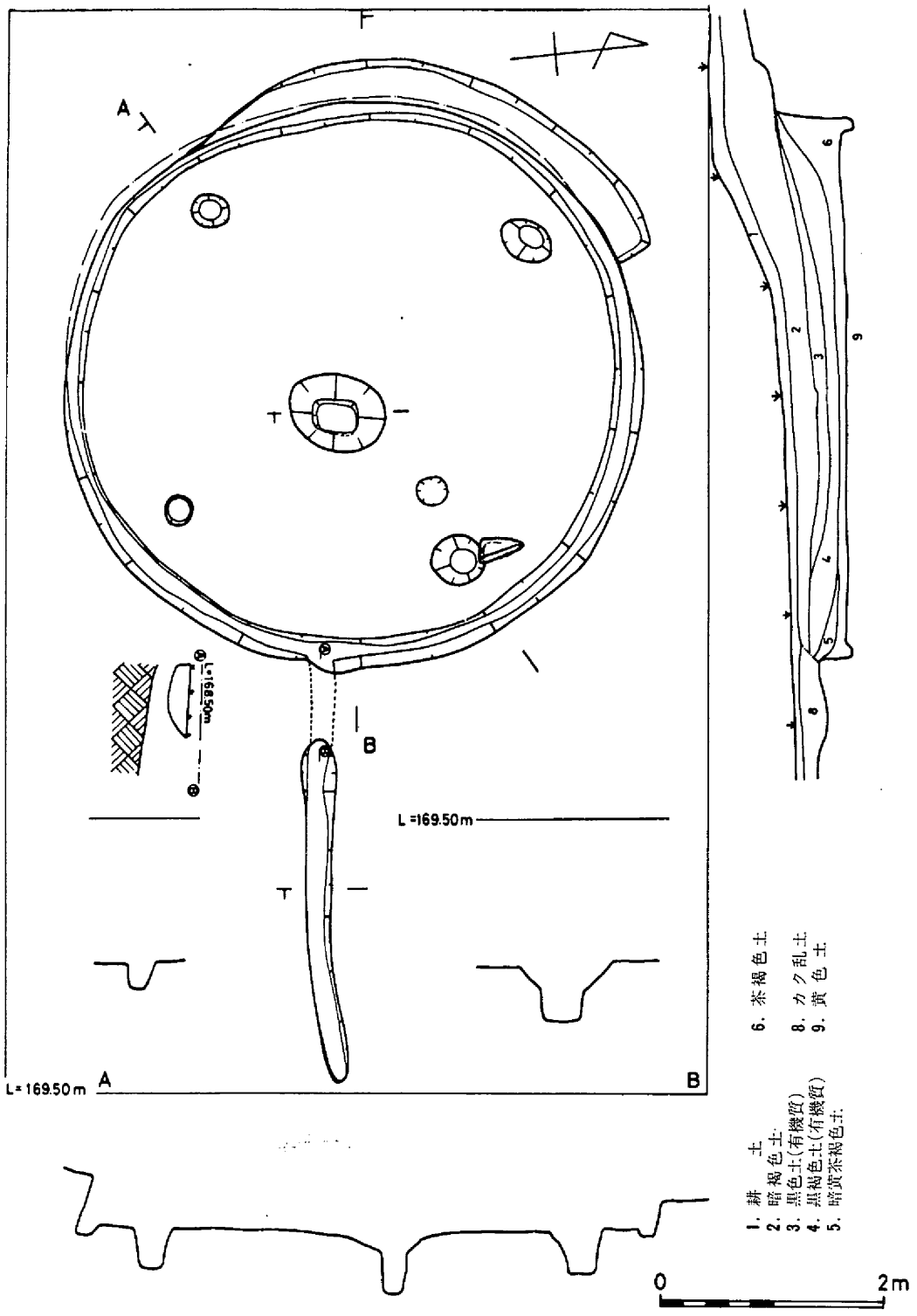
第43図　1区No. 28 住 居 址（S＝1/40）

No. 28 住 居 址

本住居址は2区の東斜面に位置していたため，住居の大半が消失している。平面形態は尾根側の残存状態より方形を呈すと考えられる。住居の掘り込みは尾根側の良好な場所で最大15cm程度である。柱穴は6本検出したが主柱穴と考えられる柱穴は確認できなかった。住居址北辺には壁より外側に最大幅80cm，奥行70cm掘り込みカマドを設けている。伴出遺物は，堆積土中より少量の土器片が出土している。（山磨）



第15図　1区南部遺構分布図（S＝1/400）



第16図　1区 No. 1 住　居　址（S＝1/60）

No. 1　住居址（第16図，図版16-2）

本住居址は1区の南斜面に位置している。平面形態は円形を呈し，最大径5.3m，床面積20.3㎡を測る。住居の掘り込みは残りの良い尾根側で60cm，谷側で25cm程度あり尾根側の一部では壁をえぐり込んだ状況を呈している。柱穴は住居内に5本検出し，その内主柱穴と考えられるのは壁より40～50cmの間隔を置く4本で径25～50cm，深さ35～40cmを測る。壁下の溝は幅20～25cm，床面よりの深さ10cmを測り，断面逆台形を呈し一周している。中央ピットは住居の中心よりやや谷側に位置し，上面で長径90×短径70cmを測る楕円形を呈し，下半では長辺40×短辺30cmを測る長方形に変化している。ピット断面は上面よりスリ鉢状に掘り込み途中からほぼ垂直に掘り込んでいる。住居址尾根側には，最大幅40cm，深さ10cmの浅い段状の施設が壁にそって長さ4mにわたり設けられている。また谷側には一部トンネル状をなす外溝が付属している。外溝は残存長3.8m，幅20cm前後，深さ20cm前後を測り断面U字形を呈している。溝低部レベルは，住居址本体と接する部分から溝端部まで約30cm低下している。

伴出遺物は，堆積土中より少量の土器片が出土している。（山磨）

遺　物（第37図，図版36）

7は，口縁端部が欠損しており残存高6.3cm，胴部径9.4cmを測り，色調赤褐色を呈する小型鉢形土器である。器内外面の剝落らしく整形が判断しにくい。2.3×2.2cmの不安定な平底を有し，そこより胴部にかけて黒斑がみられる。外面下半はヘラ状の工具により，内面は刷毛ナデにより整形されている。8は，坏部及び脚端部を欠損した色調赤褐色を呈する高坏形土器である。7以上に剝落が著しく整形を知ることができない。脚には外面からの4孔が穿たれており，坏部より中空部部分に向って突出状の物がのぞいている。2点とも周溝内よりの出土である。（高畑）

No.30　住居址（第17図，図版17-2）

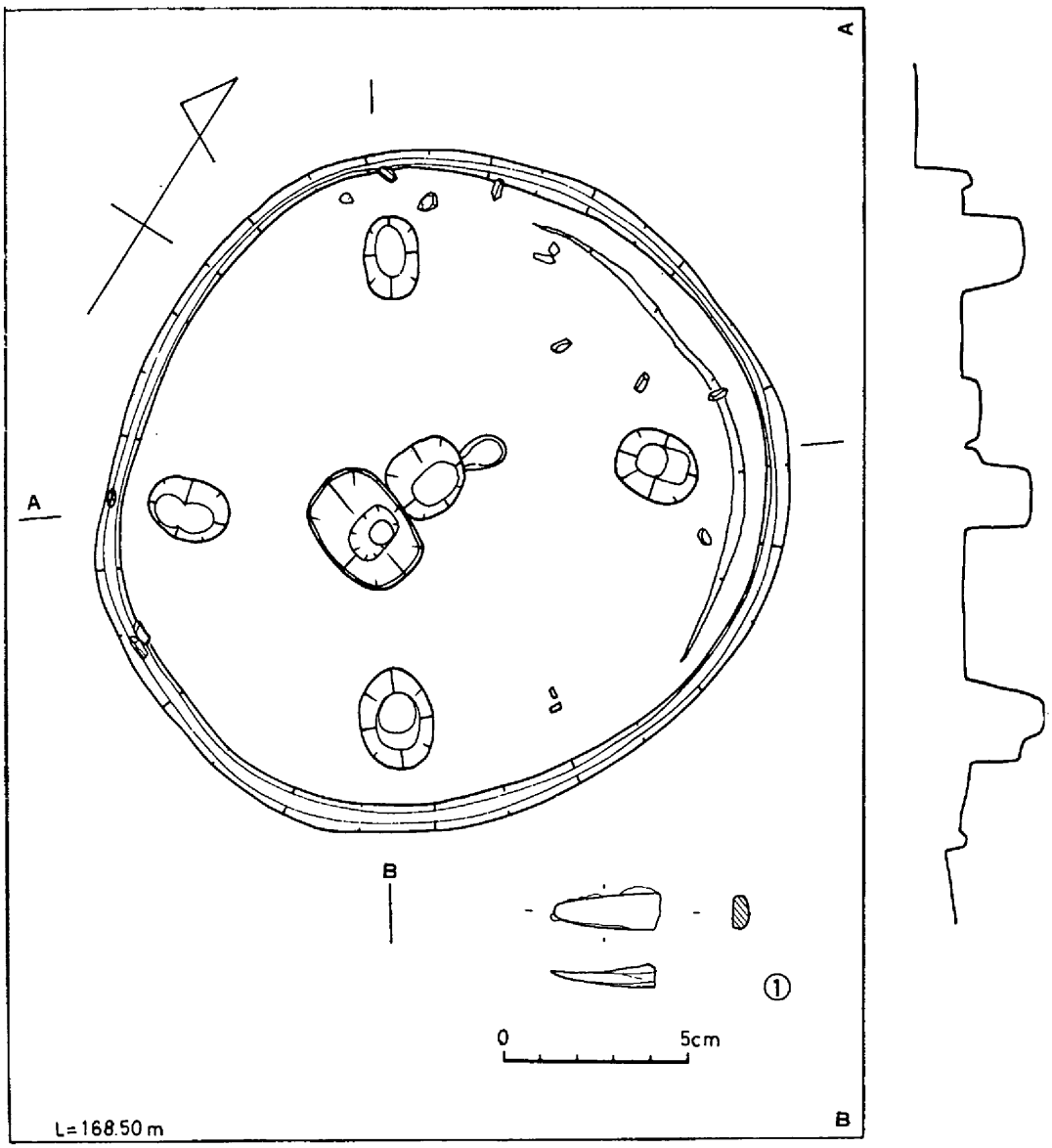
本住居址は1区の尾根上に位置し，№29と1mの間隔を置く。平面形態は円形を呈し，最大径3.8m，床面積10.3㎡を測る。住居は柱穴，溝，中央ピットが重複しており住居の建替えが認められる。壁の掘り込みは深い所で45cm，平均20cm前後を測る。柱穴は等間隔に4本検出し，最大径50cm前後，深さ20～40cmの楕円形を呈しいずれも重複している。壁下の溝は幅10～15cm，床面よりの深さ5cm前後を測り断面U字形を呈し一周している。溝は住居内側にも部分的に認められた。中央ピットは住居の中央に2カ所接して検出した。北側の旧ピットは最大径40cm，深さ35cmを測り，南側の新ピットは長径70cm×短径50cm，深さ50cmを測る。遺物は，土器片・砥石・中央ピットより鉈が出ている。

（山磨）

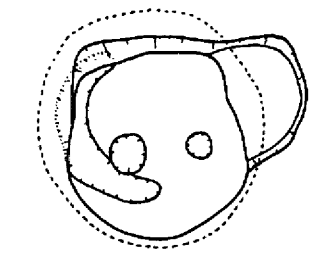
遺　物（第37図）

11は，口縁端部及び胴部が欠損しており頸部を中心に残存する壺形土器である。頸部より「く」の字状に折れまがる口縁に外反する拡張部分をもうけた複合口縁のものである。屈曲部径17.6cmを測る。口縁部内外面，頸部外面はナデにより，さらにその部分に丹塗りが施されている。この土器は，壺から器台に転用されたものである。12は，胴部が欠損しており，口縁部のみを残す甕形土器である。内外面とも剝落が著しく整形を確認することはできない。13は，底径7.2cmを測り，色調明茶色を呈する。胎土・色調・器壁厚ともに伴出土器と異なり硬質に焼きあげられている。これは袋状ピ

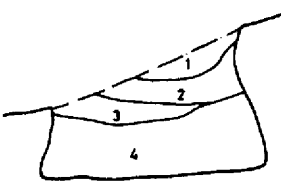
ットのNo.25に共通する特徴である。14は，口径12cm，残存器高12cmを測り，色調赤褐色を呈する甕形土器である。胴部中位に最大径を有し，頸部より口縁に向って「く」の字状に屈曲し口縁端部をひき出している。（高畑）



第17図　1区 No. 30 住居址（S＝1/40）

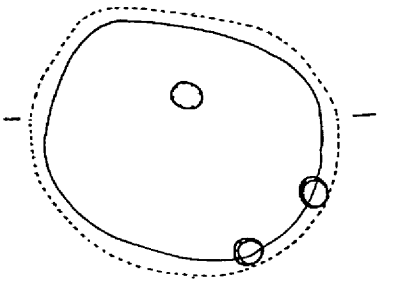


L＝169.20m

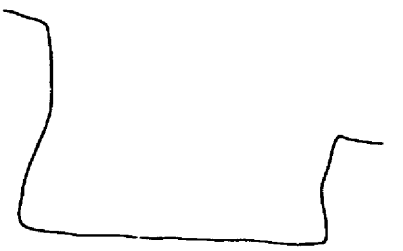


1．暗褐色土
2．黒褐色ブロックを含む
　　黄茶褐色土
3．暗黄褐色土
4．黄茶褐色土

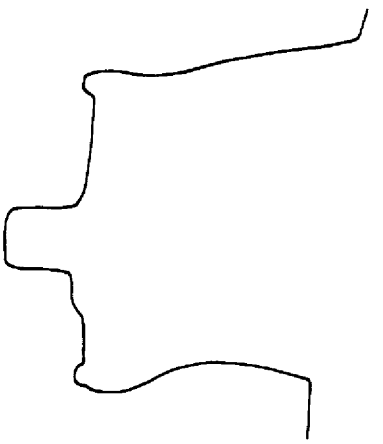
No.31袋状ピット

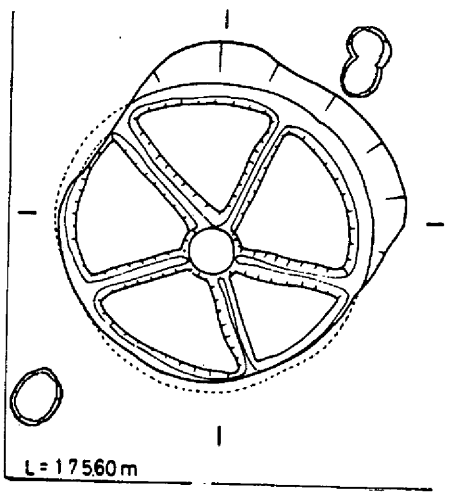


L＝169.40m



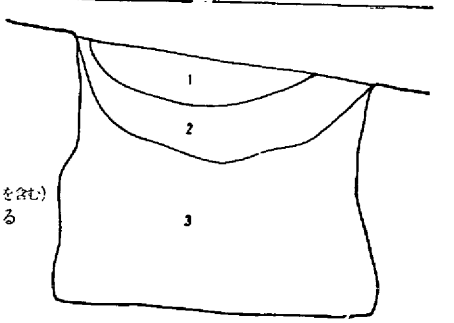
No.32袋状ピット





L＝17.60m

No.25袋状ピット



1．暗黒褐色土(炭を含む)
2．黄茶褐色土
3．黄褐色土(地山のブロックカイを含む)
　ほとんど差がない土質である

第18図　1区袋状ピット平・断面図（S＝1/40）

No. 31　袋状ピット（第18図，図版18）

1区の尾根南斜面上の No.26 と No.32 の間に位置する。ピット上面は不整形な形状を呈し，底面では径 1.2 mの円形を呈す。断面は袋状を呈し，深さ最大 80 cmを測る。底面には 2 カ所に径 10～20 cm，深さ 5 cmの浅い掘り込みと幅 20cm，長さ 1 mの溝状の掘り込みがある。

伴出遺物は埋土中より少量の土器片が出土している。（山磨）

No. 32　袋状ピット（第18図，図版27）

1区の尾根南斜面上に位置し，No. 31と50cmの間隔を置く。ピットは楕円形を呈し，上面で長径 145 cm×短径120cm，底面で長径160cm×短径140cm，深さ最大110cmを測る。断面は袋状を呈し，ほぼ水平の底面を有す。底面の 3 カ所には径15cm，深さ 5 cmの浅い掘り込みがみられる。伴出遺物は埋土中より少量の土器片が出土している。（山磨）

No. 25　袋状ピット（第18図，図版18-2）

1区の尾根頂部に位置している。ピット上面は不整形な形状を示し最大径180cm，深さ140cmを測りやや袋状の断面を呈している。底部は径 170cm の円形を呈し，中央に径 30cm，深さ 40cmの柱穴がある。底部周囲には幅15m，底面よりの深さ 7 cm前後の溝が巡り，周囲の溝より中央の柱穴に向って幅 10～15cm，底面よりの深さ 7 cm前後を測る 5 本の溝が集中している。ピット掘り込みの南西と北東にはピットとやや間隔を置き径35cm，深さ10～20cmの柱穴を掘り込んでいる。これらの柱穴とピット内底部の柱穴は袋状ピットの上部構造の主柱穴と考えられる。伴出遺物はピット内埋土中より少量の土器片が出土している。（山磨）

遺　物（第38図）

4は，口径13.6cmを測り，色調明茶色を呈する複合口縁部分である。口縁拡張部は中位が少し厚めに作られており，外面には10～11本の櫛状の工具による条線が施されている。内外面とも丹塗りがみとめられる。全体に器壁が薄く胎土，色調等も異なりシャープさが伴う。伴出した**6**のものとも異なる。No.30住居址出土のものに共通点をみい出すことができる。**5**は，口径13cmを測り，色調明茶色を呈する複合口縁部である。ほとんど**4**と類似しており丹塗りも同様である。若干，器壁厚が異なる程度である。**7**は，口径 6.7 cmを測り，色調明茶色を呈する壺形土器の口辺部分である。焼成，胎土等の点で **4・5** にまったく共通するものである。（高畑）

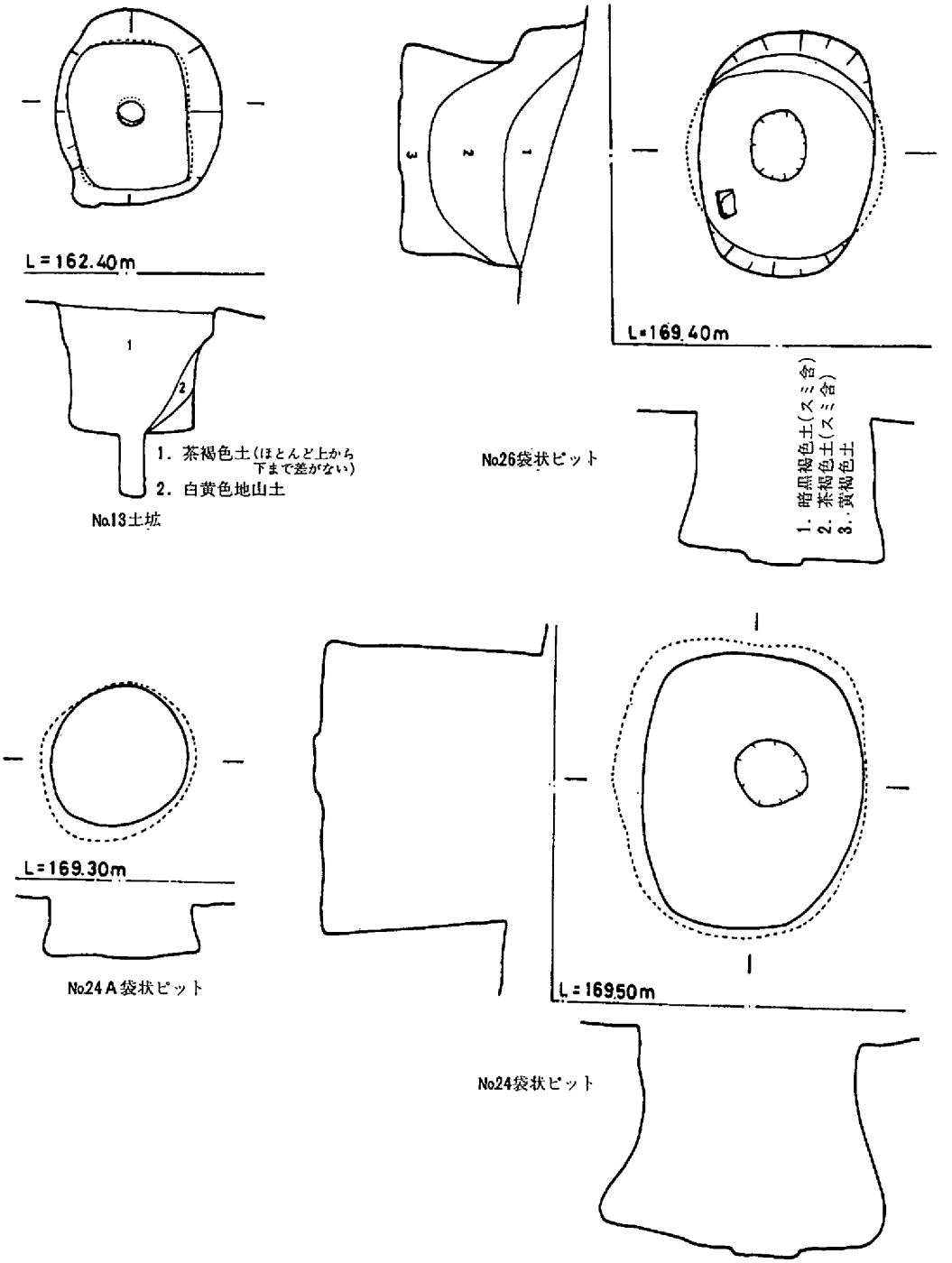
No. 13　袋状ピット（第19図，図版27）

2区の尾根平坦面に位置する平面形態は楕円形を呈し長径 115cm×短径 95cm，深さ75cmを測りほぼ垂直に掘り込んでいる。底部は隅丸方形を呈し，長辺85cm×短辺70cmを測る。伴出遺物はピット内埋土中より少量の土器片が出土している。（山磨）

No. 26　袋状ピット（第19図，図版27）

1区の尾根南斜面に位置し，No. 31と 1.5 mの間隔を置く。ピット上面は 長径 145cm×短径 100cmの小判形を呈し，尾根側の一部に浅い段状の掘り込みを設けている。断面は袋状を呈し，深さ80cmを測る。ピット底部は径 120 cmの円形を呈し，中央に最大径40cm，深さ 5 cmの浅い掘り込みがある。

伴出遺物は床面に接し，砥石 1 点が出土し，埋土中より土器片が少量出土している。（山磨）



第19図　1区，2区袋状ピット平・断面図（S＝1/40）

No. 24 A（第19図，図版27）

№24と50cmの間隔を置く，やや小形のピットである。ピットはほぼ円形を呈し上面最大径80cm，底部最大径 100cm，深さ 30cmを測り袋状の断面を呈している。

伴出遺物は埋土中より少量の土器片が出土している。（山磨）

No. 24（第19図，図版27）

1区の尾根平坦面に位置し，№24Aと50cmの間隔を置く。ピット平面形態は上面で長径 160cm×短径130cm，底部で径175cm×短径150cmの楕円形を呈し，深さ120cmを測る。断面は幾分袋状を呈し，底面中央には径40cm，深さ 5 cmの浅い掘り込みがある。伴出遺物は中層より甕・壺形土器片が出土している。（山磨）

遺　物（第38図，図版34）

1は，口径 18cm，胴部最大径 28.7cm，底径6.6cm，器高33cmを測り，色調赤褐色にて複合口縁を呈する甕形土器である。土器全体に硬さがとれており，とくに肩・底部においては従来のものと異なり柔らかい感じをうける。器内外面の剝落は著しく外面に若干の整形の跡をのこす程度である。口縁部内外面はナデ，頸部下位 7 cmまでは縦，斜行の刷毛目がみられ，胴の最大径部より凹部分の 間隔が 0.5 cmと非常に広い横位の叩目状の痕跡を下半にもつ。底部付近においては不明である。内面においても同様である。2は，口径18.8cmを測り，色調黄褐色を呈する複合口縁部分である。各土器と同様に器壁の剝落が著しいものである。残存口縁部は薄手で丁寧につくられている。（高畑）

No. 29　古　墳（第20図，図版19）

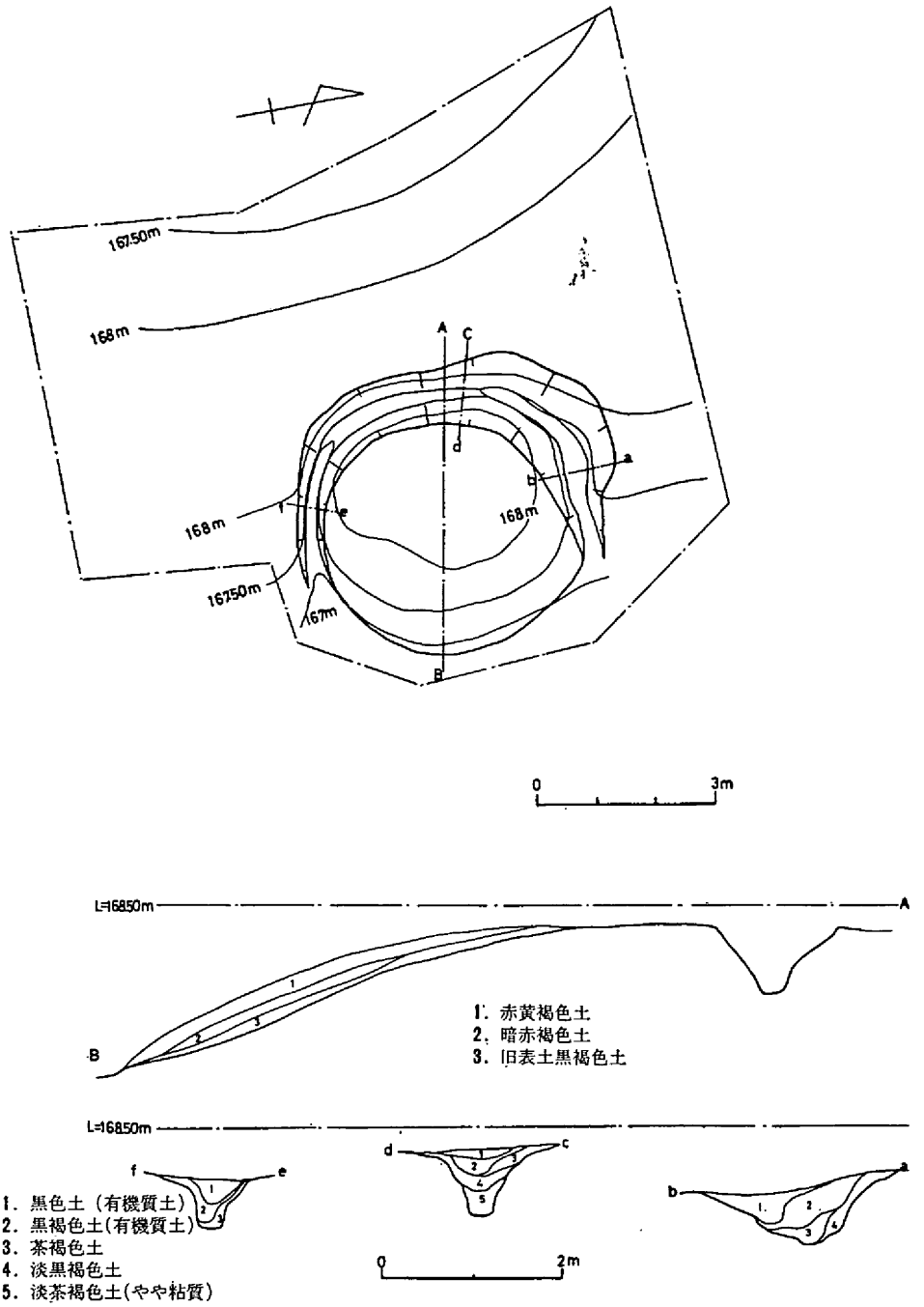
古墳は 1 区の尾根上に位置し，№30（住居址）と 1 mの間隔を置く。表面観察では墳丘，周溝とも確認できず表土除去後に遺構を確認した。規模は径約 7 mの円墳で残存高70cmを測る。古墳は旧表土上に盛土を行っており，墳丘東半で25cm程度認められる。主体部は削平されており痕跡すら認められない。周溝は馬蹄形に巡り，最大幅 1 m，深さ70cmを測り，断面は残りの良好な場所でV字形に近い形状を呈している。出土遺物は旧表土中より土器片が出土したのみで古墳に伴う遺物は皆無である。（山磨）

1区西谷（第21図，図版20）

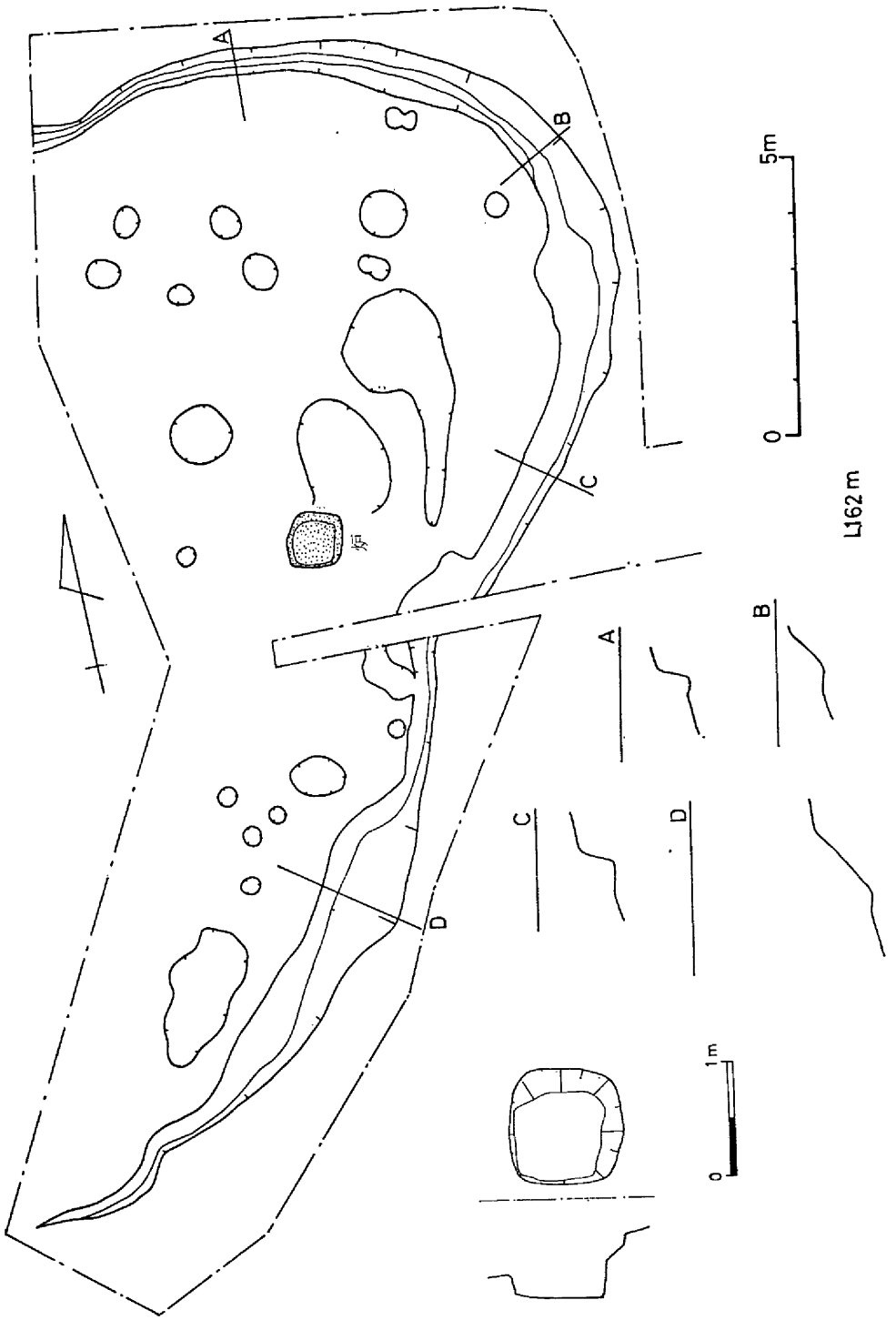
位置は遺跡の南西端にあたり，西に開口する浅い谷の奥まった場所である。この地区は第一次調査のトレンチにより炉址を検出し，遺構の存在を確認した。検出遺構は谷を囲む最大径22mの浅い段状の溝と炉址 1，円形～不整形の浅い落ち込み20ヵ所である。

段状の浅い溝は幅 50～150 cm，深さ30～70cmを測りほぼ谷の等高線にそって巡っている。炉址は谷のほぼ中央に位置し一辺 1 mの方形を呈し最大深さ50cmを測り水平の底面を有す。炉址内は全面が赤褐色に良く焼けており，埋土中には多量の灰を含んでいる。円形の落ち込みは径 40～100 cm，深さ 5～10cmを測り断面スリ鉢状の浅いピットである。不整形の落ち込みは最大径 2.5m 前後，深さ 5 ～10 cm，断面スリ鉢状を呈している。

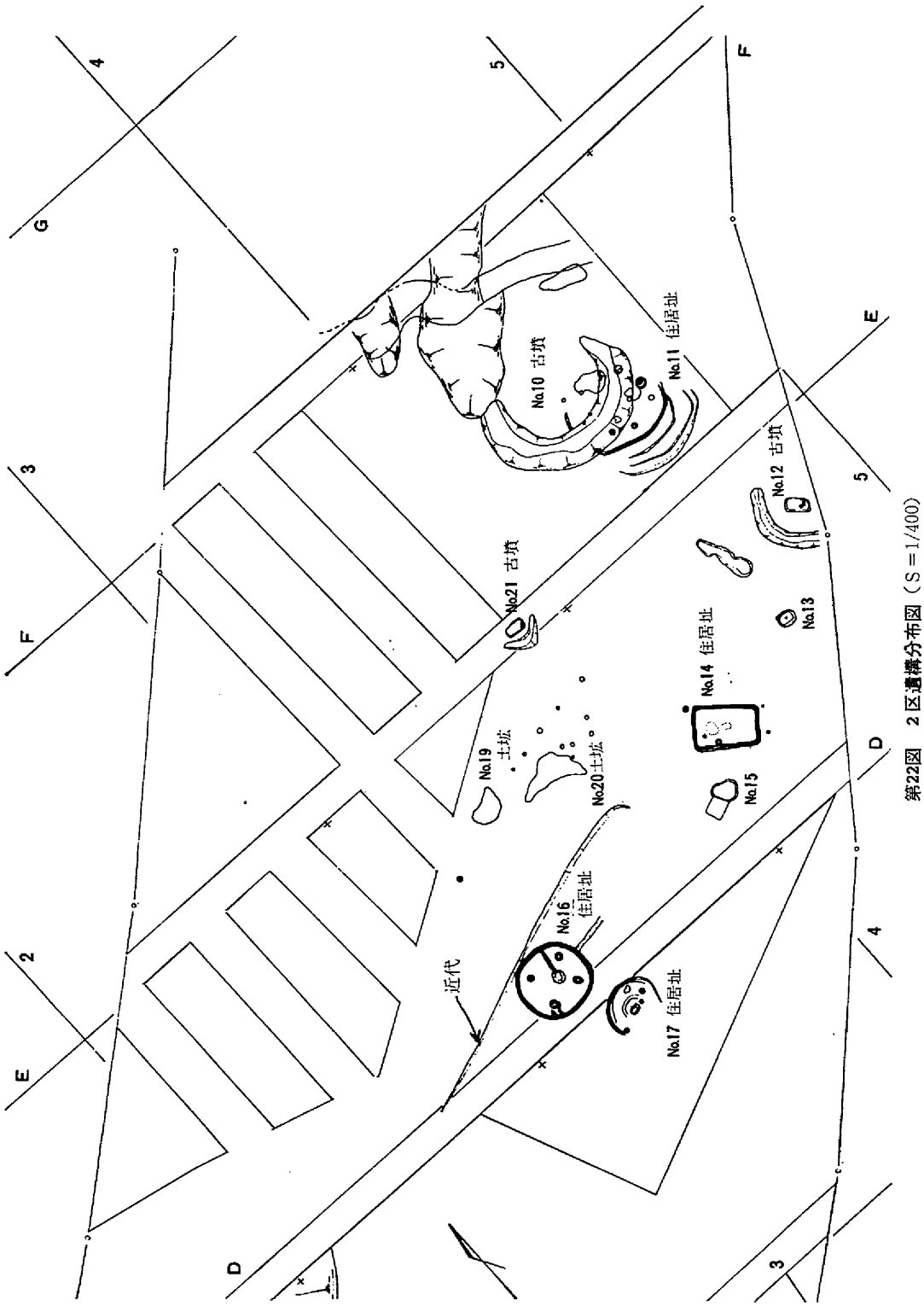
この西谷地区は遺構に伴う 出土遺物が少量の 土器片のみで時期，性格等については 不明な点が多い。ただ炉址は東谷に検出した火葬墓と関連性のある遺構の可能性がある。（山磨）



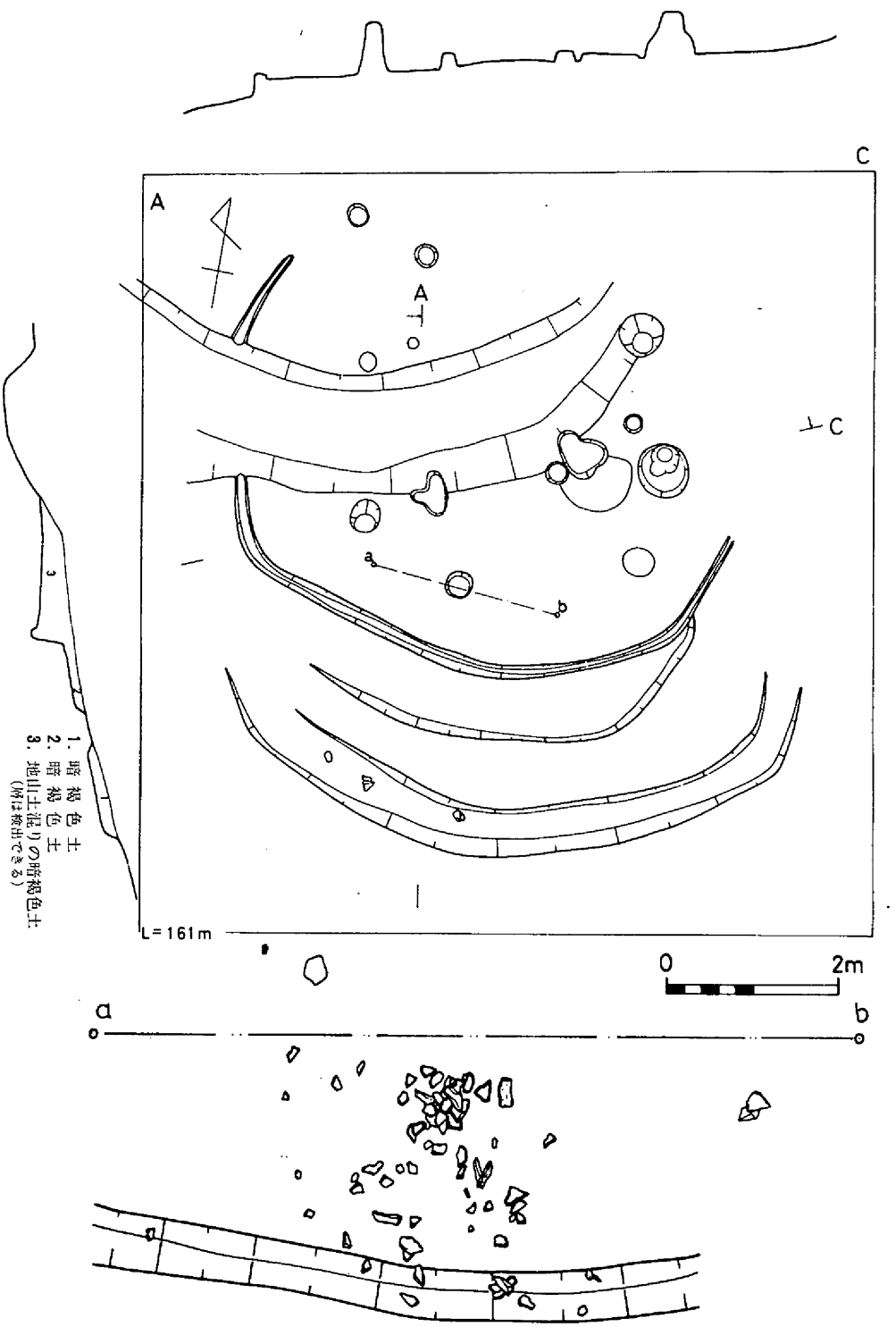
第20図　1区 No. 29 古　墳（S＝1/60・1/80）



第21図　1区 No. 33 遺　構（S＝1/75）



第22図　2区遺構分布図（S＝1/400）



第23図　2区 No. 11 住居址（S＝1/80）

No.11　住居址（第23図，図版21）

本住居址は2区の北斜面上に位置している。住居北半はNo.10遺構（古墳）の周溝が横切り削平されている。平面形態は多角形状を示しており，現存最大径6mを測る。住居址掘り込みは尾根側の深い場所で30cmを測る。柱穴は住居内に8本検出し，その内床面よりの深さ50～60cmを測る主柱穴と考えられる柱穴も数本認められる。しかしNo.10遺構による削平と斜面による消失のため配列は確認できない。壁下の溝は多角形の辺にそって巡っており幅10～20cm床面よりも深さ5cm前後を測り，断面U字形を呈している。

住居の尾根側には最大幅80cm，深さ15cm前後の浅い段状施設を壁にそって長さ5mにわたり設けている。さらにその外側には住居址を囲む様に幅60cm，深さ20cm，長さ7mにわたって浅い溝が巡っている。この溝は排水溝等の機能を持つ住居に付属する施設と考えられる。

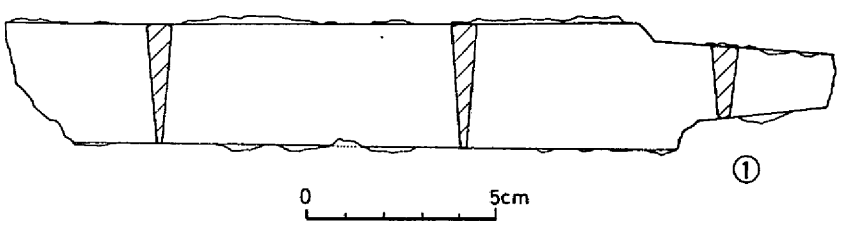
遺物は住居内南端の床面上から緑色片岩の石器未製品，ハク片が約70点出土している。他に弥生式土器片数点，砥石1点が住居址内及びNo.10（古墳）の周溝内から出土している。（山磨）

遺　物（第37図，図版36）

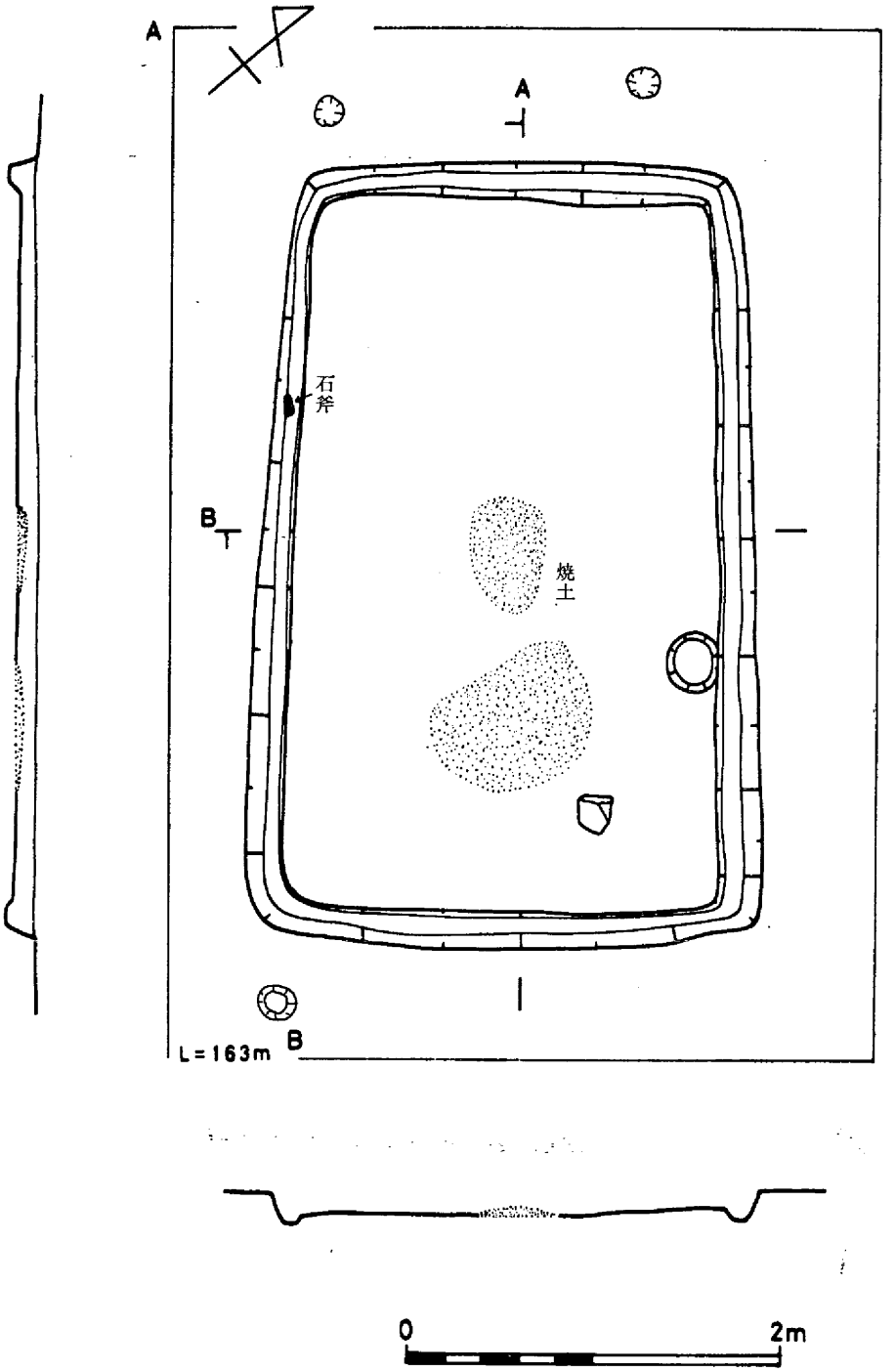
甕形土器・高坏形土器の計3片が出土している。1は，暗灰茶色を呈し，口縁端部をツマミあげてひき出している甕形土器である。外面にススが付着している。5・6は底径14cmを測り，乳灰色を呈し，胎土中に白色砂粒を多量に含む高坏形土器である。2点とも脚端部より若干上位に稜線をもち，そこより2～6条の凹線が脚上に向って施されている。（高畑）

No.14　住居址（第24図，図版24）

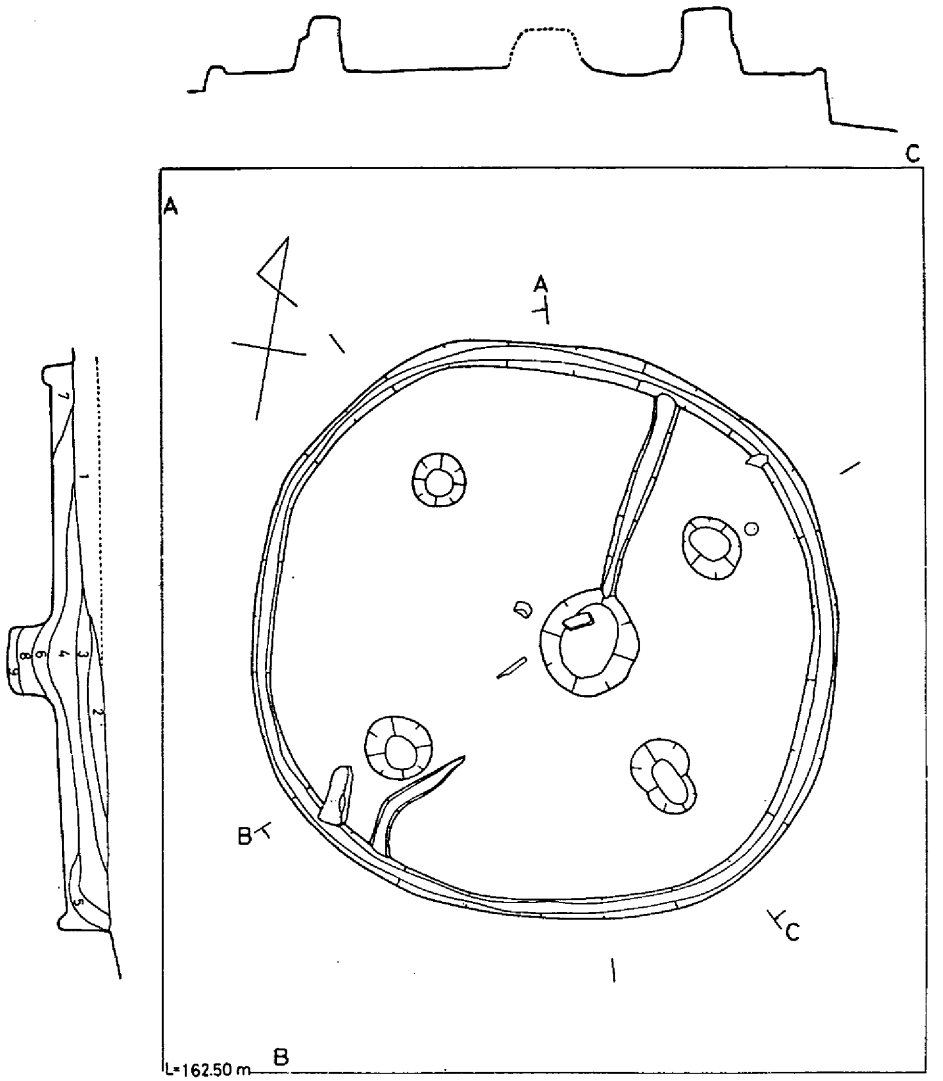
本住居址は2区の尾根平坦面に位置している。平面形態は長方形を呈し，長辺4.3m，南東の短辺2.8m，北西の短辺2.3m，床面積10.1㎡を測る。住居の掘り込みは地山より10m前後と浅く，削平が著しい。柱穴は住居内に1本と住居周辺に3本検出したが，いずれも本住居址に直接伴う柱穴か否か断定できない。壁下の溝は幅10～20cm，床面よりの深さ5cm前後を測り断面逆台形を呈し一周している。床面中央には炉址とみられる40×35cmと90×65cmのかなり広い焼土面のみで中央ピット等の遺構は認められない。なお本住居址は長方形の平面形態を有し，住居中央にかなり広い焼土面を持ち，さらに主柱穴，中央ピットが認められないこと等従来普遍的に知られている住居址とかなり異なっている。そのため，補足調査として床面掘り下げによる主柱穴，ピット等の再確認を行ったが検出できなかった。遺物は西側長辺部の壁下の溝内より石斧1点が出土し，堆積土中より少量の土器片が出土している。（山磨）



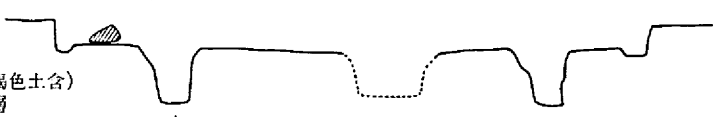
No.16　住居址出土直刀



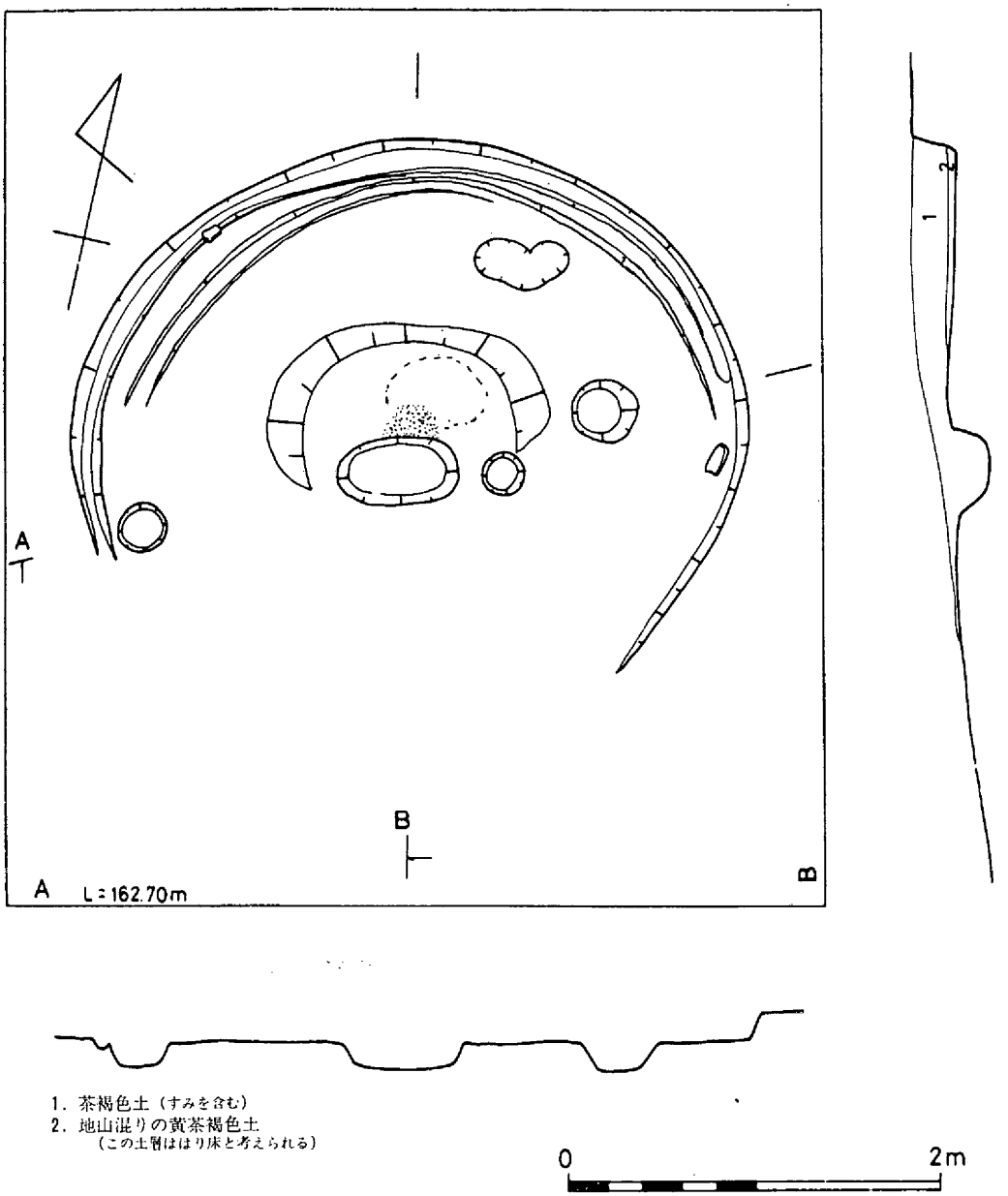
第24図　2区 No. 14　住 居 址（S＝1/40）



1. カク乱土層
2. 黒色有機質土層
3. 暗黒茶褐色土層
4. 黒色有機質土層(黄褐色土含)
5. 黒色・黄褐色混入土層
6. 灰黒色・茶褐色・褐色混入土層
7. 黄褐色・白黄色混入土層
8. 黄褐色・白黄色・黄色混入土層
9. 黄褐色土層（炭含）



第25図　2区 No. 16　住 居 址（S＝1/60）



第26図　2区 No. 17　住 居 址（S＝1/40）

No.16　住居址（第25図，図版25・図版28-1）

本住居址は2区の尾根頂部の平坦面に位置している。平面形態は円形を呈し，最大径4.8m，床面積16.3㎡を測る。住居の掘り込み残存度は深い所で床面まで40cm，平均15cm前後である。柱穴は等間隔に4本検出し，径，深さとも40～50cm前後のほぼ同形同大である。壁下の溝は幅15～20cm，床面よりの深さ5cm前後を測り，断面逆台形を呈し一周している。中央ピットは住居址中央よりやや東に位置し，最大径80cm，深さ35cmを測り断面逆台形を呈している。中央ピット下層には多量の灰が堆積しているが焼土面は認められない。床溝は2カ所認められ，中央ピットと壁下の溝を結ぶ溝は幅10～15cm深さ5cm前後を測り，断面U字形を呈している。溝低部レベルは中央ピットに向って低下している。南側に検出の床溝は長さ1mを測るが中央ピットには達していない。住居内出土遺物は，堆積土より直刀片，床面より壺，高坏形土器片等数点が出土している。（山磨）

遺　物（第37，図版36）

9は，口縁端部が欠損しており残存高7.3cm，胴部最大径11.2cmを測り，色調暗黄褐色を呈する坩形土器である。内外面の剝落が著しく整形が判断しにくい。器形はほぼ球体を呈し，薄手にて均一化した器壁に仕上げられている。外面の剝落をまぬがれた面にヘラ磨きのおこなわれた痕跡をとどめる。内面は不明である。10は，口径17.6cm，器高10.1cm，脚底12.7cmを測り，色調赤褐色を呈する高坏形土器である。内外面の剝落が9同様に著しいものであり，脚端にいたっては器厚が薄くなりすぎているようだ。坏部はほぼ中位に接合稜線をもち，そこより口縁に向って大きく外反し端部をシャープにおさめている。坏・脚部の比率が3対2の深い坏部をもっている。

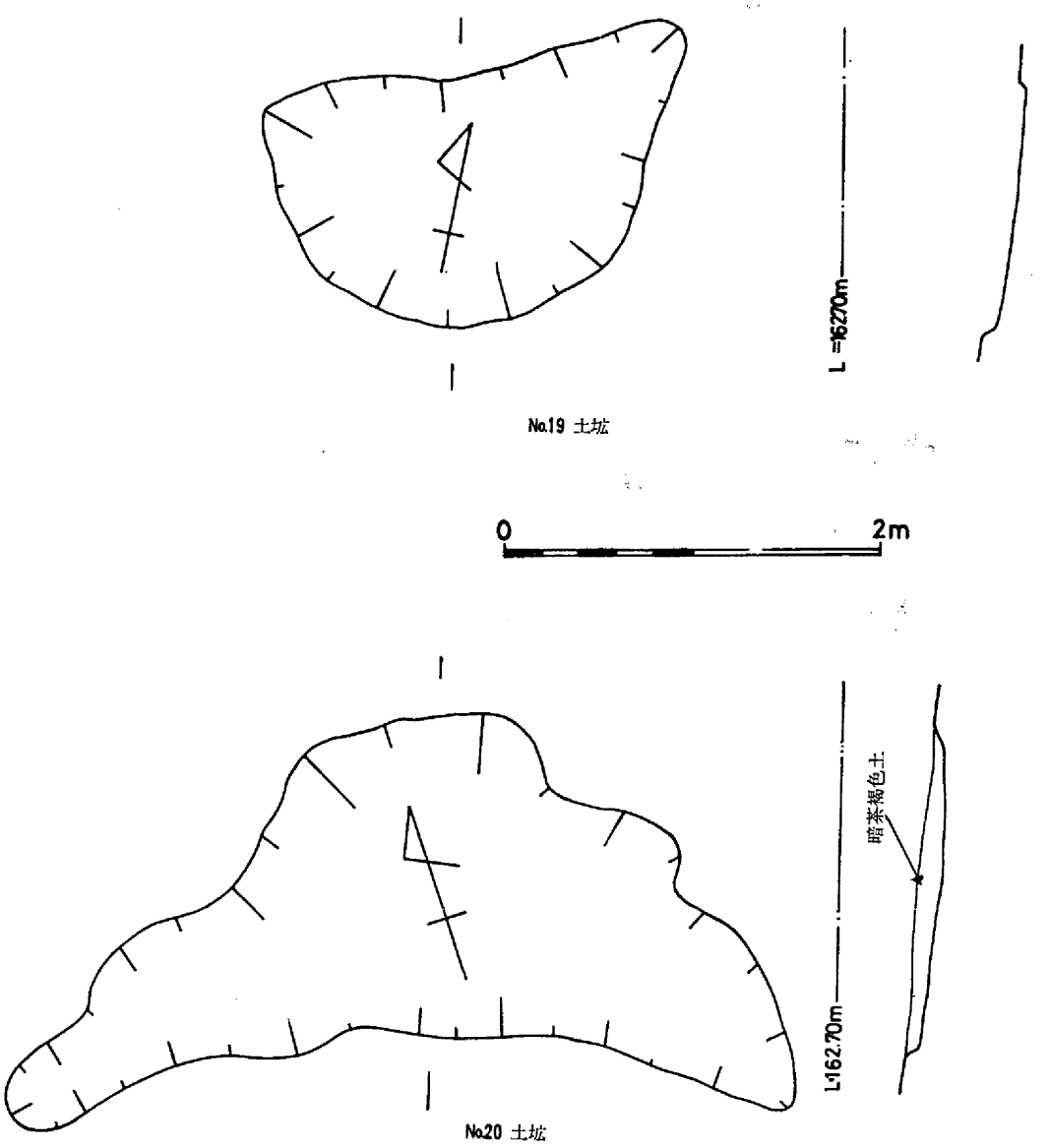
1は床面より浮いた状態で出土した直刀である。鋒・茎の両端を欠損しており，残存する刀身は18×3.2cm，茎は4×2cmである。背部分の厚さ6～7㎜，茎部もほぼ同じ厚さである。両関部分も明瞭にわかるものである。（高畑）

No.17　住居址（第26図，図版28-2）

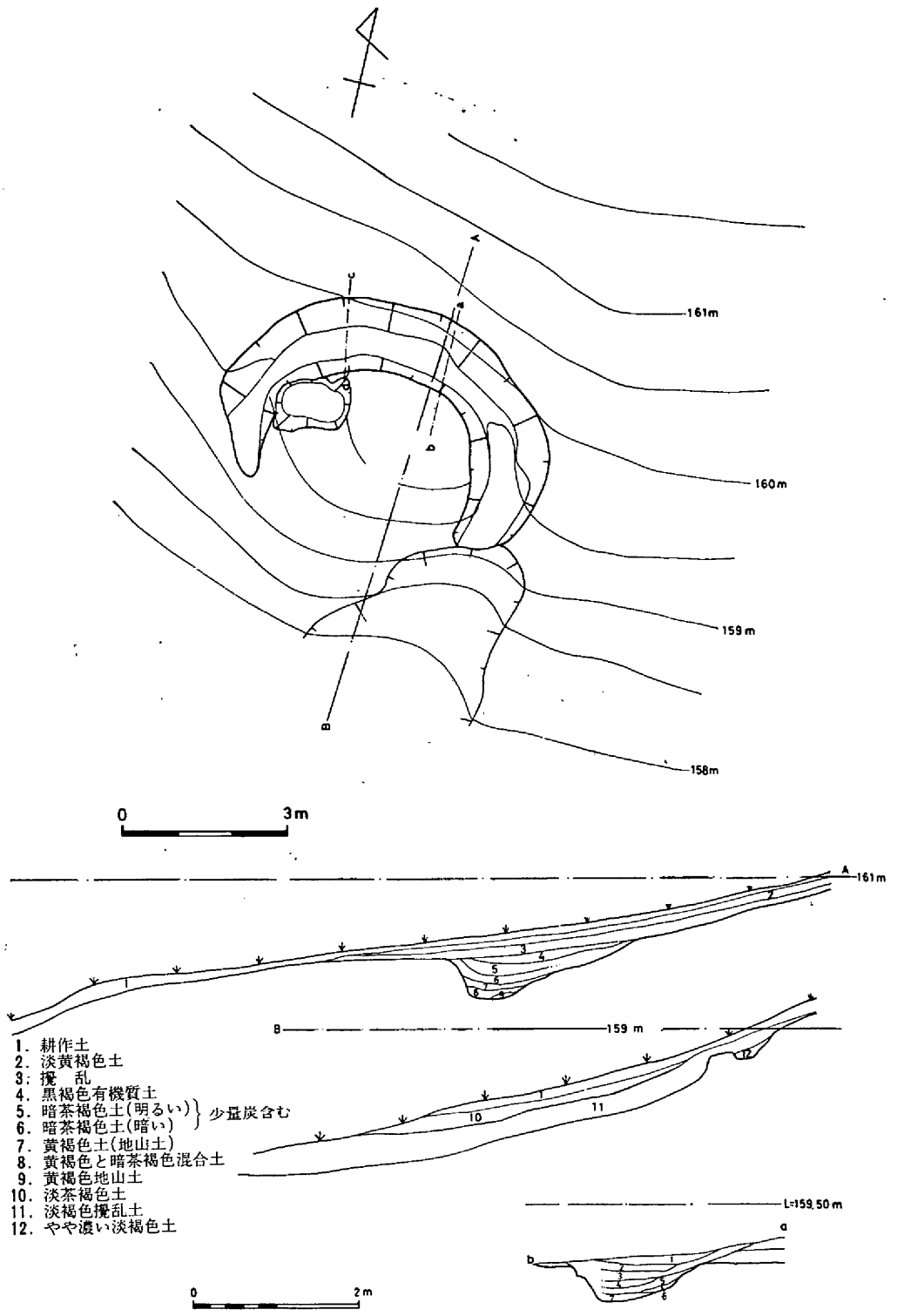
本住居址は2区の南斜面上に位置し，№16と1mの間隔を置く。住居址南端は削平されているが，ほぼ円形を呈す住居と考えられ，最大径3.7mを測る。住居の残存掘り込みは尾根側で深さ25cm程度である。柱穴は住居内に3本検出し，そのうち主柱穴は中央ピットの東西に検出した径30～35cm，深さ15～20cmの2本と考えられる。壁下の溝は，幅15～20m床面よりの深さ5cm前後を測り断面U字形を呈している。中央ピットは，住居址のほぼ中央に位置し，楕円形の平面を呈す。規模は長径67×短径40cm，深さ20cmを測り断面U字形を呈す。中央ピット周囲には幅50～60cm，高さ4cm程度の浅い高まりを設け，一部に焼土，及び灰の堆積が認められる。なお床面掘り下げ後に住居掘り込みの内側に幅15cm，深さ5～8cmの溝を検出し，住居の建替えを確認した。伴出遺物は住居内より少量の土器片が出土している。（山磨）

No.19・20　土　壙

両遺構は2区の尾根上に1.5mの間隔を置き位置する不整形な土壙である。№19は長径2.4m×短径1.3m，深さ10cmを測り，№20は長径4.2m×短径1.8m，深さ10cmを測る。また付近には長さ7mを測る柱穴列を検出している。出土遺物は両土壙とも弥生式土器片を伴い同時期の遺構と考えられる。（山磨）



第27図　2区 No. 19, 20 土 壙（S＝1/40）



第28図　2区 No. 10　古　墳（S＝1/60・1/80）

No.10　古墳（第28図，図版29・30）

古墳は2区の尾根北斜面上に位置し，№11（住居址）を切って築造している。この古墳は付近の人より，戦後開墾時に主体部を掘りあて，出土遺物もあったと聞いていた。しかし地表観察では，墳丘，周溝とも認められず表土除去後に遺構を検出した。規模は径7mの円墳で残存高50mを測る。墳丘は封土の痕跡も認められず，主体部も消失していた。周溝は馬蹄形に巡り，最大幅2.1m，深さ50cm断面スリ鉢状を呈す。

遺物は表土中より，古墳に伴うと考えられる須恵器が出土している。　（山磨）

No.12　古　墳（第29・30・31図，図版31・32）

2区の北東斜面上に立地し，№10遺構と9mの距離を置く。古墳の立地する丘陵上は戦後の開墾により地形が変化しており，墳丘は観察できなかった。古墳は，2区の表土除去後の検出作業により，用地内に$\frac{1}{2}$程度の周溝を認め，遺構の存在を確認した。主体部は長方形の平面を示す素掘の土壙で，長軸を斜面に平行させ掘り込んでいる。土壙の規模は上面で，長さ1.6m，幅80cm，床面で長さ1.4m，幅65cm，深さ20cmを測る。周溝は，調査部分で幅1m，深さ40cmを測り，断面は上半でスリ鉢状を呈し，下半では垂直に掘り込んでいる。古墳の規模は，馬蹄形に巡る周溝より推定して径6m程度の円墳と考えられる。副葬品は，土壙内やや西よりに須恵器坏蓋1点，やや東よりに須恵器坏身，坏蓋，提瓶中央に土玉，約100点が出土している。また東小口付近には，長さ10cm程度の長方形の石が出土している。　（山磨）

出土遺物（第31図，図版37-2）

須恵器坏身1，坏蓋2，提瓶1の計4点が出土している。1は暗灰色を呈し，口径14.3cm，器高4.5cmを測る坏身である。天井部より体部に向う約$\frac{1}{3}$の高さまで右回りのヘラ削りが行われており，口縁部周辺に自然釉がみられる。口縁端部内面に鈍い稜線を有し，胎土中に黒色の砂粒を含む焼成良好のものである。2は暗灰色を呈し，口径8.5cm，胴部最大径13.5cm，器高16.2cmを測る提瓶である。

体部は前面が丸くふくれており，背面にも若干のふくらみをもつ。肩の両側にはカギ状に少したれる耳がつく。体部は扁平な壺をつくる要領でつくり，前面の中央部分を粘土の円盤でふさいでいる。背面をヘラで削り，前面をカキ目にて仕上げている。3は青灰色を呈し，最大径13.7cm，口径11.7cm，器高4.2cmを測る坏身である。底部より体部に向う$\frac{1}{3}$位の高さまで左回りのヘラ削りが行われ，胎土・焼成ともに良好のものである。4は淡青灰色を呈し，口径12.9cm，器高4.7cmを測る坏蓋である。天井部全面に右回りのヘラ削りが行われており，体部接点に稜線をつくり出している。口縁端部内面に1よりさらに鈍い稜線を有する。内面底は仕上げナデを行っいる。4点とも焼成・胎土・器形等に若干の相異をもち，よせあつめた副葬土器のようである。他に土製小玉が約100点出土している。

（高畑）

No.21　古　墳（第32図，図版33）

2区の北斜面上に立地し，№10遺構と9mの距離を置く。土壙は斜面の等高線に平行して掘り込まれており隅丸長方形の平面を呈す。掘り方上面は長さ155cm，幅65cm，床面で長さ145cm，幅60cm，深さ40cmを測る。土壙の尾根側には三日月形に周溝が残存している。残存周溝は長さ2.7m，最大幅90cm，最大深さ20cmを測り，凸レンズ状の断面を呈している。周溝，土壙とも，地山での検出のた

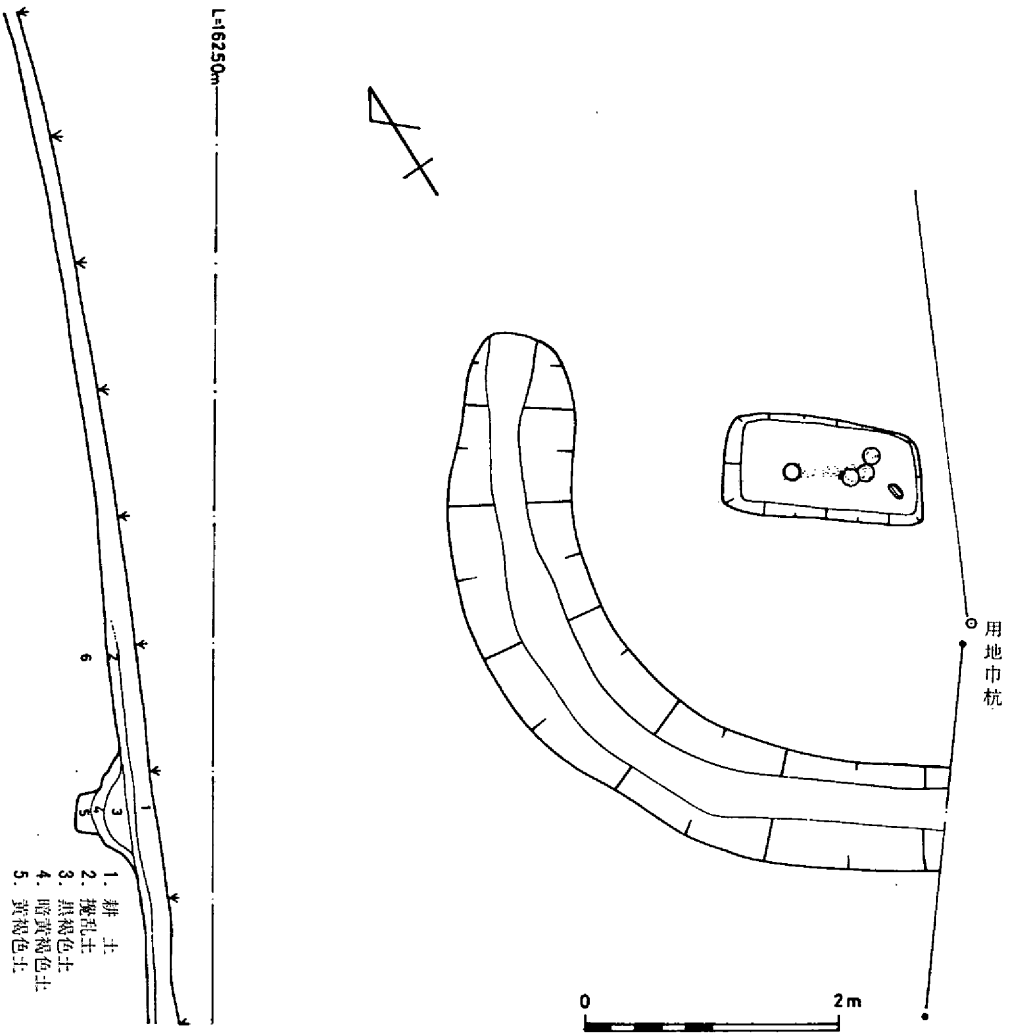
め，盛土の痕跡は確認できなかったが，残存周溝から推定して径 2.5 m程度の小円墳と推定される。土壙内には，東側小口に須恵器坏二組と，ほぼ中央に刀子１点を副葬している。（山磨）

出土遺物（第32，図版37-1）

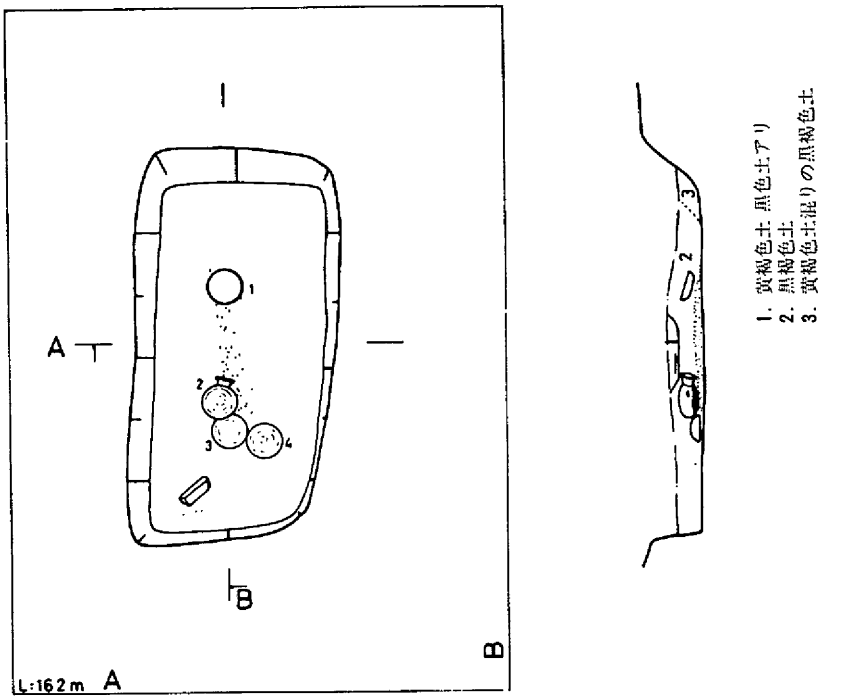
須恵器坏身２，坏蓋２，刀子１の 計５点が出土している。１は青灰色を呈し，口径 13.7 cm，器高 3.75cmを測る坏蓋である。天井部より体部に向う約$\frac{1}{2}$の高さまで左回りのヘラ削りが行われており，天井部に粗いナデが残る。焼成・胎土ともに良好である。４は青灰色を呈し，最大径 14.3cm，口径 11.9cm，器高 3.8 cmを測る坏身である。底部より体部に向う$\frac{1}{2}$位の高さまで左回りのヘラ削りが行われ，体部最大径付近に自然釉がみられる。これは，１とセットになるものである。２は淡青灰色を呈し，口径 13.5 cm，器高4.7cmを測る坏蓋である。天井部より体部に向う約$\frac{1}{2}$の高さまで右回りのヘラ削りが行われており，天井部に交差した荒いナデが残る。これは１にも言えるものである。３は淡青灰色を呈し，最大径 14.3cm，口径12cm，器高 4.8cmを測る坏身である。底部より体部に向う$\frac{1}{2}$位の高さまで左回りのヘラ削りが行われており，天井部に粗いナデがみられる。内底には，細かいナデが施されている。２と３がセットになるものである。１と４の整形・焼成・色調は非常に近いものである。２と３もしかりであるが，それらセット間には相異がみられる。刀子は完形品であり，柄部分の直径２cm，長さ 3.5 cmが残存しており，鉏部分が半分位みられる。全長 12.3cm，刃部6.1cmを測る。刃部中央部分が凹状を呈し使用による磨滅をうかがわせる。（高畑）

No. 12　古墳出土土製小玉計測値表　（表２）

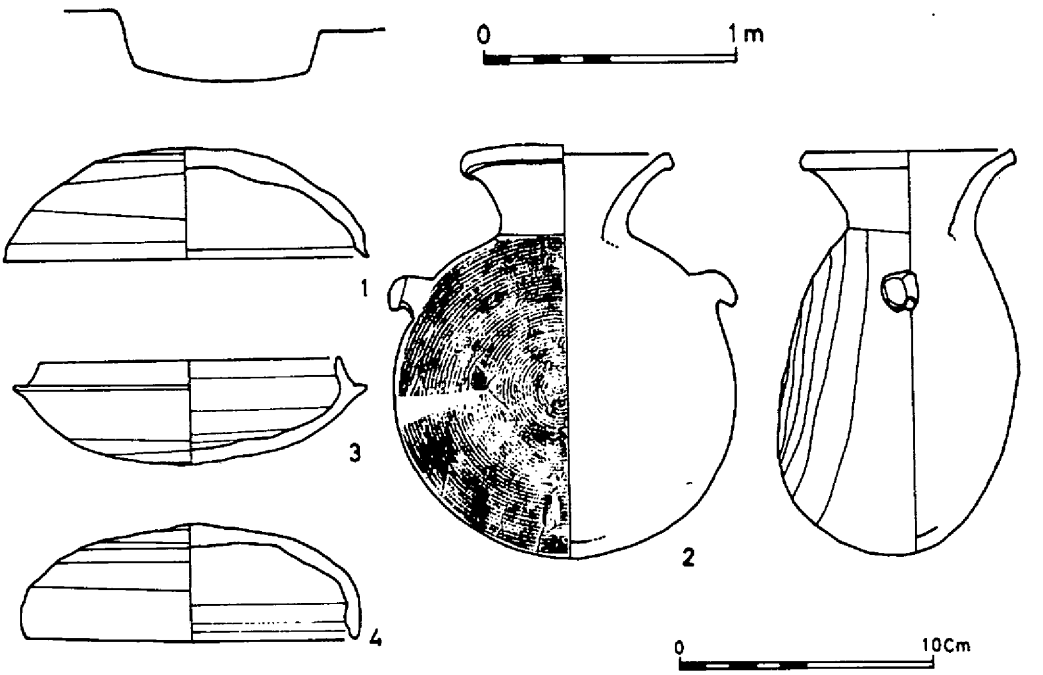
番号	長さ (cm)	長径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	番号	長さ (cm)	長径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	番号	長さ (cm)	長径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)
1	——	——	——	——	21	0.545	0.705	0.140	0.3	41	0.625	0.730	0.220	0.3
2	0.650	0.800	0.150	0.5	22	0.595	0.775	0.120	0.4	42	0.430	0.705	0.110	0.26
3	0.620	0.775	0.155	0.35	23	0.815	0.695	0.175	0.4	43	0.495	0.720	0.145	0.3
4	0.620	0.865	0.150	0.35	24	0.605	0.745	0.130	0.3	44	0.545	0.745	0.220	0.3
5	0.660	0.810	0.205	0.35	25	0.565	0.810	0.175	0.3	45	0.630	0.820	0.120	0.4
6	0.635	0.750	0.140	0.35	26	0.710	0.745	0.175	0.4	46	0.540	0.835	0.180	0.3
7	0.665	0.785	0.120	0.4	27	0.630	0.765	0.160	0.4	47	0.640	0.830	0.195	0.3
8	0.615	0.840	0.150	0.4	28	0.590	0.770	0.120	0.35	48	0.635	0.810	0.185	0.4
9	0.650	0.795	0.145	0.35	29	0.640	0.815	0.180	0.4	49	0.820	0.775	0.125	0.5
10	0.610	0.720	0.250	0.35	30	0.650	0.700	0.155	0.35	50	0.500	0.750	0.130	0.3
11	0.645	0.830	0.175	0.45	31	0.625	0.790	0.140	0.4	51	0.560	0.725	0.150	0.3
12	0.660	0.880	0.160	0.5	32	0.735	0.850	0.145	0.45	52	0.620	0.790	0.160	0.3
13	0.655	0.790	0.115	0.35	33	0.665	0.755	0.115	0.3	53	0.700	0.750	0.120	0.3
14	0.520	0.720	0.100	0.3	34	0.630	0.780	0.170	0.35	54	0.560	0.890	0.190	0.35
15	0.565	0.715	0.180	0.3	35	0.610	0.765	0.160	0.35	55	0.460	0.700	0.200	0.2
16	0.445	0.695	0.120	0.25	36	0.600	0.715	0.120	0.3	56	0.630	0.840	0.160	0.3
17	0.680	0.780	0.200	0.4	37	0.670	0.710	0.145	0.35	57	0.565	0.880	0.155	0.3
18	0.600	0.790	0.160	0.3	38	0.555	0.815	0.240	0.3	58	0.620	0.730	0.150	0.3
19	0.625	0.805	0.145	0.4	39	0.585	0.785	0.145	0.3	59	0.470	0.720	0.130	0.2
20	0.620	0.830	0.160	0.35	40	0.660	0.780	0.140	0.4	60	0.690	0.765	0.120	0.3



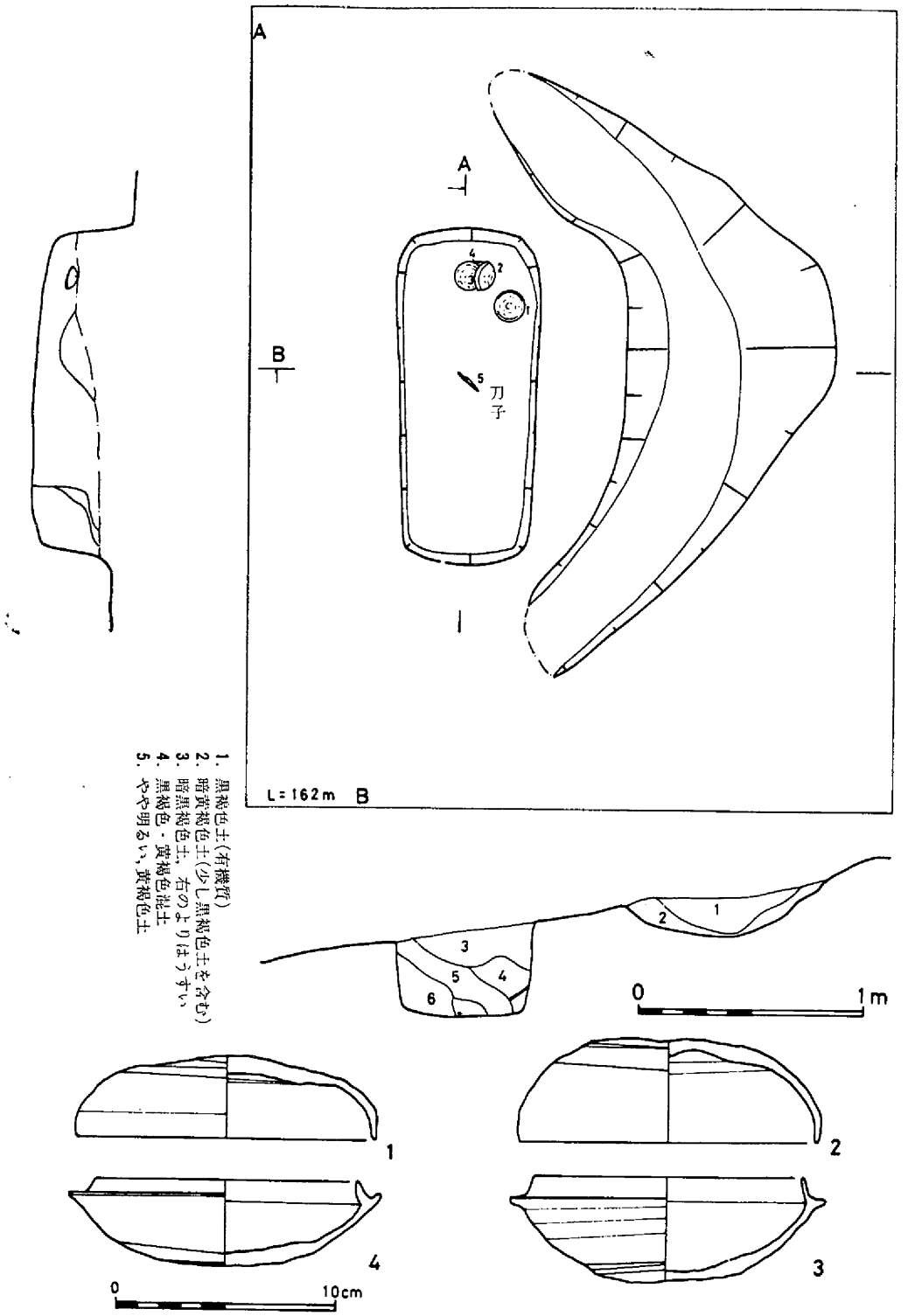
第29図　2 区 No. 12 古 墳（S＝1/60）



第30図　2区 No. 12　古墳主体部（S＝1/30）



第31図　2区 No. 12　古墳出土遺物（S＝1/3）



第32図　2区 No. 21 古墳主体部（S＝1/30）出土遺物（S＝$\frac{1}{3}$）

No. 11, No. 14　住居址出土石器（第34図，図版35）

1は，No. 14住居址出土の緑色片岩を素材とした，短冊形を呈す打製石斧である。長さ10cm，刃部幅4cm，厚さ1.1cm，重さ67.2gを計る。正面は，節理面を残さない程度に周縁より荒打されており，両側縁には細調整を施す。裏面は，節理面を多く留めている点留意される。又，正面同様，両側縁に軽い調整を施している。刃部は数回の剝離を交互に施して調整している。使用痕は判然としない。

2は，No.11住居址出土。緑色片岩を素材としたもので，1同様正面は荒打による成形の後，両側縁に調整を施す。裏面には多くの節理面を留める。石斧の未製品と想定され，重さは，78.8gを計る。

3は，No.11住居址出土。緑色片岩を素材としたもので，正面上部には瘤状の未剝離部を残してあり製作途時のものと考えられる。重さ56.6gを計る。

4は，No.11住居址出土。緑色片岩を素材とした剝片である。正面及び裏面とも多くの節理面を留めている。

No. 11　住居址出土剝片（第35図，図版35）

1は，緑色片岩を素材としたもので，各々接合関係にある。正面は荒打によって断面三角形に調整されているが，裏面には多くの節理面を留めている。横剝ぎ的に剝出されている。重さ34.5gを計る。

2は，緑色片岩を素材としており，横剝ぎ的に剝出されており，正面及び裏面下部には軽く調整が施されている。石包丁の未製品と考えられる。重さ24.9gを計る。

3は，緑色片岩を素材としており，正面には大きな2つの剝離痕を残している。細部の調整は施されていない。石器の素材となり得る剝片ではなく，石屑的性格のものであろう。重さ15gを計る。

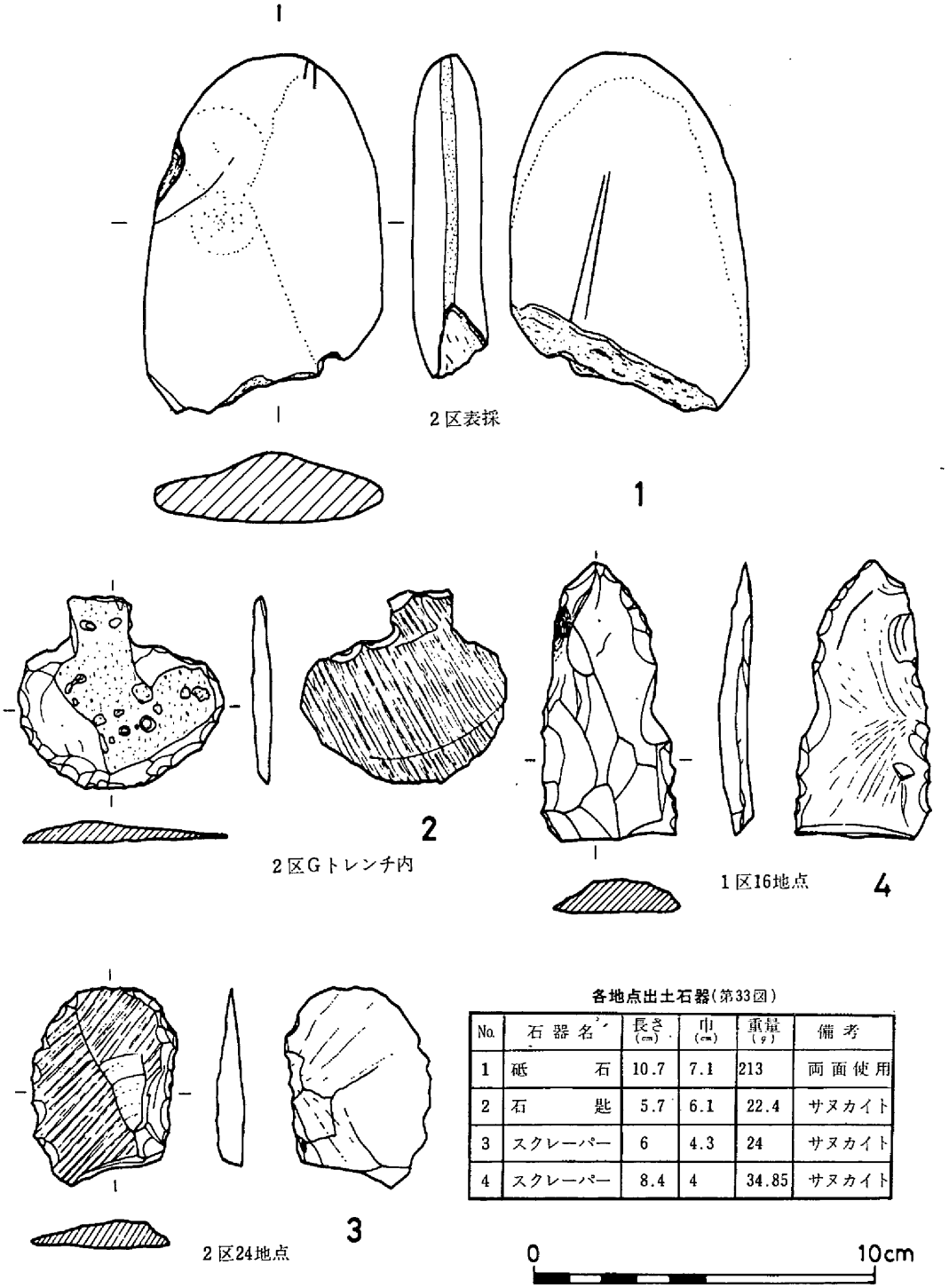
4は，緑色片岩を素材とした剝片である。横剝ぎ的に剝出されており，見方によっては2つの剝片が接合したかのような感を与える。正面及び裏面への調整は施されていない。重さ39.9gを計る。

住居址出土砥石（第36図，図版38）

1は，No. 26出土で，長さ14.1cm，幅8.3cm，厚さ4.6cm，重さ690gを計る。正面上部には敲打痕を残す。正面は約6㎜の凹面をなす。使用面は2面である。石材は砂岩を使用している。荒砥の類であろうと思われる。

2は，No. 11住居址出土で，長さ5.1cm，幅2.1cm，厚さ1.2cm，重さ27.2gを計る。硬質砂岩を素材とした小形の砥石である。全面（6面）を使用しており，頂部に断面V字形の2条の刻線を有している。

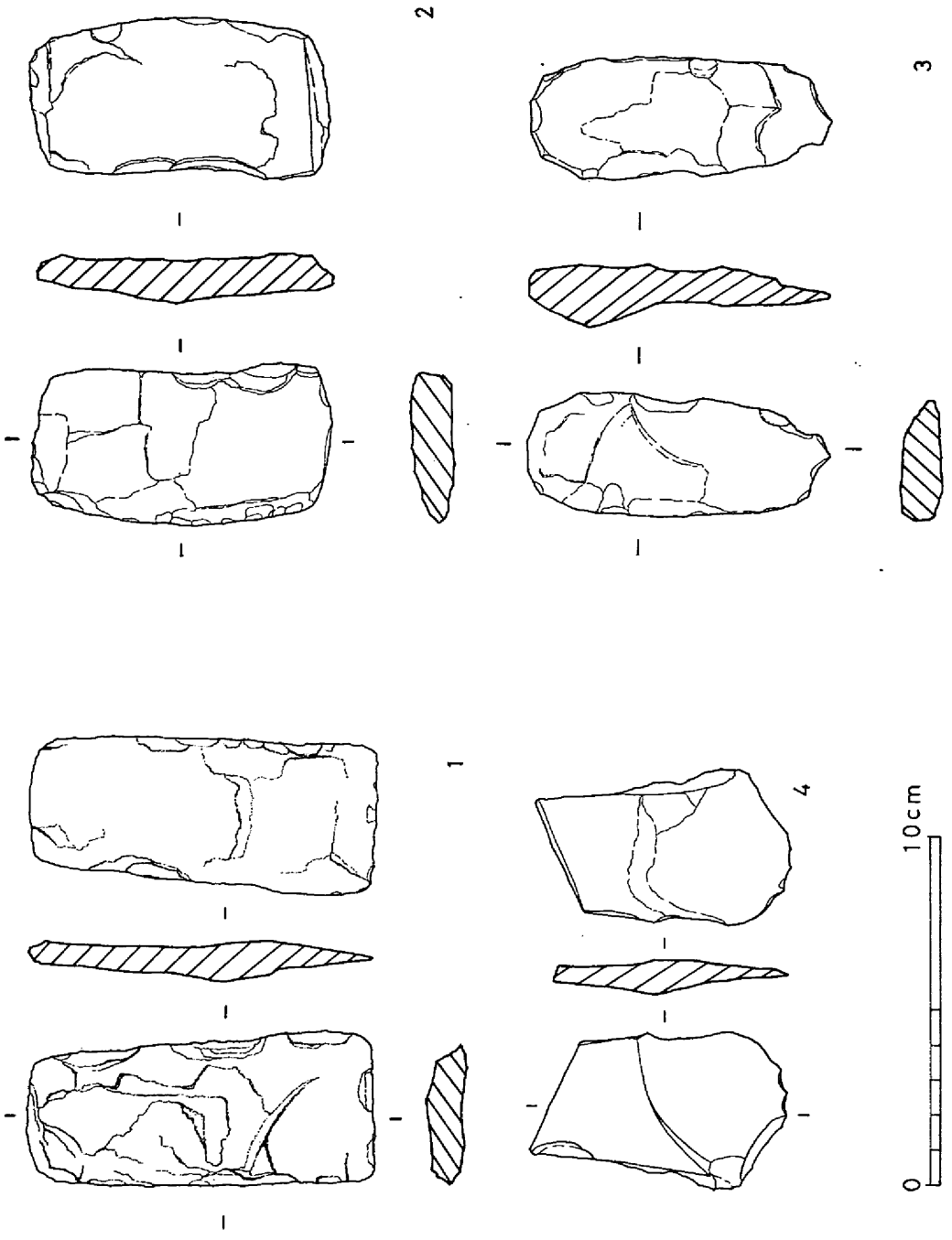
3は，No. 30住居址出土。調査時には2つに折損した状態で検出されているが，各々接合する。①は，長さ6.4cm，幅2.7cm，厚さ9㎜，重さ19.8g，②は，長さ5.8cm，幅2.7cm，厚さ9㎜，重さ18.9gを計る。両方共に相似た形状を呈し，各々5面を使用している。折損後も使用に供されており①の裏面左側縁下方に使用の痕を認めることができる。正面左側に幅約2㎜に帯状の未研磨面を残しているが，これは鋭利な刃先等を研いだために割損した結果生じた面であると考えられる。石材は硬質砂岩を素材としており，②の下半部は赤味を帯びている。（秀島）



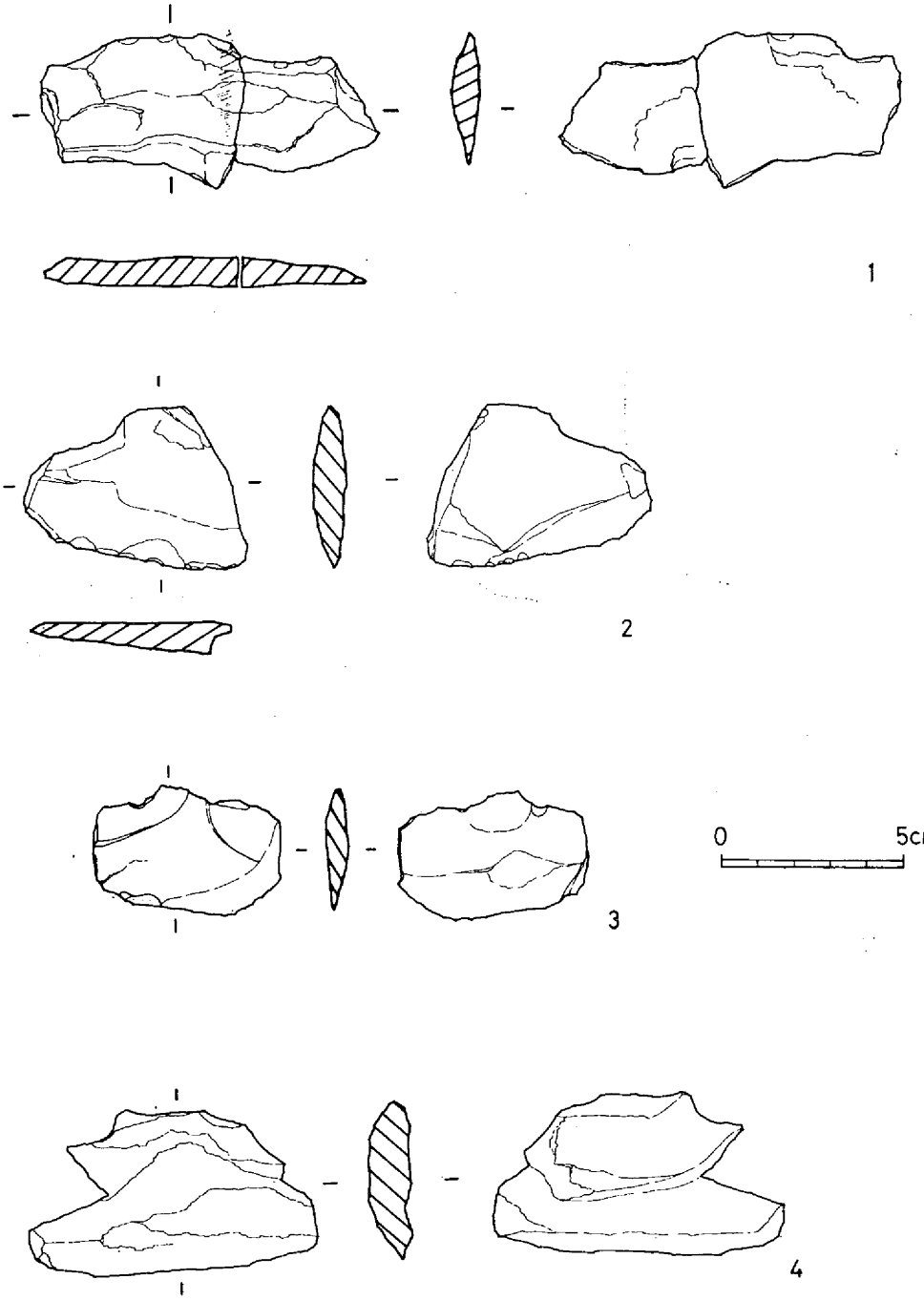
各地点出土石器（第33図）

No.	石器名	長さ（cm）	巾（cm）	重量（g）	備考
1	砥石	10.7	7.1	213	両面使用
2	石匙	5.7	6.1	22.4	サヌカイト
3	スクレーパー	6	4.3	24	サヌカイト
4	スクレーパー	8.4	4	34.85	サヌカイト

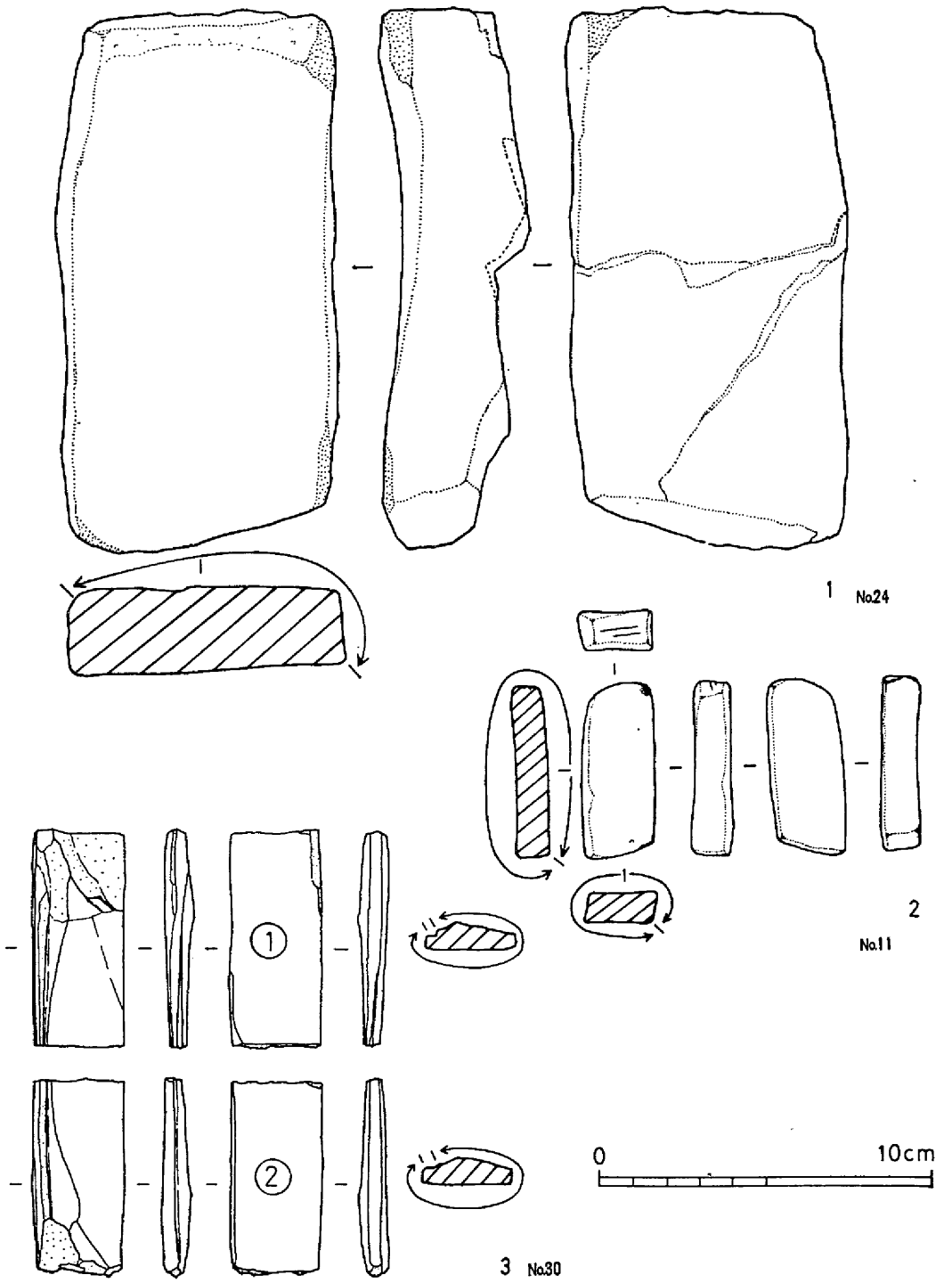
第33図　各地点出土石器（S＝$\frac{1}{2}$）



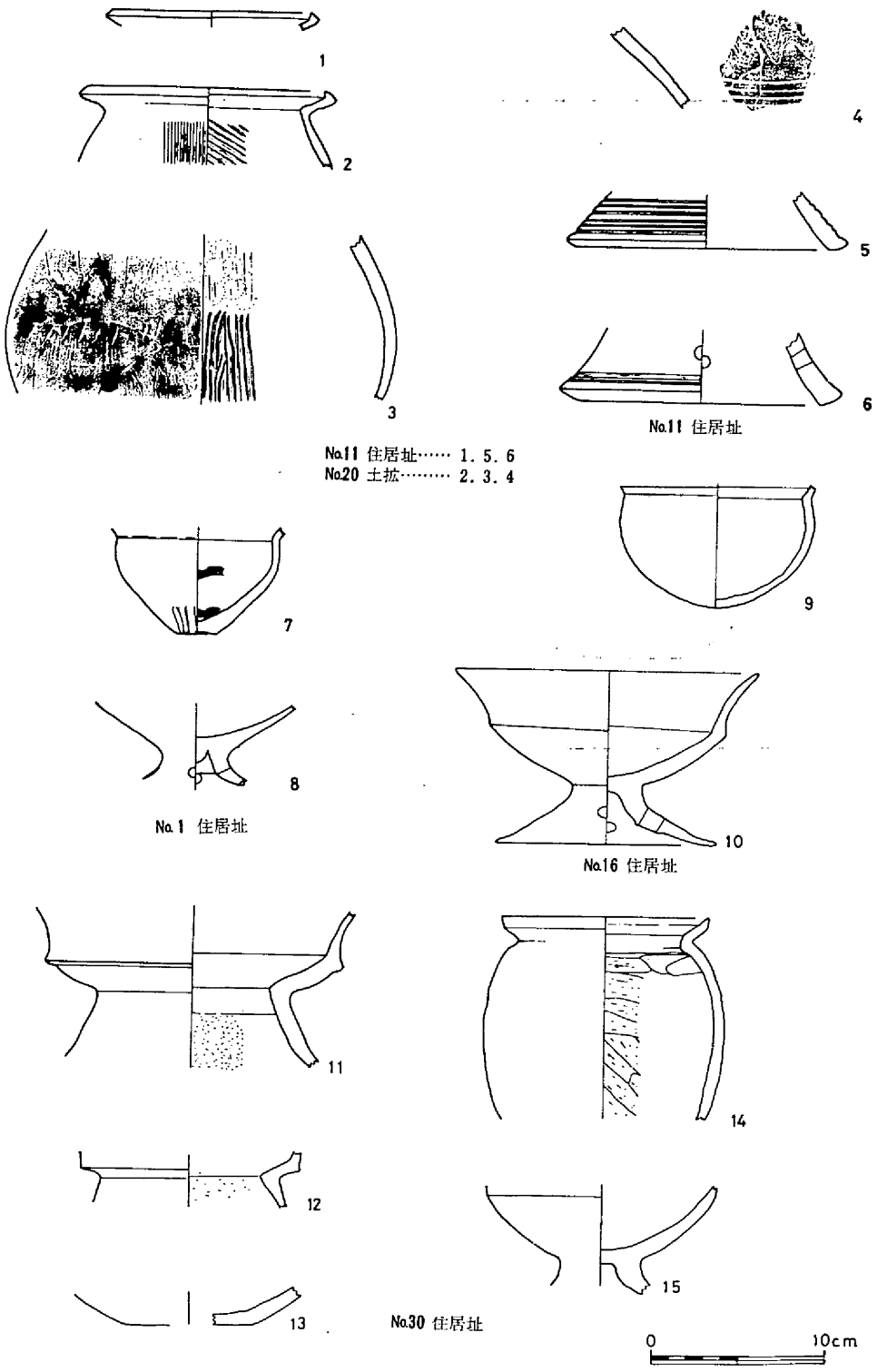
第34図　No. 11, No. 14　住居址出土石器（S＝½）



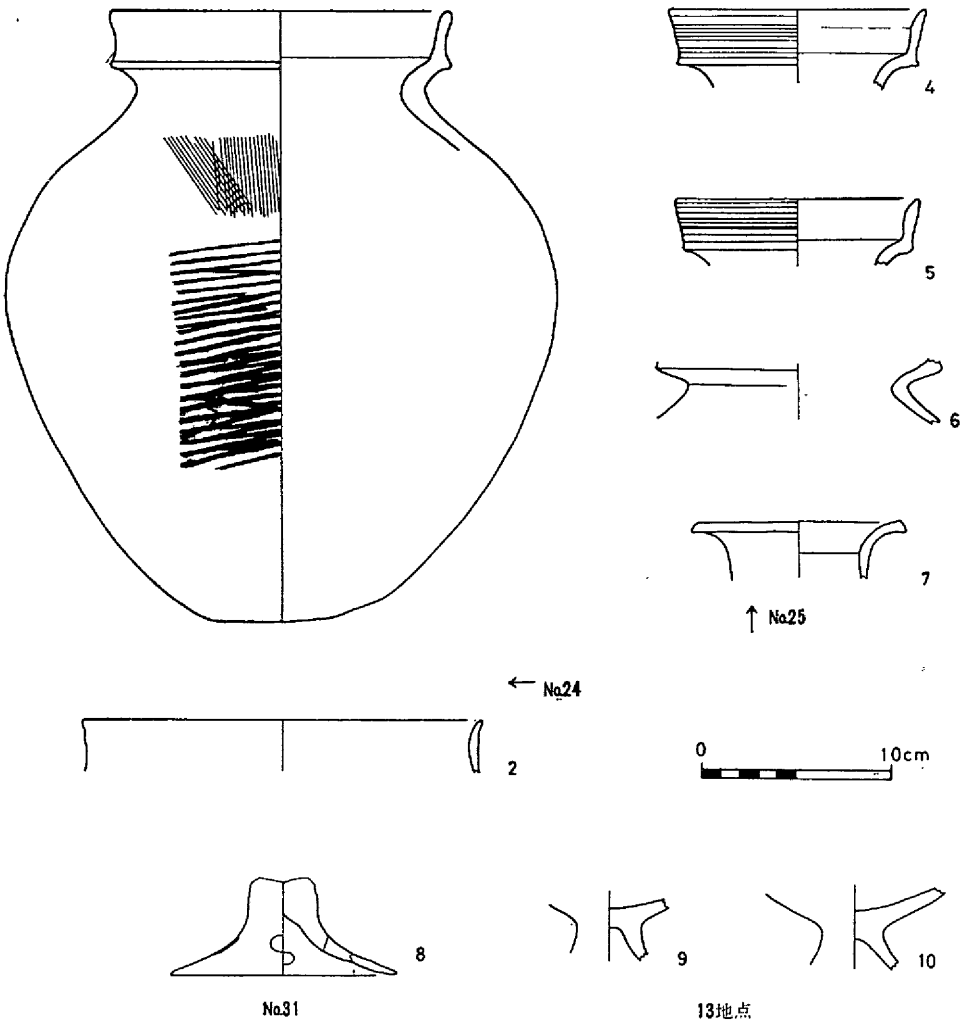
第35図　No. 11　住居址出土石器・剝片（S＝$\frac{1}{2}$）



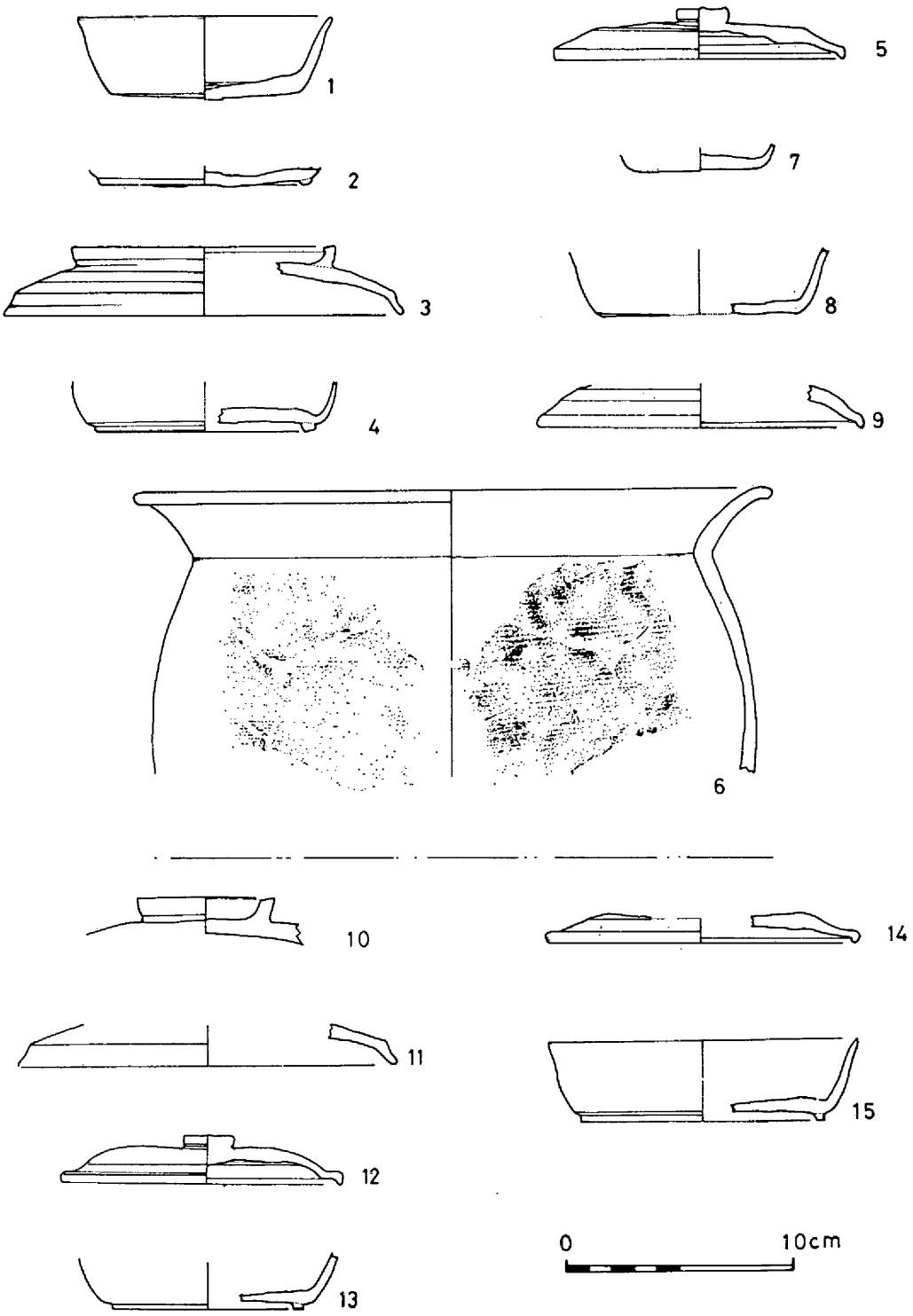
第36図　住居址出土砥石（S＝$\frac{1}{2}$）



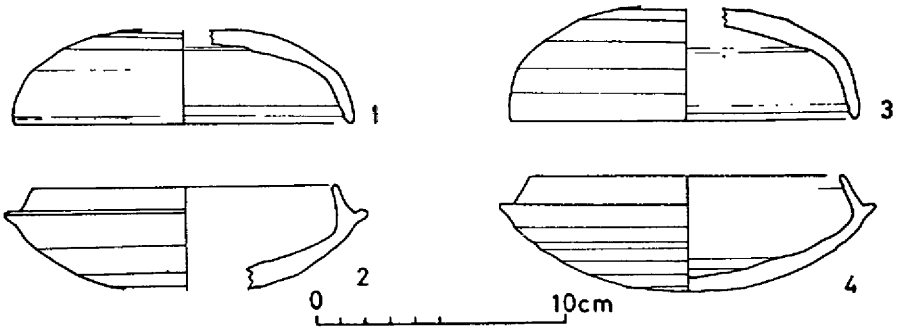
第37図　住 居 址　出土遺物



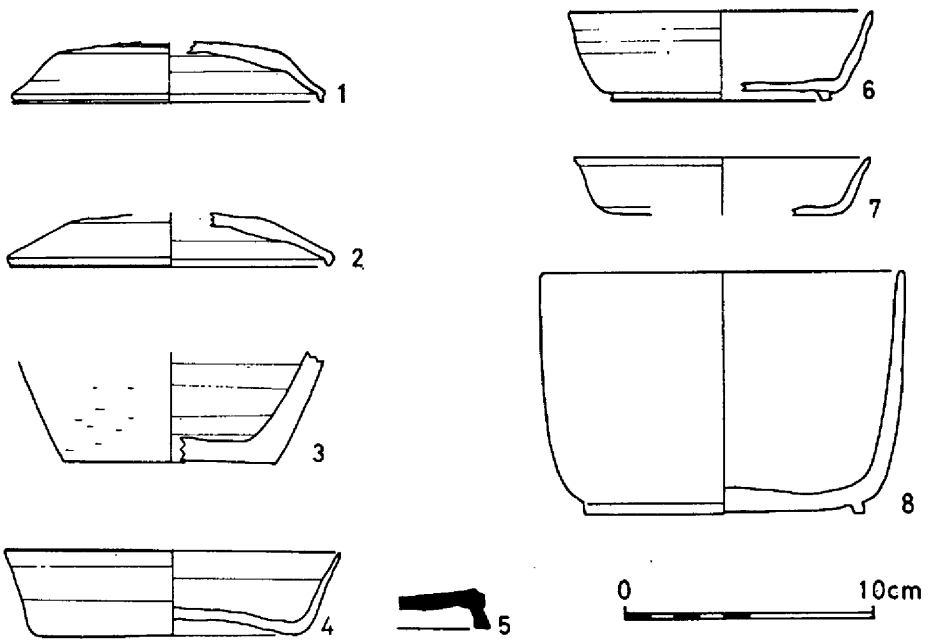
第38図　袋状ピット・各地点出土遺物



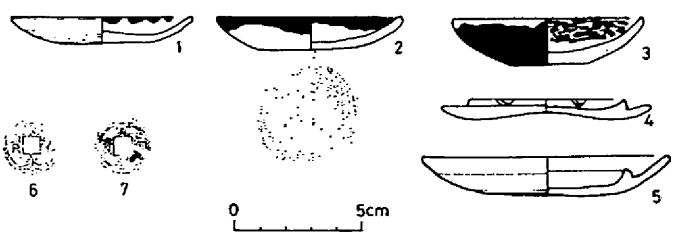
第39図　No. 6 建　物　16地点出土遺物（S＝$\frac{1}{3}$）



第40図　2区28地点出土須恵器（S＝$\frac{1}{3}$）



第41図　遺構に伴わない須恵器（S＝$\frac{1}{3}$）



第42図　2区Hトレンチ出土遺物（S＝$\frac{1}{2}$）

遺構に伴わない遺物（第38図，図版36）

8は，1区№31土壙の周辺掘開中に出土したものである。底径12cm，残存器高5.2cmを測り，色調暗赤褐色を呈する高坏形土器である。脚に4孔が穿かれている。器面の剝落が著しい上に磨滅しており非常にうすいものになっている。内面脚端一部に刷毛状工具による整形がみられるのみである。9・10は，13地点表土剝ぎの段階で出土しており，両者とも坏・脚部との接合部分を残すのみである。平坦部よりころげ落ちたものであろう。色調は黄褐色に近く，焼成・胎土ともに良好である。脚中空部分にみられる接合時の整形痕が若干異なるが，他においては類似している。これらは，弥生時代後期後半の住居址等に伴う可能性がある。（高畑）

遺　物（第40図）

2区28地点を中心に表土除去中に検出されたものである。1は，暗青灰色を呈し，口径13.6cm，器高3.8cmを測る坏蓋である。天井部より体部に向う約$\frac{1}{4}$の高さまで左回りのヘラ削りが行われている。体・天井部間の稜線がほとんどみられないものである。2は，口径12cm，最大径14.5cm，器高約4.3cmを測り，暗青灰色を呈する坏身である。底部より体部に向う$\frac{1}{2}$の高さまで左回りのヘラ削りが行われている。受部内面は丸く横ナデされており稜線のみられないものである。3は，淡青灰色を呈し，口径15cm，器高4.5cmを測る坏蓋である。天井部より体部に向う約$\frac{1}{3}$の高さまで左回りのヘラ削りがおこなわれている。白色砂粒大を含む器壁の厚い土器である。4は，口径12.5cm，最大径15.2cm，器高4.6cmを測る坏身である。体・口縁部に横ナデ調整がおこなわれており，内面底には仕上げナデがみられる。これらに類似する遺物は，1区№29古墳周辺において小片が確認されている。これらの遺物のみられた28地点には，周溝のみを残す№10古墳が存在しており，何らかの形で本墳に関係するものとしてとらえた。（高畑）

遺　物（第41図，図版40）

これらの須恵器は各地点より表採，及び表土剝ぎ段階にて検出したものである。1区東谷，及び谷に向う平坦部周縁においてのものが多い。1・2は，東谷において検出されたものと同様の須恵器坏蓋である。3は，底径8.4cm，残存高4.5cmを測り，色調暗青灰色を呈する壺，あるいは甕の底である。体部は横ナデ調整が行われ，外面が内面にくらべて，やや荒い感じがする。底面は仕上げナデが丁寧におこなわれている。底部周縁にみられる一段の低いたかまりは，骨蔵器2の坏蓋・身に類似する手法のものである。8は，口径14.6cm，器高9.5cmを測る色調濃青灰色を呈する椀型の深い器である。体部中位に低い段を有し，外側半面には自然釉がみられる。体・口縁部は横ナデ調整が行われている。外面底，および体部$\frac{1}{4}$の高さまでをヘラ削りし，内面底は仕上げナデが行われている。土器の回転は右回りである。8は，骨蔵器に使用された可能性が考えられる。（高畑）

遺　物（第42図，図版34）

2区Hトレンチ，32地点の掘開中に出土したものである。路線決定前に観音様を祀った堂が建てられており，決定後用地外東側に移転している。その堂跡近辺を掘ったわけである。素焼の灯明皿の破片が多く出土し，硬質なものも混在していた。又，寛永通宝等もふくまれていた。（高畑）

第5章　小　　結

旦原遺跡は，丘陵平坦部，及び谷部内に人間の活動の跡を残している。遺物は，縄文時代より近世までのものが散布している。ここでは，遺物を伴出した遺構を中心にして 4 期にわけてまとめを行う。

Ⅰ期――弥生時代中期後半～後期初頭

Ⅱ期――弥生時代終末期

Ⅲ期――古墳時代後期

Ⅳ期――奈良末・平安時代

Ⅰ期――住居址 2 軒，土壙 2 が検出され，これらに伴う土器片10数点，打製石斧 1 点，砥石 2 点，石器未製品，剝片90点が出土している。遺構はⅢ期の古墳周溝により半壊をうけており，住居内の状態が判明せず，又，遺物の出土も非常に少ないものであった。故に，ここでは住居址形態を中心に若干の伴出遺物（中期後半～後期初頭）をもって考察を加える。まず，No.11住居址がもつ**段状施設**(註1)をとりあげ，類例を求めると，津山市押入西遺跡(註1)に 5 軒，作東町高本遺跡(註2)に 1 軒，哲西町野田畝遺跡(註3)に 1 軒，山陽町門前池遺跡(註4)に 1 軒，若干新しいが，久米町領家遺跡(註)に 1 軒が知られている。

そして，これらの住居址は段状施設以外に平面形，床面規模，柱間距跡，外溝，中央ピット等に共通点をみい出すことができる。出土遺物についても同様のことがいえる。例えば，高本遺跡 1 号住居址を例にとり他遺跡と比較すると，小中遺跡 4 号住居址(註5)・押入西遺跡 6 号住居址（火災）・野介代遺跡 2 号住居址（火災）(註6)等と平面規模，柱間距離，中央ピット等が類似している。―（**B タイプ**）同様に高本遺跡 2 号住居址（火災）をみても，押入西遺跡住居址2，4，5（段状施設を含む）8，9号住居址・野介代遺跡 1 号住居址（火災）に類似性がうかがえる。―（**C タイプ**）さらに，高本遺跡 3 号住居も，押入西遺跡住居址1，7号・小中遺跡10，18住居址（火災），23住居址・**旦原遺跡No. 11住居址**等との類似性がうかがえる。―（**A タイプ**）

さらに住居址の構造だけにとどまらず，集落の中に存在する**長方形の住居址**との関連が注意を引く。旦原遺跡では，No.11住居址に90点からなる未製品及び剝片が出土しており，No.14住居址からは打製石斧（磨製を行う前段階かも知れない）が出土している。この長方形の住居址は，長軸 4.3 m，短軸28 mを測り，若干南側の幅が広くつくられている。住居内南側半分に 0.9×0.8m，0.6×0.45m の焼土面の 2 ブロックが存在するものである。この場合の，No.11，14住居址は石器製作の作業場としての様相を呈し，製作工程をかいまみることができる。押入西遺跡についても同様のことがいえる。発掘総数11軒，建物 3 棟からなる集落内に長方形の 3 号住居址が存在する。長軸方向やや北側に1.6×0.7mの長円形焼土面を有し，住居内より緑色片岩利用の扁平片刃石斧が 1 点出土している。又，35点の石器が出土しており，そのうち石包丁13点中に 5 点の未製品が存在する。石材質は緑色片岩が圧倒多数である。山陽町惣図遺跡(註7)においても約30軒前後の住居址を中心とした集落内に，石器製作工房址と考えられる13号住居址が存在する。これは，旦原遺跡No.14住居址と非常な近似値を示すものである。

長軸4.35m，短軸（焼土面を中心にして2倍）約2.8mを測り，同様に2ヵ所の焼土面をもつ。その住居内よりもサヌカイト片8点が出土している。この発掘区より，それを裏づけるサヌカイト細片が多数採取されている。これら長方形の住居址は，津山市沼遺跡(註8)，津山市 紫保井遺跡(註9)，津山市中之坊遺跡(註9)，哲西町野田畝遺跡等で計7遺跡が確認されている。さらに，上端平面形が円にて底部において方形となり，その中央にピットを有する遺構が共伴する可能性がある。

長方形住居址（工房址）のあり方は，単位集落内における共同体の具体性に接近できうる考古学的思考の基本であり，今後の発掘調査においてもその存在を追求すべき方法がとられるべきである。今後，それらの住居址の拡張，重複等をふくめて集団内の単位の在り方を追求してゆく必要を感じる。

II期——1区平坦部周縁に円形住居址2軒，袋状ピット6基・2区平坦部に円形住居址2軒，袋状ピット1基（本ピットは時期が不明瞭）計11遺構が検出された。住居址は，4軒とも規模が異なるが，袋状ピットNo.24・25・27の3基・No.26・31の2基が床面積を同じくする。これらの遺構中よりの遺物は非常に少なく，実測可能な土器片は15点ほどである。No.24袋状ピット内より出土した甕形土器を例にとり周辺の遺跡をみてゆくと，まず谷尻遺跡(註10) Ⅲ期のNo.190住居址出土の甕形土器が類似する形態を有している。器高・口径・胴部径等においてはほとんどかわらないが，整形・器形に若干の相異がみられる。谷尻の甕が胴部下半ヘラ磨きが行われているのに比べて，旦原の甕は横位の叩目が施され，口縁部・胴部・底部に丸みを加えて球体化が進んでいる。No.16住居址内出土の高坏形土器は坏部中位に接合稜線を有し，短脚を呈している。谷尻遺跡Ⅱ期の高坏々部に類似形態をみい出せるが脚部における全体のバランスが異なる。Ⅳ期の高坏をみると，接合稜線は坏部下位$\frac{1}{3}$—$\frac{1}{4}$のところにみられ，これらの形態にも入らない。2・3点の土器をとりあげての簡単な比較説明で不備な面もあるが，谷尻遺跡のⅢ・Ⅳ期間に比定できるものと考えておきたい。また遺構から住居址にかぎりみてみると，住居址プランの円形から方形・主柱穴の4・6・7・8本のバラツキから4本の定形化・中央ピットの有無・壁体にそって設けられた方形土壙等の変化のある時期としてとらえている谷尻遺跡のⅢ～Ⅳ期間に相当するものと考えられる。なお，これらの土器は，谷を隔てて隣接する中山遺跡(註11)の特殊器台の出土地点等に近いものをみることができる。同レベルを有する丘陵上において，生活址と墓址が関連を有してとらえられることのできる場所でもある。

III期——1区平坦部周縁に円墳が1基，2区周縁部に円墳が3基（No.12・21については盛土が確認できなかった）と計4基の古墳時代墓が検出された。これらの古墳は約130mの距離をおいて，2ブロックに分かれ平野部に面して立地している。No.11・29古墳は直径約6m，周溝を有するが，内部主体を検出することができなかったものである。No.29古墳が若干高所に存在する。須恵器坏蓋・身の最大径15cm前後・器高4～5cmを測るものを両古墳周辺より採取している。No.12・21は，それらより若干新しい様相を呈し，坏蓋・身の最大径13.2～14.3cm，器高3.7～4.8cmを測る。両主体部の掘り方内法は類似し，長軸距離は一致する。

狭長な谷水田を隔てた北東丘陵上には，最近発掘調査のおこなわれた中山遺跡が存在している。大きくは，2ブロックに分かれる計10基からなる古墳群が確認されている。また，旦原遺跡同丘陵北西部（現在の落合町育苗センター内）においても，かつては古墳が存在していた。前記した丘陵全体を墓地とし，6C初頭から～6C後半まで古墳の造営がつづけられている。これらの古墳の内容は比較

的規模の小さいものが中心となり，中には盛土をもたないものも存在する。（流失も考えられるが低いものであろう）視覚的表現において明確にとらえられる墳丘は少ない状況であった。埋葬施設は，土壙（木棺直葬）が中心となり石材を利用したものは検出できなかった。副葬品の内容もいたって弱少にて，須恵器・刀子・鉄鏃・玉類を中心とするものである。この地域の横穴式石室墳は，西河内川上流・妙見峪・三谷・摺峪地域にみることができる。旭川対岸には石室全長約12mの片袖式の横穴式石室が存在していた。(註12)

IV期——この時期になると平坦部には遺構がみられず，1区東西谷にかぎり建物1棟・溝状遺構・火葬土壙2基が検出されている。とくに東谷では，火葬場所と埋葬地の一連遺構，骨蔵器3点（このうち1点は小片）が出土している。(註13)従来の墓地との占地が若干異なり，丘陵部斜面の変換点である狭所平坦部につくられている。まず，出土遺物を美作古代遺跡出土のものを中心に比較しながら検討を加える。奈良末～平安期に比定されている平遺跡(註14)の量的に多い須恵器坏蓋・身を計測すると，坏蓋最大径は8.6～19.6cm，器高1.3～4.7cm，坏身最大径は8.8～18.8cm，器高3.4～6.9cmの範囲に限定される。その中でも土器の示す傾向は，最大径12～17cm，器高1.3～4.4cmのものが多数をしめる。器種別には，坏蓋最大径12.4～16.8cm，器高2.1～3.2cm，坏身最大径12～15.8cm，器高3.4～4.4cmを測り，坏身最大径は坏蓋最大径を越えず，坏身が深いものである。この傾向は「少目」の墨書土器を出土した美作国府(註15)の第Ⅰ期井戸Ⅳ—a，「隆平永宝」の出土した下市瀬遺跡(註)のD調査区井戸Ⅰ，「吉祥」の墨書土器を出土した備中平遺跡(註16)，領家遺跡(註17)，旦原遺跡等についても同様のことがいえる。これらから旦原遺跡の骨蔵器は，火葬墳墓導入期のものではなく火葬墳墓形成・展開期8世紀(註18)後半のものと考えておきたい。（高畑）

引用文献・参考文献

註1　岡山県教育委員会「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』1973年
註2　岡山県教育委員会「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（8）』1975年
註3　岡山県教育委員会により1975年に発掘調査されたものである。
註4　岡山県教育委員会「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（9）』1975年
註5　岡山県教育委員会「小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（7）』1975年
註6　岡山県教育委員会「野介台遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』1973年
註7　岡山県赤磐郡山陽町教育委員会「惣図遺跡発掘調査概報」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報（2）』
註8　津山市・津山郷土館「津山弥生住居址群の研究」『津山市郷土館考古学研究報告第2冊』1957年
註9　津山市教育委員会調査のものであり，河本清氏の御教示による。
註10　岡山県教育委員会「谷尻遺跡『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（11）』1975年
註11　落合町埋蔵文化財調査委員会「西河内中山遺跡」『—落合町木材流通センター地内発掘調査略報—』1976年
註12　岡山県教育委員会「穴塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（8）』1975年
註13　他は骨蔵器片と考えられるもの3点が見られる。
註14　岡山県教育委員会「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（8）』1975年
註15　岡山県教育委員会「美作国府」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（6）』1973年
註16　岡山県教育委員会「備中平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書(12)』1976年　若干古い様相を呈する
註17　岡山県教育委員会「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（8）』1975年
註18　楢崎彰一「墳墓」歴史時代(下)　日本の考古学Ⅶ

木山・西河内航空写真

図版 2

1．旦原遺跡遠影（西より）

2．旦原遺跡遠影（西より）

1．1区調査前全景(北北東より)

2．2区調査前全景(南南西より)

1．1区東側谷部（南より）

2．3区全景（南西より）

1．3区グリッド（北北東より）

2．3区トレンチ（南より）

第Ⅰ次調査区全景（南東より）

1．I区谷部全景（北北東より）

2．I区谷部遺構全景（北北東より）

1．Ⅰ区谷部遺構全景（北北東より）

2．Ⅰ区谷部遺構（南より）

1．I区No.4．5周辺平担部（東より）

2．I区No 5周辺骨蔵器出土状況（北東より）

図版10

1．I区No 5 土層断面（北東より）

2．I区No 5 土層断面（南西より）

1．Ⅰ区No.5火葬土坑(東より)

2．Ⅰ区No.5火葬土坑断面(南より)

1．Ⅰ区骨蔵器出土状況（西より）

2．Ⅰ区骨蔵器出土状況（西より）

1．I区No.6遺物出土状況（南西より）

2．I区No.6土層断面（南より）

1．Ⅰ区No 6 建物全景（南より）

2．Ⅰ区No. 7 溝状遺構（南西より）

1．Ⅰ区No 2 古道（南より）

2．Ⅰ区No. 8 溝状遺構（南より）

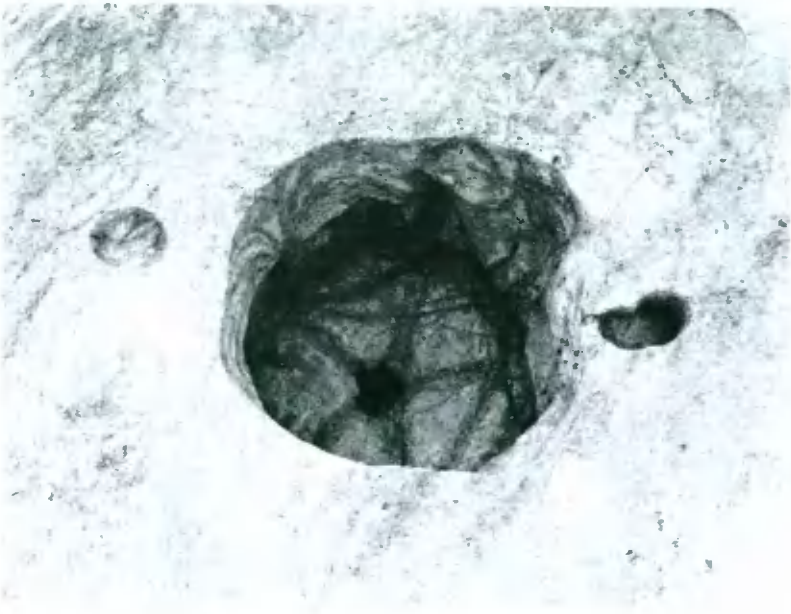
2　I区No.1住居址（東より）

I　I区住居址・袋状ピット全景（北より）

1．Ⅰ区No.28住居址（東より）

2．Ⅰ区No.30住居址（南より）

1．I区No.24袋状ピット遺物出土状況（南東より）

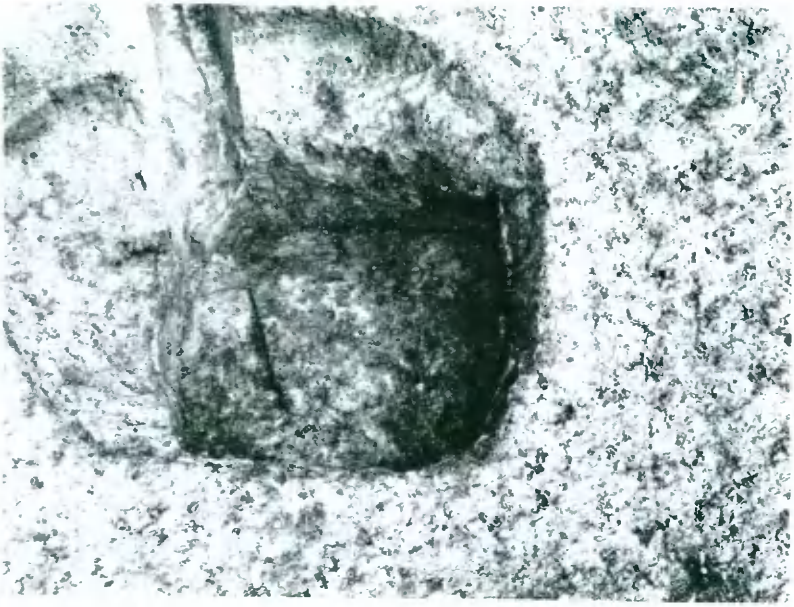


2．I区No.25袋状ピット（南東より）

1．Ⅰ区No.29古墳周溝（南より）

2．Ⅰ区No.29古墳盛土状況（北より）

1．Ⅰ区No.33溝、土坑全景（南南西より）

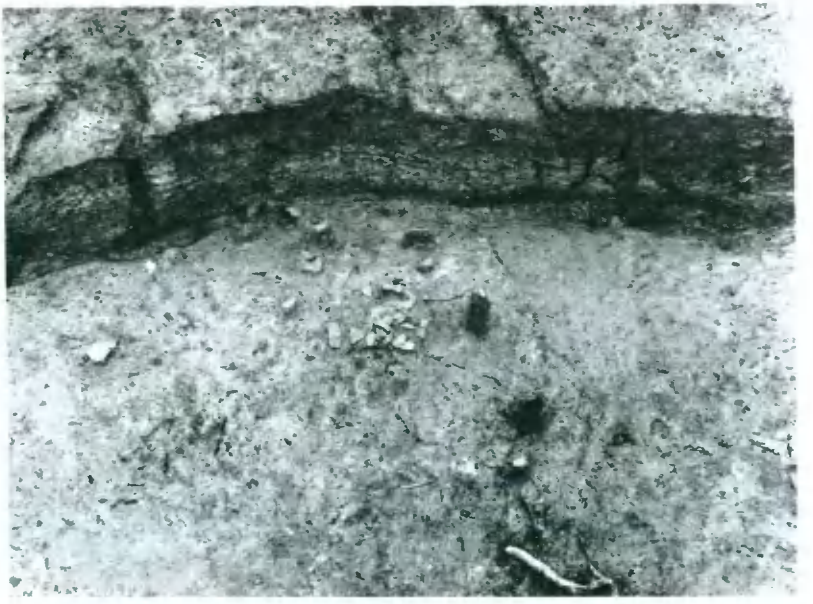


2．Ⅰ区焼土坑（西より）

1．2区No11住居址（北より）

2．2区No11住居址土層断面（西より）

図版22



1．2区No.11住居址内遺物出土状況(北より)

2．2区No.11住居址内遺物出土状況(北より)

1．2区完掘全景（南南西より）

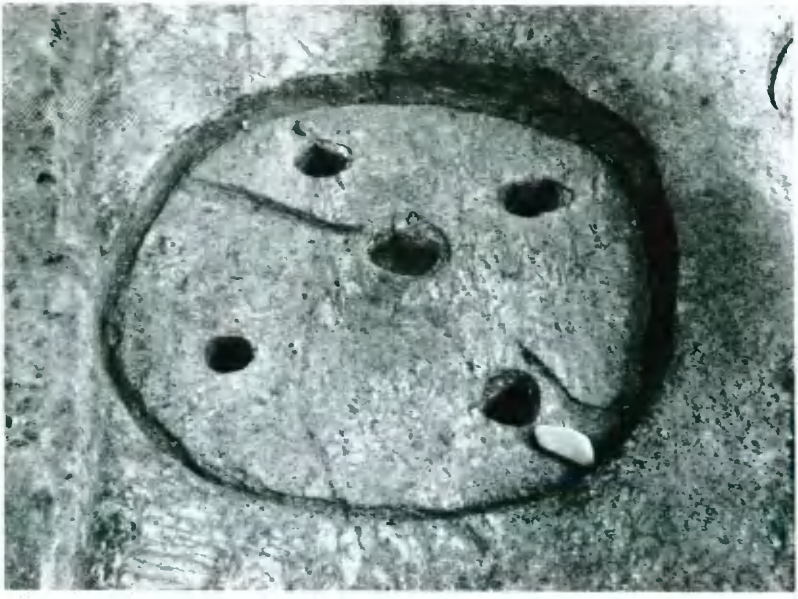
2．2区No14住居址周辺全景（東より）

1．2区No14住居址（北西より）

2．2区No14住居址石斧出土状況（北西より）

1．2区No16住居址土層断面（北東より）

2．2区No16住居址遺物出土状況（北北西より）

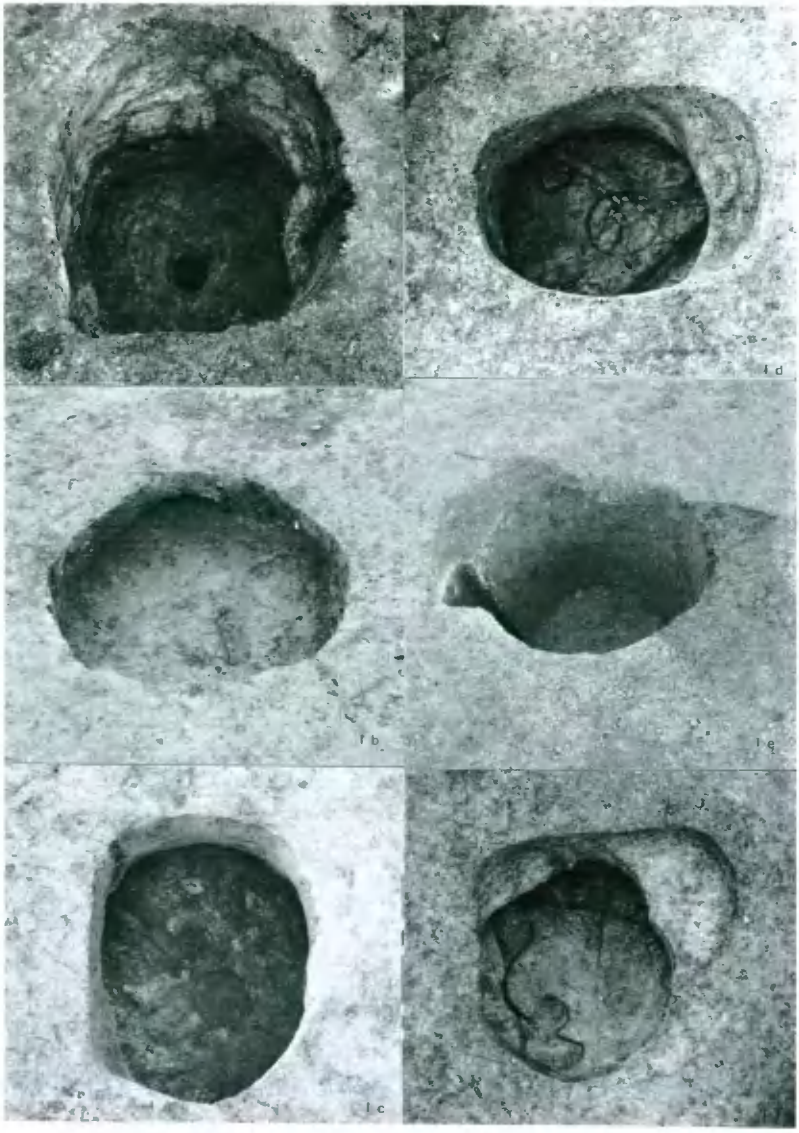


1．2区No16住居址（西より）

2．2区No.17住居址（東より）

1．2区No.16・17住居址全景(西より)

2．2区No.19・20土坑(東より)



1a　1区No13袋状ピット
1b　2区No24A袋状ピット
1c　2区No24袋状ピット
1d　2区No26　袋状ピット
1e　2区No32袋状ピット
1f　2区No31　袋状ピット

1．2区No.10古墳周溝検出状況（南西より）

2．2区No.10古墳完掘状況（南西より）

図版30

1．2区No.10古墳南西周溝断面（北西より）

2．2区No.10古墳南西周溝断面（北西より）

1．2区No.12古墳周溝完掘状況（西より）

2．2区No.12古墳完掘状況（南南西より）

1．2区No.12古墳主体部遺物出土状況(北西より)

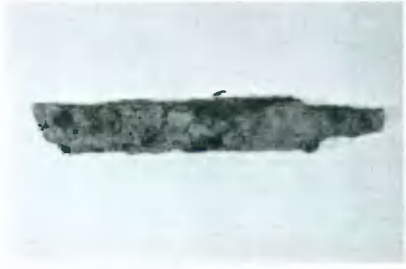
2．2区No.12古墳周溝断面(北西より)

1．2区No.21土坑墓全景（北東より）

2．2区No.21遺物出土状況（南東より）

図版34

表土剝ぎ　表採による石器



2区No16住居址出土大刀

I区No24袋状ピット出土

重ね焼きの痕跡

Hトレンチ内出土灯明皿

I．I．2区出土遺物

1．2区No.11住居址出土石器未製品及び剥片

2．2区No.11住居址出土石器未製品及び剥片

2区No.11住居址出土遺物

1区No.1住居址出土遺物

No.16住居址出土遺物

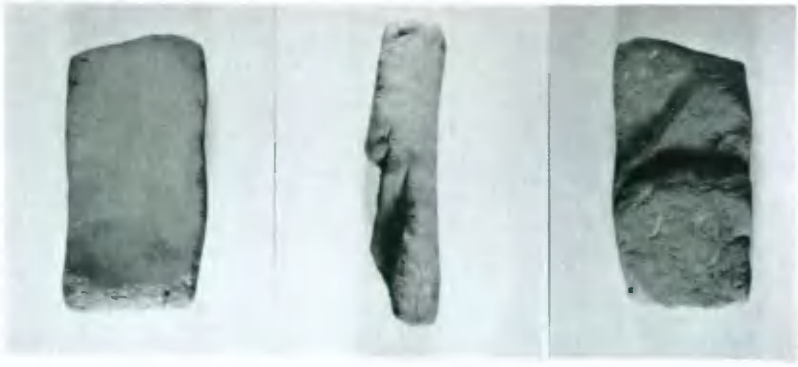
No.31袋状土坑付近出土遺物

13地点表土中出土遺物

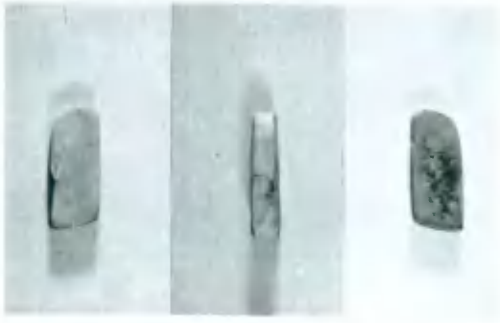
1．住居址出土土器

1．2区No21古墳出土遺物

2．2区No12古墳出土遺物



Ⅰ区No26袋状ピット内出土砥石



2区No11住居址出土砥石

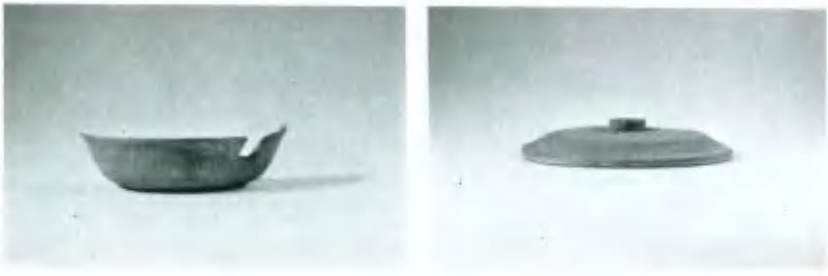
Ⅰ区No30住居址出土砥石

2区No14住居址出土打製石斧

1．I区東谷出土　骨蔵器1

2．I区東谷出土　骨蔵器2

1　No.4 火葬土坑出土須恵器



2　No.6 建物出土須恵器

3　I区16地点出土須恵器

3　遺構に伴わない須恵器

I．I・2区出土　須恵器

岩倉遺跡・岩倉古墳群(39)

本　文　目　次

第１章　地理的・歴史的環境……73
第２章　調査の経過・日誌抄……75
第３章　岩倉遺跡・岩倉古墳群の位置と構成……79
第４章　各時代の遺構・遺物……82
　第１節　縄文式土器……82
　第２節　竪穴住居址……83
　第３節　遺構に伴わない遺物……86
　第４節　石　　器……99
第５章　古墳の調査……101
　第１節　横穴式石室墳の調査……101
　（１）　１　号　墳……101
　（２）　２　号　墳……110
　（３）　３　号　墳……116
　第２節　４号墳の調査……125
　第３節　シストと土壙墓の調査……127
第６章　窯状遺構の調査……144
第７章　その他の遺構……153
　第１節　火　葬　墓……153
　第２節　石蓋土壙・土壙・ピット……154
　第３節　石列・集石遺構……158
　第４節　その他の遺構……160
　（１）　五　輪　塔……160
　（２）　溝　状　遺　構……160
結　　語……162

図　目　次

第１図　岩倉遺跡と周辺古墳群（1/50,000）……74
第２図　岩倉遺跡周辺地形と横穴式石室墳の位置（1/2,000）……79
第３図　遺構配置図（1/500）……折込
第４図　縄文式土器（$\frac{1}{2}$）……82
第５図　竪穴住居址平面図・断面図（1/30）……84
第６図　住居址出土遺物（$\frac{1}{3}$）……85
第７図　トレンチ土層断面図（1/100）……87
第８図　西谷出土弥生式土器（前・中期）（$\frac{1}{3}$）……89

第９図　西谷出土弥生式土器（中・後期）（$\frac{1}{3}$）……90
第10図　西谷出土土器（古式土師器・須恵器・備前焼）（$\frac{1}{3}$）……91
第11図　東谷出土弥生式土器（中・後期）（$\frac{1}{3}$）……93
第12図　東谷出土土師器（$\frac{1}{3}$）……95
第13図　東谷出土須恵器（$\frac{1}{3}$）……96
第14図　石　　器Ⅰ（$\frac{1}{2}$）…… 100
第15図　石　　器Ⅱ（$\frac{1}{3}$）…… 100
第16図　古墳配置図（1/500）…… 102
第17図　１号墳断面図（1/30）…… 103
第18図　１号墳玄室平面図・展開図（1/30）…… 104
第19図　１号墳出土須恵器（$\frac{1}{3}$）…… 106
第20図　１号墳出土鉄鏃（$\frac{1}{3}$）…… 109
第21図　１号墳埋土出土土器（$\frac{1}{3}$）…… 110
第22図　２号墳玄室平面図・断面図（1/30）……折込
第23図　２号墳奥壁後方土層断面図（1/30）…… 111
第24図　２号墳石室平面図・展開図（1/30）……折込
第25図　２号墳出土須恵器（$\frac{1}{3}$）…… 113
第26図　２号墳鉄器（$\frac{1}{2}$）…… 115
第27図　３号墳玄室平面図・断面図Ⅰ（1/30）…… 117
第28図　３号墳玄室平面図・断面図Ⅱ（1/30）…… 118
第29図　３号墳出土須恵器（$\frac{1}{3}$）…… 120
第30図　３号墳出土土師器（$\frac{1}{3}$）…… 121
第31図　３号墳出土金環・玉・鉄器（$\frac{1}{2}$）…… 122
第32図　４号墳竪穴式石室平面図・展開図（1/30）…… 126
第33図　１号シスト平面図・展開図（1/20）…… 128
第34図　２号シスト平面図・展開図（1/20）…… 129
第35図　３号シスト平面図・展開図（1/20）…… 131
第36図　４号シスト平面図・展開図（1/20）…… 132
第37図　５号シスト平面図・展開図（1/20）…… 133
第38図　６号シスト土層断面図（1/20）…… 134
第39図　６号シスト平面図・展開図（1/20）…… 135
第40図　７号シスト平面図・展開図（1/20）…… 136
第41図　８号シスト（上）・9号シスト（下）平面図・展開図（1/20）…… 137
第42図　10号シスト平面図・展開図（1/20）…… 138
第43図　11号シスト平面図・展開図（1/20）……折込
第44図　土壙墓平面図・断面図（1/20）…… 140

第45図　各遺構出土須恵器（1/3）…… 141
第46図　窯状遺構模式図…… 144
第47図　1号窯及び溝状遺構土層断面図（1/40）…… 145
第48図　1号窯平面図・断面図（1/60）…… 146
第49図　2号窯及び2号石蓋土壙平面図・断面図（1/60）…… 148
第50図　3号窯平面図・断面図（1/80）…… 149
第51図　4号窯平面図・断面図（1/80）…… 151
第52図　火葬墓平面図・断面図（1/10）…… 153
第53図　1号石蓋土壙平面図・断面図（1/20）…… 154
第54図　2号石蓋土壙平面図・断面図（1/20）…… 155
第55図　2号石蓋土壙出土遺物（1/2）…… 156
第56図　土壙平面図・断面図（1/20）…… 157
第57図　土壙出土提瓶（1/3）…… 158
第58図　1号ピット・(上)2号ピット(下)平面図・断面図（1/20）…… 159
第59図　集石遺構平面図・断面図（1/20）…… 160
第60図　C溝出土遺物（土師器・砥石）（1/4）…… 161
第61図　D溝出土弥生式土器（1/3）…… 162

表　目　次

表1　岩倉遺跡遺構一覧表……81
表2　東谷区出土須恵器一覧表……97～98
表3　1号墳出土須恵器一覧表……107～108
表4　各遺構出土須恵器一覧表……142～143
表5　窯状遺構一覧表…… 144

図　版　目　次

図版1-1　岩倉遺跡丘陵区発掘前近景（西より）
図版1-2　谷川西区発掘前近景（東より）
図版2-1　丘陵区発掘前近景（北より）
図版2-2　東谷区・丘陵区発掘後近景（北東より）
図版3-1　東谷トレンチ遺物出土状況（東より）
図版3-2　前期弥生式土器出土状況（南より）
図版4-1　竪穴住居址（東より）
図版4-2　竪穴住居址（北より）
図版5-1　1号墳発掘前（西より）

図版5-2　1号墳断面（南より）
図版6-1　1号墳玄室（東より）
図版6-2　1号墳鉄鏃出土状況（西より）
図版7-1　2号墳（東より）
図版7-2　2号墳石室近景（東より）
図版8-1　2号墳1次埋葬面（東より）
図版8-2　玄室内短頸壺・棺釘出土状態（北より）
図版9-1　3号墳石室遺存状態（南より）
図版9-2　玄室内須恵器・土師器出土状態（南より）
図版10-1　3号墳玄室内床石敷設状態（南より）
図版10-2　金環・玉出土状態（南より）
図版11-1　4号墳竪穴式石室露出状況（北より）
図版11-2　4号墳竪穴式石室（南より）
図版12-1　2号シスト（南より）
図版12-2　2号シスト（西より）
図版13-1　3号シスト（西より）
図版13-2　4号シスト（北より）
図版13-3　4号シスト遺物出土状態
図版14-1　6号シストと土層断面（北より）
図版14-2　6号シスト（南より）
図版14-3　6号シスト遺物出土状態
図版15-1　7号シスト（南より）
図版15-2　10号シスト（南より）
図版15-3　11号シスト（西より）
図版15-4　11号シスト蓋取りのぞき後（西より）
図版16　土壙墓と遺物出土状態
図版17-1　1号窯検出状況（北より）
図版17-2　1号窯煙突と土器溜り（東より）
図版18-1　2号窯・2号石蓋土壙検出状況（東より）
図版18-2　2号窯・2号石蓋土壙掘り上げ後（南より）
図版19-1　3号窯（東より）
図版19-2　3号窯（南より）
図版19-3　3号窯（北より）
図版20-1　4号窯横口前方（南西より）
図版20-2　4号窯全景（南西より）
図版20-3　4号窯石組み（南より）

図版21　火葬墓（上）検出状態（下）蓋取りのぞき後
図版22-1　縄 文 式 土 器
図版22-2　前期弥生式土器
図版22-3　弥 生 式 土 器
図版23　石器及び2号石蓋土壙出土刀子
図版24　1号墳須恵器杯蓋
図版25　1号墳須恵器杯身・鉄鏃
図版26　2号墳須恵器
図版27-1　2号墳須恵器・棺釘出土状態
図版27-2　2号墳棺釘・刀子
図版28　3号墳須恵器
図版29　3号墳須恵器・玉・金環・土師器
図版30　3号墳土師器・鉄鏃・鉇・刀子片・不明鉄器片
図版31　遺構出土須恵器
図版32　遺構・包含層出土土器

第1章　地理的・歴史的環境

地理的環境

新見市は，岡山県西北部最大の都市である。面積は約350km²あり，そのうち8割が山林である。高梁川が形成する狭小な沖積平野に人口が集中し，総人口3万人前後を数え，近年しだいに減少しつつある。産業別人口を見ると，商業人口が最も多く，サービス業・製造業が続く。農業は耕作面積5反以下の農家が最も多く兼業農家の増大を促している。

また新見市は，交通の要衝であり，国道180号・182号が通過し，伯備線・芸備線が市内を通過する。これらの鉄道・道路は，山陽・山陰を結ぶ動脈である。新見市は岡山・米子のちょうど中間にあたる。

市の南部は，石灰岩地帯であり，井倉洞，満奇洞などの石灰岩が形成した洞穴観光地として著名である。またセメントの主原料である石灰岩の産出地として知られ，最近まで大規模なセメント生産が行われてきた。

気象は，年平均気温が14度前後で比較的すごしやすいが，谷間特有の高低差が激しい。年間雨量は1,200～2,000㎜前後で，特に冬期の雪日数は30～70日前後もあり，山間盆地の気候を示している。

歴史的環境（第1図）

旧石器時代の遺物は未だ採集されていないが，縄文時代になると遺跡・遺物の発見が発掘調査・分布調査によって次第に増大しつつある。青地遺跡(註1)では早期の楕円押型文土器・前期の条痕文土器が出土し，土壙が検出された。また宗金遺跡(註2)・横見古墳群(註3)では後期～晩期の土器片や石器が出土している。また三室遺跡(註4)では早期の粗大楕円の押型文土器が発見されている。その他縄文式土器を採集した遺跡は，草間馬撃遺跡・新見富福寺西遺跡・長塚石垣遺跡が知られているが，先述の調査が為された遺跡ほどその概要は明らかでない。

弥生時代になると遺跡の数が急激に増加する。ことに平野に面する丘陵の縁辺部や，丘陵上低位台地上に多く存在する。青地遺跡では中期～後期の遺構・遺物が見られ，宗金遺跡でも中期～後期の遺物が出土している。他に横見墳墓群(註5)・新見大仁子遺跡・高尾土井遺跡・高尾平遺跡・西方久原遺跡・西方辻田遺跡などが知られている。

古墳時代には遺跡・古墳群が近接して見られる。青地・大仁子・宗金・土井等である。その他古墳群は，向田・今井・塚ヶ市・井村・高下谷・横見・石垣等である。多くは6C～7Cにかけての後期古墳で，前期・中期古墳はほとんど知られていない。後期古墳のほとんどは横穴式石室・シストを内部構造としてもつことが多く，流紋岩系の石材を用いて袖部を明確にもたないものが多い。

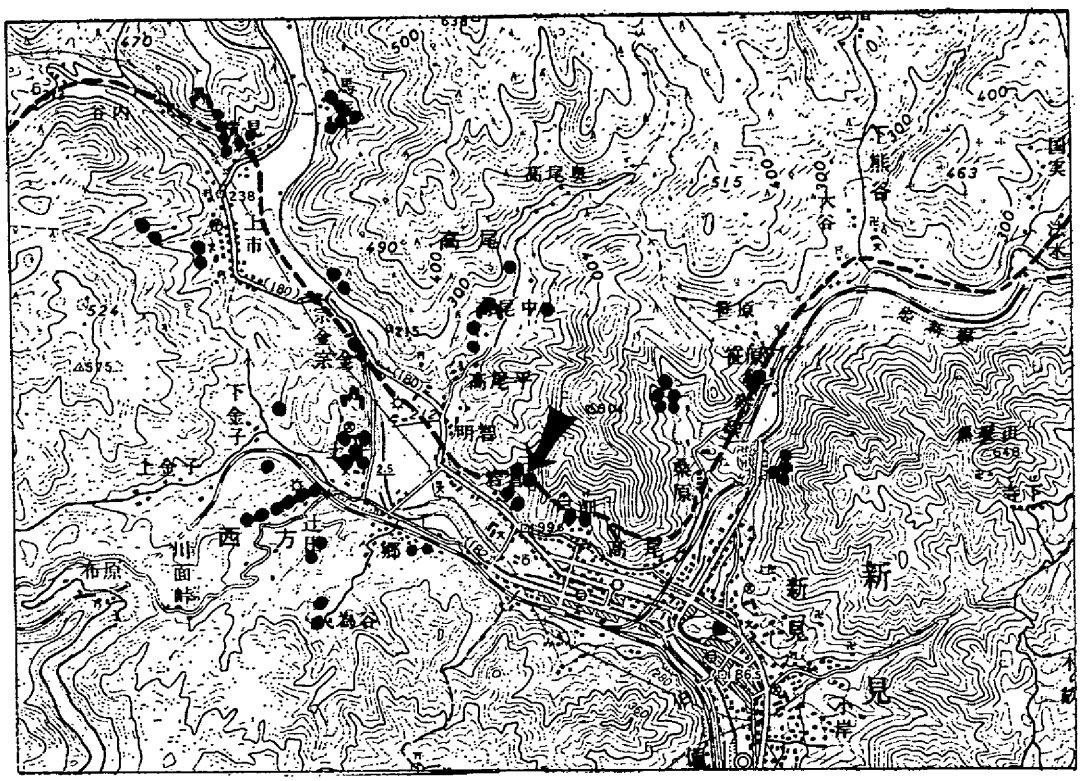
奈良～平安時代の遺跡としては，宗金・大仁子があげられる。この時代の寺院・官衙址また生産遺跡・生活址など未だその所在が知られていない。

中世の遺跡としては，京都の東寺の荘園として発達した新見庄に関連する西方政所址・横見政所址

・金子氏屋敷址などが知られ，当時の集落址として二日市庭，墳墓として桑原遺跡(註6)・宗金遺跡等があるが，考古学的な調査による史的実態の解明は未だ行われていない。中世墓として五輪塔など（コゴメ石を用いた）が多く存在する他，祐清塚が知られている。また横見墳墓群の存在した丘陵突端部には火葬墓が検出されている。

城址は，丸山城・茶臼山城・朝倉城・粒根城・樔城等がある。

（註1） 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（11）中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査6
（註2） 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査は終了し，整理中である。
（註3） 調査は終了し，整理中である。
（註4） 黄褐色粘質土（火山灰土）中から押型文を採集し，付近には古式土師器，鉱滓が多い。
（註5） 調査は終了し，整理中である。特殊器台・特殊壺等が出土している。
（註6） 調査は終了し，整理中である。



第1図　岩倉遺跡と周辺古墳群（1/50,000）

第2章　調査の経過・日誌抄

岩倉遺跡・岩倉古墳群は，岡山県新見市高尾岩倉に所在し，中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査の対象となったものである。本遺跡・古墳群は，昭和45年３月21日に鎌木義昌氏（岡山理科大学教授）らによる分布調査で「岩倉上の古墳」として報告されていた。その後，昭和49年３月に県教委の事前調査の結果，報告にある尾根の南西端に崩壊寸前の横穴式石室墳が露出しているのが確認された。したがって調査の対象は，この横穴式石室墳１基，すなわち「岩倉上古墳」とされた。そこで，調査期間１ヵ月の予定で担当調査員である浅倉が，昭和49年（1974年）11月13日から発掘調査を開始した。

調査は，まず横穴式石室墳周辺の草刈り清掃と，地形観察，遺物採集等を行った。その結果，横穴式石室墳の位置する尾根の用地内南半の大部分が前方後円墳ではないかという疑問が出てきた。しかも後円部にあたる地点に竪穴式石室が露出しており，また前方部にあたる地点にはシストが露出していたため前方後円墳である可能性を無視できなくなった。そして西谷部でのトレンチ調査では窯状遺構を検出し，遺物も弥生式土器・須恵器等が若干量出土した。すなわち当初の古墳１基だけの調査では済みそうにないという結果を得たのである。

この事実を11月26日の対策委員会に報告し，その後岡山県教育委員会・対策委員会・日本道路公団の会議の結論が出るまで，１基の古墳調査と西谷区の調査を進めることにした。これより岩倉遺跡・岩倉古墳群という名称を採用した。12月７日の係会議で，丘陵全体の調査を開始する事が決まり，さっそく表土の除去より始めた。この地点は縦貫道の弓削トンネルの出入口に位置するため，トンネル工法・橋脚設置等で保存することは不可能という結論であった。そして十分な調査が終了するまで当分期限が定まらないということでもあった。しかし，作業員の確保が市街地内であることからあまり望めず，調査員の増員も困難な中で，調査は小規模に行っていくしかなかった。

調査区の設定は，尾根がほぼ南北に伸び，山道が東西に走っているので，次のように決めた。すなわち北尾根・南尾根・東谷・西谷そして谷川西調査区と呼ぶ。遺構は，各種別に検出した順に番号を付した。例えば，１号墳横穴（岩倉上古墳のこと）・２号墳横穴・１号シスト・２号シスト・１号窯・２号窯等である。

調査員１名での発掘は，遺跡の全体的把握・検出遺構のすみやかな精査が不可能であるため１月から２月にかけて断続的に岡田（当時岡山県立博物館学芸員）の応援を得た。地形測量作業の際には，井上（当時谷尻遺跡調査中）の応援も得た。そして新年度４月からは，浅倉・岡田２名パーティーにより調査を進めることになった。６月末という期限も設定された。また作業員も10名を超え，ベルト・コンベヤーも導入したため，発掘の範囲も大幅に拡張し，その結果谷川西調査区及び西谷調査区南畑地から横穴式石室墳２基が追加確認され，この２基の調査のため，６月末から更に１ヵ月延長になった。

十分な事前踏査と，トレンチ調査による遺跡範囲の確認が不十分であったため度重なる期限延長交

渉を招いた。

また遺跡発掘調査中，発掘予定地内及び周辺において，様々な問題が起きた。用地買収の残金を受け取っていないため発掘を拒否された件，未買収地をわずかに掘り拡げたため埋めもどしを求められた件，用地外私有地を誤認して発掘した件など枚挙にいとまがない。幸いすべて期間中に解決した。さらに発掘終了後にも，発掘が原因でシイタケ栽培に用いる湧水が汚濁し，損害賠償を求められた事件があったが，これは公団・三井建設担当者の尽力により解決した。

この様に，様々な問題を抱えながらも，調査は，極寒積雪の冬期から酷暑の夏期まで約９カ月半をかけて８月５日に終了した。

発掘期間中，中野雅美氏（当時都市計画道路用地内上東・川入遺跡担当調査員）に実測，西崎昭夫氏（岡山大学学生）に測量，西村尋文氏（四国学院大学学生）に実測の手をわずらわし，宗金遺跡調査事務所では出土遺物の注記・復元など岡本静子事務担当員の手をわずらわせ，その他調査員各位，対策委員には指導・助言を与えていただき，感謝の意を表するものである。また作業員の方々には終始お世話になり深く感謝致します。

調査後の整理については，発掘調査中雨の日などに断続的に行ってきたが，昭和51年11月より昭和52年１月20日までの期間に，岡山市西古松文化課分室において，浅倉・岡田の両名が分担して行った。

地元作業員名簿（順不同・敬称略）

浅野　豊	上田孝子	山崎春恵
松永里美	山本光三郎	平山政夫
小谷光久	岡本清治	戸田ふで代
太田保子	平山房代	市川竹子
小谷百代	吉国辰代	福田美保子
吉国朝代	田辺志磨子	渡辺益恵

＜日　誌　抄＞

1974年11月13日（水）～16日（土）　調査員１名，作業員数名で発掘調査開始。休憩テント設営と草刈り作業。１号墳（横穴式石室）の土層断面清掃作業。写真撮影。１号墳より須恵器10余点出土している。

11月18日（月）～23日（土）　測量会社による地形測量。１号墳精査開始。４号墳（竪穴式石室）上面清掃。写真撮影。西谷地区トレンチ設定。

11月25日（月）～30日（土）　１号墳精査続行。４号墳上面検出状況実測。墳丘割付作業。西谷地区トレンチ調査で１号窯検出，発掘区拡張。弥生式土器・須恵器・石製紡錘車片等出土。

12月２日（月）～７日（土）　１号墳調査続行，鉄鏃出土。４号墳表土除去開始。１号シスト検出。１号窯調査開始。西谷地区より弥生時代前期甕形土器出土。５日に地鎮祭を挙行。

12月９日（月）～14日（土）　１号墳発掘終了。４号墳表土除去作業。２号シスト・集石遺構・１号石蓋土壙を相ついで検出，１号・２号シストの調査を開始する。

12月16日（月）～21日（土）　１号シスト・２号シスト・１号石蓋土壙・集石遺構・１号窯の調査を終える。新たに３号シスト・４号シストおよび１号窯に伴うとみられる溝状遺構を検出，調査を開始する。

12月22日（日）～27日（金）　22日，対策委員会開催。3号・4号シスト調査終了。西谷地区の調査を中断して，東谷地区にトレンチ設定発掘開始。須恵器，土師器，鉄滓出土。25日に航空写真撮影，セスナ機によるもの。

1975年1月13日（月）～18日（土）　降積雪が激しく，除雪後に表土除去作業，遺構検出作業を行う。南斜面にて土壙墓検出。調査員1名来援。

1月20日（月）～25日（土）　積雪量20cmに達し，調査は難渋。ベルコン導入により，除雪作業・表土除去作業は円滑になる。土壙墓の調査開始。

1月26日（日）～2月1日（土）　東・西丘陵斜面の表土除去作業とトレンチ発掘作業を並行して進める。丘陵北方尾根の表土除去開始。4号シスト調査終了。土壙墓・5号シスト調査終了。

2月3日（月）～9日（日）　調査員2名来援，地形測量。西斜面で6号シスト，東谷地区で7号シストを検出。

2月10日（月）～12日（水）　旧暦の正月のため作業を休む。

2月13日（木）～15日（土）　調査員の来援終り再び1名担当。北尾根表土除去作業。6号・7号シスト・2号石蓋土壙の調査終了。集石遺構実測。

2月17日（月）～22日（土）　積雪により調査の進行が遅れる。北尾根表土除去作業中，北東端で黒曜石製石鏃出土。3号窯・土壙・8号シスト検出。6～8号シストの調査続行。

2月24日（月）～3月1日（土）　3号窯検出作業および掘り下げ作業。東谷地区北端トレンチ掘り下げ作業。北尾根遺構検出作業中4号窯検出。6号シストより須恵器2点出土。

3月3日（月）～8日（土）　6号シスト調査終了。8号シスト調査続行。3・4号窯精査。各地区トレン掘り下げ作業続行。

3月10日（月）～15日（土）　4号窯精査続行。火葬墓検出，骨蔵器遺存。3号窯床面まで検出。土壙検出，精査終了。南尾根地区・東谷地区の遺構配置図作成終了。

3月17日（月）～23日（日）　3・4号窯調査続行。

3月24日（月）～31日（月）　3・4号窯調査終了。8号シスト終了。2号石蓋土壙の調査再開。1号窯周辺の遺構検出作業開始。

4月1日（火）　新年度。中縦埋蔵文化財担当調査員パーティが新たに編成される。本遺跡は引き続き浅倉が担当し，岡田が新たに加わり2名の調査員で担当とすることとなった。調査員は高梁教育事務所兼務となる。

4月2日（水）～9日（水）　谷尻遺跡（真庭郡落合町所在）より休憩小屋建築資材・発掘資材搬入。宗金事務所整備。

4月10日（木）　高梁教育事務所にて新年度第1回調査員会議が開かれる。目新しきもの何もなし。

4月11日（金）　道路公団・会計検査院職員来跡，現地説明。宗金事務所にて出土遺物の説明。

4月12日（土）　新見市上市の小野田セメントK.Kの土採場で発見された遺跡（ほぼ全壊）状況視察。

4月14日（月）　中縦担当調査員全員で新見市教委あいさつ。作業員賃金支払額についての交渉，宗金事務所にて行う。高梁教育事務所より所長・次長・主幹同席。

4月15日（火）　高梁教育事務所にて調査員会議。作業員賃金決定，男性3,500円，女性2,700円，男女同権にほど遠い。

4月16日（水）～19日（土）　4号墳・2号石蓋土壙・8シスト掘り上げ，写真撮影，実測。

4月21日（月）～26日（土）　4号墳調査続行。丘陵上の遺構検出作業により溝状遺構検出。谷川をはさんで西方の調査区草刈作業。石列遺構付近の清掃，写真撮影。

4月28日（月）～5月2日（金）　4号墳床面検出，杯の身と蓋を並べ枕としている。西谷調査区トレンチ設定発

掘開始。北東方の用地外谷川沿いに，鉄滓・土師器片が散布，表面採集。

5月6日（火）～10日（土）　西谷調査区トレンチ調査続行，石列付近にトレンチ新設。4号墳遣り方測量開始。丘陵縁辺部（1号窯の下方）発掘，石庖丁出土。

5月11日（日）～17日（土）　西方調査区石列遺構第3・第4トレンチ終了。1号窯西斜面ピット掘り上げ。12・9号シスト実測。4号墳実測続行。

5月19日（月）～24日（土）　1号窯西調査区で住居址検出。弥生時代中期後半の土器片出土。4号墳実測続行。西方調査区にて横穴式石室検出。（2号墳）墳丘の大半を失ってはいるが玄室は天井石2枚を残し，側壁もかなり遺存している模様。3号窯の窯壁にカワセミが巣作りを始める。

5月26日（月）～31日（土）　1号住居址発掘終了，続いて2号・3号居址検出。2号墳発掘続行，棺釘・須恵器出土，実測開始。床面は数次による埋葬面として利用されている。西方谷部の畑，斜面のグリッド調査開始。

6月2日（月）～7日（土）　住居址，更に4号・5号の2棟を検出。2号墳トレンチ設定。天井石2枚を奥壁調査のため，実測後除去，玄室内にて人骨出土。西方石列遺構の一画に五輪塔があったと伝えられ，その地点にトレンチ設定。西谷部で縄文式土器表採，小片であるが文様観察は一部可能。

6月9日（月）～13日（金）　2号墳トレンチ調査続行。玄室内清掃，最終埋葬面の実測。住居址土層断面観察，柱穴・壁溝掘り上げ。

6月14日（土）　高梁教育事務所にて調査員会議。

6月15日（日）～21日（土）　2号墳玄室内が荒らされ，人骨が散乱，原位置を移動。玄室内写真撮影・実測。住居址発掘作業。西方谷部では弥生式土器片・須恵器片などが出土。1号窯追加精査。

6月23日（月）～28日（土）　西方谷部のやや下った畑地で3号墳（横穴式石室）発見。2号墳とほぼ相対する位置にある。玄室内遺物出土状況写真撮影。住居址群実測。

6月30日（月）～7月5日（土）　3号墳発掘開始。2号墳補測続行。住居址実測続行。2号窯発掘。

7月7日（月）～11日（金）　2号墳・3号墳精査続行。2号窯を切る石蓋土壙確認。

7月12日（土）　高梁教育事務所にて調査員会議。

7月14日（月）～19日（土）　2号墳玄室内精査。3号墳精査。2号窯写真撮影。東谷地区に新たに10号シストを発見。

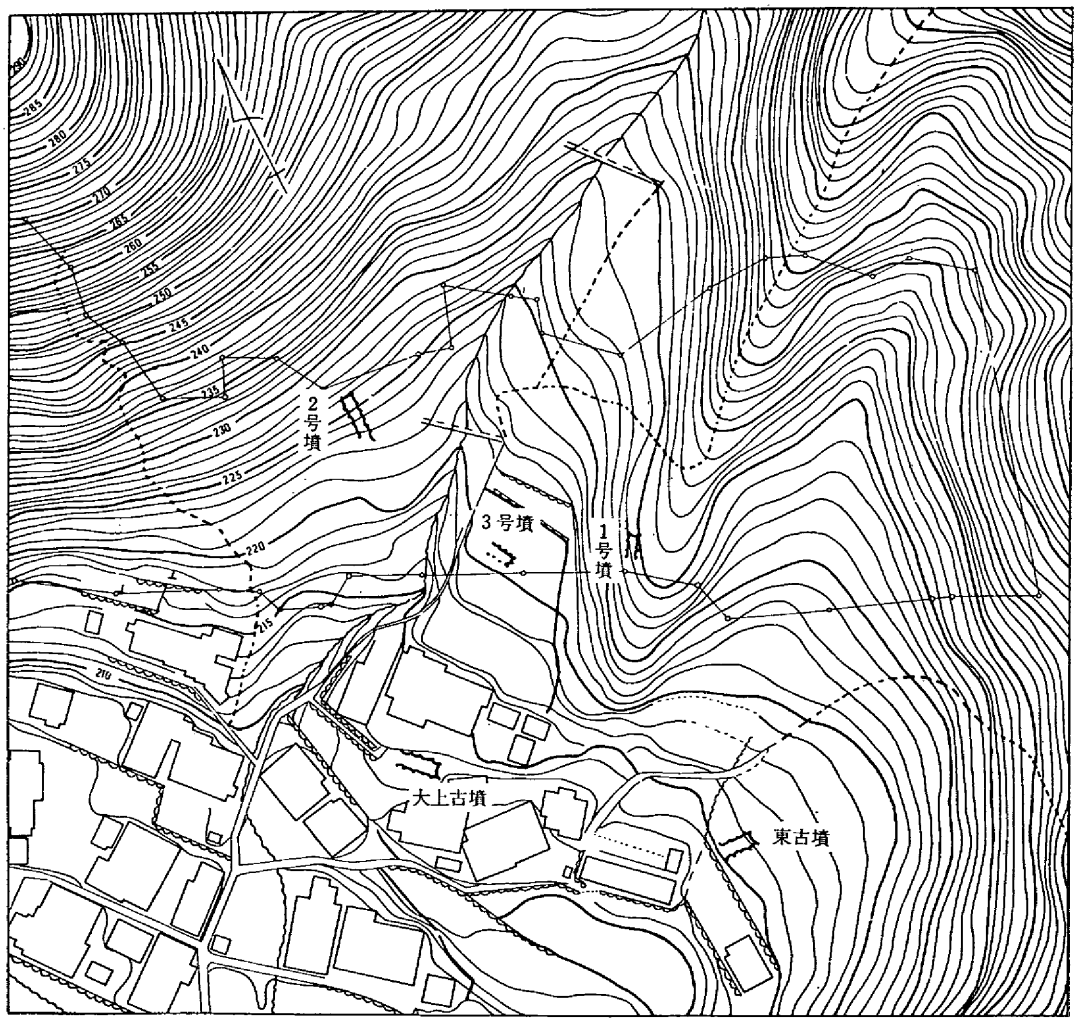
7月21日（月）～25日（金）　猛暑とヤブ蚊の来襲が続き，作業員・調査員疲労困憊。10号シスト掘り上げ，実測。2号墳平面実測，墳丘精査トレンチ清掃，写真・実測。11号シスト発見。

7月28日（月）～8月5日（火）　11号シスト実測・写真撮影。2号墳補足調査。4号墳実測精査。3号墳床石除去精査。全域平板測量，器材撤収作業。5日をもって発掘区，道路公団に明け渡し。

第３章　遺跡の位置と古墳群・遺跡の構成

遺跡の位置

岩倉遺跡・岩倉古墳群は，新見市高尾岩倉に所在し，新見市街地の北東郊外にあたり，伯備線新見駅から西方約 1.5 kmに位置する。岩倉部落は，国道 180 号線の北側にあって南面する日当りのよい小扇状地上に10数戸の民家が散開している。これらの民家は，シイタケ栽培・植林等を自営する他に，市街地及びその周辺に勤める兼業農家が多い。扇状地の大きさは東西約 100m 南北約50mを測り，遺跡の範囲はこの扇状地と谷川の上流 100m 位までを含む。岩倉部落の奥には今回の調査対象となった



第２図　岩倉遺跡周辺地形と横穴式石室墳の位置（1/2,000）

舌状丘陵がほぼ南北に伸び，その頂部より左右，つまり東方，西方に谷を見下ろす。西谷には谷川があり，部落のほぼ中央を通って高梁川にそそぐ。谷川の水量はあまり多くはないが，常に清澄・低温を保ち，夏期に一時枯渇する以外は流れ続けている。東谷は大雨の時以外に水の流れはない。中国縦貫自動車道は，東から弓削トンネルを出ると，東谷を埋め，舌状丘陵を削り，谷川に橋を掛け，山腹に沿って西方約1kmの新見インターチェンジに向かう。舌状に伸びる丘陵は，新見平野からの比高約30mを測り，南に高梁川と沖積平野を見下ろし，平野をとりまく幾重の山なみを眺望することができる。

古墳群と遺跡の構成（第3図，表1）

調査の経過の中で述べたように，岩倉遺跡は東谷区，舌状丘陵，西谷区，谷川西区の4区に大別した。各区で検出した遺構は次の通りである。すなわち，東谷区からは，7号・10号シスト・1号ピットが検出できた。舌状丘陵はさらに稜線上と東・西斜面の3区に分割できる。稜線上では，竪穴式石室・1号・5号シスト・1号石蓋土壙・土壙墓・溝状遺構である。東斜面では，2号・8号・9号シスト・2号石蓋土壙・火葬墓・土壙・集石遺構・2号・3号窯・溝状遺構である。西斜面では，1号墳横穴式石室・3号・4号・6号・11号シスト・1号・4号窯である。西谷区では，3号墳横穴式石室・2号ピット・住居址群・溝状遺構が検出できた。谷川西区では，2号墳横穴式石室と石列遺構・五輪塔遺構が検出できた。

遺物は，表面採集・各遺構及び東谷・西谷の包含層から整理箱（75×40×14cm）に20数箱分出土した。土器は，縄文式土器（後期）・弥生式土器（前期～後期）・土師器（前期・後期・平安）・須恵器（5世紀末～平安）・備前焼（近世）のように各時期のものが見える。石器は，石鏃・石庖丁・砥石・紡錘車がある。鉄器は，鉄鏃，刀子，鉇，棺釘がある。その他鉱滓・木炭片・人骨片が出土している。なお縄文式土器・前期弥生式土器は西谷だけで見る。土師器（古墳時代）は西谷は少なく，谷川西区も極く少量で，丘陵上には全くなく，東谷区が圧倒的に多い。また鉱滓は谷川西区に圧倒的に多く，谷川上流に行くほど多い。鉱滓散布地では土師器片を採集している。

時代別に遺構を分類すると，縄文時代はなく，弥生時代には竪穴住居址・溝状遺構があり，古墳時代には竪穴住居址・溝状遺構・横穴式石室墳・竪穴式石室墳・シスト群・土壙墓・土壙があり，奈良時代には火葬墓・窯状遺構，平安時代には石蓋土壙，中世には五輪塔がある。以上のように，岩倉遺跡の大半の遺構は古墳時代のものがもっとも遺存状態が良好である。なお第2図に示したように3号墳南西の民家庭先に1基，東谷下方に1基，計2基の横穴式石室が未掘のまま遺存している。前者はほぼ北西方に開口し，後者は南西方に開口するとみられるが，いずれもさほど極だった盛土を築成されたものとは思われない。いずれにせよ，岩倉古墳群を形成する骨格として5基の横穴式石室墳をあげることができる。

表1　岩倉遺跡遺構一覧表

遺構名	位置	遺物	時期
1号墳横穴	丘陵西	須恵器・鉄鏃	6C後半
2〃〃	谷川西	〃・棺釘・人骨	7C前半
3〃〃	西谷	〃・土師器・金環・玉	6C後半
4〃竪穴	丘頂	〃	6C中葉
1号シスト	〃	なし	不明
2〃	〃東	〃	〃
3〃	〃西	〃	〃
4〃	〃〃	須恵器	6C後半
5〃	〃南	なし	不明
6〃	〃西	須恵器	6C後半
7〃	東谷	なし	不明
8〃	丘陵東	〃	〃
9〃	〃	〃	〃
10〃	東谷	〃	〃
11〃	丘陵西	〃	〃
1号石蓋	〃頂	〃	〃
2〃	〃東	土師器・刀子	平安末期
土壙墓	〃南	須恵器	6C中葉
土壙	〃東	〃	6C後半
1号ピット	東谷	なし	不明
2〃	西谷	〃	〃
集石遺構	丘陵東	〃	〃
1号住居址	西谷	なし	弥生中期
2〃	〃	〃	古墳前期
3〃	〃	〃	弥生後期
4〃	〃	弥生式土器	弥生中期
5〃	〃	古式土師器	古墳前期
6〃	〃	須恵器	古墳時代
1号窯	丘陵西	なし	古墳時代？
2〃	〃東	〃	平安以前
3〃	〃東	木炭片	6C後半？
4〃	〃西	〃	古墳時代？
A溝	〃頂	土器細片	弥生～古墳？
B〃	〃東	なし	不明
C〃	〃西	土師器・砥石	古墳後期
D〃	〃西	弥生式土器	弥生中期
石列遺構	谷川西	土師器片・鉱滓	不明
五輪塔	〃	なし	中世
合計　39			

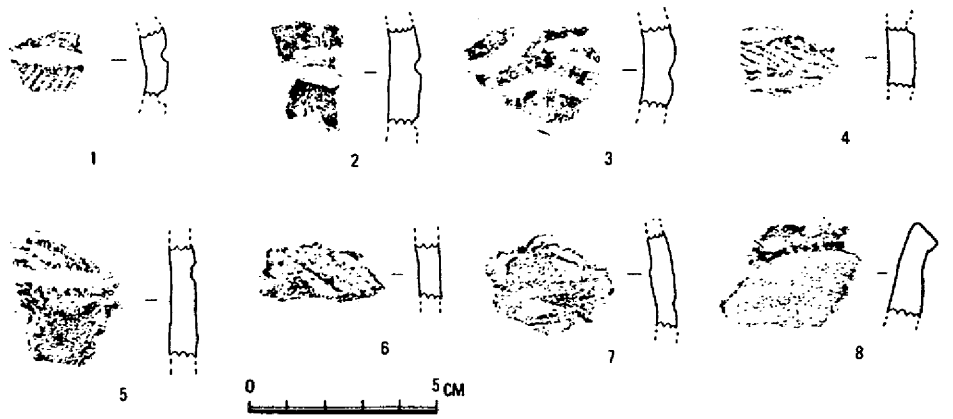
第４章　各時代の遺構と遺物

はじめに

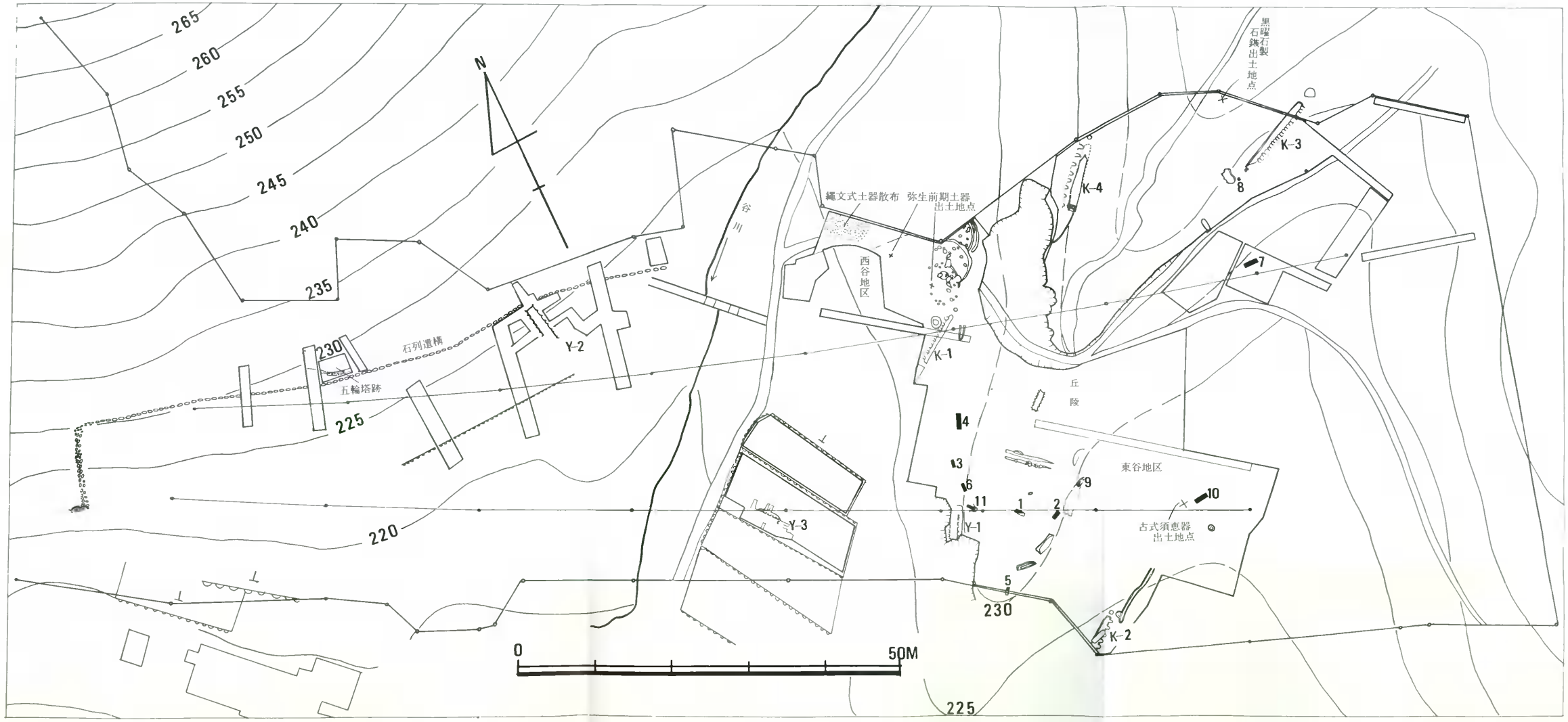
本遺跡発掘の主眼は当初古墳の調査であり，遺跡の名称も「岩倉上古墳」とされ，しかも１基を対象としたものであった。しかし，調査の進行と発掘区の拡大に伴い，後述のシスト群・２号墳・３号墳などの古墳のみならず，縄文～平安時代にかけての生活・生産・埋葬遺構の検出や遺物の出土をみた。この章では縄文・弥生時代の遺構・遺物を中心に，トレンチ調査による出土遺物を加えて概略を説明する。

第１節　縄文式土器（第４図・図版22）

縄文式土器片の出土総数は約60点にのぼるが，すべて西谷地区の谷川に近い緩斜面で出土したものである。遺構の検出は全くできず遺構伴出遺物は皆無である。出土した小片の中で，文様観察が可能なものは図に掲げた８点である。１・４・５は縄文に沈線を加えたいわゆる後期中津式に属するものである。２・３は沈線文のみ観察できるが，ほぼ同時期と考えてよいだろう。６・７は粗砂を含む条痕文土器でやはり後期に比定できよう。８は口縁部を折り返し貼付け縁帯を形づくっている。通例晩期の土器にみられる刻み目加飾をもたぬが，類似する中期のものとも異なり，やはり晩期に比定すべき土器であろう。



第４図　縄　文　式　土　器（½）



第 3 図　遺構配置図 ($\frac{1}{500}$)

第2節　竪穴住居址（第5図・図版4）

西谷区にあり，1号窯の北，4号窯の西の緩斜面に位置する。周溝が6本と多数の柱穴と焼土面が1ヵ所，ピットを3個検出した。6軒の住居址が重複していると考えられる。斜面の上方から1号住居址・2号・3号……と呼称し説明を加える。

1号住居址は，円形プランを示す。半径3mを測り，深さ7～8cm，幅20cmの断面U字の溝が約$\frac{1}{4}$残っている。柱穴は2本確認でき，円形で直径25cm深さ27cmと直径25cm深さ33cmを測る。焼土面・ピットは検出できなかった。ただし用地外に伸びるため検出できるかもしれない。時期は，土層観察から見て，この住居址が最古と考えられ，埋土中からの最古の遺物が，弥生中期終末の甕形土器片であることから弥生中期終末に比定したい。

2号住居址は，円形プランを呈す。半径3mを測り，深さ4～5cm幅10cmの溝が約$\frac{1}{4}$残っている。用地外に伸びる。柱穴は2本確認でき，直径25cm深さ35cmのものと直径30cm深さ32cmがあり，いずれも拳大の石をつめ込んでいる。焼土面は1ヵ所4号住居址の柱穴上部で確認している。ピットは検出できなかった。遺物は古式土師器が出土していることから古墳時代初頭に比定したい。

3号住居址は，円形であろう。深さ7～8cm幅10cmの溝が長さ1m残り，大半は用地外に伸びる。柱穴は2本確認でき，直径30cm深さ36cm，直径30cm深さ31cmを測り，いずれも円形に近い形を示す。焼土面・ピットは確認できなかった。遺物は見られないが，土層からみて弥生後期に比定したい。

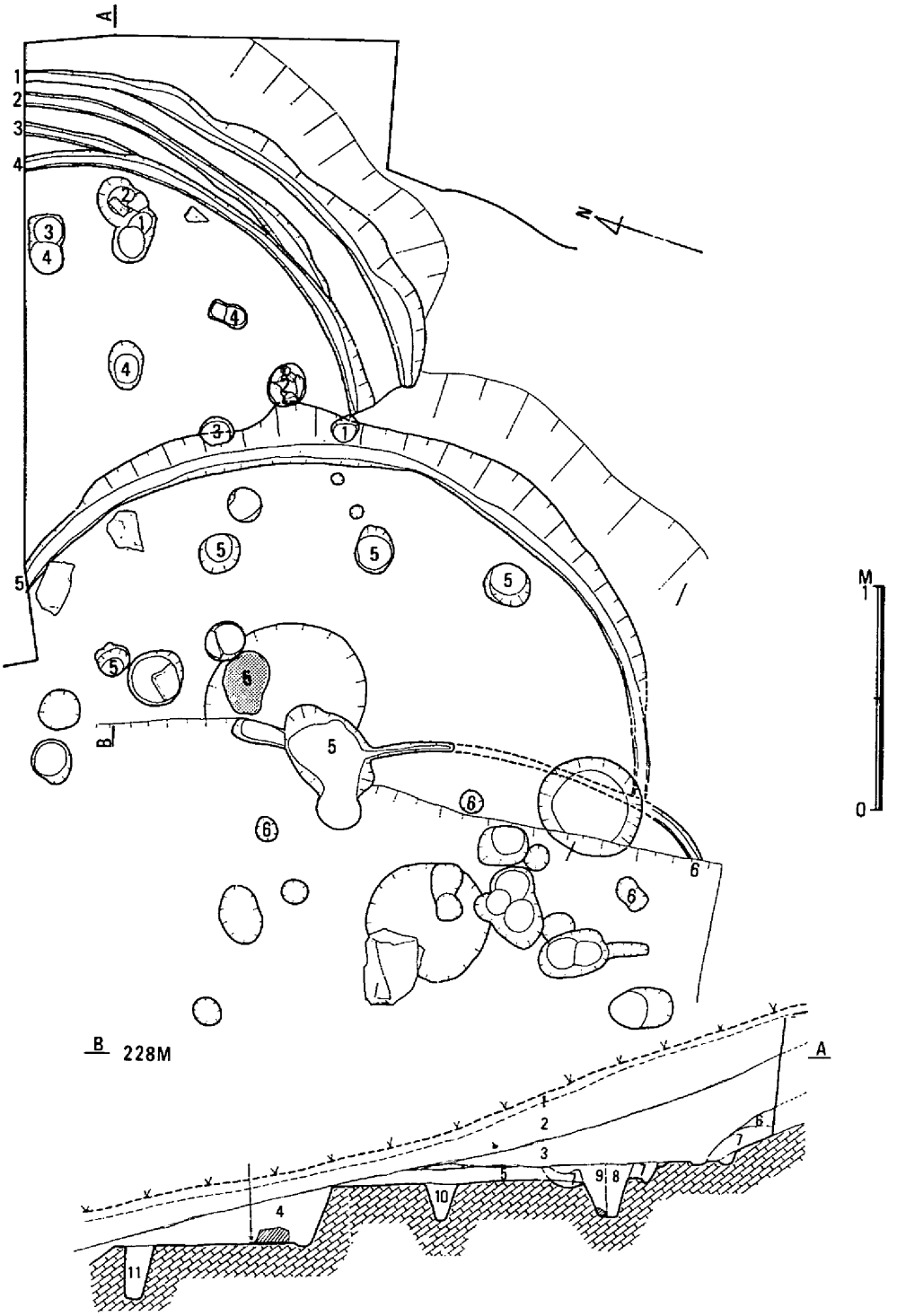
4号住居址は，円形プランを示し，深さ10cm幅15cmの溝が$\frac{1}{4}$円形に残る。半径は3mを測る。用地外に伸びる。柱穴は3本確認でき，直径20cm深さ17cm，直径30cm深さ37cm，長径40cm短径30cm深さ33cmをそれぞれ測る。焼土面・ピットは検出できなかった。時期は，弥生中期末の甕形土器の小破片が床面に付着していたことから同時期と考えたい。

5号住居址は，用地内にほとんどかかっている。半円形プランを示し，深さ5～10cm幅15cmの溝が残っている。柱穴は4本確認でき，いずれも円形で，南から直径40cm深さ62cm，直径35cm深さ53cm，直径35cm深さ48cm，直径30cm深さ54cmを測る。柱間は，1.4～1.5mである。焼土面は中央よりやや北に1ヵ所確認し，長径55cm短径40cmの不定形な楕円形を示し，やや盛り上がっており，赤褐色に焼きしまっている。ピットはほぼ中央にあり，長径90cm短径60cm深さ25cmの不定形楕円で断面椀形を呈する。遺物は，サヌカイト製の石鏃が1本床面より，その他の土器片は埋土中から若干出土している。それらからみて，時期は古墳時代初頭に比定したい。

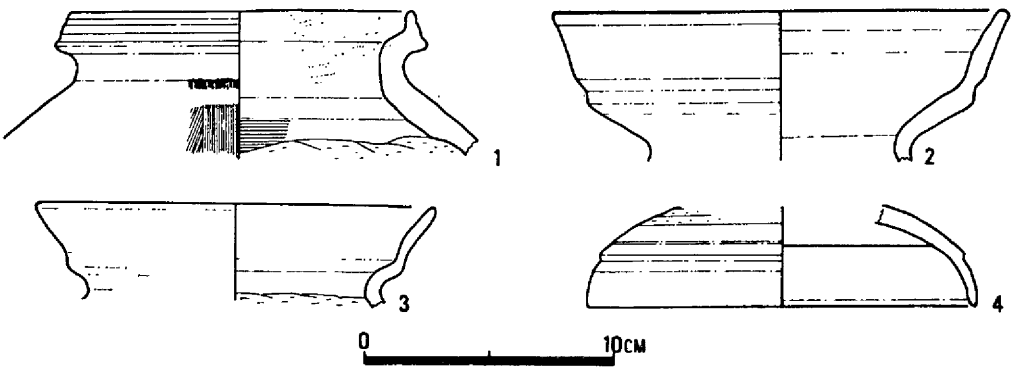
6号住居址は，不整な円形プランを示し，5号住居址を切っている。溝の残りは悪く，深さ5～10cm幅10cmで断続する。柱穴は3本確認でき，南から長径30cm短径20cm深さ5cmの不整楕円，直径20cm深さ14cmの円形，直径20cm深さ17cmの円形である。柱間は1.7～1.8mを測る。須恵器杯蓋が出土しているが混入と見られ，時期は古墳時代に比定したい。

住居址出土遺物（第6図）

1は，4号住居址床面より出土した壺形土器である。口径は13.5cmを測る。口縁端部は上方に肥厚



第5図　竪穴住居址平面図・断面図（1/30）



第6図　住居址出土遺物（$\frac{1}{3}$）1……4号　2・3……5号　4……6号

し二重口縁を呈する。口縁部外面には2条の凹線を施している。口頸部内外面はナデ仕上げされている。頸部外面は刷毛目をナデて消している。体部外面は縦方向の刷毛目，内面は横方向の刷毛目とヘラ削り調整される。砂粒を少量含む。焼成は良好で，黄褐色を呈す。弥生中期後半に比定できる。

2は，5号住居址床面から出土した甕形土器である。口径は18㎝を測る。口縁部は明瞭な二重口縁を呈し，たちあがりは長く外上方にのび中半部がやや肥厚し端部を丸くおさめる。口縁外部の屈曲部は凹線状になり稜をつくらない。口頸部内外面はナデ調整している。細砂粒を多く含み，焼成は良好で，内面黄褐色・外面赤黄褐色を呈し黒斑が見られる。古式土師器に比定できる。

3は，5号住居址から出土した甕形土器である。口径は16㎝を測る。口縁部は二重口縁を呈し，たちあがりは屈曲して外反し，端部を丸くおさめる。口縁外部の屈曲部は鈍い稜をもつ。口頸部内外面は横ナデ調整し，ヘラ削りは頸部まで行われている。胎土中に砂粒をほとんど含まず，焼成はやや良く，黄褐色を呈する。古式土師器に属する。

4は，6号住居址埋土から出土した須恵器杯蓋であり，口径15㎝を測る。天井部ヘラ削りは時計回りで，天井部と口縁部との境界は明瞭な凹線である。端部は内傾する面を有し，稜をつくる。砂粒を少量含み，焼成は良好で，淡灰色を呈する。1号墳横穴・4号シスト・6号シスト等の須恵器と同時期，すなわち6世紀後半に比定できる。

住居址土層

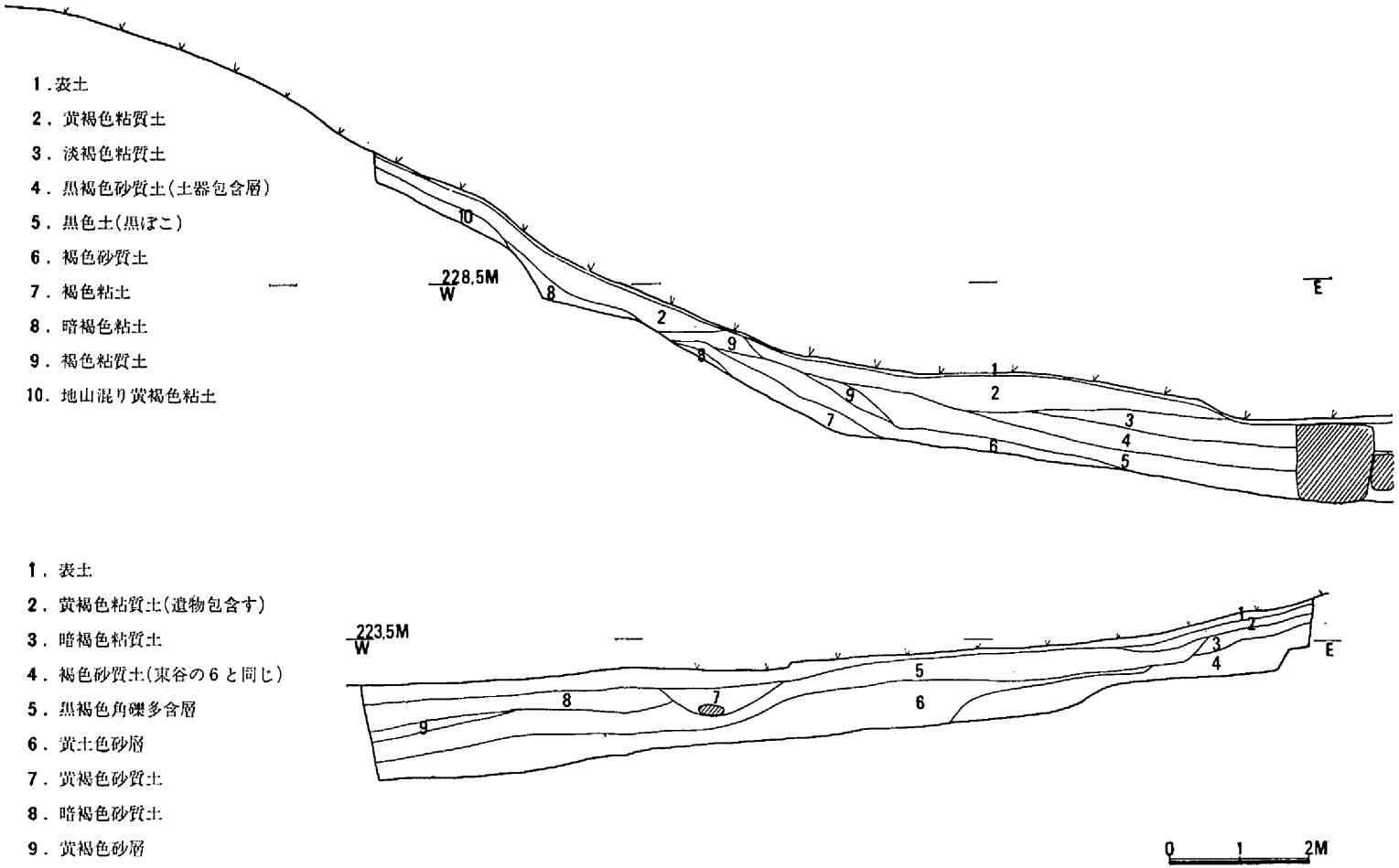
1. 表　土　　2. 黄褐色土　　3. 褐色土（黄色土混在）
4. 暗褐色土（5号住居址埋土）　　5. 暗褐色土（4号住居址埋土）
6. 褐色土　　7. 黒色土（火山灰土）
8. 暗褐色土（柱痕）　　9. 茶褐色土（2号住居址柱穴）
10. 暗褐色土（4号住居址柱穴）　　11. 暗褐色土（5号住居址柱穴）

第3節　遺構に伴わない遺物

西谷区出土土器（第7図～第10図）

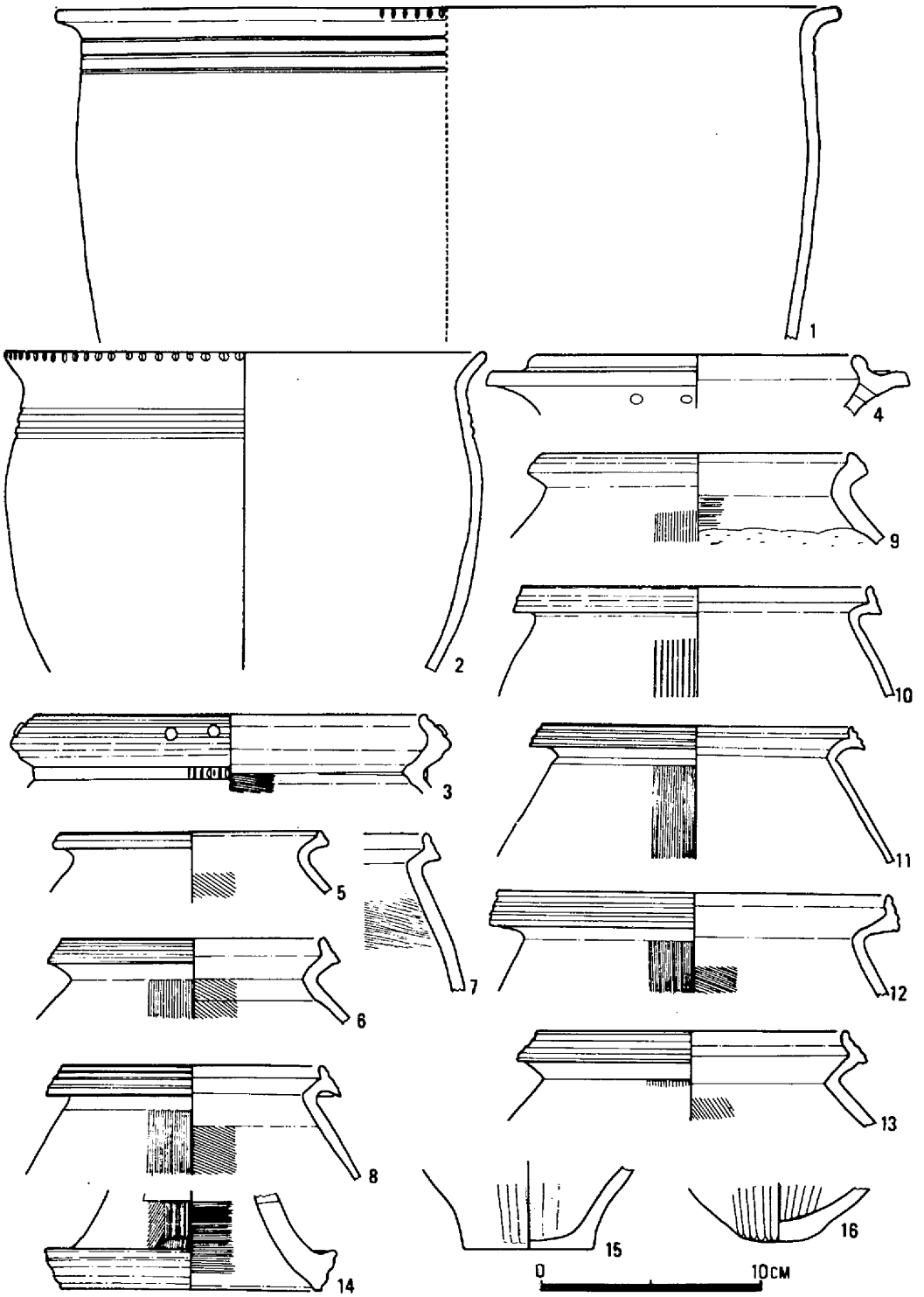
西谷区では土器包含層が認められ，第2層黄褐色粘質土からは弥生式土器（中期・後期）・古式土師器・須恵器・備前焼等が出土し，第3層暗褐色粘質土からは弥生式土器（中期）が出土し，第4層（部分的に残っている層）黒色土（火山灰土）からは弥生式土器（前期）が出土している。また縄文式土器の散布が見られた。

弥生式土器は，前期（第8図1・2），中期（第8図3～6・第9図1），後期（第9図2～14・第10図1・9）と各時期に亘って採集できた。前期の土器は，谷底に近い所で見つかり，縄文式土器と弥生式土器（中期・後期）の採集範囲の中間地点で2個体採取した甕形土器である。中期・後期の土器は，主として斜面で採集でき，特に1号窯周辺で多量に採集できた。溝状遺構（弥生中期）・住居址（弥生中期～古墳時代）の遺物も混入しているものと思われる。壺・甕・高杯等が見える。1（以下第8図参照）は，甕形土器で，逆L字状に外反する口縁部をもち，内側に稜線を認めず，端部に刻み目を施している。やや外湾する体部の上端に3条の沈線が施されている。器表はていねいな仕上げがなされ，体部外面下半にススの付着が見える。胎土中には2～3㎜大の一定の大きさの砂粒を多く含み，焼成は良好で，茶褐色を呈する。弥生時代前期後半に比定したい。2は，甕形土器で口径22㎝を測り，「く」の字状に外反する口縁部をもち，内側には稜線を認めず，丸くおさめた端部には刻み目を施している。体部の最大径は21.9㎝を測り，1より胴が張る。体部上端に3条の沈線が施され，1よりも太く深い。外面にはススの付着が見える。内面には斜めの刷毛ナデ仕上げがなされている。胎土中に細砂・微砂粒を若干含んでいる。焼成は良好で，褐色～茶褐色を呈する。弥生時代前期前半に比定したい。3は，甕形土器で口径18㎝を測る。「く」の字形に外反する頸部をもち，口縁端部は内傾して上方にのびる。口縁端外面には3条の凹線文が施され，円形浮文が付く。頸部には圧痕文凸帯が巡る。体部外面は不明だが内面には斜方向の刷毛目調整が施されている。胎土中には細砂粒を少し含み，焼成は良好で，口縁部黒褐色・頸部黄褐色を呈する。雄町5類に平行する。すなわち弥生中期後半に比定したい。4は，高杯形土器で口径14.5㎝を測る。口縁部は，端部が水平方向と上方にのびV字形を呈している。2孔一対の円孔を有す。杯部は欠損しているが内湾する椀形になると思われる。胎土中に砂粒を多く含み，焼成は良好で，黄褐色を呈する。押入西遺跡・高本遺跡等に類例が見える。弥生中期後半に比定したい。5～13は，甕形土器で，「く」の字形に外反する頸部をもち，口縁端部が上方にのびるもの（6・7・10・12）と，上下にやや肥厚するもの（5・9）と，上下にのびるもの（8・11・13）とがある。端面には凹線文が施されている。体部外面は縦方向の刷毛目手法，内面は斜めの刷毛目手法を用いている。内面に刷毛目のないもの（10・11）もある。9は内面にヘラ削りが頸部近くまで行われている。胎土中には砂粒が含まれるが，微砂粒である。9は粗砂粒も含む。焼成は良好である。色調は，黄褐色～茶褐色を呈する。器壁は9を除いて極めて薄い。時期は，9が雄町6類，その他が雄町5類に平行すると思われる。すなわち弥生中

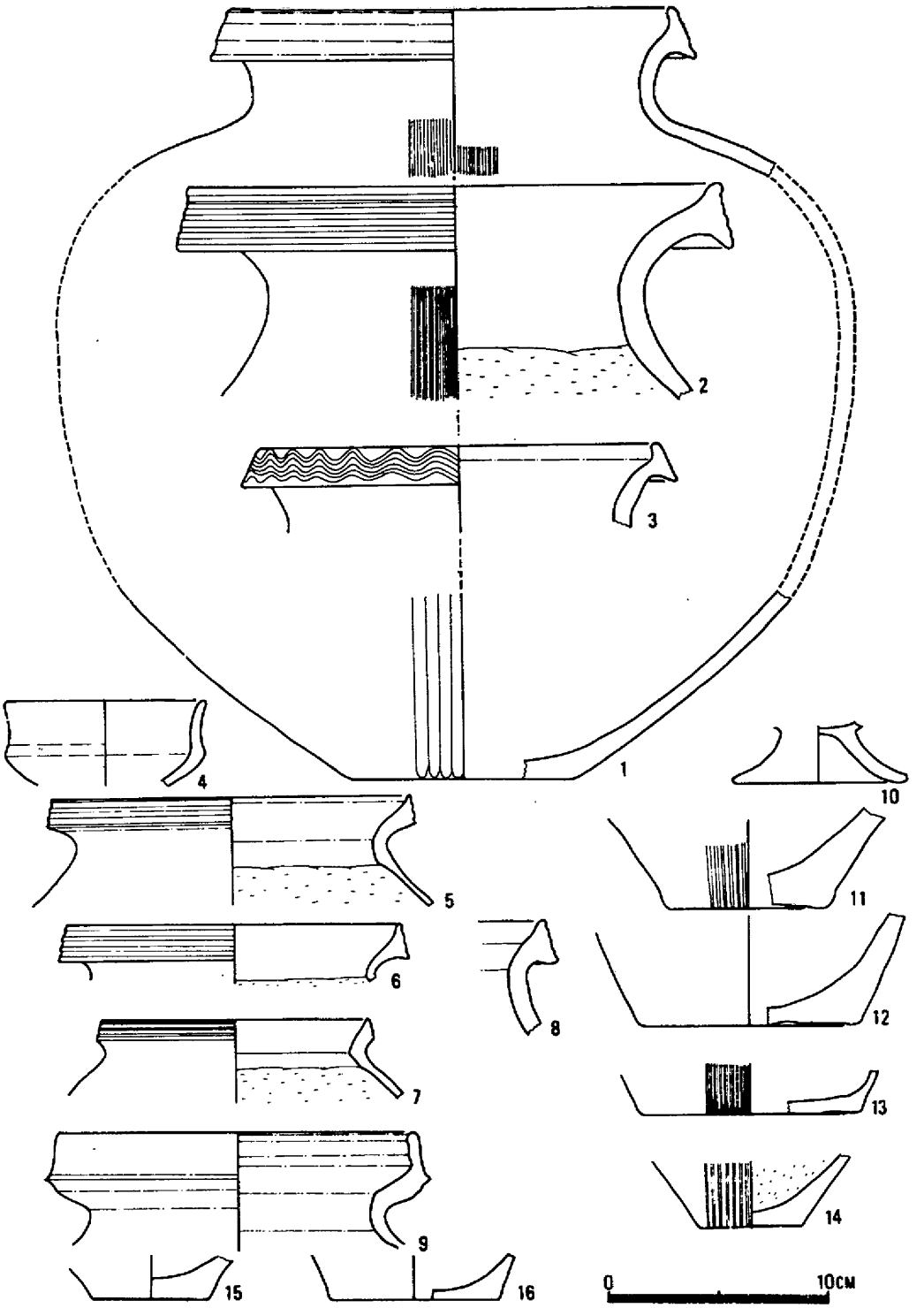


第7図　トレンチ土層断面図（1/100）上……東谷　下……西谷

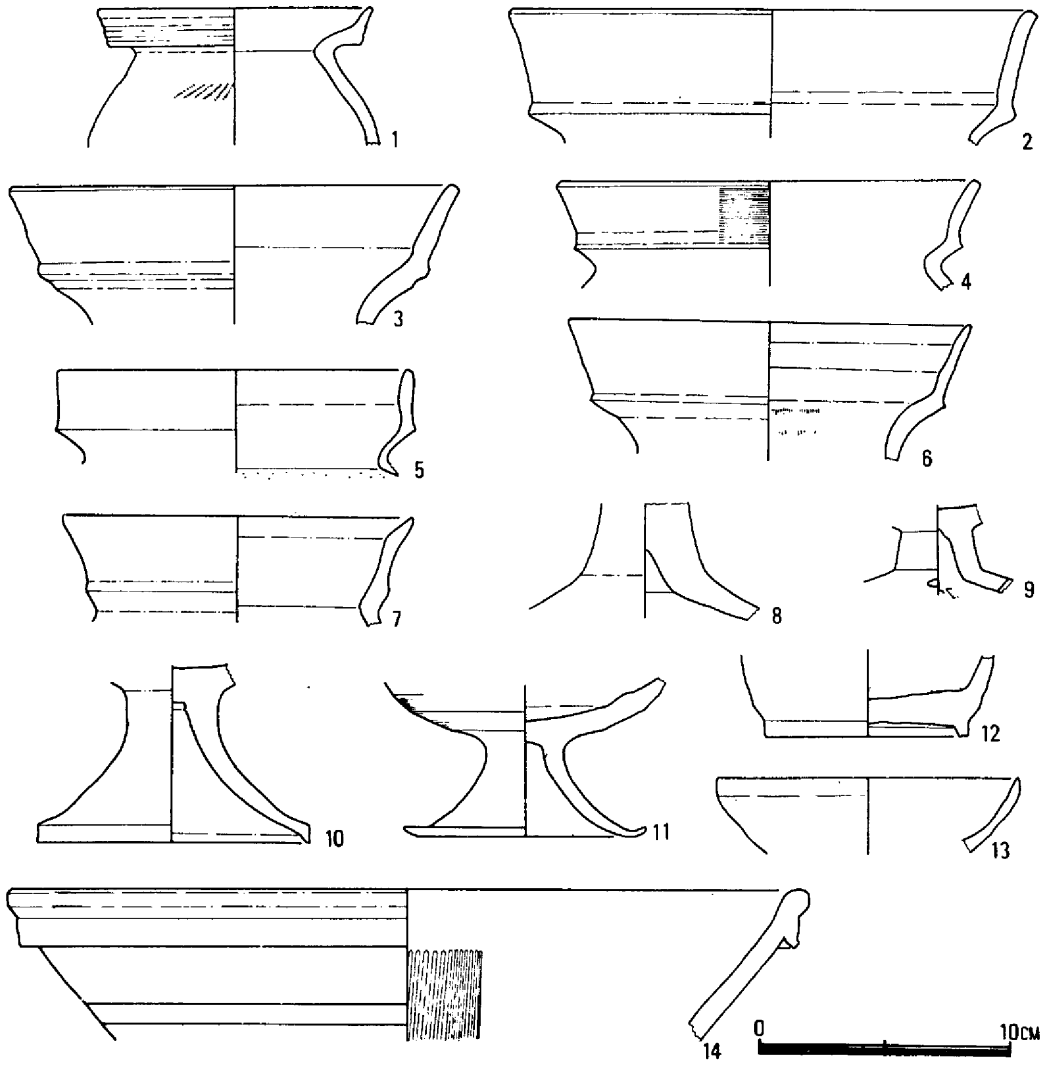
期後半に比定したい。14は，高杯形土器の脚部である。ラッパ状に開く脚の端部は上下に肥厚し，端外面には3条の凹線文を施している。脚外面には斜方向・縦方向の刷毛目手法，内面には横方向の刷毛目手法が用いられ，三角形の透かしがみられる。胎土中に砂粒を少し含み，焼成は良好で，淡茶褐色を呈す。雄町5類に平行し，弥生中期後半に比定したい。15は，甕形土器の底部で，外面は縦のヘラ磨き，内面は縦のヘラ削りをほどこしている。胎土中に微砂粒も多く含み，焼成は良好で褐色を呈する。雄町5類に平行し，弥生中期後半に比定したい。16は，底部片で器形は不明である。内外面とも縦方向のヘラ磨き調整している。胎土は精製粘土を使用し，焼成は良好で，茶褐色を呈する。時期は中期後半に比定したい。1（以下第9図参照）は，壺形土器で口径20cmを測り，胴部中央部を欠損しているため器高は不明である。1号窯の煙突部付近でつぶれた状態で出土している。口縁端部が上下にのびて端面に退化した凹線が2～3条認められる。頸部は短くやや外反している。胴部上半部は内外面とも縦の刷毛手法が用いられ，下半部は外面が縦のヘラ磨き，内面は磨滅が著しく調整不明である。底部は平底で胴部への開きは大きい。胎土中に微砂粒を多く含み，二次的焼成を受けているため焼成は良くない。灰白色を呈す。時期は弥生中期終末に比定したい。2は，壺形土器で口径24cmを測る。口縁端部は上下に肥厚し端面に5条の凹線文を施す。頸部はやや外反している。体部外面は縦方向の刷毛目調整され，内面は頸部近くまで横方向のヘラ削りされている。胎土中に砂粒を多く含み焼成は良好で淡茶褐色を呈する。時期は弥生後期前半に比定したい。3は，甕形土器で口径18cmを測る。口縁端部は上下に肥厚し端面に櫛描き波状文を施す。胎土中に細砂粒を多く含み，焼成は良好で，黄褐色を呈す。時期は弥生後期前半に比定したい。4は高杯形土器で口径9cmと小型である。口縁部はやや外湾し端部を丸くおさめる。杯部はやや内湾する。内外ともていねいな仕上げで丹塗りが認められる。細砂粒を多く含み，焼成は良くない。黄褐色を呈す。弥生後期後半であろう。5～7は，甕形土器で，口縁端部をやや肥厚させ端面に3条の凹線文を施す。内面は頸部近くまでヘラ削り調整が見える。器壁は極く薄い。砂粒を多く含み，焼成は良好で，茶褐色を呈す。弥生後期前半に比定したい。8は，壺形土器口縁部片で端部は上下にやや肥厚し端面に4条の凹線文を施している。頸部のカーブはゆるい。胎土中に微砂粒を少し含み，焼成は良好で，茶褐色を呈する。弥生後期前半に比定したい。9は，口径16cmを測る壺形土器である。口縁部は二重口縁を呈し，たちあがりはやや内傾し端部を丸くおさめる。口縁下半部はやや肥厚し鋭い稜線を有す。内外面ともていねいなナデ仕上げで丹塗りされている。砂粒は少し含み，焼成は良好で，茶褐色を呈す。弥生後期後半に比定したい。10は，台付鉢形土器の台部と思われ，内外ともていねいなナデ仕上げである。砂粒を多く含み，焼成はやや良好で，黄褐色～暗褐色を呈し，弥生後期後半に比定したい。11～16は，壺あるいは甕形土器の底部で，外面縦方向のハケ目調整のあるものとないものがある。顕著な平底を呈している。弥生後期に比定したい。1（第10図）は，口径11cmを測る小型壺形土器である。口縁は二重口縁を呈し，たちあがりは短く外上方にのび，端部を丸くおさめ，端面に3条の凹線を施す。頸部は「く」の字状に外反し，体部上方には櫛状工具による連続刺突文を施す。体部内外面はていねいなナデ仕上げである。胎土中に細かい砂粒を少し含み，焼成は良い方で，茶褐色を呈する。弥生後期後半に比定したい。9（第10図）は，短脚の高杯形土器で，「く」の字形に屈曲し，外面は横方向のヘラ磨き調整を施こし裾上部に円孔を有す。丹塗りが認められる。胎土は精選された粘土を用い，焼成は良好



第８図　西谷出土弥生式土器（前・中期）（$\frac{1}{3}$）



第9図　西谷出土弥生式土器（中・後期）（$\frac{1}{3}$）



第10図　西谷出土土器（古式土師器・須恵器・備前焼）（$\frac{1}{3}$）

で，赤褐色を呈する。弥生後期後半に比定したい。

土師器（第10図２～８）は，１号窯及び住居址周辺で多数出土したが実測可能な土器は８点である。甕・高杯が見える。２～４は，二重口縁をもち外反するたちあがりの端部に面をもつ甕形土器である。屈曲部外側に鋭い稜をもつものと鈍い稜をもつものとがある。４の口縁たちあがり外面に刷毛ナデがみられる他はていねいなナデ仕上げである。胎土中に砂粒も少々含み，焼成はやや良好で，黄褐色を呈す。古式土師器に比定したい。５は，二重口縁を呈する甕形土器で，口縁外側に鋭い稜線をつくり，たちあがりは垂直で，上半部はやや肥厚し，端部を丸くおさめている。ていねいなナデ仕上げである。胎土中に細砂粒を多く含み，焼成は良好で，茶褐色を呈する。古式土師器に比定したい。６は，二重口縁を呈する甕形土器で，口縁外側に鋭い稜線をつくり，たちあがりは下半部が厚くしだ

いに薄くなって外反し、端部を丸くおさめる。胎土中に細砂粒を少し含み，焼成は良好で，黄白色を呈する。古式土師器に比定したい。7は，二重口縁が退化した甕形土器で，外反するたちあがり上半がやや内側に肥厚し稜線をつくる。砂粒を多く含み，焼成はやや良好で，茶褐色を呈する。古式土師器に比定できる。8は，高杯形土器の脚部で，円筒状の脚は「く」の字形に屈曲して椀につながる。胎土は精選された粘土を使用し，焼成は良好で，赤褐色を呈する。古式土師器に比定したい。

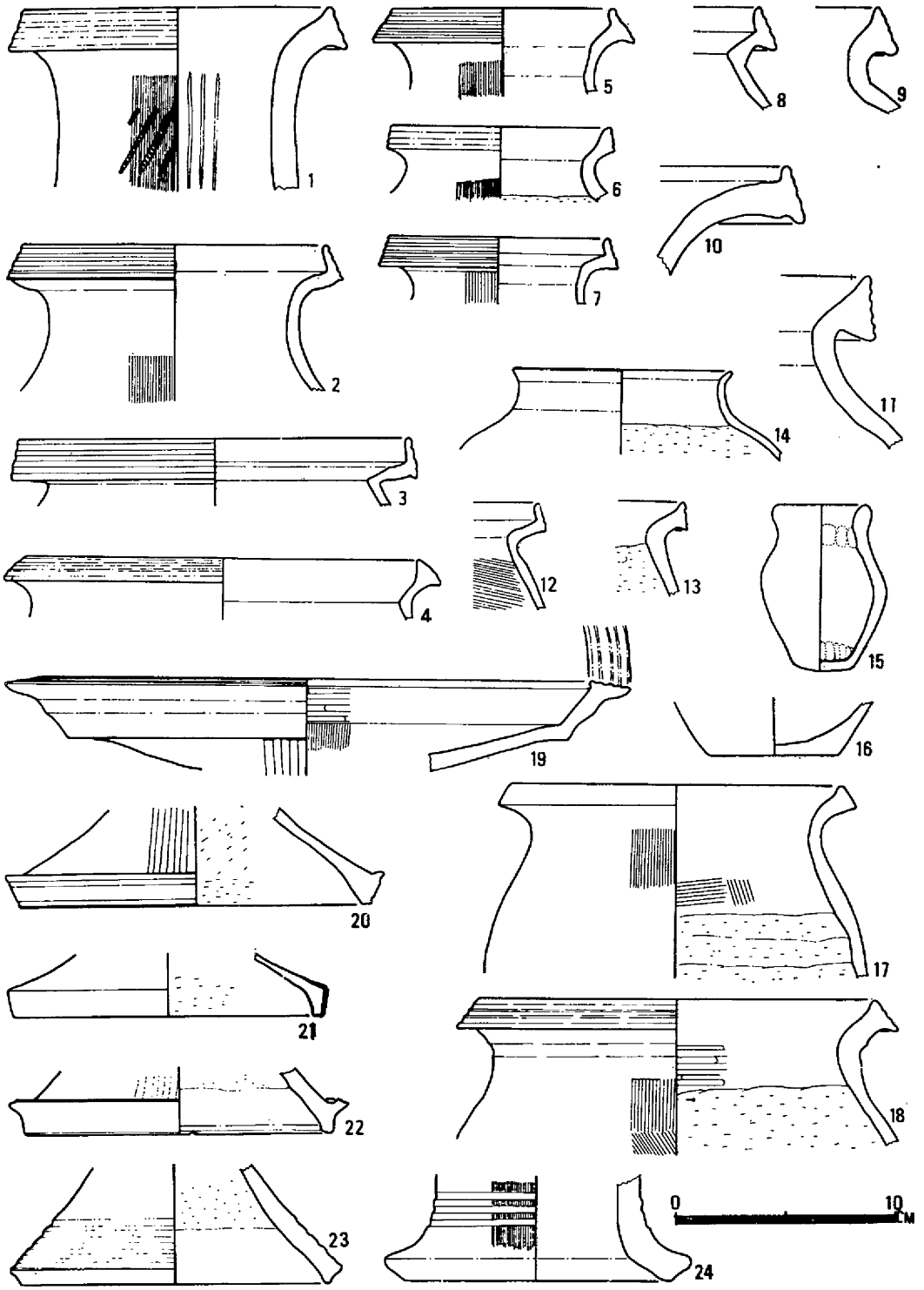
須恵器（第10図10～13）は，西谷区では一括資料を除いて少量しか出土しなかった。そのうち図化できたのは4点だけである。杯・高杯・椀が見える。10は，高杯形土器脚部で，外湾して拡がる脚をもち，端部はわずかに下方に屈曲し，先端は鈍い稜をなす。内外面とも横ナデ調整をおこなっている。透しは無い。胎土中に砂粒を少し含む。焼成は良好で堅固。灰褐色を呈する。7世紀後半に比定したい。11は，高杯形土器で杯部上半を欠いている。杯部は内湾する。脚部は外湾して大きく拡がる。端部は外上方にのびて丸くおさめている。細砂粒を少し含み，焼成は良くなく，灰白色～黄灰色を呈する。8世紀代に比定したい。12は，壺形土器の底部と考えられる。外にややふんばった高台がつく。内外面とも横ナデ調整している。粗い砂粒を含み，焼成は良好で，灰色を呈する。7世紀後半に比定したい。13は，椀形土器と思われ底部を欠いている。内湾して端部を上方にのばし，先端に鈍い稜をつくる。砂粒を多く含み，焼成は甘く，灰白色を呈す。7世紀後半に比定したい。

備前焼は，谷尻部の畑地より出土した1点のみである。14は，擂鉢で底部を欠いている。口縁は折り曲げて下方に垂れる。上端は角を削っている。体部外面に2本の細線が平行に引かれ，内面は全面に縦方向の櫛状工具によるカキ目が施されている。砂粒をごく少量含み，焼成は良好で，暗茶褐色を呈する。近世以後に比定したい。

東谷区出土土器（第11図～第13図）

東谷区では土器包含層が認められた。第4層黒褐色砂質土であり，弥生式土器（中期・後期），土師器（古墳時代），須恵器（5世紀末～平安）が出土した。

弥生式土器（第11図）は，一部中期後半の土器を含んでいるが，大半は後期初頭の土器である。実測可能な土器は24点である。1は，長頸壺形土器の口頸部である。口縁はやや外反し，端部を上下に肥厚して端面に3条の浅い凹線文を施している。頸部はやや外反するが，ほとんど垂直に長く伸びている。頸部外面は粗い縦方向の刷毛目調整のあと櫛状工具による連続刺突文を巡らし，内面には縦方向にしぼり痕が明瞭に認められる。粗い砂粒を含み，焼成は良好で，淡褐色～褐色を呈する。弥生後期前半に比定したい。2は，甕形土器で，口縁部は二重口縁を呈する。口縁下半はやや肥厚し鈍い稜をつくり，上半は屈曲してやや内傾してたちあがる。端部を丸くおさめ，端面に条線を施す。頸部は長く外湾している。頸部下半から下は縦の刷毛目調整され，口頸部内面は横ナデ仕上げしている。砂粒を少量含む。焼成は良好で，茶褐色を呈する。弥生後期後半に比定したい。3は，甕形土器で「く」の字に外反する頸部をもち，口縁端部を上方に長くのばす。端面に凹線を施しいる。体部内面はナデ仕上げである。胎土中に微砂粒しか含まない。焼成は良好で，黄褐色を呈する。弥生中期後半に比定したい。4は，「く」の字形の頸部をもち，口縁端部を上下に肥厚し，端面に浅い凹線を施している。粗砂粒を多く含み，焼成は良好で，赤茶褐色を呈する。弥生後期前半に比定したい。5は，甕形土器

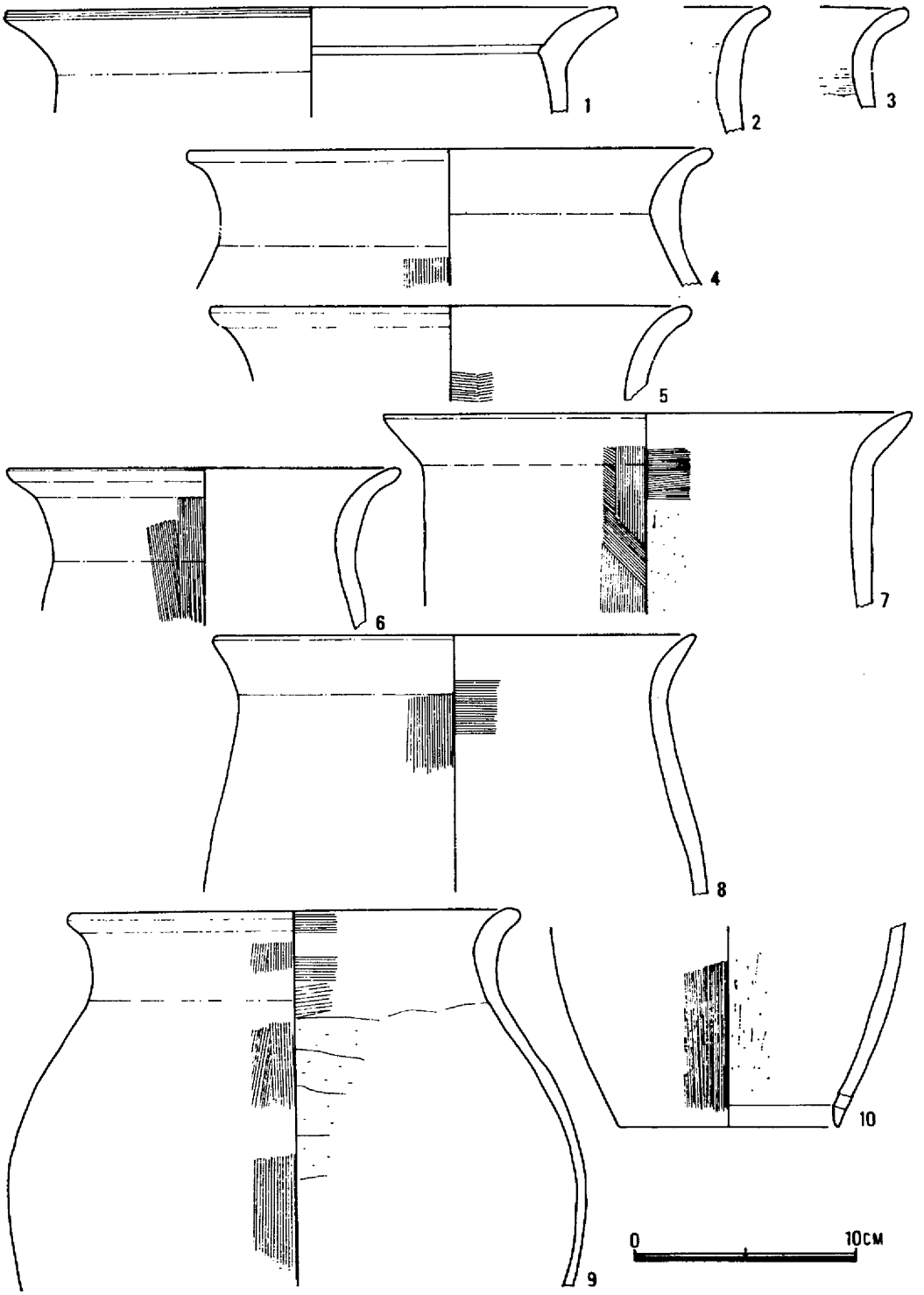


第11図　東谷出土弥生式土器（中・後期）（$\frac{1}{3}$）

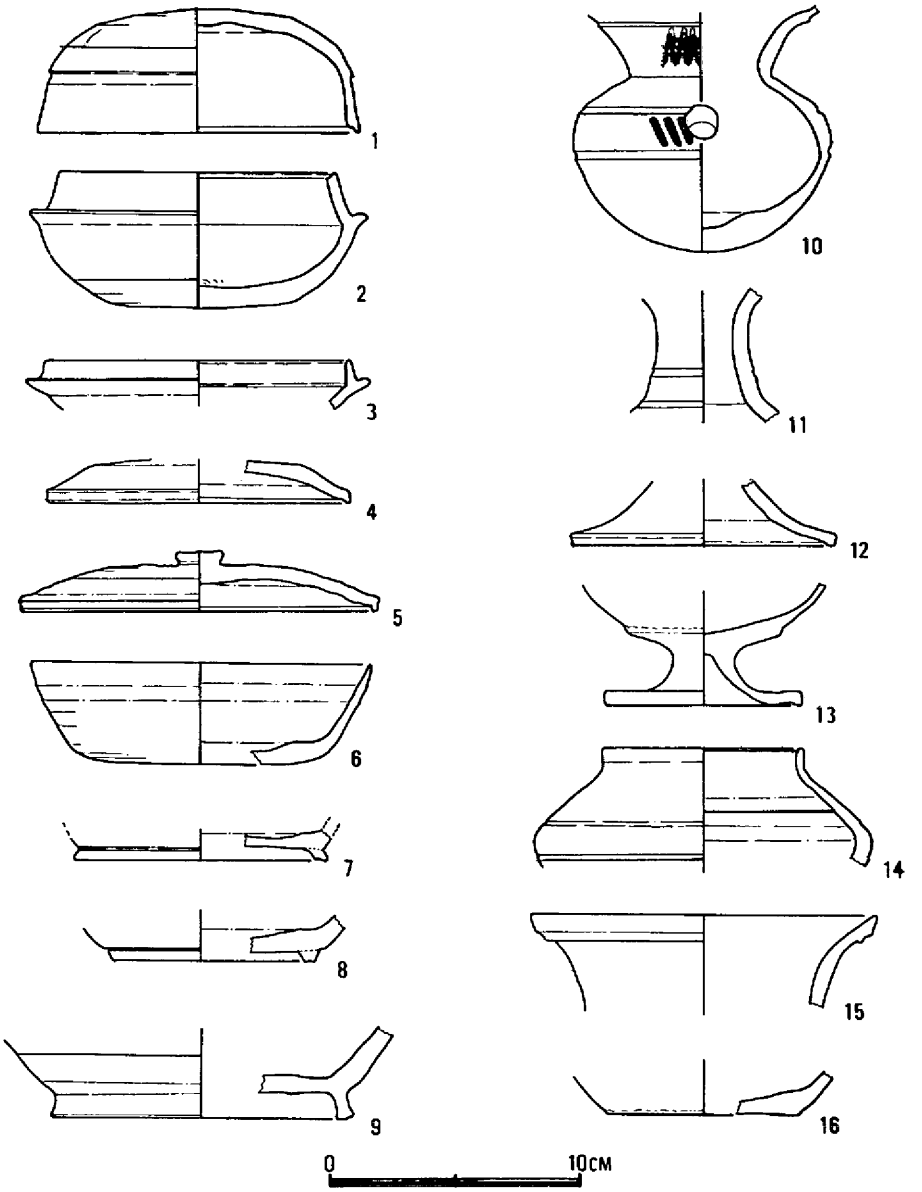
で，外反する口縁部を有し，端部は上下にのばし，端面は内傾して凹線を施している。頸部は外面は刷毛目，内面はナデ仕上げである。胎土中に微砂粒を少し含み，焼成は良好で茶褐色を呈する。弥生後期前半に比定したい。6は口縁端部を上方に少し肥厚された甕形土器で，頸部近くまでヘラ削りされている。弥生後期前半に比定したい。7は，口縁端部を上方にのばし，二重口縁を呈する甕形土器で，弥生後期後半に比定したい。8は，「く」の字状の頸部をもつ甕形土器で，口縁端部を上下にのばし，端面に凹線を施す。弥生中期後半に比定したい。9は，口縁端部をやや上下に肥厚した甕形土器で，弥生後期前半に比定したい。10は，大きく外反する口端をもち端部を上下に肥厚され端面に凹線を施している壺形土器で，弥生後期前半に比定したい。11は，口縁端部を断面三角形に肥厚され，端面に凹線を施した壺形土器で，頸部までヘラ削りが認められる。弥生後期前半に比定したい。12は，「く」の字形に外反する頸部をもち，口縁端部を上方にのばし二重口縁を呈するが，体部内外面に刷毛目調整を施している甕形土器で，胎土も細かい。弥生中期後半に比定したい。13は，「く」の字形頸部をもち，口縁端部をわずかに上下に肥厚する甕形土器で，頸部までヘラ削りされていることから弥生後期前半に比定したい。14は，器壁のきわめて薄い壺形土器で，口縁端部をわずかに外上方に屈曲させている。体部内面はヘラ削りしている。弥生後期前半に比定したい。15は，手捏ねの小形壺形土器である。底部内面と頸部内面に指頭圧痕が認められる。弥生後期前半に比定したい。16は，ススの付着した甕形土器の底部で，胎土は粗く，焼成は良好で，茶褐色を呈する。弥生後期に比定したい。17は，甕形土器で，口縁端部をやや肥厚し，体部外面は縦の刷毛目，体部内面は任意の刷毛目調整とヘラ削りが見られる。弥生中期末～後期初頭に比定したい。18は，鈍い「く」の字形の頸部をもつ甕形土器で，口縁端部をやや肥厚させ，端面に凹線を施す。頸部外側に凹線が認められる。体部外面は任意の刷毛目，内面は頸部が横方向のヘラ磨き，体部はヘラ削りされている。弥生後期前半に比定したい。19は，高杯形土器で，口縁端部は水平に拡張し，上面に凹線文手法を用いる。口縁部内面は横のヘラ磨き，杯部内面は刷毛目，杯部外面は縦のヘラ磨き調整が施される。丹塗りが内外面に認められる。弥生後期前半に比定したい。20は，高杯脚部で，端部は肥厚し，外面縦位のヘラ磨き内面ヘラ削り手法を用いている。弥生後期前半に比定したい。21は，高杯脚部で，端部は曲折して下方にのびる。内面横方向のヘラ削り手法を用いている。弥生後期後半か。22は，高杯脚部で，脚端は上下に肥厚し，外面縦のヘラ磨き，内面の横のヘラ削りは途中でとまって下方は横ナデされている。弥生中期末か。23は，器台脚部と考えられ，外面下方に凹線文を施し，内面は上半横のヘラ削り，下半横ナデ仕上げしている。弥生中期末に比定したい。24は，器台か。外面は縦の刷毛目のあと凹線文を施す。弥生後期前半に比定したい。

土師器（第12図）は，古式土師器を1片も含まない。甕形土器，こしきがみられる。口縁部は単純に外反し，端部を丸くおさめるものとやや尖らせるものとがある。頸部内側を肥厚させるものも見られる。体部外面は粗い縦方向の刷毛目調整，内面は口縁部が横方向の粗い刷毛目調整で体部は横方向の粗いヘラ削り調整を施している。胎土は粗く，焼成は良好で，茶褐色～黄褐色を呈す。

須恵器（第13図）は，杯・蓋・甕・高杯・壺がある。杯1と蓋2と甕10は一括して出土した。遺構の存在は確認できなかった。4号墳の主体である竪穴式石室に伴う可能性を否定できない。その他は包含層より出土した。5世紀末～8世紀末の幅をもっている。杯は，たちあがりをもつもの，高台付



第12図　東谷出土土師器（$\frac{1}{3}$）



第13図　東谷出土須恵器（$\frac{1}{3}$）

のもの，高台のないものなどが見られる。蓋は，口縁部が高いものと宝珠つまみのつくものが見られる。以下表にして説明する。

表2　東谷出土須恵器一覧表　　(単位：cm)

器形	図	番号	手法・形態の特徴	口径	器高	備考
蓋	13	1	・天井部ヘラ削りは$\frac{3}{4}$を占め，逆時計回り ・天井部と口縁部の境は鋭い稜を作る ・口縁端内側に段がつき鋭い稜を作る ・口縁外面に自然釉がかかる ・粗い砂粒を多く含み，焼成良好，灰色を呈す	12.8	5.0	完形 トレンチ
杯	13	2	・たちあがりは内傾し，端面に凹線がある ・受部は外上方にのび，先端に稜を作る ・底部ヘラ削りは$\frac{1}{2}$を占め，逆時計回り ・内面に青海波が残る ・粗い砂粒を多く含み，焼成良好，淡灰色を呈す	11.0	5.0	トレンチ 完形
杯	13	3	・たちあがりは短くやや内傾する ・受部は外上方にのび，端部は丸い ・少量の砂粒を含み，焼成良好，灰色を呈す	12.0	—	—
蓋	13	4	・口縁端部は下方に屈曲する ・端面に凹線を施す ・4㎜大の砂粒含み，焼成良好，灰色呈す	12.0	—	—
蓋	13	5	・偏平なつまみをもつ ・天井部に逆時計回りのヘラ削り ・口縁部は屈曲し，端部を丸くおさめる ・端面に凹線を施す ・微砂粒を少し含む，焼成良好，灰色	14.0	2.4	トレンチ
杯	13	6	・口縁部はまっすぐ外上方に開く ・端部に稜を作る ・精製粘土を用いる ・焼成は良好だがやわらかい感じ，灰白色	13.4	4.0	—
杯	13	7	・底部ヘラ削り後高台を貼り付ける ・高台はやや外にふんばる ・微砂粒を多く含み，焼成良好，灰色			
杯	13	8	・底部ヘラ削り後高台を付ける ・高台はふんばっていない ・細砂粒を多く含み，焼成良好，灰白色			
壺	13	9	・底部と体部の境に鈍い稜を作る ・高台は長くやや開く ・細砂粒を多く含む，焼成良好，灰色～暗灰色			

器形	図	番号	手法・形態の特徴	口径	器高	備考
甕	13	10	◦頸部と口縁部の境は鋭い稜をつくる ◦頸部はラッパ状に開き，波状文を施す ◦体部はやや上下にすぼむ球形を呈す ◦最大径はやや上方にある ◦櫛状工具による連続刺突文を施す ◦その上下に凹線が見られる ◦5㎜大の小石も含む ◦焼成は良好で内外面とも暗緑色の自然釉かかる ◦内面灰白色，外面暗灰色			トレンチほぼ完成
壺	13	11	◦頸部は外反し，凹線を施す ◦砂粒を多く含む，焼成良好，灰色			
高杯	13	12	◦脚は大きく開く ◦端部は屈曲し，端面に凹線を施す ◦微砂粒を多く含む ◦焼成は良好で，灰褐色を呈す			
高杯	13	13	◦杯部は内反する ◦脚部は大きく開き，端部は屈曲し，稜を作る ◦5㎜大の粗い砂粒を含む ◦焼成は良好で，灰色を呈す			
壺	13	14	◦口縁部は垂直にたちあがり，端部は丸い ◦体部は算盤形を呈すと思われる ◦体部最大径の上下には浅い凹線を施す ◦粘土を使用し，焼成良好，淡灰色	8.0		
壺	13	15	◦大きく外反する口縁部を有し，端部は丸い ◦凸帯をもつ ◦良質の粘土を使い，焼成良好，灰褐色 ◦内外面に黒色か緑色の自然釉かかる	14.0		
壺	13	16	◦砂粒を含み，焼成は不良で，淡灰色を呈す			

第4節　石　　器（第14・15図，図版23）

出土総数は極めて少なく，第14図に掲げた小形石器に加えて第15図の大形砥石がある。以下，個々の形態に分類し説明を加えたい。

石　　鏃

3点出土しているがすべて無茎凹基式である。第14図-1は西谷地区，縄文式土器片が散布する地点の黒褐色土中より出土したサヌカイト製打製石鏃である。比較的薄手に打調整され復元形はほぼ縄文時代後期～晩期に属するものであろう。

第14図-2は丘陵北端部の頂部よりやや下った地点の斜面から出土している。先端，下端の一部を欠く黒曜石製打製石鏃である。復元全長約2.5㎝を測り，やや大形品である。

第14図-3は5号住居址床面から出土したサヌカイト製打製石鏃である。全長1.7㎝を測る小形品であるが調整は荒く，石材ももろい片岩系のものを用いている。

剝　　片

サヌカイトの剝片が西谷地区で2点出土している。第14図-1と同様の石質で縄文時代後期～晩期に属するものであろう。

石 庖 丁（第14図6・7）

6は住居址群の南東方表土より出土した緑色片岩系の石材を用いたものである。刃部の研磨は表裏共に均一でていねいである。復元長約11㎝，最大幅3.6㎝を測る。7は遺跡西方の墓地より表面採集したもので，約$\frac{2}{3}$を欠失する。石材は6とほぼ同様であるが黒っぽい濃緑色を呈する。復元長約12㎝，復元最大幅約3.5㎝を推定することができる。出土位置から弥生時代生活址の範囲は西谷部の谷川をはさんで扇形に拡がることが推定できる。

砥　　石

第14図-8は，西谷地区で出土した硬質砂岩製の小形砥石である。全体の形態と12は撥形を呈するものとみられる。復元長は10㎝に満たないものであろう。最大幅は2.3㎝を測る。

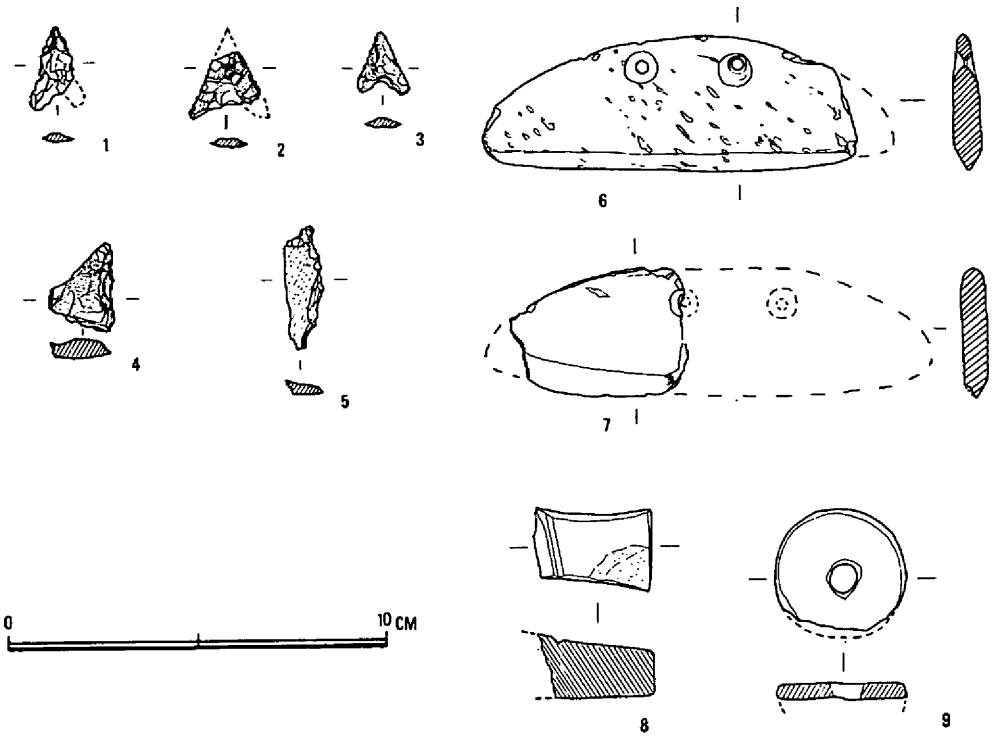
第15図-1は，赤味がかった灰白色の砥石で，4面使用し，1号墳埋土上層から出土した。

第15図-2は，東斜面から出土した砥石で，白色を呈し，2面使用されている。

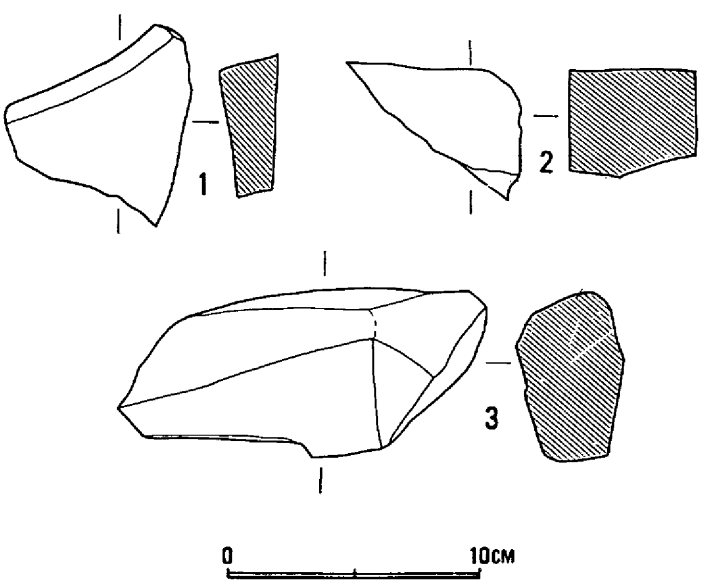
第15図-3は，1号窯煙突付近の土器溜りより出土した黄味がかった白色を呈する砥石で，ほとんど全面を使用している。

紡 錘 車（第14図-9）

西谷地区表土中より出土した紡錘車で片面を欠失する。径3.5㎝，孔径約0.75㎝前後，残存厚0.4㎝を測る。石質は極めて軟質で滑石製と考えられる。



第14図　石　　器　　I（½）



第15図　石　　器　　II（⅓）

第5章　古　墳　の　調　査

第1節　横穴式石室墳の調査

（1）　1号墳の調査

古墳の構造（第17図，図版5）

墳丘はその大半を流失し，土層断面にわずかにその痕跡を残している。しかしどれほど多量の封土が築成されていたか明らかでない。むろん墳形は不明である。第17図第4層黄褐色地山礫多含粘質土までが流入土であり，第5層黄白色礫多含粘質土が封土であろう。

丘陵の西斜面に位置し，北及び西側は昭和13年の新見市大火の後，壁土用の土砂採集のため現状では崖となっており，更に巨大な槇の木根によって大きな側壁石が浮き上がり，山側がやや平坦になっているだけである。玄室の西及び北側はすでに崩落していた。土層断面を見ると掘り方は板状剝離性に富む第3紀層の地山を掘り窪めた後平坦面を形成し，側壁の基石を固定する溝を掘って第1段を積んでいる。盛土の高さは，掘り方底部から推定2m以上測る。土圧によって左右側壁は西方へ大きく傾いている。

内部構造（第18図，図版6）

玄室の一部を残し，天井石・奥壁は消失している。横穴式石室である。現存長3m現存幅1.1m現存高80cmを測り，玄室主軸は北東から南西方向に伸びる（頭位はN45°E）。玄門は南西の沖積平野に向けて開口するものと推定される。

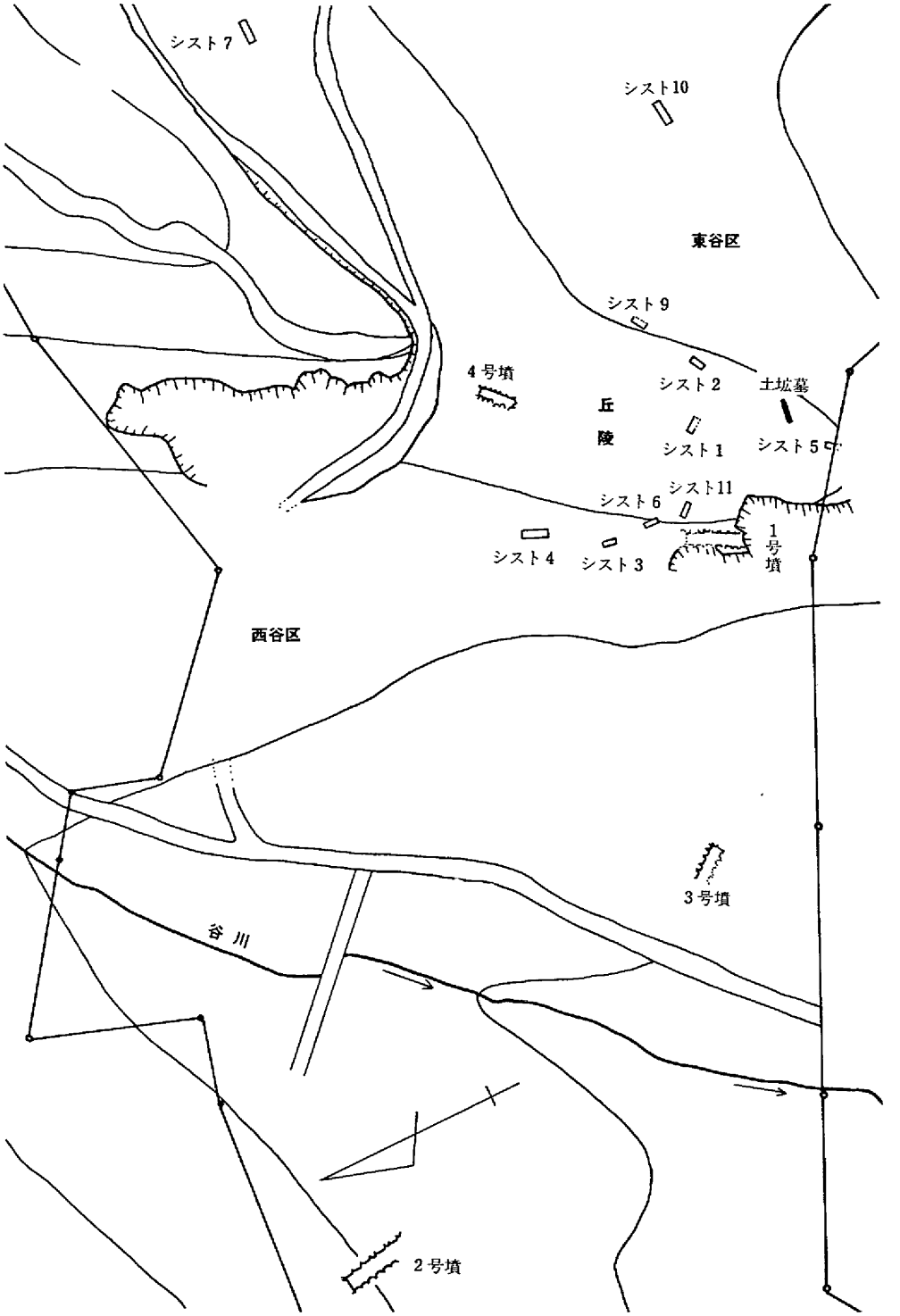
東側壁は，現存長3m現存高80cmを測り，基石には2人持ち大の石6個を広口を内側にして置き，2段目以上は少し小さくなって平石を横口積みしている。4段目の石が4個並んだ状態で床面に落下していることから少なくとも側壁の高さは95cmを越えるものと推定される。

西側壁は現存長2.5m 現存高50cmを測り，基石は4個残り，南西端のものはやや内側にずれている。羨道部との境で，片袖形式をとるのかどうか不明である。

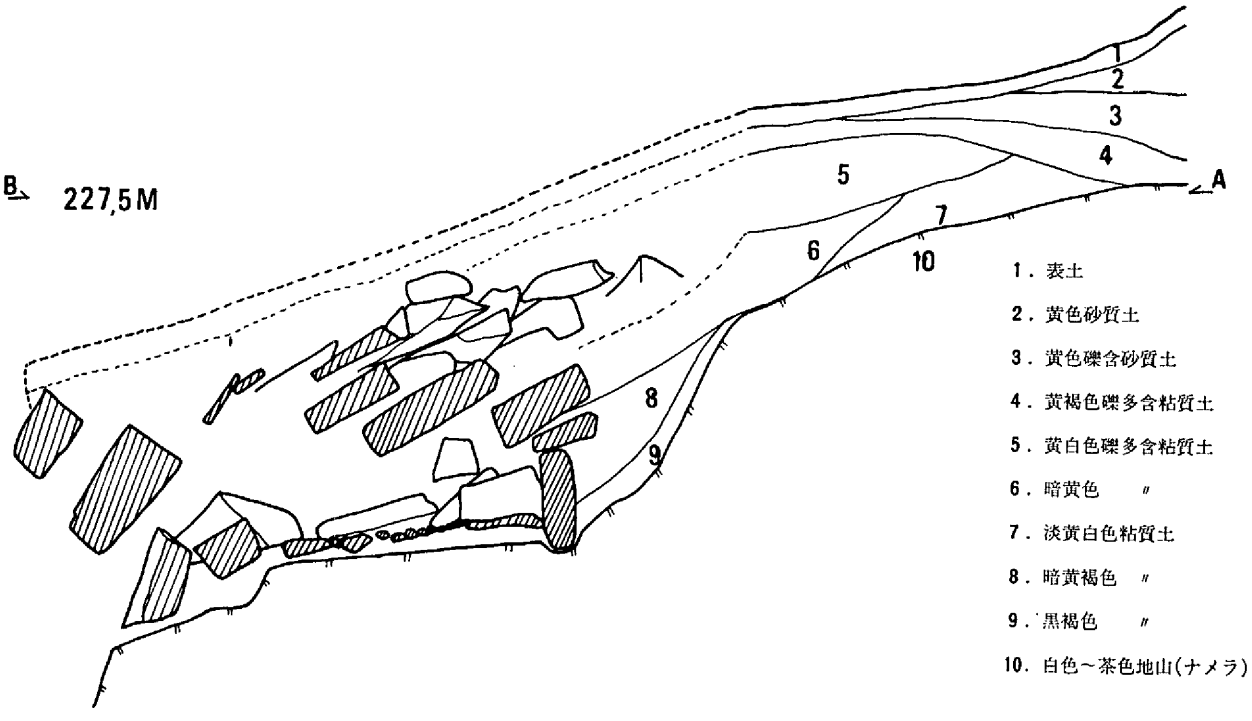
床面には約20cm四方厚さ5cm程度の板石を敷きつめ床石とし，すき間を拳大の河原石でつめている。

遺物出土状況（図版2）

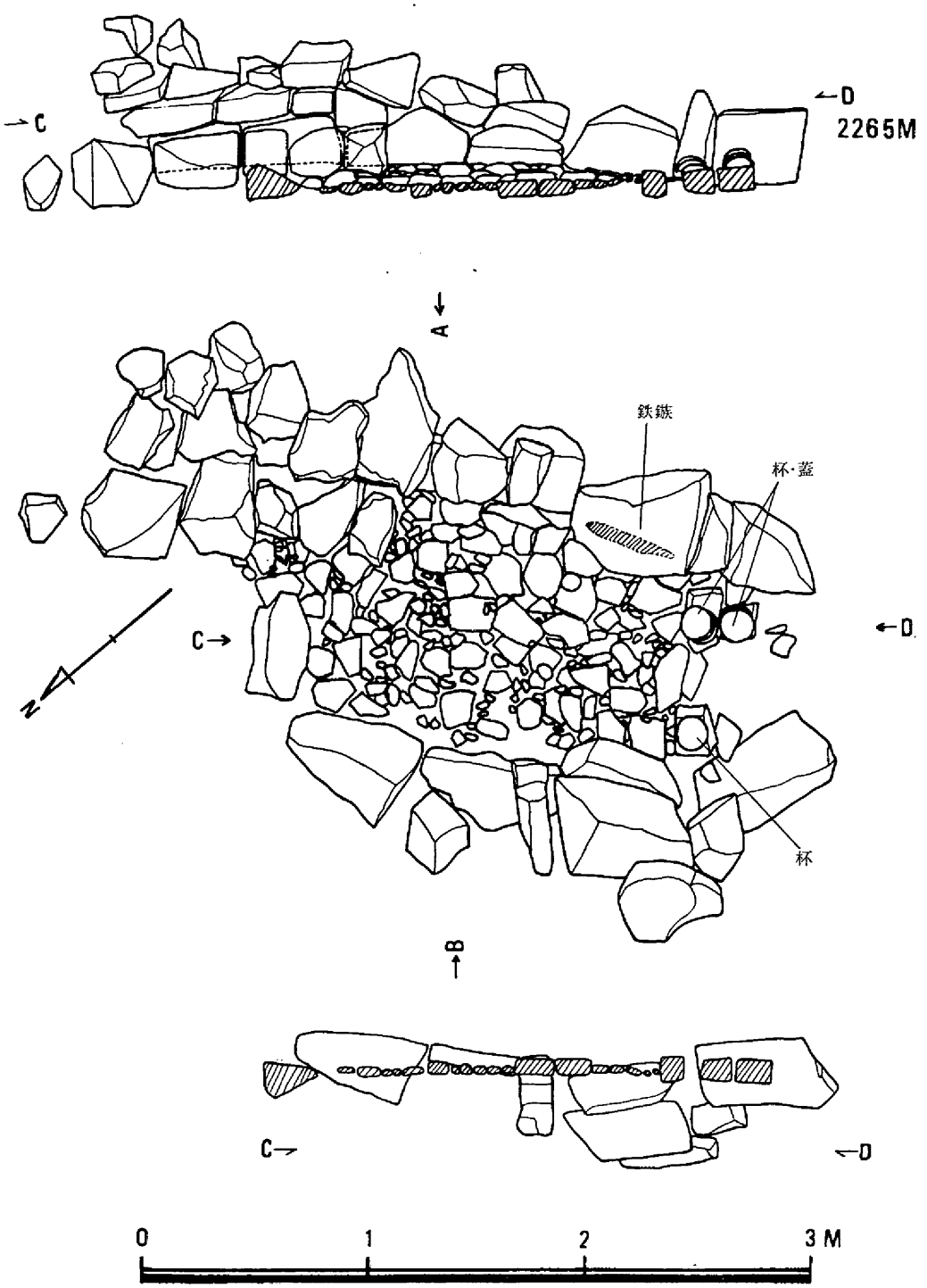
玄室南西端の床面で，須恵器と鉄鏃がほぼ原位置を保って出土している。須恵器は杯身が伏せて置かれ，その上に杯蓋が2個重ねている状態のものが2例見られた。その他はトレンチ発掘中に攪乱土より出土したものや玄室周辺で出土しているものである。丹の付着しているものが4個体認められる。鉄鏃は東側壁に接し奥壁に刃先を向けて副葬されている。刃部・茎部は直接接合できるものはなかったが，合計7本出土している。



第16図　古　墳　配　置　図 (1/500)



第17図　1 号 墳 断 面 図 (1/30)



第18図　1号墳玄室平面図・展開図（1/30）

遺　　物（第19～21図，図版24・25）

弥生式土器4点，古式土師器1点，砥石1点が周辺から出土している。須恵器16点，鉄鏃7点が出土した。

弥生式土器（第21図1・2・4・5）の1は，壺形土器で，口径15cmを測る。口縁部は上方に肥厚し二重口縁を呈す。頸部は長く内湾し細くなって胴部に続く。胴部外面はナデ仕上げ，内面はヘラ削りで指頭圧痕が認められる。丹塗りが見える。胎土は精製された粘土で，焼成は良好，赤褐色を呈する。2は甕形土器で口径16cmを測り，二重口縁を呈し，口縁外面に数条の櫛目が施される。頸部外面にはヘラ磨きを認め，体部内面はヘラ削り調整している。細砂粒を多く含み，焼成は良く，茶褐色を呈する。4は甕形土器で薄い器壁をもつ体部片である。肩の張った器形で，体部外面上端に櫛描き波状文を施し，横方向の刷毛目調整を行っている。肩部以下にはススの付着が著しい。内面は上部横方向のヘラ削り，下部縦方向のヘラ削りで，上端に指頭圧痕が見える。5は底部片で，外面ヘラ磨き，内面ヘラ削り仕上げである。

古式土師器（第21図3）は口径14cmを測り，外反する二重口縁をもち，たちあがり内面に段がつく。

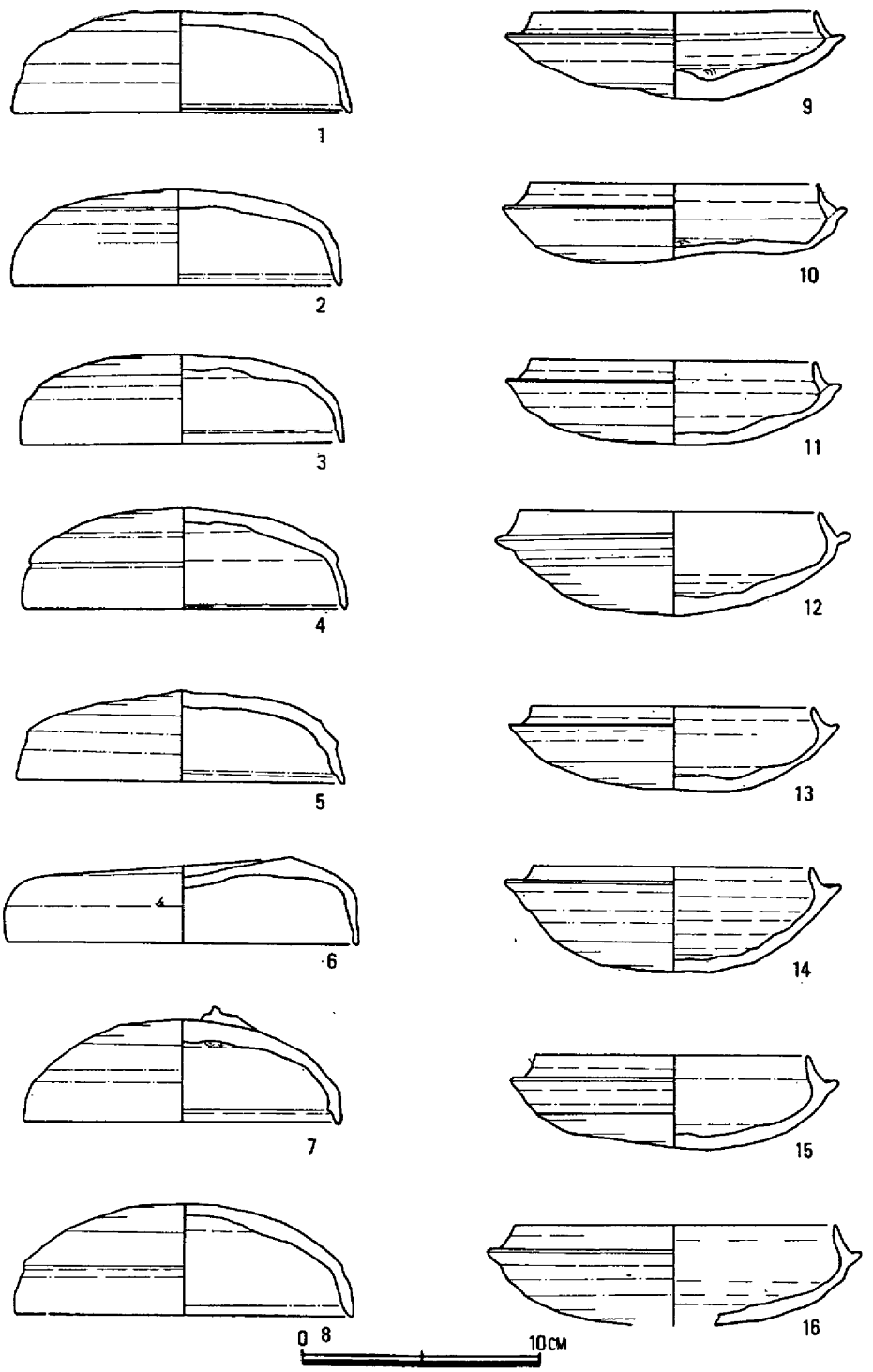
須恵器（第19図，図版24・25，表3）は，杯身・杯蓋があり，表にした。

鉄鏃（第20図，図版25）は，広根式6本と尖根式1本が見られる(註)。いずれも有茎式である。腸抉が全部にあったものと考えられる。刃部の断面形が片丸のもの（2・3・4・12・13・15）と両丸のもの（1・14）が見られる。広根式鉄鏃は，刃部の長さ7cm幅2.8cm厚さ2～3mm，腸抉の長さ1.5cmを測る。尖根式鉄鏃（14）は，刃部の長さ4.8cm幅1.5cm厚さ2mm，逆刺の長さ2mmを測る。茎部は，段をもち，棘状突起をもつものもある。いずれも断面形は方形である。なお14は，表土中より採集したものである。

小　　結

この横穴式石室の築造年代は，副葬されていた須恵器からみて，6世紀後半に比定したい。そして埋葬直後に壊れ，追葬を行う余裕がなかったと考えられる。

（註）　末永雅雄著「日本上代の武器」弥文堂昭和16年3月20日に準拠した。



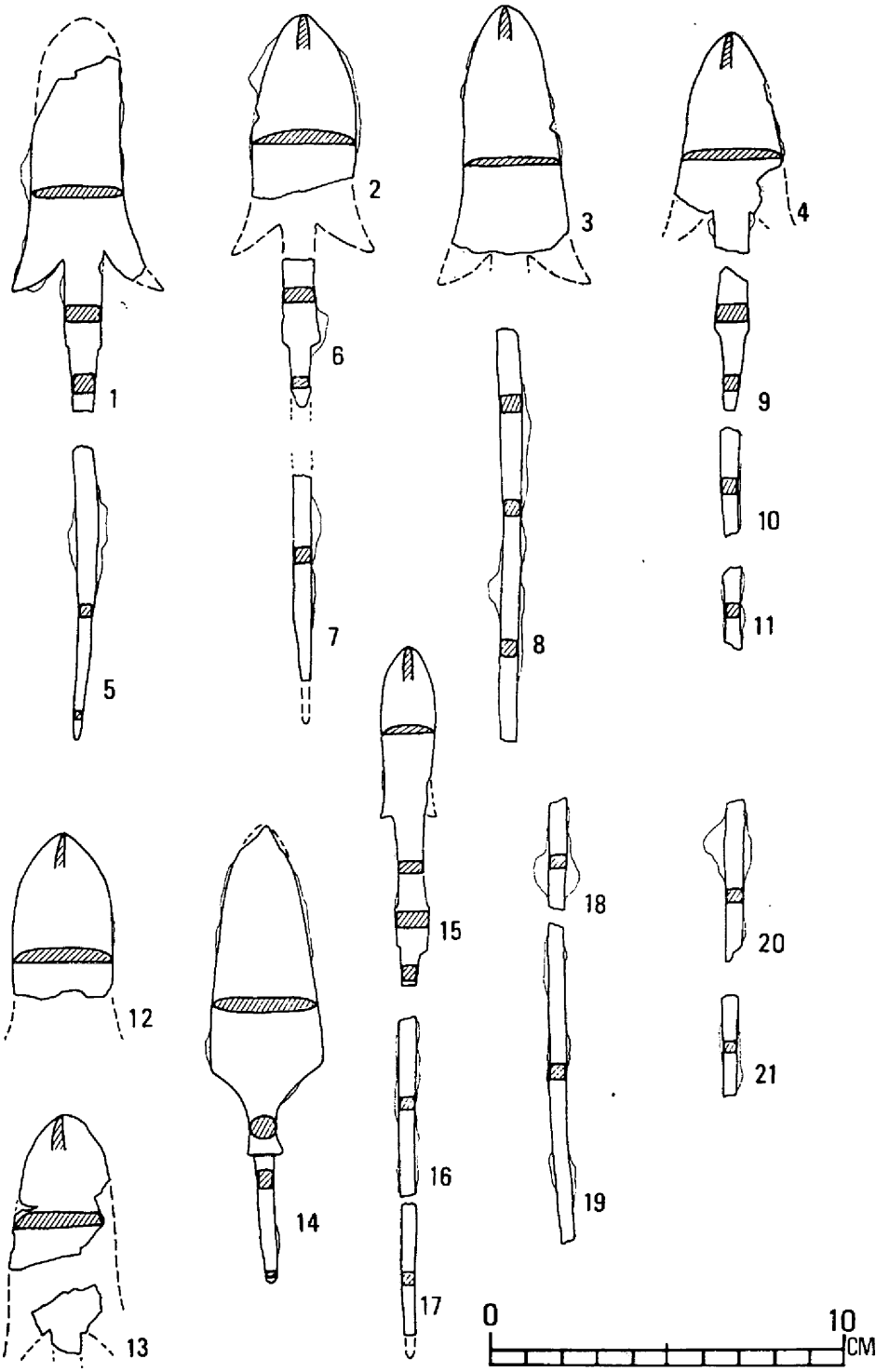
第19図　1 号 墳 出 土 須 恵 器（$\frac{1}{3}$）

表3　1号墳出土須恵器一覧表

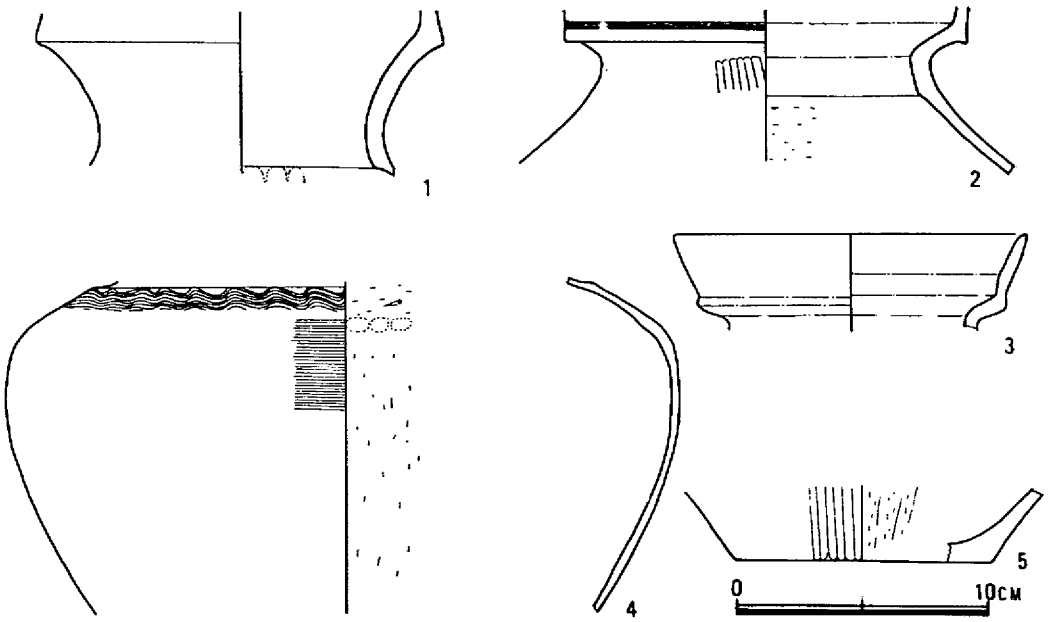
（単位：cm）

器形	図	番号	手法・形態の特徴	口径	器高	備考
蓋	19	1	◦天井部と体部の境に浅い凹線がある ◦口縁端に内傾する面を有し，沈線を施す ◦粗い砂粒を多含し，焼成良好，淡灰色 ◦内面に丹付着	14.1	4.4	完形
蓋	19	2	◦天井部は逆時計回りのヘラ削り ◦口縁端に不明瞭な面をもち，鈍い沈線あり ◦口縁外面に黒色自然釉がかかる ◦粗砂粒多く含み，焼成良好，灰色	13.6	4.1	完形
蓋	19	3	◦逆時計回りのヘラ削り調整 ◦口縁端部は丸くおさめる ◦口端部に内傾する面をもち，鈍い稜をもつ ◦粗砂粒少し含み，焼成良好，灰色～灰白色	13.5	3.7	完形
蓋	19	4	◦天井部と体部の境は明瞭な凹線 ◦口縁部は内湾し，端部に鈍い凹線を施す ◦粗砂粒少し含み，焼成良好，灰色～暗灰色	13.5	4.3	完形
蓋	19	5	◦天井・体部の境に明瞭な稜と浅い凹線 ◦口縁部は開き，端部に浅い凹線をもつ ◦小石も含み，焼成良好，灰色を呈す	13.8	3.9	完形
蓋	19	6	◦天井部と体部の境に鈍い稜がつく ◦天井部下端にヘラ描き記号が見える ◦天井部内面に青海波が残る ◦口縁部外面に叩きが残る ◦細砂粒を少し含み，焼成良好，淡灰色を呈す	14.6	3.7	復元完形
蓋	19	7	◦内面に青海波が残る ◦体部との境に鈍い稜がある ◦口端は丸くおさめ内側に明瞭な稜と凹線 ◦外面には褐色自然釉がかかり光沢がある ◦粗砂粒を多く含み，焼成良好，灰白色を呈す	13.3	4.4	完形
蓋	19	8	◦天井部内外面に朱の付着を見る ◦内面に青海波が残る ◦体部との境は鈍い稜と浅い凹線 ◦粗砂粒を多く含み，焼成不良，黄灰色を呈す	14.1	4.8	完形

器形	図	番号	手法・形態の特徴	口径	器高	備考
杯	19	9	◦たちあがりは内傾し，段をもつ ◦底部のまに朱の付着がみられる ◦内面に青海波が残る ◦粗砂粒多く含み，焼成良好，淡灰色～黒色	12.0	3.8	完形
杯	19	10	◦たちあがりは大きく内傾し，段をもつ ◦端部に面を有し，稜を作る ◦受部は水平にのび，上面に沈線をめぐらす ◦内面に青海波が残る ◦粗砂粒を多く含み，焼成良好，灰色を呈す	12.2	3.4	完形
杯	19	11	◦たちあがりは大きく内傾し，段をもつ ◦端部に面を有し，稜をなす ◦受部は水平にのびる ◦粗砂粒を多く含み，焼成良好，灰色を呈す	12.2	3.6	完形
杯	19	12	◦たちあがりは大きく内傾する ◦受部は水平にのび，上面に沈線をめぐらす ◦ヘラ削りは逆時計回りで底部大半を占める ◦粗砂粒を少し含み，焼成良好，灰色を呈す	12.7	4.5	復元完形
杯	19	13	◦たちあがりは内傾度が大きく，短い ◦受部はやや上方に伸びる ◦細砂粒を多く含み，焼成良好，灰色を呈す	12.0	4.6	完形
杯	19	14	◦口径の割り合いに深い器形である ◦たちあがりは大きく内傾し，短い ◦ヘラ削りは逆時計回り ◦小石も含み，焼成良好，灰色を呈す	11.9	4.5	完形
杯	19	15	◦たちあがりは大きく内傾する ◦受部はやや上方にのびる ◦細砂粒を少し含み，焼成良好，暗灰色	11.6	4.0	完形
杯	19	16	◦たちあがりは大きく内傾する ◦受部は水平にのび，上面に沈線がめぐる ◦細砂粒少し含み，焼成良好，暗灰色を呈する	13.6	4.3	破片・埋土中



第20図　1号墳出土鉄鏃（14は，表採）（$\frac{1}{3}$）



第21図　1 号 墳 埋 土 出 土 土 器（$\frac{1}{3}$）

（2）　2　号　墳（第22図～26図，図版7～8）

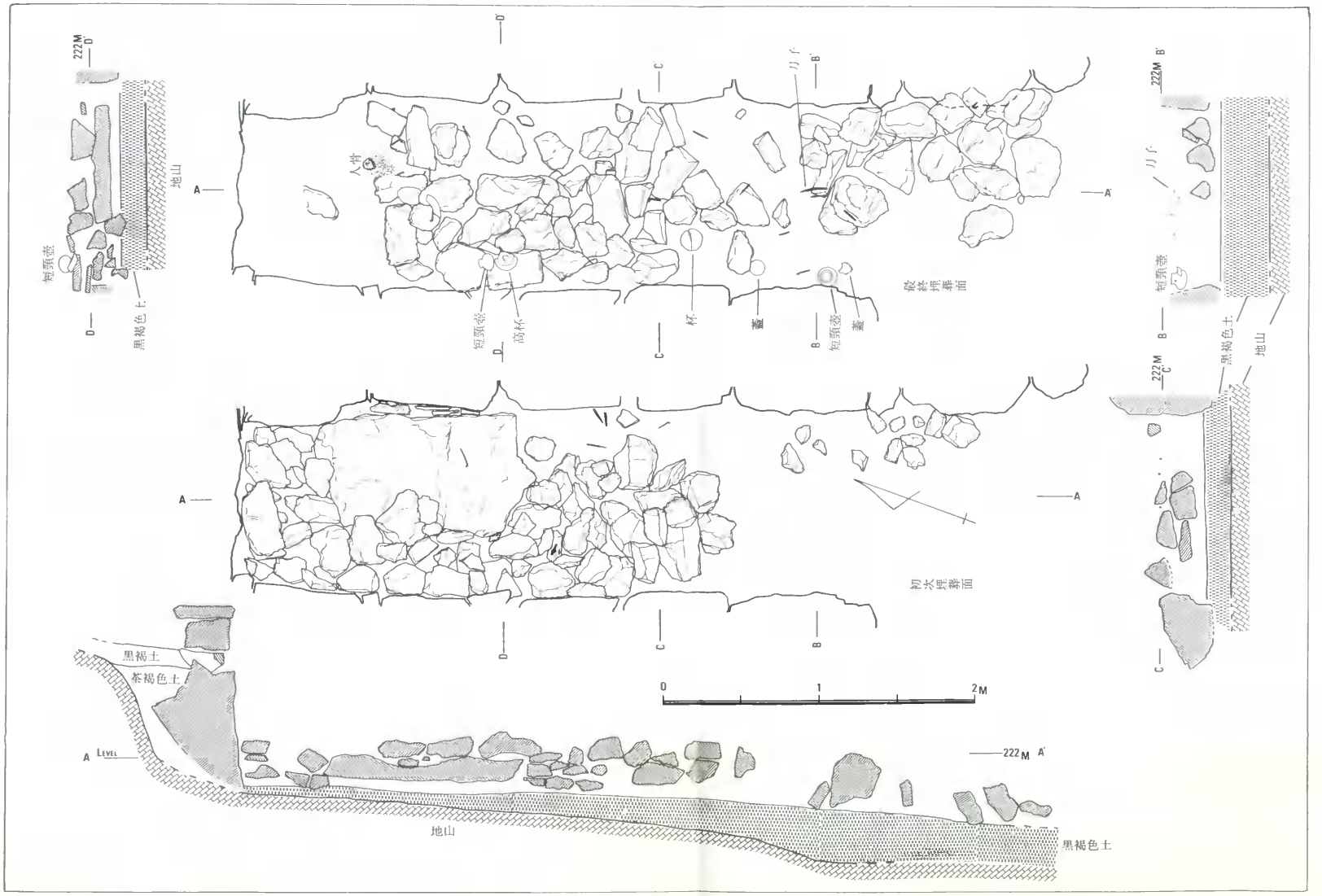
古 墳 の 構 造

西谷を流れる谷川の西方約27mの緩斜面に位置する。当初，石列遺構の調査を目的として発掘を始めた地区にあったため，古墳であることの認識が遅れた。封土は大半を流失していると思われるが，周溝が検出できなかったことや新見市周辺でみられる横穴式石室墳の大半が小規模な墳丘を持つことを考慮すれば，大規模な墳丘は当初よりなかったとも考えられる。石室はやや西振する南北方向に中軸線を置き，南方に開口する。急な山裾斜面が緩斜面に移行する部分を築造場所とし，地山に達する幅約2.6mの石室構築壙を掘りくぼめ，山側高所に奥壁をすえやや傾斜しながら両側壁を構築している。天井石はやや原位置を移動していたが，ほぼ石室上面にあたる位置に露見していた。残存していたのは約1.5m四方の比較的大きな石で，遺跡周辺の山塊にみかけるものである。

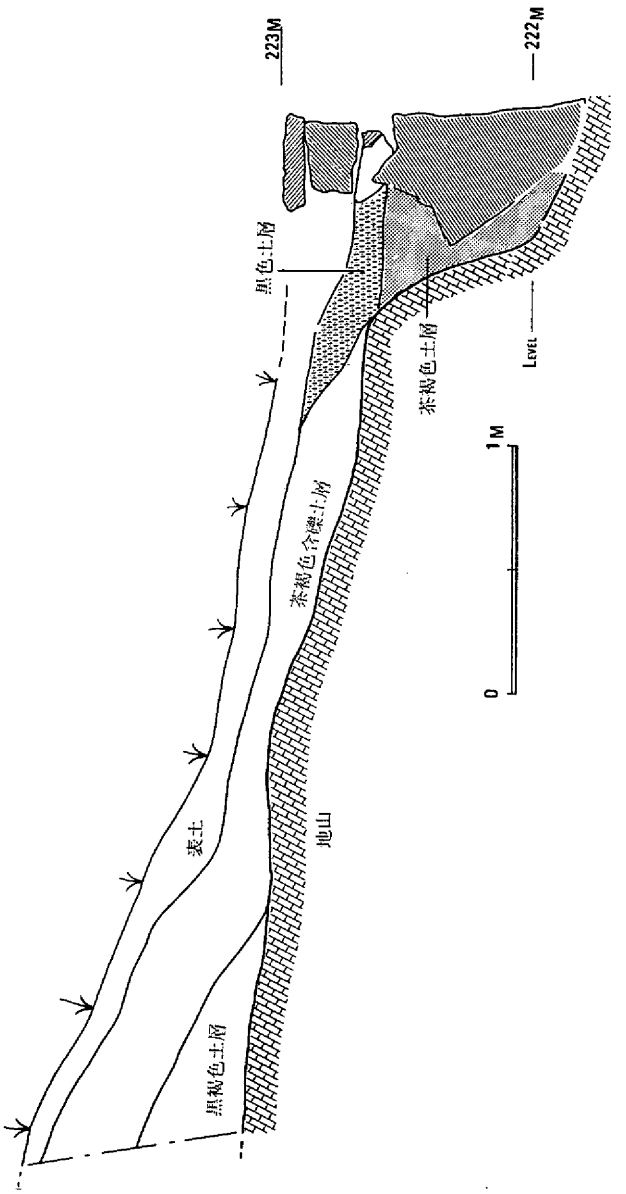
内 部 構 造

内部主体である横穴式石室は，残存全長約6m，玄室幅平均1.2mを測る。側壁はほぼ平行して南方へ並べ置かれ，東壁の方が残存度が高い。確認できなかった側壁・天井石の石材は，岩倉地内の民家の石垣あるいは側溝などの材料に持ち去られたものとみられる。天井石の移動は，運搬を試みたものの巨石故にそのまま置き去られたのであろう。

石室はまず，奥壁とそれに接する東西両側壁第一段に1個ずつの大きな石を据え，玄門方向の第五番目にほぼ同大の石を置いて基準とし，その後奥壁との間に第一段の側壁石を並べたと思われる。更にその石から玄門方向に側壁を延長していったのであろう。第一段の側壁は横1m以内，縦80cm以内



第22図 2号墳玄室平面図・断面図 ($\frac{1}{30}$)



第23図　2号墳奥壁後方土層断面図（1/30）

の石材を用いるが，第二段からは大きいもので70×40㎝を測る程度である。全般的に二人持ち大の石材が多く用いられている。側壁は，持ち送りが認められず，ほとんど直立して天井に至るものと考えられる。天井石検出レベルから，東西両側壁ともにおよそ四段の横口積で天井石に達すると推定される。床面から天井石までは約2ｍ弱の高さが復元推定できる。奥壁は約1ｍ四方のやや扁平な石を用い上部は側壁第二段～第三段の石と同大の石材と円礫1個が用いられ，奥壁第二～四段を形成している。

床面は数次にわたって追埋葬が行われ，その都度棺台あるいは屍床となる小児頭大～人頭大の扁平な角礫を敷設している。初次埋葬，つまり石室構築当初より角礫の全面敷設は行われ，徐々に床面が上昇している。第24図に掲げるように初次埋葬は玄室奥壁まで敷石がみられ，中には屍床とも思える1.3×0.8ｍの扁平な一枚石を奥壁より約40㎝の位置で東側壁に接して置いているものもみられる。最終埋葬面とみられる角礫面は初次埋葬面より約10～20㎝高く，奥壁に近接する追葬は認められず，奥壁より約80㎝付近まで追埋葬が行われている。また，東側壁の玄門よりでは角礫が密集し，埋葬の範囲が拡張したことを示していると思われる。

遺物出土状況

初次埋葬面での遺物の出土は，棺釘として用いられた鉄釘が，玄室中央部を中心に出土している。須恵器などの副葬品は追葬に先立って玄室外あるいは，玄門付近にとり片付けられた可能性がある。最終埋葬面では第25図に掲げた須恵器や第26図の鉄製刀子・鉄鏃に加えて棺釘が出土している。奥壁

より約10cm～1mの範囲に人骨の一部が出土し，頭骨・歯牙がみられる。最終埋葬時の遺物は，盗掘や石材抜き取りの際，持ち去られたりしたものも多いと思われる。トレンチ調査時には現存玄室の南約1mの地点で須恵器が出土している。木棺に用いられた棺釘の量からみると，埋葬された人々のすべてが木棺に納められたとは思われず，床面の角礫を屍床として埋葬された人々も少なからずあったであろう。

遺　　物（第25・26図）

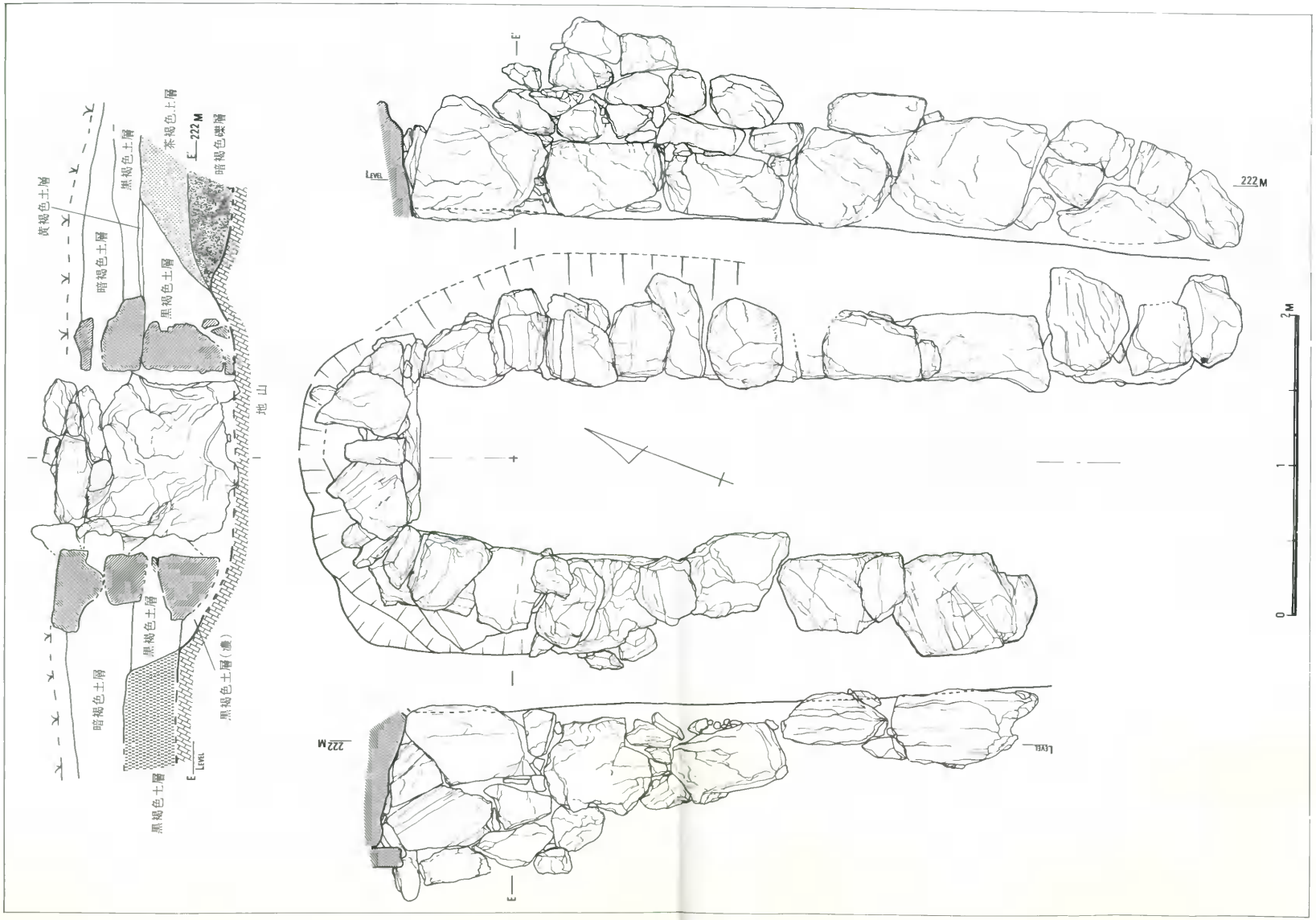
① 須 恵 器（第25図）

1～3は杯蓋で，1・2はトレンチ調査の際出土したものである。1は天井部の一部を残す小片で復元形はやや天井部が丸味を帯びてやや高い，胎土精良・焼成良好，青灰色を呈するものである。2は器高4.2cm，口径11.1cmを測り，胎土は精良であるが焼成はやや甘く暗い灰青色を呈する。天井部はヘラケズリ後，任意ナデ調整を行い内外面ともにヨコナデ・任意ナデ調整で仕上げている。3は器高4cm，口径13cmを測り，天井部は粗雑なヘラケズリが行われ，体部から口縁部にかけて内外面共にヨコナデ調整で仕上げられている。胎土は石英・長石の粗砂を含み，精良とはいえないが焼成は良好で，全体的に青色を呈する。

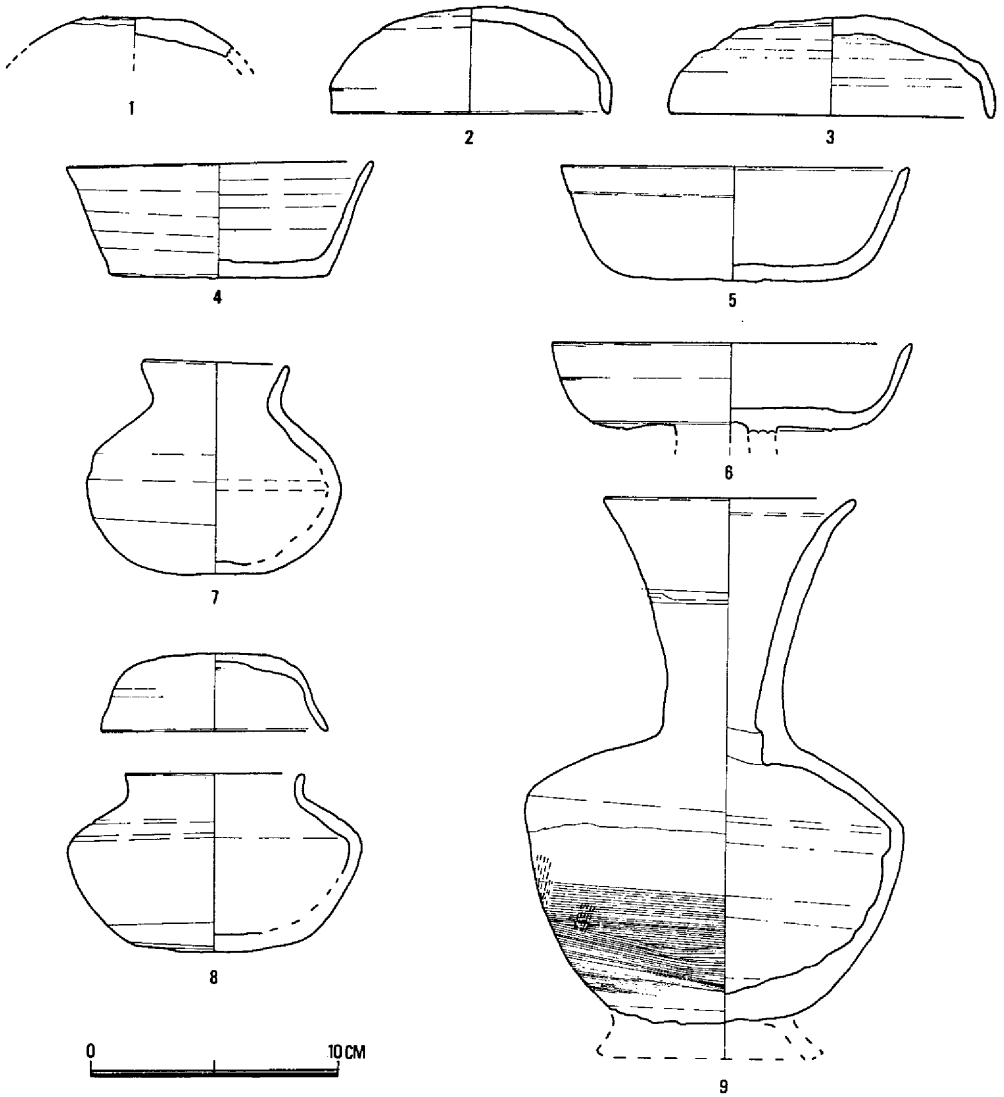
4・5は対照的な杯である。4は器高4.5cm，口径12.2cm，底径8.8cmを測る。全体的にヨコナデ調整が施され，底部はヘラキリ後わずかにナデ調整が行われている。直線的な立ち上がりが底部より一気に口縁部に達し，シャープな形態を示す。ろくろの回転方向は時計まわりである。杯に高台が貼り付けられ始める直前の器形であろうか。5は器高4.5cm，口径13.8cm，底径約8cmを測る。底部はヘラオコシのままで，体部の器壁はヨコナデ調整で仕上げられている。胎土は微砂を含む精良な粘土を用いるが焼成は甘く，瓦質と思えるような灰白色を呈している。口縁内面に重ね焼きの際生じたと思われる，ベルト状の灰黒色部分が幅1cm前後でめぐる。

6は脚部を欠失する高杯で後述の7の短頸壺と近接して出土している。口径14.3cm，杯部高3.4cmを測る。杯部内外面共にヨコナデ調整仕上げを基調とし，底面は任意ナデ調整を行っている。底部には，全周する二条のヘラ描き沈線がめぐるが装飾的ではない。残存脚円筒部径は4cmを測る。胎土は粗砂を多く含み精良ではないが焼成は良好で，外面は青色，内面はやや白っぽい灰青色を呈する。

7・8は短頸壺で8には蓋が伴出している。7は奥壁より約1.7mの西側壁に近い扁平な床石の直上で6の高杯と接合できる破片と近接して出土している。器高8.4cm，口径5.9cm，体部最大径10.2cmを測る。体部は磨滅が著しく，器壁が剝落している部分が多い。短頸部立ち上りはやや長く，外反する。体部下半から底部にかけてはヘラケズリを行い，上半はヨコナデ調整で仕上げられている。内面はやや凹凸がみられるが荒いナデ調整で仕上げられている。胎土は石英粗砂を含むも精良であるが，焼成はやや甘く全体的に乳白色を呈する。8は奥壁より約4mの西側壁に近接して出土した短頸壺と蓋のセットである。この位置には床石がなく床面堆積土直上で出土し，付近の棺釘・刀子などと同一レベルである。蓋は器体の$\frac{2}{3}$を失ってはいるが，器高3.1cm，口径9.1cmを測ることができる。全体に丸味を帯び短頸部は外反する。天井部はヘラオコシ後，ナデ調整を施し部分的に指頭ナデ圧痕を残す。天井部より口縁部にかけてはヨコナデ調整，内面はヨコナデ・ナデ調整で仕上げている。胎土は長石粗砂を含む精良粘土を用い，焼成良好，白っぽい灰青色を呈する。短頸壺は器高7cm，口径



第24図　2号墳石室平面図・展■図　($\frac{1}{30}$)



第25図　2 号 墳 出 土 須 恵 器（$\frac{1}{3}$）

7.1 cm，肩部径 11.8 cm を測る。口縁部立ち上りは 7 より短く，口唇部がわずかに外反する。肩部はやや張り出し，ゆるやかに体部を下降し底部に至る。肩部には全周しないが二条の沈線がみられる。口縁部より体部にかけてはヨコナデ調整を基調に施し，体部下半より底部はヘラズリのままである。

9 は長頸壺で器高 20.6cm，口径 9.9cm，肩部径15cm，底径約 7 cmを測る。底部には貼付け高台の剝離痕と接合痕がみられ，製作時にはやや外反する高台がとりつけられていたと思われる。しかし，副葬時にはすでに欠失しており磨滅した接合部分から考えると，副葬以前の使用中にすでに欠失していた可能性が強い。頸部は肩部の上方中央にあらかじめ径 4 cmほどの孔を穿ち，頸部下半の一部をとり

つけ，その後頸部の全体を接合している。口縁部はゆるやかな弧を描いて外反し，ほぼ中央部位に二条の浅い沈線がめぐる。口縁部より肩部にかけてはヨコナデ調整が行われている。肩部のやや下方より底部にかけては横方向のカキ目がみられ，２カ所ほど斜方向の格子目タタキがみられる。底部はヘラケズリで高台を貼付けた際，底部にも若干の粘土が貼り付けられた痕跡を残している。内面はヨコナデ調整を基調とし，頸部とり付け部分には粘土接合痕を明確に残している。頸部の器壁はやや厚く約7.5㎜前後，肩部・体部は約５㎜，底部はもっとも厚い部分で約1.5㎝を測るぶ厚いものである。胎土は比較的精良で，焼成良好，灰青色を呈する。

以上の須恵器は６世紀後半から末，７世紀初頭に比定でき，追埋葬の期間を端的に示している。4・5・9などは最終埋葬時の副葬品と考えられる。したがって古墳の築造は６世紀後半で，７世紀初頭の最終埋葬をもって追埋葬が終了し，玄室の使用も終るものと理解できる。

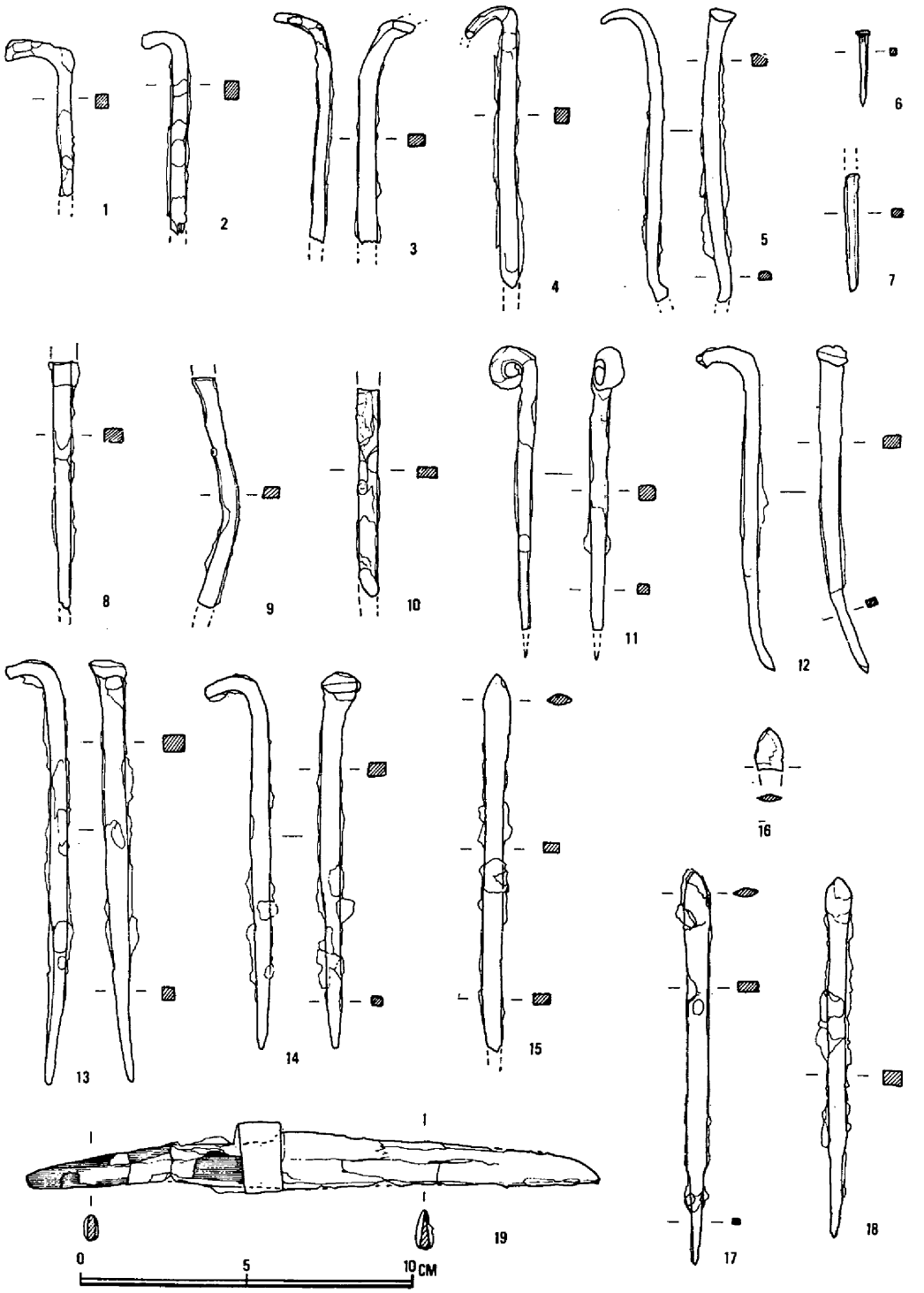
② 鉄　　器（第26図・付図）

１～14は玄室に埋納された木棺に使用された鉄釘である。初次埋葬あるいは追葬において，一貫して木棺が使用されたとは断言できないことは先に述べたが，被葬者数が明確でないので断定はできない。初次埋葬と追葬の過程における棺釘の区別はつかない。なぜなら床石の隙間に堆積が充塡していない状態に木棺が納められ，後に木棺が朽ち棺釘が床石の間に落下し出土レベルは埋納位置より下位になるからである。出土数・出土位置からみて，奥壁に近い部分には木棺の埋納が行われておらず，奥壁より約１mから４mの間に集中して出土している。１～14に掲げた棺釘は頂部が鈎状に折り曲げられたもの，頂部が扁平で丸味を帯びて折り曲げられたもの，６のようにわずかに頂部を平にした小形のものの３種類がみられる。いずれも銹化が甚しく進行し木質の遺存は顕著には認められない。

15～18は有茎尖根式の鉄鏃である。18は奥壁より約2.3mの東側壁付近で出土した。他は玄室内堆積土排土中より採集したものである。いずれも鋒が長く先端部断面は凸レンズ状を示し関に至る部分は，方形を呈する。茎は約４㎝を測り断面はやはり方形を呈する。

19は刀子で全長17.2㎝を測る。刃部・茎部共に遺存は良好で関部には鋏が付着している。最大刃幅は1.7㎝，最大茎幅は1.1㎝を測る。茎部には柄の木質が遺存しているが刃部では認められず，抜身で副葬された可能性が考えられる。

付図に掲げた鉄器（棺釘，刀子）は報文脱稿後実測，製図が可能となったもので，いずれも上記の鉄器と同様，玄室内で出土したものである。



第26図　2 号 墳 鉄 器 ($\frac{1}{2}$)

（3） 3 号 墳（第27～31図，図版9～10）

古 墳 の 構 造

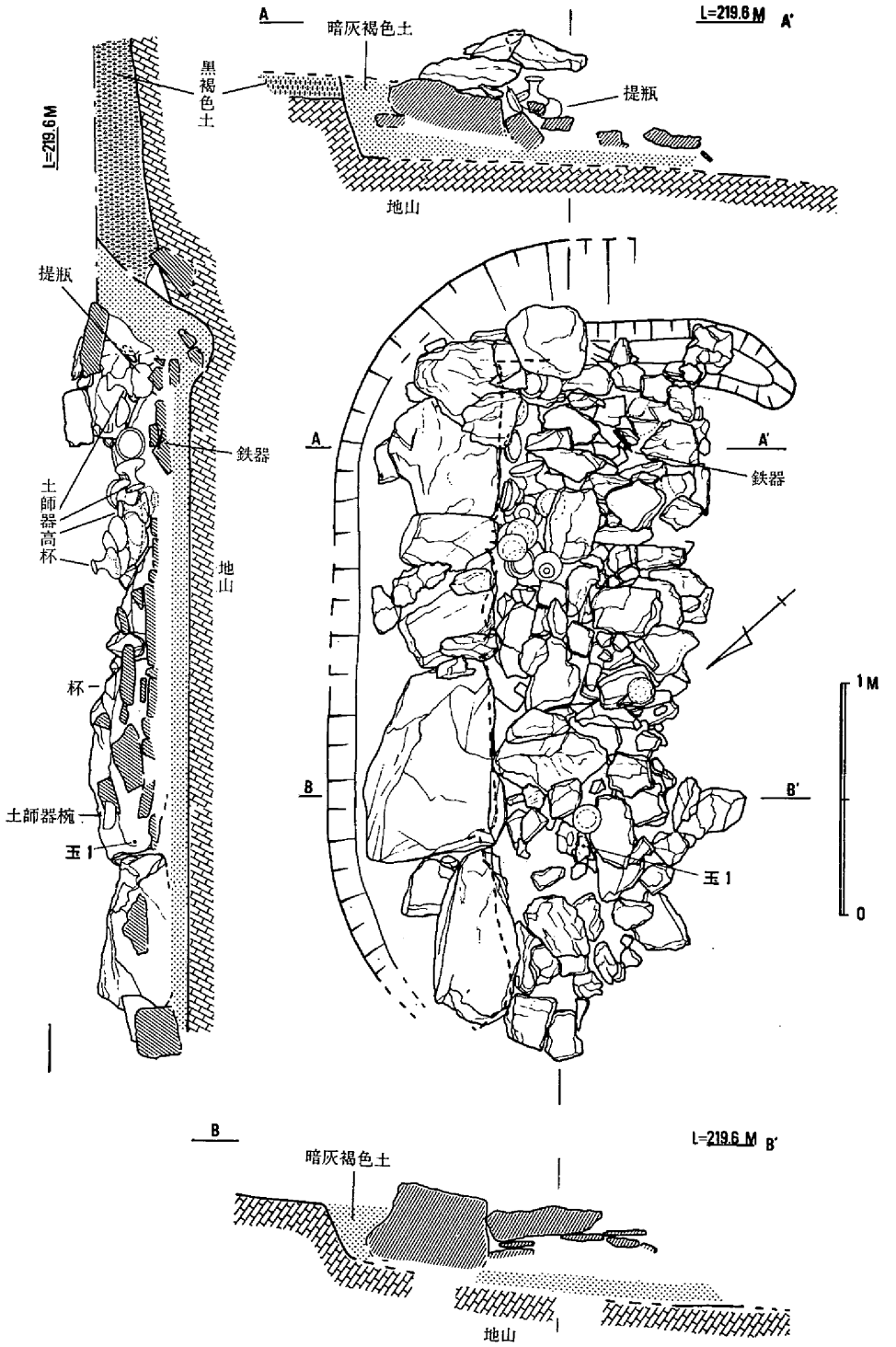
2号墳の南約38mの畑地で，表土下約50～70cmの深さで検出した。谷川をはさんで2号墳と相対する位置を占めている。墳丘及び石室の大半を失っていたため詳細な復元的考察はできないが，石室は残存長約3mの長円形石室構築壙を掘りくぼめた後に築かれたことが判明している。墳形・墳丘規模に加え周溝等の外部施設も痕跡をつかめず，不明である。

内 部 構 造

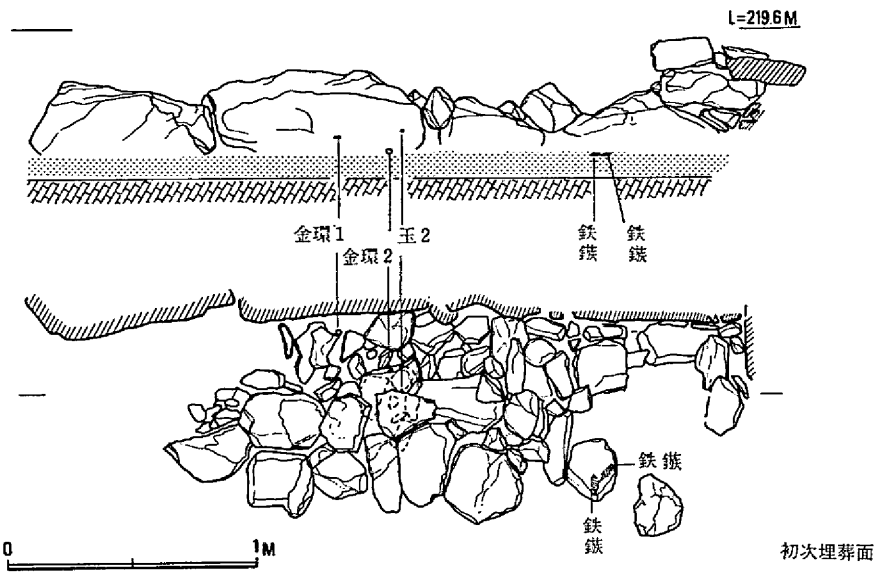
内部主体である横穴式石室は，残存長約3.2m，残存幅1.6m，残存玄室長約3m，残存玄室幅約1mを測り，第一段の東側壁・奥壁の一部・玄室床面の$\frac{3}{4}$程度を残すのみとなっている。石室主軸は西振約45°を示す。奥壁部直下には地山を切りこむ断面U字形を呈する幅25cm，深さ約10cmの溝があり，東側壁より約1m南西方向にのび，ゆるやかに曲折して終る。これは奥壁を築く基準あるいは，石室の規模を定めた目安にあたる溝と思われる。したがって，曲折部より西側壁が始まるとすれば，玄室推定幅は約1.2m前後を測るものとみられる。玄門部付近は石材を全く失っており，全体の規模の確認はむろんのこと，石室袖部の有無も確かめられなかった。奥壁より第4番目の東側壁が内に向けて据えられているので，無袖式の玄室と推定され，玄室から羨道部にかけて徐々に狭まる形式のものであろう。残存する東側壁は第一段目の石を残すだけであるが，もっとも大きい石で80cm×40cmを測り，さほど大きな石は用いていない。おそらく第二段目からは更に一まわり小さくなり，2号墳と同様な横口積を基調とした石室の構築を行ったことが推察される。床面は2号墳と同様，角礫を主体に床石として敷設しているが，2号墳に比べるとより扁平な石が選択されているようである。第27図は最終埋葬面と考えられる床石面で，第28図の初次埋葬床石面より約10cmレベルが高くなっている。初次埋葬面は扁平な石を厳選し，20×40cm前後の石を奥壁より約1m～2.2mの範囲に集中して敷設している。最終埋葬面では石材の選択はやや不揃いで25×50cmを測る極端に大きなものや，小角礫を敷設しているが高低差を生じせしめる結果となっている。

遺物出土状況（第27・28図）

2号墳で出土した棺釘が全くみられず，被葬者は床石を屍床とする直葬式によって埋納されたものであろう。初次埋葬面に伴う確認な遺物は鉄鏃で，明らかに後の埋葬床石面の下位にあり，奥壁より約60cm，側壁より60cmを測る位置で出土している。しかし，追葬が進行するのは玄室床石面の全面的敷設を新たにすることではなく，玄室の被葬者の占めるスペースだけ整備すれば事足りる。故に初次埋葬面副葬品と最終埋葬面のそれとは容易に区別はつかないのである。まして，追葬の過程で，追葬直前に副葬されている須恵器・土師器などを片付けたり，持ち出したりすれば尚更，事実は測り難い。遺存する遺物の状態の即物的に理解すれば，最終副葬遺物として確実なものは第29図-6杯，第30図-1の土師器椀である。いずれも初次床石敷面より床石をはさんで約10cm高い位置で出土している。加えて，金環・玉も最終埋葬期に近い時期に副葬されたものとみられる。多くの須恵器・土師器高杯の一群は東側壁の奥壁より，1m×30cmの範囲に集中して出土した。大半は追葬過程で床面に



第27図　3号墳玄室平面図・断面図Ⅰ（1/30）



第28図　3号墳玄室平面図・断面図Ⅱ（1/30）

副葬されていたものを奥壁・側壁に近接して片付け置かれた状態を示し，不規則・乱雑に積重ねられたと思われる。杯・蓋はセットの状態で整然と並べ置かれたものではない。提瓶は奥壁部に接して前面を上に向け出土した。他の遺物と異なり初次副葬品の可能性もある。土師器高杯は杯部を下にして伏せ置かれたもの3点，転倒しているものが1点みられるが，第30図-2は出土状態からみると最終埋葬期に近い副葬品と思われる。鉄器は玄室内埋積土中より大半が出土し，床面に接するものはわずかである。第27図に図示した鉄器は追葬過程で副葬された鉇である。

遺　　物（第29～31図）

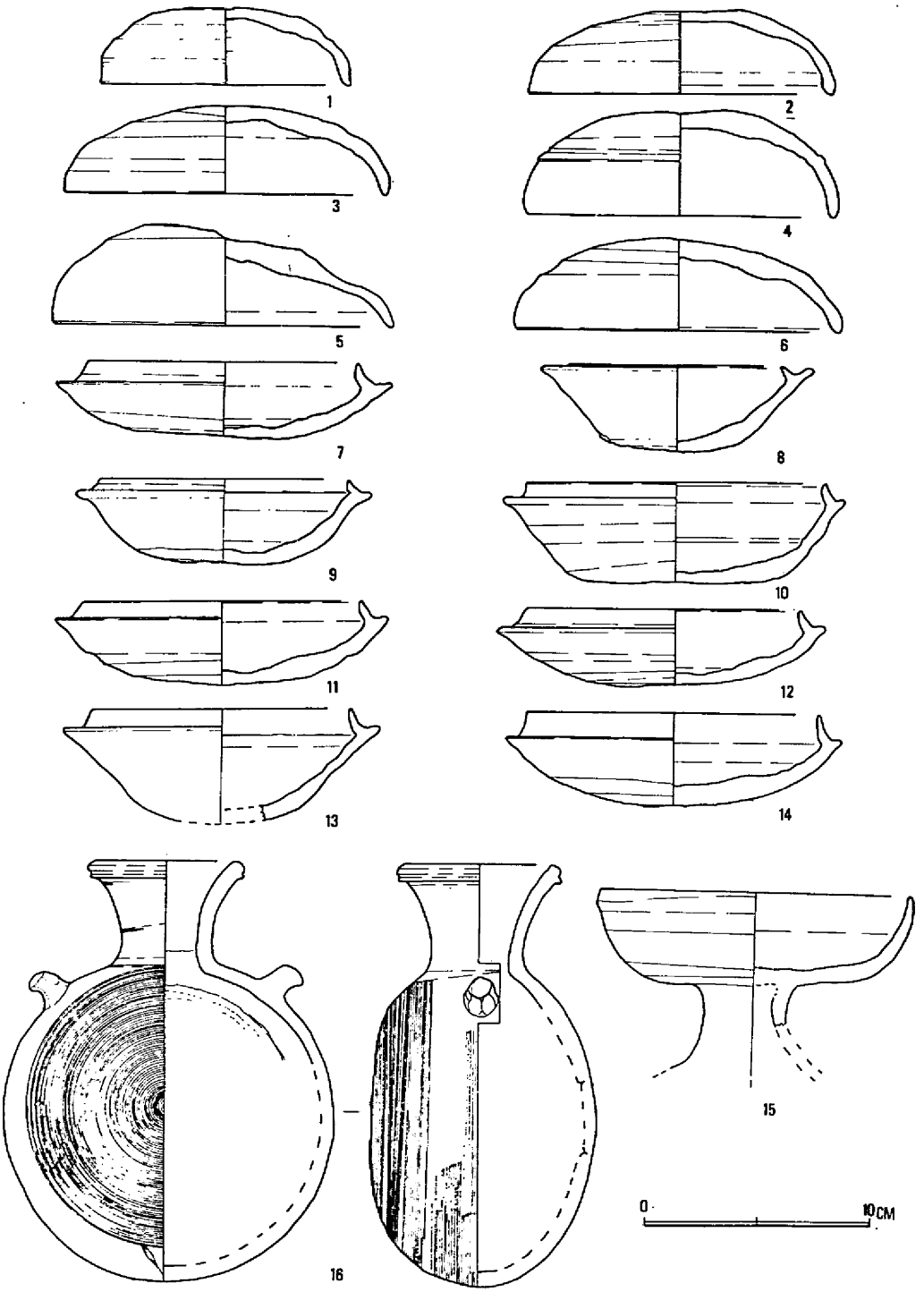
本遺跡で発見された埋葬遺構の中でもっとも多様で，須恵器・土師器・金環・玉・鉄器がみられ，石室遺存度がよくない割には良好な遺存状態を示している。

①　須　恵　器（第29図）

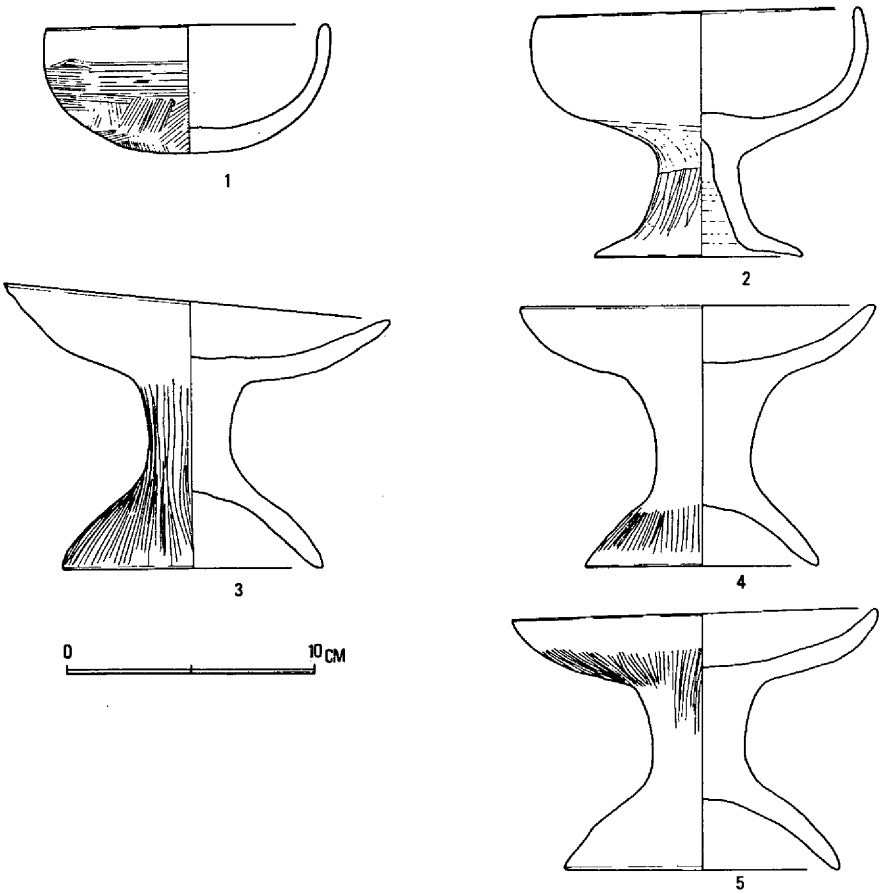
1～6は杯の蓋ですべて完形品である。1は2～6よりやや小形で器高3.4cm，口径11cmを測る。天井部は凹凸がみられヘラケズリで仕上げられている。体部はやや凹凸をみせながらゆるやかに下降し，やや外反する口縁部に至る。体部外面・内面はヨコナデ調整によって仕上げられ，粗砂を含むが良好な粘土をもって胎土とし焼成良好，青灰色を呈する。ろくろは時計回りを示す。2は器高3.8cm，口径10.5cmを測る。天井部はほぼ3回の回転ヘラケズリを行っている。体部はヨコナデ調整を行い，丸味を帯びて口縁部に至る。内面は天井部分をナデ調整，天井部より口縁部にかけてはヨコナデ調整を行っている。胎土は粗砂が目立つ不良粘土であるが焼成良好，青灰色を呈する。3は器高3.9cm，口径14.2cmを測る。天井部は3回の回転ヘラケズリを行い，体部は口縁部にかけてゆるやかに外反する。体部内外面共にヨコナデ調整を施し，内面天井部は任意ナデ調整を行っている。胎土は粗砂が目立つ不良粘土であるが，焼成良好，灰青色を呈する。ろくろは時計回りである。4は器高4.6cm，口

径13.8cmを測る。天井部はヘラケズリを施した後ナデ調整を行い，天井部と体部の境が凹帯状に丸くふくらむ。体部内外面共にヨコナデ調整を基調とし，内面天井部は任意ナデ調整を行っている。器壁は厚く，天井部では1cmを越えるところもみられる。胎土は比較的精良で焼成良好，灰褐色を呈する。ろくろは時計回りである。5は最大器高4.5cm，口径14.8cmを測る。器体は大きく焼けひずみいびつな形状を示している。天井部はヘラケズリを行い，下半より体部・口縁部にかけてヨコナデ調整で仕上げている。内面は全面ヨコナデ調整を行っている。胎土は粗砂を含むも精良で，焼成は極めて良好，天井部には自然釉がみられる。色調は外面灰色を呈するが，自然釉のため光沢がある。内面は灰褐色を呈する。ろくろは時計まわりである。6は器高4.2cm，口径14.3cmを測る。天井部はほぼ3回の回転ヘラケズリを行っているが不揃いである。体部はゆるやかな曲線を描いて口縁部に至る。体部・内面共にヨコナデ調整を基調とし天井部内面は任意ナデ調整を行っているが凹凸がみられる。ろくろは時計回りである。器壁はぶ厚く，胎土は粗砂を含む精良粘土で，焼成良好，灰色を呈する。

7～14は杯である。13は玄室堆積土掘り上げ時に出土したものである。8は最終埋葬面と考えられるレベルのやや高い床石面で出土したものである。他はすべて奥壁に近い側壁に沿って出土したものである。7は器高3.4cm，口径11.9cmを測る。立ちあがりは内反し端部がやや外方する。底部は平坦でヘラケズリが行われている。体部・受部から立ちあがりにかけてはていねいなヨコナデ調整が行われている。底面は任意ナデ調整，体部内面はヨコナデ調整で仕上げている。胎土は長石・石英粗砂を多く含み，焼成良好，一部自然釉がみられる。色調は，内面がくすんだ灰色，外面は青灰色を呈する。ろくろは時計逆回りである。8は他の杯と形状を異にする小形品で，器高3.8cm，口径10.4cmを測る。立ちあがりは短く内反し受部よりわずかに高い。底部はヘラオコシ後ナデ調整を行い，体部・受部から口縁部にかけてはヨコナデ調整を行っている。内面は底部を任意ナデ調整，他はヨコナデ調整で仕上げている。ろくろの回転方向は不明である。胎土は極めて精良で，焼成良好，灰色を呈する。杯が逆転し，宝珠つまみをつけた蓋が出現する直前の時期に比定される。9は体部・底面が丸味を帯びたやや小形なもので器高3.8cm，口径11cmを測る。立ちあがりは短く外反し，端部は鋭く外方する。受部は平らで丸味を帯びつつ底部に下降する。底部はヘラケズリを行い，体部より口縁部にかけてはヨコナデ調整で仕上げている。内面は全面，回転を利用したヨコナデ調整を行っている。胎土は微砂が極めて多いが焼成は良好で灰白色を呈する。ろくろは時計回りである。10は器高4.4cm，口径13.3cmを測る。底部は回転ヘラズリを行った後，ナデ調整を施しており平坦面をなしている。体部は直線的で，受部は短く，立ちあがりは内反して端部がやや外方する。体部から立ちあがり，内面体部はヨコナデ調整，内面底部は任意ナデ調整を行っている。胎土は比較的精良で，焼成は普通，淡い灰青色を呈する。ろくろは時計逆まわりである。11は器高3.8cm，口径12.3cmを測る。立ちあがりはやや高目で端部は丸味を帯びて内反する。底部はほぼ3回の回転ヘラケズリが行われ段差をもって体部に移行する。立ちあがりから底部にかけてはヨコナデ調整を施し内面も同様である。胎土は長石・石英微砂を含む不良粘土であるが，焼成良好，灰青色を呈する。ろくろは時計まわりである。12はやや扁平で，器高3.5cm，口径12.1cmを測る。立ちあがりは内反し，端部はわずかに外方する。底部のヘラケズリは3回転で受部に近い部分にまで達する。内外面共にヨコナデ調整を施している。胎土は粗砂多く不良であるが，焼成良好，青灰色を呈する。ろくろは時計回りである。13は復元推定高5.2



第29図　3 号 墳 出 土 須 恵 器 (1/30)

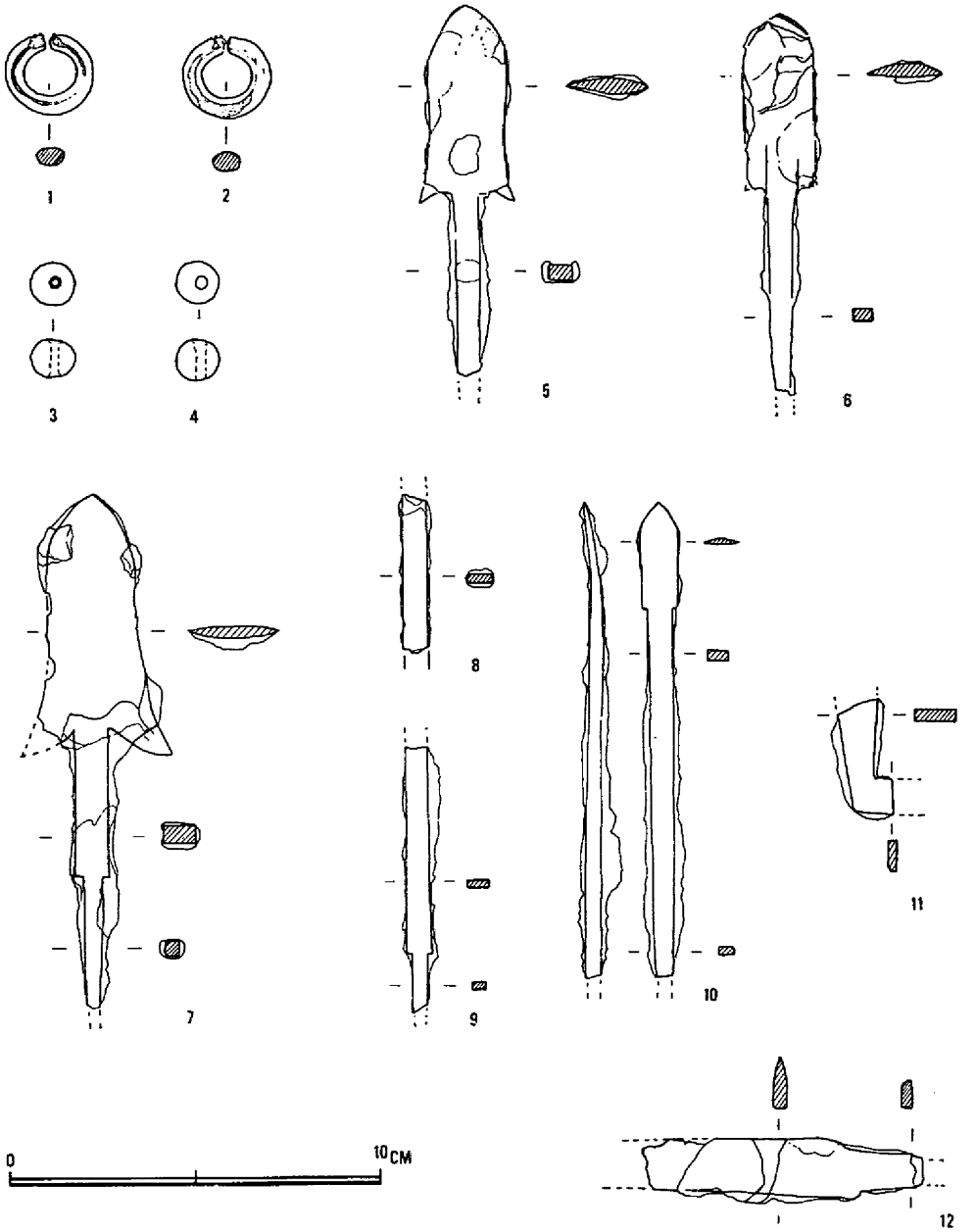


第30図　3 号 墳 出 土 土 師 器（$\frac{1}{2}$）

cm前後，推定口径11.4cmを測る。全体的に丸味を帯び器壁に凹凸が少なく，体部は深い。立ちあがりは細く内反する。立ちあがりから体部にかけてはヨコナデ調整，底部はヘラケズリを施し後にナデ調整で仕上げている。胎土は精良で，焼成良好，内面は灰色，外面は自然釉がみられ暗灰褐色を呈する。ろくろの回転方向は不明である。14は器高4.2cm，口径12.9cmを測る。立ちあがりは細く直立し，端部は段状をなす。受部は短く水平に近い。立ちあがりから体部半ばにかけてはヨコナデ調整を行い，底部は4回の回転ヘラケズリを行っている。内面底部は任意ナデ調整，立ちあがりにかけてはヨコナデ調整を行っている。胎土は石英・長石を多く含み不良であるが，焼成良好，灰青色を呈する。

15は脚部を欠失する高杯で，残存高約8cm，杯部口径13.7cmを測る。2号墳出土高杯と比べ杯部は深く，脚円筒部の器壁は薄手である。杯部上半はヨコナデ調整で仕上げられ，下半より脚接合部まではヨコナデ調整，底面は任意ナデ調整で仕上げられている。脚接合部より脚円筒部にかけてはヨコナデ調整で仕上げられている。胎土は粗砂が多いが焼成良好で，灰青色を呈する。

16はやや小形の提瓶で，器高18.8cm，口径6.2cm，最大体部径14.6cm，体部厚さ10cmを測る。肩部



第31図　3号墳出土金環・玉・鉄器（$\frac{1}{2}$）

には丸味を帯びた鉤形の耳がとりつけられている。口縁部より頸部にかけてはていねいなヨコナデ調整が行われ，体部前面・後面には回転カキ目調整が行われている。頸部は弧を描いて外反し，口縁部は凸帯様に肥厚し一条の沈線がめぐる。口縁端部はやや下方に垂れる。体部は前面が丸味をもってふくらみ，後面はやや平らである。内面は完形品であるため細部にわたる観察は不可能であるが，回転を利用したナデ調整を体部内面にみることができる。体部前面部分の内部中央には成形時の穿孔を円盤でふさいだ痕跡がかすかにみえるが孔径は正確には不明である。小形品ではあるが，端正な形状を示し精巧な調整が入念に施されている。胎土は粗砂を若干含むも精良で，焼成は極めて良好，灰青色を呈する。水容量は約1ℓである。ろくろは時計逆まわりの回転方向を観察することができる。

以上個々の須恵器について所見を述べた。型式差・時期差があることは出土状態からも知られるが，初次埋葬期と推定されるものは4・10・14・16があげられる。また追葬期から埋葬終期にかけては2～3・5～7・9・11～13・15，1・8にそれぞれ推定することができよう。

② 土師器（第30図，図版29）

1は椀で器高5.1㎝，口径11.3㎝を測る。ほぼ半球形を示す。口縁部外面周縁はヨコナデ調整が行われ，体部上半より下半にかけてはヨコハケナデ調整，底部にかけては任意の荒いハケ調整を行っている。口縁端部は丸味をもって終る。体部内面は全面にわたってていねいなナデ調整が行われ，極めて滑らかに仕上げられている。胎土は微砂を含む精良粘土で，焼成は普通，茶褐色ないしは明るい赤褐色を呈する。

2～5は高杯である。2は3～5と趣を異にし，出土状態では3～5よりも後に副葬されたと思われる。3～5は東側壁の須恵器の一群と近接して出土している。4は提瓶体部に杯部がおおいかぶさるようにして出土した。

2は器高9.8㎝，杯部径12.75㎝，脚端径8.25㎝を測る。杯部は椀状の丸味を持ち，弧を描きながら内反する。脚部は杯底部の中央に接合され，直線的に外反しつつ扁平な脚端部へ急激に開く。杯部はていねいなヨコナデ調整が行われ，底部より脚円筒部上半より縦方向のヘラミガキを施し，平坦な脚端部はナデ調整で仕上げられている。杯部内面はハケナデ調整を施し，底面はていねいに任意ナデ調整を行い滑らかである。脚円筒部内面は横方向のヘラケズリを行い，端部はヨコナデ調整で仕上げている。胎土は雲母微砂を含むほか目立った砂粒は全く含まず精製された粘土を用いている。焼成は良好で，明るく白っぽい膚色を呈する。

3～5は同質・同形の高杯である。杯部は皿状で脚端はラッパ状に開き脚円筒部は中実である。3は最大器高11.4㎝，杯部径15.6㎝脚端部径11.4㎝を測る。杯部は焼けひずみ傾いている。口縁部近くはヨコナデ調整が施されるが，上半より脚端にかけては縦方向の荒いハケナデ調整がみられる。杯部内面は全面任意のナデ調整で仕上げている。脚部内面はヘラケズリで脚端部中実粘土を削りとり，その後ナデ調整を行っている。胎土は微砂・粗砂（特に石英・長石）を多く含み精良ではないが，焼成は良好で赤褐色を呈し，比較的固質である。全面にわたって器壁の剝落がみられる。4は器高10.35㎝，杯部径14.05㎝，脚端部径9.1㎝を測る。成形技法・調整は3と同様であるが，全体的にやや明るいオレンジ色を呈する。部分的に赤味を帯びた膚色を呈する。5は器高10.3㎝，杯部径14.45㎝，脚端部径10.9㎝を測る。成形技法・調整は3・4とほぼ同様であるが，レンガ色ないしは赤褐色

を呈する。3・4に比べ脚端部径が大きく安定感がある。

③ 金　　環（第31図-1・2）

1・2いずれも鉄地金銅張である。開きは1が0.5㎜，2が1㎜である。縦径は1が2.2㎝，2は2.15㎝を測り，横径は各々2.39㎝，2.32㎝を測る。いずれも錆の浸入と剝落が部分的にみられるが遺存状態は比較的良好である。色調はむしろ銀色に近いものである。1・2は若干出土レベルが異なるが，対として副葬されたと考えられる。

④ 丸　　玉（第31図-3・4）

1は流紋岩製で径1.15㎜を測り，ほぼ球形を呈する。孔は中心よりややずれた位置に，上下方から穿たれ上端3.5㎜，下端3㎜を測る。褐色を帯びた乳白色を呈し滑沢である。

2は凝灰岩製で径1.2㎜を測る。孔はほぼ中心に穿たれ，上下端共に2.5㎜を測る。やや白味を帯びた赤褐色を呈する。

⑤ 鉄　　鏃（第31図-5～9）

5～7は有茎広根式で5・6は第28図に図示したように，初次埋葬面に近いレベルで出土している。7は玄室埋積土中より出土した。いずれも腸抉式であるが，端部・茎部を欠失している。5は鋒全復元長4.7㎝，最大幅約2㎝を測り，下面がやや平らである。茎部は残存長5.4㎝，幅5.5㎜を測り断面は長方形を示す。6は鋒復元長5.4㎝，最大幅2.4㎝を測り断面は凸レンズ状を示し，5よりもやや広鋒である。茎部は残存長4.7㎝，幅6.5㎜を測り断面は長方形を示す。7は鋒復元全6.9㎝，最大幅2.4㎝を測り，腸抉部は最大幅4㎝を測る大型品である。鋒部と茎部の間には約4㎝の篦被ぎがあり，幅9㎜を測り，断面長方形を呈する。茎部は残存長3.5㎝を測り，やや丸味を帯びた方形を示す。

8・9はいずれも鉄鏃の茎部と思われ，9には篦被ぎ部分を残す。

10は鉇で，残存長12.7㎝，刃部幅1㎝，刃部長2.9㎝を測る。茎部は刃部より端部にむかうにつれ先細りとなり断面は長方形を呈する。反りは刃部下方に始まり4㎜を測る。

11は不明鉄器片で玄室埋積攪乱土中より出土した。ほぼ直角に曲折し，曲折部より上方に外方に幅が広くなる。断面はいずれも長方形を示す。

12は刀子片で残存長7.6㎝を測る。刃部最大幅1.5㎝，茎部1.1㎝を測る。鉇と同様，玄室内埋積土中より出土したものである。

鉄器は総じて錆化が進行し，観察が不十分なものもある。また，出土状態が明らかに原位置を保つとみられるものが少量で，埋葬過程の変遷の中の位置付け，他の遺物との共伴関係は把握しがたい。ただ，鉄鏃は1号墳出土のものと同型式であるところから6世紀後半～末期の副葬品と推定される。

第2節　第4号墳の調査

古墳の位置と構造（第2図，図版11）

丘陵発掘区のほぼ中央部に位置する。当初，地形の観察及び地形図の検討から前方後円墳の可能性があるのではないかという推察のもとに発掘を始めた。先ず，墳丘端部を検出確認するために等高線に直行するトレンチを設定し，稜線より約8m下降した位置で段状の遺構の検出によって墳端の下限と推定した。更に墳丘の表土除去作業を進め，はからずも多数のシストが確認された。主体部は後円部と推定される地点に存在し石材が整然と囲繞し，竪穴式石室あるいは比較的大きなシストではないかと推察していた。更に前方部と推定される位置にはシストが存在することを確認した。これらのシスト群は，後円部主体部から約10m以上離れ，くびれ部にあたる地点から前方部の東西斜面・南斜面に位置する。

段状遺構は幅約1m～1.5mを測り，丘陵を断続的にめぐり，あたかも個々のシストへのあるいはシスト群への墓道ともいうべき性格が推定される。

墳丘表土の除去の終了と同時に，あらためて墳形の検討を行ったが，当初の前方後円墳と断定する根拠は乏しく，主体部をとりまく小円丘を独立墳とする妥当性を結論としているという他，築成時期を示す有力な手がかりは得られなかった。

主体部は地山をほぼ長方形に深さ約10cm，掘りくぼめた後構築したものである。封土の大半は消失し外部施設は確認できなかった。

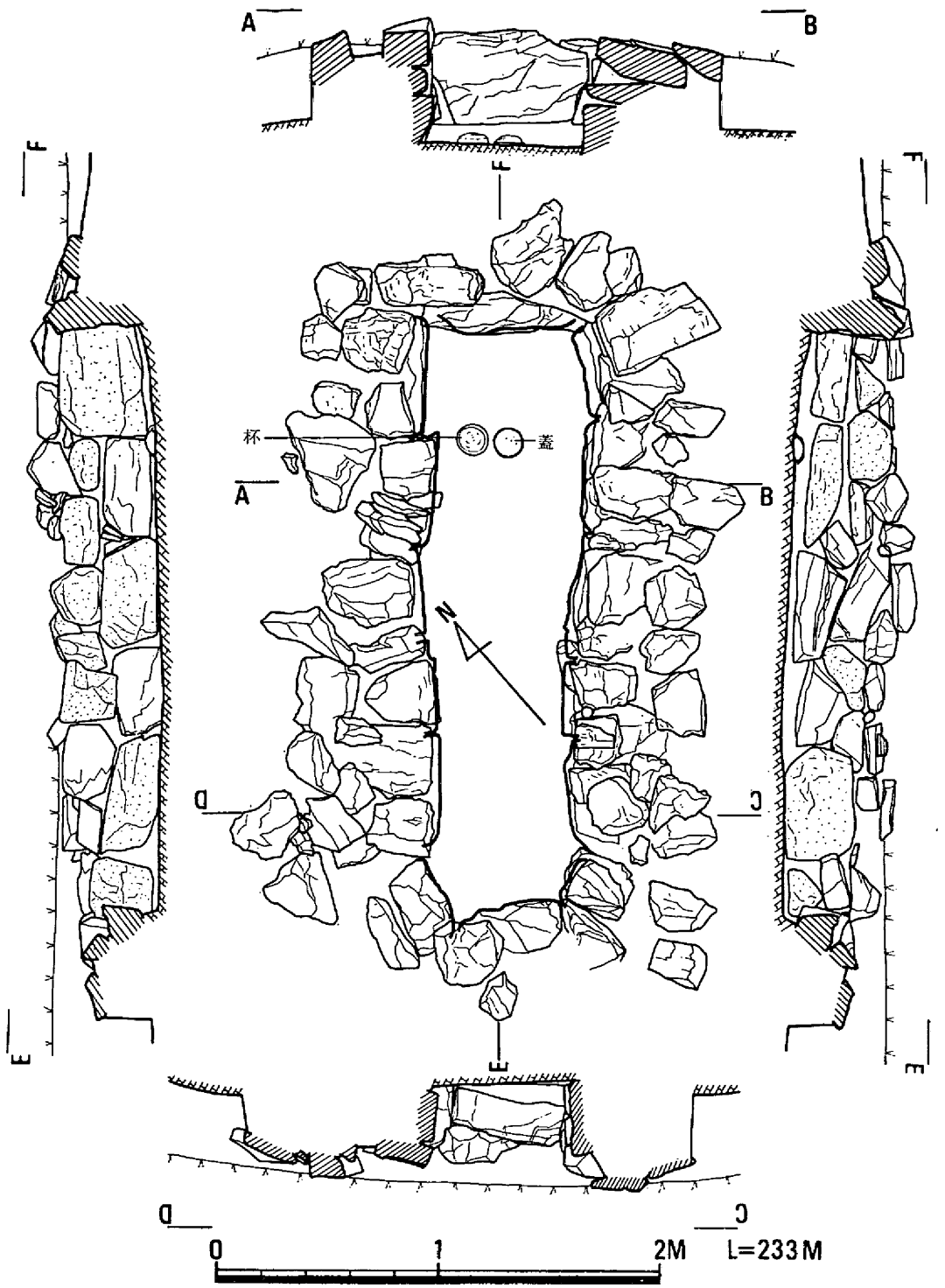
内部構造（第32図，図版11）

すでに主体部とみられる石材露出しており，天井石と考えられる石材は認められず，竪穴式石室あるいは比較的大きなシストではないかと推定していた。石室内法は長さ2.6m幅60～70cm深さ20～40cmを測る。やや北東側が広い長方形プランを呈しており，主軸は丘陵線よりやや東により北東から南西方向を示す。（頭位はN45°E）石室周囲には，裏込めの石を有する。石の大きさは最大70cm×40cm×20cmで北東壁に使われている。最小15×10×10cmで裏込め石に使われている。その他一般的な大きさは30×20×10cm程度で側壁・南東小口・裏込め石に使われている。角礫を主としているが，円礫も含まれている。石質は付近の山塊によくみられる石材を用いている。

丘陵頂部の地山を削って平坦面を作った後に，約10cm掘り窪めたのが床面になっている。石室の小口は，北東側が横穴式石室の奥壁を思わせるような最大の石1個を立てている。南西側は閉塞石の如く，側壁と同程度の石を使い，床面から10cm浮いている。側壁一段目は両壁とも6個の石の横口あるいは広口を使っている。2段目，3段目は横口積みしている。上段ほど石は小さくなる。

遺物出土状況

奥壁から約50cmの位置に須恵器杯身・杯蓋が1個体ずつセットで，奥壁と平行に並べられている。杯身は伏せているので枕にしたものであろうか。その他石室南付近から須恵器杯蓋片が出土した。これらは細片であるが，東谷第1トレンチより出土した古式に属する須恵器（第45図-1・2）とほぼ同時期，ないしは若干遡る可能性がある。



第32図　4号墳竪穴式石室　平面図・展開図（1/30）

遺　　物（第45図1・2，表4，図版31）

前述の完形品2点の蓋，杯以外副葬品は全く出土していない。

小　　結

出土遺物が須恵器のみで，豊富な副葬品は全く埋葬されていない。時期的には6世紀中葉と考えられ，土壙墓と近い時期に埋葬されたものと推定できる。天井石が遺存せず，周辺でも確認できなかったがそれが盗掘によるものか，古い時期に持ち去られたのか定かではない。石室付近で5世紀末の須恵器片が出土している点から追埋葬＝石室の再利用という可能性も否定できない。

第3節　シストと土壙墓の調査

本遺跡では，11個のシストと1個の土壙墓を検出した。シストは大半が丘陵の東西斜面にあって竪穴式石室を遠巻きにしている。特異なものは東側の谷底にある。これは2例（7号・10号）である。完全に天井石まで残っているものは2例（6号・11号）である。石が数個しか残らずシストとやっと判断し得るものもある。床に板石を敷いているものが多く，小豆大の砂利を敷くもの（2号）も見られる。須恵器を副葬しているもの（4号・6号）があり，3～4個で杯蓋・杯身である。6世紀後半に比定できるものである。土壙墓はやはり竪穴を意識しているのか20m位離れている。6世紀中葉の須恵器を副葬している。以下各シスト・土壙墓について報告していきたい。

（1）　1号シスト（第33図，図版12）

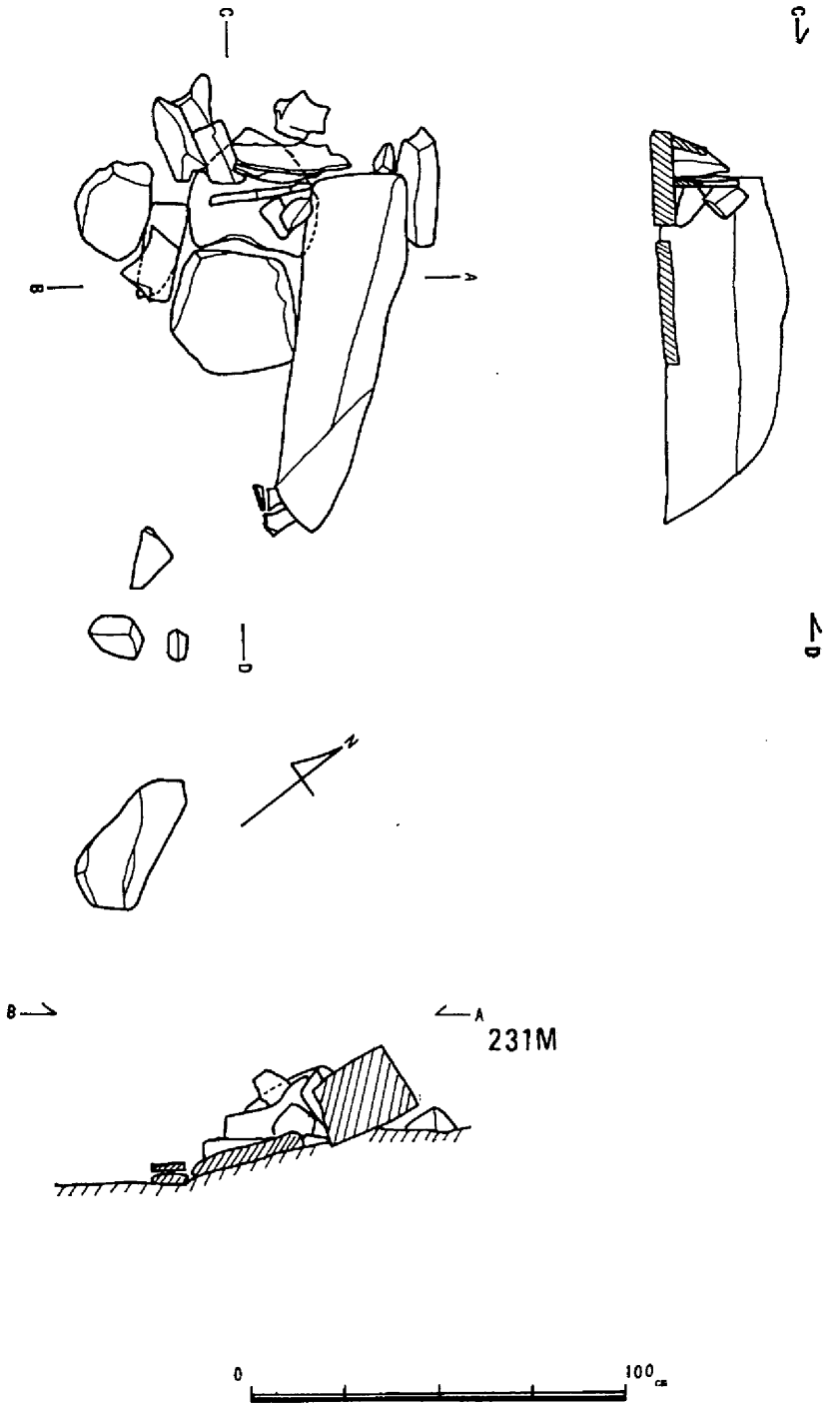
丘陵線上に位置する。主軸は稜線とほぼ直交し，北西から南東に伸びる（頭位はN45°W）。地表に石材が露出していた。側壁1個と小口及び床石2枚が残存しているだけである。現存の内法は，長さ1m，幅45cm，深さ20cmを測る。側壁は長さ1m厚さ25cm高さ20cmの長細い大石を使い，小口と床には縦30cm横30cm厚さ5cmの平石を使っている。掘り方は検出できなかった。遺物は出土しなかったが，時期は6世紀後半と考えたい。

（2）　2号シスト（第34図，図版12）

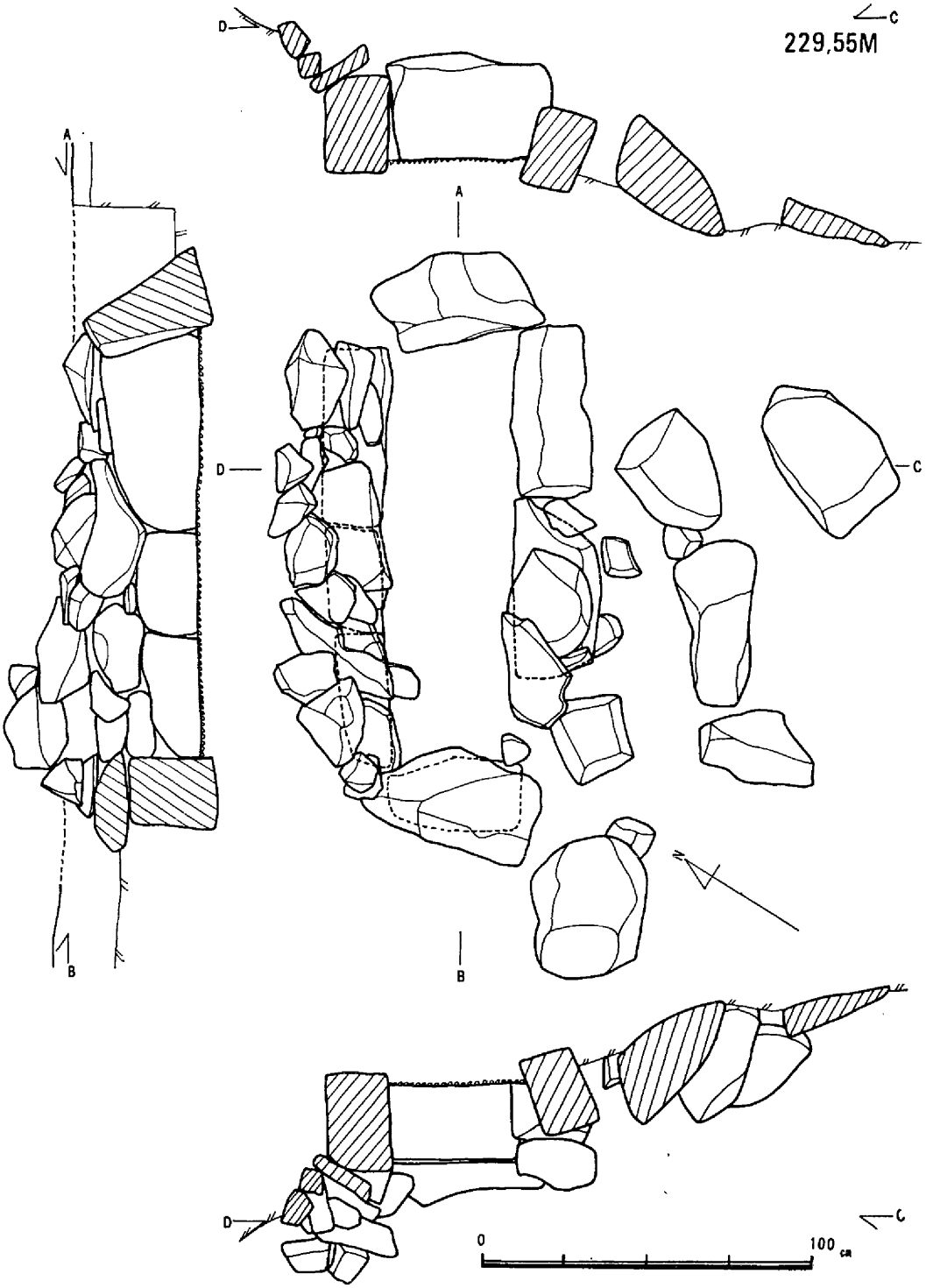
丘陵の東側急斜面に位置する。主軸は等高線と平行し，北東から南西に伸びる（頭位はN30°E）。現存石棺内法は，長さ130cm，幅43cm，深さ最大60cmを測る。掘り方は検出できなかったが，斜面を掘り窪めて平坦面を造ったものと考えられる。床には豆粒大の川砂利を薄く敷いている。この遺跡での他のシストには見られない所である。側壁は，1段目が大人二人持ち大から人頭大の石3個の広口を並べ，2段目・3段目は人頭大から小児頭大の石を横口積みしている。斜面上方の側壁の残りがよい。小口は，北東の石が南西の石よりやや大きい。遺物は出土しなかったが，時期は6世紀後半と考えたい。

（3）　3号シスト（第35図，図版13）

丘陵の西緩斜面に位置する。主軸は等高線と平行し，ほぼ南北に伸びる（頭位はN175°E）。現存



第33図　1号シスト平面図・展開図（1/20）



第34図　2号シスト平面図・展開図（1/20）

石棺内法は，長さ90cm，幅30cm，深さ50cmを測る。小児棺と考えられる。側壁は，最下段に３個の柱状石を並べ，２・３段目に人頭大から大人一人持ち大の石を横口積みしている。斜面上方の残りがよい。小口は，南側には（20×30×10）cm³の板石１個，北側には小児頭大と人頭大の石を２個使用している。床面には大人の手の平大から小児手平大の平石を敷きつめ，南側が大きい。したがって南側が頭部と考えられる。遺物は出土していないが，時期は６世紀後半に比定したい。なお，掘り方は検出できなかった。

（４） ４号シスト（第36図，図版13）

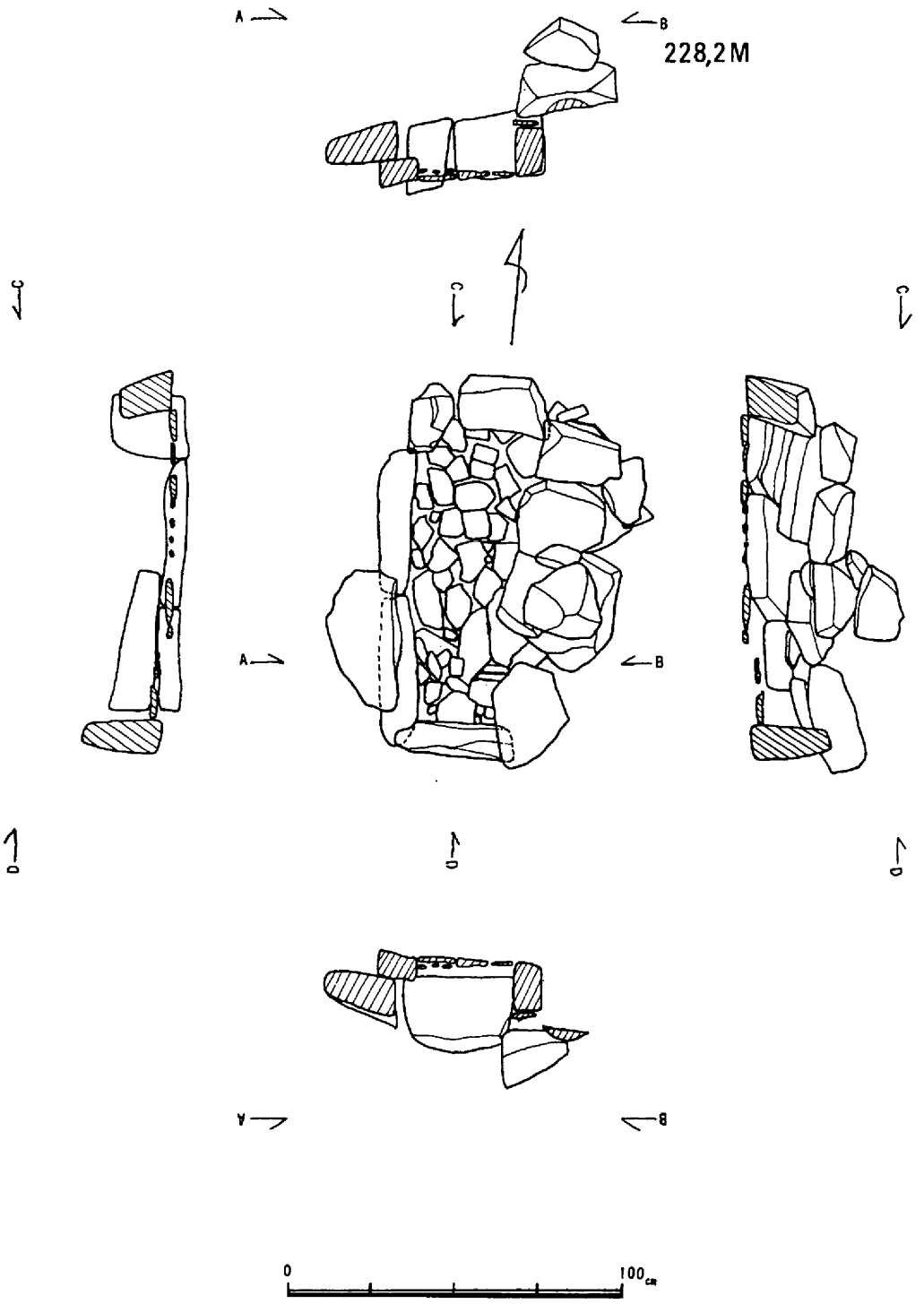
３号シストの北約２ｍの位置で，３号シストと同一レベルで検出した。主軸は北北東から南南西に伸びる（頭位はＮ160°Ｗ）。側壁は最下段に各４個の大人二人持ち大の石を広口に並べ，２・３段目には人頭大の石を横口積みしている。小口は，南側に大人二人持ち大の石１個の広口を使い，北側よりもやや高く，２・３段目は側壁と同じ横口積みしている。床面には30cm四方以下の板石を敷きつめ，南側がやや大きめの石を使っている。遺物は，頭部と思われる南隅に須恵器杯・蓋（第45図３～６，図版31，表４）が各２個枕状に重ねられて出土した。掘り方は検出できなかった。現存石棺内法は，長さ２ｍ，幅65cm，深さ60cmを測る。時期は，副葬されていた須恵器からみて，６世紀後半に比定したい。

（５） ５号シスト（第37図）

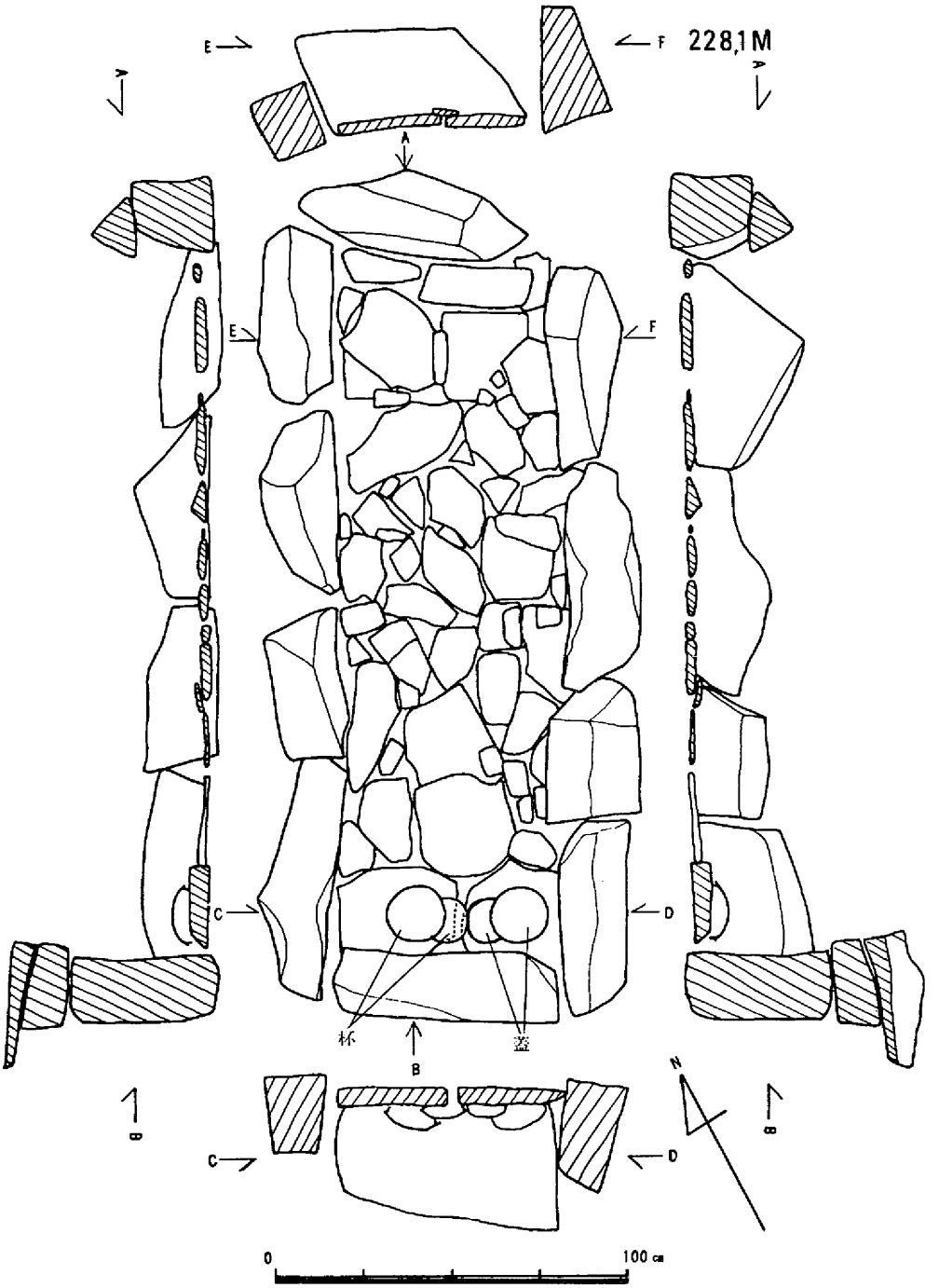
丘陵線上の南斜面にあり，１号シストから約10ｍ離れた位置で検出した。きわめて残存状態が悪い。小口・両側壁が残る。石材の大きさは，45×20×20cm³である。主軸は北東から南西に伸びる（頭位はＮ30°Ｅ）。現存石棺内法は，長さ45cm，幅40cm，深さ20cmを測る。掘り方は検出できなかった。時期は，近辺から採集した須恵器片１点とシストの形態から他のシストと同じ６世紀後半に比定したい。

（６） ６号シスト（第38・39図，図版14）

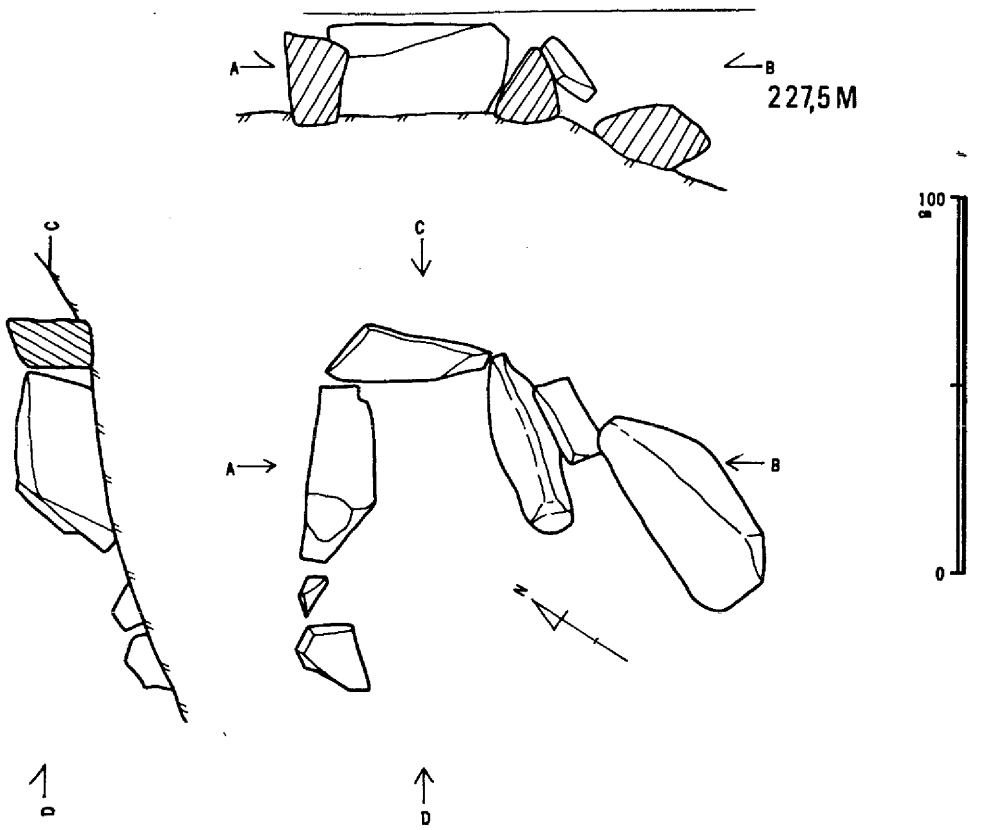
丘陵西斜面にあり，３号シストの南約１ｍ離れて検出した。非常に遺存状態が良好で，土層観察から盛土していることが分かる。大人二人持ち大の石４個を蓋石とし，すき間を拳大の石でつめているため土の流入はほとんど見られなかった。主軸は，ほぼ南北に伸びる（頭位はＮ175°Ｗ）。石棺内法は，長さ１ｍ，幅20～30cm，深さ25～30cmを測る。小児棺と考えられる。側壁・小口はやや持ちおくりになっている。東側壁の最下段は，人頭大の石２個と長さ30cmの柱状の石３個及び拳大の石を使っている。西側壁の最下段は長さ20～35cmの長細い石４個を使っている。２・３段目は，拳大から大人二人持ち大の石までを使って横口積みしている。小口は２段積んでおり，南側がやや大きな石を使っている。床面には，30cm四方から５cm四方の板石を敷きつめ，南側に大きな石を使っている。遺物は須恵器杯１・（蓋２個第45図７～９，図版31，表４）が南端に伏せた状態で副葬されている。蓋は２個重ねられていた。南側が頭部であることが明らかである。時期は，須恵器からみて，６世紀後半



第35図　3号シスト平面図・展開図（1/20）



第36図　4号シスト平面図・展開図（1/20）



第37図　5号シスト平面図・展開図（　　）

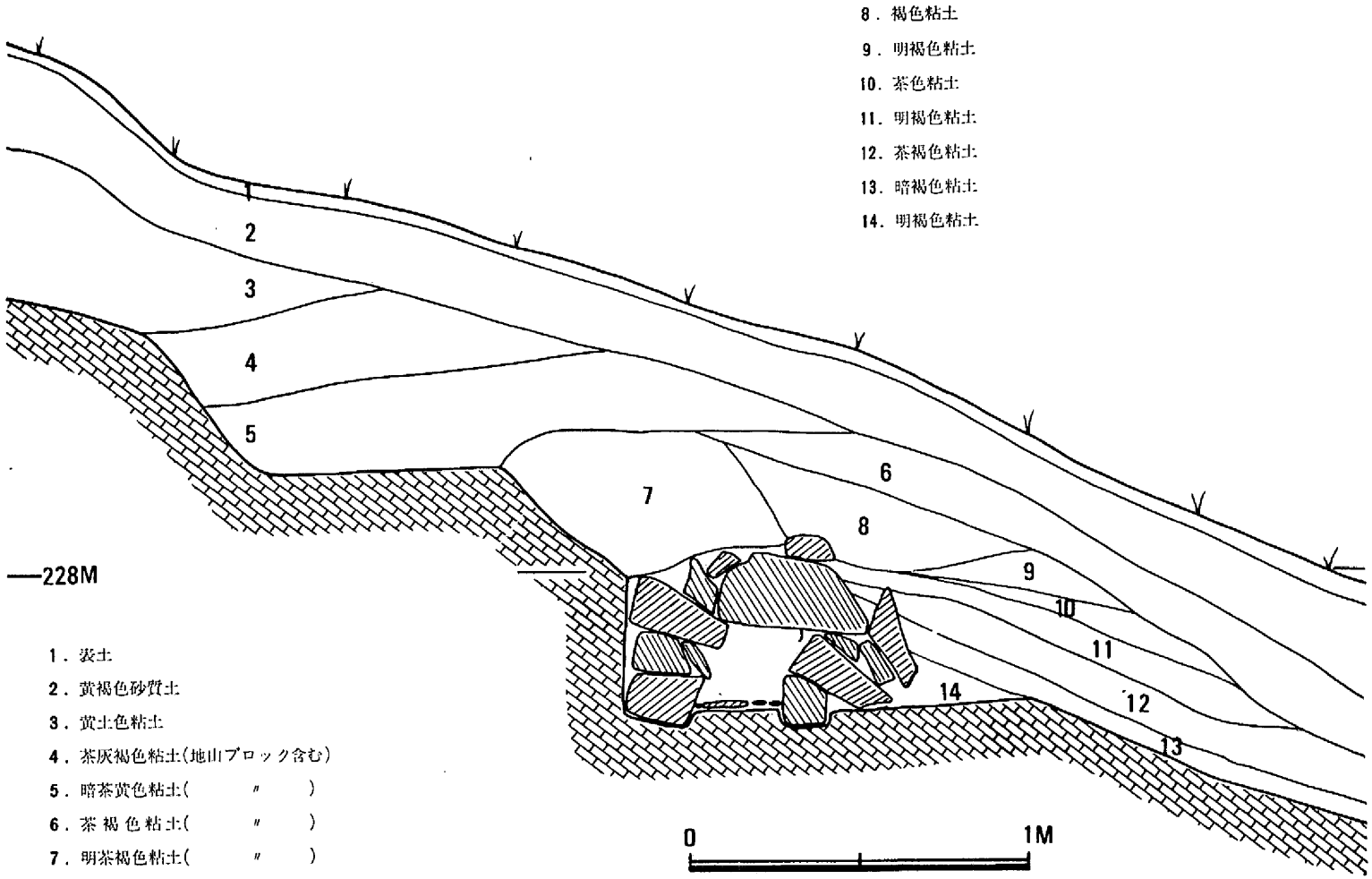
に比定したい。なお，掘り方は，石の外側いっぱいである。

（7）　7号シスト（第40図，図版15）

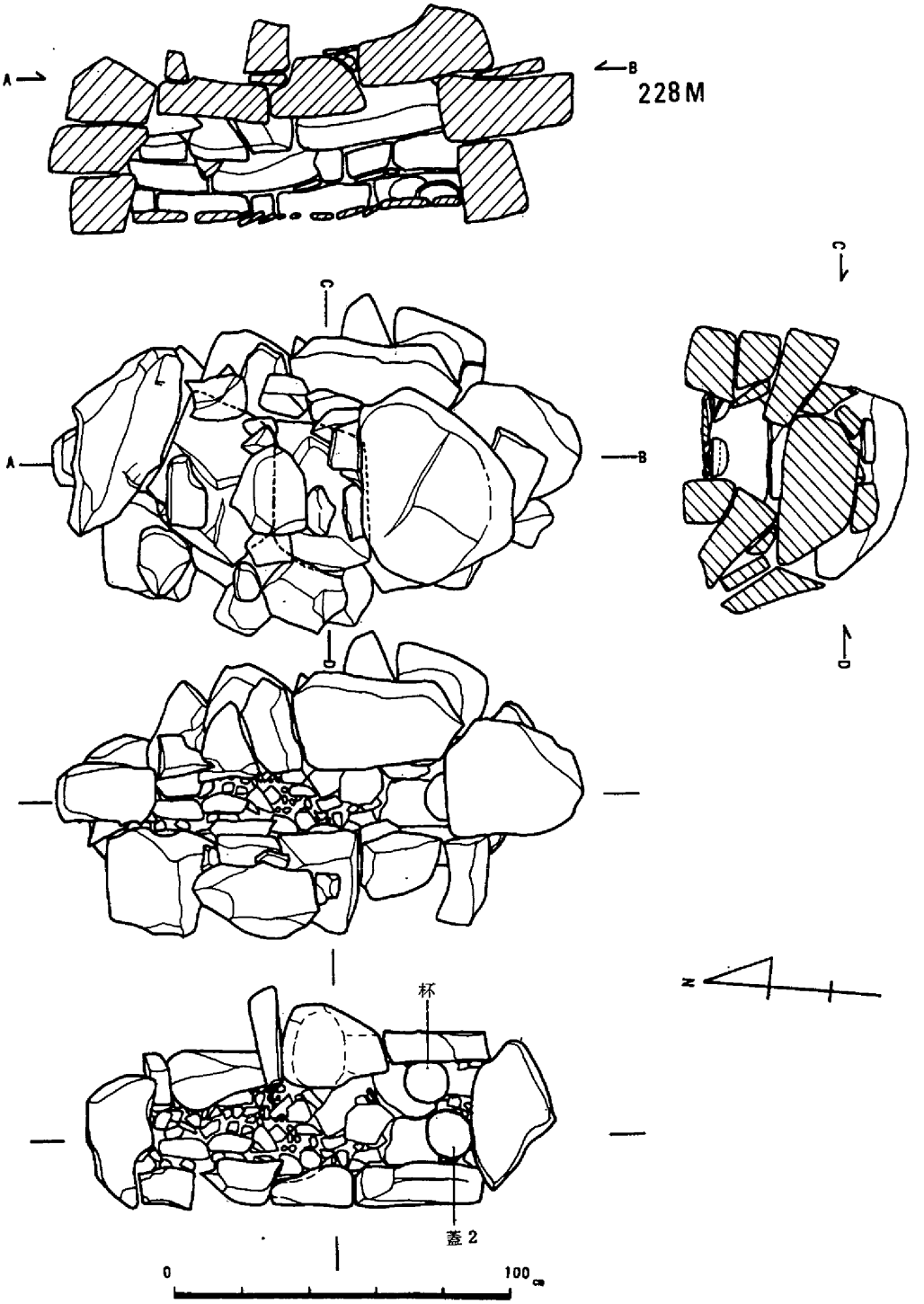
東谷区北部の谷頭で検出した。主軸は北東から南西に伸びる（頭位はN50° E）。石棺内法は，長さ180cm，幅35cm，深さ20cmを測る。蓋石が2個残っている。側壁は，3～4個の石の広口を使用して1段だけである。小口・側壁に使っている石の大きさは，ほぼ同じ大きさで（60×20×20）cm³程である。床面には20cm四方の板石を敷きつめ，中央の石がやや小さい。他のシストが斜面か稜線上にあるのに谷底に見られる点で異なる。時期は，6世紀後半に比定したい。

（8）　8号シスト（第41図）

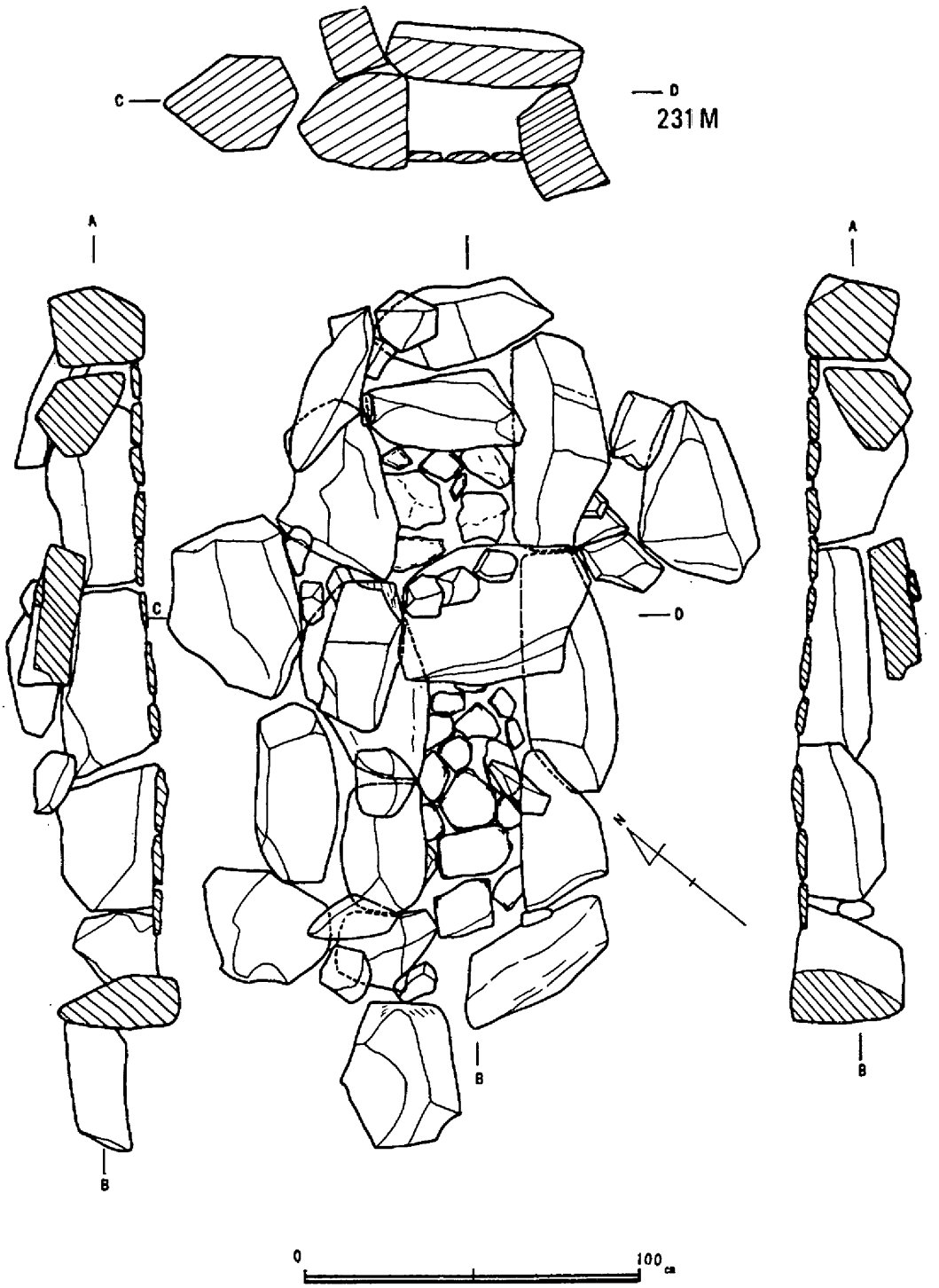
3号窯の南西約1mの緩斜面に，ほぼ窯と同じレベルで検出した。現存棺内法は，長さ30cm，幅25cm，深さ25cmを測る。床面に25cm四方の板石を敷き，3方に（30×30×10）cm³の石が囲む。火葬墓の可能性もある。遺物は見られず時期は不明である。



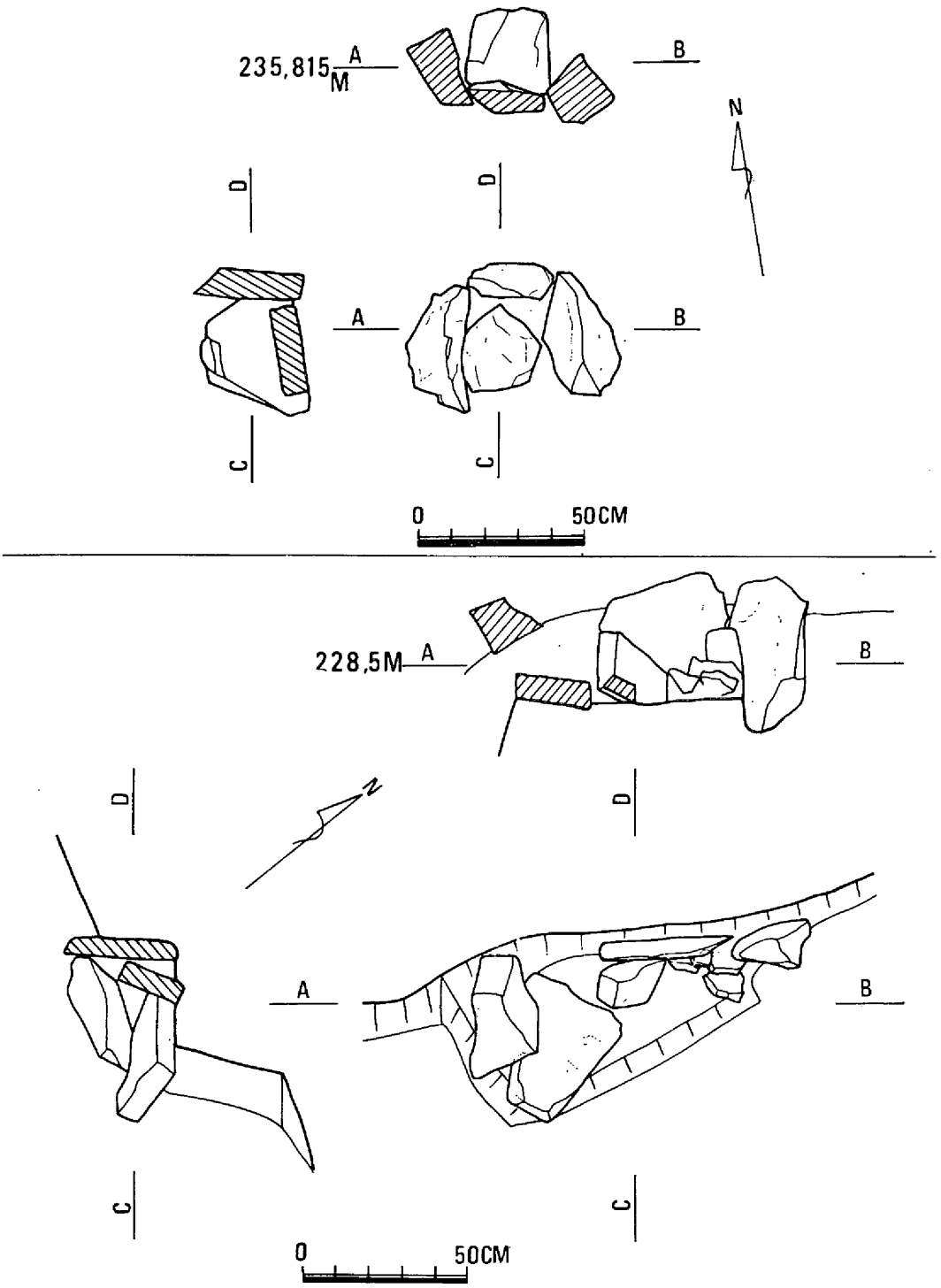
第38図　6号シスト土層断面図（1/20）



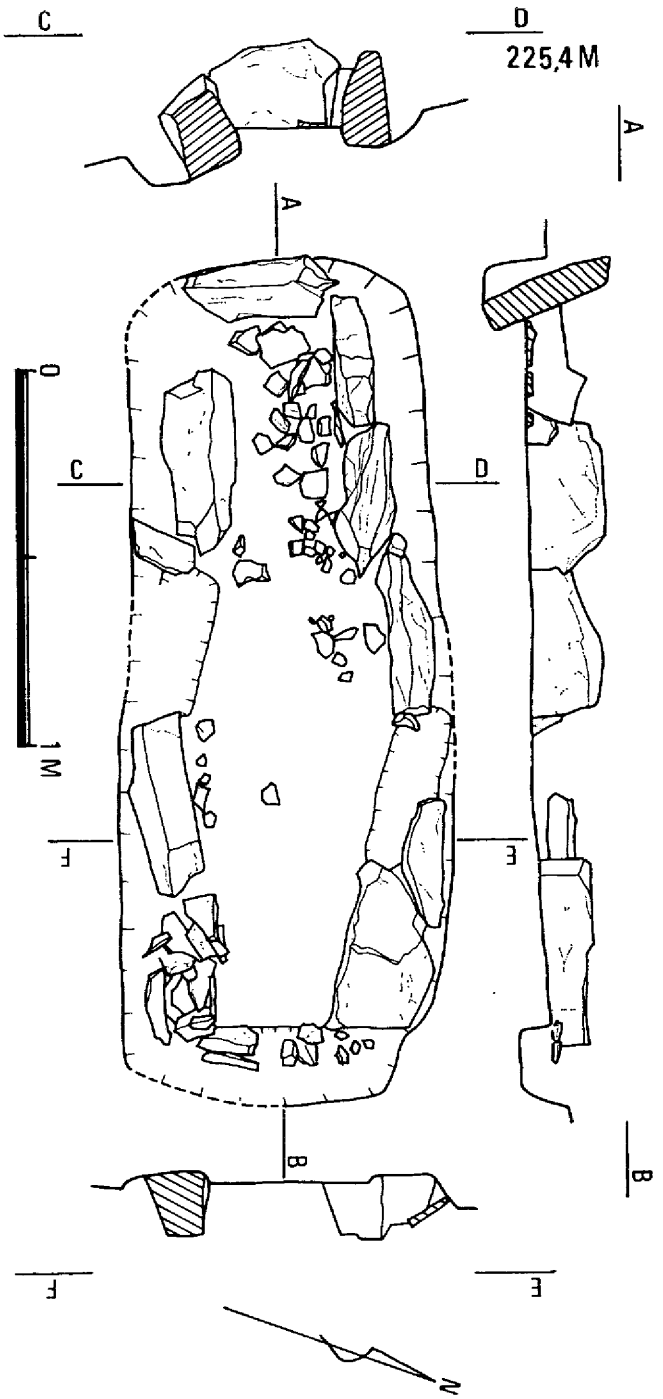
第39図　6号シスト平面図・展開図（　　）



第40図　7号シスト平面図・展開図（1/20）



第41図　8号シスト（上）・9号シスト（下）平面図・展開図（1/20）



第42図　10号シスト平面図・展開図（1/20）

（9）　9号シスト

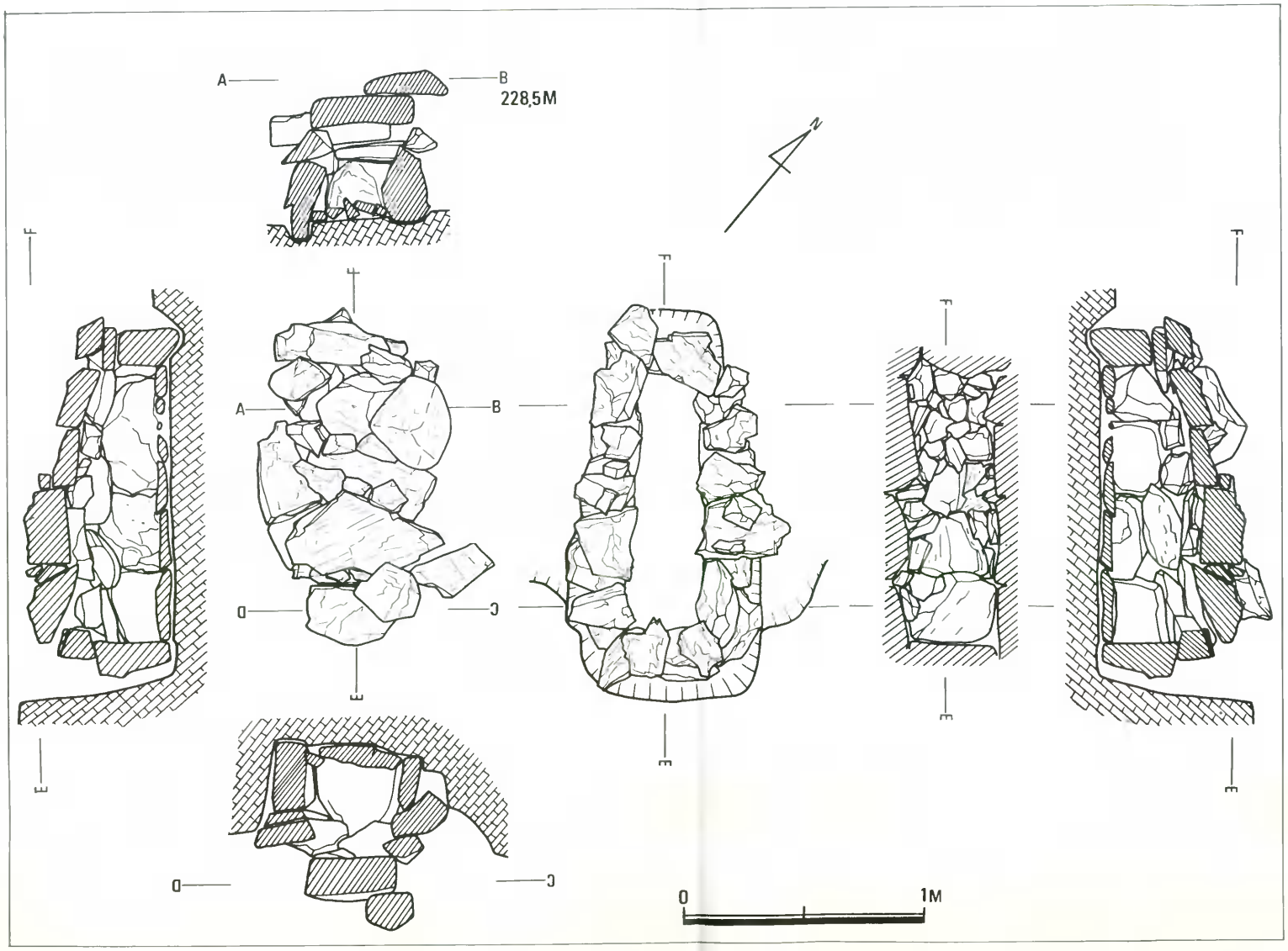
（第41図）

2号シストの北約5m離れた急斜面で検出した。非常に残りが悪い。主軸は，等高線と平行し，北東から南西である（頭位はN150°Wと考えられる）。現存内法は，長さ70cm，幅45cm，深さ50cmを測る。床には板石を敷き，側壁には板石を立てる。時期は，他のシストと同じ6世紀後半に比定したい。

（10）　10号シスト

（第42図，図版15）

東谷区南部の谷底で検出した。主軸はほぼ東西である（頭位はN 95° W）。掘り方は，長さ225cm，幅85cmを測り，隅丸の長方形プランを呈する。石棺の内法は，長さ190cm，幅30～55cm，深さ20cmを測る。石棺の石材の大きさは，大人二人持ち大である。側壁は，北側に5個，南側に4個の石を使う。側壁の石を抜き取った痕跡が認められる。両小口は1個である。床面には手の平大の板石を敷いている。遺物は見られないが，時期は6世紀後半に比定したい。谷底で検出したシストは，7号シストとこのシストの2例である。



第43図　11号シスト平面図・展開図（$\frac{1}{20}$）

（11） 11号シスト（第43図，図版15）

6号シストと1号墳横穴式石室との間で検出した。非常に残りが良い。主軸は，南南西から北北東に伸びる（頭位はN 140° W)。掘り方は，斜面上方を切って水平面を作り，石の幅だけ溝状に掘り窪め，長さ160cm，幅40～60cmを測り，不定形な隅丸長方形を呈する。床面には板状の石を敷きつめ，南側の石は北側よりも大きく30cm四方ある。小口は，南北とも1個の大人一人持ち大の石の広口を使い，その上に人頭大の石を横口積みしている。側壁は，最下段4個で大人一人持ち大の石を使い，2・3段目は人頭大の石を横口積みし，やや持ちおくりになっている。蓋石は，大人一人持ち大から二人持ち大の石を4個使い，すき間を拳大の石でつめている。内部には深さ約10cm程土砂が流入していた。石棺内法は，長さ110cm，幅30～40cm，深さ30～40cmを測る。南端が頭部で，小児棺と考えられる。遺物は見られないが，時期は6世紀後半に比定したい。

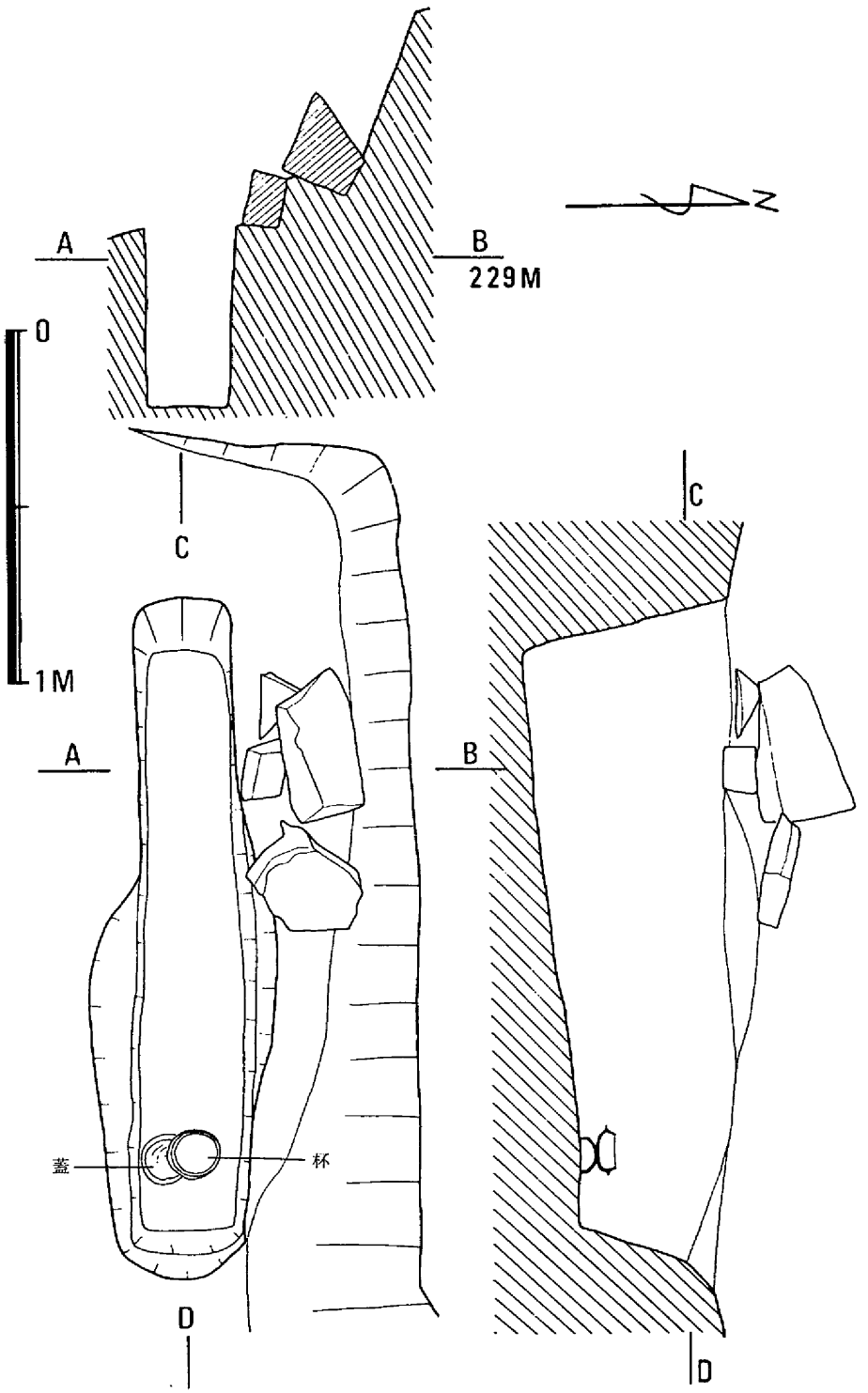
（12） 土壙墓（第44図，図版16）

丘陵の南東斜面にあり，1号シスト・5号シストの間に位置する。主軸はほぼ東西方向である（頭位はN 90° E)。斜面に長さ3m，幅1mの平坦面を作り，その中央部に長さ190cm，幅30cmの長方形土壙を掘り込んでいる。土壙の床面は，長さ165cm，幅20～25cmの不定形長方形を呈す。西側がやや狭い。また西側がやや深く60cm，東側は40cmを測る。土壙の北側に4個の人頭大から大人二人持ち大の石が検出されたが，1号シストの石材が落下したものか，蓋石であるのか不明である。

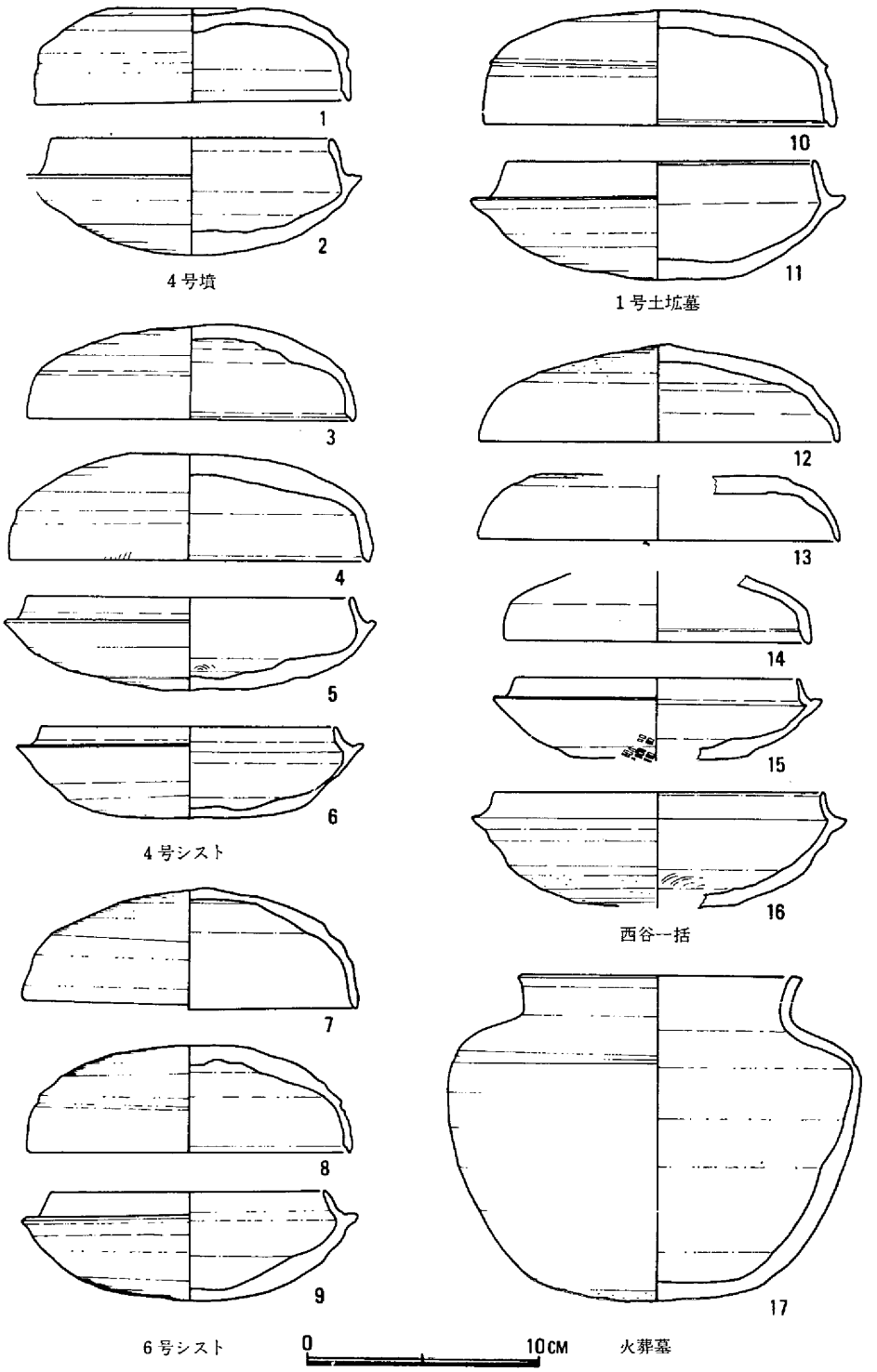
遺物は，土壙東端の床面に，須恵器杯と蓋（第45図10・11，図版31，表4）が一部重なって副葬されている。この須恵器からみて，時期は6世紀中葉に比定したい。

＜遺　物＞

シスト・土壙墓より出土した須恵器は，杯身4点，杯蓋5点ある。第45図，図版31，表4を参照されたい。



第44図　土壙墓平面図・断面図（1/20）



第45図　各遺構出土須恵器（$\frac{1}{3}$）

表4　各遺構出土須恵器一覧表

（単位：cm）

器形	図	番号	手法・形態の特徴	口径	器高	備考
蓋	45	1	・天井部と口縁部の境に凹線をめぐらす ・口縁端面は内傾して稜をもつ ・細砂粒を少し含み，焼成良好，灰色～灰褐色	13.5	4.0	完形 4号墳 6C中葉
杯	45	2	・たちあがり端部に面を残す ・受部は水平にのび端部はやや丸い ・底部ヘラ削りは時計回りである ・粗砂粒を多く含み，焼成良好，灰色	12.0	5.0	完形 4号墳 6C中葉
蓋	45	3	・天井部と口縁部との境は浅い凹線 ・口端部はやや肥厚し，浅い凹線 ・粗砂粒を多く含み，焼成良好，灰色～暗灰色	14.0	3.9	完形 4号シスト 6C後半
蓋	45	4	・天井部と口縁部との境に浅い凹線 ・口端部は丸くおさめる ・粗砂粒を多く含み，焼成不良，黄灰褐色	15.5	4.5	完形 4号シスト 6C後半
杯	45	5	・たちあがりは内傾度が大きく段が付く ・受部はやや上方にのび端部に稜がつく ・底部内面に青海波が残る ・粗砂粒を多く含み，焼成不良，黄灰褐色	14.0	4.0	完形 4号シスト 6C後半
杯	45	6	・たちあがりは大きく内傾し，段が付く ・受部はやや上方にのびて端部の稜はあまい ・3㎜大の小石も含む，焼成不良，灰白色	12.7	3.9	完形 4号シスト 6C後半
蓋	45	7	・天井部の大半を逆時計回りヘラ削りされる ・天井部と口縁部との境に浅い凹線 ・4㎜大の砂粒多く含み，焼成良好，灰白色	14.3	5.0	完形 6号シスト 6C後半
蓋	45	8	・ヘラ削りは逆時計回り ・天井部と口縁部の境には鈍い稜と凹線 ・粗い砂粒を多く含み，焼成良好，青～暗灰色	13.8	4.5	完形 6号シスト 6C後半
杯	45	9	・たちあがりは内傾し，内側に面をもつ ・受部は水平にのび，端部に稜をもつ ・ヘラ削りは底部全面で，逆時計回りである ・粗砂粉を多く含み，焼成良好，灰色～暗灰色	11.8	4.6	完形 6号シスト 6C後半

器形	図	番号	手法・形態の特徴	口径	器高	備考
蓋	45	10	◦ヘラ削りは逆時計回り ◦天井部と口縁部の境は明瞭な稜を有す ◦口縁部はやや開き，端面は内傾し，浅く凹む ◦5㎜大の小石も含み，自然釉かかり，灰白色	14.8	5.0	完形 土壙墓 6C中葉
杯	45	11	◦たちあがりはやや内傾し，端部に沈線 ◦受部はやや上方にのび，端部は丸い ◦ヘラ削りは逆時計回り ◦5㎜大の小石も含み，焼成良好，灰色を呈す	13.1	5.1	完形 土壙墓 6C中葉
蓋	45	12	◦ヘラ削りは逆時計回りである ◦天井部と口縁部の境は不明瞭な浅い凹線 ◦天井部内面に青海波叩き目文が残る ◦砂粒少し含み，焼成良好，灰褐色	15.3	4.1	完形 西谷一括 6C末
蓋	45	13	◦逆時計回りのヘラ削り ◦内面に青海波叩き目文が残る ◦天井部と口縁部の境に不明瞭な浅い凹線 ◦砂粒多く含み，焼成良好，灰褐色	15.3	2.8	$\frac{1}{4}$破片 西谷一括 6C末
蓋	45	14	◦天井部と口縁部の境は鈍い稜しかない ◦5㎜大の砂粒も含み，焼成良好，灰褐色	13.0	2.9	破片 西谷一括 6C末
杯	45	15	◦たちあがりは内傾し，上半部に面をもつ ◦受部は水平にのび上面に1条の凹線 ◦底部外面に格子目叩きが残る ◦5㎜大の砂粒も含み，焼成良好，暗灰褐色	12.0	3.5	破片 西谷一括 6C末
杯	45	16	◦たちあがりは内傾し，端部は丸い ◦受部は水平にのび端部に鋭い稜をつくる ◦ヘラ削りは逆時計回りで底部の大半を占める ◦底部内面に青海波叩き目文が残る ◦5㎜大の小石も含み，焼成良好，暗灰褐色	13.9	4.0	破片 西谷一括 6C末
壺	45	17	◦口端部は外傾する面を有す ◦体部は肩の張りがきつい ◦肩部に明瞭な凹線をもつ ◦砂粒少なく，焼成良好，淡灰色を呈す	12.0	13.8	完形 火葬墓 7C後半 ～8C

第6章　窯状遺構の調査

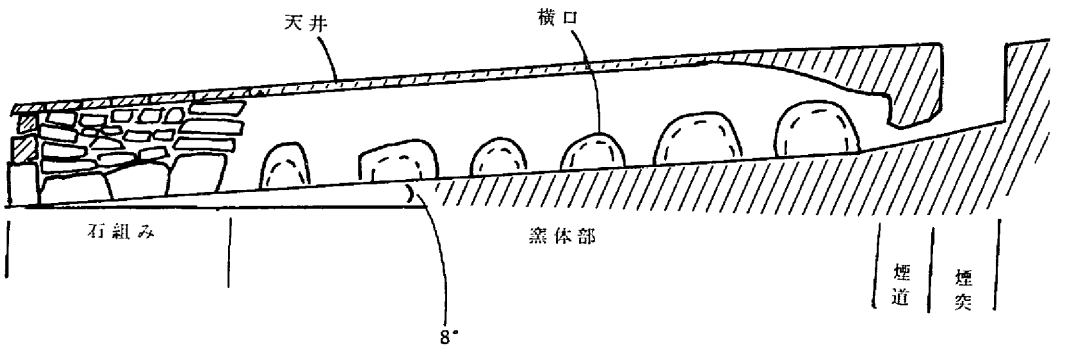
丘陵の東西斜面に丘陵をはさむ様に4基検出した。それぞれ大きさ，形態に特徴がある。共通点は，登り窯状を呈し，煙突・煙道・窯体と横口を有し（第46図），主軸が等高線とほぼ平行することである。また床面の傾斜は10度前後であり，高火度焼成を受け，表面は灰色を呈し，木炭小片・細片以外何ら遺物を伴わない。

異なる点は，排水溝の有無，石組みの有無，平坦面の有無，他遺構との切り合いの有無，地下式か半地下式等である。横口の位置は，煙突に向かって左にあるもの，右にあるものの2通りあるが，これは谷側に開口している点で一致する。（第3図，表5）

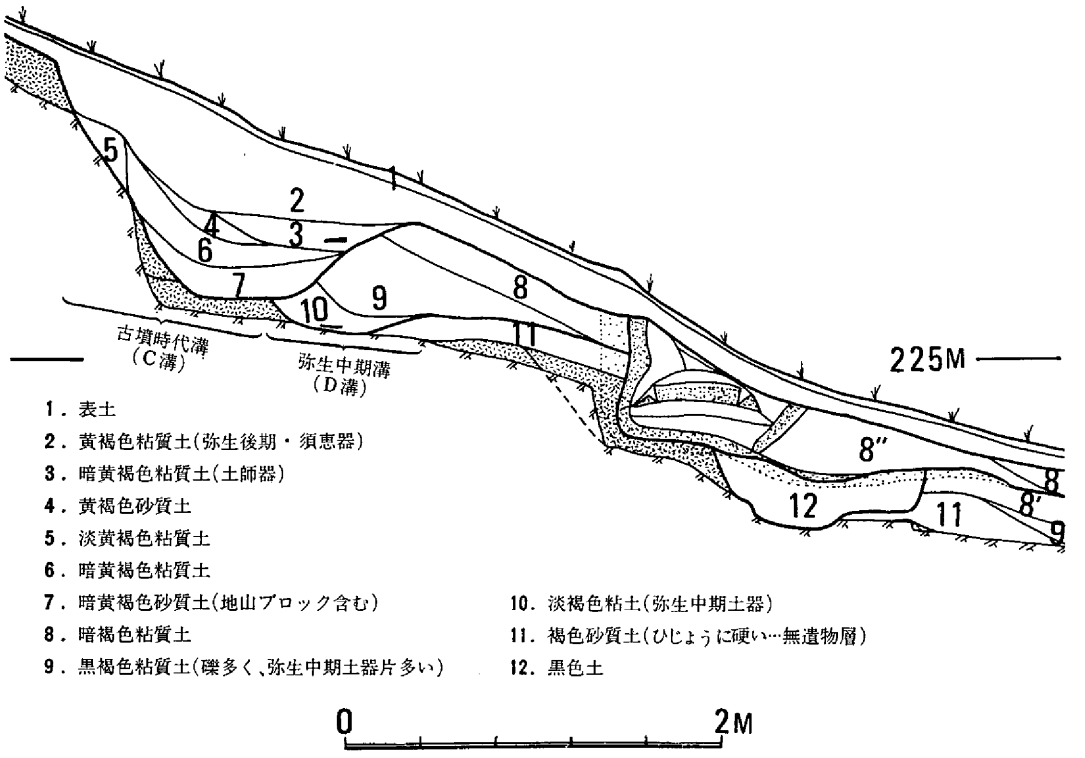
以下各窯について説明していきたい。

表5　窯状遺構一覧表

名　称	全長(現存長)	構　造	床傾斜	遺　物	時　期
1号窯	(8.8m)	煙突・煙道・窯体・横口	8°	な　し	奈　良？
2号窯	(5.9m)	同　上	15°	な　し	平安以前
3号窯	14.6m	同上及び石組み・平坦部	10°	木　炭	6C～8C
4号窯	10.5m	同上　更に排水溝	8°	木　炭	不　明



第46図　窯状遺構模式図（4号窯）



第47図　1号窯及び溝状遺構土層断面図（1/40）

（1）　1　号　窯　（第47・48図，図版17）

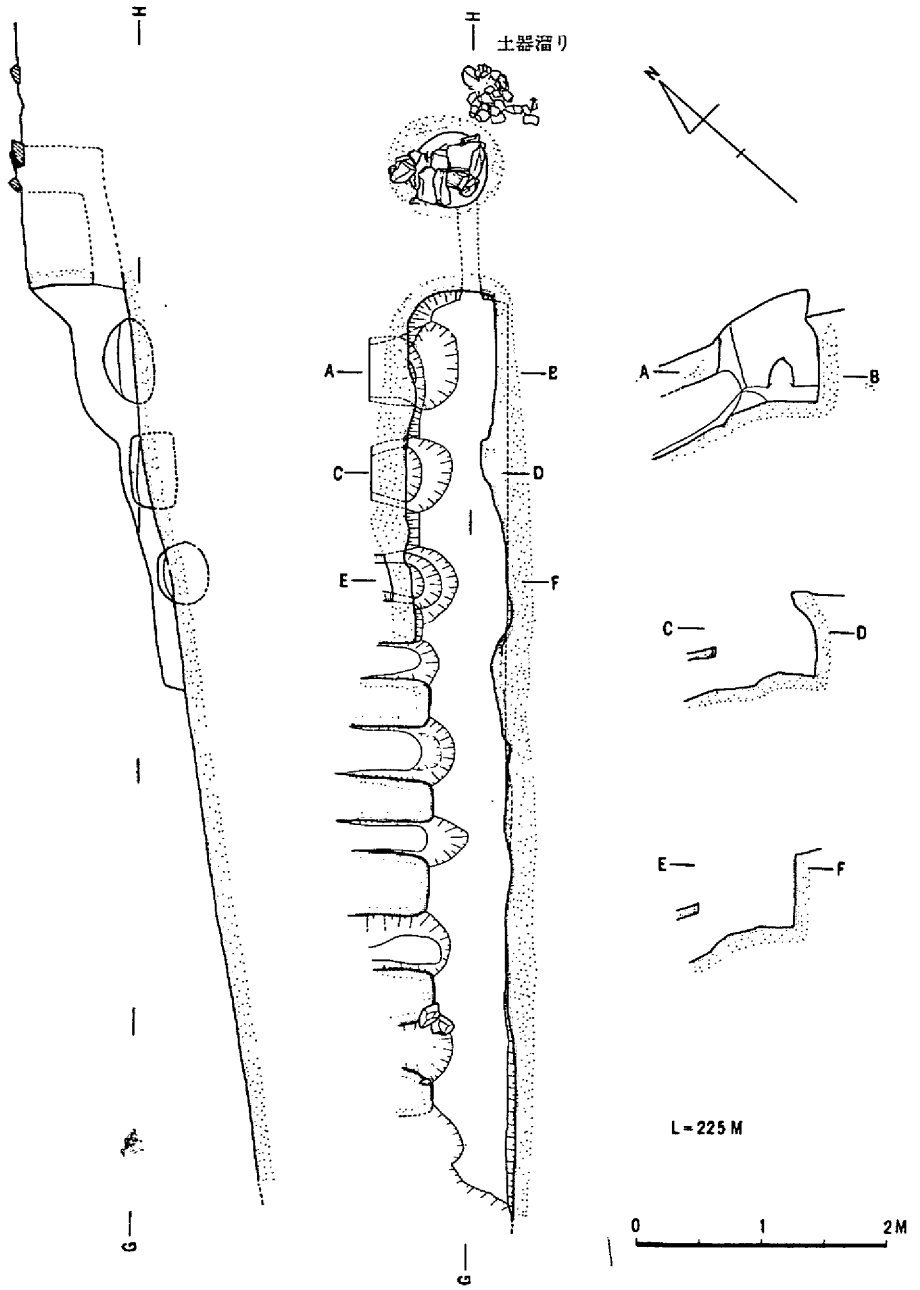
丘陵西側の緩斜面に位置する。主軸は等高線にほぼ平行し，北東から南西方向である。煙突・煙道・窯体・横口から成る。窯全長は 8.8m を測る。

煙突は北東端にあり，直径60cm，深さ70cmの円錐形を示し，人頭大の石で蓋をしている。石も焼成を受け赤褐色を呈している。煙突周壁は灰褐色に焼けしまり，その外側約10cmまで赤褐色に焼成がおよんでいる。

煙道は，長さ60cm，幅15cm，高さ20cmを測り，断面ドーム状を呈している。窯体の底と煙突の底とを傾斜を同じくして結んでいる。傾斜角度は８度を測る。焼成は煙突と同様である。

窯体は，長さ 7.5m，幅60～70cm，高さ 70cmを測り，煙道付近が隅丸になる長方形を呈し，床面の傾斜は８度である。天井部はほとんど残らず，内部に落下堆積している。断面はドーム形を呈していたと思われる。床面は，横口の近くが窪んでいる。

横口は，窯体の長軸に対して直角にほぼ等間隔で貫通しており，その形は内部から見ると円形・方形と不規則である。奥の３個までは天井部が残っているが，他は窪みだけである。大きさは北から長さ40cm幅65cm高さ40cm，長さ40cm幅60cm高さ35cm，長さ25cm幅50cm高さ40cm，長さ50cm幅30cm高さ不明（以下高さ不明），長さ70cm幅 40cm，長さ60cm幅30cm，長さ40cm幅 45cm，長さ25cm幅40cmを測る。



第48図　1号窯平面図・断面図（1/60）

横口は煙突に向かって左側に位置する。焚き口として，又，生産品を出し入れする穴としての役割が考えられる。

遺物としては，炭の粉末が極く少量出土したにすぎず，土器その他時期を決定する資料は得られなかった。また灰原等の確認のため南西にグリッドを掘ったが認められなかった。窯体の主軸に直交するトレンチを入れたが，谷側には灰原らしきものは確認できず，山側に溝状遺構を検出した。

溝状遺構は2本検出し，1本は窯体と交叉する弥生中期末のもの，いま1本は窯体と平行し奈良時代と考えられる土師器こしきを出土し，土層観察から同時期と考えられる。

したがって1号窯の時期は，弥生中期よりも新しく，奈良時代に近いと考えたい。

（2） 2 号 窯（第49図，図版18）

丘陵東側裾部に位置し，2号石蓋土壙に切られている。主軸は，北東から南西方向である。等高線と平行する。煙突・煙道・窯体・横口から成る。南西用地外に伸びるため全容はつかめない。現存全長は5.9mを測る。

煙突は北東端にあり，1辺70cmの不整な方形プランを呈し，深さ60cmを測り，人頭大の石数個で蓋をしている。

煙道は，長さ70cm，幅25cm，高さ15cmを測り，断面はドーム形を呈し，煙突と窯体の床とを傾斜5度で結んでいる。両サイドから掘り進んだものであろう。

窯体は，4.7m以上あるもので，床面の幅60cm，現存の高さ70cmを測る。天井は内部に落下堆積し，側壁も剝落している。断面はドーム形を呈し，全体としてカマボコ形を呈すると考える。床面は，谷側すなわち横口へ向かってやや傾き，煙道に向かって15度の傾斜で上がっていく。

横口は，ほぼ等間隔（約50cm）で5カ所認めることができる。窯体の主軸に直交し，煙道に向かって右側すなわち谷側に開口する。煙道に近い方から，長さ60cm幅15～50cm，長さ60cm幅15～50cm，長さ15cm幅25～50cm，長さ50cm幅20～60cm，長さ50cm幅25～60cmを測る。床の傾斜は9度で窯体に向かって上がっていく。

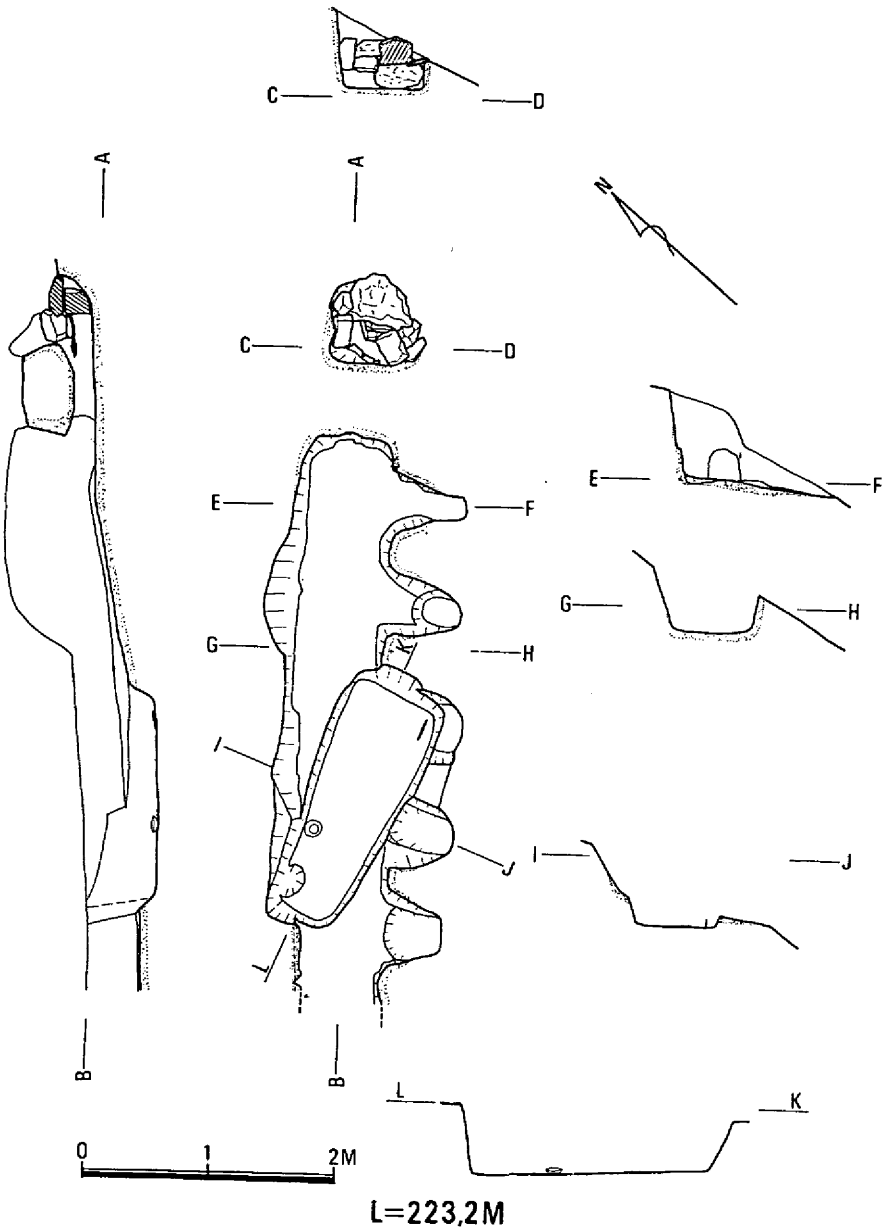
焼成の状態は，1号窯と同じくきわめてよく焼けしまっており表面は灰褐色を呈し，10cmの厚さまで赤褐色を呈している。やや焼成の弱い所は，横口の下方だけである。

遺物は，木炭の粉末が若干出土する以外には何ら見つけることができなかった。しかし，この窯の時期は，2号石蓋土壙が切っていることから下限は平安時代に限定できる。

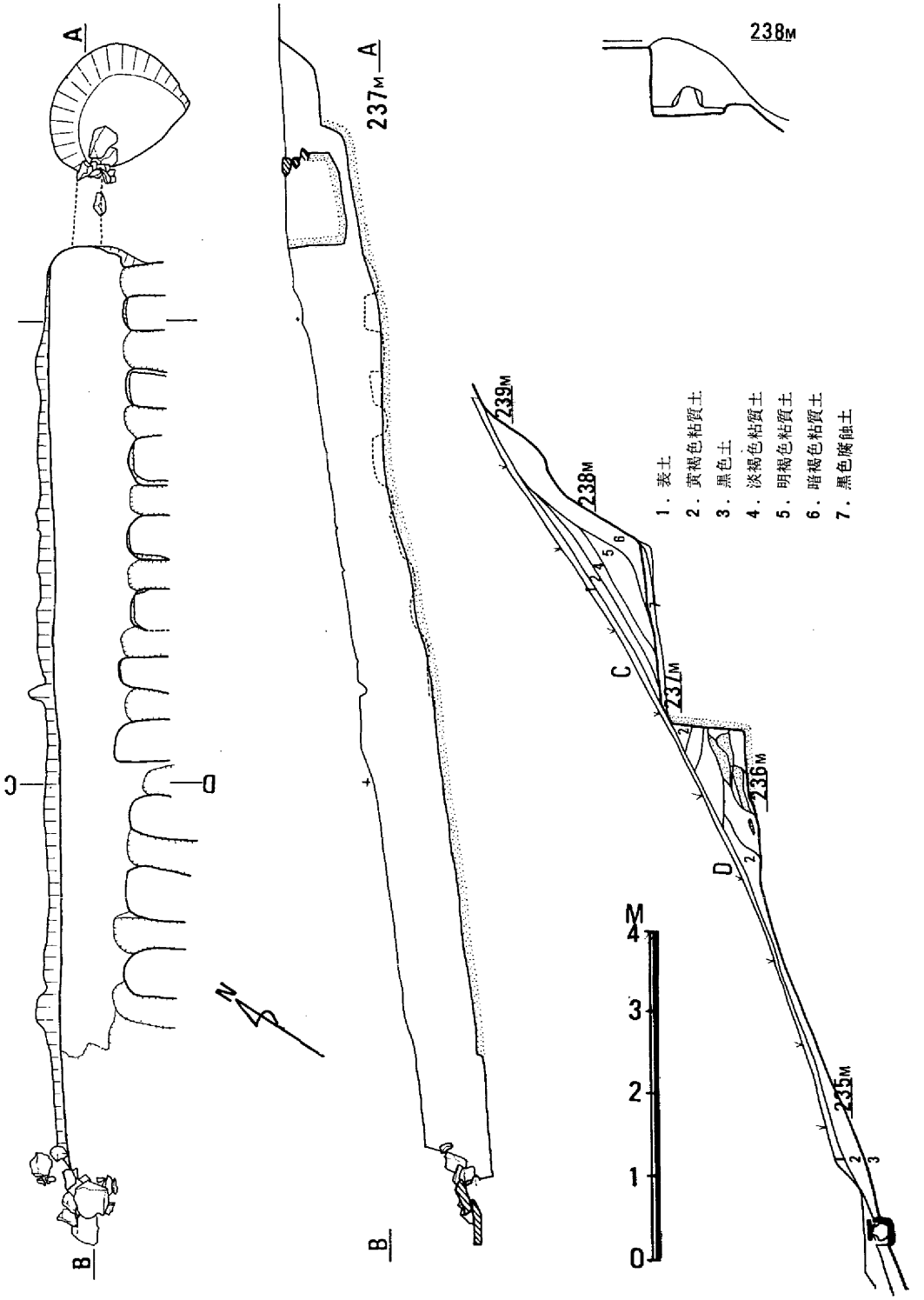
（3） 3 号 窯（第50図，図版19）

丘陵東側緩斜面にあり，火葬墓の北上方に位置する。主軸は北北東から南南西方向で，等高線とほぼ平行する。全長は14.6mを測り，煙突・煙道・窯体・横口・石組みより成り，煙突～窯体の一部が用地外に及び，地権者の諒解を得て発掘を行なった。また山側には窯と平行する平坦部が作られ，そのため山の封土が流れて岩盤が露出している。

煙突は北北東端にあり，直径170cmの不整な円形プランを示す。2段掘りしており，深さは82cmを測る。窯体に近い側には人頭大から拳大の石を無雑作に積んでいる。石も赤褐色に焼成を受けて



第49図　2号窯及び2号石蓋土壙平面図・断面図（1/60）



第50図　3号窯平面図・断面図（1/80）

いる。

煙道は，長さ110cm，幅30cmを測り，高さは窯体からの入口で20cm，中央部で14cm，煙突への出口で22cmを測る。両サイドから掘って貫通させたものであろう。断面はドーム形を呈している。床面は傾斜10度で窯体の床から煙突の床に向かって上がっていく。

窯体は，隅の丸いやや胴張りの短冊形を呈し，長さ11.2m，幅66～92cmを測り，山側の壁の残りが良く高さ80cmを測る。側壁はやや外反する。天井はすべて内部へ落下している。断面形はドーム状を呈し，全体はカマボコ形を呈すと考えられる。床面は谷側に向かって7度の傾斜で下がり，煙道に向かって7度の傾斜で上がっていく。

横口は，すべて天井が落下している。ほぼ等間隔（40～50cm）で窯体の主軸に直交して谷側すなわち煙道に向かって右側に開口する。11カ所認められた。まだ2カ所開けるだけのスペースが残っているが，床面が剝離しているため検出できなかった。床は鈍いU字状断面を呈し，20度の傾斜をもって窯体方向に上がっている。いずれも窯体に開口する部分の幅が広く40～50cmを測り，谷に開口する部分の幅が狭く30～40cmを測る。

石組みは，窯体の南南西端部にあり，40cm×40cm×16cmの石～拳大の石を積んでいる。送風孔と考えられる。その周辺から木炭の粉末と小枝を若干採集できた。

3号窯は，1・2号窯よりも規模が大きく，しかも末端の石組み，山側に平坦面を有する点で特徴的である。また窯壁と炭の混じった土を埋土とする土壙が近くにあり，火葬墓が同一面で認められ，木炭片が採集されることなどから時期は，6世紀後半～8世紀代に比定できよう。

（4） 4 号 窯（第51図，図版20）

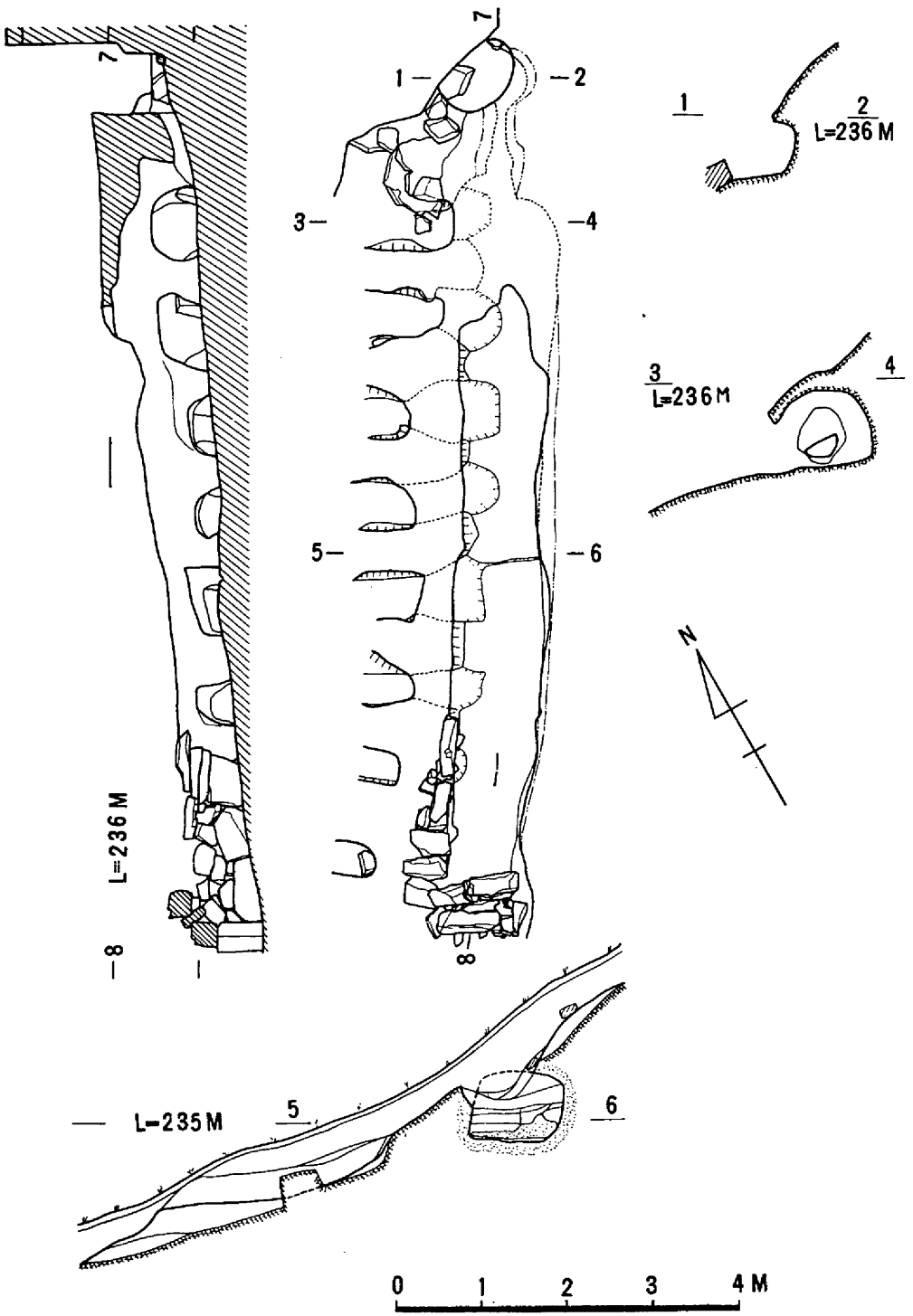
丘陵西側の斜面中腹にあり，3等窯の丘陵をはさんだ対面に位置する。他の窯同様に等高線に平行し，主軸は北北東から南南西に伸びる。煙突・煙道・窯体・横口・石組み・排水溝・平坦面から成る。他の窯と全く異なる点は，地山くり抜きの地下式窯であること。全長は10.5mを測る。焼成の状態は，他の窯同様，表面灰褐色を呈し，赤褐色に焼成を受けているのは厚さ10cmに及んでいる。

煙突は北北東端にあり，直径1mの円形を呈し，深さ90cmを測る。煙道の口が山側に寄っているため山側にやや袋状を呈している。

煙道は，長さ1mを測る。幅は38～50cmを測る。断面は上下に長い楕円形を呈する。煙突と窯体の両側から掘り抜いたものであろう。床の傾斜は17度を測る。

窯体は，プランは砲弾形を呈する。地山をくり抜きトンネル状を示している。南南西末端部は石組み天井である。長さ8.6mを測り石組み天井は2.5mを占める。また地山の天井は長さ約2m残っていた。天井までの高さは煙道入口付近で64cm，煙道から1mのところで1m，石組み天井の部分で80cmを測る。幅は，煙道付近で1m，中央部で1m，石組み部分で80cmを測る。断面形はドーム状を呈する。したがって大人が腰をかがめて歩ける程の大きさである。床面の傾斜は，8～10度を測る。

横口は，50～60cmの間隔をおいて8カ所検出できた。すべて完全に天井まで残り，正面形はドーム状ないしそれに近い形を示している。幅30～60cm，高さ30～60cm，長さ1m前後で，窯体の主軸に直



第51号　4号窯平面図・断面図（1/80）

交して谷側に開口している。煙道に近い方が最も大きく，それは大人が横になって入れる程で高さ60cm幅60cmを測り，しだいに小さくなる。そして末端の2個は窯体に貫通はしているが，内側から閉塞され，1つは外側も石で蓋をされている。床面の傾斜は15度を測る。

石組みは，大人二人持ち大の石で側壁の1段目は広口を使い，2・3段目を小口積みか横口積みにしている。南南西端は縦にして玄門状に開口している。高さ50cm，幅60cmを測る。送風孔であろうか。地山の側壁と天井が足りない所を石で補っているようであるが，送風孔を作るため意識的に積んでいるようでもある。積み方は横穴式石室の積み方と類似している。

排水溝は，玄門状石積みの直下から始まり，山側に沿ってゆるくカーブし深さ7～8cm，幅10cmの断面U字形で約5m残存し，住居址にみられる壁帯溝に似る。

平坦部は，窯体の主軸と平行して横口の西側に幅2m，長さ9mあり，いま1つは玄門状石積みの後方，排水溝の東側に幅2m，長さ6mで見られる。これは生産者のための作業場と考えられ，この平坦面には木炭の小片・細片を多く含んだ黒色土が堆積していた。

遺物は，窯内部からは全く出土せず，周辺の平坦部から木炭片が出土した。

時期は，古墳時代と推定される。

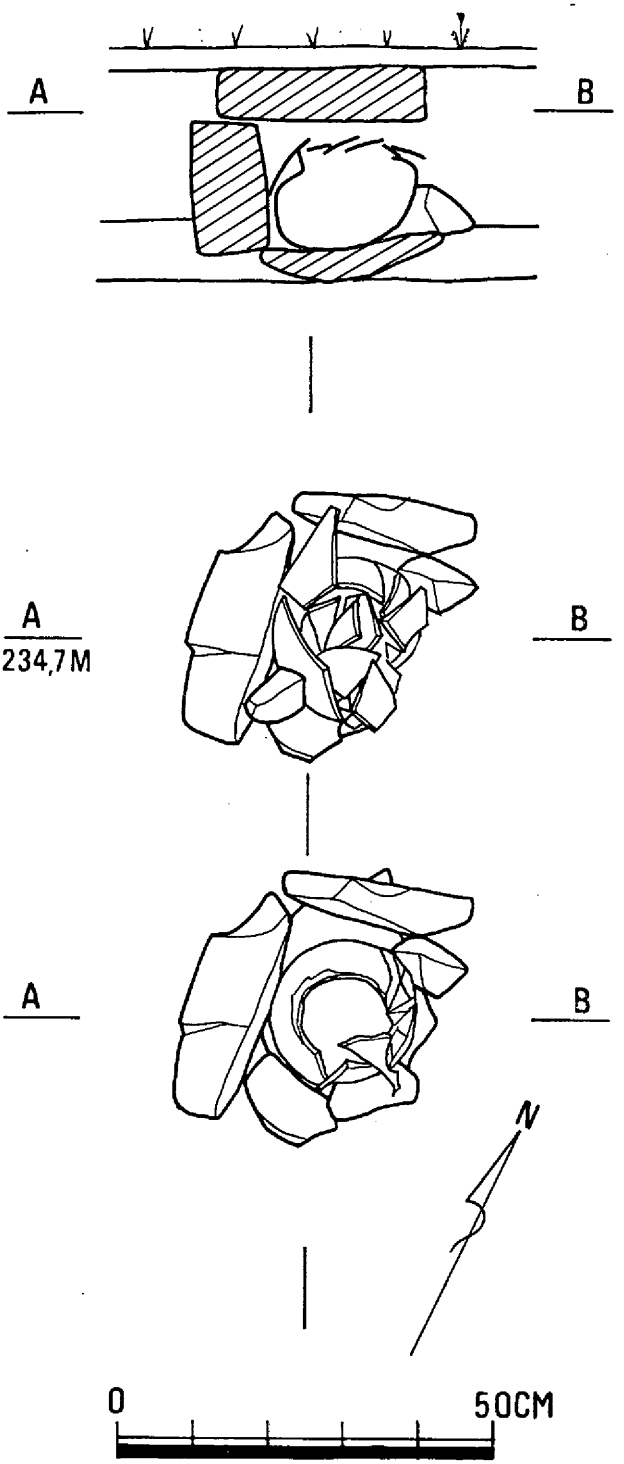
小　　結

窯状遺構の発見例が岡山県内において相次いでいる。中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査において，すでに6基調査された。北房町内の備中平遺跡で1基，本遺跡で4基，哲西町内の野田畝遺跡で1基ある。さらに勝央町では工場公園造成に伴う発掘調査で1基，津山市では中国電力変電所建設に伴う発掘調査で1基調査された。またかつて県内の製鉄遺跡の調査がなされた際2基発見されている。そして新見市の分布調査の結果青地遺跡で1基発見された。すなわち岡山県内では現在まで11基の窯状遺構が知られている。窯の特徴については本遺跡の各窯の項で述べた通りである。

発掘調査の結果，これらの窯状遺構からは木炭小片・細片が極少量出土するだけで，時期・用途を示す有力な手がかりを与える遺物は確認できなかった。しかし時期については本遺跡の2号窯が最も有力な手がかりを与えてくれた。すなわち平安時代の石蓋土壙が2号窯を切って遺存していたことである。このことから2号窯は平安時代以前に限定することができた。

用途については，木炭片がわずかに出土することから炭焼窯とする考えが最も簡単である。タタラであるという説・土師器窯であるという説・火葬窯であるという説・あるいは共同炊事用のかまど説等様々な説が出た。各窯状遺構の位置を述べて，一応結論を出して見たい。

青地遺跡のそれは約50m離れてタタラ址が発見されている。本遺跡では谷川上流約100mの所にタタラ址があった。備中平遺跡では水田下に鉱滓が多く見つかっている。このように製鉄址が近接していることが特徴である。備中平遺跡の報告では，炭焼窯の可能性が強いと考えているが，製鉄のために使用する炭の量が多いことを考えると，やはりこの窯では炭を焼き製鉄用に供給していたと考えるのが妥当であろう。



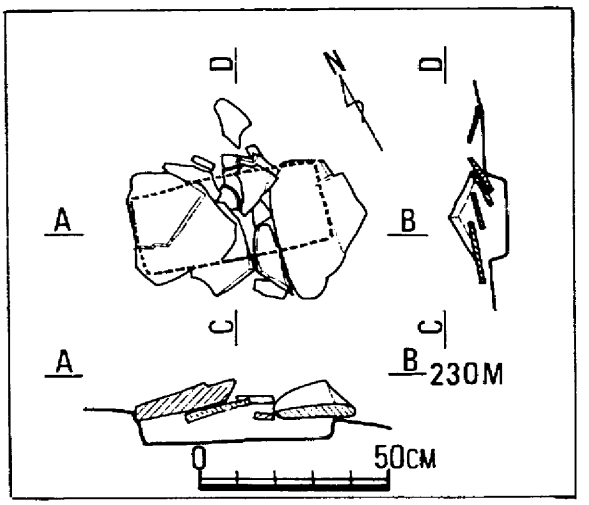
第52図　火葬墓平面図・断面図（1/10）

第7章　その他の遺構

第1節　火葬墓

（第52図，図版21）

丘陵北東斜面の現山道直下にあり，3号窯の東約5mの位置で検出した。掘り方は検出できなかった。人頭大の板石を蓋にし，同大の板石で四方を囲み，ただし二方しか残存していないが，同大の板石を1個床に敷く。その中に須恵器直口壺をおさめ，須恵器大甕の体部破片で蓋をしている。火葬骨か洗骨を収納したものと考えられる。須恵器の時期から7世紀後半～8世紀に比定したい。



第53図　1号石蓋土壙平面図・断面図（1/20）

第2節　石蓋土壙墓

（1）　1号石蓋土壙（第53図）

丘陵上にあって竪穴式石室と1号シストの中間で検出した。蓋は板石を3枚使う。土壙の掘り方は，長方形プランを呈し，長さ50cm，幅23cm，深さ15cmを測る。主軸は，ほぼ東西である。遺物は出土していない。時期は不明である。

（2）　2号石蓋土壙（第54図，図版18）

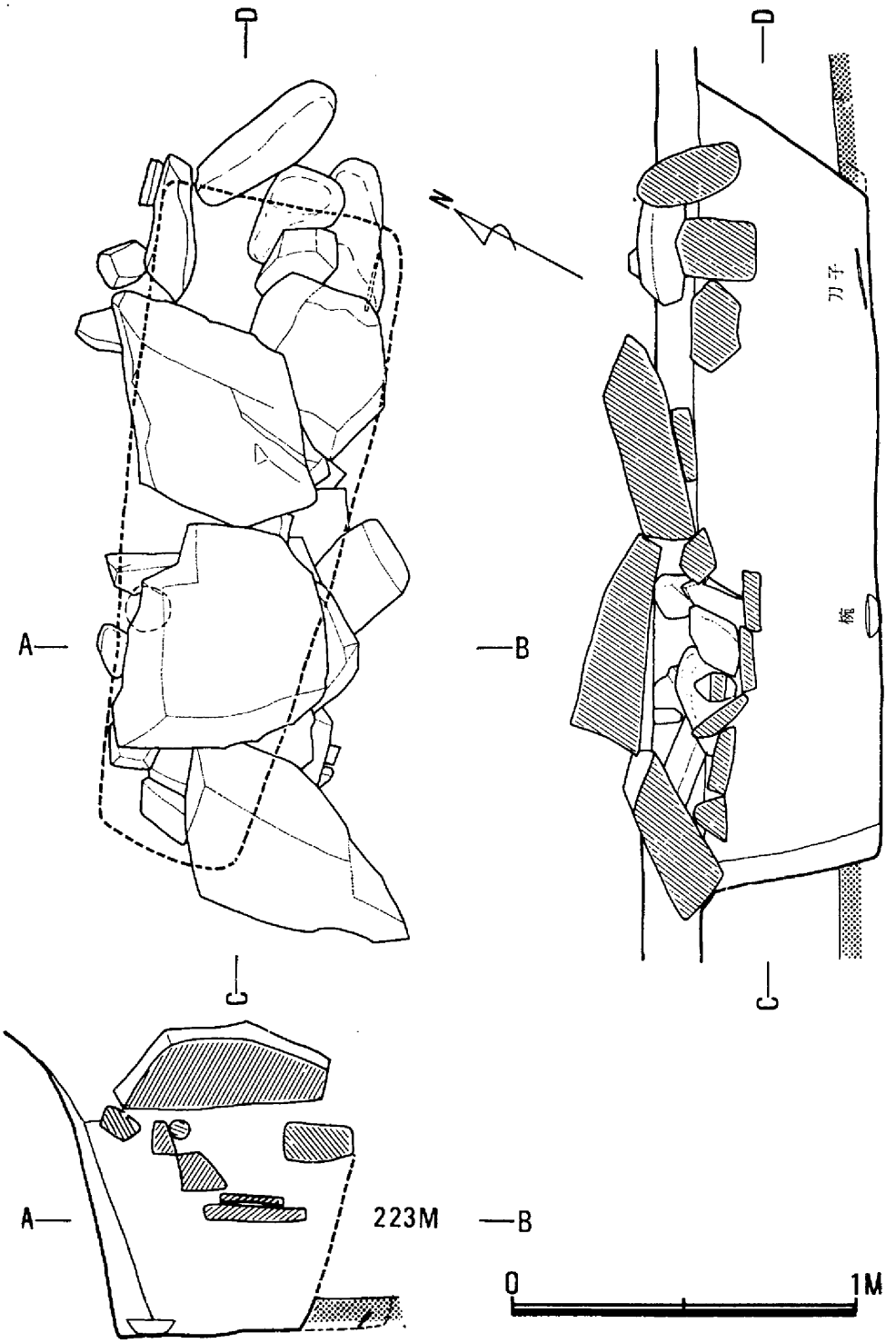
丘陵の東側裾部にあり，2号窯を切っている。土壙の主軸は，ほぼ東西で，2号窯の主軸とは約25°東に振っている。蓋石は，大人二人持ち大（60×60×20cm³）の石が3個残っている。4個あったものと推定される。その下には，大人一人持ち大（50×20×30cm³）の円礫や，同大の角礫，そしてやや小さめの板石等で石棺を作る。この板石の間には高台付の土師器椀が供献されていた。この下に土壙がある。土壙は，不定形な長方形を示し，床面は平らで，その床面の大きさは長さ190cm，幅40～70cmを測り，天井石までの高さは60cmを測る。遺物は，刀子が東南隅で，完形の土師器椀が北西壁際で見つかった。土師器椀は，器壁が薄く，取り上げる際粉々になって復元困難になった。これらの遺物からみて，この土壙の時期は，平安時代に比定したい。

2号石蓋土壙出土遺物（第55図，図版23）

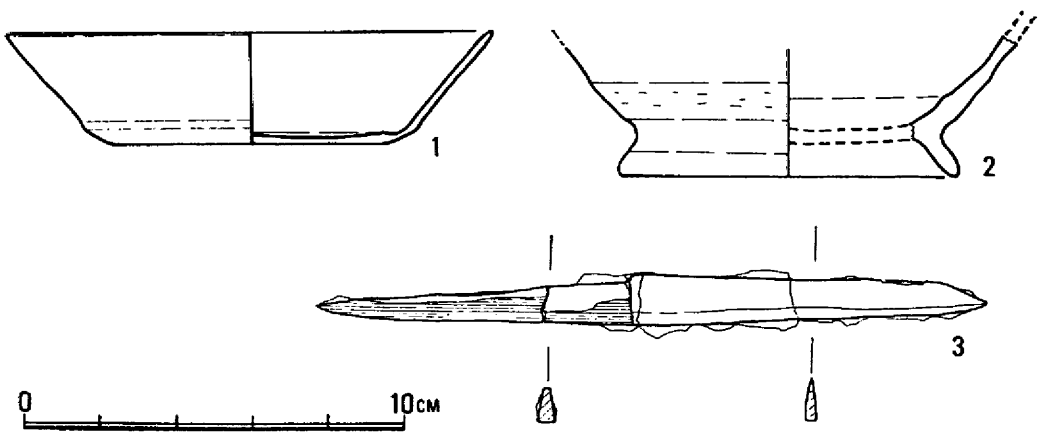
1の土師器椀形土器は，口径12.8cm，器高3cmを測る。直線的に広がる口縁部をもち，端部に鈍い稜を作る。器壁はきわめて薄く厚さ3mmを測る。調整は表面剝離が著しいため不明である。胎土中に大粒の砂粒を多く含み，焼成は不良で，赤褐色を呈する。

2は，石蓋直下から出土した高台付土師器椀である。口縁部が欠損している。体部下半にはヘラ削り調整が施されている。高台は貼り付けられており，大きく外反し，端部を丸くおさめている。粗い砂粒を含むが量は少ない。焼成は良好で，黄褐色を呈する。

3は，刀子で全長17.6cmを測り，刃部と茎部からなる。刃部長9.4cm，刃部最大幅1.3cm，刃部最大厚0.5cm，茎部長8.1cm，茎部最大幅1.1cm，茎部最大厚0.5cmを測る。刃部には鎬が認められる。茎部には木質が遺存している。



第54図　2号石蓋土壙平面図・断面図（1/20）



第55図　2号石蓋土壙出土遺物（$\frac{1}{2}$）

（3）　土　　壙（第56図）

3号窯の南西約2mの位置で，急斜面に検出した。瓢箪形プランを呈し，山側を袋状に抉っている。長軸はほぼ南北方向である。上縁長径2m，くびれ部1.2m，短径1.4m，下縁長径2.3m，くびれ部1.2m，短径1.3m，深さ30～90cmを測る。埋土第3層からは須恵器提瓶1個体と須恵器片が出土し，第5層には焼土塊を多く含んでいる。3号窯に伴う土壙と考えられる。提瓶からみて時期は6世紀後半に比定したい。

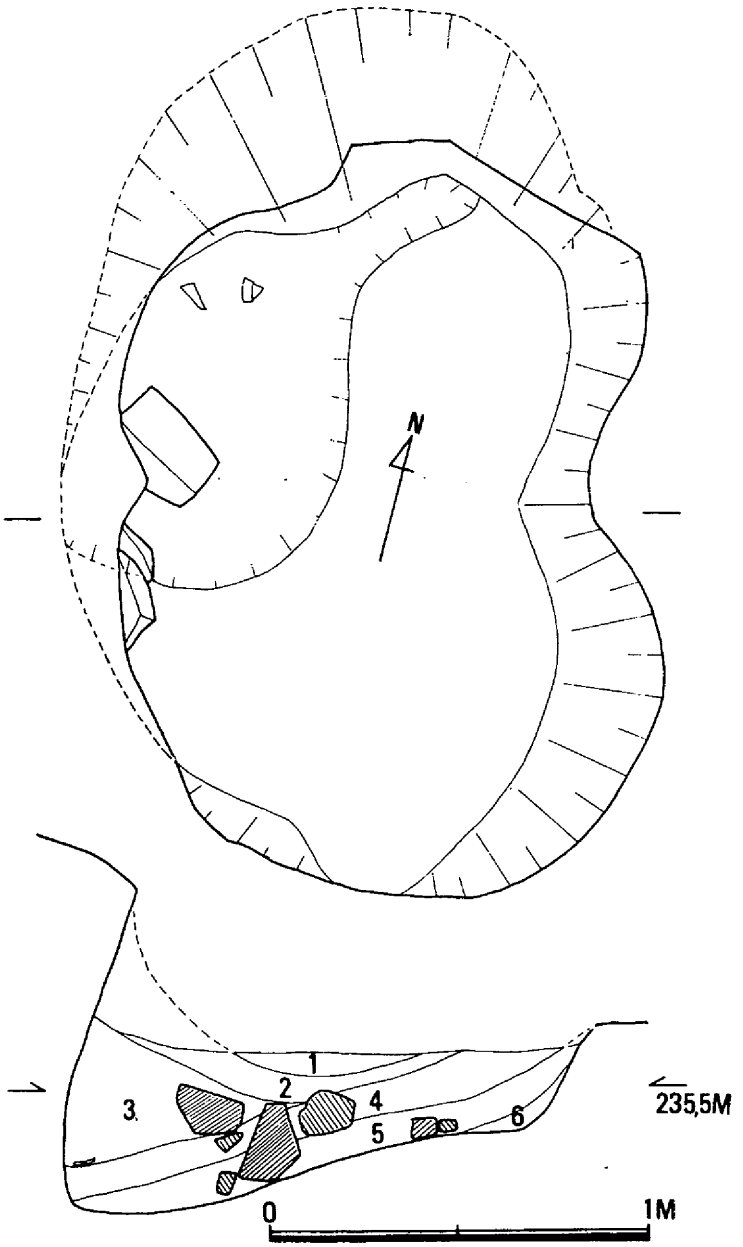
提瓶（第57図)は，口縁部と体部下半を欠損している。外反する頸部をもつ。体側に1対2個ある耳は端部が欠損しているが，カギ状になると考えられる。体部前・背面のふくらみは，ほぼ同程度であり，背面の内側に円板状貼り付け痕跡が残り，前面にはカキ目調整が施されている。胎土中には径2mm大の砂粒を少々含み，焼成は良好で堅い。内面は灰白色，外面は灰色を呈す。

（4）　1号ピット（第58図）

東谷区にあり，10号シストの南約5mの位置で検出した。上面プランは円形，断面形は浅いU字形で椀形を呈している。壁・底部の全面が焼成を受け赤褐色を呈す。直径1m，深さ20cmを測る。埋土第2層暗褐色土には炭を多量に含む。焚き火の跡か炉址か不明，時期も明らかでない。

（5）　2号ピット（第58図）

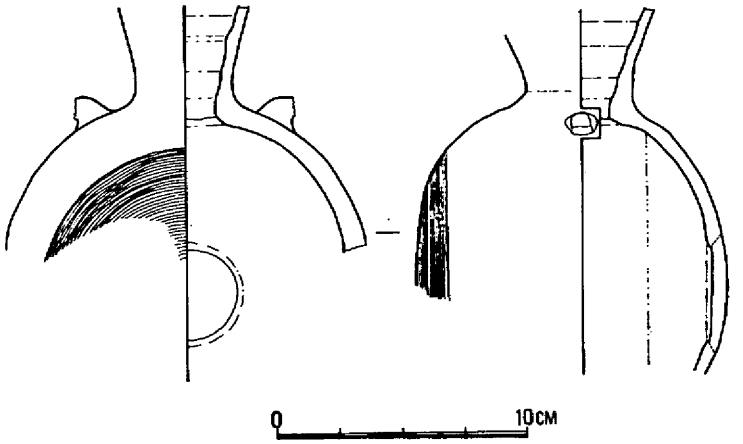
西谷区にあり，6号住居址上層に位置する。平面形は楕円で，断面は浅いU字形を呈している。長径90cm，短径70cm，深さ10cmを測る。全面焼成を受けて赤褐色を呈し，炭混りの茶褐色土を埋土とする。1号ピットと似ている。時期は不明である。



第56図　土壙平面図・断面図（1/20）

土壙土層

1. 黄褐色砂質土（焼土含む）
2. 木炭・焼土層
3. 黄褐色粘質土（須恵器片含む）
4. 淡褐色粘質土
5. 赤黄褐色粘質土（焼土含む）
6. 淡赤黄褐色粘質土



第57図　土壙出土提瓶（$\frac{1}{3}$）

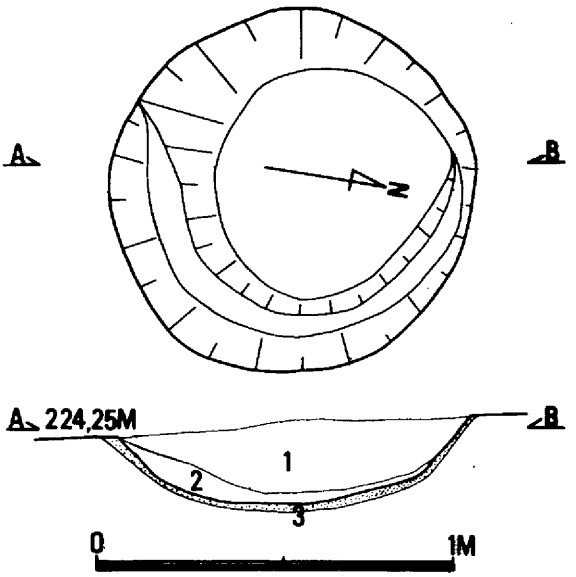
第3節　石列・集石遺構

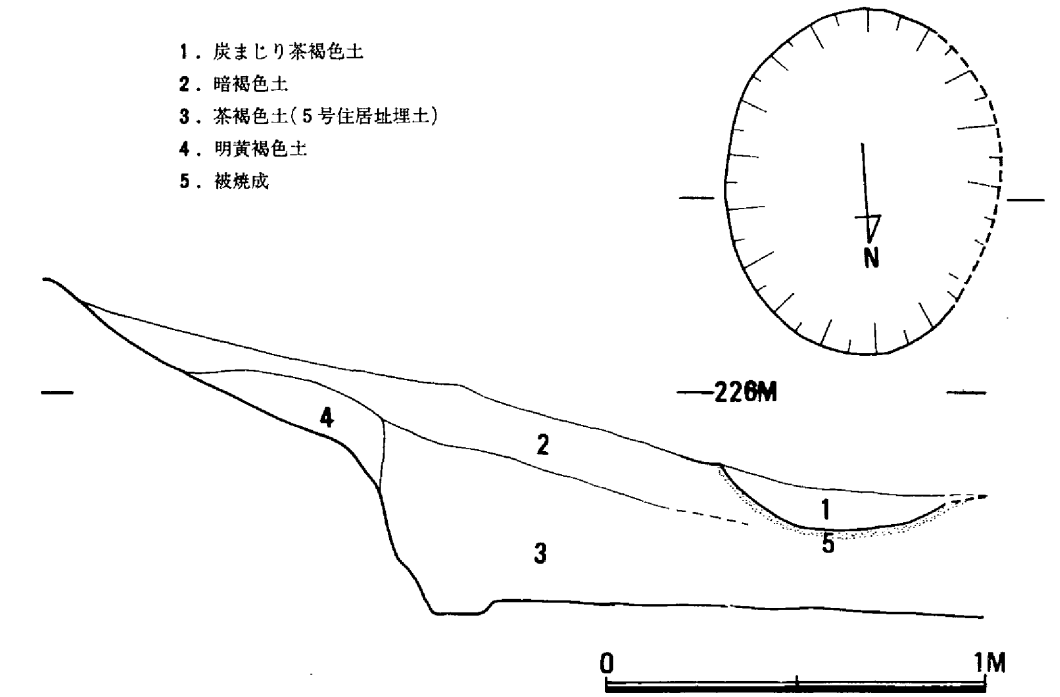
（1）　石列遺構（第3図，図版1）

横穴2号墳の東方，谷川付近に起点が認められ西方に向け山麓急斜面が緩斜面に移行する位置に，等高線に平行して並べ置かれている。全長約150mを測る。西方五輪塔のあったと伝えられる地点でやや北西方に向きをかえ，約30m経て南方急斜面に曲折して終る。石の大きさは大きいもので幅2m，高1mを測り，平均1m前後の大石を用いているが，人頭大・小児頭大の石も大石の間隙あるいは下部に用いている。時期的には，石列の石材埋没状態や，横穴2号墳との関係からそう古くない時期に築成されたものである。性格・用途については山林・畑地の境界あるいは畑地・民家付近へ猪が侵入するのを防ぐためのものと推定され，新見市周辺に類似する石列が存在する。

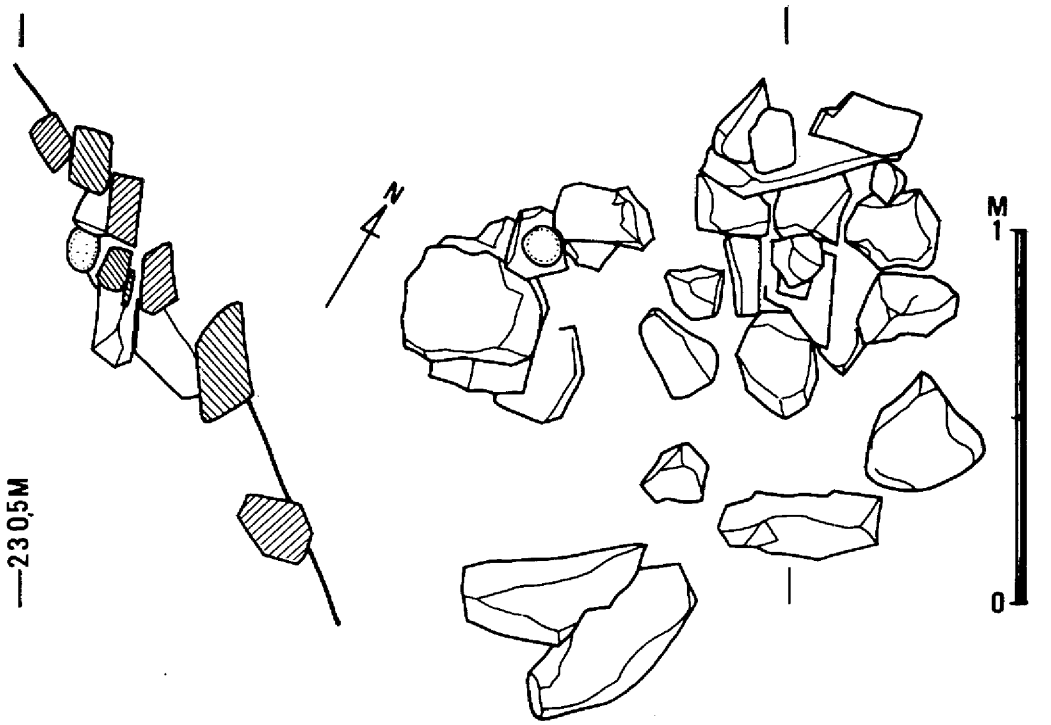
（2）　集石遺構（第59図）

丘陵東斜面にあり，4号墳竪穴式石室の東方に位置する。50cm×20cm×20cm～10cm四方の石が集石している。遺物は見られない。竪穴式石室の石材である可能性が強い。時期は不明である。





第58図　1号ピット（上）2号ピット（下）平面図・断面図（1/20）



第59図　集石遺構平面図・断面図（1/20）

第4節　その他の遺構

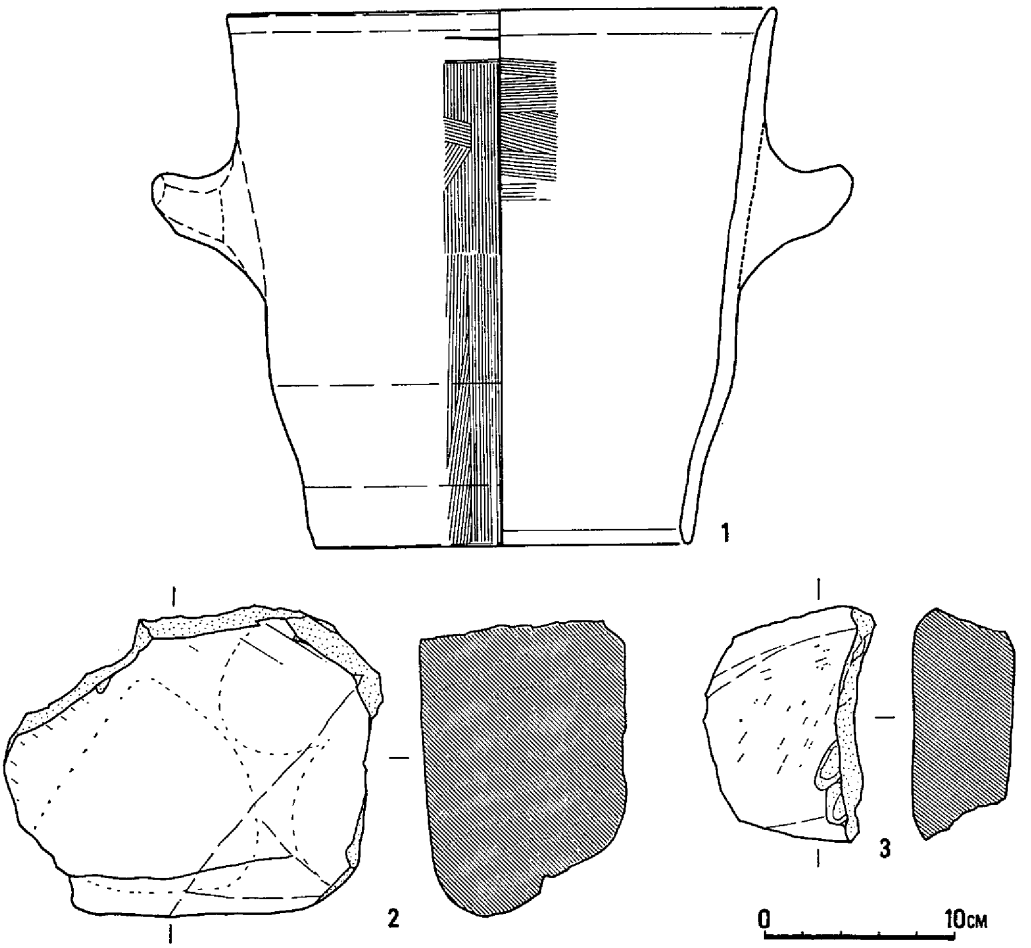
（1）五輪塔（第3図）

谷川西調査区にあって，石列遺構の北に位置する。調査前に五輪塔は南の現墓地に移転されており，こごめ石で作られている。五輪塔のあった北後方に方形の石垣状遺構が見られ，小児頭大の石を3段積んでいる。遺物は出土しなかった。五輪塔の基壇と思われる。中世と考えられ，石列遺構との関連は不明である。

（2）溝状遺構（第3図）

溝状遺構は4本検出できた。A～D溝と呼称する。A溝は，丘陵上にあって4号墳と1号シストのほぼ中央に丘陵主軸とほぼ直交して東西に長く伸びる。断面はU字形を呈している。長さ6m，幅1m，深さ40cmを測る。数個の大石が南側から落下している。弥生式土器あるいは土師器と思われる土器細片が出土しているが時期は不明である。

B溝は，丘陵東斜面下方にあって，2号窯の北東に位置し，等高線と平行している。上部には人頭大～拳大の石が集石している。長さ8m，幅50cm，深さ20cmを測り，断面はU字形を呈する。

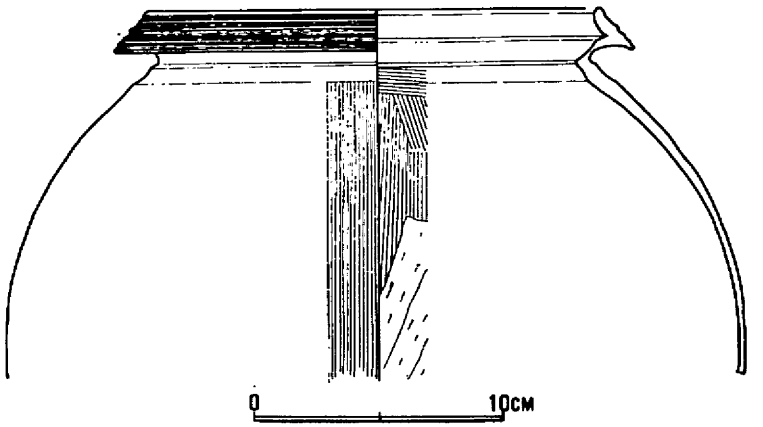


第60図　C溝出土遺物（土師器・砥石）（$\frac{1}{4}$）

無遺物で，用途・時期とも不明である。

C溝は，1号窯の東にあって1号窯と平行する。長さ2m，幅1m，深さ10cmを測り，断面U字形を呈する。土層観察から1号窯に伴う排水溝と考えたい。土師器こしき・砥石が出土している。遺物からみて奈良時代に比定したい。第60図-1の土師器こしきは，復元したもので，口径29cm，器高20cm，下方口径20cmを測る。上下に内傾する口縁端面を有し，端部を丸くおさめる。体部は下端から$\frac{1}{3}$の部分がややふくらんでいる。外面は縦方向を主とする任意の粗い刷毛調整，内面は上部が粗い横方向の刷毛調整されている。体部上方$\frac{1}{3}$の所に牛角状の把手を1対有す。砂粒を多量に含み，焼成は良好で，茶褐色を呈する。第60図-2の砥石は，大形のもので緑色がかった灰褐色を呈する水成岩で，1面だけを使用している。第60図-3の砥石は，淡灰褐色を呈する硬質砂岩と思われ，2面を使用している。

D溝は，C溝の下層にあってC溝・1号窯の中間に位置する。長さ4m，幅1m，深さ10cmを測



第61図　D 溝出土弥生式土器（$\frac{1}{3}$）

り，断面はU字形を呈する。床面には弥生中期の甕形土器１個体分が散乱していたことから，時期は弥生中期に比定できる。第61図の甕形土器は，「く」の字形に外反する口縁部をもち，端部を大きく上下に肥厚し，端面に凹線を施している。体部外面はていねいな縦の刷毛目調整，内面は粗い任意の刷毛目とヘラ削りが施されている。器壁は薄く，外面にススの付着が認められる。砂粒は少量しか含まず，焼成は良好で明茶褐色を呈する。

結　　語

今回の限定された範囲の調査結果による各時代・遺構に関する問題点と総括を述べたい。縄文・弥生時代には居住・生活地としての性格を示している。遺物散布の範囲は東谷・西谷地区に集中し，遺構の検出は西谷地区に弥生時代の住居址があるが丘陵上にもかつて埋葬遺構・居住遺構が存在した可能性がある。丘陵上あるいは丘陵周辺の丹塗りを含む弥生式土器片の出土状況から，十分にあり得る可能性として書きとめておく。東谷地区は更に南東方平坦部・緩斜面に(註1)弥生中期～後期の遺構・遺物のひろがりがあることは明白であり，シストを中心とした古墳時代の埋葬遺構の存在も十分考えられる。また，西谷地区の縄文・弥生～古墳時代の遺構・遺物のひろがりは谷を更にさかのぼって展開すると思われる。調査区内での縄文式土器片あるいは弥生前期土器片の出土状況は遺構を伴わぬ状態で出土しているが未掘区域に遺構が存在する可能性もある。更に，谷川に沿う緩斜面には鉄滓・窯壁片・土師器片・須恵器片の散布が顕著であり，製鉄関係の遺構・遺物と考えられる。この散布範囲は谷川をさかのぼること数100mに及ぶ広範囲な遺跡である。窯状遺構と共に今後の精査・検討による正確な時期決定，美作地方と並ぶ備中北部鉄生産の史的動態の解明が期待できる重要な遺構である。

古墳時代においては，６世紀中葉から後半・末期にかけて集中的に築造されたシスト・土壙墓・竪穴式石室・横穴式石室墳が，あたかも集団墓地のごとく群集する。丘陵上あるいは谷部に営まれたシ

スト・土壙墓は適当な間隔をおいて存在し，竪穴式石室が丘陵頂部に位置している。横穴式石室墳は用地外の２基を含め散在している。これらの築造者・被葬者は部民制を基軸とする専業共同体の成員と考えられ，上位者→横穴式石室・竪穴式石室，下位者→土壙墓・シストというパターンを推察することができよう。立体的な墳丘と石室をもつ横穴式石室墳の場合，個々の築造にあたって一定の平面を占拠し，追葬過程で所有が継承されているが，シスト・土壙墓の場合，大半は個々の被葬者の所有と帰して死者の抽象的所有となり対比的である。しかし，群集墳とはいうものの多様な埋葬形態について個々の被葬者の性格が本質的に異なるのか，あるいは地域色として把握すべきものか単純に被葬者の社会的地位・年齢・性差によるものかは今後の研究課題である。

奈良・平安時代の埋葬遺構については火葬墓と石蓋土壙墓がみられるが，前者は東谷地区で後者は丘陵南端裾部で検出している。東谷地区にはこの時期の遺物が少量ではあるが出土しており弥生時代遺構と共に東方へのひろがりが推定できる。石蓋土壙墓は窯状遺構廃絶後，窯体部を切り込んで掘り込まれ，明確な時期が不明とされている窯状遺構の下限年代を知ることができた。この窯状遺構の性格については炭窯説が有力で，近年県内で他に４カ所を数える窯状遺構の調査(註2)が行われたが共通する点は以下の通りである。

- 全長７～12.5mを測ること
- 斜面・丘陵裾に位置し主軸は等高線に平行すること
- 燃焼室は若干の傾斜をもつこと
- 燃焼室体部に楕円形の焚き口様側口（横口）をもつこと（７～11個）
- 煙道部は石組みが多いこと etc

以上の諸点があげられるが，調査例の増加に伴い使用時期の範囲が推定され弥生時代以前に遡らず平安・鎌倉時代に下らない時期が比定される。性格については不明とするものが多いが調査者が炭窯と推定しているもの，かまど跡としているものの二つの推論がある。前者は備中平遺跡(註2)・丸ケ谷製鉄跡遺跡(註3)で，後者は長岡京跡(註4)である。本遺跡で検出した４基の窯状遺構についての時期は検出状況・遺構の切合いから，７世紀代～平安時代以前と比定し，少なくとも古墳などの埋葬遺構とこれら生産遺構は時期的に重複していなかったものと推定している。この窯状遺構は未だ我々の理解の及ばない，古代生産遺構として検討が行われねばならない。加えて窯状遺構に限らず調査目的の固定化と先入観によって陽の目を見ずに終った遺跡・遺構があまりにも多く埋没し，消滅し，忘れ去られゆく現実を遺跡調査者の自戒と警鐘としたい。

（註）

（註１） 縦貫道用地内であるが調査中買収が難航していた。買収が完了すればあらためて再契約を行い，調査を始める予定であったが果たされなかった。

（註２） ①金井別所遺跡（津山市）報文未刊②勝央中核工業団地造成地内第６地点遺構（勝田郡勝央町）報文未刊③備中平遺跡（上房郡北房町）～岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（12）所収　1976年３月刊　④野田畝遺跡（阿哲郡哲西町）～報文未刊，岡山県埋蔵文化財調査報告(16)所収予定。以上４か所すべて消滅している。新見市高尾の備北青年の家裏山に半壊の状態のものが存在する。付近には鉄滓・窯壁片が散布している。

（註３） 窯内で木炭が多く出土し，近接する製錬炉出土の木炭と分析値が近似するという事実から炭窯と推定し

ている。全長7.8m，幅（内法）53～80cm，4個の焚き口様側口をもつ。北九州市八幡西区永犬丸字丸ケ谷所在。「北九州市の埋蔵文化財」所収　北九州市遺跡分布調査図　1977年3月刊。
（註4）「古京展」図録に写真が掲載され「かまど跡」とされている。京都新聞社　1974年4月刊。

＜後　記＞

岡山県内の窯状遺構は，事前調査の後すべて破壊された。発掘調査が行われた窯状遺構の所見・データについては津山市教委河本清氏，県教委文化課山磨康平氏に詳細な御教示を得た。記して深謝の意を表する。

1. 岩倉遺跡丘陵区発掘前近景（西より）

2. 谷川西区発掘前近景（東より）

図版 2

1．　丘陵区発掘前近景（北より）

2　東谷区・丘陵区発掘後近景（北東より）

1．　東谷トレンチ遺物出土状況(東より)

2．　前期弥生式土器出土状況(南より)

1. 竪穴住居址（東より）

2. 竪穴住居址（北より）

1．　1号墳発掘前（西より）

2．　1号墳断面（南より）

図版 6

1．　1号墳玄室（東より）

2．　1号墳鉄鏃出土状況（西より）

1． 2号墳全景（東より）

2． 2号墳石室近景（東より）

1．　2号墳一次埋葬面（東より）

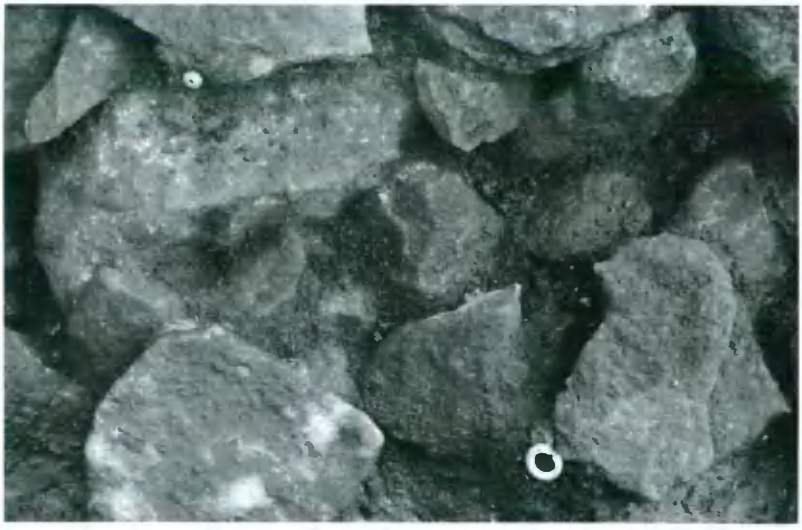
2．　玄室内短頸壺・棺釘出土状態（北より）

1．　3号墳石室遺存状態（南より）

2．　玄室内須恵器・土師器出土状態（南より）

図版10

1　3号墳玄室内床石敷設状態(南より)



2　金環・玉 出土状態(南より)

1．　4号墳竪穴式石室露出状況(北より)

2．　4号墳竪穴式石室(南より)

図版12

1．　1号シスト（南より）

2．　2号シスト（南より）

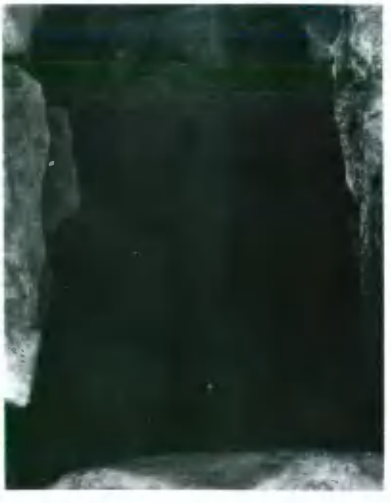
1．3号シスト（西より）

2．4号シスト（北より）

3．4号シスト遺物出土状態

1．6号シストと土層断面(北より)

2．6号シスト(南より)



3．6号シスト遺物出土状態

1．7号シスト（南より）

2．10号シスト（南より）

3．11号シスト（西より）

4．11号シスト蓋取りのぞき後

図版16

土坑墓と遺物出土状態

1．1号窯検出状況(北より)

2．1号窯煙突と土器溜り(東より)

1．2号窯・2号石蓋土坑検出状況（東より）

2．2号窯・2号石蓋土坑掘り上げ後（南より）

1．3号窯(東より)

2．3号窯(南より)

3．3号窯(北より)

図版20

1．4号窯横口前方（南西より）

2．4号窯全景（南西より）

3．4号窯石組み（南より）

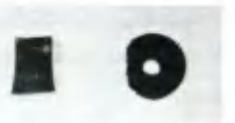
火葬墓　（上）検出状態　（下）蓋取りのぞき後

図版22

1．縄文式土器

2．前期弥生式土器

3．弥生式土器



石器及び２号石蓋土坑刀子

19図－1

19図－5

19図－2

19図－6

19図－3

19図－7

19図－4

19図－8

1号墳　須恵器　杯蓋

19図－1

19図－2

19図－3

19図－4

19図－5

19図－6

19図－7

1号墳須恵器杯身・鉄鏃

図版26

25図－12

25図－3

25図－4

25図－5

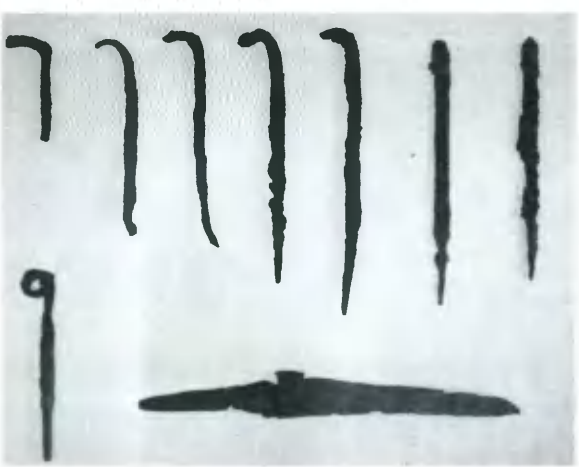
25図－7

25図－9

25図－8

2号墳須恵器

1．2号墳須恵器・棺釘出土状態



2．2号墳棺釘・刀子

図版28

29図－ 1

29図－ 2

29図－ 3

29図－ 4

29図－ 5

29図－ 8

29図－ 7

29図－ 6

29図－ 9

29図－10

3 号墳須恵器

29図－11

29図－12

29図－16

31図　3・4

30図－1

31図－1・2

図版30

30図－2

30図－3

30図－4

30図－5

31図－5～12

3号墳土師器・鉄鏃・鉈・刀子片・不明鉄器片

4号墳

4号シスト

6号シスト

土坑墓

西谷一括

各遺構出土須恵器

45図－17

13図－1

13図－2

57図

13図－10

11図－15

60図－1

遺構・包含層出土土器

谷　内　遺　跡 (44)

目　　次

本　文　目　次

第１章　調査の経過・日誌抄…… 167
第２章　谷内遺跡の位置…… 169
第３章　遺構の構成…… 170
　第１節　土　壙　墓…… 170
　第２節　火　葬　墓…… 173
　第３節　窯状遺構…… 178
　第４節　溝状遺構…… 179
結　　語…… 180

図　目　次

第１図　遺跡の位置（1/50,000）…… 169
第２図　遺跡周辺地形図（1/2,000）…… 170
第３図　地形図・発掘区遺構配置図（1/500）……折込
第４図　土壙墓・火葬墓配置図（1/250）…… 171
第５図　溝状遺構・窯状遺構位置図（1/250）…… 171
第６図　土壙墓実測図（1/20）…… 172
第７図　土壙墓上面供献土器（$\frac{1}{3}$）…… 172
第８図　火葬墓Ⅰ石組・骨蔵器埋納状態実測図（1/10）…… 174
第９図　火葬墓Ⅰ骨蔵器・杯埋納状態実測図（1/10）…… 175
第10図　火葬墓Ⅰ須恵器実測図（$\frac{1}{3}$）…… 176
第11図　火葬墓Ⅱ骨蔵器埋納状態実測図（1/10）…… 177
第12図　火葬墓Ⅱ須恵器・土師器実測図（$\frac{1}{3}$）…… 176
第13図　火葬墓Ⅲ須恵器実測図（$\frac{1}{3}$）…… 178
第14図　窯状遺構実測図（1/40）…… 179
第15図　溝状遺構土層断面図（1/30）…… 180

図　版　目　次

図版1-1　遠　　景（南より）
図版1-2　近　　景（北より）
図版2-1　土壙墓上面供献土器
図版2-2　土 壙 墓（東より）

図版3-1　火葬墓Ⅰ検出状態（西より）
図版3-2　火葬墓Ⅰ骨蔵器埋納状態（東より）
図版4-1　火葬墓Ⅰ骨蔵器と杯出土状態（西より）
図版4-2　須　恵　器　杯
図版4-3　須恵器壺（骨蔵器）
図版5-1　火葬墓Ⅱ検出状態（南より）
図版5-2　火葬墓Ⅱ外容器（土師器）出土状態（北より）
図版6-1　火葬墓Ⅱ骨蔵器除去状態（南より）
図版6-2　火葬墓Ⅱ須恵器鉢（骨蔵器）
図版7-1　火葬墓Ⅲ付近須恵器片出土状態・須恵器壺
図版7-2　窯状遺構検出状況（南より）
図版8-1　溝状遺構検出状況（南より）
図版8-2　溝状遺構検出状況（北より）

第１章　調査の経過・日誌抄

＜調査の経過＞

1975年９月，調査員会議の席上本遺跡の存在する丘陵上に古墳があるのではないかという意見が提出された。丘陵はやや西振するが，ほぼ南北に稜線が走り南端に墳丘と思われる高まりが認められていたのである。その後まもなく文化課デスク担当調査員，縦貫道担当調査員によって現地踏査が行われ，古墳あるいは何らかの遺構が存在する可能性を確認したのである。よって，日本道路公団との覚え書協定による新規発見遺跡として再契約が行われ，当時横見古墳群(註1)の調査・新見荘関連遺跡(註2)の調査を担当していた２名の調査員が担当することとなった。これら数か所の遺跡調査とほぼ平行して行うこととなったため，調査は困難を極めた。加えて，降雪・積雪期には著しい調査の遅滞をもたらした。結局，調査の完全な終了は1976年２月17日となった。

現地調査は，当初より12月末日までは岡田・田仲が担当し，１月より２月17日までは引続き岡田が担当し浅倉が加わった。報告書の作成・図面の浄書，遺物の実測・浄書等は３名の調査結果に基づき岡田・浅倉が担当した。なお，出土遺物の復元，注記に際しては宗金遺跡調査事務所事務担当員，岡本静子氏に負うところが多い。記して深謝の意を表するものである。現地調査にあたっては，下記の作業員の方々にお世話になった。記して深甚の謝意を表するものである。

上田孝子・山崎春恵・松永里美・山本光三郎・平山政夫・小谷光久・岡本清治・浅原公章・小林武夫・三村覚雄・小谷百代・吉国朝代・渡辺益恵・吉国とみ子・吉国辰代・和田恵美子・小林恵美子

（順不同・敬称略）

＜日　誌　抄＞

10月６日（月）～16日（木）立木・雑木伐採作業。排土に備え，斜面に雑木をしがらみ風に積みあげる。

10月17日（金）～29日（火）立木伐採作業。休憩小屋建築，資材は宗金遺跡調査事務所より搬入。写真撮影。

10月30日（木）～11月８日（土）トレンチ設定，発掘開始。

11月10日（月）～14日（金）トレンチ発掘続行。グリッド設定発掘開始，遺物皆無。

11月15日（土）調査員会議。

11月17日（月）～22日（土）グリッド発掘続行。丘陵南方で須恵器片出土。後の火葬墓Ⅲ。

11月24日（月）～29日（土）グリッド南方にむけて新設，発掘。

12月１日（月）～６（土）グリッド発掘続行。火葬墓Ⅰ検出，清掃後写真撮影。土層断面図実測。各トレンチ土層断面図実測。

12月15日（月）調査員会議。

12月16日（火）～20日（土）グリッド発掘続行。火葬墓Ⅰ精査。写真撮影。

12月22日（月）～26日（金）グリッド発掘続行。火葬墓Ⅰ精査。窯状遺構検出，発掘開始。各グリッド・トレンチの土層断面図作成。

1月6日（火）～10日（土）丘陵南端部トレンチ調査。火葬墓Ⅱ検出，周辺精査。実測開始。

1月12日（月）～17日（土）グリッド拡張区発掘作業。火葬墓追加実測。火葬墓Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺物とりあげ。

1月19日（月）～2月8日（日）発掘調査用器材を新見荘関連遺跡である二日市遺跡へ運搬する。発掘調査の主力を二日市遺跡に注ぎ，作業員の方々も移動してもらう。現地調査一時中断。

2月9日（月）～17日（火）土壙墓検出，実測・写真撮影。窯状遺構追測。発掘区全域の平板測量。17日薄暮，降雪の中で終了。

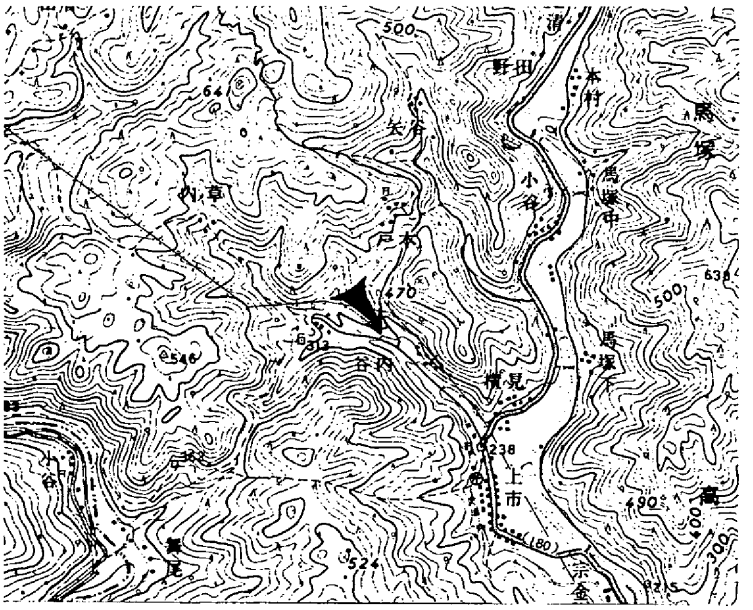
＜註＞

（註1）新見市上市所在の横穴式石室墳2基。中国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財報告第9集に報文掲載予定。

（註2）新見市谷内所在の祐清塚遺跡と新見市上市所在の二日市遺跡。文献調査班と共同調査。中国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財報告第9集に報文掲載予定。

第2章　谷内遺跡の位置

北西方からのびる山稜がレベルを下降しながら舌状丘陵を形成している。この丘陵上に遺跡が存在する。北東方約400mには，中世山城として知られる楪（ゆずりは）城があり，その山腹をのぞむ。さらに約200m東には横見墳墓群が存在する舌状丘陵が上市の小平野をさえぎっている。遠く新見市街地周辺の山なみをかい間みることができるが，概して眺望よしとはいえない。西方は，谷内川をはさむ狭小な谷水田をはさんで急峻な山腹がたちはだかっている。また，東方も狭小な谷頭水田をはさんで山腹がせまっており，北方の山稜と連なりとともに著しく視野を狭めている。丘陵は極めて狭小で平坦面が少なく，北東方あるいは西方は急峻な斜面となっている。この丘陵の北東方には古戦場として地元に言い伝えられる矢谷や戸木の小集落に通ずる道がある。また，北西方には新見荘にゆかりのある谷内[註1]や内ノ草の小集落に通ずる道がある。この道は，古く伯耆と備中を結ぶ重要な交通ルートであったと伝えられている。

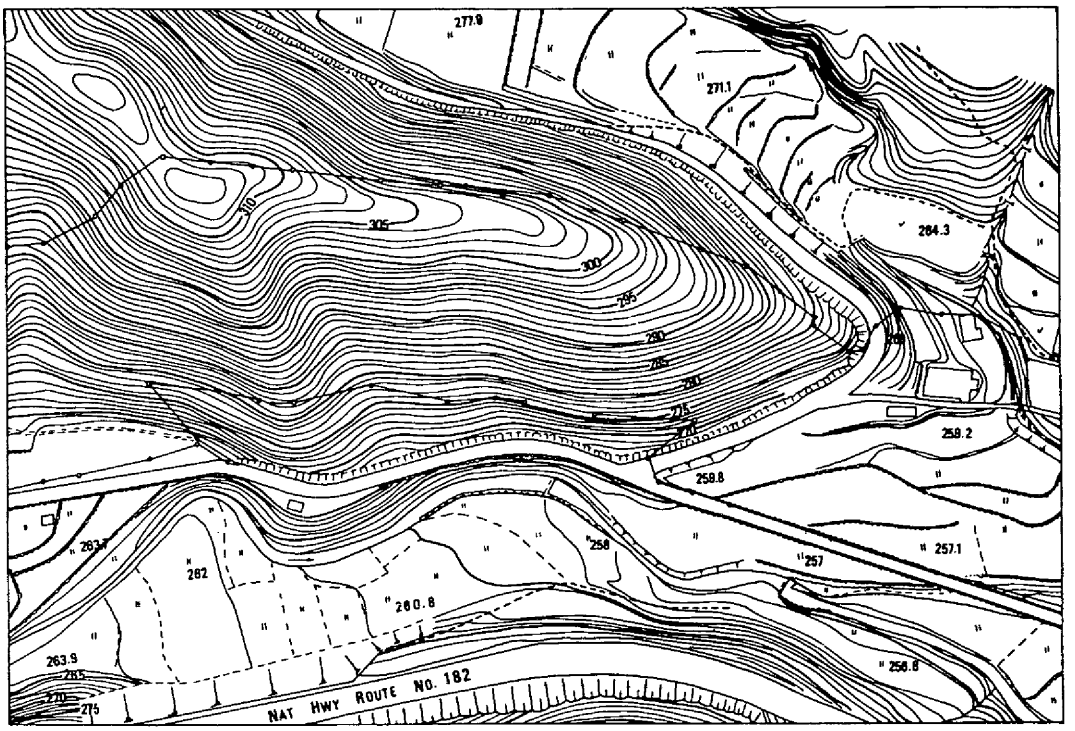


第1図　遺跡の位置（1/50,000）

第3章　遺構の構成

遺跡は丘陵の南東方の一画と，北西方高所の一部に存在する。前者の発掘区では，火葬墓・土壙墓・溝状遺構を検出し，後者の発掘区では窯状遺構・数条の溝状遺構を検出した。

以下各遺構について概略を述べる。

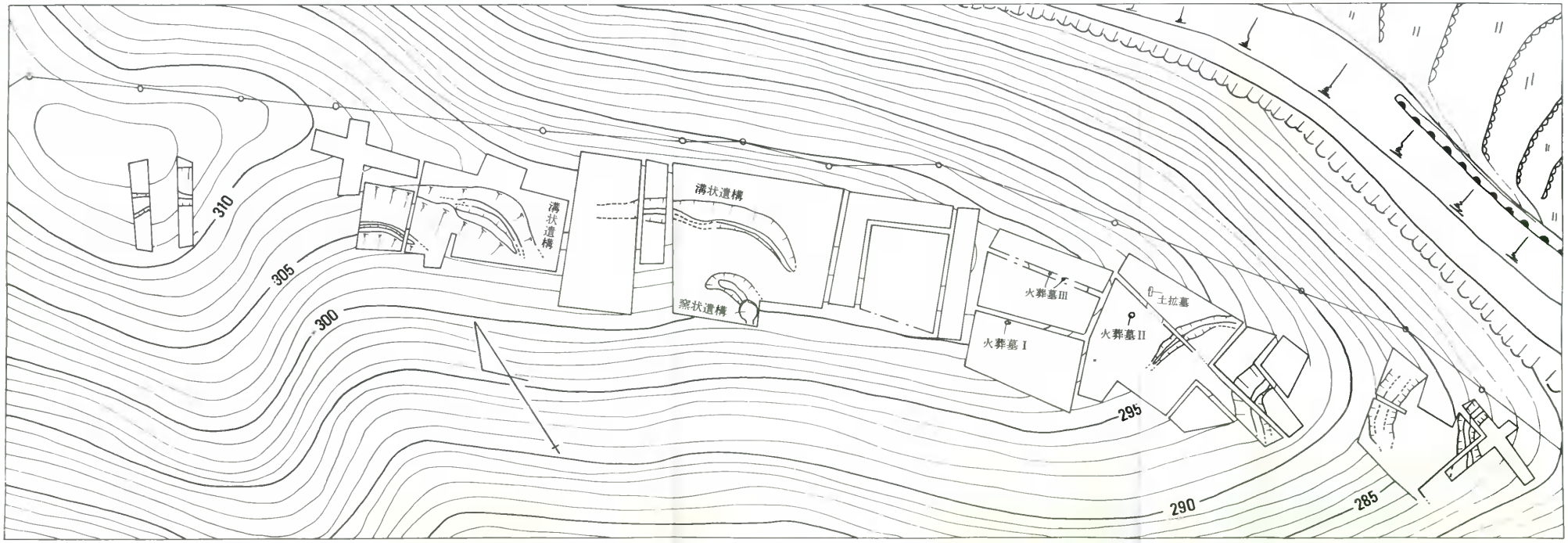


第2図　谷内遺跡周辺地形図（1/20,00）

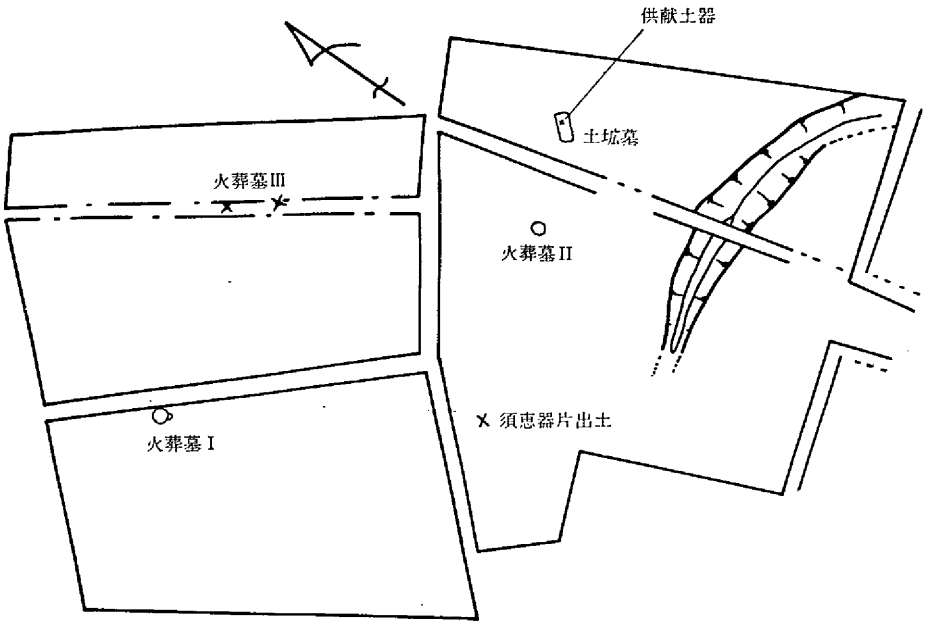
第1節　土　壙　墓（第6図・第7図，図版2）

遺跡の南東方発掘区で検出した唯一の土壙墓である。上面において，土師器高杯・丹塗り土師器片が出土しているのを確認したが掘り方は検出できなかった。地山と土壙墓の埋土はほとんど識別できない含礫茶褐色土で，わずかな土のしまりぐあいの相違によって全長1.5m・幅0.6m・深さ0.6mの土壙を検出した。比較的小規模で，遺存状態も良好であったが，床面においては，遺物を発見できなかった。土壙の主軸はほぼ等高線に平行するが，その周辺では他に土壙の発見をみなかった。

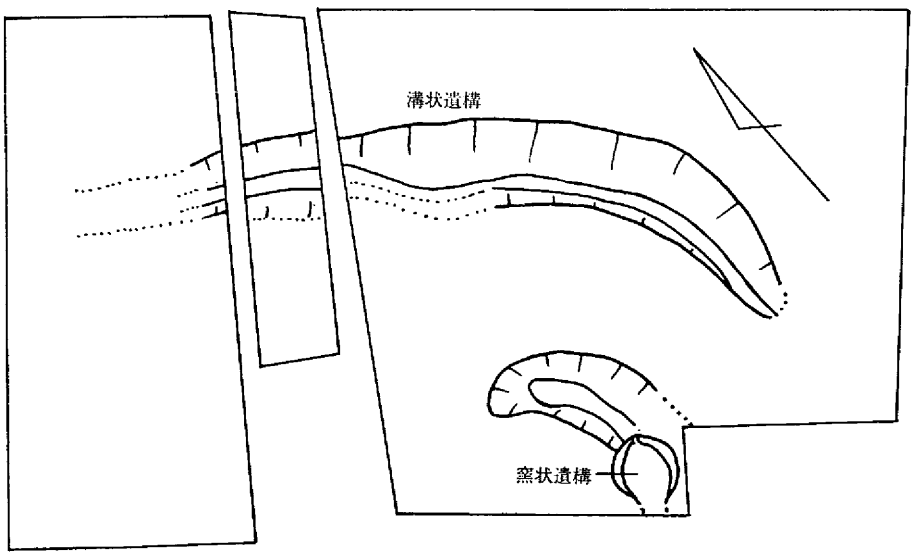
土壙墓に直接伴う遺物としては先述の土師器高杯と丹塗り土師器片がすべてである。第7図-2はいわゆる酒津式に比定される高杯で復元全高9.4cm，杯部径12cm，脚端径10.6cmを測る。器体外面は杯



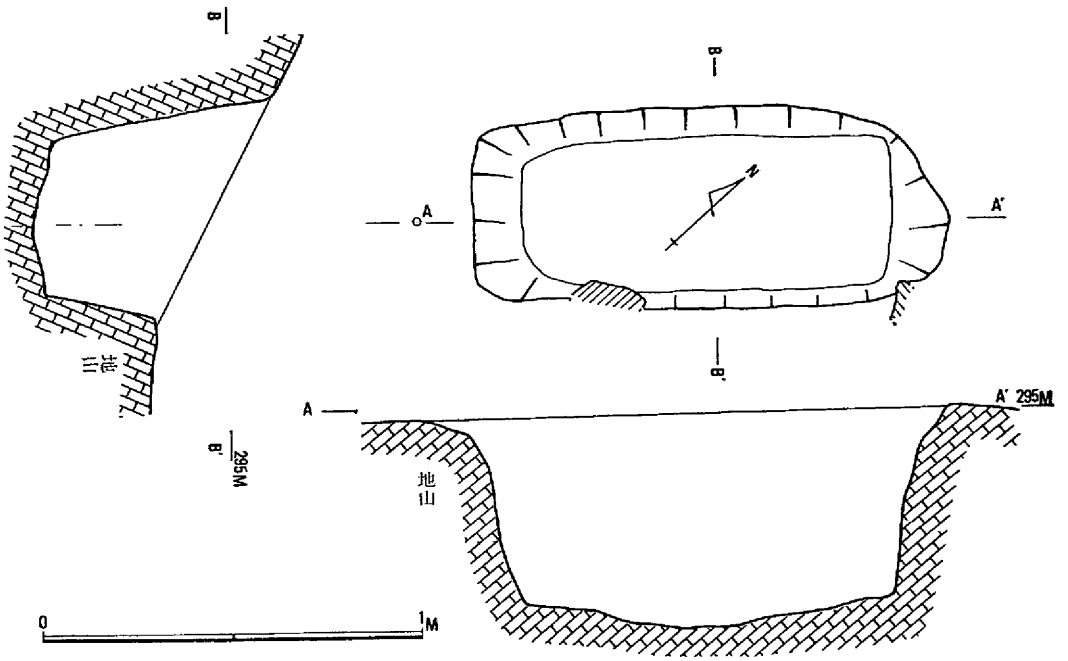
第3図 地形図・発掘区遺構配置図($\frac{1}{500}$)



第4図　火葬墓・土壙墓配置図（1/250）

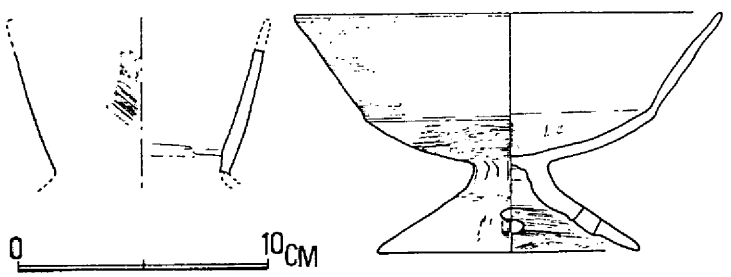


第5図　溝状遺構・窯状遺構位置図（1/250）



第6図　土壙墓平面図・断面図（1/20）

部はヨコナデが施されヘラによるヨコミガキを経て脚部に至る。脚部はタテハケ仕上げを基調とし，一部にタテハケナデ仕上げがみられる。脚部に穿たれた円孔は4個で径約1㎝前後を測る。胎土は石英・長石・雲母の微砂を含む精良な土を用い，焼成良好である。杯部は明るい膚色，脚部は白っぽい膚色を呈する。第7図-1は坩の頸部片で復元口径約10㎝前後となる。外面は丹塗りが施され，内面に丹の一部が流れこんでいるのを認めることができる。外面は縦あるいは斜方向のハケナデ仕上げ，内面は任意のナデ仕上げを行っている。胎土は極めて精良で，雲母の微粒子を多く含む。内面は黄褐色，外面はやや暗い赤色を呈する。以上のほかに白っぽい膚色を呈し，器体外面に丹塗りを施した小片が認められる。図化し得ないが小形壺形土器の破片と思われる。時期的にはいずれも酒津式に属し，弥生時代終末期あるは古墳時代初頭に死者を葬った土壙墓に供献されたものであろう。



第7図　土壙墓上面供献土器（$\frac{1}{3}$）

第2節　火　葬　墓

埋納施設をほぼ残したものが火葬墓Ⅰ・Ⅱと呼称するものである。火葬墓は骨蔵器として用いられたと思われる須恵器壺と須恵器蓋片が出土しているに過ぎない。いずれも先述の土壙墓に近接する，丘陵南東方発掘区に集中している。以下各火葬墓の概要を述べたい。

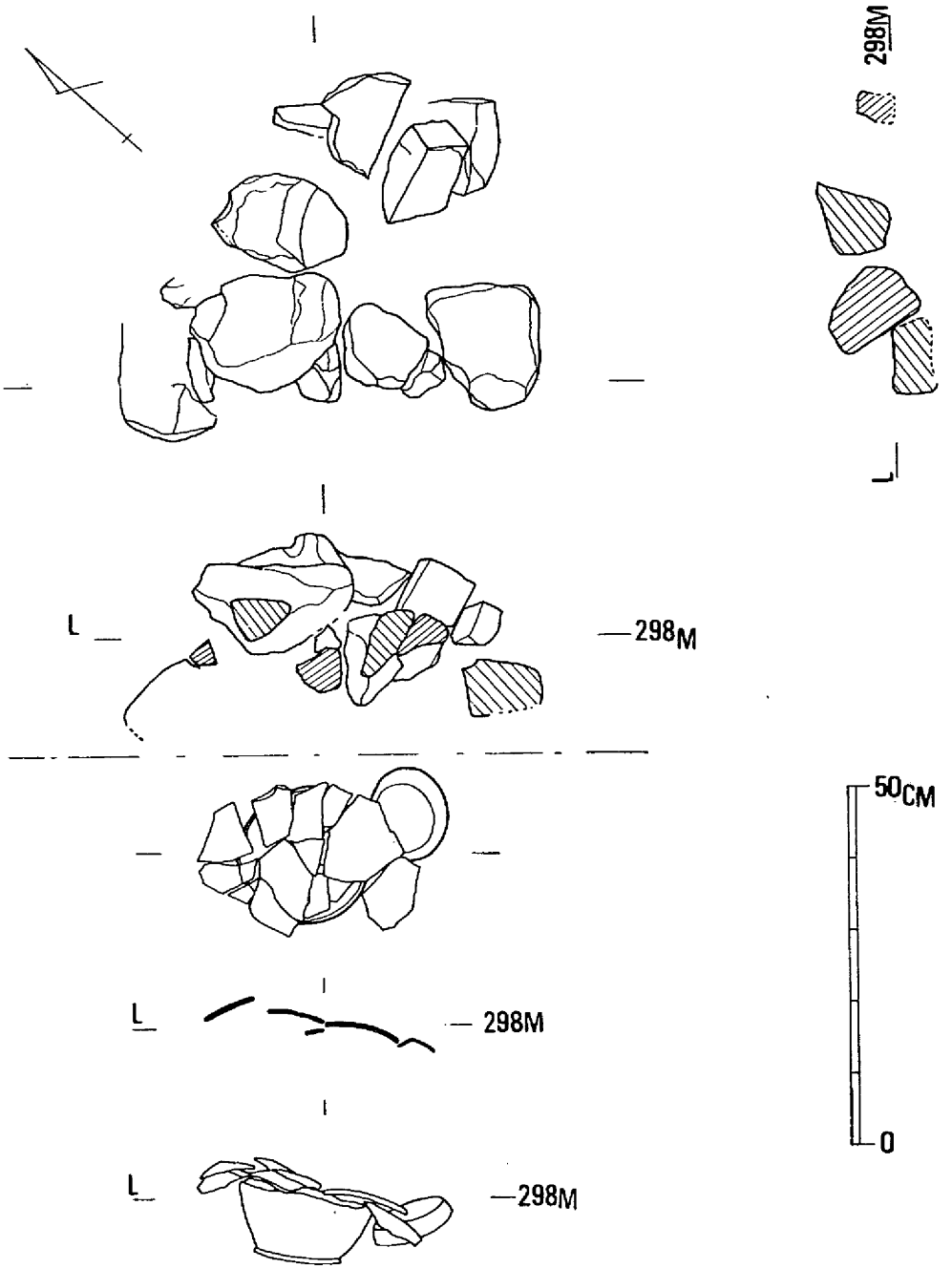
火　葬　墓　Ⅰ（第8～10図，図版3～4）

南東発掘区のトレンチ調査によって検出した。表土より深さ20cmに満たない位置で検出したが南西方の石を一部流失しているほか，ほぼ完存していた。火葬墓は，径約60cmにわたって深さ約20～30cmの掘り込みを設け，扁平な石を骨蔵器の埋置台としている。骨蔵器の周囲は内法一辺25～30cmの長方形を描くように小児頭大ないしは人頭大の石をめぐらせ，骨蔵器埋納の小石槨を築いている。骨蔵器上面も小礫を含む小児頭大の石を用いて被覆しており，かなり手厚く埋葬がなされたことを示している。骨蔵器は須恵器壺の体部の上半をうち欠き転用したもので，蓋には須恵器甕片を用いている。骨蔵器の傍には，須恵器杯が底面を上にして出土したが骨蔵器の上にのせてあったものが転落したか，あるいは骨蔵器の傍に遺存しなかった副葬品の容器として用いた可能性を考えることができる。骨蔵器の中には黄褐色土がつまっていたが，火葬骨の遺存は全く認められなかった。第10図-1は杯あるいは椀と思われる須恵器で，やや鈍重な趣がある。胎土は石英粗砂を多く含み若干の長石微砂を含む，さほど精良とはいえないが焼成良好で内外面共に灰青色を呈している。底部は糸切底で，後に粗雑なナデ仕上げを行っている。ろくろの回転方向は時計まわりである。第10図-2は骨蔵器に転用された須恵器壺で，残存高10cm前後，体部最大径18前後，底径12.4cmを測る。肩部よりやや下った体部より上半を欠いている。体部はゆるやかな弧を描きながら下降し，やや外側に開いた貼付高台に至る。体部外面はヨコナデ仕上げ，内面は底面は任意ナデ仕上げ，体部内面は横方向のヘラケズリとヨコナデ仕上げによって調製されている。底部はヘラケズリを行い高台貼付後，ていねいなナデ仕上げを施している。胎土は石英・長石を含む精良な粘土を用い，焼成は極めて良好，全般的に灰青色を呈している。第10図-3・4は，蓋として用いられた須恵器甕片で全体は丸味を帯び，器体の底部に近い部分である。いずれも外面は平行タタキ文が施され数条のカキ目が走行する。内面は青海波文タタキがみられる。器体はやや薄手につくられ，胎土・焼成共に良好である。以上の須恵器から推察すると，火葬墓の築造は8世紀後半それも平安初期に比定することができよう。

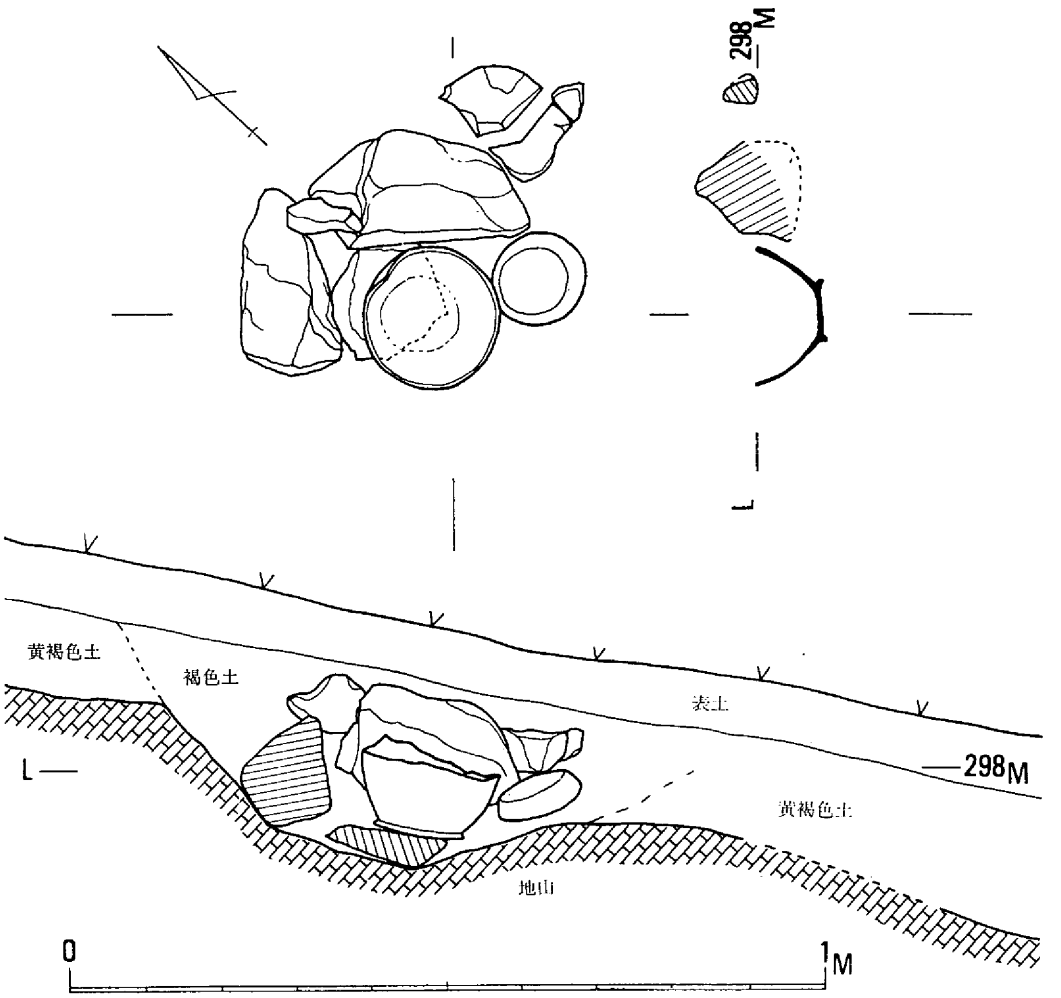
火　葬　墓　Ⅱ（第11・12図，図版5・6）

丘陵の南南西緩斜面に位置する。丘陵上に散在する小児頭大～拳大の石を使って床と周りを囲い，その中に須恵器鉢形土器を骨蔵器とし，土師器甕形土器を蓋としている。掘り方は確認できなかった。遺存状態が悪く，土器はかなり壊れ，石囲いも形が判断できない程である。復元内法は一辺約28cm，高さ約16cmを測る。なお骨蔵器中からは火葬骨，遺物の遺存は認められなかった。

須恵器鉢形土器（第12図-1）は，口径24cm，器高16cmを測る。全体の$\frac{2}{3}$を欠失している。口縁部は



第8図　火葬墓Ⅰ　石組み・骨蔵器埋納状態実測図（1/10）

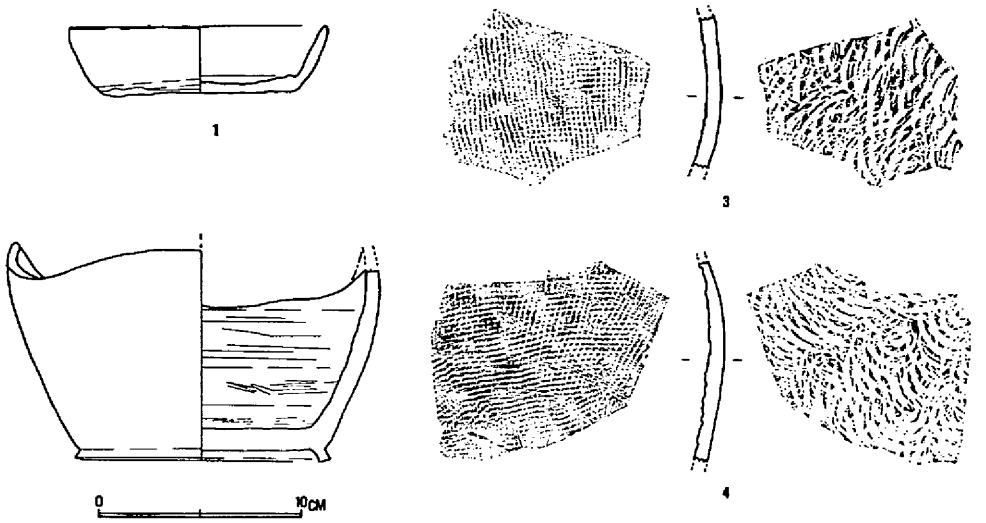


第9図　火葬墓Ⅰ　須恵器骨蔵器・杯埋納状態実測図（1/10）

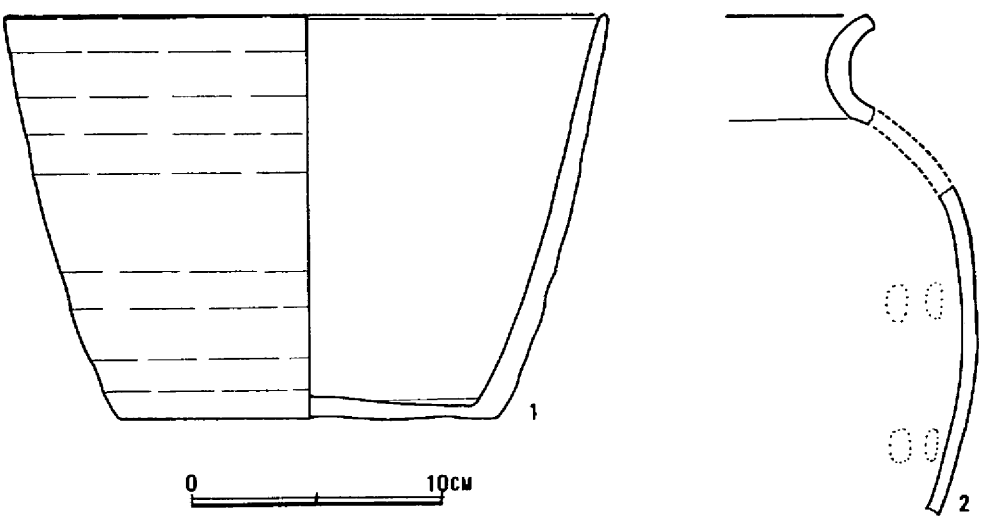
直行し丸味を帯びており，体部はやや内反して底面に至る。底部の器壁は体部よりも薄く中央部が肥厚する。内面はナデ調整し，底部には指頭圧痕が見える。胎土は精良で少量の砂粒を含む。焼成はやや悪いが，白っぽい黄灰色を呈している。

土師器甕形土器（第12図-2）は，口縁部片と体部片で直接接合できなかった。丸味を帯びて外反する口縁部をもつ。口唇部はカギ状に外反する。内外面とも粗い横ナデ仕上げである。体部外面は任意方向の細い刷毛目調整で，内面はていねいなナデ仕上げし，指頭圧痕が見える。胎土中に砂粒を多く含み，焼成は良好である。内面は黒色，外面は茶褐色を呈する。

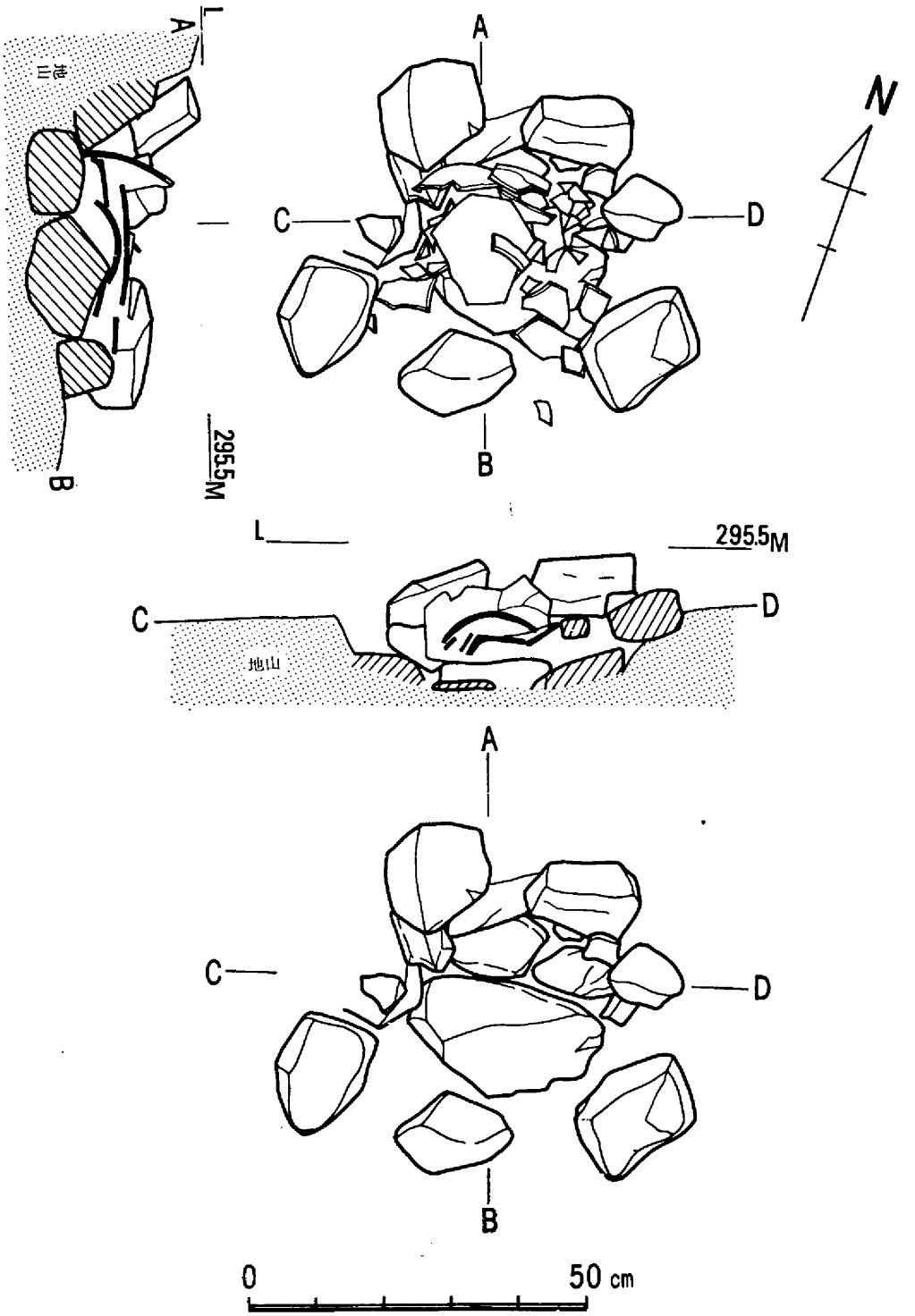
骨蔵外容器として用いられたこれら2点の土器だけからみると明確な時期を把握できないが火葬墓Ⅰと相前後する時期を考えてよいだろう。



第10図　火葬墓Ⅰ　須恵器実測図（$\frac{1}{3}$）

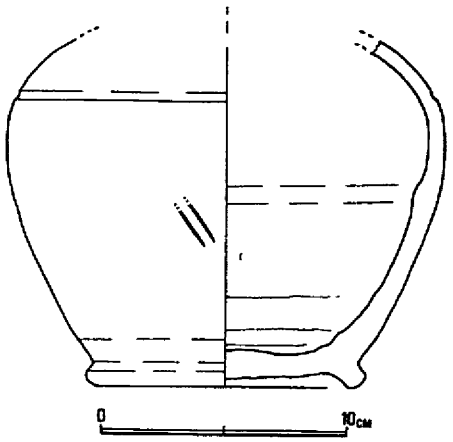


第12図　火葬墓II　須恵器・土師器実測図（$\frac{1}{3}$）



第11図　火葬墓 II　骨蔵器埋納状態実測図（1/10）

火　葬　墓　III（第13図，図版7-1）



第13図　火葬墓III　須恵器実測図（$\frac{1}{3}$）

火葬墓Ⅰの東方約８mに存在したものと考えられ，骨蔵器として用いられた須恵器壺の破片と蓋として用いられた須恵器が出土している。外部施設等は全く検出できなかった。第13図は，破片を復元した壺で肩部よりやや上半より欠失している。火葬墓Ⅰの骨蔵器と同様，もとより完形品ではなかったと思われる。現存最大高13.8cm，体部最大径15.6cm，底径11.3cmを測る壺である。肩部には幅約３～５mmの一条の沈線がめぐり，体部と肩部の境界をなしている。体部に二条の直線的なヘラ描きがみられるが一部欠損する部位にあるためいわゆるカマジルシか否か明らかではない。器体外面はヨコナデ仕上げが施され，内面は凹凸があるが同様の仕上げが施されている。底部はヘラケズリで貼付高台をもつ。高台はやや肥厚し，磨滅が甚しいがやや外方する形状を示す。胎土は石英・長石を含むが比較的精良である。しかし，焼成はやや悪く，内面暗青色，外面青灰色を呈する。この壺のほかに須恵器蓋片が出土したが小片のため図化できなかった。この小片は白っぽい軟質の須恵器でやや甘いカエリをもつ蓋でかなり口径の大きい厚手の破片である。胎土は精良で火葬墓Ⅱの骨蔵器に似るものである。

第３節　窯　状　遺　構（第14図，図版7-2）

丘陵の西側の急斜面中腹に位置する。不整な円形プランを呈する焼成部と方形プランの煙道部，長方形プランの焚き口部で構成されている。全体の形状は気球に似ている。山側に煙道・谷側に焚き口がみられる。外周はきわめて高火度な焼成を受け，表面は灰褐色で深度10cmまで赤褐色を呈している。

煙道は，ほぼ垂直に掘って，焼成部奥壁と境が見えない。深さ65cm，一辺15cmの角柱状を呈する。

焼成部は，ほぼ垂直に掘り，床はやや中央部が窪み，煙道付近が高くなる。床面の傾斜は約10度である。径1.55m，深さ60～80cmを測る。焚き口との境には大人一人持ち大の石が見られる。天井部はドーム状を呈していたと思われ，すべて内側に落下している。

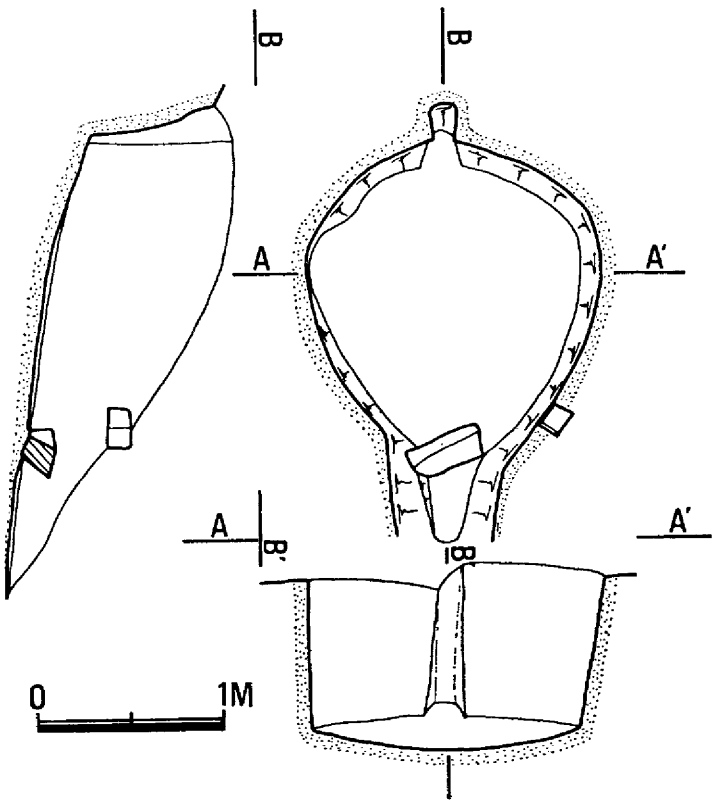
焚き口は，溝状を呈し，断面はU字形である。床面の傾斜は約８度を測る。長さ70cm，幅50～60cmを測る。天井の存在が認められ，ドーム状を呈していたものと思われる。

遺物は，木炭片数片を周辺で採集しただけである。このことから炭焼き窯と考えられ，時期は判らない。

第4節　溝　状　遺　構（第5・15図，図版8）

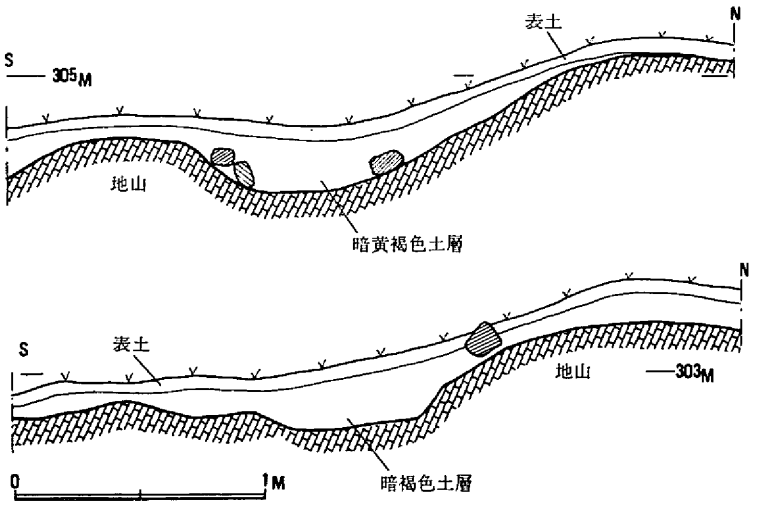
発掘調査区の北西方と南東方の一画に存在する。前者と後者は若干時期が異なる可能性もあるがいずれも「古道」と考えられる遺構である。北西方調査区の数条の「古道」はすべて南東から北西方に走行する。遺物は全く遺存しないが人頭大の礫が埋入している。第15図はいずれもこの地区の「古道」土層断面図で，幅は1.5m前後の部分がもっとも多い。部分的に断面V字形を呈し，幅1m前後を測る地点もみられる。時期は遺物の出土がみられぬこと，伝承が全くないことを加え，不明としかいえない。

南東調査区の「古道」は蛇行しつつ丘陵上方にのび火葬墓Ⅱの南方約6mの地点まで検出することができた。もっとも広い部分で肩幅約4m・道幅約1m・深さ約50cm前後を測る。当初，この溝状「古道」の間に古墳が存在するのではないかと推定されていたが，この溝状遺構が周溝にあたるとは考えられず，更に封土もみられなかったことを考慮すれば古墳が存在した可能性は全くないと断定できよう。火葬墓Ⅱの下方調査区の溝状「古道」付近で，数枚の寛永通宝が出土しており近世墓地が存在した可能性が強く，この溝状「古道」は墓地に通ずる墓道としての性格があったのではないかと推



第14図　窯状遺構実測図（1/40）

察される。あえて無謀な想像が許されるなら，火葬墓が営まれた奈良・平安時代にまで遡りうるのではないかと思われる。この丘陵を登るには尾根筋を上がるのがもっとも安易で，東西方共に急坂をなしていることも見逃すことができないのである。



第15図　溝状遺構土層断面図（1/30）

結　　語

本遺跡は，遺構検出密度が高いとはいえず丘陵の一部の調査であったため十分な成果をあげたとはいえない。検出遺構の中でも，とりわけ土壙墓と火葬墓は重要な発見で，前者は酒津式土器の分布の一点を示している。後者は奈良・平安時代の火葬墓の普及を示し，位置的に交通路を意識している可能性が多分にある。阿新地方では古代寺院の知見が全くなく，将来の発見が待たれるが，７～８世紀代の遺物や埋葬形態の解明を一歩でも進めることによって阿新地方（備中北部）の古代史の実像を明確にしていく視座が築かれるであろう。道路公団と文化庁間における覚え書協定の実施は，実際には新規発見→再契約→即調査というパターンの場合，必ずしも実現されず，本遺跡はある意味で幸運であったと言わざるを得ない。

I .遠　景(南より)

2. 近　景(北より)

図版 2

1．土坑墓上面供献土器出土状態

2．土坑墓（東より）

1．火葬墓Ⅰ検出状態（西より）

2　火葬墓Ⅰ骨蔵器埋納状態（東より）

図版 4

1．火葬墓Ⅰ骨蔵器と杯出土状態(西より)

2．須恵器 杯

3．須恵器 壺(骨蔵器)

1．火葬墓II検出状態(南より)

2．火葬墓II外容器(土師器) 出土状態(北より)

図版 6

1．火葬墓 II 骨蔵器除去状態(南より)

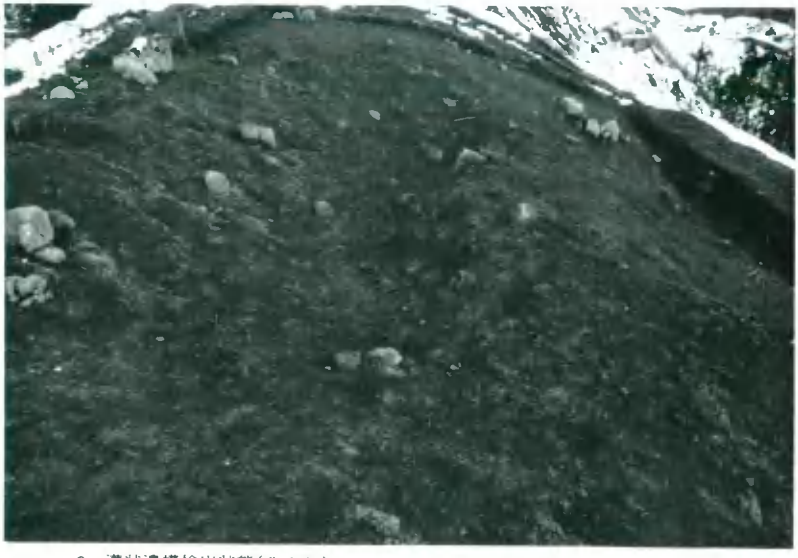
2．火葬墓 II 須恵器鉢(骨蔵器)

1．火葬墓III付近須恵器片出土状態・須恵器 壺

2．窯状遺構検出状況(南より)

図版 8

1．溝状遺構検出状況(南より)



2．溝状遺構検出状態(北より)

下神代の古墳

I　下神代の地理的・歴史的環境

下神代の地理的・歴史的環境

中国縦貫自動車道は西川と神代川のひらいた谷の南面する山裾に沿って通るルートである。神郷町内では南に寄った地域にあたる。

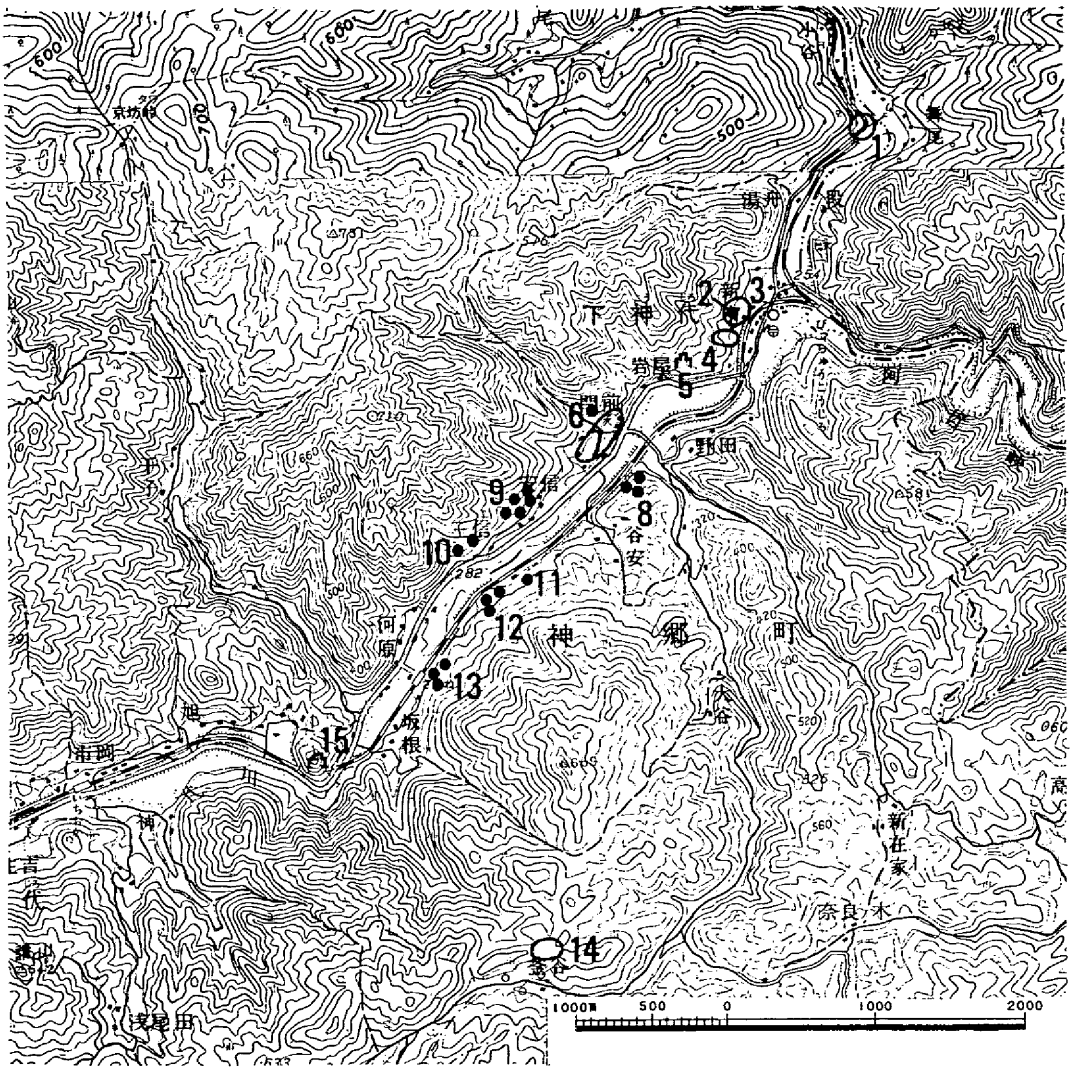
岡山県地質図によるとかなりの部分が中世代後期から新世代初期の迸入岩である。すなわち三室一上油野一新市を結ぶ線から南西のほとんど，高瀬の高旗山から柳原の南へかけて流紋岩類がみられ，安山岩類は谷田峠から明智峠にかけての県境の山と三井山から天神山にかけての山を構成している。

地形についてみると，坂根から小谷にかけて下神代の集落は大部分が段丘と扇状地の二つの地形の所に位置している。坂根，下谷，野田，新市，湯舟は段丘に，河原，三信，安信，門前は扇状地に位置している。地表は全域にわたって黒ボクと呼ばれる火山灰によって被われている。遺跡は古い集落の分布とほぼ一致している。

県北部における旧石器は従来あきらかでなかったが，1976年の調査によって神郷町の北部の野原遺跡において確認された。ここではナイフ型石器及び剝片がローム層中から層位的また面的なひろがりをもって確認されたことから注目されている。縄文時代の遺跡では前記の野原遺跡(註)が古くから知られる。ここでは縄文早期の押型文を主体とし，前期のものも若干ある。下神代では小谷で縄文後期の土器片が採集されている。晩期の土器片は古坊遺跡から出土している。新郷町内の縄文遺跡は長期間継続するものはなく，広い範囲で統一的にとらえられるものであろう。弥生時代の遺跡は神代川沿いに新市，門前に展開している。新市谷遺跡では前期以降，継続し，門前遺跡も中期以降しかわからないが歴史時代まで継続している。他に三信では弥生中期後半の土器を，また，安信では後期前半の土器が若干出土している。南の釜谷では磨製石斧や土器の出土が知られている。北では釜村の周辺に弥生遺跡の分布がみられる。弥生後期から古墳時代初頭に至る土壙墓群は新市谷遺跡の南に接する古坊遺跡で確認された。ここでは特殊器台の出土もあり，新市谷遺跡との関連や県南部の特殊器台との関連などが注目されている。

古墳時代の集落跡は，神代川沿いでは新市，門前など継続している。古墳が小谷，新市，門前，安信，三信，谷安，坂根などに数基ずつ分散して分布していることから，他の集落の存在も予想される下神代の古墳は新市1基，門前1基，安信5基，塚谷2基，谷安3基，三信南1基，河原3基，坂根3基が確認されている。他に箱式石棺は小谷1基，安信2基，新市1基があり，土壙墓は安信に2基ある。墳形はすべて円墳で，内部主体は横穴式石室である。今回の発掘調査による以前に出土品が明らかであったのは仲間古墳で須恵器の平瓶，甕片などがある。神郷町の北部には多数の古墳群がみられる。そのうち，高瀬の小室古墳では銅鏡（捩文鏡）1，直刀（鐔付）1，鉄鏃2，轡1，勾玉，金環を出土しているものがある。他にも直刀，馬具，玉類，須恵器等の出土品が知られている。下神代は地形的にみると上神代，矢田などに近く，この古墳群との関連を考慮する必要があるであろう。歴史時代の遺跡の分布も下神代では神代川の周辺に展開している。岩屋の尾根先端部には平安時代末期の経塚があり，経筒，銅鏡，白磁合子などを出土している。

神郷町は古代において備中国哲多郡に属している。和名抄によると，哲多郡には石蟹（伊波加爾），新見（爾比美），神代（加無之呂），野馳（乃知），額部（奴加多倍），大飯（於保比）という６郷がたてられている。神郷町の地域は一部は新見郷に属し，一部は額部郷に属し，一部は神代郷に属していた。下神代は神代郷に属している。平安時代の中ごろから後になると神郷町の地域は３人の領主の所有となり，下神代は上神代とともに神代郷として花山院家の所領となっている。新市と岩屋の中間の



第１図　下神代の遺跡分布図

1.小谷遺跡　2.三方塚古墳　3.新市谷遺跡　4.古坊遺跡　5.岩屋城跡　6.門前古墳　7.門前遺跡　8.谷安古墳群　9.安信古墳群　10.塚谷古墳群　11.三信南古墳　12.河原古墳群　13.坂根古墳群　14.釜谷遺跡

中田山の山頂には岩屋城（別名中田山城）があり南北朝時代楢崎左京亮景宗が開いたといわれる。川を隔てた野田の後の山にも砦がある。上神代の境，武坂山の山上には武坂山城が所在する。この城は室町幕府の管領職細川頼之の一族羽場左馬佐頼房が城代として居城していた。近，現代に形成される町並を除けば中世，近世の開発によってほぼ現在の集落と生産地が形成されていたものであろう。

（註）安東　信「野原高原採集の縄文遺物」『倉敷考古館研究集報』第8号，1973.7

Ⅱ 安 信 古 墳 群

目　　次

第1章 調 査 経 過…… 193
第1節 調 査 の 経 緯…… 193
1 調査に到る経過…… 193
2 立　　地…… 193
3 調 査 経 過…… 193
第2節 日　誌　抄…… 196
第2章 遺 構・遺 物…… 197
第1節 安信古墳群の調査…… 197
a 1 号 墳…… 197
b 2 号 墳…… 200
c 3 号 墳…… 205
d 4 号 墳…… 211
e 5 号 墳…… 212
f 6 号 墳…… 212
g 土 壙 墓…… 214
h 7号墳及び遺構に伴わない遺物…… 214
第2節 三信調査区の調査…… 217
1 調 査 経 過…… 217
2 遺　　構…… 219
3 遺　　物…… 219
4 ま と め…… 225
第3章 総　　括…… 226

図　目　次

第1図 地 形 図 (1/1,500)…… 194
第2図 遺構配置図 (1/400)…… 195
第3図 1号墳断面図 (1/60)……折込
第4図 1号墳実測図 (1/40)……折込
第5図 1号墳平面図 (1/30)…… 198
第6図 1号墳出土遺物実測図 (1/3, 1/2)…… 199
第7図 2号墳地形図 (1/150)…… 201
第8図 2号墳実測図 (1/40)……折込
第9図 2号墳縦横断面図 (1/80)…… 202

第10図　2号墳平面図（1/30）…… 203
第11図　2号墳出土遺物実測図…… 204
第12図　3号墳実測図（1/40）…… 206
第13図　3号墳平面図（1/20）…… 207
第14図　3号墳出土遺物実測図（1/3，1）…… 208
第15図　3号墳出土遺物実測図（1/2）…… 209
第16図　4号墳実測図及び出土遺物実測図（1/3）（1/20）…… 211
第17図　5号墳実測図（1/40）……折込
第18図　5号墳平面図（1/30）…… 212
第19図　6号墳実測図及び出土遺物実測図（1/2）（1/20）…… 213
第20図　1号土壙墓実測図（1/30及び出土遺物実測図（1/3））…… 215
第21図　2号土壙墓実測図（1/30）…… 216
第22図　7号墳及び遺構に伴わない遺物実測図（1/3）…… 216
第23図　三信調査区調査範囲…… 217
第24図　土層断面図…… 218
第25図　柵列実測図…… 219
第26図　弥生式土器，土師器実測図…… 220
第27図　須恵器実測図（1）…… 222
第28図　須恵器実測図（2）…… 223
第29図　土錘，土玉実測図…… 224
第30図　鉄鏃実測図…… 225
第31図　下神代地域の古墳分布図　（1/5万）…… 229

表　目　次

表1　2・3号墳出土玉類計測値表…… 210
表2　土錘・土玉一覧表…… 224

図　版　目　次

図版1-1　古墳群遠景（南より）
図版1-2　古墳群近景（北東より）
図版2-1　発掘前の1号墳（後方より）
図版2-2　1号墳のトレンチ調査
図版3-1　1号墳全景
図版3-2　1号墳石室内
図版4-1　2号墳の全景

図版4-2　2号墳石室の全景
図版5-1　2号墳石室内の状態
図版5-2　2号墳とその掘り方
図版6-1　3 号 墳 全 景
図版6-2　3号墳敷石排除後の状況
図版7-1　3号墳遺物出土状態
図版7-2　3号墳遺物出土状態（細部）
図版8-1　4　　号　　墳
図版8-2　6　　号　　墳
図版9-1　5号墳の全景
図版9-2　5号墳とその掘り方
図版10-1　土壙墓検出状態
図版10-2　1号土壙墓遺物出土状態
図版11　1号墳出土遺物
図版12　2号墳出土遺物（須恵器S $\frac{1}{3}$，その他は実物大）
図版13　3号墳出土遺物
図版14　古墳，土壙墓出土遺物
図版15-1　三信調査区調査前（北東より）
図版15-2　表土除去後全景（南西より）
図版16　三信調査区出土遺物

第1章 調 査 経 過

第1節 調査の経緯

1. 調査に到る経過

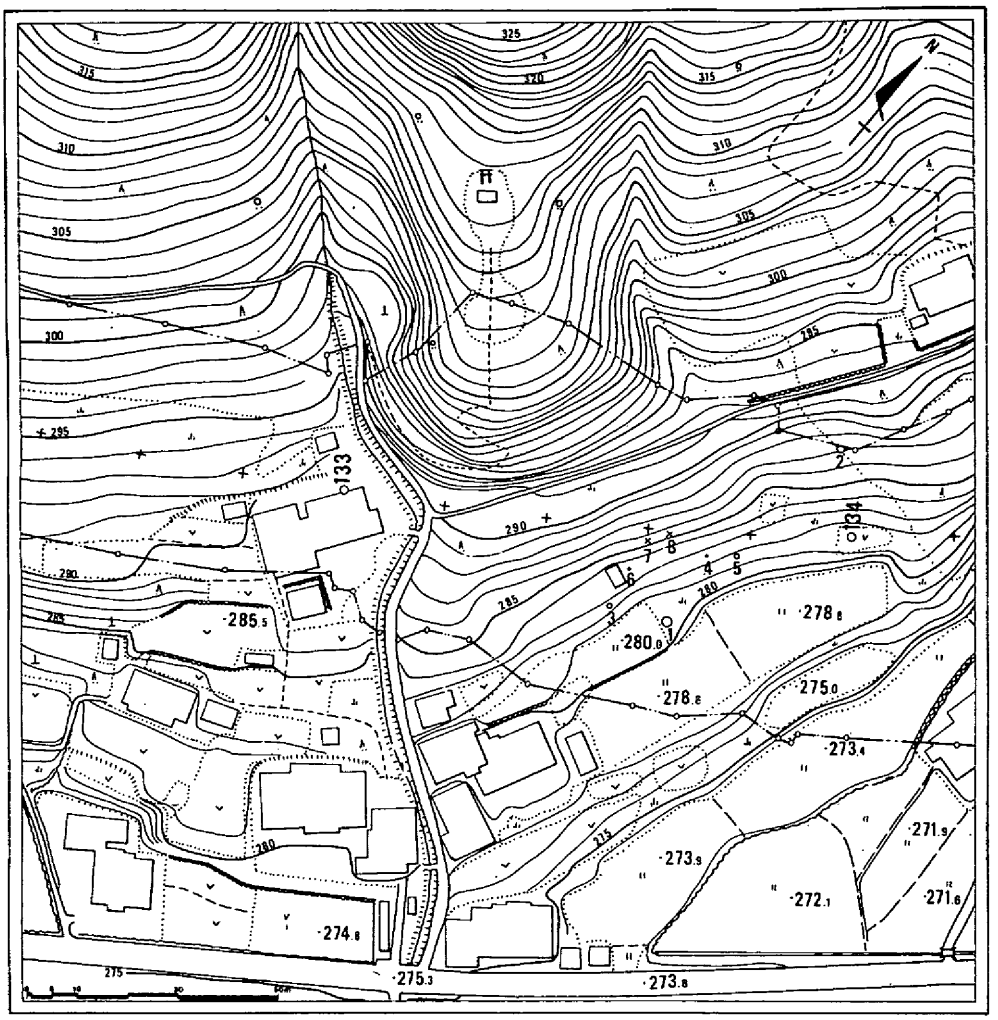
昭和49年4月現在での新見以西の調査遺跡数は8ヵ所であった。そこで，調査の万全を期すために，同年7月に，調査員全員による再確認踏査を実施した。その結果，遺跡の総数は20数ヵ所に増大した。綿密に踏査したものであるが，まだ未確認の遺跡があった。安信古墳群は，そうした遺跡の一つであった。その後，在地の歴史研究者より，町教委，県教委文化課へ，神郷町下神代地内に古墳群が所在する旨の連絡があった。そこで，同年11月頃，県教委は，同地において古墳の所在することを確認した。同所には，横穴式石室一基の一部が露出していた。さらに，地形等を考慮し，2～3基の古墳の所在を予測した。以上のようにして確認したこの古墳群を，同地の小字名に拠り，安信古墳群とした。

2. 立 地

古墳群は，神代川により開析された帯状の平地に面する低台地上に位置する。南面する台地の前方に有る平地は狭く，護岸の確定していなかった時期における耕地は，自然災害等により大きく限定されていたものと思われる。この神代川により開析された平地の周辺には，2～3基単位の古墳群の所在が知られている。現在知られるものは，横穴式石室墳であるが，いずれも，その規模等に大きな差はない。その点は，ほぼ同規模の小単位の集団が，この平地を生活の本拠地として点在していたと考えられる。それ等古墳群の中にあっては，比較的有利な位置に所在していると言えるであろう。

3. 調 査 経 過

古墳群の調査は，横穴式石室の一部を露出する古墳を1号墳とした。そして，それ以外の古墳の有無を確認することから調査に着手した。まず，同所の地形の認識から，急斜面より緩斜面に変る付近から，低位の部分を重視してトレンチを設定した。まず，1号墳の東北約50mに石が散在する場所があった。そこで，散乱する石群の中央付近にトレンチを設定して掘り下げたところ，天井石を流失した横穴式石室を検出した。これを2号墳とした。また，1号墳の北西約10mに板石状の石が在り，石棺の可能性を考慮してトレンチを設定し，掘り下げたところ，横穴式石室であることを確認した。これを3号墳とした。その他に，必要に応じてトレンチを設定した。また，緩斜面では，古墳以外の遺構も予想されるため，可能なかぎり広い面積を掘り広げることにした。その結果，横穴式石室（5号墳），石棺（4号墳，6号墳），土壙墓（1号，2号土壙墓）を確認した。調査は，それ等の全てを調



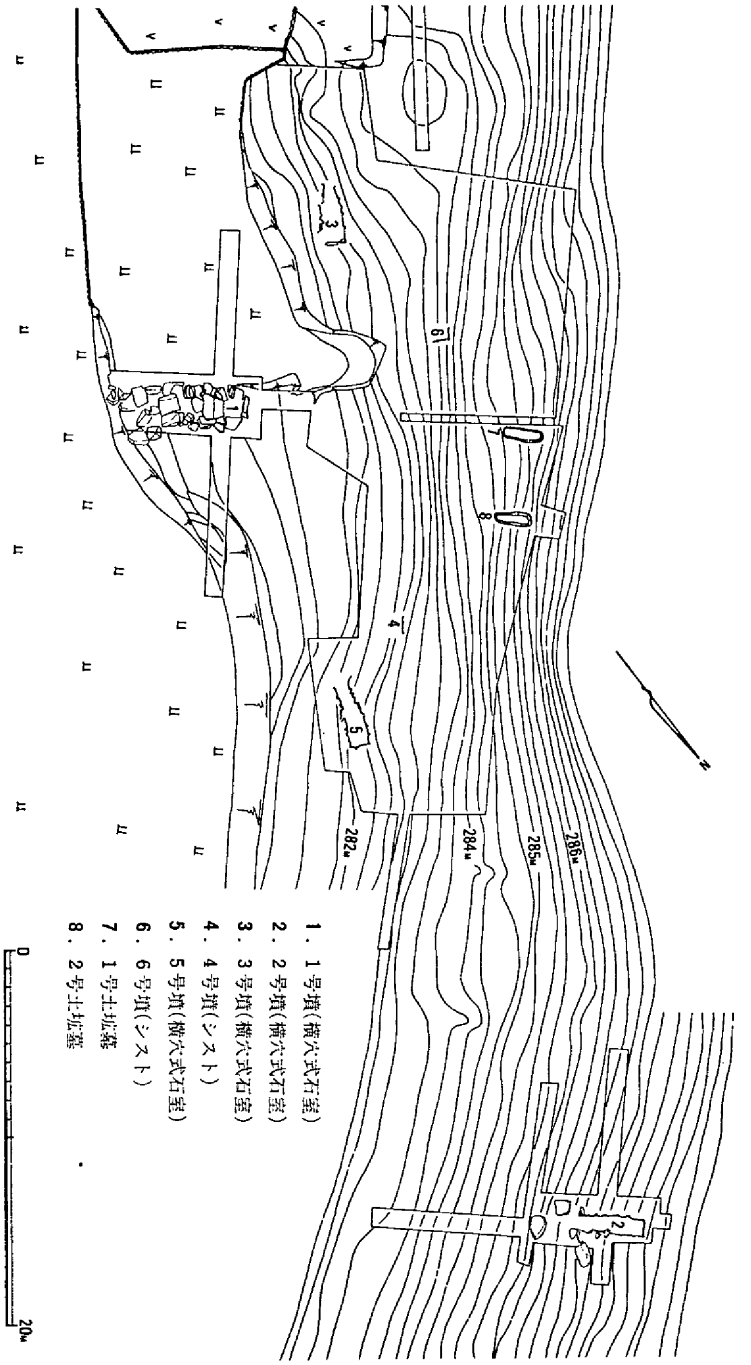
第1図 地 形 図 (1/1,500)

査することにした。発掘調査面積は，400㎡である。トレンチ調査の結果，黒色土の堆積は厚く，特に平地に向かうに従いその層は厚い。そのため，1号墳では，黒色土層中に横穴式石室を構築していた。そのことは，石室を築造するための掘り方，墳丘の盛土等の状況を観察することを困難にし，ほとんど不可能にした。

横穴式石室4基，石棺2基，土壙墓2基の調査を完了して数ヵ月後，自動車道の建設が開始された。工事開始後，ブルドーザーが遺跡内を通った後に，直に現地におもむき，現地を観察していた時，工事作業員より須恵器の出土した旨を聞いた。そこで，所在の明らかな須恵器の収集と，出土状態の確認に努めた。それ等を総合すると，さらに1基の古墳が所在したことが確実となった。そこで，それを7号墳とした。

安信古墳群の西端に小さな谷川がある。この谷川を境に，西側の字名を三信と呼称している。この三信地内も，安信古墳群と地形的に似るものがあった。この南面する緩斜面に2～3の土盛状のものが見られた。それは，あたかも古墳を予想させるものであった。また，緩斜面の範囲は広く，生活址としての可能性も大きいものと予測された。調査は，土盛状のものの性格を明らかにすることから着手した。さらに緩斜面にトレンチを設定し，生活址等の有無の確認に努めた。その結果，土盛状のものは，同所を開墾する時に出た石を積み上げたものと判明した。また，トレンチからは，明確な遺構は検出されなかったが，弥生式土器等が出土しており，かつては生活址等も存在したものと推測される。

（井上）



第2図　遺構配置図（S:1/400）

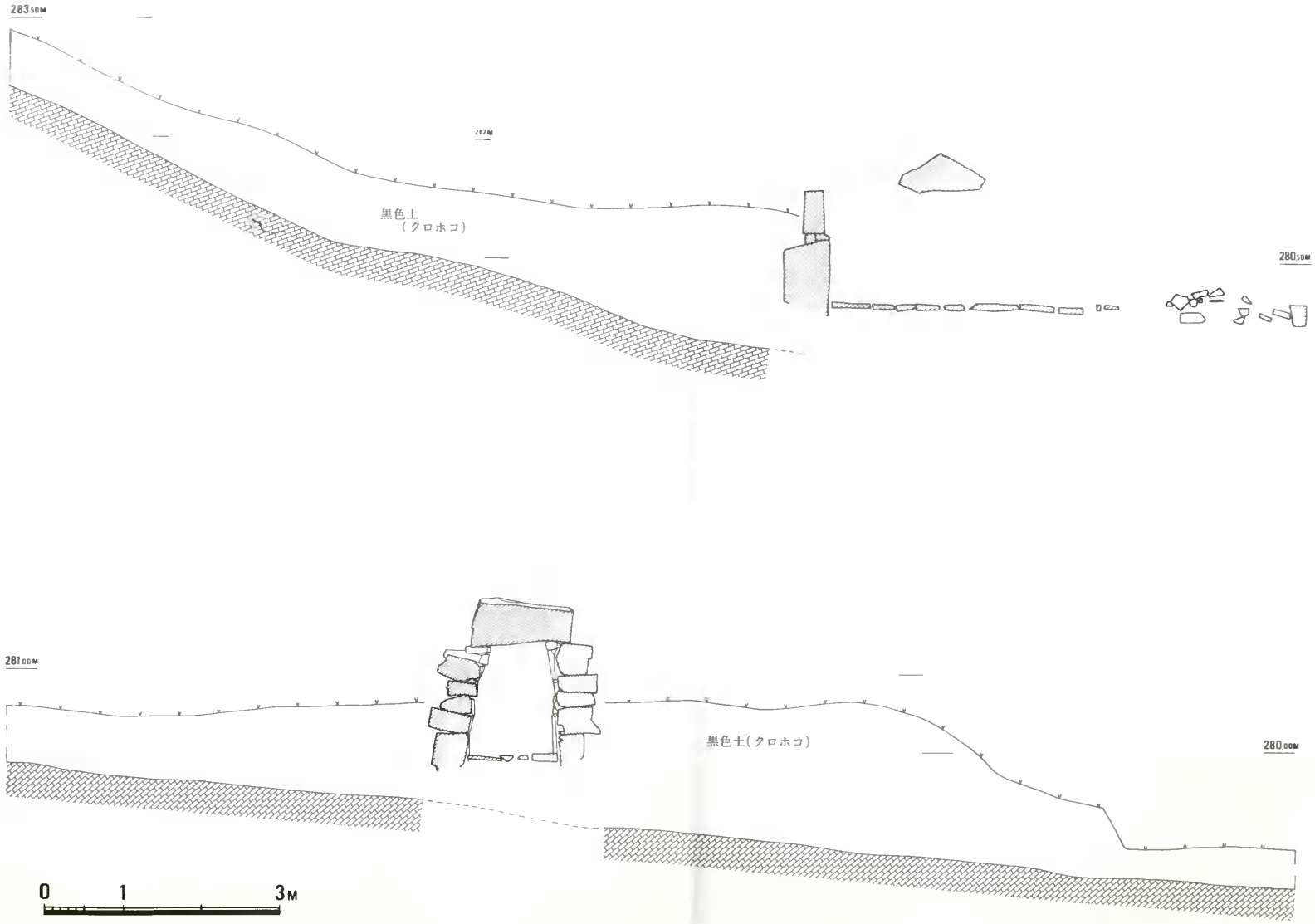
第2節 日 誌 抄

1975年4月22日	機材搬入
4月23日～24日	草刈り
4月25日～5月5日	1号墳地形測量。古墳確認のトレンチ調査。
5月6日～21日	2号墳の発掘開始。石室残存状態は比較的良かった。十字にトレンチを設定し，A，B，C，Dトレンチとした。
5月22日～23日	2号墳石室内清掃。写真撮影後割付けを行う。
5月24日	2号墳石室実測開始，1号墳発掘開始。トレンチを十字に設定。
5月27日～6月3日	2号墳石室実測。遺物取上げ，掘り方の確認。1号墳石室内掘り下げ。A，B，Cトレンチの掘り下げ。
6月4日～9日	2号墳石室解体。1号墳床面清掃。1号墳の西側にトレンチを設定し掘り下げたところ石室にあたり，3号墳とする。
6月10日～12日	1号墳写真撮影。石室実測開始。
6月13日～21日	3号墳地形測量。緩斜面に遺構があるかも知れないので，全面表土剝ぎを行うことにする。1号墳石室実測。
6月22日～26日	4号墳発掘開始。シストであったため，26日に完了。1号墳調査完了。
6月27日～30日	5号墳調査開始。6号墳はシストで残存状態は悪い。土壙墓の調査開始。
7月1日～9日	6号墳写真撮影後実測を行う。5号墳は遺物なし。写真撮影後実測を行う。
7月10日～13日	5号墳調査完了。3号墳発掘開始。古墳群中一番古い時期のものであった。
7月14日～15日	床面清掃後写真撮影。
7月16日～17日	石室の実測。遺物取上げ。
7月18日	安信古墳群発掘調査完了。器材搬出。

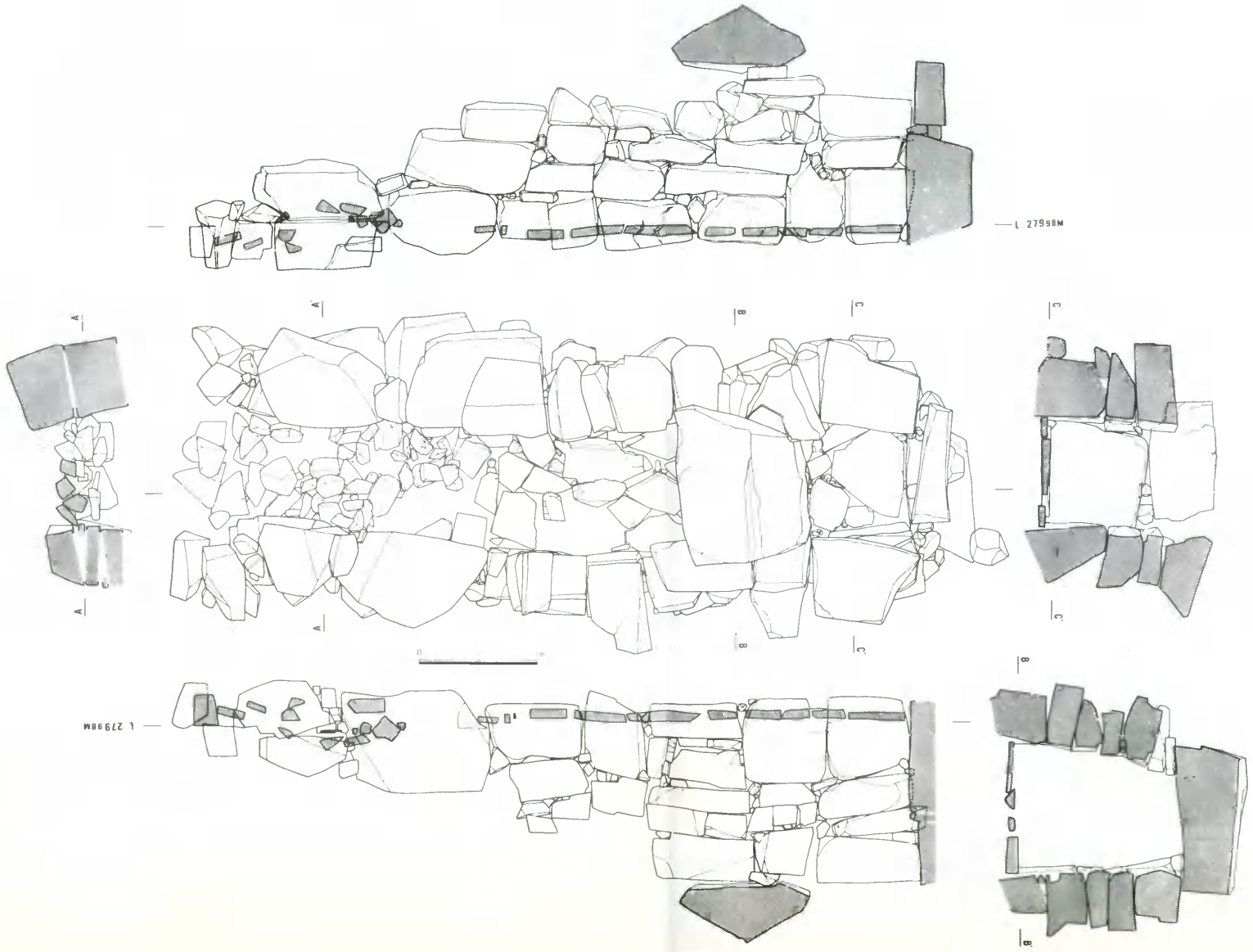
安信古墳群作業員

三輪武志	奈須真吾	田辺光男	内田忠美
嶋田孝士	田辺寅雄	入江繁一郎	難波石男
岡西キヨ子	木下絹子	高山常子	嶋田波子
福原桂子			

本報告書の作成に当り，遺物の実測については，岡本寛久，奈良大学滝本正志の協力を得た。



第３図　１号墳縦，横断面図（$\frac{1}{60}$）



第4図　1号墳実測図（S:$\frac{1}{40}$）

第2章 遺 構，遺 物

第1節 安信古墳群の調査

a) 1 号 墳（第3～5図，図版2・3）

安信古墳群の調査において，最も残存状態の良好であった古墳である。発見当初の1号墳は，一枚の天井石，数個の側壁，それに奥壁が見られ，横穴式石室墳としての概略の規模と形状を推測させるものがあった。1号墳は，同古墳群の中にあっては，最も平地に近い位置に在った。内部構造である石室は南東に開口する。

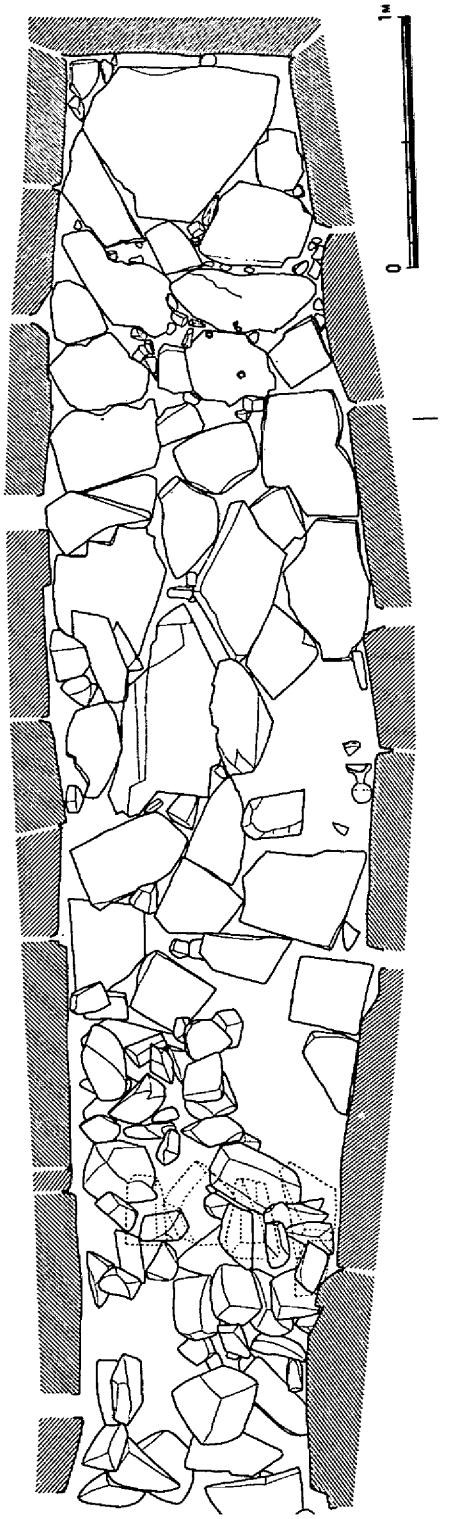
＜墳 丘＞（第3図）

調査は，主軸方向と，それに直交するトレンチの設定から着手した。古墳は，羨道部の前端で，約1.5mの段差のある崖になっており，1号墳に関係する遺構は削平されているものと推察された。そこで，トレンチ調査も奥壁より後方，及び両側の三方向に限定して遺構の有無の確認を行った。その結果は，両側のトレンチにおいては黒色土の堆積が厚く，同層内における遺構の確認作業は難しく，遺構の検出はほとんど不可能であり，古墳に関係すると考えられる遺構は検出されなかった。奥壁より後方に設定したトレンチにおいても黒色土の堆積は厚いのであるが，山側に向かうに従い，黄色粘質土の層位が高くなるため，遺構の黄色土に達する可能があった。しかし，黒色土の堆積が厚いため，墳丘の盛土の状態の観察は不可能であった。しかし，奥壁から7mの地点で，黄色土層を切り込む溝状の遺構を検出した。この溝は，トレンチの東側では黄色土の層位が低下するために検出は不可能であった。西側は，土取りのために大きく削平されており，その溝の延長は明確に追求することはできなかったが，わずかに溝の痕跡と推察できるものが見られた。それ等の状況から，同古墳は，直径約13mの円墳と推定される。

＜石 室＞（第4図，図版3）

1号墳の内部構造は，全長6mを測る無袖式の横穴式石室である。石室は，奥壁に向って左側は，ほぼ直線に造られているが，右側は，ゆるく弧を描くもので，胴張りの形状を呈している。石室の床面での計測値を示すと，奥壁部分で88cm，最大幅130cm，羨道の入口で90cmを測る。側壁は，最下段に大形の石を置き，上段にはやや小形の石を横口積にするものである。天上石の残る部分に石積の状態を見ると4段積である。

床面（第5図）は，扁平な板石を敷きつめており，奥壁から390cmまで敷石が見られる。敷石の上面より天井石までの高さは，140cmを測る。敷石の終る部分から，石室の入口までには閉塞石が見られた。閉塞石は，人頭大のものから，長径30cmの大きさの石が多く用いられていた。この閉塞石の間から，1点ではあるが鉄滓が出土した。



第5図　1号墳平面図 (1/30)

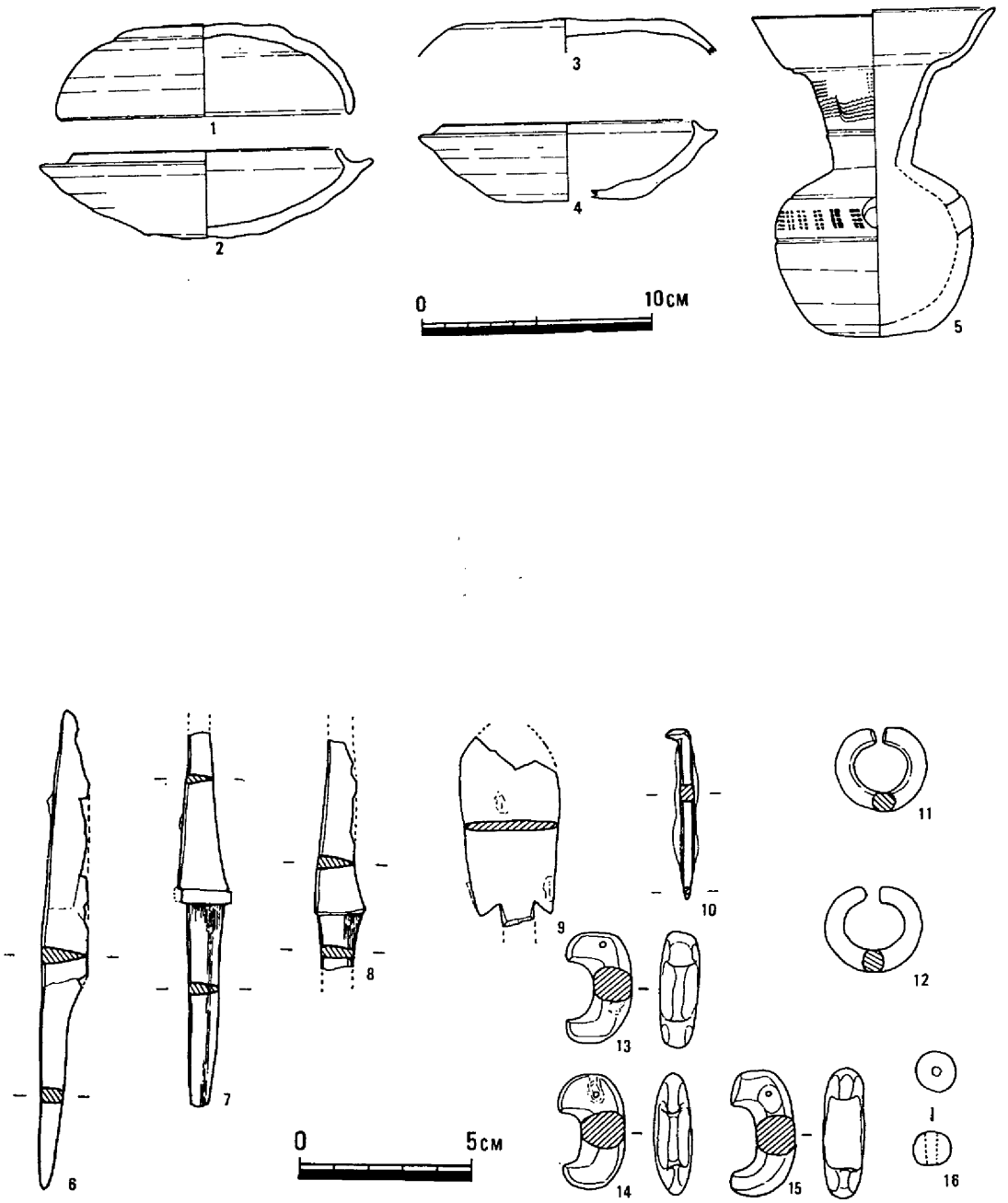
＜出土遺物＞(第6図，図版11)

1号墳からの出土遺物は，須恵器5，鉄器5，耳環2，勾玉3，丸玉1の合計16点と少ない。この中で，床面で検出した遺物は，須恵器，耳環，勾玉の8点である。その他の遺物は，床面上ではないが，床面に非常に近い位置から出土している。

須恵器　出土数は5点である。石室のほぼ中央の壁に接して出土した。

1は，蓋杯である。口縁部と天井部を分ける線はない。天井部は一段高く盛り上り，上面は，ほぼ平坦である。口縁端部は丸くおさめられている。器体の内外は，ナデ，ヨコナデが見られる。焼成は良好で，色調は灰紫色を呈する。2は，杯である。口縁部の立ち上りは低く，大きく内傾し，端部は丸くおさめられている。受部も鋭利さはなく，端部も丸くおさめられている。底部は浅く，全体にゆるく弧を描き，底面は丸い。焼成は良好で，色調は青紫色を呈する。1，2で1組になるものと考えられる。4も杯である。口縁部の立ち上りは低く，大きく内傾している。端部は丸くおさめられている。受部は短く，ほぼ水平に開き，端部は丸い。器体の内外にはヨコナデが見られる。底部浅く，底面にやや平坦面が見られる。焼成は良好で，色調は灰色を呈する。5は，甕である。頸部は細く，長く伸び，口縁部は大きく開く。口縁部と頸部の境には1本の凹線が施されている。頸部には，烈点文と，櫛描による波状文が施文されている。体部は丸みをもち，底面にやや平坦面をもつ。体部には2本の凹線文が施されており，その間に烈点文が施されている。

鉄器　刀子3，鉄鏃1，釘1の5点が出土している。6，7，8は刀子である。6は，完形品で，全長13.5cmを測る。7，8は，刃部の使用の



第6図　1号墳出土遺物実測図（$\frac{1}{3}$・$\frac{1}{2}$）

著しいもので，茎に木質が残存している。9は，平根式の鉄鏃で，逆刺を有する。最大幅は2.8cm，残存長5.5cmを測る。10は，釘である。全長4.8cm，胴部は0.4×0.45cmを測る角釘である。

耳環 敷石面で検出したものである。いずれも青銅製である。耳環の大きさは，11が，2.7cm×2.23cm，12が，2.8cm×2.5cmを測るものである。

勾玉 いずれも奥壁に近い位置から出土した。15は，敷石面で検出したものである。3個ともに形状は類似しており「コ」字形を呈するものである。13は，白メノウ製で白色を呈している。長さ，3.2cm，幅1.95cm，胴部の径は，0.95×1.2cmを測る。14も白メノウ製である。長さは，3.25cm，幅1.87cm，胴部の径1.15×1.2cmを測る。16は，丸玉である。材質は凝灰岩で，径1.11cmを測る。孔は一方より穿たれている。（井 上）

b） 2 号 墳

2号墳は古墳群の北端，斜面がやや急傾斜をなす所に位置する。

この古墳は完全に埋没していたため，分布調査の時点では確認できず，古墳群発掘調査開始後の遺構確認トレンチによって発見されたものである（第7図）。

調査は石室残存部土面を検出後，石室の主軸方向とそれに直交するトレンチを設定し，墳丘，周溝などの有無を確認するとともに，石室内の掘り下げを行った。

墳丘はすでに大半は流失しており，トレンチ断面においても，土を盛ったような痕跡はなく，また周溝も確認できなかった（第9図）。ただこのトレンチ調査の結果をもって，周溝が無かったとは言えない。なぜならば，厚く堆積した黒色土の中に遺構が存在する場合，遺構内に異質な物が混入していないかぎり，それを識別することは非常に困難であり，検出することは不可能に近い。したがって墳丘ならびに外部施設については，多くを明らかにすることができなかった。ただ墳丘に関しては，石室自体が深く掘り込まれており，石室をおおうだけならばそう多くの土量はなかったものと推察される。

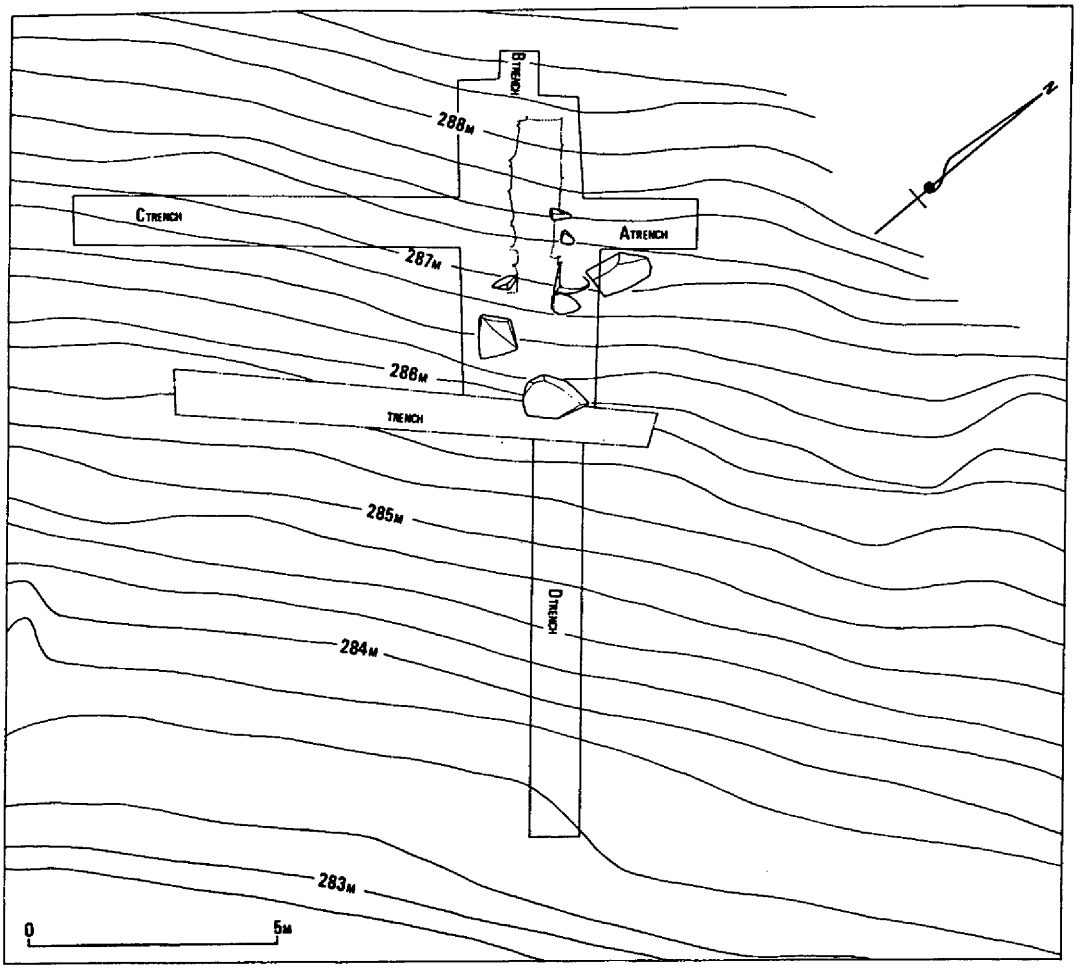
＜石　　室＞（第8～9図，図版4～5）

石室は南東に開口する。やや胴張りを呈した無袖式の横穴式石室である。当初の予想より残存状態は良好であり，奥壁近くではほぼ天井近くまで遺存していた。

石室は黄褐色粘質土層の地山に石室構築用の土壙を掘り，その中に構築されている。側壁の石積は，下段では一番広い面を使用し，中段では横に広い面を使用，上段では一番狭い面を使用し築造している。奥壁も基本的には側壁と同じで，下段は広口積，中段は横口積，上段は小口積となっている。側壁と奥壁の関係は，石室に向って右側の側壁下段は，奥壁の横にあてられ，左壁は奥壁の手前につけられている。そして右壁は奥壁に対し直角をなすが，左壁は少しずつ幅を増し，またせばまるという胴張りをなしている。

また石室には玄室と羨道を区別するような施設はなく，閉塞石より内は玄室と言えるであろう。

石室内床面は，黄褐色土まじりの黒色土を地山の上に敷き，さらにその上に石を敷きつめている。この敷石は，奥壁から1.5mの所までは角のとれた丸味のある石であるのに対し，これより入口までは扁平な石を使用している。このことが，追葬の段階で新しく敷石をつぎたしたものか否かは，遺構



第7図　2号墳地形図（S:1/150）

の上からはもちろん，少ない遺物からは何とも断定しがたい。

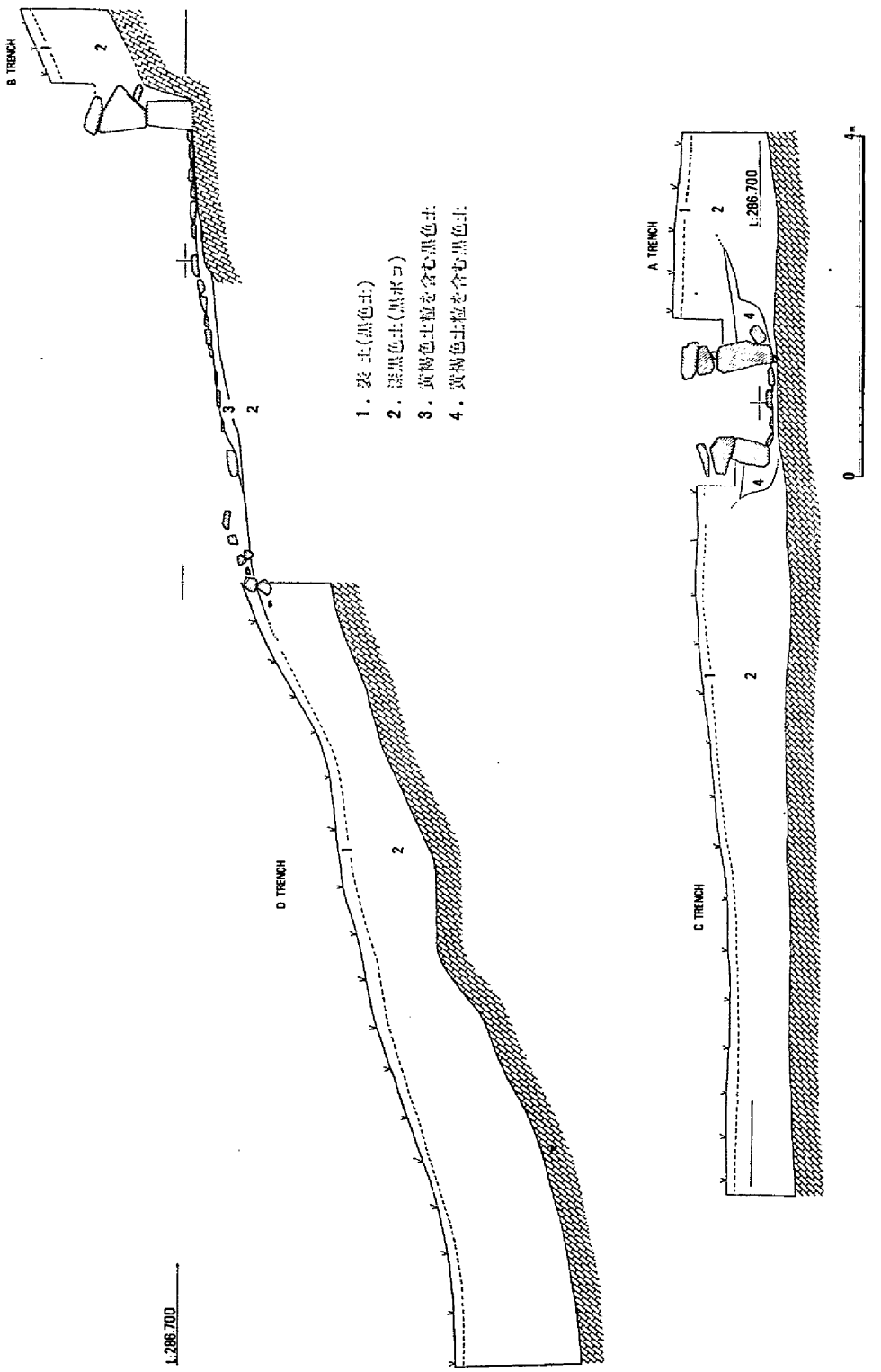
＜遺　　物＞（第11図，図版12）

石室内の遺物量は少なく，奥壁近くに須恵器の杯，金環，丸玉があり，入口近くに須恵器の高杯があった。その他の玉類は，床面上の土や敷石間に落ち込んでいたものをふるいにかけて捜したものであるため，正確な出土位置は不明である。また敷石下より繩文時代のものと思われる石鏃が1点出土している。

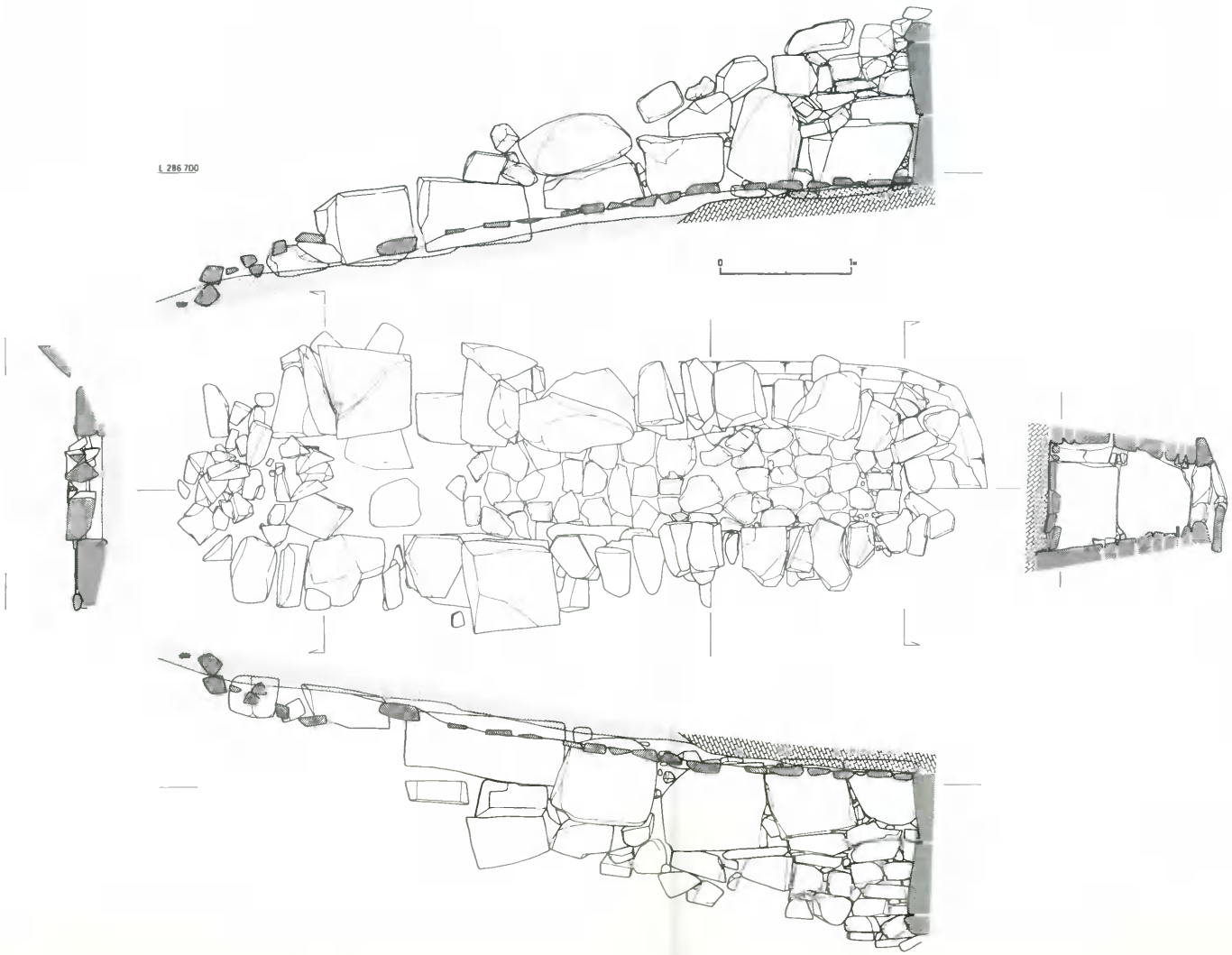
須 恵 器（第11図1～3，図版12）

1は杯で，奥壁に接して完形で出土した。口径は12cmと小型化し，立上りは短く内傾している。底部は通状のヘラ削りではなく，不明瞭であるが押えるようなナデによって仕上げている。概してやや粗雑で，胎土には砂粒を含む。色調は灰色を呈し，焼成は良好である。

2は奥壁近くに散乱していたもので，復元をしてみたが，完形にはならなかった。口径は12cm，器



第9図　2号墳縦・横断面図（S:1/80）



第8図　2号墳実測図（S:$\frac{1}{40}$）

高4.5cmを測る。体部は横ナデによって仕上げているが，底部は粘土紐をラセン状に巻上げた痕跡が残存しており，わずかにナデが認められる。

3は高杯で，石室の入口に近い所より出土した。口径14cm，器高8.5cmを測る。胎土に砂粒を含み，灰褐色呈する。

装身具類（第11図4～19，図版12）

4～42，53，54は土製の小玉である。胎土に砂粒を含まず，黒褐色を呈している。おそらく黒色土を焼いたものであろう。

43は水晶製切子玉である。

44～47は丸玉で，44が緑色を呈するガラス製であるほかは，すべて流紋岩製である。流紋岩は神郷町一帯に広く分布しており，たやすく入手できたであろう。

48，52はガラス製の小玉で，紺青色を呈している。

55～57は勾玉である。55は土製であるが，そのほかは瑪瑙である。

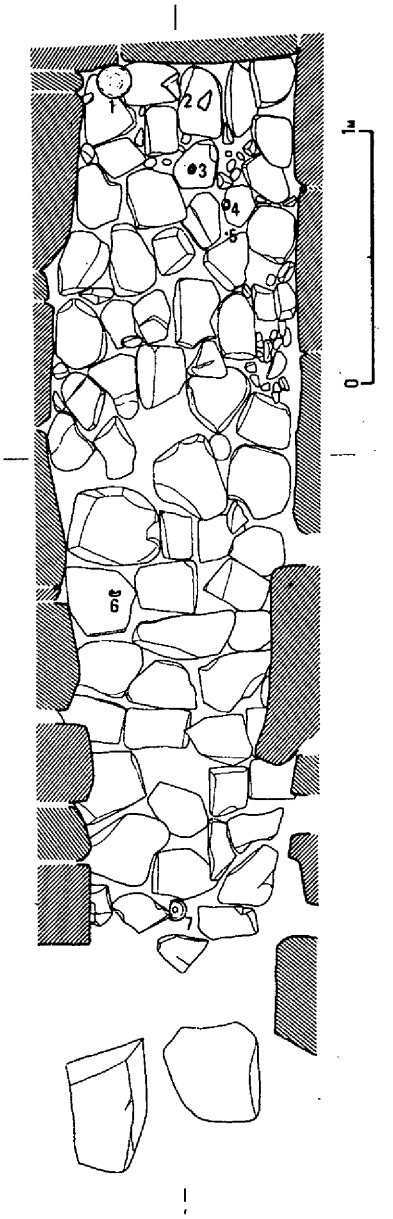
58，59の耳環は石室の奥壁に近い所より出土したものである。銅芯金張りであるが，金張りの大部分は剝落しており，ほとんど青錆びた銅芯だけになっている。断面は円形をなす。

60は繩文時代のものと思われる黒曜石製の石鏃である。敷石下より出土したもので，付近に繩文時代の遺跡が存在したのかも知れない。

＜小　　結＞

2号墳はすでに墳丘が流失していたが，石室は比較的良く残存していた。

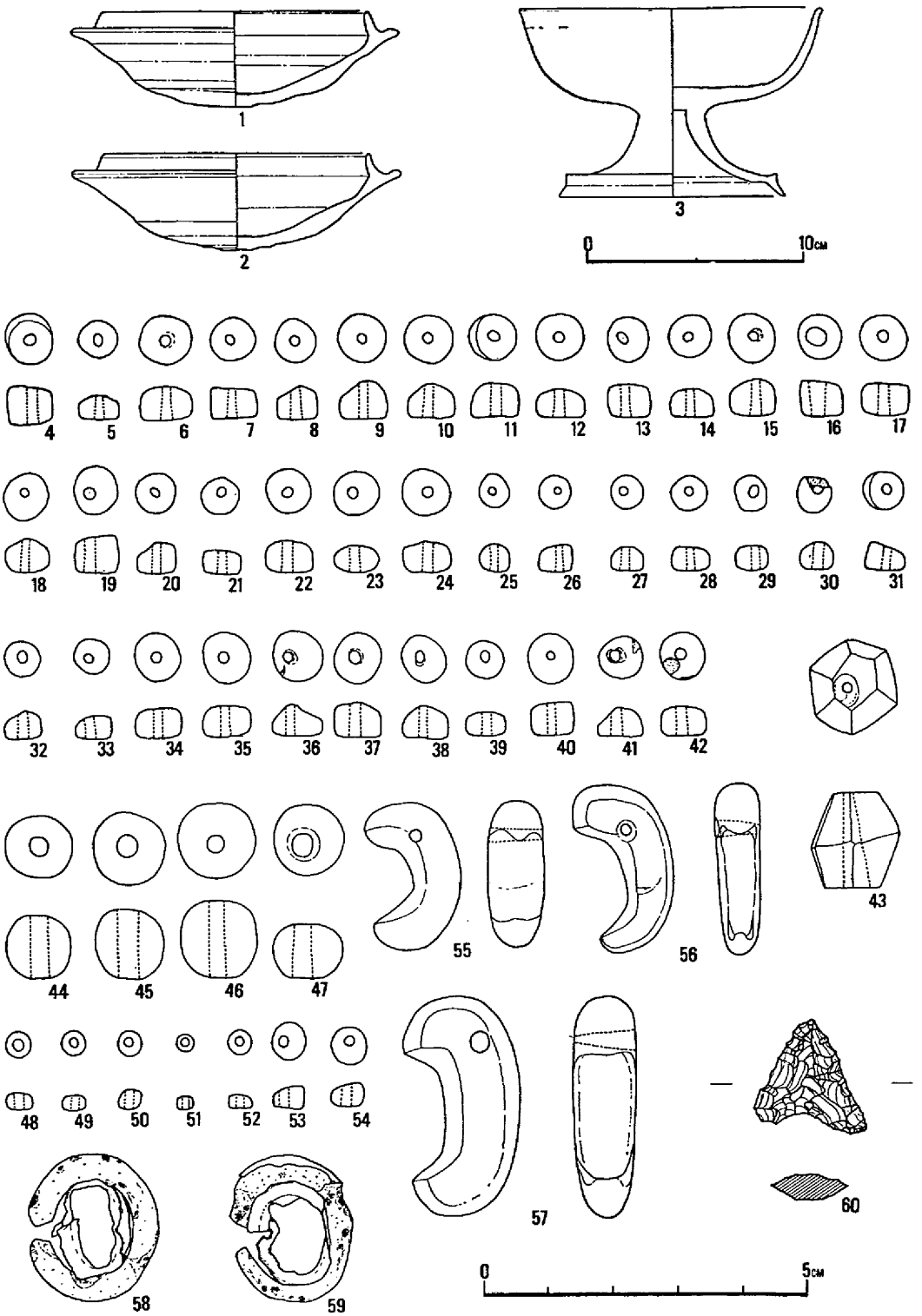
石室は無袖式の片側が胴張りをなす横穴式石室で，南東に開口している。



第10図　2号墳平面図（S:1/30）

石室は黄褐色粘質土の地山に「コ」字状の土壙を掘り，その中に構築されている。側壁は持送りに作られ，下段は広口積，中段は横口積，上段は小口積となっている。

石室の床面は石を敷いているが，石室中央よりやや奥壁に近い所を境に，異なった石を使用している。



第11図　2号墳出土遺物実測図

遺物は概して少なく，須恵器と装身具類だけであり，鉄製品は1片も検出できなかった。もとから副葬品が少ないのか，盗掘によって持去られたものかは不明だが，本古墳群の他の古墳を見ても同じような傾向が認められることから，本来副葬品は少なかったものと思われる。その少ない副葬品の中でも，須恵器にくらべ装身具類が多いことは，被葬者の性格を考える上で重要である。

2号墳石室内の埋葬者数は最低2人は考えられるであろう。石室中央より奥の丸味がかった石を敷いた部分は，石室構築時に作られたもので，その上に耳環が一対残存していた。したがってここに1体は埋葬されているだろう。敷石前半部は板石で作られており，奥の部分と区別するためか，追葬の時に新たに敷かれたものであろう。こちらの敷石上からは須恵器の高杯が1個体出土しているが，奥壁の須恵器との時期差はあまり感じられない。したがって追葬があったとしても，短期間の内になされたものであろう。

本古墳の築造時期は，須恵器から6世紀末ないし7世紀初頭と考えられる。　　（竹　田）

c）　3　号　墳（第12・13図，図版6・7）

1号墳の南西約10mの位置で検出した古墳である。当初は，同地点に幅15～20cmを測る石があり，石棺である可能性があった。そこで，石材に直交するトレンチを設定し，遺構の有無を確認するために掘り下げた。その結果，敷石面と礎を検出した。以上のことから，同地点に古墳が所在することを確認した。調査は，石室の主軸方向と，それに直交するトレンチを設定し，墳丘，周濠等古墳に関係する遺構を確認することから始めた。トレンチを掘り下げたところ，黒色土の堆積が厚くて，遺構の検出の難しい土層であることもあって，石室の周囲には，古墳に関連する遺構は検出されなかった。

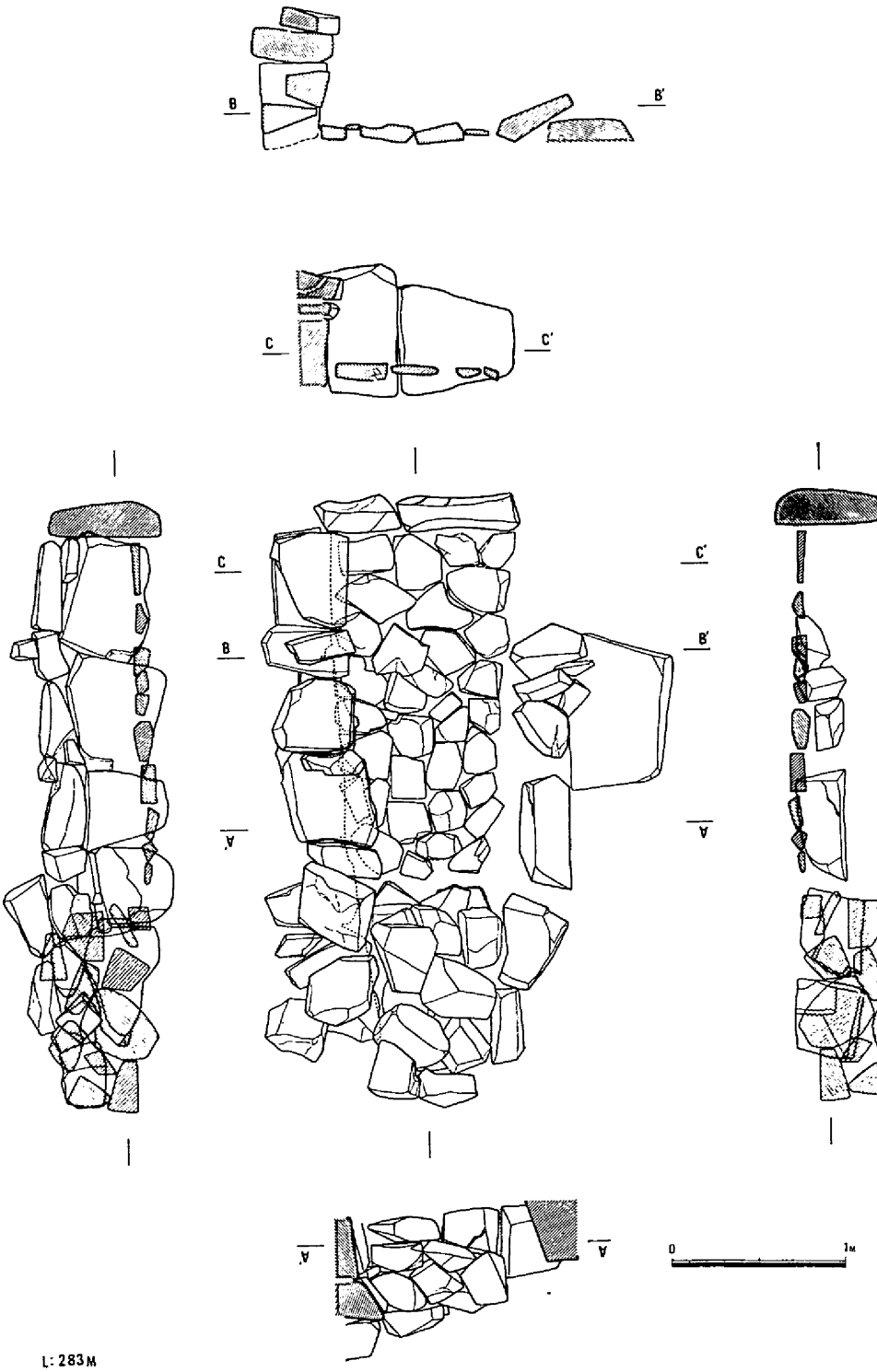
＜石　　室＞（第12図，図版6・7）

古墳の内部構造は，ほぼ北西に開口する全長255cmを測る無袖式の横穴式石室である。石室の遺存状態はけっして良好ではなく，片方の側壁が二段残存するのみである。他方は，若干の石材も残るが，元来の位置に在るものは無い。側壁の石積の状態は，下段に比較的大形の石を用い，その上に小形の石を横口積にするものである。側壁の構築の状態を見ると，両側壁とも奥壁に直交し，直線的に築造されている。奥壁は，厚さ約20cmの石材を2枚立てるものである。

床面（第13図）には，奥壁から200cmまで扁平な石を敷きつめるものである。石室の規模を見ると，奥壁の部分で，幅105cm，敷石の終る部分で，85cmを測る。羨道部には，閉塞石が残存していた。それ等の石は，長径30～40cm程度も大きさのものを使用していた。この古墳群の中にあって，3号墳のみが，石室の形状を若干異にしていた。つまり，他の横穴式石室は，一方の側壁は直線的であるが，他方の側壁は胴張りに造られていた。しかし，3号墳の側壁は，両側ともに直線的に築造されていた。この点は，後述する出土遺物とともに，同古墳群を考える上で示唆的であると言えるであろう。

＜出土遺物＞（第14・15図，図版13・14）

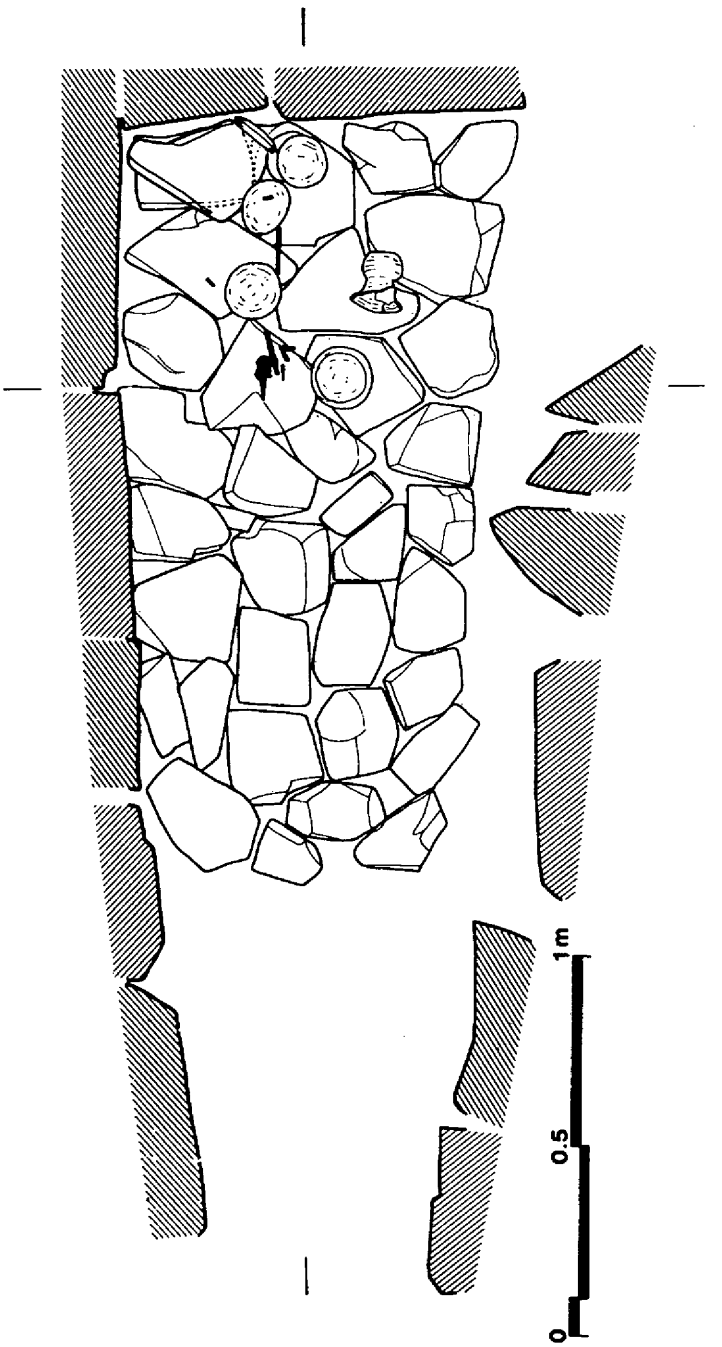
2号墳からの出土遺物は，須恵器7，玉類24，鉄製品6の合計37点である。出土状態は，横穴式石室の奥壁に近い位置の敷石上に一括して検出した。須恵器蓋杯，杯の形態差から一回の追葬を考える



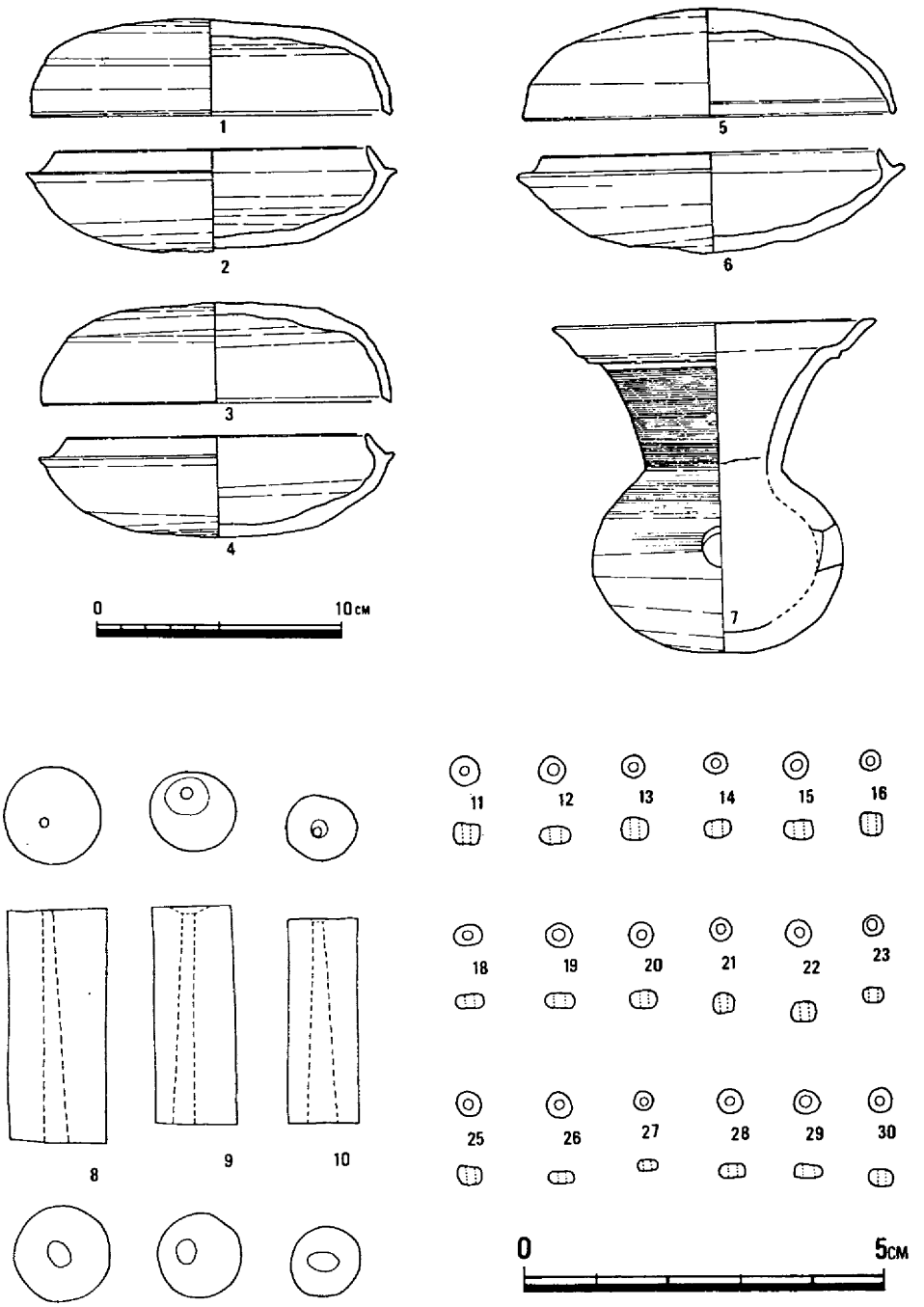
第12図　3 号 墳 実 測 図 (1/40)

ことができる。

須恵器 蓋杯3，杯3，甕1の7点が出土しており，いずれも完形品である。1，3，5は，蓋杯である。1は，天井部と体部を区画する明瞭な境は見られないが，浅い凹線によって区画せられている。天井部は扁平で，あまり丸みをもたず，粗いヘラ削りが見られる。口縁端面は，内側に傾斜しており，内面との境は明瞭な稜線をもつ。焼成は良好で，青灰色を呈する。法量は，口径14.7cm，器高4.1cmを測る。3は，天井部と体部の境に極めて浅い凹線がみられる。天井部は丸みをもたず，粗いヘラ削りがみられる。口縁端面は，内側に傾斜しており，稜線は明瞭である。器体の内外には，ヨコナデ，ナデが見られる。焼成は良好で，色調は青灰色を呈する。法量は，口径14.2cm，器高4.2cmを測る。5は，天井部と体部との境が明確でなく，鈍い稜線が見られる。天井部にヘラ



第13図 3号墳平面図(1/20)

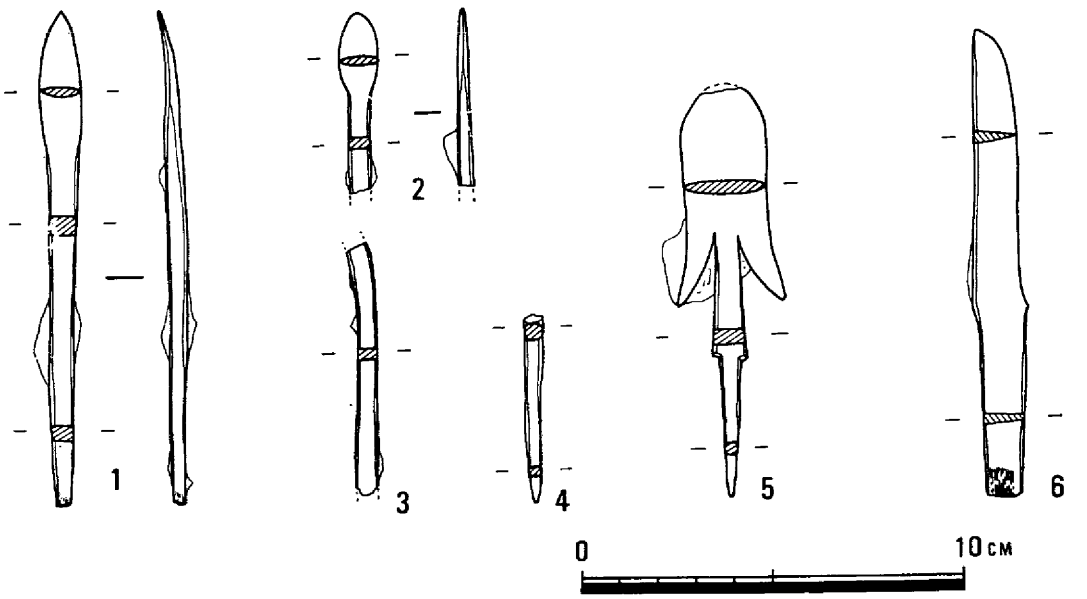


第14図　3号墳出土遺物実測図（$\frac{1}{3}$・1）

削りが見られるが，その範囲は狭く，粗雑である。口縁端部は，丸くおさめられている。焼成は良好で，色調は灰色を呈する。法量は，口径15.2㎝，器高4.55㎝を測る。2，4，6は，杯である。2の立上り部は内傾して立上り，口縁端部は丸くおさめられている。受部は，ほぼ水平に開く。底部は浅く，ゆるく弧を描いている。底面には粗いヘラ削りが見られる。他の部分は，ナデ，ヨコナデが見られる。焼成は良好で，色調は青灰色を呈する。法量は，口径13㎝，器高4.3㎝を測る。4も立上り部は内傾しており，口縁端部は丸くおさめられている。受部は平坦で，ほぼ水平に開いている。底部は浅く，ゆるやかに弧を描いている。底面には粗いヘラ削りが見られ，他の部分は，ナデ，ヨコナデが見られる。焼成は良好で，色調は青灰色を呈する。法量は口径12.6㎝，器高4.25㎝を測る。6は，内傾する短い立上り部をもち，口縁端部は丸くおさめられている。底部は浅く，内面には，同心円文の叩が残っている。底面には粗いヘラ削りが見られ，他は，ヨコナデ，ナデが見られる。焼成は良好で，色調は灰色を呈する。法量は，口径13.9㎝，器高4.2㎝を測る。7は，瓶である。胴部は球形で，そのほぼ中央に一孔の穿孔が見られる。頸部は，やや太く，若干長く伸びている。頸部と口縁部の境には段が見られ，口縁部はさらに開く。口縁端面は，ほぼ水平に造られている。頸部，肩部には櫛によるカキ目が見られる。胴部の孔直下から底部にはヘラ削りが見られる。焼成は良好で，色調は暗青灰色を呈する。法量は，口径12.3㎝，器高13.8㎝を測る。

装 身 具（第14図，図版13）

管玉3，ガラス製小玉21の合計24個出土している。8，9，10は管玉である。孔は一方から穿たれており，表面は，入念に研磨されている。個々の計測値を示すと，直径13.2㎜，11.55㎜，9.9㎜，長さは，31.95㎜，30.6㎜，29.3㎜を測るものである。いずれも大形製品で，材質は碧玉であり，濃色緑



第15図　3号墳出土遺物実測図（$\frac{1}{2}$）

を呈する。11～31は，ガラス製小玉である。小玉の平均値を示すと，径3.4㎜，孔の径0.99㎜，長さ2.36㎜を測るものである。色調は，紺青色を呈するものと，淡青色を呈するものの２種類がある。なお，玉類の個々の計測値は，表１に掲示する。

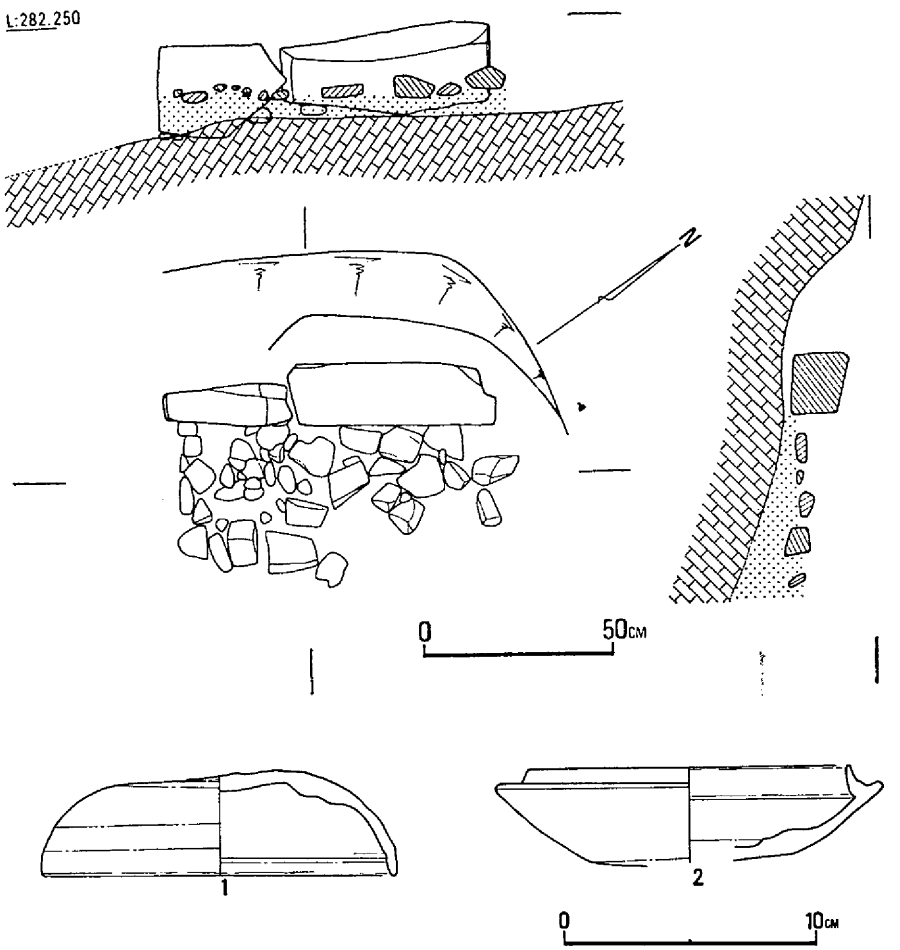
鉄 製 品（第15図，図版13）

鉇１，鉄鏃２，刀子1，不明鉄器２の６点が出土している。１は，鉇で，残存長13.1㎝を測り，遺存状態の良好な資料である。刃部は，わずかに上方に湾曲している。刃部の最大幅1.1㎝を測る。茎の先端に，小範囲ではあるが，木質が残存している。２は，鉄鏃である。残存長4.8㎝を測る細根

（4～54は第11図，8～31は第15図と共通）

表１　２・３号墳出土玉類計測値表　　単位 ㎜

番号	径	長さ	孔の径	色調 材質	番号	径	長さ	孔の径	色調 材質	番号	径	長	孔の径	色調 材質
4	12.2	6.6	1.3	黒褐色土	30	5.4	4.0	1.1	黒褐色土	8	13.2	31.95	2.85 (1.25)	濃緑色碧玉
5	5.2	3.4	1.7	〃	31	5.9	4.7	1.0	〃	9	11.45	30.6	2.75 (1.2)	〃
6	8.0	6.4	1.15	〃	32	5.8	4.2	1.2	〃	10	9.9	28.3	2.8×3.5 (1.0)	〃
7	7.2	4.7	1.2	〃	33	5.6	3.4	1.2	〃					
8	7.8	4.7	1.2	〃	34	7.25	4.6	1.25	〃	11	3.95	2.5	1.05	紺青色ガラス
9	7.65	5.3	1.3	〃	35	7.4	4.6	1.4	〃	12	3.7	2.25	1.1	〃
10	7.3	4.9	1.3	〃	36	8.0	4.6	1.2	〃	13	3.45	2.75	1.0	〃
11	7.4	4.8	1.9	〃	37	7.7	5.05	1.5	〃	14	3.55	2.8	1.0	〃
12	7.4	4.1	1.6	〃	38	7.5	4.9	1.45	〃	15	3.8	2.35	1.2	〃
13	7.1	4.7	1.3	〃	39	5.9	3.4	1.3	〃	16	3.05	3.05	0.85	淡青色ガラス
14	7.15	4.25	1.4	〃	40	7.9	5.1	1.3	〃	17	3.6	2.55	0.8	紺青色ガラス
15	7.7	5.5	1.1	〃	41	6.2	3.9	1.5	〃	18	3.6	2.4	1.1	〃
16	7.1	5.7	1.6	〃	42	7.5	4.5	1.45	〃	19	3.55	2.0	1.2	淡青色ガラス
17	7.4	5.05	1.3	〃	43	14.35	14.55	1.3 3.2	白色水晶	20	3.3	2.0	0.8	〃
18	7.7	4.9	1.3	〃	44	10.6	9.35	2.75	流紋岩	21	3.25	2.6	1.0	〃
19	7.0	4.7	1.6	〃	45	11.65	10.55	2.9	〃	22	3.3	2.3	0.75	〃
20	6.2	4.1	1.2	〃	46	11.75	11.3	2.9	〃	23	2.95	2.5	0.8	〃
21	6.1	3.9	1.15	〃	47	10.75	8.3	3.3	〃	24	3.2	2.5	1.1	紺青色ガラス
22	7.2	4.8	1.45	〃	48	3.85	2.8	1.2	紺青色ガラス	25	3.45	2.4	1.15	淡青色ガラス
23	6.7	4.4	1.45	〃	49	3.7	2.05	1.05	〃	26	3.35	1.7	1.1	紺青色ガラス
24	7.55	4.55	1.2	〃	50	4.0	3.3	0.75	〃	27	2.9	1.3	0.8	淡青色ガラス
25	5.15	4.0	1.3	〃	51	2.6	1.8	0.8	〃	28	3.05	1.65	1.0	〃
26	5.3	3.8	0.8	〃	52	3.8	2.25	0.85	〃	29	3.1	1.8	1.1	〃
27	5.45	3.8	0.8	〃	53	5.45	3.4	1.1	黒褐色土	30	3.5	2.1	1.1	〃
28	5.8	3.6	1.1	〃	54	5.55	3.8	1.2	〃	31	3.8	2.7	0.8	紺青色ガラス
29	5.4	3.4	1.15	〃										



第16図　4号墳実測図（S:1/30）および出土遺物実測図

式の鉄鏃で，両丸造りである。鉄鏃は，箆被の中ほどから欠損するものである。最大幅 1.1 cm，箆被の幅0.6cm，厚さ0.3cmを測る。3は，形状の不明な鉄製品であるが，その使途を推測すれば，鉄鏃の箆被と考えられるものである。鉄器の幅 0.55 cm，厚さ 0.3cm，残存長 6.9cmを測る。4も，使途不明の鉄製品であるが，鉄鏃の 箆代と考えられるものである。断面は円形を 呈しており，径は，0.55 cm ×0.45cm，残存長 5 cmを測る。5は，ほぼ完形で出土した鉄鏃である。鉄鏃は，先端をわずかに欠損するもので，残存長は，10.8cm を測る。鏃は，平根式の 両丸造りで，逆刺を有する。最大幅は，2.9 cmを測る。6は，平造りの刀子である。全長 12.4cm，刃部の幅 1.1cmを測り，茎の先端には木質が残存しており，全体に遺存状態の良好な資料である。（井　上）

d）　4　号　墳（第16図，図版8）

4号墳は5号墳の西側，急斜面が緩斜面に移行する所に位置する。墳丘はなく，表土剝ぎの段階で発見されたものである。残存状態は悪く，側壁は山側に 2 枚残り，敷石も一部を残すのみであった。

シストは黄褐色粘質土の地山に掘り込まれた土壙内に築かれており，全長0.9m，幅0.4mを測る。

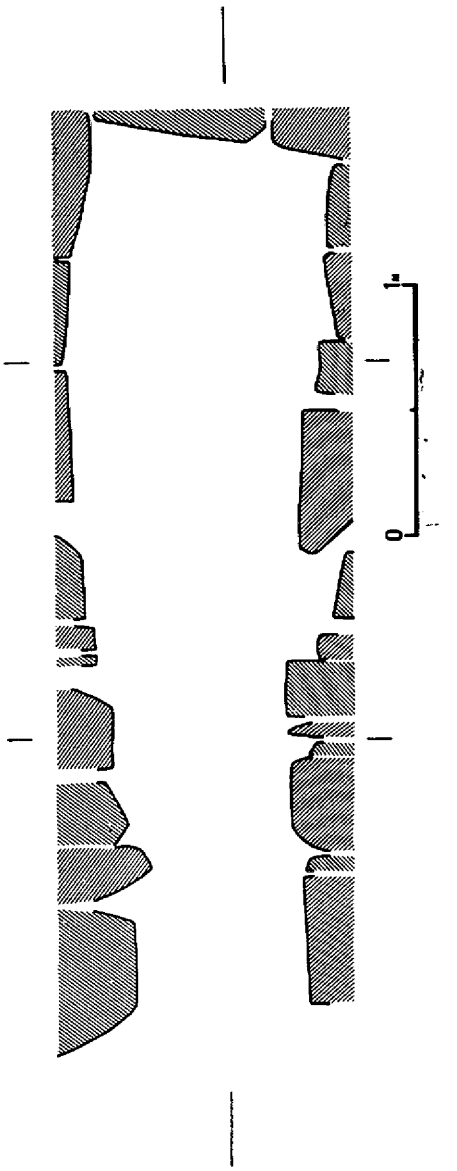
＜遺　　物＞（第16図，図版14）

遺物は須恵器の杯がセットで出土したが，原位置をつかむことができなかった。

1は杯蓋で，すでに稜線をうしない，概してやや粗雑な作りである。口径は14cmを測り，端部は丸くおさめている。天井部は左方向のヘラ削りがなされている。胎土に砂粒を多く含み，灰色を呈する。

2は杯身で，口径はやや小型化し，立上りも短く，内傾している。底部は平たく，ナデによって仕上げられている。胎土に砂粒多く含み，灰色を呈する。口径 12.7cm，器高 3.9cmを測る。

4号墳はシストで，5号墳と何らかの関係があるような位置に構築されている。1mにも満たない小型のシストであるが，副葬品として須恵器の杯を1セット有していた。築造時期を須恵器よりみれば，2号墳とほぼ同時期，1号墳より先に築かれたように思われる。したがって年代はほぼ7世紀初頭頃ではなかろうか。



第18図　5号墳平面図（S：1/30）

e）　5　号　墳（第17図，図版9）

5号墳は1号墳と2号墳との間に位置する。5号墳も完全に埋没していたため，表土剝ぎの段階で発見されたものである。古墳周辺は全面表土剝ぎを行ったが，周溝は認められなかった。

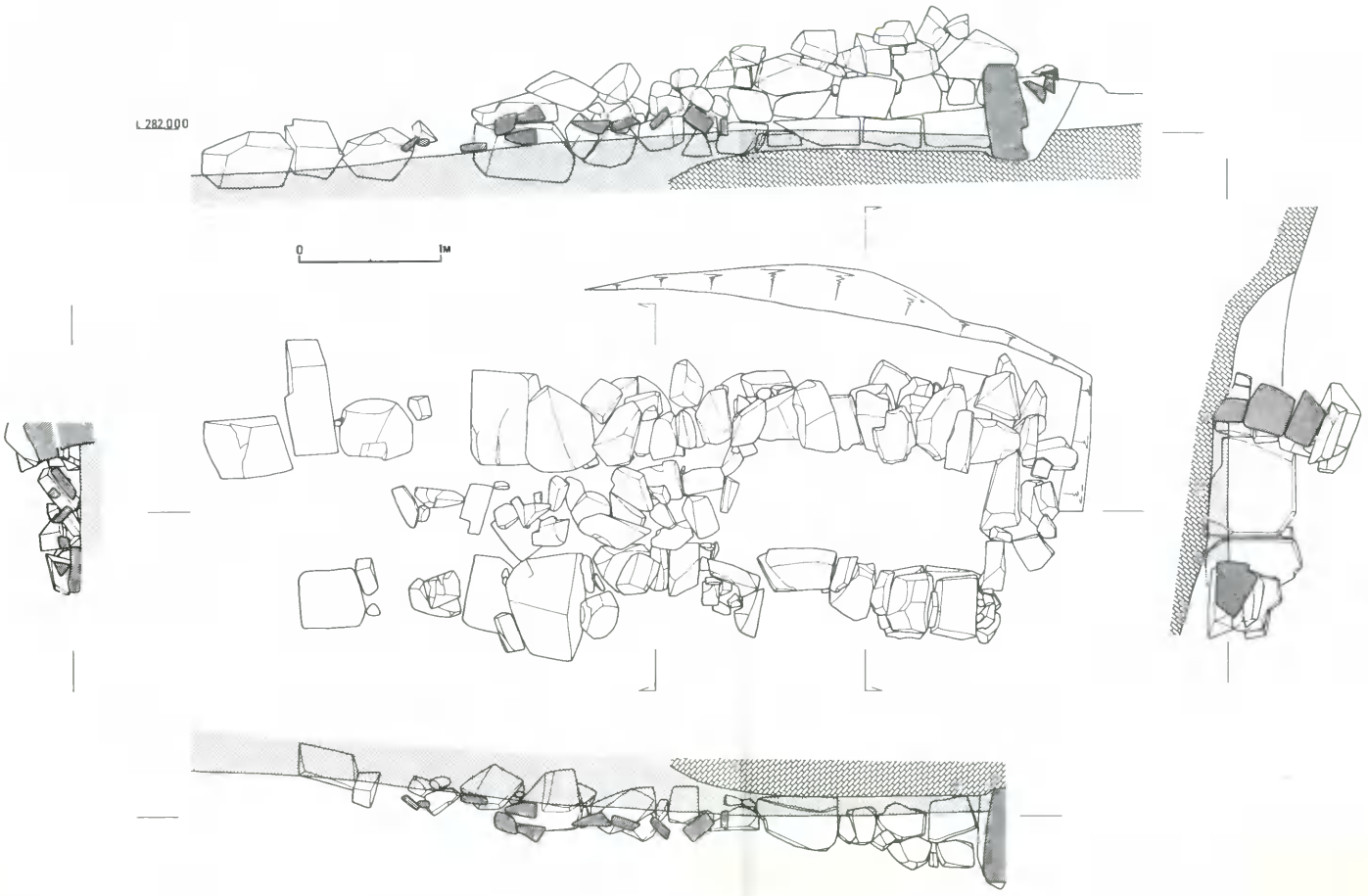
＜石　　室＞（第18図）

石室はほぼ南に開口する，無袖式の片側胴張りをなす横穴式石室である。床面には敷石もなく，地山上に黄褐土粒を多く含む黒色土を敷いて床面を作っている。

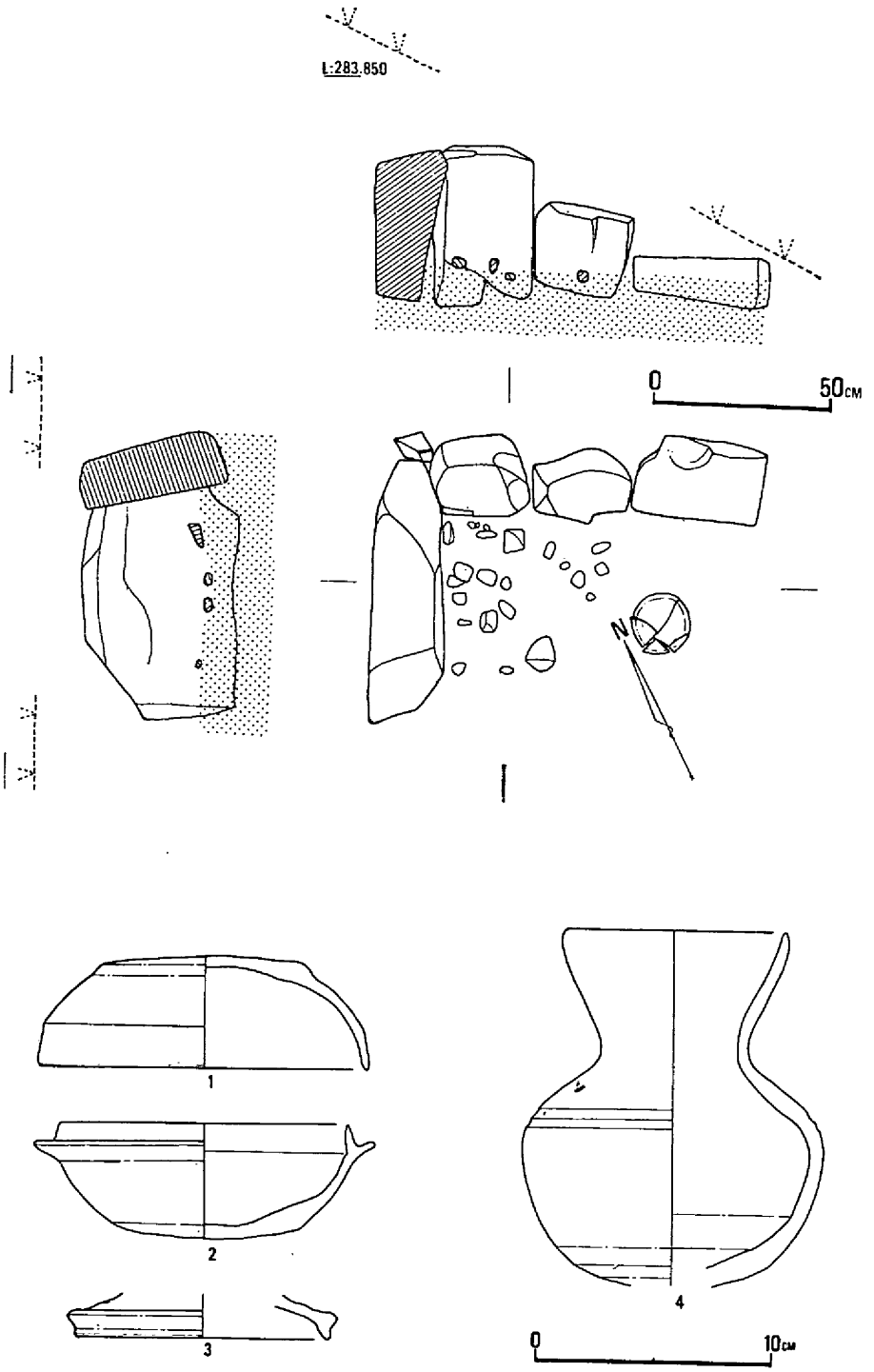
石室内には遺物はまったく認められず，床土も取り去ったが，何も出土しなかった。盗掘を受けたとも考えられるが，もとから副葬品がなかったとも考えられる。特にこの古墳が他とは異なり，敷石がないことなど，やや古墳群の中でも特異な存在となっている。

f）　6　号　墳（第19図，図版8）

6号墳は1号墳の西側，3号墳の北側に位置する。表土剝ぎの段階で発見され，シストであること



第17図　5 号 墳 実 測 図（S: $\frac{1}{40}$）



第19図　6号墳実測図（S:1/20）および出土遺物実測図

が確認された。

シストは黒色土中に構築されており，掘り方は検出できなかった。床面は敷石が認められたので，そのレベルを床面としたが，敷石の無い場所では区別することは困難であった。

＜遺　　物＞（第19図，図版14）

遺物はすべて須恵器で，杯が1セットほぼ完全に残っていたが，他は破片で散乱していた。

1は杯蓋で，体部ににぶい稜線をもち，天井部は平たくなっている。天井部は明瞭な調整痕がなく，部分的にナデのような感じがする所がある。胎土に砂粒を含み，灰色を呈す。口径13.5cm，器高4.7cmを測る。

2は杯身で，立上りは短く内傾している。底部は不定方向のナデによって仕上げられている。胎土に砂粒を多く含み，灰黄色を呈す。口径11.9cm，器高4.8cmを測る。

3は高杯の脚端部で，胎土に砂粒を含み，暗灰色を呈している。

4は直口壺である。内外面ともヨコナデによって調整されるが，底部は左方向のヘラケズリがなされている。胎土に砂粒を含み，灰黒色を呈す。

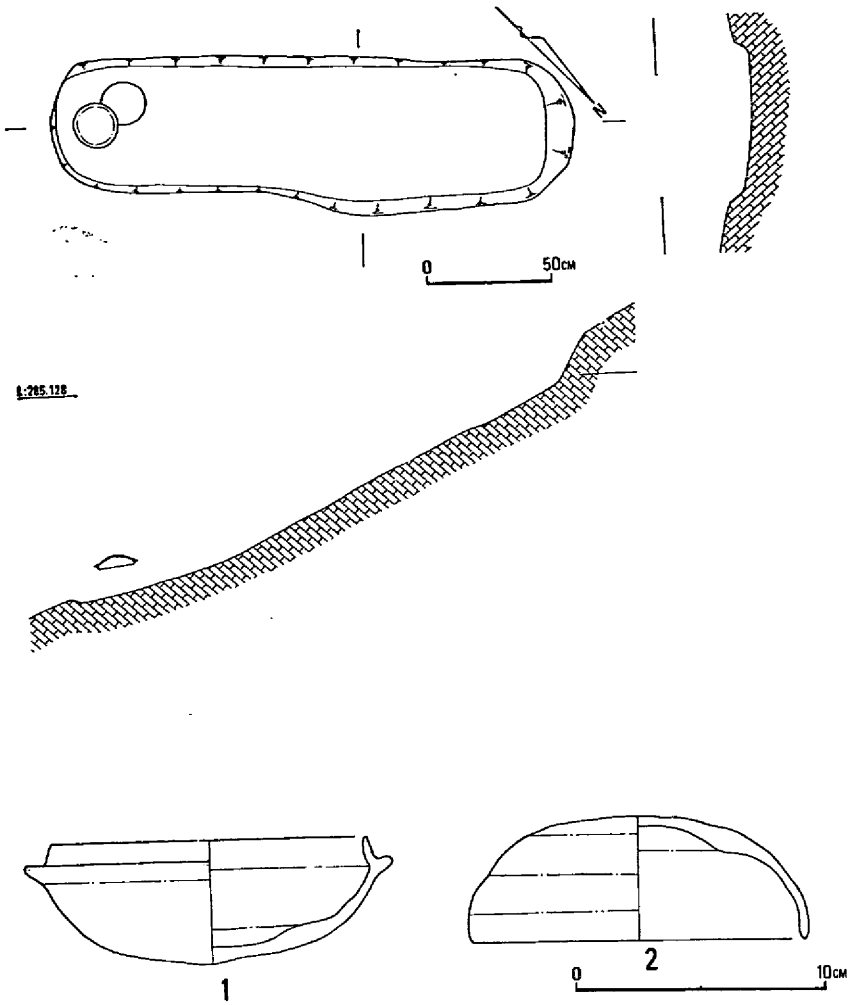
6号墳の築造時期はシスト内より出土した須恵器を見るかぎり，古墳群中一番新しいものと言える。しかし1号墳の横穴式石室出土の須恵器に最も近い時期と思われ，1号墳の被葬者とどのような関係にあったのだろうか。古墳の位置などから見れば，1号墳の被葬者と従属関係にあったものの墓と言うことができるが，一方では，もはや横穴式石室という埋葬形態が姿を消してゆく，最後の形態であると言えるかもしれない。

g） 土　壙　墓（第20・21図，図版10～14）

1号墳の北西，急斜面の所に2基並んで検出された。いずれも黄褐色の他山で検出したものである。土壙内の埋土は黒色土で，周囲の黒色土と区別できない。遺物は1号土壙上に副葬品と思われる須恵器の杯が1セットあった。蓋は全体的に丸みをもち，天井部と口縁部境界に浅く広い凹みをもつ。天井部は多少ナデて仕上げている。杯は立上りが短く内傾している。底部はナデによって仕上げられている。この須恵器から，これらの土壙墓は7世紀に近い時期のものであることがわかる。一方では横穴式石室が作られ，一方では同時期に場所の悪い所へ土壙墓が造られるという，対象的なあり方をしている。（竹田）

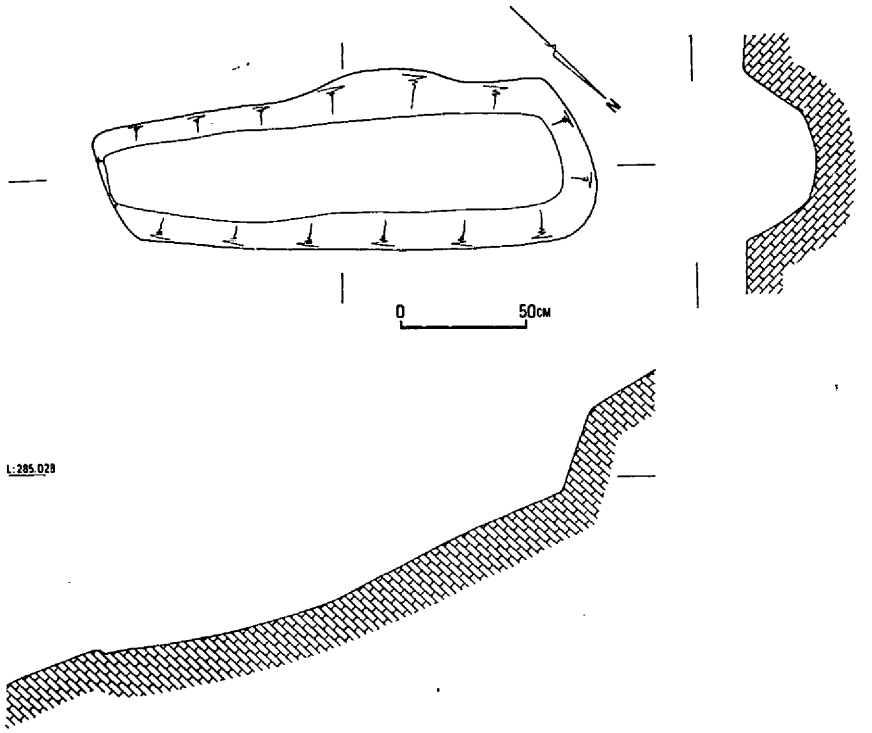
h） 7号墳及び遺構に伴わない遺物（第22図，図版14）

先にも述べたが，古墳群の発掘調査終了後，自動車道の建設中に数点の須恵器等が出土した。現地での遺物の出土状況の説明等からして，同所に古墳が所在したことがほぼ確実になった。第22図1～4がその出土遺物である。1は，蓋杯である。天井部と体部との境は不明瞭で両者は連続する。天井部にヘラ削りが見られる他は，ヨコナデ，ナデにより仕上げられている。口縁端部は丸くおさめられている。焼成は良好で，色調は灰色を呈する。法量は，口径12.9cm，器高3.55cmを測る。内面には，多量の朱が付着している。2は，杯である。立上り部は内傾しており，短く，口縁端部は丸い。底部は浅く，ゆるやかに弧を描くもので，底面全体にヘラ削りが見られる。焼成は良好で，色調は灰青色

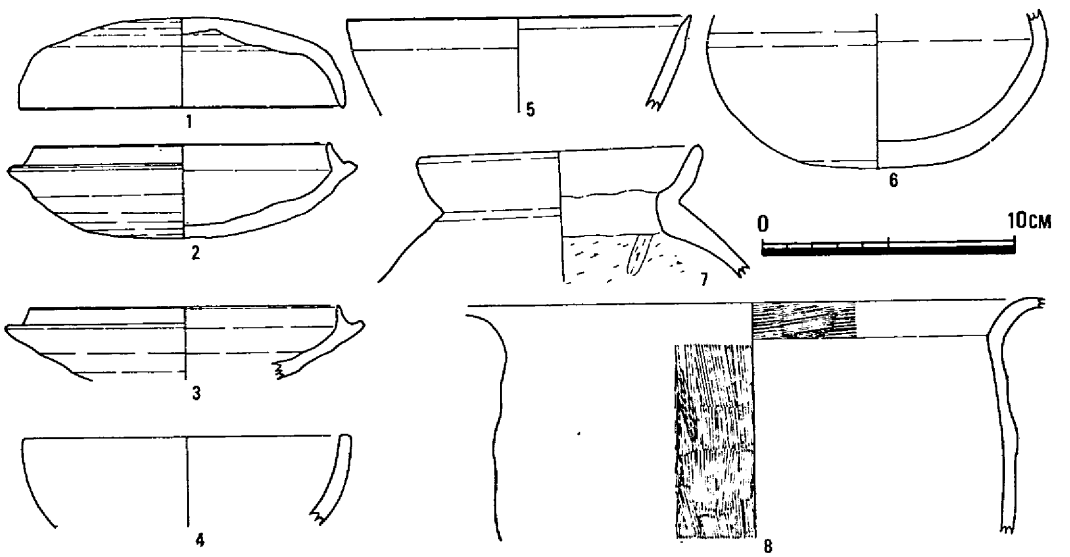


第20図　1号土壙墓実測図（S:1/30）**および遺物実測図**（S:$\frac{1}{3}$）

を呈する。法量は，口径11.8cm，器高3.7cmを測る。内面には少量の朱の付着が見られる。3も杯である。立上り部は，やや内傾しており，短く，口縁端部は丸い。底部にはヘラ削りが見られる。焼成は良好で，色調は灰色を呈する。4は，土師器の高杯と考えられるものである。体部内外面にはヨコナデが見られる。焼成は良好で，色調は褐色（赤褐色）を呈する。復元口径で，13.1cmを測る。5，6は，須恵器であるが，5は小破片であるために器形の確定はできない。6は，小型壺の底部と考えられる。いずれも4号墳に近い位置で出土したものである。7，8は，土師器の壺と甕である。いずれも3号墳の北西に設定したトレンチから出土したものである。（井上）



第21図　2号土壙墓実測図（S:1/30）

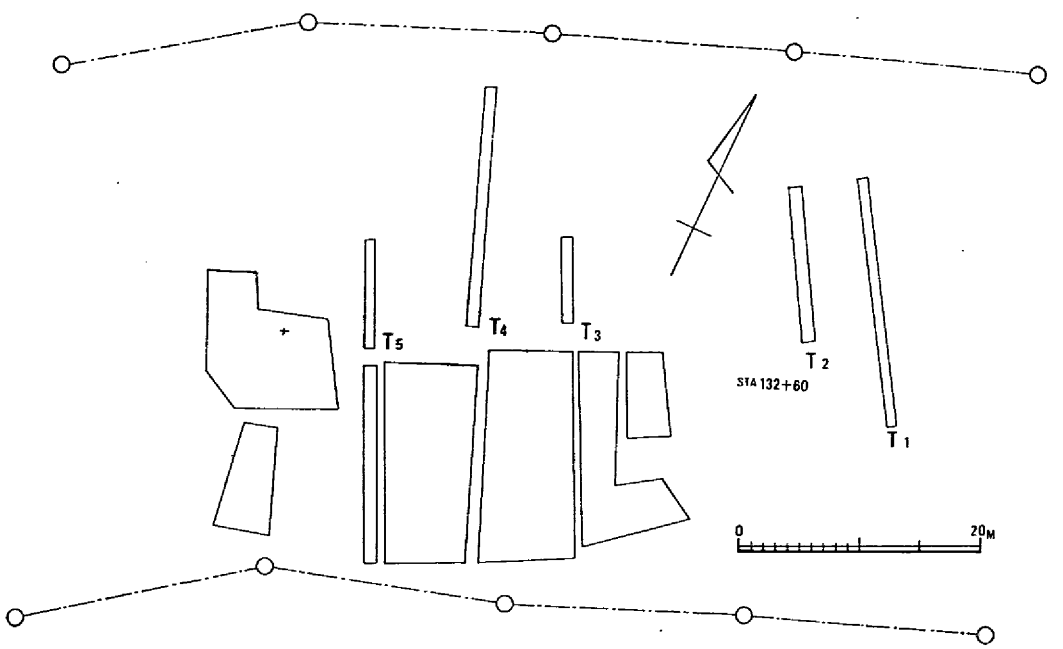


第22図　7号墳及び遺構に伴わない遺物実測図（$\frac{1}{3}$）

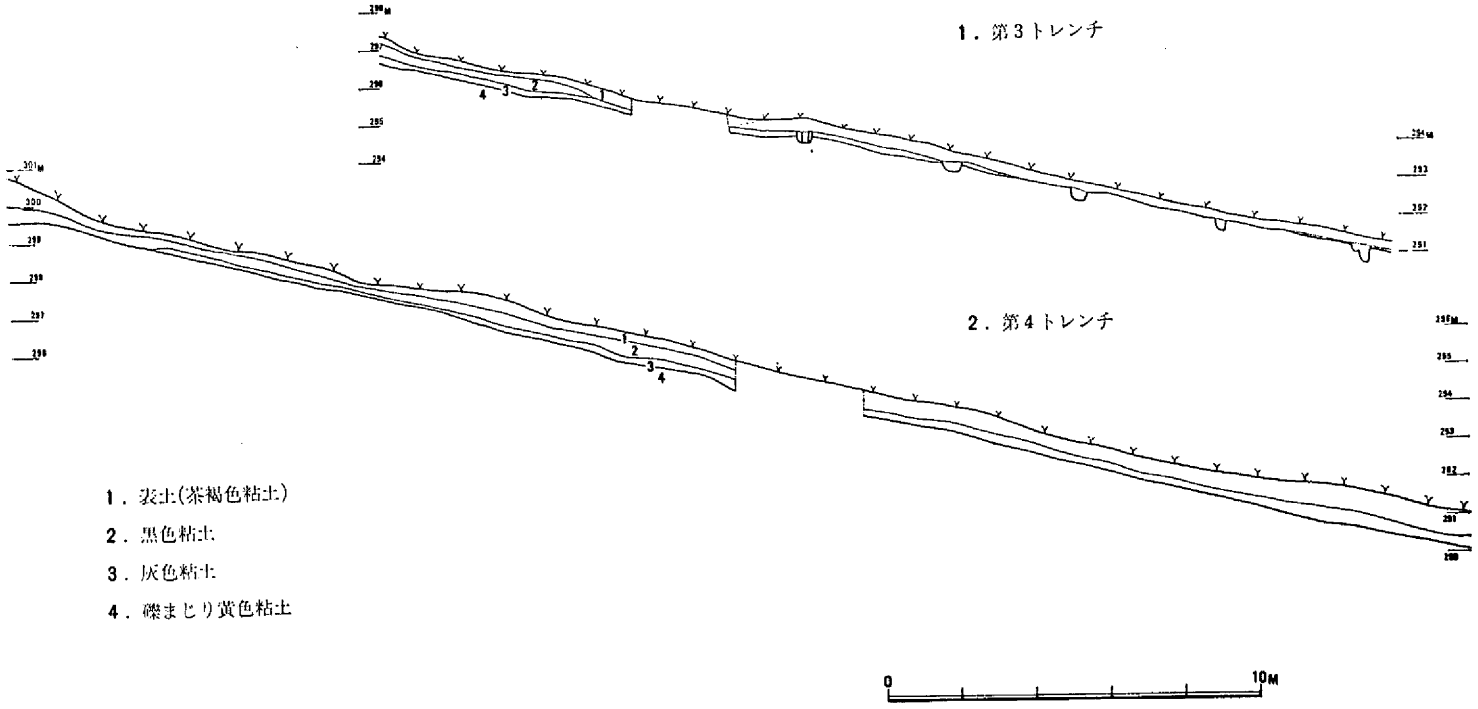
第2節　三信調査区の調査

1. 調 査 経 過

安信古墳群に接する南西側にいくつかの高まりがみられることから確認調査を実施した。調査は塚谷古墳の調査と併行しながら，正岡，二宮が担当した。調査期間は1975年5月24日から7月15日である。地形は安信古墳群の南端に谷川があり，その南西部は民家の跡地と栗林の跡になっていた。北側の山裾が緩やかな傾斜となり，やや平坦な地形のひろがりがみられる。南東側は傾斜面となり，神代川の河床面に至る。北側の山裾の用地外からも須恵器の破片が採集されることから散布地のひろがりとしては，用地以外にものびていることが推測される。遺跡の性格が不明確であったことから高まりについて調査を実施したところ，畑地の造成に際して，石を集めたものであることが明らかになった。この石積の中から，須恵器，土師器の破片が検出されたことから，用地内の集石をすべて除去して遺物採集を行った。須恵器は大部分が大型甕の破片である。他に壺，杯，高杯等もみられる。遺構確認のため，5本のトレンチを等高線に直交して設定した。第3トレンチの北壁に柱穴列が確認された。そのため，周囲を拡張して平面調査を実施した。柱穴列の両側には柱穴は確認されず，柵としか考えられない。その他に柱穴状の穴が若干みとめられたが建物としてまとまらなかった。黒色粘土層から弥生中期の壺，甕などが検出されたが，それ以外はほとんど遺物が検出されなかった。



第23図　三信調査区の調査範囲図



第24図　土 層 断 面 図

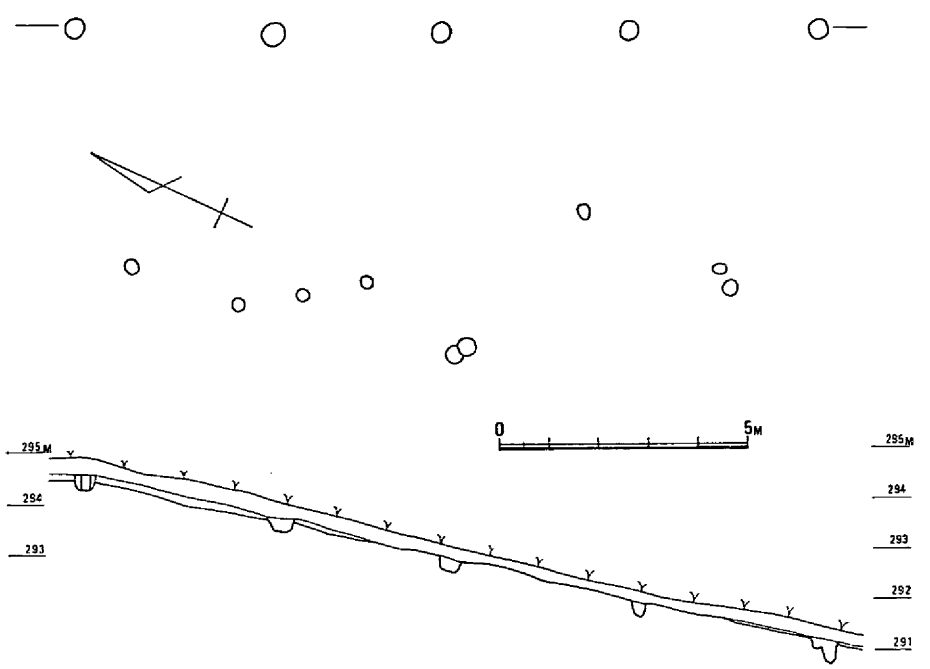
2. 遺　　構（第25図）

柱穴は黒色粘土を切って掘り込まれているらしいが明瞭には把握できない。柱穴は5本検出され一直線に並ぶ。方位はN 25°W を示している。柱間はそれぞれ異なり，北から3.82m，3.30m，3.75m，3.85mを測る。柱穴の大きさは直径約40cm，深さ40cm，柱痕跡の直径18cmを測る。

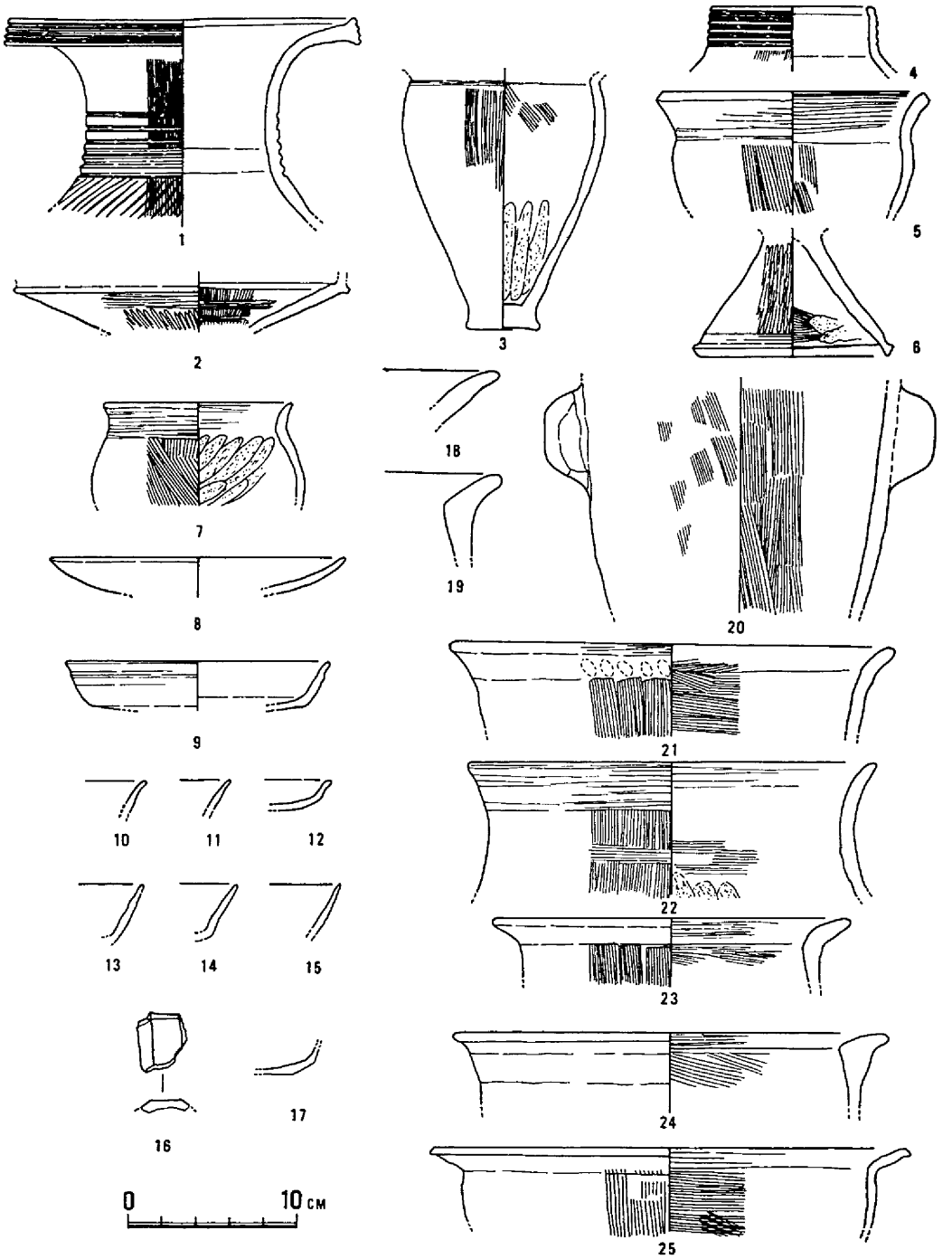
3. 遺　　物

（1） 弥生式土器・土師器（第26図，図版16）

弥生式土器　土器の量は少ないが，壺，甕，高杯，鉢などがある。壺（1）は胴部以下を欠失している。口縁部は朝顔形にひらき，口縁端部は緩やかに肥厚し，上下に少し拡張する。外面には凹線文が施されている。口縁部内面には2本の浅い沈線がみられる。頸部には太い沈線が6本施されている。下の4本は接していて凹線文状になっている。肩部には斜線がめぐらされている。頸部から肩部へかけては縦位のハケメが施されている。胎土には細砂を含み，色調は黄味を帯びた灰白色を呈する。甕（2）は口縁部を欠くが頸部のまがりから推定して「く」字状に折れ曲がる口縁と推定される。肩部から胴部の張りは少なく，胴部最大径の位置は高い。胴部下半は細くなり，底部は少し張り出し，若干あげ底になっている。外面にはうすくハケメが施され，ススの付着がみられる。内面では上部に粗いハケメがみられ，胴部下半では縦位のヘラ削りが施されている。胎土は細かく，色調は灰色を呈する。水差形土器（3）の口縁部とみられる小破片がある。やや内傾ぎみで口縁端部は内側へくびれて



第25図　柵　列　実　測　図



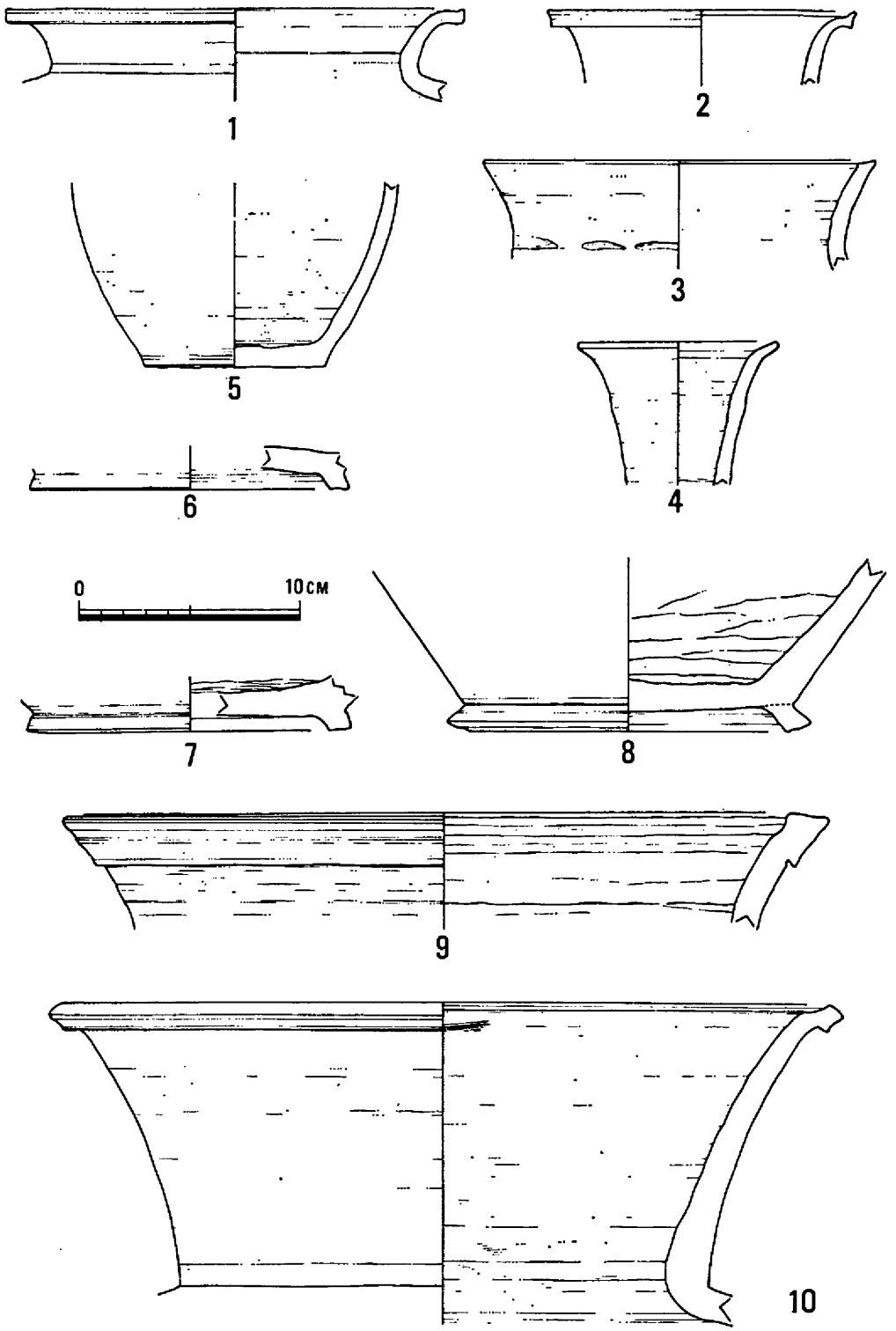
第26図　弥生式土器・土師器実測図

いる。外面には凹線文がみられ，肩部にはハケメが施されている。高杯（4）は杯部の一部で口縁部を欠いている。上方に立上る形の口縁部で，受部の外面はヘラ磨きが施されている。内面は粗いハケメが施され，その上へ横位に2段のヘラ磨きが施されている。胎土は細砂を含み，色調は黄味を帯びた灰白色を呈する。（5）は脚部と推定される。上部の形は明らかでない。脚部の上は径が小さく，裾部はひろがり，端部が肥厚する。外表面は剝離しているが，縦位のヘラ磨きを施したあとがみられる。内面は一部ヘラ削りが施され，ハケメも施されている。胎土には砂粒が多く，色調は灰褐色を呈する。鉢（6）は口縁部が緩やかにひらき，端部はやや角ばっている。胴部が少しふくらむ。内外面ともうすいハケメが施されている。胎土は細く，色調は黄褐色を呈する。以上の土器は弥生時代中期後半に属するものである。壺の肩部に斜線を施すのは山陰にみられる手法であり，その関連が認められる。高杯の内面にハケメを施すものも県南ではみられないなど，地域の特色がみられる。

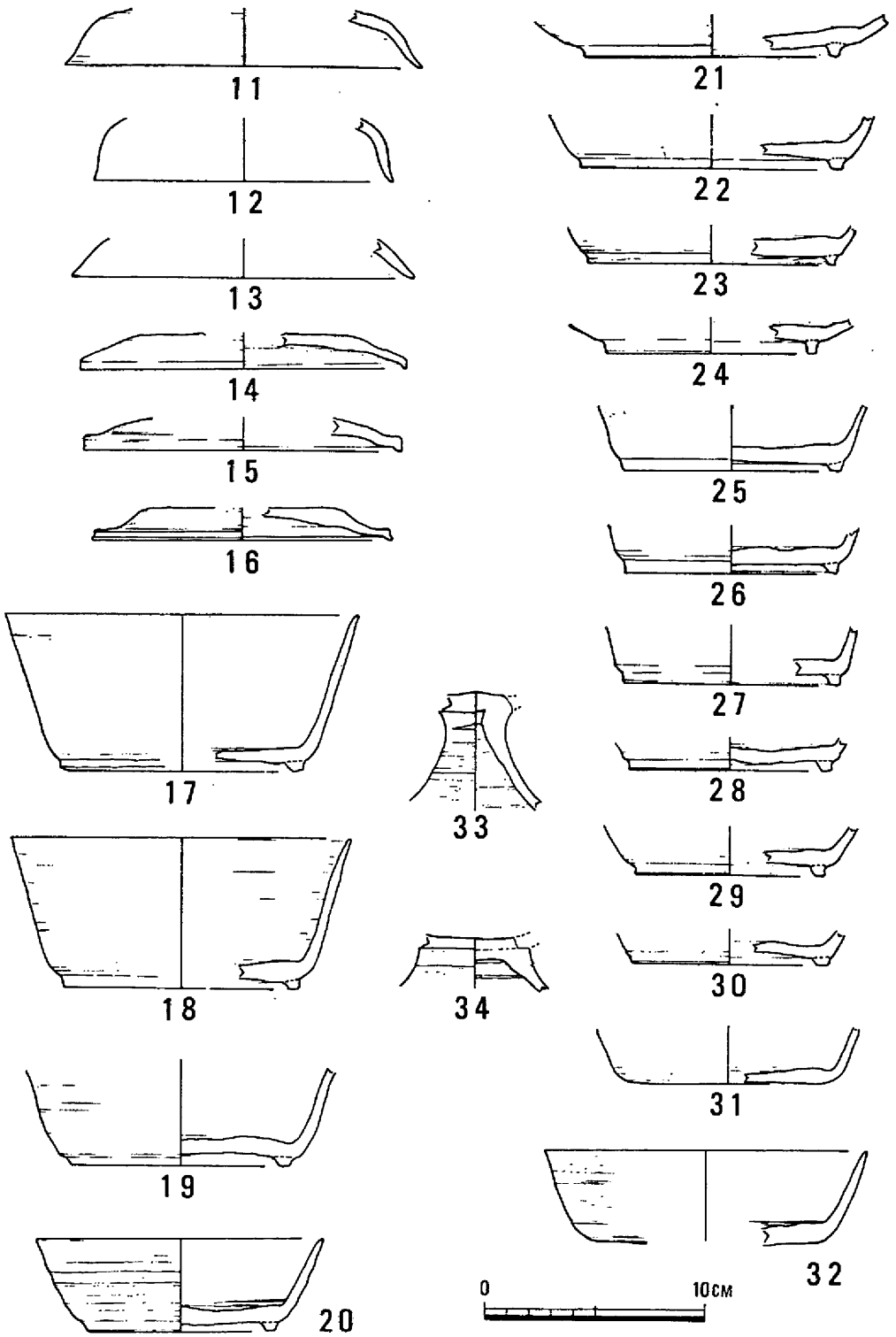
土師器 土師器には甕，こしき，皿，杯等の破片がある。大型の甕は口縁部が緩やかにひらく口縁のもの（21，22）と「く」字状にひらくもの（23，24）がある。口縁端部は丸くなって終る。外面には縦のハケメが施されている。内面はヘラ削りを施したもの（22）もみられる。胎土には細砂を含み，色調は灰褐色を呈するものが多い。小型の甕（7）は胴部下半を欠いている。口縁部は緩やかに外反し，端部はだんだんうすくなっている。口縁部は内外面とも横なでが施されている。胴部外面は交差する粗いハケメが施され，内面は斜位のヘラ削りが施されている。胎土は砂粒を含み，色調は灰褐色を呈する。こしき（20）は胴部のみで，把手は両側に平たなものを配している。外面には斜位のハケメがうすく施され，内面には縦位のハケメが施されている。胎土には砂粒を含み，色調は黄褐色を呈する。胎土にきわめて細かい粘土を用いた土師器（8～17）がある。これらの器形は皿，杯，高台付盤がある。皿（8）は直径17.6cmを測り，深さは浅い。杯は小破片が多い。口縁が斜め外上方にひろがり，端部はうすくなっている。高台付盤は脚部の小破片しか残存しないが，6角形に切りとった形状がよくわかる。

（2） 須恵器（第27・28図，図版16）

須恵器は破片でかなりの量が出土している。大部分は大型甕の破片である。甕の口縁部では大きくひらくもの（1，2，9，10）と緩やかに外反しながら直立ぎみのもの（3）がある。1は口頸部が短かく，口縁端部は内面が凹んでいる。外面には黄緑色の自然釉がみられ，断面は灰白色を呈する。大型甕の口縁端部は外面をふくらませ，内面はくびれて段をなすもの（9，10）がある。（2）の口縁は端部が上下に短くのび，内面には段がある。内外面に自然釉がみられ，暗青灰色を呈するが，断面は茶褐色を呈する。（3）の口縁端部は内外へわずかにふくれ，口縁上部に凹線文をめぐらす。長頸壺（4）は口縁部の破片で，口頸部は細長く，上方へ緩やかに外反しながらのびる。口縁端部近くで屈曲し，先端はまるくなる。外面の色調は青灰色を呈するが，断面の色調は茶褐色を呈する。（5）は壺の底部で底部近くにヘラ削りを施している。外面には自然釉がかかり暗青灰色を呈する。断面の色調は茶褐色を呈する。壺の高台（6～8）は貼り付けで外方にひろがる。色調は灰白色～青灰色を呈する。断面は細かい隙間が多く，灰色の粒子がみられる。断面の色調も外面とほぼ類似する。（11～16）は蓋と推測されるが口縁部の傾きがことなる。（12）は天井部からやや直立ぎみで端部は少し張りだし，先端部はまるくなっている。色調は内外面とも青灰色を呈する。胎土には細かい砂粒を含む。（14～16）は

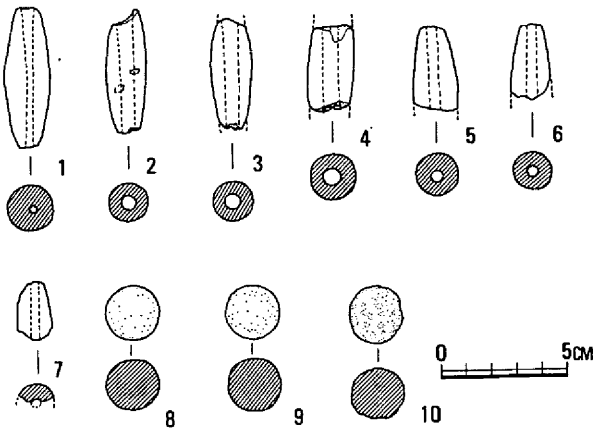


第27図 須恵器実測図(1)



第28図 須恵器実測図(2)

天井部が平らで天井部と口縁部との境界は段をなし，端部は下方へ短く屈曲する。胎土には細砂を含む。色調は内外面と断面とも青灰色を呈する。高台付杯（17～30）は深さの深いもの（17～19）とやや浅いもの（20～30）がある。高台はいずれも貼り付けで，断面は凸形を呈して低く，外方への張り出しはみられない。口縁まで接合できたものは少ないが，底部からほぼ直線的に外上方へのびる。端部は次第に薄くなり，先端はまるみをもっている。胎土には細かい砂粒を含む。色調は内外面と断面とも灰白色～青灰色を呈する。高台のない杯（31，32）も高台付杯とほぼ類似している。高杯（33）は脚部のみで小型のものである。胎土には細かい砂粒を含む。色調は内外面と断面とも青灰色を呈する。（34）は脚部で色調などは高杯と類似する。



第29図 土錘・土玉実測図

（3） 土錘・土玉（第29図，表2，図版16）

土錘は7点あり，いずれも紡錘形を呈し，管状の穴が通っている。完形のものは1点だけで，大きさは長さ5.6cm，直径1.8cm，重量13.5g を測る。他のものも同じ大きさと推定される。土玉は3点あり，円球で大きさもほぼ等しい。用途が明らかでないが，同地で土錘が検出されていることからすれば，錘としての機能が考えられる。

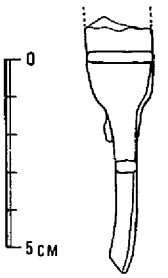
（4） 鉄　　鏃（第30図）

鉄鏃は1点ある。先端部を欠失しているが平根式の鉄鏃である。大きさは現存長6.8cm，幅1.8cm

表2 土 錘・土 玉 一 覧 表

番号	種　別	形　状	長径(cm)	短径(cm)	重量(g)	色　調	備　考
1	土　錘	紡錘形	5.6	1.8	13.5	灰　色	完　形
2	〃	〃	4.9	1.6	8.5+	黄褐色	一部欠
3	〃	〃	4.4	1.6	8.5+	〃	〃
4	〃	〃	3.3	1.8	9.5+	灰味黄色	〃
5	〃	〃	3.3	1.7	8.0+	黄褐色	半　分
6	〃	〃	3.0	1.5	7.0+	灰　色	〃
7	〃	〃	2.3	1.4	2.0+	〃	小　片
8	土　玉	球　形	2.1	2.0	8.5	黄褐色	完　形
9	〃	〃	2.2	2.1	9.0	〃	〃
10	〃	〃	2.2	2.0	9.0	淡黄色	表面剥離

を測る。茎はやや長方形の断面を呈し，長さ４cmを測る。



第30図　鉄鏃実測図

4. ま と め

三信調査区は山裾が緩やかな傾斜を呈していることから古墳や集落跡が予想されたが，調査の結果，古墳はなくて弥生式土器，土師器，須恵器の散布がみられた。弥生式土器は中期後半のものが少量あり，大きな集落を形成していなかったことがわかる。古墳時代の遺物も少量みられるが，須恵器，土師器の破片はほとんど８世紀頃のものである。柵列が１条確認されたが建物群などは検出されず，遺物も畑地をひらく際の集石の中から検出されたものである。遺跡は以上のような状況であり，その性格は明らかにできなかった。

（正岡，二宮）

第3章 総　　括

安信古墳群は，7基の古墳と2基の土壙墓よりなりたっている。すべての古墳がすでに墳丘は流失し，1号墳は石室が露出，他は完全に埋没していた。したがって，墳形とか規模は明らかでなく，また1号墳以外は，周溝らしきものは認められなかった。

＜石　室＞

6基の古墳を発掘調査したが，横穴式石室をもつもの4基，シスト2基であった。

横穴式石室は，いずれも「コ」字状の掘り方の中に構築されている。側壁の石積も特にかわった点もなく，下段は広口積，中段は横口積，上段は小口積となっている。

床には5号墳以外はすべて敷石をもっている。

平面プランを見ると，3号墳は石室の幅にくらべて長さが短く，入口に向って狭くなっている。これにくらべて他の横穴式石室は細長く，胴張りになっている。この特徴的な片側だけの胴張りは，塚谷古墳群(註1)，迫三方塚古墳(註2)においても認められ，この下神代地域においては普遍的に存在したものと思われる。同じ神代川流域においても，少し上流の哲西町上神代地域にはなく(註3)，また県内においても類例を見ることはできない(註4)。したがって下神代という，自然地理的に完結した地域で流行したものであるが，一番古いグループの横穴式石室には認められず，爆発的に古墳が築造される段階で出現することが指摘できる。

＜副 葬 品＞

各古墳出土の副葬品を概観してみると，鉄製品，特に武器類が少ないと言える。これにくらべて装飾品が目につく。これは鉄が腐蝕しやすいということもあるが，やはり被葬者の性格を示しているのではなかろうか。

次に須恵器についてのべてみたい。須恵器は5号墳以外の古墳から少量ではあるが出土している。これらの須恵器は特徴のあるものであり，また古墳の築造順序や築造年代を決定する上でも重要である。以下，杯を中心に詳しく説明してみたい。

3号墳A…蓋，大型で概してやや粗雑である。天井部と口縁部をわける稜は失われ，かわって凹線をめぐらしている。天井部はふくらみがなく，ヘラ削りは右方向で粗さがめだつ。口縁端面は内傾する面が残る。

杯，立上りは短くやや内傾し，端部は丸くおさめる。底部は右方向のヘラ削りがなされる。

B…蓋，天井部と口縁部との境界はなくなり，口縁端部は丸くおさめる。口縁内面に一条凹線がめぐる。天井部は右方向のヘラ削りがなされる。

杯，立上りは短く内傾し，端部は尖り気味である。底部は右方向のヘラ削りがなされ，

内面には同心円叩き文が認められる。

4号墳……蓋，天井部と口縁部との境界に浅く広い凹みをもつ。口縁端部は丸くおさめ，内面には凹線がめぐる。天井部は左方向のヘラ削りがなされる。

杯，立上りは短く内傾している。底部はヘラ削りが行われないで，ナデられている。

2号墳……杯，小型化し，立上りは1cmと低く内傾している。天井中央部はやや尖ったような感じになる。底部にヘラ削りはなく，成形のまま，あるいは多少ナデられている程度である。

7号墳……蓋，小型化し，天井部と口縁部との境界はなく，口縁部は丸味をもっておさめる。天井部は左方向のヘラ削りである。

杯，小型化し，立上りは短く内傾している。底部は左方向のヘラ削りである。

1号墳……蓋，小型化し，口縁端部は丸くおさめる。天井部はナデが認められるが粗雑である。

杯，小型化し，立上りは0.5cm前後と短く，内傾も著しい。底部はナデによって仕上げられる。

6号墳……蓋，天井部は平坦で，体部に浅く広い凹みをもつ。天井部は成形のままで調整らしきものは認められない。

杯，立上りは短く内傾する。底部はナデられている。

以上各古墳出土の須恵器杯を概観したが，一番古い形態を示すものは3号墳出土のものとすることができるであろう。3号墳出土のものは，少なくとも1回は追葬が行われたものと思われ，前述のようにAとBに分れる。Aの杯は陶邑の時期区分(註5)で言えばⅡ期の中頃に相当し，TK10に近いものである。そして土器の変化だけから言えば，3号墳Aの後にB，その後に4号墳，2号墳，7号墳などがほぼ同時期に並び，1号墳，6号墳と続く。1号墳や6号墳は，Ⅱ期の最後になるものと思う。そこでこれらの須恵器を3つに分けると，3号墳Aの時期，3号墳B，4号墳，7号墳，2号墳の時期，1号墳，6号墳の時期となる。これを1期，2期，3期とすると，1期では天井部，底部のヘラ削りが全部に認められるのに対して，2期では2号墳，4号墳の一部にヘラ削りが行われない杯が出現してくる。そして3期ではすべてヘラ削りは行われていない。この一群の杯は，天井部ないし底部を成形のまま，あるいは多少ナデが行われることもあるが，粗雑なまま製品にしているという特徴のあるものである。このような須恵器がなぜ出現したのであろうか。

神代川周辺に横穴式石室が出現する時期は，それを論として展開するには十分の資料はそろっていないが，あえてその時期を考察すれば，それは1期，つまり3号墳の時期かあるいは多少古くなるであろう(註6)。したがって，この地域に横穴式石室が導入されたのは，他の先進地域にくらべてかなりおくれていると言える。しかも1期に属する古墳は，おそらく数も少ないであろう。したがってこの地域で最初に古墳を築造した人間は，古墳築造技術とともに須恵器も他地域から搬入してきたのであろう。ところが，2期の段階で爆発的に古墳が築造されるようになると，もはや他地域から持ってくるような形態をとらず，近くで須恵器生産を開始したものと推察できるのではなかろうか。そのことは，神代川流域で安信古墳群の特徴ある須恵器と同形態のものが点々と出土する(註7)ことからも，神郷町あるいは哲西町のどこかに窯が存在するのではなかろうか(註8)。しかし，須恵器生産が思いつき

ですぐできるものではなく，生産と消費を管理すべき体制の整備，生産技術者の確保と技術の修得，原料や燃料などが必要となってくるであろう。

ところが急激な消費量の増大に対応するために一応生産は開始されたが，後進地域では多くの専門工人がいないため，量産化には限度があったであろう。そこでヘラ削りまでも省略することによって，ある程度量産化に対応したのではなかろうか。

とにかく2期以後築造された古墳は，胴張りというローカルカラーの強いものであり，このことと，神郷式とでも言えるような特異な須恵器の出現が一致していることは注目されるものである。

＜被葬者と構築時期＞

一般に横穴式石室は，家族墓的性格を有するとされ，数人あるいは十数人の追葬がおこなわれることがある。安信古墳群においても例外ではないだろう。3号墳では，副葬された須恵器から最低1回は追葬が行われたものと思われる。2号墳にも2人は埋葬されていたものと思われるが，その他の古墳では判断の材料にとぼしい。シストや土壙墓は1人だと思われるので，古墳群全体で最低11人以上は埋葬されたことになる。これらの被葬者は，それぞれ異なった埋葬形態をもっており，それぞれの立場のちがいが反映している。一人一人の個性の強弱はあるが，いずれにしても，共同体内部において自立してきた家父長[註9]ないし，それに連なる者の墓であろう。ただ安信古墳群においては，副葬品が目立って少ない。このことは，この地域に古墳が導入された時に，共同体内部において自立化が未成熟なまま，古墳を築造したため，石室を築造することで精一杯であり，副葬品が少なくなったものと考えられる。さらにこの時期の古墳では，一般に鉄製の武器類などが認められ，人民自身が一方では武装していることが多いのであるが，安信古墳群においては，武器類は少ないか，または全く認められない古墳もあり，農民的な性格が強く感じられる。

さて古墳の築造時期であるが，前項の須恵器の編年から3号墳が最も古い時期のものであり，6世紀中頃と考えられる。続いて3号墳の追葬が行われ，2号墳，4号墳，7号墳，土壙墓などが築造される。これらの時期は，ほぼ6世紀後半から7世紀初頭にあたり，もっとも多く古墳が築造された時期である。

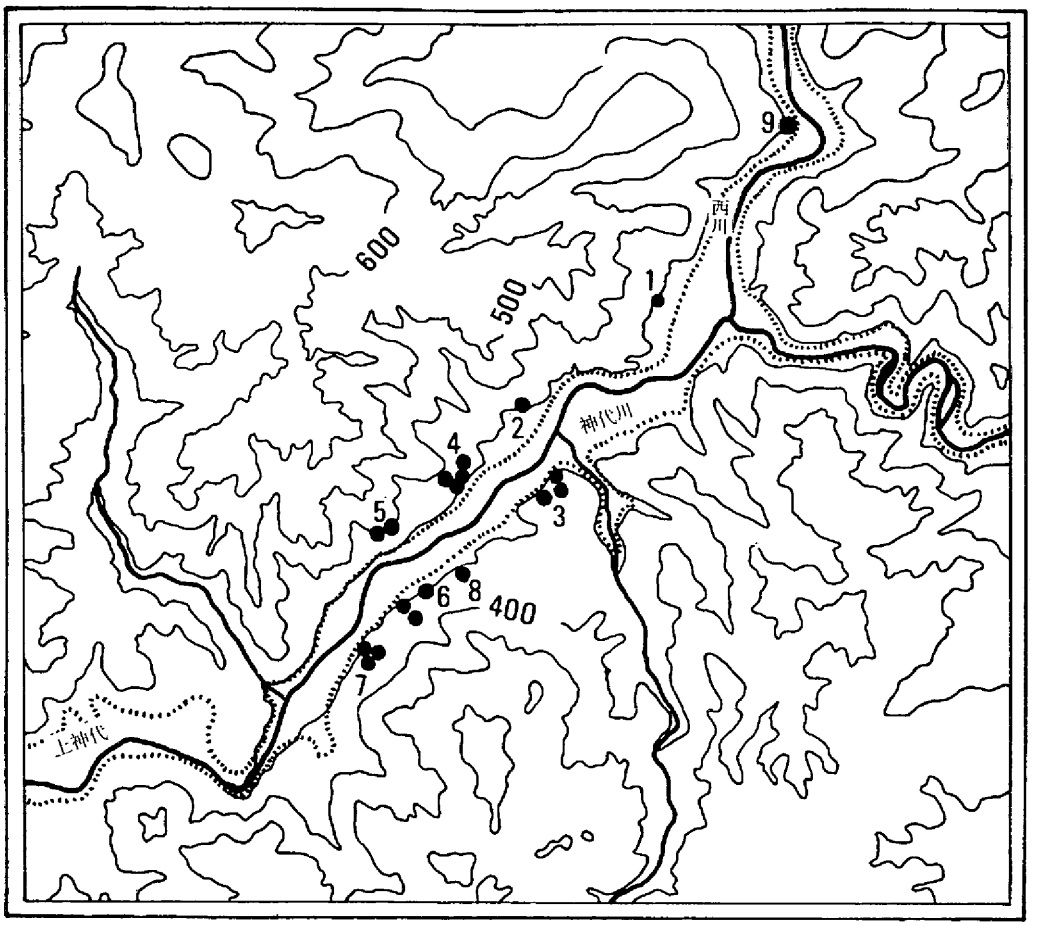
1号墳，6号墳が一番新しく，ほぼ7世紀前半にあたる。この時期は古墳築造の衰退期にあたり，やがて古墳は姿を消してゆく。

＜下神代地域の古墳＞

下神代地域は，神代川の両岸に形成された狭い沖積地を中心に，自然地理的に完結した地域である。この地域の古墳を概観するとき，その多くは，横穴式石室を有する後期古墳であり，後期古墳出現以前の古墳については，全く不明と言わねばならない。

したがって下神代の古墳，特に後期古墳について考えてみたい。まず，古墳の分布であるが，第31図のごとく神代川にそって分布している。一応上流より概略を説明する。

7は坂根古墳群で，現在までに確認されているのは3基で，いずれも横穴式石室を有するものである。このうちの1基は仲間古墳と言われ，須恵器の平瓶などが出土している[註10]。築造時期は7世紀



第31図　下神代地域の古墳分布図（S:1/50,000）

1. 迫三方塚古墳　2. 門前中屋古墳　3. 谷安古墳群　4. 安信古墳群　5. 塚谷古墳群
6. 河原古墳群　7. 坂根古墳群　8. 三信南古墳　9. 舞尾のシスト

の初頭頃と思われる。

6は河原古墳群で，3基の横穴式石室より成っている。いずれも内容は不明である。

8は三信南古墳と仮称するもので，丘陵平坦部に横穴式石室が1基残存する。全長約7m幅約1.4mとこの地域では大きな部類で，目立つ位置に築造され，しかも1基だけ独立しているところから注目される。石室の平面プランは胴張りをなしている。

5は塚谷古墳群(註11)で，2基の横穴式石室より構成される。そのうちの1基は発掘調査され，胴張りを呈する無袖式の横穴式石室で，6世紀末に築造されたものと思われる。

3は谷安古墳群で丘陵上に3基の横穴式石室が残存する。いずれも内容は不明である。

2は門前中屋古墳(註12)で，発掘調査の結果，6世紀後半の横穴式石室を有する古墳であった。副葬品は須恵器，鉄製品，装飾品などが多数出土し，安信古墳群とは対照的である。

1は迫三方塚古墳(註13)で，全長約7m，内部に箱式石棺を有する横穴式石室である。西川と神代川が

合流する地点の丘陵上に位置し，あたかも下神代地域の入口を管理していた人間の墓のようである。横穴式石室内に箱式石棺を有し，副葬品として太刀などの武器類も認められ，一応この地域ではすぐれた古墳と言えよう。石室の平面プランは胴張りをなし，時期は6世紀末から7世紀初頭が考えられている。

以上下神代地域の古墳について概略をのべたが，これらの古墳を築造した集団の居住地は，現在のところ全くつかめていない。新市谷や門前中屋，三信などにおいて，若干土器片が出土しているのみである。これらは丘陵斜面や丘陵上にあり，沖積地にはないようである。これらのことから，現在の神代川両岸の沖積地は両側の山裾近くまで，不安定な氾濫原と考えられ，古墳時代後期において水田を経営するとしても，広い水田は得られなかったのではなかろうか。したがって生産力の著しい増大はなく，弥生時代以来ゆるやかな発展を続けたのであろう。したがって古墳時代前期においても，古墳を構築するような矛盾(註14)が共同体内部において成長していなかったものと思われる。このことは前項でものべたが，後期古墳においても，一応横穴式石室を築造したが，副葬品は全く少ないという現象にもあらわれるのではなかろうか。

さてこの地域への横穴式石室の導入は，安信古墳群3号墳などの時期であろう。若干おくれて門前中屋古墳が築造されたであろう。この後，6世紀末から7世紀初頭にかけて，この地域の古墳のほとんどは形成されたものと思われ，胴張りの横穴式石室の出現と，地域色のある須恵器が出現している。7世紀前半には一部に横穴式石室を築造すことはあったかも知れないが，古墳は消滅してゆく。これ以後この地域の人々はどのような動きをしたのかは不明であるが，この神代川流域には古代寺院が全くないことなどから，そういう勢力には成長しなかったのであろう。（竹田）

註

（註1） 本報告書に掲載
（註2） 中国縦貫道路建設に伴い，発掘調査がなされた。全長約7mの無袖式の胴張り横穴式石室であった。遺物などから6世紀末ないし7世紀初頭の時期と考えられる。
（註3） 哲西町上神代の山根屋遺跡で3基，同所道上古墳，哲西町矢田二野古墳などが中国縦貫道建設に伴い発掘されているが，胴張りはなかった。またすでに開口している古墳についても胴張りはない。
（註4） 高梁市と備前市の一部に胴張り横穴式石室があるということである。葛原克人，正岡睦夫氏御教示による。
（註5） 田辺昭三「陶邑古窯址群1」1966年
（註6） 哲西町上神代野田畝1号墳は安信古墳群3号墳よりやや古い須恵器が横穴式石室内に副葬されていた。福田正継氏御教示による。
（註7） 哲西町の道上古墳，二野古墳，横田東古墳などで認められる。また神郷町内の野原，高瀬，新郷などの古墳からも出土している。
（註8） 神郷町新郷中学校に保管されている遺物の中に，須恵器がダンゴ状になったものがあり，近くに窯が存在したことを示している。
（註9） 近藤義郎「佐良山古墳群の研究」1952年
（註10） 白根　「神郷町史」　年
（註11） （註1）に同じ
（註12） 中国縦貫道建設に伴い発掘調査が行われた。
（註13） （註2）に同じ
（註14） 近藤義郎，藤沢一夫「日本の考古学」Ⅳ　1966年

1．古墳群遠景（南より）

2．古墳群近景（北東より）

図版２

１．発掘前の１号墳（後方より）

２．１号墳のトレンチ調査

1．1号墳全景

2．1号墳石室内

図版 4

1．2号墳の全景

2．2号墳石室の全景

1　2号墳石室内の状態

2　2号墳とその掘方

1．3号墳全景

2．3号墳敷石排除後の状況

1　3号墳遺物出土状態

2　3号墳遺物出土状態（細部）

図版 8

1．4号墳

2．6号墳

1．5号墳の全景

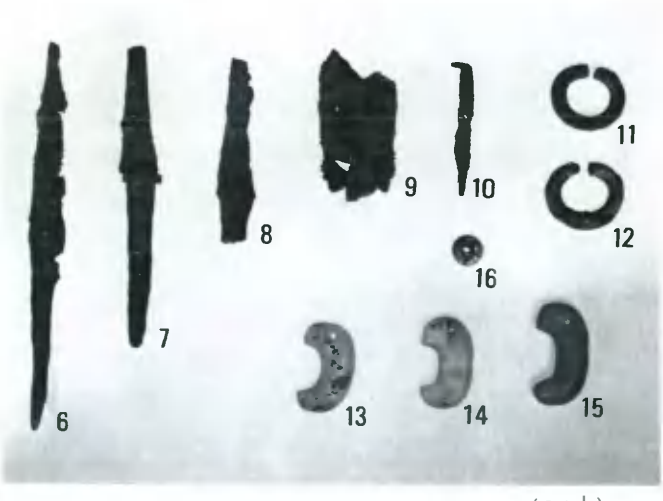
2．5号墳とその掘方

図版10

1．土坑墓検出状態

2．1号土坑墓遺物出土状態

須恵器（S：$\frac{1}{3}$）



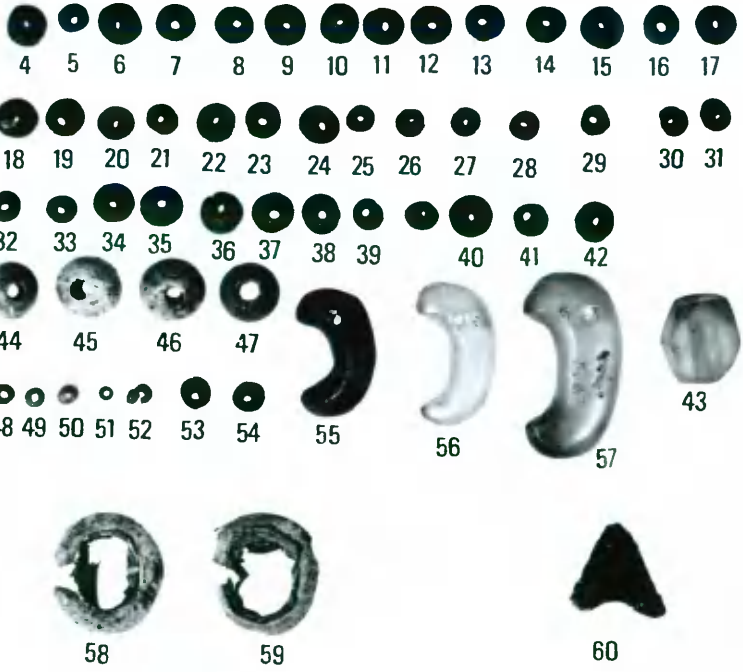
（S：$\frac{1}{2}$）

1号墳出土遺物

1

2

3



2号墳出土の遺物（須恵器S：$\frac{1}{3}$、その他は実物大）

1

5

2

6

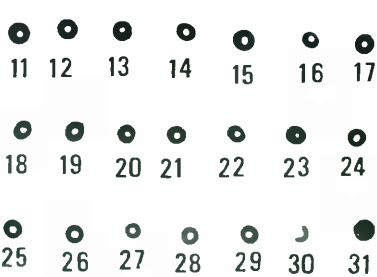
3

7

4

(S：$\frac{1}{3}$)

8 9 10


11 12 13 14 15 16 17
18 19 20 21 22 23 24
25 26 27 28 29 30 31

(S：$\frac{1}{1}$)

図版14

3号墳（S：$\frac{1}{3}$）

4号墳（S：$\frac{1}{3}$）

6号墳（S：$\frac{1}{3}$）

7号墳（S：$\frac{1}{3}$）

1号土坑墓（S：$\frac{1}{3}$）

古墳・土坑墓出土遺物

1．調査前（北東より）

2．表土除去後全景（南西より）

図版16

1

2

4

3

5

7

6

8

三信調査区出土遺物

Ⅲ 塚　谷　古　墳

目　　次

第１章　塚谷古墳の調査経過…… 235
第２章　塚谷古墳の構造…… 237
　第１節　墳　　丘…… 237
　第２節　横穴式石室…… 237
　第３節　出土遺物…… 241
　　1. 須恵器…… 241
　　2. 耳　　飾…… 242
　　3. ガラス製小玉…… 242
　　4. 刀　　子…… 242
　　5. 弥生式土器…… 243
ま　と　め…… 244

図　目　次

第１図　塚谷古墳周辺地形図…… 235
第２図　墳丘実測図…… 238
第３図　横穴式石室実測図(１)…… 239
第４図　横穴式石室実測図(２)……折込
第５図　遺物出土状況…… 240
第６図　須恵器・陶器実測図…… 241
第７図　遺物実測図…… 243
第８図　弥生式土器実測図…… 243

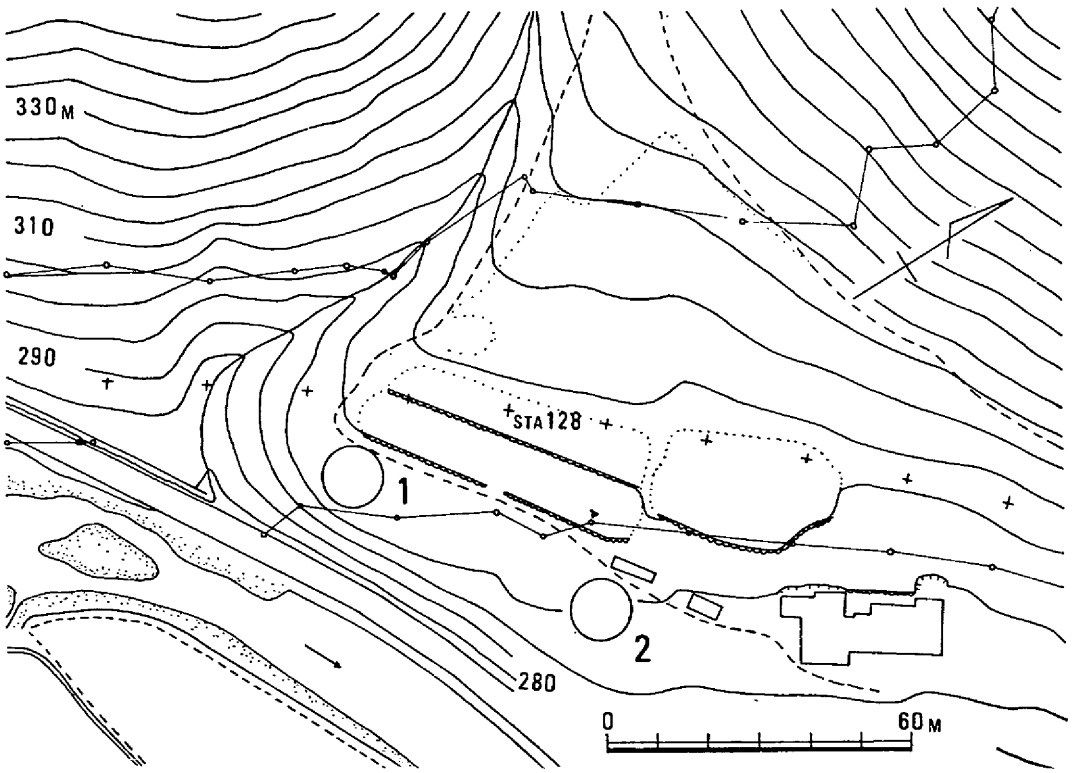
図　版　目　次

図版1-1　墳丘調査前全景（北より）
図版1-2　墳丘調査前全景（東より）
図版2-1　横穴式石室（北より）
図版2-2　横穴式石室（南より）
図版3-1　遺物出土状況
図版3-2　玄門付近の遺物
図版3-3　玄室中央部の遺物
図版3-4　玄室北東隅の遺物
図版4-1～3　須恵器
図版4-4　備前焼
図版4-5　耳飾
図版4-6　ガラス製小玉
図版4-7　刀子

第１章　塚谷古墳の調査経過

塚谷古墳は岡山県阿哲郡神郷町下神代大字三信字塚谷に所在する。神代川の北岸の山裾が緩やかな傾斜を呈している。この平坦面の端部に古墳は立地する。

1975年４月30日から塚谷古墳群について発掘調査を始めた。用地外で民家の近くに１基の横穴式石室が露出していた。周辺にも古墳の可能性のある７カ所について確認調査を実施した。その結果，最先端部において横穴式石室を内部主体とする古墳１基を確認し，それ以外は自然の集石であることが判明した。５月８日から古墳の調査に着手した。まず，地表の雑草等を除去して調査前の写真を撮影し，５月10日に25cmコンターで平面図を作成した。墳丘は近世，近代の墓地として利用されており，中国縦貫道建設に伴って移転したため多数の穴が掘られていた。攪乱土を除去したところ横穴式石室の奥壁に近い天井石が除去され，近代の墓壙となっていたためこの部分を掘り下げた。また，南側の羨道部分は神代川に面した崖となって，一部崩壊していた。天井石は４枚が原位置を保っており，１枚は転落していた。以上の状況から奥壁の中央と羨道部の中央を結ぶ線を軸とし，これに直交する軸線を割り付け，それぞれ，南側と西側にトレンチを設定した。玄室埋土中からは弥生中期の土器片を



第１図　塚谷古墳周辺地形図（1. 塚谷古墳　2. 用地外の古墳）

検出した。羨道部の攪乱土中からも須恵器の短頸壺片を検出した。5月13日からは周辺部の調査と併行して玄室内の調査をはじめる。玄門に置かれた長い石の内側は平らな石が敷かれ，遺物が検出された。5月19日には玄室奥の東隅において近代墓の下からガラス玉と金環を検出した。5月21日には石室内の清掃を終り，写真撮影と平面実測を完了した。5月24日に遺物をとりあげた。5月28日には石室の上面図を完了した。5月29日には墳丘の断面図を作成し，横穴式石室を露出した。地山をコ字形に掘り込み，石室がつくられていることが明らかとなった。6月3日には石室内の敷石を除去しながら図面を補足した。敷石を除去したあと床面を掘り下げ整地の状況を実測した。5月23日には墳丘下で2カ所の柱穴を確認したことと数片の弥生式土器片を検出したことから東側の畑地へ幅2m，長さ10mのトレンチを設定した。しかし多量の流石がみられただけだったことから，弥生時代の遺構は残っていないものと判断し，6月3日には調査を完了した。

第2章　塚谷古墳の構造

第1節　墳　　丘（第2図，図版1）

古墳は南へのびる平坦面の先端部において崖面の直上に位置する。西側には谷があり，北東部は平坦な畑地になっている。上方には水田があり，さらに上方は牧草地となっている。古墳の北側に山道があり，道に平行して石積の猪垣がある。墳丘の上面は平坦になり西側にくびれた部分がみられる。いずれも多数の墓があり変形されている。南は国道をはさんで神代川に向って急崖となっている。したがって表面観察と平面実測によるかぎり，明確な墳丘の規模を知ることができない。西側のくびれ部と横穴式石室を参考にして，墳形は円墳で，直径約10m，南下方からの高さ1.75mを測ることができる。天井石が露出していることから当初はさらに高くなっていたことがわかる。東北トレンチによると周湟状のものはみとめられず，東西トレンチにおいても全体の傾斜が南へ緩やかになっている以外に何ら変化をみとめることができない。盛土は黒色粘土で盛土の過程は明らかでない。

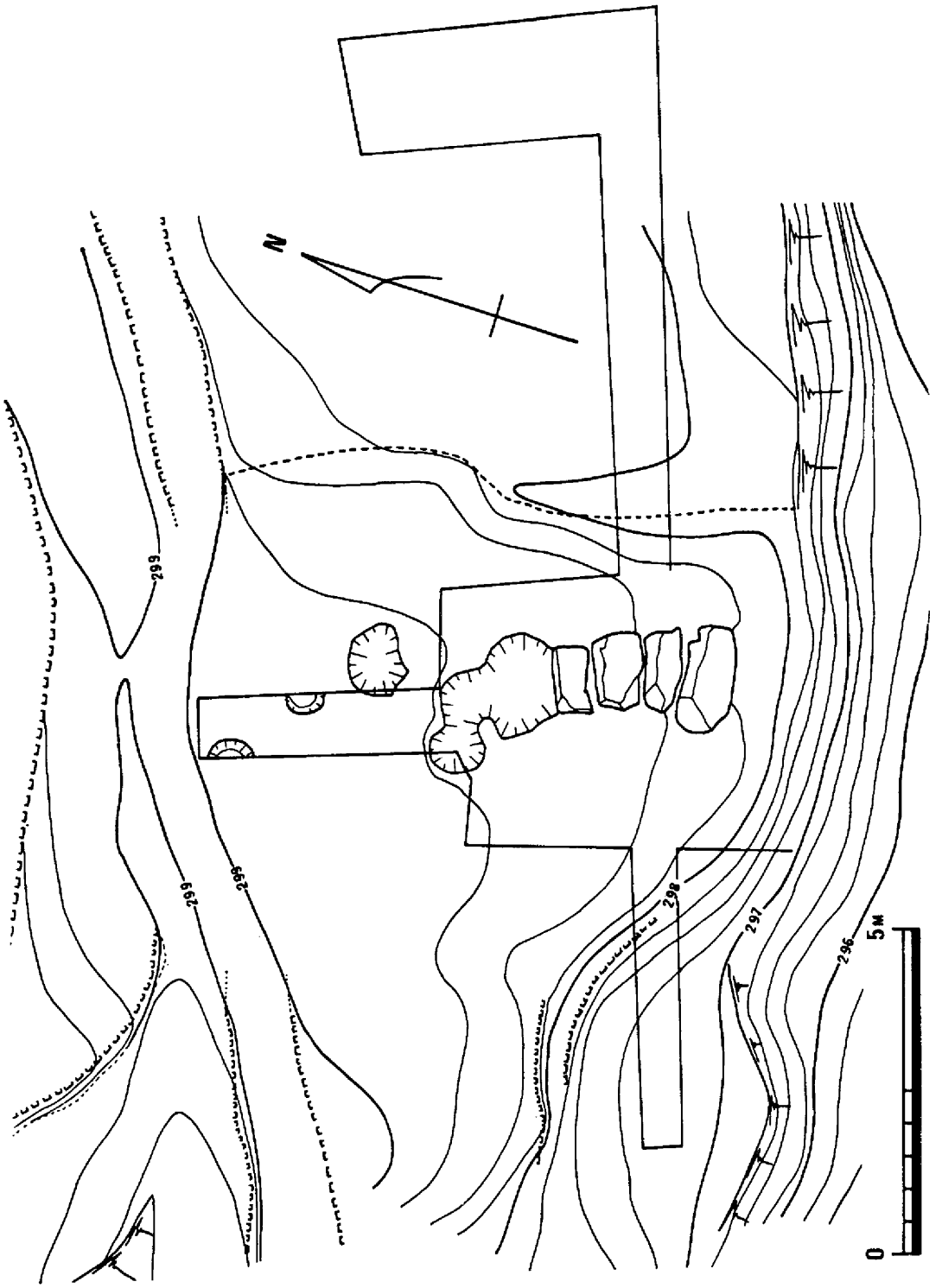
第2節　横穴式石室（第3，4図，図版2）

南へ向ってのびる緩やかな傾斜面へ「コ」字形に黒色粘土及び黄色粘土を掘り込んで墓壙をつくり，やや西寄りに横穴式石室を築いている。掘り込みの大きさは長さ3m，幅3m，最大の掘り込み部の深さは黄色粘土層上面から40cmを測る。石室の中央部断面の観察によると傾斜面の下方に盛土し，平坦面をつくっているのがわかる。石室の基底部の石はさらに地山を少し掘り凹めて据えている。詰石も若干みられる。平面形は中央部が少し広く，胴張りになっている。奥壁は幅80cm，高さ107cmの1枚石を使用し，隙間には詰石を用いている。側壁は下部の石を横にし，上部の石は小口を向けるものが多く持送りがきつい。玄門では両側の石が長めでこれを立てて使用している。羨道部は一部崖に面して崩壊し流失しているとのことであった。前面が少し開いている。天井石は奥壁に近い1枚が近代墓のため抜きとられ4枚が原状のまま残っていた。さらに羨道部の1枚は転落した状態で確認された。天井石の横には多数の詰石が使用されている。床面は黒色粘土まじり黄色粘土を敷き，その上に平らな石を置き並べている。石の隙間には直径5～15cm位の小円礫をつめている。玄門には長さ70cm，幅17cm，厚さ21cmの石を横にしてあり羨道部より一段高くなっている。

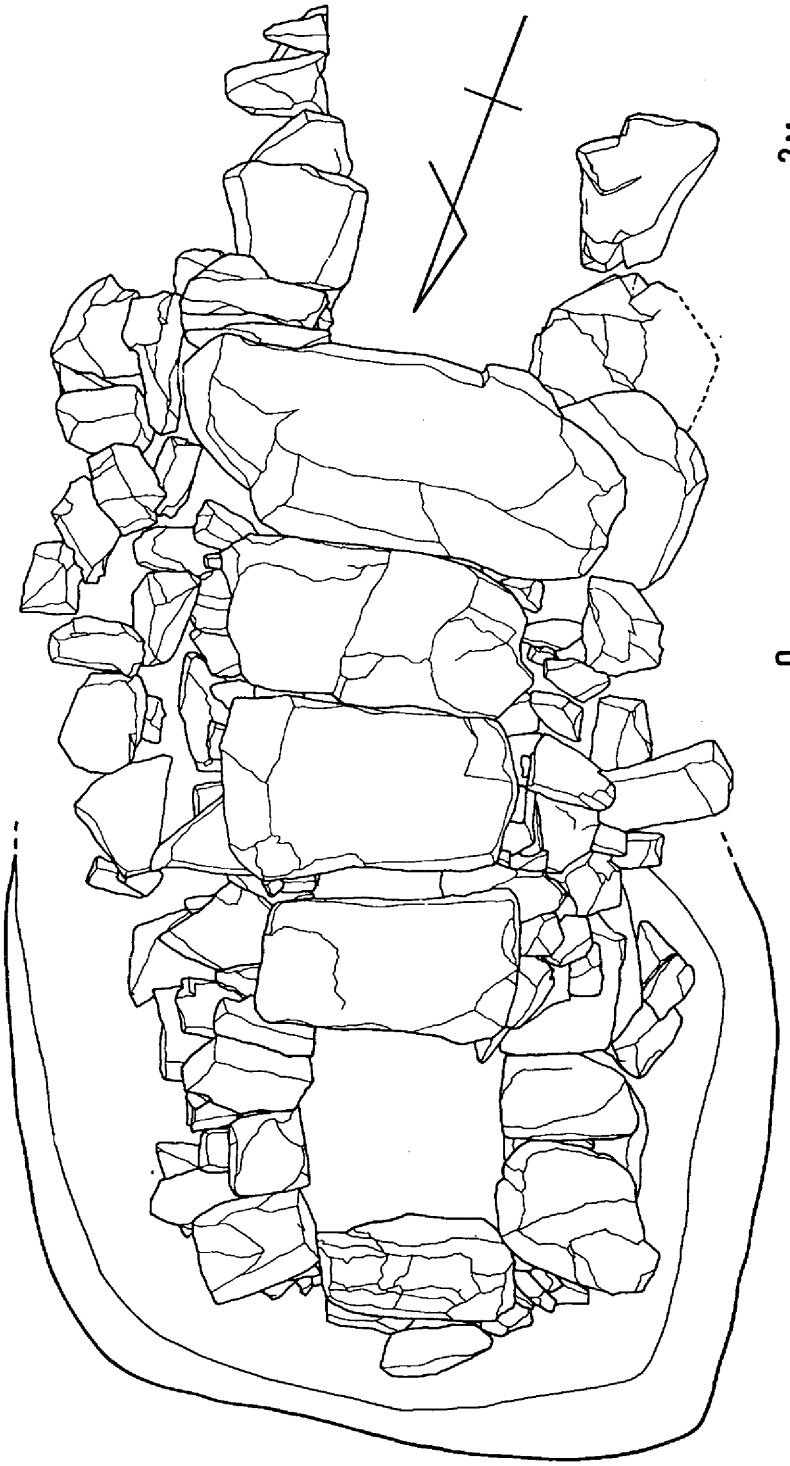
石室の規模は以下の通りである。

全　長	4.87m	玄室長	3.23m
玄室最大幅	1.05m	奥壁部幅	0.86m
玄室高	1.30m	玄門高	0.87m

副葬品は敷石の直上から検出された。玄門を入ったところで杯身が2個伏せた状態であり，玄室中央部には杯蓋1個が伏せた状態で存在した。この近くに銅環が2個検出された。玄室奥の東端で銅環

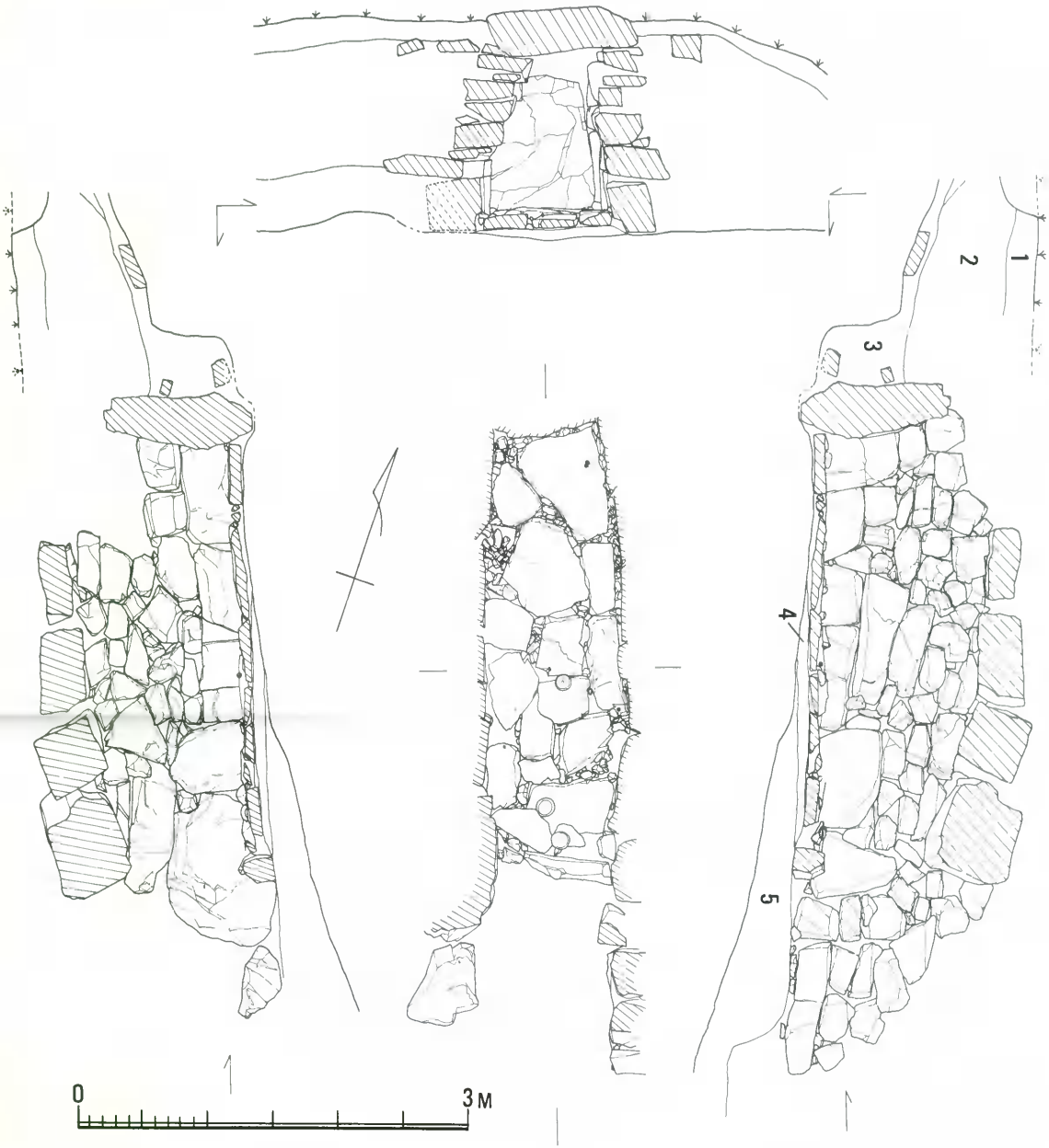


第2図　墳　丘　実　測　図



第3図　横穴式石室実測図（1）

第5図　遺物出土状況



第 4 図　横穴式石室実測図(2)
（七層名 1．表土，2．黒色粘土，3．黄色粘土まじり黒色粘土，
4．黒色粘土まじり黄色粘土，5．黄色粘土まじり黒色粘土）

2個とガラス玉36個が検出された。一部新しい墓壙のため攪乱されていて，攪乱土中から刀子5，須恵器の壺片，杯身片が検出された。

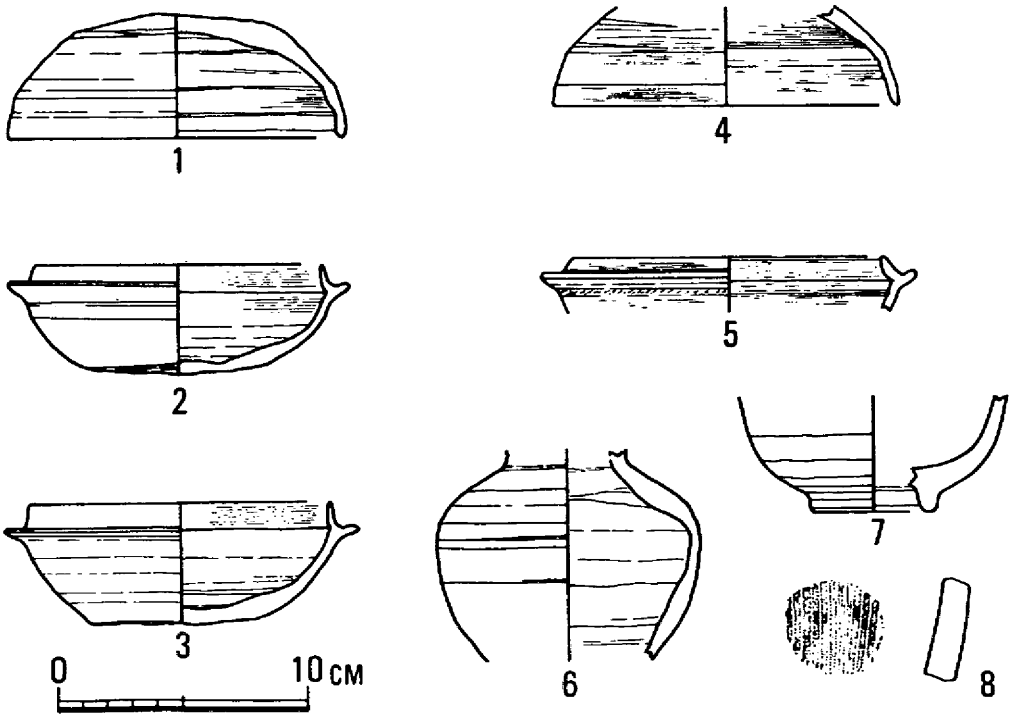
副葬品の配置をみると，奥壁近くに金環2個とガラス玉36個があり，玄室中央部に銅環2個がみられることから2体が埋葬されていたと推測される。2体以外の埋葬が行われたかどうかについては人骨等が残存しないため不明といわざるを得ない。

以上のほかに，横穴式石室内の埋土を排土中数片の弥生中期の土器片が検出された。

第3節　出　土　遺　物

1.　須　恵　器（第6図，図版4-1～3）

横穴式石室の床面で検出された須恵器には杯蓋1，杯身2があり，他に攪乱土中から杯蓋，杯身，壺の破片がある。杯蓋（1）は口径13.4cm，器高4.9cmを測る。天井部はほぼ平坦で中程からやや傾斜を変え，口縁部は直立ぎみとなり，端部はやや丸みをもっている。焼成は良いが，胎土に細砂を含んでいる。色調は外面に自然釉がかかり灰白色と暗青灰色が混り，内面は暗青灰色を呈する。杯身（2）は口径11.3cm，器高4.4cmを測る。立ち上がりは内傾し，口縁端部はだんだん薄くなり，丸みをもっている。受部は外上方に内湾しながら立ち上がり，外方へ屈曲し，端部は丸くなっている。底部は切り離した後が未調整である。胎土には細砂を含み，色調は外面に自然釉がかかり，灰白色と暗青灰色



第6図　須恵器・陶器実測図

が混り，内面は暗青灰色を呈する。杯身（3）は口径12cm，器高4.8cmを測る。立ち上がりは若干内傾するが2よりは直立ぎみである。受部は外上方へ内湾しながら立ち上がり，外方へ屈曲し，端部は丸くなっている。底部は切り離した後が未調整で凹凸があるがほぼ平坦である。胎土には細砂を含み，色調は内外面とも淡青灰色を呈する。攪乱土から破片で検出された杯蓋，杯身はいずれも口縁部の小破片である。杯蓋（4）は口径 13.6cm を測る。天井部は緩やかに湾曲しながら下がり，口縁部で傾斜が変わり，端部は丸くなっている。胎土には 細砂を含み，色調は灰白色を 呈する。杯身（5）は口径12.2cmを測る。立ち上がりは内傾し，短く，口縁端部は丸くなっている。受部は外上方へ内湾しながら立ち上がり，外方へ屈曲し，端部はまるくなっている。胎土には細砂を含み，色調は灰白色を呈する。周辺部の確認調査を実施した際，備前焼等の破片を検出している。備前焼の壺（6）は小さいもので，口縁部及び底部を 欠失している。胴部の径は 10.5cm を測る。肩が張って，胴部は 内湾しながら底部方向へ至る。胎土には細砂を含み，色調は青灰褐色を呈する。備前焼の擂鉢（8）は小破片で内面にくしめを施している。色調は茶褐色を呈する。陶磁器の碗（7）は口縁部を欠く破片である。高台の端部は凸字形を呈し，直立している。胎土は微細で内外面とも釉薬をかけてあり，色調は乳白色を呈する。

2. 耳　　飾（第7図，図版4-5）

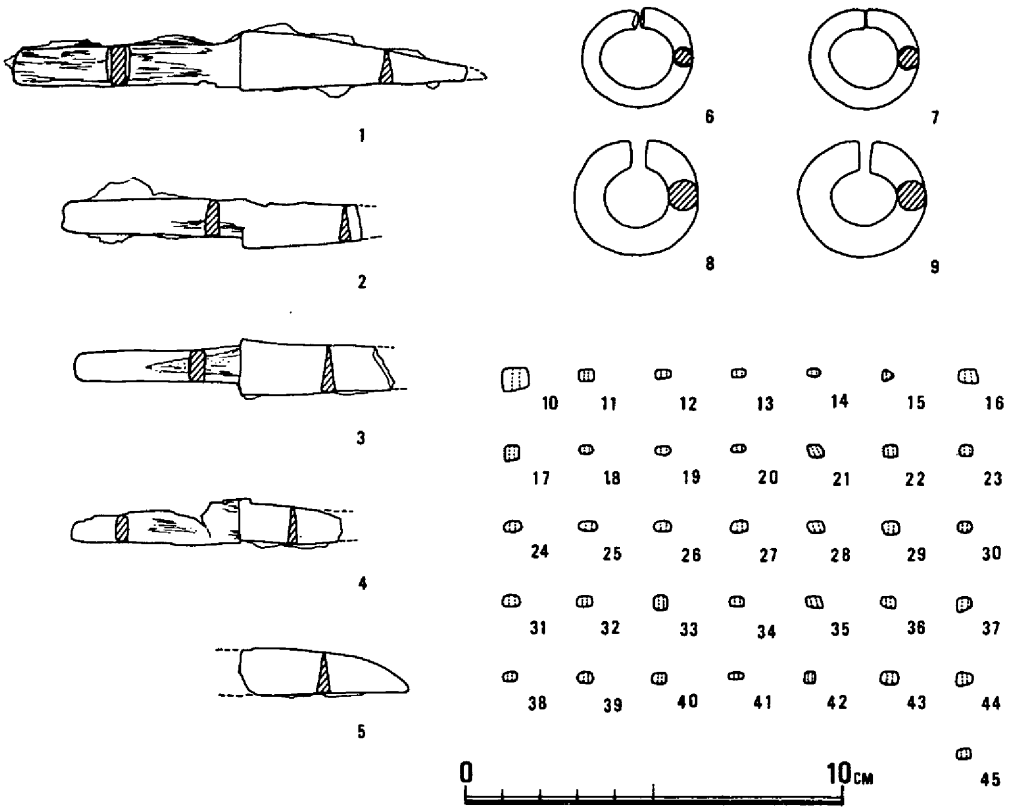
耳飾は2対ある。1対(6，7)はガラス玉の近くで検出されたもので銅地に銀箔を張り，さらに金箔を張ったものである。6は環の横で3cm，縦で2.6cm，断面の直径は5㎜を測る。7は環の横で2.9cm，縦で2.6cm，断面の直径は5.5㎜を測る。切れめはほとんど間があいていないが6では若干みられる。重さは6が10.5g，7が9.5gである。他の1対(8，9)は玄室中央部で検出された銅環である。8は環の横で3.3cm，縦で3cm，断面の直径8㎜を測る。9は環の横で3.4cm，縦で3cm，断面の直径8㎜を測る。切れめは8が4㎜，9が3㎜あいている。重さは8が28.5g，9が28.5gである。

3. ガラス製小玉（第7図，第1表，図版4-6）

ガラス玉は玄室の奥壁に近いところで36点検出された。1個だけ直径7㎜，長さ6㎜で濃紺色のものがあるが，それ以外は小さなものである。形は円形で短い管状を呈するものもみられるが，長楕円形を呈するものと不整形になるものが多い。大きさは最大のもので直径5.5㎜，長さ3.5㎜，最小のものは直径3㎜，長さ3㎜を測る。ほぼ直径4㎜，長さ3㎜位の大きさである。色調は紺色のもの5，青色のもの4，水色のもの25，黄緑色1である。

4. 刀　　子（第7図1～5，図版4-7）

刀子は玄室内の中央より奥側において攪乱土中から出土したものである。1はほぼ完形で先端部をわずかに欠失している。現存全長は 12.1cm，刃の現存長6cm，最大幅1.5cm，茎の長さ 6.1cm，幅1.1cm，厚さ 0.4cmを測る。把は 木装で木質が残っている。2は刃の約半分を欠失している。現存全長は8cm，刃の現存長 3.2cm，最大幅 1.3cm，茎の長さ 4.8cm，幅1cm，厚さ 0.4cmを測る。把は木装で木質が若干残っている。3は刃の約半分を 欠失している。現存全長は 8.5cm，刃の 現存長 4.1cm，最大

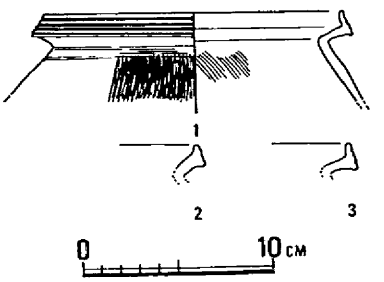


第7図　遺　物　実　測　図

幅1.5cm，茎の長さは4.4cm，幅0.8cm，厚さ0.4cmを測る。把は木装で木質が若干残っている。刃の湾曲からかなり使用されていたものであることがわかる。4は刃の約半分を欠失している。現存全長は7.2cm，刃の現存長2.7cm，最大幅1.1cm，茎の長さは4.5cm，幅0.7cm，厚さ0.3cmを測る。把は木装で木質が若干残っている。5は刃の先部だけである。現存全長は4.6cm，最大幅1.2cmを測る。

5.　弥生式土器（第8図）

横穴式石室の埋土と封土中から数片の弥生式土器が検出された。いずれも小破片で実測できた3点について概要を述べる。3点とも甕の破片で，1は器壁は薄く，口縁部は「く」字状に外反し，端部は上方へ拡張する。外面には凹線文が施されている。頸部は横なでが行われ若干凹んでいる。肩部は縦位の太いハケメが施されている。内面上部にも斜めにうすくハケメが施されている。3はやや器壁が厚くなるが，1とほぼ類似している。2は器壁が厚く，端部は肥厚し上下に拡張する。3点とも胎土に細砂粒を含み，焼成は堅緻である。色調は黄褐色を呈する。以上の土器は形態から弥生中期後半に比定される。



第8図　弥生式土器実測図

ま　と　め

塚谷古墳群は2基から成り，いずれも横穴式石室を内部主体とする円墳である。調査を実施した古墳では墳丘は流失して詳細な点は明らかでないが，横穴式石室は玄室の平面形が胴張りする特色がみられる。玄門には玄門石がおかれ，玄室内には敷石がみられる。遺物の配置からは2体の埋葬が推定されるが，人骨が残存せず性別等はわからない。副葬品には耳飾り，頸飾りがみられるが，鉄器では刀子があるだけで直刀，馬具などの副葬がみられない。以上のことから推測される被葬者は在地の農耕民的性格をおびたものとすることができないだろうか。古墳の築造および使用された年代は，出土遺物から推定して6世紀後葉の比較的短期間であろう。　（正岡・二宮）

第1表　ガラス製小玉計測表

番号	直径 mm	長さ mm	色調	番号	直径 mm	長さ mm	色調
1	7	6	濃紺色	19	4.5	3	水色
2	4	3	紺色	20	4.5	3.5	〃
3	4.5	2.5	〃	21	4	3	〃
4	4	2	〃	22	5	3	〃
5	3.5	2	〃	23	4	3	〃
6	3	3	〃	24	4	4	〃
7	5.5	3.5	青色	25	4	3	〃
8	4	4	〃	26	4	3	〃
9	4	2.5	〃	27	4	3	〃
10	4	2.5	〃	28	4	4	〃
11	4	2	水色	29	4	2.5	〃
12	4	3	〃	30	4.5	3	〃
13	4	3	〃	31	4	3	〃
14	4	3	〃	32	4	2	〃
15	5	3	〃	33	3	3	〃
16	5	3	〃	34	5	3	〃
17	4.5	3	〃	35	4.5	3.5	〃
18	4.5	3	〃	36	4	3	〃

1．墳丘　調査前全景（北より）

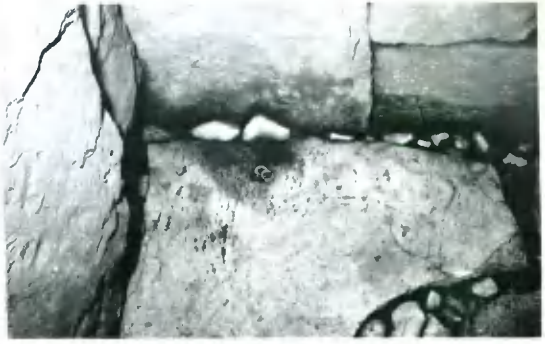
2．墳丘　調査前全景（東より）

図版２

１．横穴式石室（北より）

２．横穴式石室（南より）

1．遺物出土状況



3．玄室中央部の遺物

2．玄門付近の遺物

4．玄室北東隅の遺物

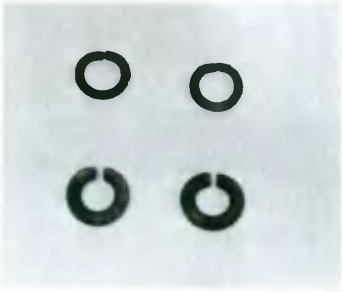
図版 4

1

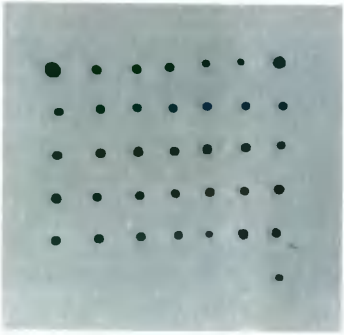
2

3

4



5



6

7

塚谷古墳出土遺物

桃　山　遺　跡（補稿）

――桃山遺跡からのメヒシバなどの出土とそれらの発芽および生育――

桃山遺跡からのメヒシバなどの出土とそれらの発芽および生育

岡山大学生物学研究所　教授　笠　原　安　夫

はじめに

1974年4月から中国縦貫道建設予定地にあたる岡山県北房町下呰部桃山の弥生後期の竪穴住居跡（1800年前）が発掘された。その桃山住居遺跡の表層60cm下の床がきわめて固くなっていて，地層を剝ぐ作業が困難のため土を柔らげる目的で8月に2，3回一面に散水して，その上に黄色のビニールシートを被せていたところ，その1カ所（写真1および図1）で9月5日にかたまっている植物種子が一斉に発芽しているのが見られた。全く思いがけないことなので，同委員会の田仲主事はシャーレに湿した脱脂綿を敷き，その上にそのかたまった発芽種子塊をのせて（写真2），9月8日に持参し，その種子の同定と生育調査を依頼された。

その発芽している植物はメヒシバと同定されたが，他にも1，2粒何種類か，混っているのに気付き，それらを検出分析した。その第1回の採土試料の土量は芽出した種子を含めて80gであった。次に筆者が藤沢技官らと9月17日現地を訪ねたとき，先に発芽したメヒシバの一部が残され，径20cm円形に5～6cm高に盛上り他は削られ低くなっていた。当日第2回採土を行い，その地点は残されていたメヒシバ発芽粒を含めて700gの土とその盛上りの円内からNo.1，2，3と盛土円外の地点からNo.4，5の土を各々200～350g採土した。また第3回の採土は，メヒシバの発芽した直下の土であり，それをビニール2袋に入れて11月9日に田仲氏が持参された試料である。

調査方法と結果

第1回調査は表1の試料80gの全量を実体顕微鏡下で，1粒ずつよりわけてメヒシバの発芽粒と不発芽粒にわけ，その粒数と，また他の種子は，その種類の同定と粒数をしらべ，9月中旬に，メヒシバは発芽粒356粒のうち，60粒を径17cmのポット8ケに移植した。そのうち，他の種子は，径9cmシャーレに濾紙を2枚敷き置床し25℃の恒温器に入れ，発芽粒（図2ａｂ）は，まず殺菌土を充した5×5cmの紙ポットに移植し（写真3），活着後に紙ポットのままアルミの苗箱に移して温室で生育させた（写真4）。その後の生育，開花，結実の状態の調査をなした（写真5）。

第2回目調査は，表2に示されたように同年9月17日，まだ残されていたメヒシバ発芽粒とその地点の土を含めて調査した。表3に示されたのは，残された円内と周囲から採土したNo.1～5の土（図1Ｃ）200～250gを水洗い分析である。その結果，No.1・3を除いて種子が検出されたので，第1回と同様に発芽生育させた。すなわち，No.2の200gの土中からメヒシバ8粒が検出され，それらは全部発芽生育した。No.4の350gの土から不明種子が1粒発芽したが移植後に枯死した。No.5の120gの土

からはカモジグサ？　1粒が発芽し大株に生育をつづけているが，1977年4月上旬現在に到るも未だ出穂しないので種名は確認できない。他に不明1粒は発芽したが移植後に枯死したのでその種類の同定もできなかった（図2 b）。

また第3回目調査として，メヒシバの発芽した地点直下の採った土からはA 320 gの土からは種子が検出されず，B 1,100 gの土からはきわめて小さい不明種子3粒が検出された。それらは時期はずれなので，発芽試験は行わなかった。

以上，第1，2回の分析種子は表1，3および4に示されているように，1974年11月下旬，12月中旬の草丈と同年また翌年における開花，結実の時期をしらべ，また成熟後に抜取って腊葉にして，その乾重が調査された。

それらの表によれば，この遺跡の出土種子は，種名？　の種を含めて14種であり，その粒数は全部で745粒あった。そのうちメヒシバが708粒の95%を占めている。他は何れも僅少でヘビイチゴとホトケノザが各10粒，クワクサ4粒，イヌビユ2粒で他の9種は1粒ずつであった。

発芽率は，メヒシバが95%，ヘビイチゴが90%，クワクサ75%，イヌビユ50%，その他のハコベ，カスマグサ，エノキグサ，タチカモジグサおよびウシノケグサ？　が1粒ずつであったが，それらは発芽したので100%発芽となる。ところがホトケノザは出土10粒とも発芽せず，また，ハナイバナ，イヌタデは各1粒出土したが発芽しなかった。またそれら発芽状態は，メヒシバ，イヌビユ，ハコベ，ヘビイチゴは置床後すぐ発芽し，クワクサも第1回で早く発芽した。しかし他のもの，たとえば第1回のタチカモジグサ，ウシノケグサ，カスマグサは，1～3カ月後のように遅く発芽した。また第2回目のクワクサ，ヘビイチゴ，エノキグサが約1カ月後とやや遅い発芽であった。また，それらの移植後の活着は2，3枯死したが，他の大多数はよく活着し，生育をつづけた。その開花，結実はカモジグサに似たイネ科の植物（写真6）の一株は3年後の今日も出穂しないのとクワクサが0.1 gのように小さい株に結実した他は，何れも正常に出穂または開花，結実であった。すなわちメヒシバは現生種子のそれと比較してみたが，その生育開花には殆ど違いがなかった。また，それらの腊葉乾重では，メヒシバは1ポットに7～8株で密植のため平均1株当りは0.4 gと小さい。その他の乾重は0.8～10.5 gあり，とくにタチカモジグサ，カスマグサ，ハコベは大きく生育した（写真7・8）。なお，オオイヌノフグリは，明治時代の帰化植物であるので，これは弥生時代の層からでなく，図2 aに見られるように，種子表面の斑紋も極めて明瞭なので新鮮なもので，恐らく発掘または散水してビニールシートをかける前にたまたまこの地点に他から落ち込んだものと考えられる。このオオイヌノフグリは大きく発育している。

考察とまとめ

古代の埋土種子の発芽については，大賀博士は，1948年に千葉県検見川の弥生時代のものとされた遺跡で，丸木舟の断片の出た同一地層から3粒のハスの種子を発見し，それから発芽した幼植物が生育して，今日，この古代ハス種子からの植物体が各地の公園などで花を咲かせているのは周知のとおりである。リビー（1954）は，この丸木舟の破片の年代を測定し，3075 ± 180年以前のものとした。この埋土ハス種子の寿命は3,000年以上であることが確かめられたのである。その後，豊田博士(1967)

表1　第1回メヒシバ発芽粒とその土の分析種子種類と発芽，生育調査

雑草名	粒数	発芽数	発芽開始	発芽歩合%	12月16日	
					生育状態	草丈(cm)
メヒシバ	376	356	9月7日	94.7	開花	39.0
イヌビユ	2	1	9. 11	50.0	〃	12.0
ハコベ	1	1	9. 11	100	開花結実	24.0
クワクサ	2	2	9. 16	100	結実	2.0
ヘビイチゴ	1	1	9. 11	100	生育中	6.0
オオイヌノフグリ*	1	1	9. 13	100	〃	7.5
タチカモジグサ	1	1	10. 12	100	〃	—
ウシノケグサ？	1	1	11. 1	100	〃	—
カスマグサ	1	1	12. 19	100	〃	—
ホトケノザ	3	0	—	0	—	—

1974，9月7日メヒシバ発芽粒とその地点の土を含めて80g採土，*表4を参照，キビの内頴1片が出土した。

表2　第2回メヒシバ発芽粒とその土の分析種子種類と発芽，生育調査

雑草名	粒数	発芽数	発芽開始	発芽歩合%	11月27日	
					生育状態	草丈(cm)
メヒシバ	324	306	9月18日すで発芽に	94.5	移植しない	
ハナイバナ	1	0	—	0	—	—
イヌタデ	1	0	—	0	—	—
ホトケノザ	7	0	—	0	—	—
クワクサ	2	1	10. 21	50.0	開花	5
エノキグサ	1	1	10. 21	100.0	生育中	14
ヘビイチゴ	9	7	10. 21	77.8	1株活着	

1974，9月17日メヒシバ発芽粒とその地点の土を含めて700g採土し湿った脱脂綿で発芽させた。

表3　第2，3回メヒシバ発芽粒地点の周囲の土の種子分析調査

試　料	土　量（g）	検　出　種　子	置床後の発芽生育
No. 1	300	0	
No. 2	200	メヒシバ8粒	8粒発芽生育する
No. 3	250	0	
No. 4	350	不明1粒	発芽・移植後枯死
No. 5	120	カモジグサ(？)1粒 不明1粒	発芽・生育，出穂しない 発芽・移植後枯死
A	320	0	
B	1100	不明2粒	発芽せず

図1Cを参照，9月17日採土（第2回採土）

A，Bは同年9月下旬メヒシバ発芽地点の直下の土を採土した（第3回採土）

表4　第1，2回分析種子の生育と結実調査

雑　草　名	粒数	発芽	不発芽	発芽歩合（%）	移植	生育	開花月日	結実月日	腊葉の調査		
									抜取日	草丈(cm)	(1本当り)乾重(g)
メヒシバ	700	662*	38	94.6	60	60	10月25日	11月中旬	1月28日	33.0	0.4
イヌビユ	2	1	1	50	1	1	12. 16	2. 17	4. 9	14.0	0.8
ハコベ	1	1	0	100	1	1		11. 26	1. 14	30.0	2.6
クワクサ	4	3	1	75	2	2		11. 15	4. 9	6.0	0.1
ヘビイチゴ	10	9	1	90	2	2	3. 12		4. 9	12.0	0.9
オオイヌフグリ**	1	1	0	100	1	1	2. 26		4. 9	22.0	4.6
カスマグサ	1	1	0	100	1	1			5. 10	45.0	4.8
エノキグサ	1	1	0	100	1	1	11. 25		4. 9	17.0	1.1
タチカモジグサ	1	1	0	100	1	1	6. 19		7. 26	87.0	10.5
ウシノケグサ？	1	1	0	100	1	1	不注意で中途枯死した。				
計	732	681	51		71	71					

* うち49粒は幼根のみの異状発芽であった。

** この種子は図2bのように果皮も明瞭で新種子がたまたま落込んだと推定される。

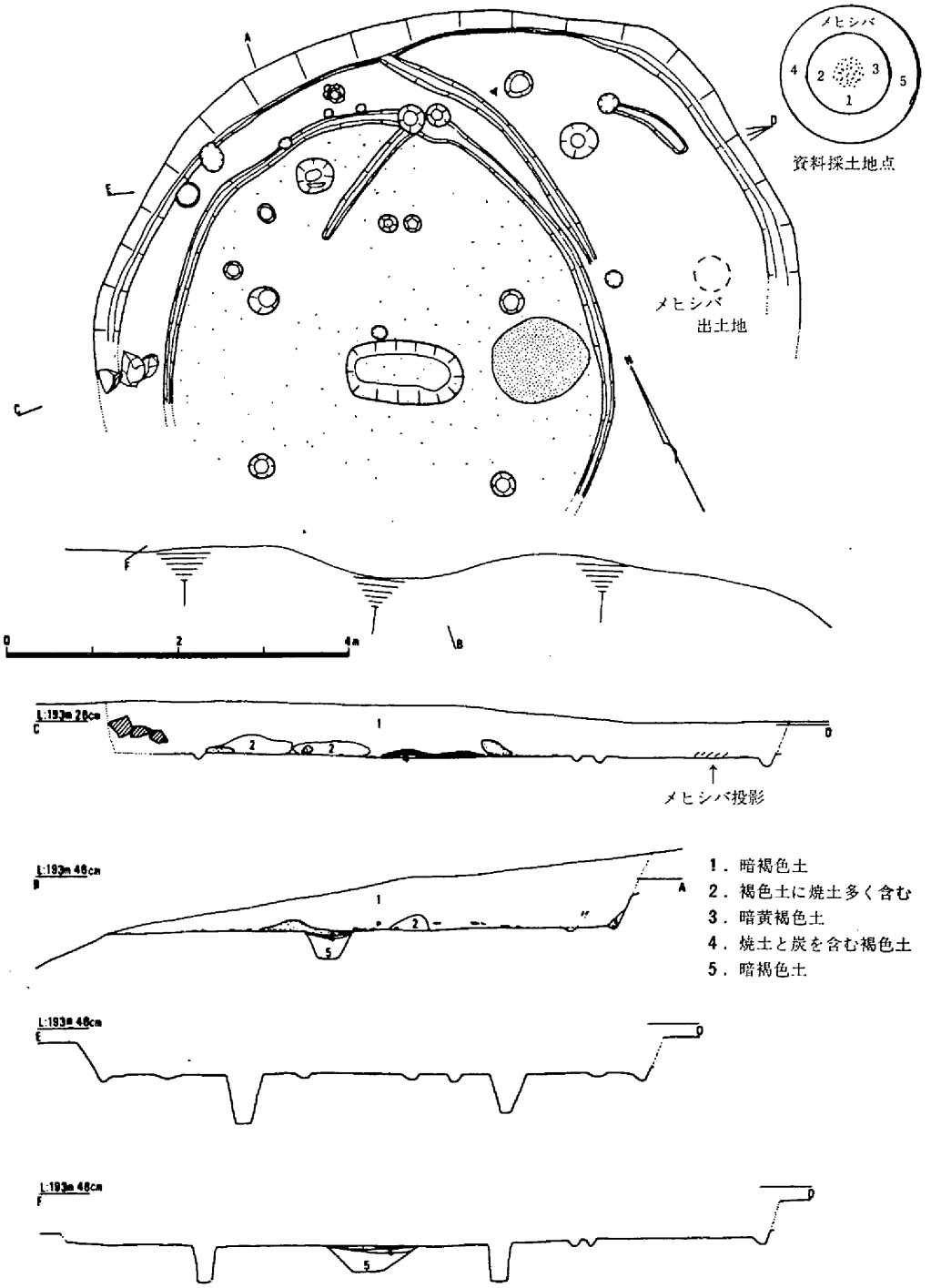
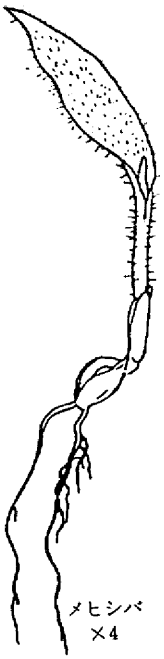
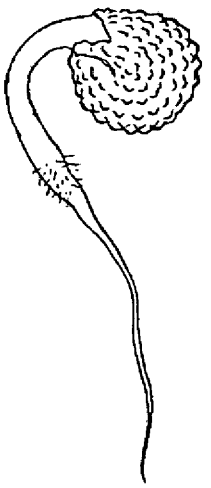
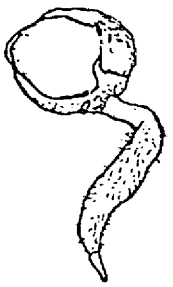
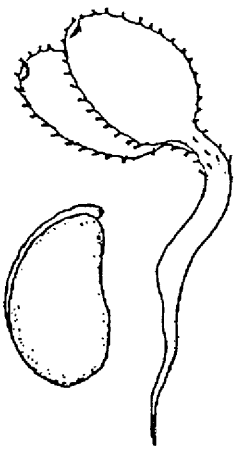


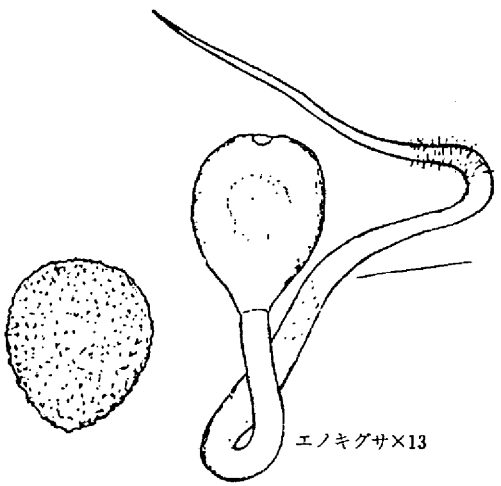
図 1　桃山遺跡住居址(メヒシバ出土)　(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12』より再掲)

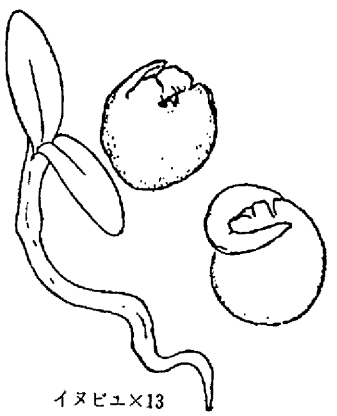

メヒシバ
×4


ハコベ×13


クワクサ×14


ヘビイチゴ×13


エノキグサ×13


イヌビユ×13

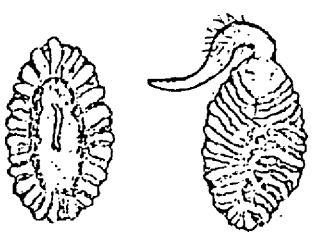

オオイヌフグリ×14

図２ａ　桃山遺跡より出土した約1800年前
雑草６種子の発芽（オオイヌフグリは現生のもの）

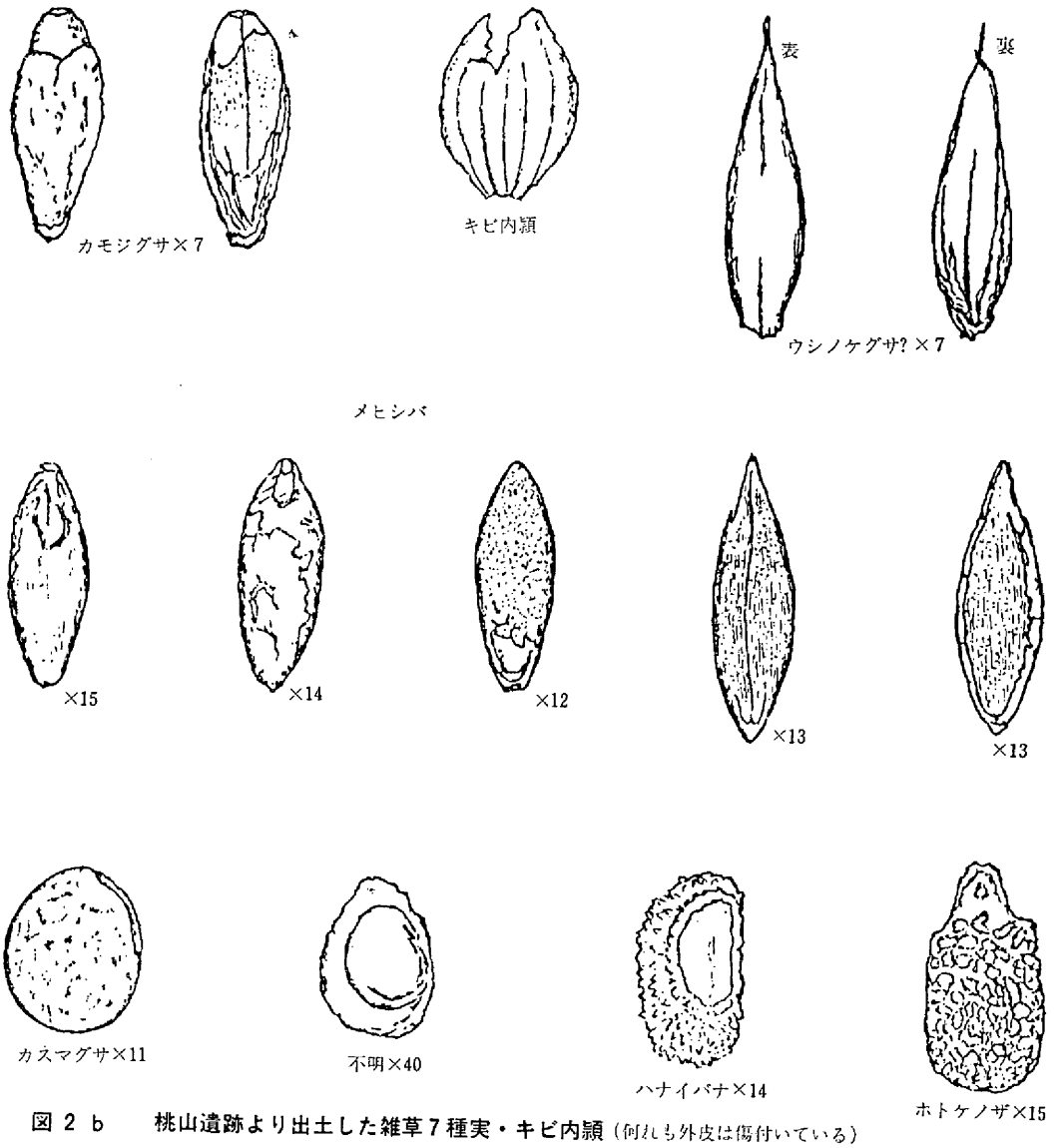


図２ｂ　桃山遺跡より出土した雑草７種実・キビ内頴（何れも外皮は傷付いている）

は現生ハスは開花まで3，4年はかかることから，この古種子が1年で開花したのに疑いを表明した。その後氏（1974）は，埼玉県行田市小針にごみ焼却場を建設するため1971年6月初旬，地下2～3m掘ったところ，2,500～3,000年前の土器約30点が出土し，その跡はいくつかの池ができた。その後池に多くの水生植物が群生したが，1973年5月15日水面上にハスの葉が見出された。ハスの葉は生長し，数もふえ，7月13日に最初のピンクの花を咲かせた。

また外国における文献では，デンマーク自然博物館のオダム（1965）が，デンマークの各地の遺跡から掘出した土の上には，現在その付近では見られない植物種類が発生しているのに気がついて，1960年以来デンマークとスエーデンの30カ所の遺跡での発生種類を調べた。また，発掘中の土層から

の種子を検出し，その種の発芽を試験し，その生育を観察したものを発表した。それによれば，最も古い発芽は，AD. 200年の Vestervig のA遺跡でのシロザ，ノハラツメクサなどが発芽している。その他の多くは AD. 1,300年～1,800年代の遺跡のものであり，ハコベ，ヒヨス，ミミナグサ，タンポポ，ノゲシその他で約40種の発芽を記述している。

著者がこれまで古代遺跡で土器と一緒に出た古種子の発芽について試験した2，3例の概要を述べてみよう。

1972年7月26日に秋田市教育委員会によって発掘され，3990±105年前（木越教授が C^{14} 年代測定法で同一層の木炭片の測定による）の縄文時代中期の住居跡のフラスコ状ピット内で，床下140cm下より発掘された種子を土器と一緒にビニール袋に保存したところ4日後に発芽して世間を驚かした。幼植物は秋田県農試で栽培され，大部分がハルタデ，少数がイヌタデと確認され，その腊葉標本と発芽残余の種子約70粒（15℃保存）および次世代種子を著者の元に送られ，その種子の形態，発芽，生育の状態について再調査を依頼された。

その種子の検鏡（実体顕微鏡後に走査電子顕微鏡）と15℃で保存した種子について，翌年4～6月における発芽状態とその幼植物の移植後における生育について報告した。

その発芽はきわめて迅速であった。すなわち置床2～3日後に大部分が発芽したが，新しく播種した新種子は休眠のため1カ月間で発芽しないか，また，3～18%の発芽にすぎなかった。古い出土種子を47粒検鏡の結果，最外部のがく被はもとより厚いクチクラ層が消滅で薄くなった果皮，内表皮がほぼ全面を覆うものが11%，残り89%はほとんどが内部の薄い種皮のみになっていた。そのうち，がくと果皮の一部が残るもの30%，果皮の内表皮の一部が残るもの34%，種皮のみになっているものが35%であった。クチクラ層を欠くので吸水が早く，そのため発芽が早くなったと考えられた。また胚の先端が痛んでいるようで幼根の伸長がきわめて不長の異常発芽となり，後に副根が出て生育をつづけて約半数が正常に花開結実した。

1974年5月，再度出土の残余種子10粒を置床したところ3日後までに6粒が発芽し，前年同様異常発芽であり，移植後に3植物体が正常に開花結実している（1973年10月第156回日本作物学会と'74年9月同会中国支部会講演会で発表）。

また，1974年2月17日熊野市有馬町中の茶屋の花尻薫氏方の屋敷内のミカン畑の片隅で地下壕を掘ったところ，2m下から縄文時代中期の土器の破片数ケが出た地層，その近くに焼土があるので住居跡地の穴（?）からピンポン玉の大きさに固まった植物の種子約800粒が地底の平面上に出土しているのを見付けた。プラスチック容器に入れておいたところ3月になって一部が発芽（5月末に出穂）した。このため，4月中旬に岩井氏を通じて著者のもとにその土と種子および幼植物を送り，幼植物，種子の同定と土からの種子の分析が依頼されたが，その土22gからムラサキエノコロ258粒，ツユクサ11粒，メヒシバ9粒，オヒシバ20粒，ヌカキビ4粒，カタバミ1粒，不明2粒の計305粒が検出された。そして，ムラサキエノコロ，メヒシバ，ヌカキビは2，3日で，ツユクサは16日目に発芽したが，オヒシバは10粒置床で5カ月かかって5粒が発芽し，カタバミは発芽しなかった。送付幼植物のツユクサ5本と発芽したメヒシバの活着生育は95%，と他は発芽粒の20～100%が生育して開花結実した。また，それらは集中して出土しているので，集められ利用していたものが零れ落ち埋まっ

たものと推定される（1975年４月日本作物学会で発表）。

その他，著者のところに照会されたものには，観音寺市七宝山の中腹にある周東古墳群で，同市教育委員会発掘調査団が1974年６月に石棺（約1,500年前）敷石の上（枕の部分）に約1,000粒のソフトボール大に固まっている種子を発見した。眞木氏によってツユクサと同定され，うち，25粒を５月19日置床したところ，10日後８粒が発芽し，９月５日に開花したという（「５年生の学習」1975年４月号）。

前述１例は，埋まった石棺内で最初は種子周囲は若干の空間が考えられるが，他の２例は土による全埋没で，それらは何らかの理由で一挙に埋まった傾向が見られるという。

種子は，種類によって遺伝的にほぼ定った寿命があり，短いものはヤナギ類の一週間位のものから，長いものではパリ博物館ベックエレル（1934）が腊葉500種の種子を採って調べたところ，マメ科のカワラケツメイ属の２種が最長で158年と115年の寿命があった。オーストラリアのエワルト（1908）は，800種の寿命を調べ，短命（３年以内），常命（３～15年），長命（15～100年）に３大別し，長命種子にはマメ科のものが137種，アオイ科のものが15種あった。日本の研究では，近藤博士（1933）の書には，短命１～２年，中間２～３年，長命４～６年，また，それ以上として，オーストラリアのそれに比べて夏が高温多湿のために短命という。

種子も生きている限り呼吸を行っているが，ヂュベル（1906）は，呼吸作用の最少のときに種子は最も長く活力を持続するといっている。一般に，農林種子の貯蔵の環境条件としては，低温，乾燥，密封の３要件が重要である。しかし低温ならば乾燥，密封は必須条件ではないのである。

著者は，近藤博士が52年前に塩化石灰などの乾燥剤と共に密封し室内貯蔵したタバコ，オオムギなどについて50年を経った一昨年試験を行った。その結果，タバコは79％が発芽し，それらは新種子と変らない生育を示したが，同じく50年後で２～９％の発芽率しかないオオムギでは覆土すれば地上につきぬく力がない。しかし，発芽粒を植えれば出穂結実することを確かめて報告した（1975年７月，日本作物学会中国支部会および同年10月第160回日本作物学会にて講演）。

エフルト（1908）は，種子の長命性は原形質の生物適応性に因るもので，種皮が不透通性のものは，その適応性を助長するという。レペシュキン（1912）は，蛋白質の凝固に要する時間が温度によって変ることは多くの人によって確かめられているが，氏はムラサキツユクサ，サトウダイコンなどの実験から，その凝固時間と温度から関係式を $T=a-b\ \log\ Z$（T は時間，Z は温度，a, b は常数）を導いた。大賀博士はハス種子での実験結果を，このレペシュキン式で計算すれば，15℃貯蔵ではハス種子の蛋白質凝固には約2,000年かかるので，前述出土古種子が2,000年以上の寿命があっても不思議でないという。

最近，ロバート（1972）は，貯蔵年月に及ぼす影響を調べた結果，最も影響が大きいのは種子の含水率と貯蔵温度であり，実験によって発芽歩合が50％に低下するまでの日数（$P50$）は次の実験式で示した。

$$\log\ P50=Kv-C_1m-C_2t$$

（m は種子水分，t は貯蔵温度（℃），$Kv\cdot C_1$ および C_2 は常数で，オオムギの場合，それぞれ6.745，0.172，0.075である）。（伊藤氏1972による）著者が前述した50年間貯えられたオオムギ種子

の発芽と含水量の関係をこの式で計算したところ可成りよく当てはまった。すなわち，計算では年平均温度を20℃として水分率６％のときは50％の発芽率となるには44年，８％のときは22年となったが貯蔵オオムギでは大体貯蔵１年後位から以後６～８％の水分率でコンスタントであった。平均年気温は16.7（5.5～29℃）で実験しているが，その結果は，50％発芽率まで18～40年であった。なお，この式でオオムギの含水量が４％で，０℃貯蔵ならば，3,121年間寿命があることになる。

以上は収穫された種子が空気中で貯えられた場合の寿命であるが，発掘種子のように土中に埋没した野生植物，雑草種子の寿命については次の報告がある。

古くはイギリスのブレンチレー（1918）が，イギリスのロームスダート農事試験場の圃場で１～12インチの深さで採土して，現在，牧草地で50年前に耕地であった当時の雑草の発芽を認めた。また，トウリイ（1957）は同農試の一部牧場では300年も以前に埋没した耕地雑草種子が発芽し，また，他の場所では30～40年前のものが発芽したという。

著者ら（1965）も，当農研の前身の大原農業研究所は1913年に水田の上に山土を盛って作られた。1963，'64年の２回にわたって研究室の再建築工事のためザンゴウが掘られた。地表37～60cm下に暗茶褐色の水田層が見られ，その土層からの出土種子のうち，タマガヤツリ，トキワハゼ，トキンソウ，タガラシ，ミズワラビ（胞子）と多数のイグサが発芽し，それらは開花結実した。ただアゼナのみは，生育不良で発芽97日目に1.5cmのきわめて小形で，１果12種子を結んで枯れた。その他水田層の側断面からレンゲ，カラスノエンドウも発芽していた。これらは何れも50年以上の寿命を保っていたと推定できる。

実際に管理して，正確な埋土試験を行ったのは有名なアメリカのビール（1904）の試験発表が最初である。すなわち1879年に23種（うち３種は林木種子）を各50粒宛約1,000粒を適当な水分をもった川砂に混じて一つの瓶に入れ，水の浸入をさけるため瓶口をあけたままで斜下向にして，地表下18インチに埋め，以後５年，10年おきに取り出して発芽試験をした。40年以後80年後まではダーリングトンが担当し，90年後にはキビラン（1973）らが，この13番目の瓶を掘出し試験結果を発表している。すなわち，これまでの発芽は20年後には12種，40年後には８種，60～80年後にはメマツヨイグサ，ナガバギシギの２種が２～24％発芽し，モウズイカ68～74％発芽した。90年後にはただ１種モウズイカのみが10本（20％）発芽した。その10本は全部が生育して結実した。その次世代種子の発芽には光線に晒すことが必要であった。しかし，この休眠期は長くなく，新種子の多は光がなくても漸次に発芽する。また，暗黒下で種子を再乾燥すると少し発芽を増し，光線下での再乾燥は95％の発芽となる。未発芽の５％は未知原因の休眠である。すなわち95％の発芽には，光と水分が同時に供給されなければならない。これが埋土し暗黒下で種子が長く休眠許され長命となる重要な要因とした。

また，ゴス（1924），トール（1946）によればダユベルが1902年に107種の種子を殺菌土と混ぜてポットに入れ8，22，42インチの深さをかえて埋め，数回取出して寿命をしらべた結果，１年後に71，10年後69，20年後51，39年後36種が発芽し，埋土は深い方がよく，雑草，野生植物が寿命が長く，作物は短く，ただタバコとシロツメクサの２種のみが長命であった。

キジャル（1948）は，10年間埋土後に発芽した９種の種子は，乾燥土壌よりも湿土での埋土の方が生活力が長く保たれた。荒井氏（1960～'62）らは，タイヌビエなど水田土中の種子は休眠中には死

滅が起らない。死滅は休眠から目ざめた種子の酸素と水分が与えられ生理作用が活発となった時に起るもので，したがって年中湛水されている湿田での埋土種子は休眠のまま長く生存するという。

しかし，バルトン（1991）は，一般に殆ど休眠性が考えられなく不滲透の果種皮をもたない雑草種子が，深く埋土されると長命を保つことは注目せねばならないし，いくらかの種類は第２次休眠に導かれるのであろうが，埋土それ自体が直ちに種子の深い休眠に導くとは考えられないという。

レウス（1973）は30種の作物と９種の耕地雑草の種子をガラス布製の小箱に入れ，それを土を入れた滋製ポフトに埋めてさらに圃場13，26，39cmと深さを変えた埋土と倉庫（10℃湿度85％）で貯蔵して20年後の種子の状態と発芽力を調べた。倉庫での貯蔵ではマメ科のもの２種が３％以下の発芽とフウロソウ類のものが15～46％，ハルタデ１％以下の発芽率，他は発芽力がなくなった。ハルタデは，泥炭土壌（pH4.2，有機炭素含量36.2％）で地表より26cm下では20年後にも17％発芽し，種子の皮は外観では完全によい保存状態であったが，一方普通土壌（pH6.5 有機炭素含量 4.6％）中では２％しか発芽しなかった。それの果皮が２つに分れて胚が露出したので死滅した。また，ナカハギシギシ，イヌカミツレも泥炭土中では13％，８％発芽したが普通土壌では発芽力はなくなった。反対にチシマイトキンポウゲ，シロサは普通土壌では50と23％発芽したが，泥炭土では僅か４と６％の発芽であった。このように種類によって，両土壌間に相反する結果になっている。

著者も一昨年地表１～５cm層から取出したサナエタデを外皮の光沢のあるものと光沢の無いものに分けて20粒を発芽試験したが１粒も発芽しなかった。しかし，３年前に盛土したところで１m下から取出したタデ種実は６粒が内容があって，うち１粒は発芽した。

阪本博士（1970）はオランダの考古学者エンバエクなどの論文を引用して，西南アジアのいわゆる豊沃な三日月地帯で近年大規模の考古学的発掘がおこなわれ，コムギおよびオオムギを主体とする農耕文化がいつ，どこで，どんな状態で起源したか，また初期の農耕村落共同体がどんな形態をとっていたかが明らかになってきた。すなわち，凡そ紀元前9,000年を中心に数千年間，狩猟採集と共に初期のムギ農耕と牧畜の文化期がつづき，それからジャルモ（B.C.7,000年）に見られるような農耕村落共同体の文化期に移ったという。

エンバエク（1952）によれば，イギリス南部の古代作物と共に出土した雑草種子をリストしている。そのうち後期青銅期からアブラナ類，ハマアカザ，タデ類，ナガバギシギシ，ヤエムグラなどの種子の出土をあげ，その侵入経過と共に，特にアマの擬態雑草として刺がとれたトゲナシヤエムグラの出土の記述が，この古い時代からあるのは興味深い。また，それらの多くは，食料の補助的役割があり栽培もしていたとしている。なお，同氏（1955）は，デンマークのトオロンド沼地の鉄器時代の胃内（罪人らしく絞殺された形跡）の内容物には，オオムギの他にヒメナズナ，サナエタデ，アカザ，オオツメクサ，ソバカズラ，カラスノチャヒキ，オオカニツリの種子があり，これらはカユとして与えたものであるという。

日本でも雑草のエノコログサは，数十年前まで丹波地方で栽培していたといい，中尾博士（1966）の書によれば，メヒシバの一種カーシー，ミレットとでも称すべき雑穀は広く野生するが，それを改良して成熟粒が非脱落性にしたものであり，メヒシバ同様に小粒である。またアフリカの西部ニゼル川中流でアフリカだけに見られる独自の農耕文化地方で，ハングリライスという雑穀は，日本のメヒ

シバの近縁種と述べている。

この桃山遺跡では，1片だがキビの片えいが検出され，そして現在の典型的な畑雑草であるメヒシバ，イヌビユ，ハコベ，クワクサ，ホトケノザ，エノキグサ，カスマグサなど出土は当時畑作があったことが示唆される。また，畑の周囲に生えるヘビイチゴと現在では畑付近では比較的少ないタチカモヂグサ，ウシノケグサ？　の出土は，弥生後期にはそれらの山野草的なものが，人家や畑付近にあったと考えられる。しかし，出土状態から見て，これらは畑現地での落下でなく集められた形跡がある。前述の文献のように，現在の各種の雑草が古代では食用にし，現在でも開発途上国では食用に供している点から考えて，日本でも古代にはそれらの一部は食（利）用に供したようにも考えられる。

要するに，乾燥した住居跡とか畑地状態において，そこの種子は分解，消失が一般であるにも拘らず，本遺跡では13種の多数種類が集中出土し，しかも，その大多数が発芽，結実したことは前述文献でみられるように，皆無ではないが極めて稀有のことである。その出土種子は，現在の畑地の雑草であり，また現在では畑付近では少ない種も2種が数えられる。キビの1片の出土だけでキビの畑栽培があったかどうか判断には疑わしいが，それらは住居跡で出土したことから見ても，現地（畑地）での落下でなく，何らかの目的で集められた種子が固まって落ち，しかも，一挙に相当に深く埋土され，そして土面が非常に固まったことが，光線，酸素の欠乏と或る程度の低温と相まって1,800年も長い間余儀なく休眠に導かれ長命を保っていた。それが一度に表地面に出て，光線，水分と適温に合ったため，一斉に発芽したものと考えられる。

謝　辞

本調査のサンプルを送られた岡山県教育委員会文化課，津山教育事務所ならびにサンプルの検出分析，描図，撮影，栽培などの担当に助力された当研究所雑草研究室の藤沢　浅，武田満子，木村美智子氏など各位に対して深謝の意を表します。

参考文献

1. 荒井正雄．宮原益次．1960．'62．水田雑草タイヌビエの生理生態的研究．第1，2，3，4，5，6報．日作紀．29(1)：130—132，31(1)：73—77，31(2)：186—194，31(4)：362—370.
2. Barton, L. V. 1961. Seed preservation and longevity. New York.
3. Beal, W. J. 1905. The vitality of seeds. Bot. Goz. 40 : 140—143.
4. Becquerel, P. 1934. La longévité des graines macrobiotiques transmise par Louis Mangin. C. R. Acad. Sci., Paris, 199 : 1662—4.（18より引用）
5. Brenchley, W. F. 1918. Buried weed seed Jour. Agr. Sci. 9(1)1—31.
6. φdam. S. 1965. "Germination of Ancient seed." Dansk. Bot. Arkiv. 24(2)9—63.
7. Ewart, A. J. 1908. On the longevity of seeds. Proc. Rog. Soc. Vict. 21 : 1—210.
8. Goss, W. L. 1924. The vitality of buried seeds. Jour. Agr. Res. 29(7) : 349—362.
9. Helbaek, H. Early crops in Southern England Proc. Prehist. Soc. 2. 194—233.
10. Helbaek, H. *Triticum and Hordeum* ; 1966. Commentary of phylogenesis of Triticum and Hordeum Econ. Botrny 20(4)350—360.
11. 伊藤博．1972．作物種子の長期貯蔵とその育種的利用(1)．農及園50(7)9—12.
12. 笠原安夫．1966．種子の寿命と発芽力．化学と生物．5(12).

13. 笠原安夫. 1968. “日本雑草図説”. 養賢堂.
14. 笠原安夫. 西克久. 上山良人. 1965. 50余年間埋土したイグサ種子および水田雑草種子の発芽と生育. 農学研究. 51(1)75—101.
15. Kivilaan, A. & Bandaski R. S. 1973. The ninety-year period for DR. Beal's seed viabiliy experiment, Amer. Jour. Bot. 60(2)104—145.
16. Kjaer, A 1940, '48., Germination of buried and dry stored seed. I. 1934—39, II. 1934—44. Proc. Int. Seed Test Ass. 12 : 167—188, 14 : 19—26. (18より引用).
17. E. H. & Roberts. 1972 ; Viability nomographs, Viability of Seeds. 417—423. (11より引用).
18. 近藤萬太郎. 1933. 日本農林種子学. 前編.
19. Lewis. J. 1973. Longevity of crops and weed seeds survival of the 20 years in soil. Weed Research. 13(2)179—191.
20. Libby, W. F. 1954. Chicago radiocarbon dates. IV. Science. 119 : 135—40.
21. 中尾佐助. 1966. 栽培植物と農耕の起源. 岩波新書.
22. 阪本寧男. 1970. 考古学的に見た栽培コムギと栽培オオムギの起源. 遺伝. 24(1). 48—55.
23. Toole, E. H. and Brown, E. 1946. Final results of the Duvel buried seed experiment. F. Agric. Res. 72(6) : 201—10.
24. 豊田清修. 1967, ハスの実の研究. 井上書店.
25. 豊田清修. 1974, 行田出土ハスの実の自然発と開花. 植研雑. 49(7)206—213.

3. 出土エノキグサの幼植物

4. 出土ヘビイチゴ
イヌビエ
ハコベ
エノキグサ
クワクサ
オオイヌフグリ×
1976.9. 中旬植付
11. 8. 撮影

5. 出土メヒシバ
1974.9.9. 植付
11.8. 撮影

6. 出土カモヂグサSP?
1974.7. 下旬植付
1976.6 現在まで
に出穂せず

7. 出土メヒシバ
1974.9. 9. 植付
1975.1.28. 採集

8. 出土ハコベ
1974.9. 中旬植付
1975.1.14. 採集

図版 2

1．メヒシバ出土の住居址

2．発芽したメヒシバ

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（14）

中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査 8

昭52年3月 印刷
昭52年3月 発行

発行 岡山県教育委員会
印刷 岡山県出納局用度課